

遼寧を中心とする東北アジア古代史の再構成

課題番号：16320106

平成 16 年度～平成 18 年度科学研究費補助金
(基盤研究 (B)) 研究成果報告書



研究代表者 大貫 静夫
(東京大学大学院人文社会系研究科教授)

平成 19 年 3 月

目次

第1章 研究の概要

大貫 静夫 p.1

第2章 牧羊城およびそれと関連する遺跡について

1. 戦前の牧羊城遺跡の調査 笹田 朋孝・中村亜希子・古澤義久 p.5
2. 牧羊城址の現状と層位 大貫 静夫 p.17
3. 牧羊城周辺および関連する遺跡 大貫 静夫 p.22

第3章 牧羊城1類土器の研究

1. 牧羊城1類土器の分類 大貫 静夫・古澤 義久 p.34
2. 牧羊城1類土器を考える枠組み 大貫 静夫 p.55
3. 双碓子3期文化の土器編年 大貫 静夫 p.59
4. 上馬石土層文化の土器編年 大貫 静夫 p.102
5. 牧羊城1類土器の再検討 大貫 静夫 p.136

第4章 牧羊城2・3類土器の研究

1. 牧羊城出土のいわゆる2、3類土器の性格と編年 鄭 仁盛 p.145
2. 「牧羊城二・三類土器」における戦国時代土器 石川 岳彦 p.174

第5章 牧羊城出土の瓦の研究

1. 瓦の分類 中村 亜希子 p.181
2. 瓦から見た牧羊城の位置づけ 中村 亜希子 p.225

第6章 牧羊城出土の鉄器の研究

1. 牧羊城出土の鉄器 笹田 朋孝 p.231
2. 牧羊城跡出土鉄関連遺物の金属学的調査 九州テクノリサーチ・TACセンター 大澤 正己 p.241

第7章 牧羊城出土のその他の遺物の研究

1. 牧羊城出土銭幣の様相 古澤 義久 p.260
2. 牧羊城出土石器の様相 古澤 義久 p.266

第8章 関連する遺物の研究

1. 牧羊城周辺発見の銅剣・銅斧 後藤 直 p.268
2. 東京大学文学部所蔵高麗寨遺跡資料 古澤 義久 p.270
3. 東京大学文学部所蔵羊頭窪遺跡資料 古澤 義久 p.277
4. 東京大学文学部所蔵郭家村遺跡資料 古澤 義久 p.281

第9章 関連する諸問題

1. 戦国秦漢時代の遼東郡と牧羊城
2. 朝鮮半島の銅戈

大貫 静夫 p.287

後藤 直 p.301

第10章 結語

大貫 静夫 p.323

1. 研究の概要

大貫 静夫

1. はじめに

日本列島もまた東北アジアの一角にあり、最近における弥生時代開始年代の見直し問題は大陸側の同時代の見直しと連動している。

燕、秦、漢という中原勢力の燕山以北への進出が東北アジア古代史上の変革にとって大きな役割を果たしたことは知られている。とくにそのもっとも早い段階である燕の東方への進出過程については『史記匈奴列伝』に、燕昭王の時代に将秦開が東胡を敗走させ、長城を築き、上谷、漁陽、右北平、遼西、遼東の五郡を設置したという記載がある。その記事が正しければ、昭王の在位期間は紀元前 300 年を前後する頃であり、『魏志東夷伝』に知られる東夷の地域的な枠組みの基礎がこの頃に形成されたことになる。

従来、弥生短期年代観を支えてきた、わが国における一般的な理解では、戦国時代後期における燕の遼東への進出を認める一方で、遼東の少なくとも一部では古式遼寧式銅剣を伴う社会が引き続き存続していたと考え、漢代を大きな画期として捉えてきた。そして、それが遼東から日本列島の傾斜編年を支える根拠ともなっていた。それは、燕の遼東郡設置などの東方進出の実態をかなり低く評価していたことになる。

他方、詳細な報告がないためその検証が難しいが、中国の研究者の間では、遼東郡に多くの戦国後期に遡る中原系の遺物を伴う城址あるいは集落があることが一般的な理解になっており、理解に齟齬を来している。燕の東方進出は考古資料にどのように反映されているのか、あるいは検証可能なかが問われよう。

しかしながら、遼東地域では戦国秦漢時代の調査はそのほとんどが漢墓であり、城址や集落遺跡の調査はいまだにほとんどない。その点で、戦前の古い時期の調査であるが、東亜考古学会らがおこなった牧羊城の調査はいまだその重要性を失っていない。

このような問題意識から、大貫を代表とする科学研究費補助金（平成 16 - 18 年度）による研究班では、現在東京大学文学部考古学研究室がその一部を所蔵する、かつて東亜考古学会が調査した、遼東半島大連市所在の牧羊城址出土資料の再整理を進め、牧羊城の位置づけについて再検討をおこなった。

戦前の東亜考古学会による報告書『牧羊城』でも、すでに城址出土資料の一部である 2 類土器には戦国燕との関連が指摘されていたのであり、現状の理解では 2 類土器には戦国期に遡る燕系の遺物があり、戦国燕の貨幣である明刀銭が漢代以降の古銭よりも下層から出土していたことにも注目しなければならなかったはずである。

そのことはそれに先行する遼寧式銅剣をとともう時代の年代についてもわが国での従前のおおかたの理解には再考を促すものであり、遼東半島において遼寧式銅剣の時代は全体として古くなるだけでなく、一部の土器編年の逆転を含めた再構築が要請されることになる。

それらを理解するための比較資料として、研究組では 04 年 10 月に遼寧、内蒙古赤峰地区における戦国秦漢時代の古城址、集落遺跡、墓地を踏査し、博物館、研究所に於いて関連資料を収集した。遼東への燕の進出を物語るものとして、当時の遼東郡治所在地とされる遼陽には紀元前 300 年前後あるいはやや遡る頃と見られる典型的な燕の副葬土器を伴う墓が見つかっており、遅くともその頃ま

では進出していたであろうことが共通の認識となる定点である。遼西には戦国燕系の陶製礼器をセットとして副葬する墓地が各地に知られているが、地方的な変容も認められている。遼東では遼陽、瀋陽以外にはいまだ知られていないように、問題はそれが面としてどのように広がっていたか、遼西、遼東への進出に年代的なあるいは地域的な差があるのか否かである。残された文献資料からうかがえない遼西、遼東郡の実態はやはり考古資料によって知るしかない。戦国時代に遡る燕系の古城址、集落、墓地の広がりを検証してゆく作業が重要になるし、それによって齟齬は解消されてゆくことになる。

なお、東亜考古学会から出版された報告書『牧羊城』に収録されている発掘調査資料が、東京大学にすべてあるわけではない。今回未収録の主なものでは、三翼銅鏃があるが、古式の双翼の銅鏃はない。また、封泥がある。そのほかの、官屯子から出土した石墓関係の完形の土器や青銅器、また主要な瓦当などの優品はない。これらの一部は旅順博物館で現在展示されているのを実見したが、旅順博物館がどの程度収蔵しているのかいまだ確認はしていない。

2. 資料研究

東京大学文学部が所蔵する、牧羊城関係の資料の再整理を3年間にわたって、実施した。その成果は本報告書に収録しているところである。

資料の整理、分析では、東京大学大学院人文社会系研究科の多くの大学院生が研究協力者として参加した。彼らの作業により、本学所蔵の牧羊城関係の遺物台帳が作成され、あわせて遺物写真リストも作成された。

1 類土器の整理、分析では、本学院生の古澤義久氏が中心となって進め、韓国からの留学生である金恩瑩さんの協力もあった。1 類土器の整理では、本プロジェクト開始以前に、すでに一部の資料の整理があり、その際には、当時本研究院院生であった庄田慎矢の協力があったことをも明記しておく。

2・3 類土器は、当時本研究院院生で吉林大学での留学から帰ったばかりの石川岳彦（現国立歴史民俗博物館特別研究員）と当時東京大学に外国人研究員として在籍していた、現高麗大学考古環境研究所副教授の鄭仁盛が担当した。とくに、鄭は大学院生を中心とした整理、研究班のリーダー的な役割を發揮してくれた。本研究プロジェクトがここまで進められたのも鄭の存在があったればこそである。

鉄器は本学院生の笹田朋孝が中心となって研究、分析がおこなわれた。外部から大澤正己氏の協力を得て、研究を遂行することができたことに感謝しておきたい。

青銅器では、昨年度で本学を退職された後藤直名誉教授に今回の資料収集で河北省文物研究所を訪れたさいに観察することができた燕下都出土の朝鮮半島系である細形銅戈についての大作をまとめていただいた。

そのほかの、古銭や石器など、あるいは関連する遺跡の遺物の紹介では古澤義久の尽力で、ここまでまとめることができた。

遼陽墳墓の資料の整理も石川を中心におこなったが、その資料紹介は別の機会にしたい。

研究室に残されていた、戦前の遺跡調査時の野帳について、中村、古澤、笹田、石川らが丁寧な解読を試みた。その内容は本書で紹介している。

以上のように、本学大学院の学生諸氏および関係する若手研究者の多大なる尽力により本プロジェ

クトを遂行することができた。参加してくれた全員にお礼を申し上げる。

3. 現地遺跡の踏査と博物館・研究所での資料調査

1) 遼寧・内蒙古での遺跡踏査と資料収集 (04 年度)

本科研の初年度の踏査として 04 年 10 月に遼寧、内蒙古を回った。参加者は大貫のほか、後藤直、谷豊信の両研究分担者以外に、中村大介、庄田慎矢、古澤義久が参加した。

牧羊城以外に遼東の張店古城、二龍湖古城、遼西の安杖子古城、袁台子漢代壁画墓、小荒地古城、寧城黒城、大山前遺跡などの戦国秦漢遺跡を訪ねることができた。

及び関連する資料を所蔵する、旅順博物館、營城子民俗博物館、金州市博物館、遼陽市博物館、遼寧省文物考古研究所、鉄嶺市博物館、錦州市博物館、中京博物館、内蒙古文物考古研究所寧城工作站、赤峰市博物館などを訪ねた。

ほかに、関連遺跡として、大連市内では、營城子壁画墳、郭家村（*遺跡名は地名を冠するものが多いが、その名称はいまだ固有名詞化しておらず、行政組織名の改編に従い変化している。ほかの遺跡も同じであり、『牧羊城』に出てくる遺跡名も多少変化している。）貝塚、于家村遺跡、砦頭墓地、崗上墓、双房墓地、小黒石溝墓地を訪ねた。

翌 2005 年 3 月にも宮本一夫九州大学教授を代表とする別のプロジェクトで牧羊城址を訪ねる機会があったが、これは省略する。

2) 河北省の遺跡踏査と博物館・研究所での資料調査 (05 年度)

05 年度は 12 月に河北省において、戦国秦漢時代の遺跡の踏査と遺物の資料集をおこなった。参加者は大貫、後藤、谷のほか、鄭仁盛、石川岳彦、中村亜希子であった。

戦国時代燕の研究でもっとも重要な易県燕下都をまず訪ねた。その際に、燕下都にある河北省文物研究所の工作場の資料室を見学することができた。ほかに邯鄲の趙戦国城址、中山国靈寿城、秦皇島の秦行宮遺跡などの城址、宮殿跡を踏査した。また、満城漢墓、望都漢代壁画墓、定州漢墓、趙王陵、中山王墓などの古墓を見学した。

資料調査では、河北省文物研究所では燕下都出土資料を閲覧した。すでに退職されているが、燕下都を長年にわたって調査、研究された石永士氏に会うことができ、お話を聞くことができた。このほか、河北省博物館、天津市博物館、唐山市博物館を訪れた。

3) 山東省の遺跡踏査と博物館・研究所での資料収集 (06 年度)

06 年度は本年 1 月から 2 月にかけて、山東省で、遺跡の踏査と資料集をおこなった。参加者は大貫、後藤、谷、石川、古澤、中村（亜）であった。

周秦漢代関係では、煙台周辺において、煙台市博物館のご配慮で帰城、三十里堡古城を踏査し、臨淄周辺では、齊国歴史博物館のご配慮で齊古城、安平城、齊王陵を回った。そして章丘で東平陵城を踏査した。そのほかの遺跡として白石村貝塚、楊家圈遺跡、城子崖遺跡などを踏査した。

博物館、研究機関では、煙台市博物館、齊国歴史博物館、山東省博物館、山東省文物考古研究所、山東大学博物館を訪問し、帰路北京で燕関係の資料の充実した展示ある首都博物館を見学した。

遼寧省、内蒙古自治区の考察では、旅順博物館の劉広堂館長、王嗣洲研究主任、遼寧省文物考古研究所の田立坤副所長、郭大順名誉所長、鉄嶺市博物館の裴耀軍副館長、中京博物館の李義館長、赤峰

市博物館の劉冰館長、社会科学院考古研究所の朱延平研究員、内蒙古文物考古研究所の郭治中研究員などのお世話になった。

河北省の考察では、北京大学の趙化成教授、河北省文物研究所の段宏振副所長などのお世話になった。

山東省での考察では、山東大学の樂豊実教授、煙台市博物館の王錫平館長、山東省博物館の魯之生館長、山東省文物考古研究所の鄭同修副所長などのお世話になった。

これらの諸先生を始めとする多くの中国各地の現地研究者のご援助があり、初めて考察をおこなうことができました。

国内では遼東半島の資料の閲覧で京都大学総合総合博物館のお世話になった。また、上馬石貝塚資料については宮本一夫氏から多くの教示をいただきました。

以上、記して感謝申し上げます。

2-1. 戦前の牧羊城調査

笹田朋孝・中村亜希子・古澤義久

1. 浜田耕作の調査

牧羊城遺跡が初めて学術的に調査されたのは20世紀初頭のことである。1910年10月19日、浜田耕作は理学士の吉田弟彦と牧羊城遺跡を踏査し土器片や瓦片といった遺物を採集した。また、付近の住民からこの遺跡や周辺から拾得したという銅鏃や帯鉤、五銖銭を購入した(浜田1911)。浜田は「牧羊城址」と称されるこの城跡を『欽定盛京通志』に「城西南百五十里、周囲二百五十四歩、門一」とされる『木羊城』と考えた。

さらに浜田は1912年6月13日と14日に遺物が多く散布する城内北部にT字形の試掘坑¹⁾を入れて簡単な発掘調査を行った(浜田1912)。この試掘坑では地山に達するまで発掘を行ったものの遺物の出土状況は芳しくなく、銅鏃や弓弭、鉄斧、刀銭の破片等を少数得るに止まった。大型建築等の発見はなかったが、出土遺物からこの地点には漢代以前少なくとも春秋戦国において人々が棲息し、漢代に至っても拠点とされていたということを提示した。(中村)

2. 東亜考古学会等による調査

これらの浜田の調査結果をもとに1928年には東亜考古学会と関東庁博物館が合同で牧羊城の調査を行った。原田淑人と浜田耕作は東亜考古学会第一回の調査である貔子窩遺跡の調査の帰途、関東庁博物館の内藤寛の案内で牧羊城の下調査を行った。本調査は1928年10月1日から同25日に行われ、当時の東京帝国大学からは原田淑人・八幡一郎・駒井和愛・田澤金吾が、京都帝国大学からは浜田耕作・水野清一・島田貞彦が参加した。他には関東庁博物館の内藤寛・森修、北京大学の莊巖らが調査に赴いている。なお9日から23日にかけては牧羊城周辺の古墓を調査する別働隊が組織され、刁家疃(現村)・于家疃・官屯子付近で貝墓や石墓、甕棺等を発掘した(図1)。これらの調査の成果は1931年に出版された報告書『牧羊城』(東亜考古学会1931)(以下「旧報告書」と表記する)に報告された。なお、この報告書には出土遺物の類似性を指摘する為に付編として1930年5月に駒井らが調査した山東省の煙台近くに位置する福山故城(現三十里堡古城)の紹介も載せられている。

東亜考古学会らによる牧羊城の調査では層位的な発掘²⁾が行われており、旧報告書には発掘区の平面図と断面図が掲載されている。しかし、旧報告書には南第三区以南のように設定されたものの全く報告されていない発掘区があったり、東西トレンチと南北トレンチでは発掘区の名称の規則性が異なっていたりする³⁾など疑問な点が多々存在する。ここではまず旧報告書の記載内容に加え、東京大学文学部考古学研究室に保管されている旧報告書を作成した際に提出されたと思われる諸氏の調査記録をもとに当時の発掘状況を復元する。

この調査記録には水野清一が提出したノートと筆跡の異なる複数のカード状の調査記録、各発掘区の担当者が記されていると思われる牧羊城の発掘区の略図等が存在する。カード状の調査記録には少なくとも2種類の筆跡が確認され、その内容と前述の発掘区担当者略図から駒井和愛・八幡一郎のものであることが判明した。駒井のものは横書きで書かれており、八幡のものは主に縦書きで書かれているが若干数だけ横書きで書かれたものもある。なお、これらの内容からは調査時に意思の疎通が上手く行かなかった為か各発掘区の呼称が各氏の間で統一されていなかったことが判明した。調査は期

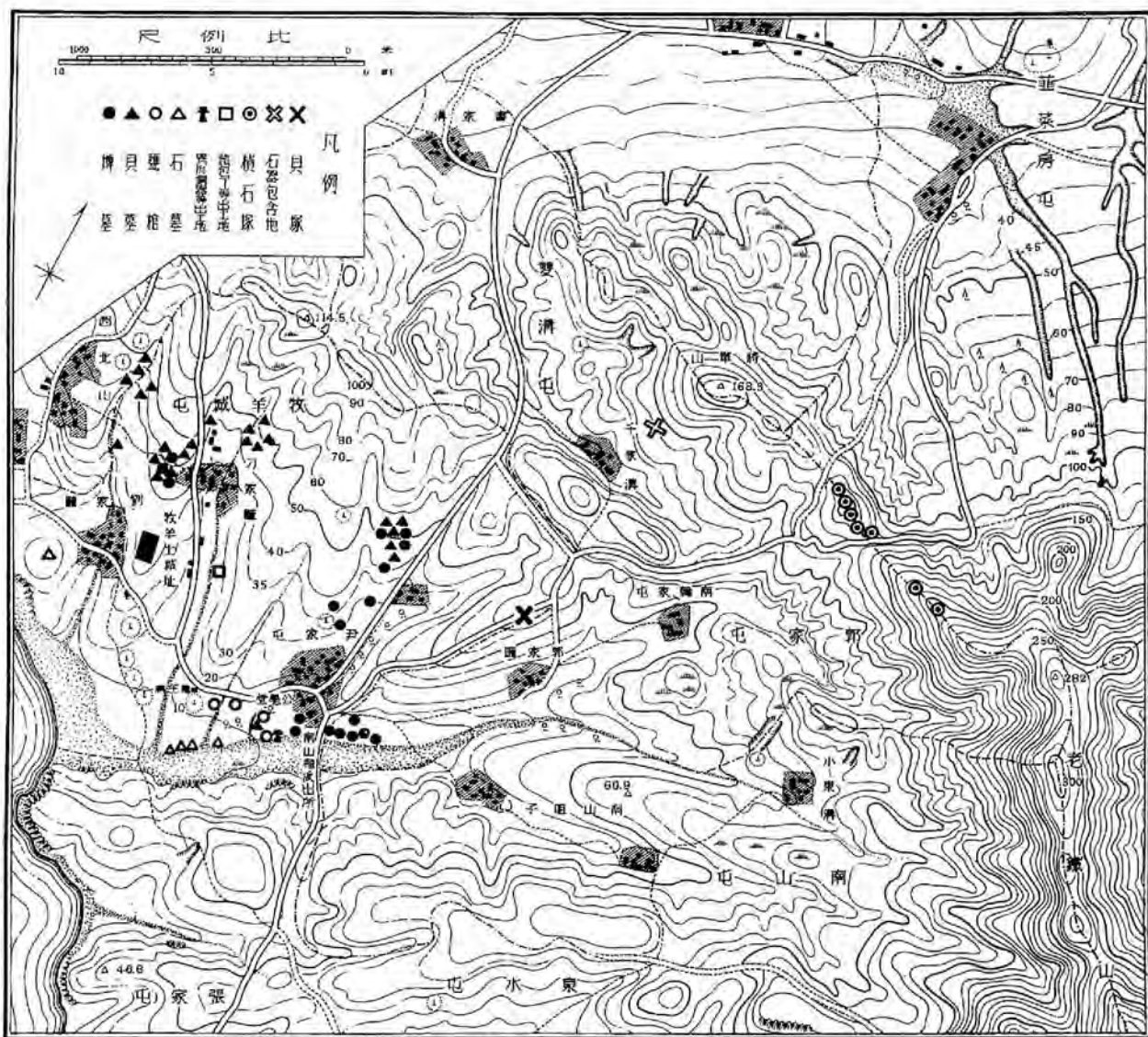
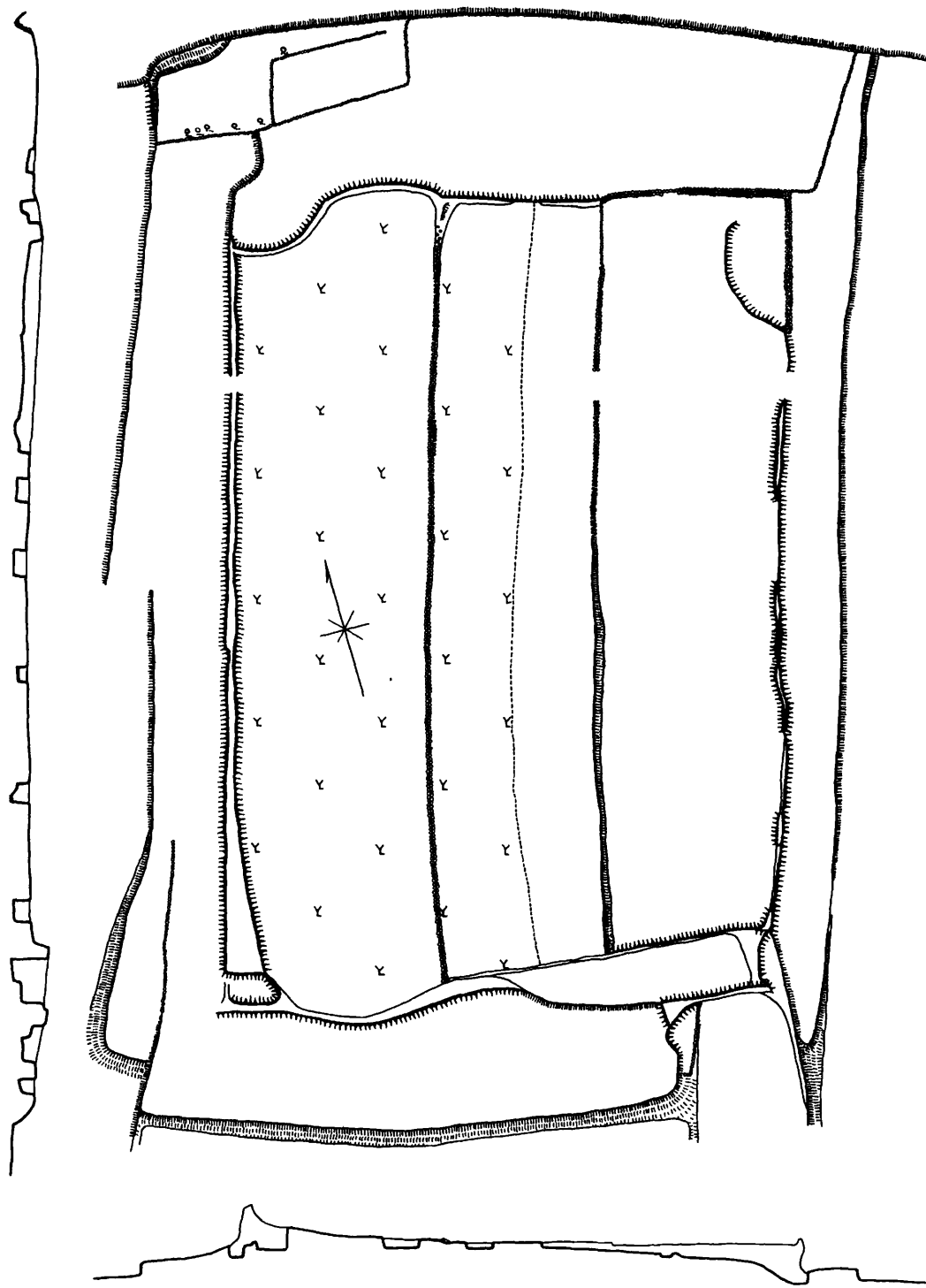


図1 牧羊城付近遺跡分布図

間が短く、東西方向トレンチの西第四区以西と南北方向トレンチの北第七区以北及び南第三区以南では間隔を置いた試掘坑を入れるに止まっている。この時、北区を担当した駒井や西区を担当した水野は未調査区にも名称を与えているが、南区を担当した八幡は未調査区には名称を与えず間隔の開いた試掘坑に連続した名称をつける手法を用いた。また各自が自分の呼び方の法則に則って発掘区を呼んだ為、例えば八幡の記す南第六区と水野の記す南第六区とでは異なった地点を示す。さらに八幡が旧報告書でいう南第三区を発掘し始めた時点では南区は南第一区しか掘られていなかったと思われ、八幡は南第三区を「南第二区」と呼んだ。しかし、荘厳が担当する南第一区はその後拡張されて南第二区が設定された為「南第二区」と呼ばれる発掘区が複数生じてしまった。よって、旧報告書では八幡の呼称を南に一区ずらして呼んだわけである。本来ならば名称の規則性を統一した方が良いが、旧報告書での記載との照らし合わせが煩雑になることを避ける為ここでは旧報告書の名称に従うこととする。

牧羊城は東西約81m、南北約131mの長方形を呈する城壁を備えている⁴⁾(図2)。この時の調査は城壁内での発掘と城壁を断ち割ってその構造を解明することに重点が置かれた。まずは土城の東西



0 10 20 30 m 縮尺 1
 0 5 10 15 m 縮尺 2

注：断面図の高さのみ縮尺 2 を用いている

図 2 牧羊城調査区

線を三分して東から3分の1の点を南北に延長して基準線とし、基準線上の城北辺から約27mの地点に原点を設定した。次に原点を中心とした南北幅約3.6mの東西方向に伸びるトレンチを入れることとし、原点東側を東第一区、西側を西第一区と定めた(図3)。さらに遺物の出土が豊富な東第三区と東第四区の境界線を南北に延長し東西にそれぞれ1.8mずつとった幅3.6mの南北方向のトレンチを設定した(図4)。なお各発掘区は基本的に3.6m×3.6mの正方形を呈するが、調査期間が短かった為、西第九区以西や北第八区以北、南第三区以南の各区では幅が半分の約1.8mに縮小されているという。しかし南第三区から南第七区までの図面は掲載されておらず、南第八区から南第十区の3つの区においては東西幅がさらに狭まっていることが実測図から窺えることに加え、南北長までもが不規則的である⁵⁾。以下、調査記録と担当者が記した牧羊城発掘区の略図から水野・駒井・八幡の調査内容を復元する(図5)。

①水野清一

水野の調査記録は最も量が多く、内容としても自分が担当した発掘区の状況以外にも調査全体の動向が記されている。水野は調査開始当初東第二区及び東第三区に着手した。しかし、東第二区において平面図上にも記されている土坑を検出すると該区を八幡に任せ東第六区及び東第七区に移動した。東第七区において城壁の基底部を発見した後は、東第五・六区の南溝の拡張に着手している。時折南第三区や南第四区の試掘にも関わったり、10月18日に荘厳が帰去した後は南第一・二区を引き継いだりしてはいるものの、ほとんどの時間を東第六区以東の調査に費やしたようだ。さらに調査終結が間近となると駒井が担当していた西第九区を引き継ぎ、西進して第十五区において西城壁の構造を解明した。

②駒井和愛

東西方向のトレンチを設定後、駒井がはじめに着手したのは西第六区である。しかし文化層は浅く、翌日には北第一区の発掘を開始した。北第一区及び北第二区は第2・3層で瓦磚が多数出土したという。10月12日にこれらの区の調査が完了すると八幡の担当する北第三・四区を飛ばして北第六区に移動した。さらに北第五区にも着手し並行して調査を進めていった。調査期間終了間近の10月23日には北第八区、翌日に北第十区を開始するものの、時間の不足から城壁の北辺を明らかにするには至らなかった。北壁はもともと残りが悪く構造の把握が困難であったが、北第六区の北断面に城壁基底部に見られるような礫層が確認されたこと、北第八区の黒色土が堅緻であることから北第八区付近に北壁が存在したと判断した。

③八幡一郎

八幡がはじめに担当したのは東第二区及び東第四・五区のようなものである。東第四・五区では瓦層は厚さ15cm程にも及び、さらに東第五区では石畳も発見された。次に八幡は北第二区北半から北第四区の調査に着手する。ここでの発掘に日程の半分ほどを割いた後は南に移動し南第三区以南において試掘を行った。特に南第八区以南は八幡が単独で行ったのか、水野のノートにも情報が記されなくなる。南第七区が城内最南の試掘坑であり、南第九区では城壁の基底部を確認したようだ。

以上のような分担で牧羊城の調査は行われた。遺構の詳細については次章に譲るが調査のスケジュールを表1に提示する。

城内の発掘によると東西方向トレンチの東第三区から西第十区にかけては厚さ15cm余りの耕土層の下に瓦片を包含する黒褐色土層が認められたという。西第一区から西第十区にかけては瓦片は少

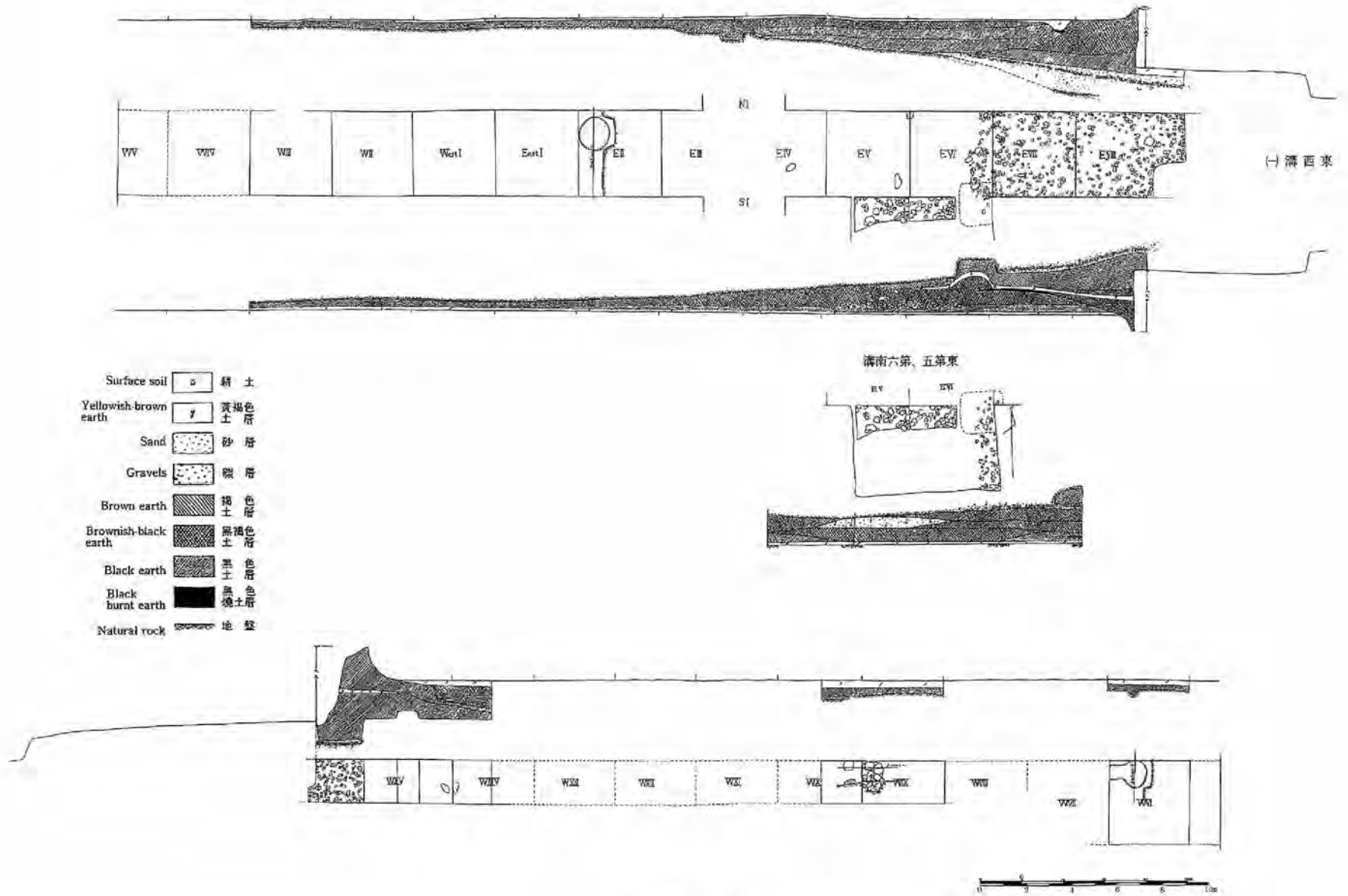
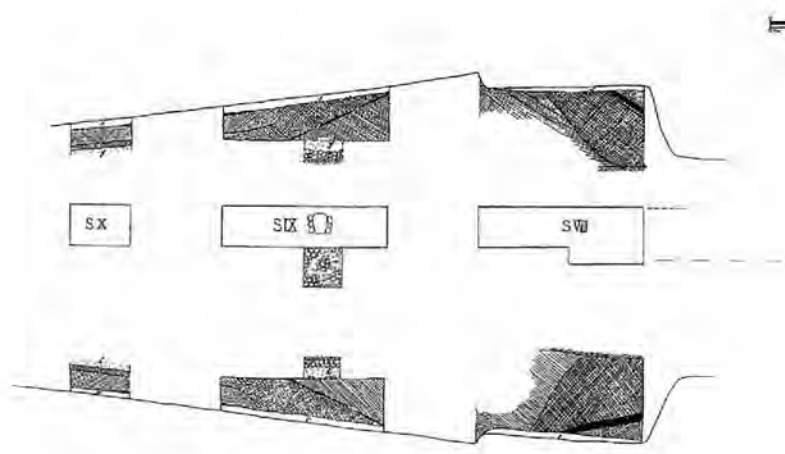
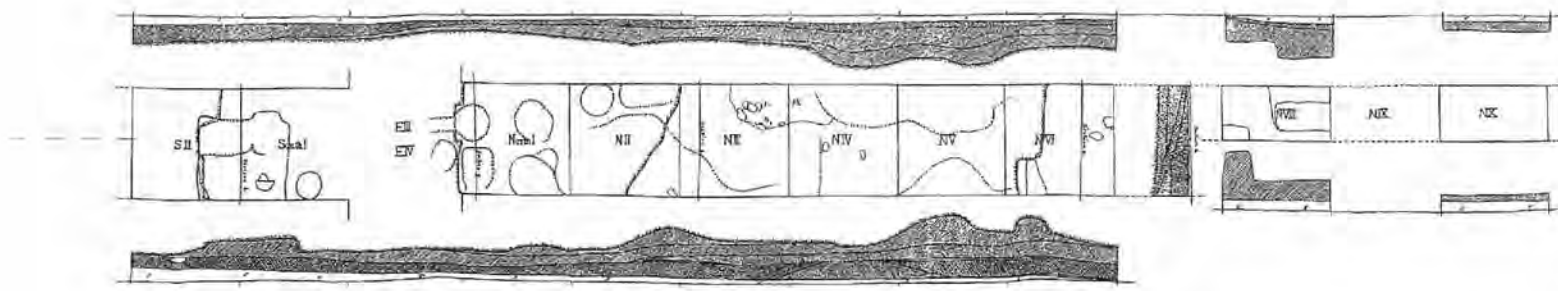
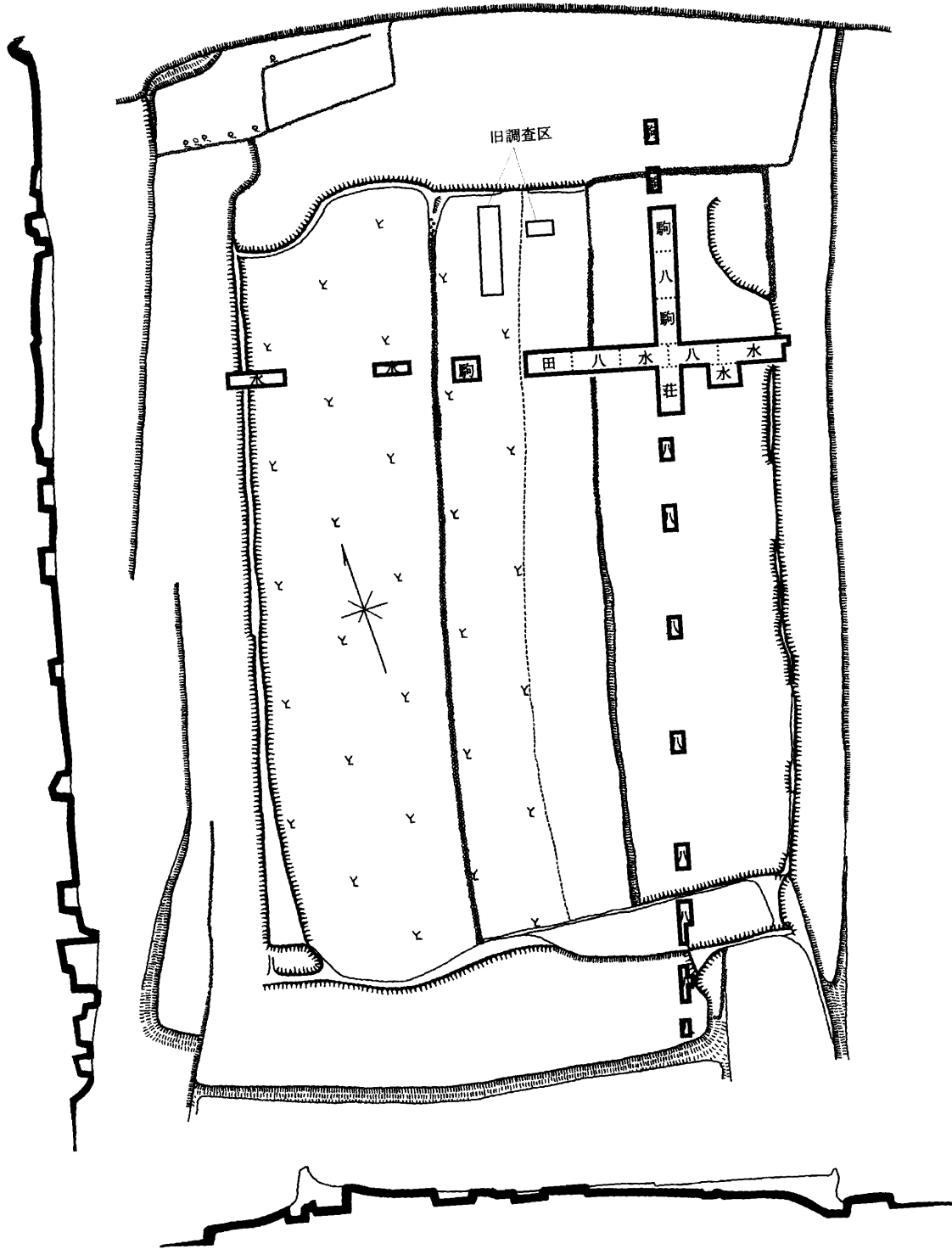


图3 東西溝



- | | | |
|-----------------------|--|------|
| Surface soil | | 耕土 |
| Yellowish-brown earth | | 黄褐色土 |
| Sand | | 砂层 |
| Gravels | | 砾层 |
| Brown earth | | 褐色土 |
| Brownish-black earth | | 黑褐色土 |
| Black earth | | 黑色土 |
| Black burnt earth | | 黑炭土 |
| Natural rock | | 地盤 |

图4 南北溝



駒：駒井和愛
 八：八幡一郎
 水：水野清一
 田：田澤金吾
 荘：荘殿

0 10 20 30 m 縮尺 1
 0 5 10 15 m 縮尺 2

注：断面図の高さのみ縮尺 2 を用いている

図 5 発掘担当者分担

日付	曜日	全体の流れ	水野清一	駒井和愛	八幡一郎	荘厳
1928. 10. 01	月	調査開始 東西方向のトレンチ を設定	東Ⅱ・Ⅲ区に着手		(日付不明)東Ⅱ区、東Ⅳ・ Ⅴ区の瓦層は厚さ5寸、下 からも土器・少量の瓦・金属 器が出土	
1928. 10. 02	火		東Ⅱ区穴跡(瓦出土)→ 八幡が従事 東Ⅵ・Ⅶ区：瓦磚は黒褐 色土層に限る			
1928. 10. 03	水		東Ⅵ・Ⅶ区：瓦磚は黒褐 色土層に限る		東Ⅴ区畳石に遭遇	
1928. 10. 04	木					
1928. 10. 05	金			西Ⅵ区第2層開始、午後 から西Ⅸ区第1層を始め るが6日朝には北Ⅰ区 に移る		
1928. 10. 06	土	南北方向トレンチ (北区)の設定		北Ⅰ区発掘開始		
1928. 10. 07	日	雨で休み?	東Ⅶ区第5層以下	雨で休み		
1928. 10. 08	月			北Ⅱ区へ、第2・3層は瓦 磚が多い(注：日付は不 確実)		
1928. 10. 09	火	別働隊組織 (田澤・森・島田)	東Ⅶ区終了(城壁底部 を発見)、東Ⅴ・Ⅵ区 の南溝へ		午前：北Ⅱ区北半とⅣ区の 表土を剥ぐ 午後 後：北Ⅱ区北半～Ⅳ区ま での第1層発掘	
1928. 10. 10	水				北Ⅳ区第1層、北Ⅲ・Ⅳ区 の第2層発掘(瓦多)	
1928. 10. 11	木				北Ⅲ区の第2層終わり、第 Ⅳ区第3層開始	
1928. 10. 12	金		畳石の取り壊し開始	北Ⅰ・Ⅱ区完了(Ⅲ・Ⅳ区 は八幡が担当)、*北区 西壁の断面図は25日午前 に水野が作成、夕刻まで にⅥ区を始める	北Ⅲ区第3層発掘、午後には 第4層(瓦多い)へ	
1928. 10. 13	土	南北方向トレンチ (南区)の設定	南Ⅳ区開始→南Ⅲ区試掘	北Ⅵ区第Ⅰ・2層		南第Ⅰ区開 始、その後南 Ⅱ区へと拡張
1928. 10. 14	日		東Ⅵ区と南溝は畳石と同 じ層位に瓦が多い、南Ⅰ 区は比較的瓦が多いがⅣ 区は少ない	北Ⅵ区第3層に到達、こ の区では磚が全く見つか らず	北Ⅲ・Ⅳ区、→南Ⅲ区 *南Ⅲ区は北Ⅲ区と同様 →南Ⅱ区(南Ⅲ区と同様だ が遺物が多い)	
1928. 10. 15	月		東Ⅵ区、南Ⅰ区、南Ⅲ区	北Ⅵ区第3層を途中で切 り上げ午後3時から北Ⅴ 区の第1層を開始	南Ⅳ区：表面の遺物の散布 が少なくなり発掘しても少 量の瓦のみ、Ⅴ区になると 遺物やや増加 南Ⅵ区：瓦・鉄少量	
1928. 10. 16	火		継続、南Ⅴ区開始	*北Ⅴ・Ⅵ区は第1層は瓦 が少なく、第2・3層も少 ないが、4層上部のみに やや多く分布		
1928. 10. 17	水		東Ⅵ区第4・5層、南Ⅰ・ Ⅱ区、穴跡の発見(黒褐 色土、漢式土器出土多) 上層には攪乱なし		南Ⅶ区：城内最南のトレン チ、瓦・土器がやや多い	
1928. 10. 18	木		東Ⅷ区の城壁切斷開始、 南方の試掘は南Ⅶ区に至 る			帰去
1928. 10. 19	金		東Ⅷ区を主に発掘、東Ⅵ 区では穴跡を発掘、荘嚴 の南Ⅰ・Ⅱ区を受け継 ぐ、南方の八幡はさらに 別の区を設定したようだ			
1928. 10. 20	土		東Ⅵ・Ⅶ区を継続、南Ⅰ 区の礫を取り除く			
1928. 10. 21	日		東Ⅷ区第4・5層、南Ⅰ・ Ⅱ区終了し人夫を西方へ 回して駒井の残した西Ⅸ 区の清掃、西ⅩⅤ区開 始、西ⅩⅥ区東半を発掘		(日付不明)南Ⅹ区で城壁の 基部を確認(日付不明)南 Ⅹ区：瓦・土器多い。地山 には達せず、東北隅から完 形に近い磚が出土(地下2 尺6寸) *図面は南Ⅷ区 のもあり	
1928. 10. 22	月	別働隊調査終了	東Ⅷ区、西ⅩⅤ区	北Ⅴ・Ⅵ区の第4層発掘		
1928. 10. 23	火		東西城壁の切斷	北Ⅴ・Ⅵ区完了 北Ⅷ区を開始、第2層南 部に瓦多い		
1928. 10. 24	水		西城壁外下層で基部の 石塊層に到達	継続、東南隅と西北隅に 地山に達する穴発見 北Ⅹ区開始→午前中に終 了		
1928. 10. 25	木	調査終結	北区西壁の断面図作成			

表1 調査スケジュール

なく概ね 30cm 足らずで地山に達したが、東第一区から東第六区では黒褐色土層に包含される瓦片の量が非常に多く、特に耕土層下 60～90cm の間に多く認められた。なお東第五区と第六区では耕土下 45cm ほどの深さで瓦片を大量に混入する石畳が発見され、その状態を探るべく東第六区と第五区の西半を南側に 3.6m 拡張して南溝を設定した。この石畳は南溝の南端まで広がっており、ここにある種の建造物が存在したことが窺われた。さらに下層東第四区と第五区の地山直上には原位置を保っているかは定かでないものの径 42cm、厚さ 10cm 前後の礎石らしき石塊が確認されている。一方で南北方向トレンチの南第二区から北第六区にかけても耕土層の下には瓦磚を多く包含する黒褐色土層（南第一・二区では「稍褐色を帯びてゐる黒色土層」と表記）が認められる。南第一区及び第二区のさらに下層の黒色土層からは土器片や獣骨、紡錘車が出土し、北第一区の地山には性格不明の土坑が複数確認された。礎石は南第一区と第二区、北第二区の地山上に認められ、その内北第二区のものは地山上に小石や瓦片を混じた盛り土を施しその上に礎石を配置していることから原位置を保っていることが予測された。発掘面積が小さい為城内の遺構の分布状況は定かではないが、以上のことから城内の東北部に重要な建造物が建てられていたことは明らかである。なお建物の建てられていた面としては石畳の広がる面と礎石が確認された地山上の面の少なくとも 2 面が存在したことが窺われる。

城壁は東城壁が東第八区で確認され、土塁の幅 60cm 余り、高さが城内で約 60cm、城外で約 240cm が残存しており、耕土下における傾斜は東第七区にまで及んでいた。土塁は耕土以外の部分には全く瓦磚を含まず、獣骨や貝殻と共に「原始的土器」の破片を包含していたという。城壁の基底部は丘陵の傾斜を緩める為に赤褐色を呈した花崗片麻岩の細粒を敷き詰めた上に大小の石塊を配列して層状になっていた。その幅は 12m にも及んでいたというが、この層には遺物は認められなかった。西壁は西第十四区及び十五区で確認された。構造は東城壁と同じであるが、規模は残存部の高さが城内で 114cm、城外で 285cm、幅 1.8m と残りが良い。南壁は南第八区と第九区に跨っていたが、東西両壁に比べると残存状況は広く低い。南第九区西面の南辺が土壁の南端であり、基底部の幅は 18m にも及ぶことが推測される。北壁については既に土塁が失われており、かつ調査期日の切迫から発掘が完了しなかったが、北第八区において地山を覆う暗紫色を帯びた黒色土層が非常に堅緻であることからこれが土塁であることが窺われた。城壁は総じて漢代並びにそれ以後の遺物を包含していないことから、築造年代は漢代以後ではないと判断された。

このように旧報告書の結論としては、城壁の土塁に包含される土器破片がすべて原始的なものでありその中に漢瓦を含まないことと城内で発見された遺物との関係から城壁が漢代に建造されたものとされた。さらに、城内で出土した半瓦当に戦国時代の燕の半瓦当の紋様要素が見られる為、城壁の創建年代が前漢である可能性を提示している。存続期間については大泉五十が発見されたことから王莽の時代を経ているが、六朝以後唐宋頃の貨幣が出土しないことから少なくとも魏晋以後は荒廃していたと考えられる。城壁の規模が小さく大規模な建造物も認められない為、この城は漢代の県治であり立地状況を考えると沓氏の県城である可能性が高いとした。しかし、旧報告書で「原始的土器」即ち第一類土器として紹介された土器片の中には一部瓦片が含まれていることが判明したこと、次に述べる城壁基底部礫層下の土坑から出土した「漢式黝色土器」の存在等を考慮すると、「漢式」とされた土器や瓦の年代について再考する必要があると考えられる。

注

1) 図 5 上方の「旧調査区」がこれに相当する。

- 2) 該調査における層位とは人工層位のことである。恐らく地表面からの深さが約 30cm までを第 1 層とし、以下約 30cm 毎に層位分けをしたと思われる。
- 3) 即ち、東西方向の発掘区と南北方向の北区では未発掘地点にも区としての名称を与えているが、南北方向の南区では未発掘地点には名称を与えずに間隔が開いた各試掘坑を北から南へ順に南第一区、南第二区、南第三区…(以下略)…と呼んでいる。
- 4) 旧報告書では主に尺貫法を用いている。大体 1 間 \approx 1.8m、1 尺 \approx 30cm、1 寸 \approx 3cm であるが、今回は適宜メートル法に換算して表記することとする。
- 5) これらの南の発掘区は後述するように主に八幡によって担当されているが、彼の調査記録には詳細が記されていない。南第七区以北の試掘状況については水野も少しは把握していたようであるが、南第八区以南の調査区については八幡が発掘をしているという事実のみを知っていたようだ。なお、八幡の調査記録に記載された南第九区の形状や規模は異なっているが、調査の測量図面が存在しない今、真実は不明である。(中村)

文献

東亜考古学会 1931 『牧羊城』東方考古学叢刊甲種第 2 冊

浜田耕作 1911 「旅順刁家屯の一古墳」『東洋学報』1-2、1-19 頁(『東亜考古学研究』岡書院 1930、所収)

浜田耕作 1912、1913 「南満洲に於ける考古学的研究」『東洋学報』2-3、340-362 頁、3-1、47-77 頁(『東亜考古学研究』岡書院 1930、所収)

3. 層位・遺構の再検討

本節では、牧羊城遺跡の発掘調査における経緯を再確認することで、層位や遺構について再検討を行う。前節で触れたように、調査日誌が保管されており、そのいくつかについては、城址の年代を考える上で重要な部分もある。ただし、これらの調査日誌を参考として、『牧羊城』の報告書が刊行されているため、報告書の記載に対して批判的な検討を加えることは困難であった。

まず、城址の城壁の年代である。城壁の構築方法については、地盤ないしは地盤に近い明褐色土層まで削平したのち、石を敷き詰め、間隙ならびにその上面に赤褐色土を入れている。その後、漢代以前の遺物を包含する土を盛土し、当時の生活面が構築されたことになる。

これについて、重要な所見が 10 月 7 日の E 6 区の日誌に記載されている(図 6)。

「時日の切迫せる為め南溝の疊石部一部はとり残して、土壁の内部を調査せる為め東第八区を発掘することとせり。

東第六区東部に於いて基底部の石をとり除きたるに南方に於いてや、深き穴址を認めたり。之を開掘するに左図の如し。基底部疊石はその西端をこの穴址西端まで及ぼせり。この穴址内部は、黒褐色土にして充満され、獣骨、土器(漢式黝色、及び黒色磨研の兩種)等を出せり。むしろ漢式黝色土器の出土多きは城の時代の遺跡なる為めか。この穴址の疑問なるは穴址上の土層に攪乱のあとなく、基底部の疊石 Fig. 2 の断面に示すが如く水平に掩へり、又東西横断面図に示すが如くその上の地山層も層状にや、落ち込み多くある点なり。この点より考ふれば土壁築造前、若しくはそれと同時の遺跡なりと覚ゆ。その西端が基底部疊石の西端と略一致せるはこの穴址のこの土壁に関係あるものにあらずやと思はしむ。併し如何なる用途の為めか考へ難し。」

この土坑は城壁の基礎となる「石塊」よりも下位で検出されており、日誌の記載が正しければ「漢式黝色土器」が出土している。当時の研究において戦国時代の土器と漢代の土器を峻別できたのかは不明ではあるが、城壁の年代はこの「漢式黝色土器」より新しいことになる。

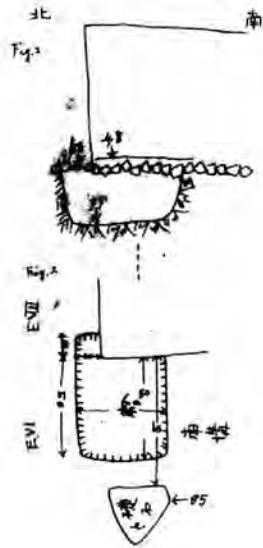
つぎに遺物の出土状況について触れておきたい。日誌には出土状況について三次元情報が記載されている。そして、これらのうち代表的な遺物について表の体裁で報告書に掲載されている。残念ながら、実際の遺物との対応が図ることが出来ないため、詳細を論じることは困難である。ここでは、錢貨の出土状況について簡単に述べる。報告書では明刀錢・一刀錢・半両錢・五銖錢の出土が報じられている。これらの層位的な出土状況を考える際に、日誌の記載が問題となる。日誌の記載によると、嘉慶通寶（初鑄年 1796 年）が E 6 区（深さ 4 尺 3 寸）ならびに E 7 区（深さ 4 尺 8 寸）から出土している。これらの出土位置は極めて重要であり、包含層の一部が後世の攪乱を受けている可能性を十分に考慮すべきであろう。なお、貨幣については別の項で詳述するので、あわせて参照されたい。

調査の写真が残されていないため、堆積状況に関する批判的な検討を行うことは困難であったが、報告書に盛り込まれなかった情報のいくつかは提示できたものとする。（笹田・古澤・中村）

時の切迫のため南溝の壘石の一部は取り壊して、土壁の内部を調査せしむるため東半区を発掘することせり。

東半区東部に於いて基底部の石をとり除き土に再びおいて、深き穴を掘り、之を開掘するに左圖の如し。

基底部壘石は西端とこの穴地西端とに及び、この穴地の表は黒褐色土にて記し、最上、土層(漢式の色、厚い黒色磨研の両粒)等とあり。むしろ漢式、紅色土層の出土は城の時代の遺物跡なるもの。この穴地の疑問なるは穴地上の土層に概掘りあり、基底部の壘石、Fig. 2の断面に示す如く水に掘り、又東西横断面圖に示す如くこの上の地層も層状なり、底は土質なるものあり、この穴地は土壁築造時、若しくはこれと同時に遺跡なりと覺ゆ。この西端の基底部壘石の西端と略一致は、この穴地のこの土壁に製作のものに似たりと思はれ、併しこの用途のため考へ難し。



第一〇圖 東半区及南溝穴地圖

図6 調査日誌の一部

2 - 2. 牧羊城遺跡の現状と層位

大貫 静夫

1. 城址の踏査

筆者は2004年秋および2005年春の二度、大連市鉄山区にある牧羊城を踏査する機会があった。尹家村を経て、劉家村の村中の道を丘の上に向かって上っていくと牧羊城が現れる(図1、2)。牧羊城は戦前の調査時の姿をいまだよく残していた。報告書に掲載されている戦前の地図と比べると、城の西側の劉家村の集落が東に延び、および北側の刁家村の集落が南に延びて、城に近づいているが、いまだ畑の中の土城として残っている。遺物はあまり散っていなかった。戦前の調査時にすでになかった北壁を除けば、そのほかの東、南、西の城壁は南壁の西半部が最近の建物によって破壊されていたが、全体によく保存されていると言えるであろう(図3)。

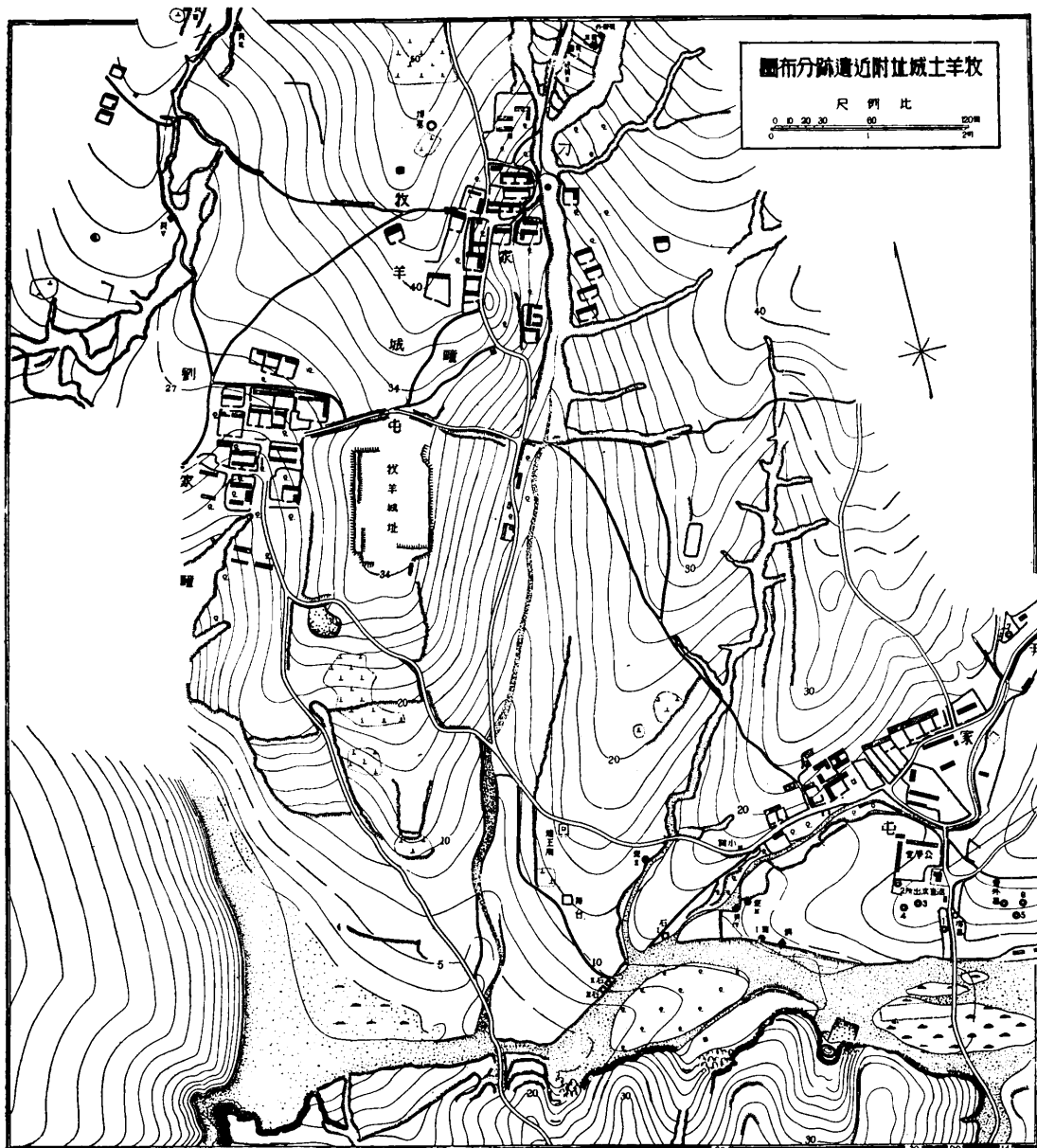


図1 牧羊城周辺の地図



図2 將軍山頂上から見た牧羊城の遠景



図3 牧羊城の鳥瞰

城内は現在畑になっている。城壁は戦前の調査時からすでに外側から削られていた。そして城壁外は城内より一段低い畑になっている。そのために、城壁の内部がかなり露出している。

南壁の東南角付近と、西壁の南半部で外側から特によく城壁を観察できた。戦前の調査時に城壁を断ち割っているが、城壁は間に黄褐色土を挟んで上の黒褐色土と下の黒色土（乾燥すると白くなる灰黒色土）があり、基底部に礫を敷いた層があった。外側から観察できるのは上層の黒褐色土層と下層の黒色土層の一部であり、基底部は見えない。

西壁での観察では、上半部の黒褐色土層には厚さ 10cm 程度の版築層がよく見えた。そして、等間隔に丸い穴が 2 列ずつ縦に並んでいるのが見える（図 6, 7）。その下の黒色土には明瞭な版築の痕跡が見えず、また穴の列もなかった。つまり、上層と下層では城壁の築き方が異なるように見えたのである。

戦前の調査によって明らかなことは、城壁を築く前に基槽を掘ることはせず、当時の地表面を整地して礫を敷いた上に土を載せて築いているということである。少なくとも、中原地域の城址での城壁の作り方とは異なるものである。錦西市小荒地城址も戦国燕から前漢までの城址であるが、城壁は基槽を掘らず、平地に直接作っているから共通する。

なぜ、上半分と下半分で見えて異なるように見え、かつ下半分には容易に分かるような版築層がないのだろうか。戦前の調査では、この城壁の上半分の容易に見てとれる版築についても何も触れていないので、上下の違いの意味が読み取れない。城壁の改修があったのか否か興味あるところである。城壁内には、崖面の観察であり、量も少なく、確実なことは言えないが、上層、下層とも黒色磨研の 1 類土器が入っているが、上層の中には、縄文のある破片も入っていた。この縄文のある破片とは何なのだろうか。踏査当時は縄の叩きによる土器片かと考えていたが、平瓦の破片があると考えるにいたった。

2. 牧羊城の層位について

戦前の調査では、城壁中からは、城内の包含層から出る瓦や「漢代黝色土器」と呼ばれる 2, 3 類土器は出ずに、築城以前の黒色磨研の 1 類土器しか出なかったと述べられている。

ところが、報告された 1 類土器の中には、縄の叩きのある、中村による 1 類 B 式の平瓦（本書中



図4 東壁の現状（南から）



図5 西壁の現状（北から）

村論文参照）と、無文半瓦当（同左）が含まれていた。黒色磨研という特徴があるわけでないのに、なぜ、1類土器に含まれたかは判然としない。

縄の叩きのある平瓦には注記がないため、確かなことは何も分からないが、理由として可能性は二つある。

(1) 土器と見た場合には、焼成、胎土が2, 3類の特徴的な「漢代黝色土器」とは異なるため、より原始的とされた1類土器の仲間とされた。

(2) さらにそれらが城壁の上層から1類土器とともに出ていた。

今回の踏査時の観察所見は、(2)の可能性も考えさせるのである。報告書の所見から、一部の瓦を1類土器と見ていたことが分かるから、それらが1類の典型的な黒色磨研土器都とともに城壁中から出ても、1類だけが単純に出たと記載することになるはずだからである。しかしながら、瓦と同時代の土器、牧羊城2, 3類土器はなぜ一緒に城壁中に入っていないのかは説明できていない。

また、報告書には、牧羊城址出土主要遺物表というものが付いている。調査当時の遺物の出土状況を知る上で、重要なものである。

しかし、遺物出土状況の、0-1、1-2、2-3という区分が墨書による遺物の注記とどのようのに対応しているのかについてよく分からないのである。

それぞれ1層、2層、3層と対応すると考えるのがもっとも自然であるが、だとすれば、人工分層による層位の単位は1尺だったとも考えられる。遺物表の中に、東VII区3-4区間の出土として楽央字半瓦当がある。これは本文(29頁)では東7区の深さ3尺9寸より出土したとある。このこと



図6 西壁の様相（西城外から）



図7 西壁上部の版築

から、3－4区間の数値の単位は尺であろう。

だいたい、何を基準に0を設定しているのかが判然としない。城壁部分は城内より高いから、それぞれの発掘区の地表面を基準にしたのでは統一がとれなくなる。城内の0－1からは多くの発掘区から遺物が出ているので、もっとも高い城壁上面を0にしているわけではない。おそらく、東区の断面図でⅧ区の城壁部分の平坦になる水準から西に向かって、表土のやや上に線が引かれている。おそらく、これが基準の0の高さであろう。

東城壁のもっとも高いところでは、城外の畑面からトレンチの北側で8尺2寸、南側で8尺4寸である。この最上面から上の基準線までの差を考えると、東区のもっとも深いところはおおよそ8尺である。遺物表に、7－8の欄まで用意されているのに対応する。この単位がmではまったく話が合わないから、これらの数値の単位は尺であろう。

東トレンチの中では東に向かって、深いところから遺物が出ている。もっとも深いものはⅣ区とⅦ区の6－7区間で、7－8区間には何も無い。この表はあくまでも主要な遺物についてだけ記録したもので、単なる土器片は、最下層が1類の単純層であった場合、記録に何も無いのもありうる。Ⅶ区やⅤⅥ南拡張区で上から6番目の区間である5－6区間から銅鏃が出ている。もしこれが、黄褐色土以下の報告書で言う1類土器単純層であれば、本文中で特別に注意するはずであるから、そのようなことはあるまい。その下の6－7区間でも土製紡錘車と石斧が出ているが、この区間の深さこそが、日誌による黄褐色土以下の1類土器単純層であろう。

遺物に墨書で注記されている「5」が第5番目の4－5尺区間に対応し、深さ4尺から5尺とすると、日誌に拠れば、それは地山とも表現される黄褐色土の下で、城壁の内部の1類土器単純層でなければいけない。ところが、調査者らにより墨書された土器の注記に従うと2,3類土器や無文半瓦当が「5」という層から出ていることになっている。

他方、報告書の主要遺物表では、EⅦの4－5尺の区間から鉄斧、鉄鏃が出ているから、この区間を「5」層として、2,3類土器が出てもかまわないのである。

これらのことを勘案すると、5層は黄褐色土の上の層であり、深さ4尺より浅いことになる。日誌の深さ5尺までは、遺物出土表の第6番目の5－6尺区間に対応しないとおかしい。

上で、遺物出土表の数値の単位は尺であろうとした。またその基準0の水準線も想定した。それを断面図の層位に合わせると、大体基準線以下5尺のところ、城壁の内部の黄褐色土の深さであり、5尺以下が、城壁の下半分の1類土器単純層になる。つまり、上から人工分層で切り分けていくと、第5番目の4－5尺区間が戦国以後の遺物が出る5層になり、第6番目の5－6尺区間の6層以下が1類土器単純層になるはずである。したがって、墨書注記の「5」とはこの意味での第5番目の区間（5層）から出た、戦国以後の文化層としてはもっとも古い層準になる。調査時の日誌の中で深度を記すさいの基準と、調査終了後の報告書作成あるいは、遺物注記の際の基準に変更があったのかも知れない。我々にとっては、報告書の記載と遺物注記が対応することを確認すればよいので、日誌の深度についてはこれ以上深入りしない。

したがって、遺物の中でわずかに墨書注記されて発掘区と層位が分かるもので、どれがどの区間から出ているかを考えれば、少しは包含層の上下で年代上の差があるのか否かが分かるだろう。上記したように、城内築城後の包含層の上下で様相が異なることが少しはあるのかは、城址の継続期間を考える際に重要であろう。今回の検討では、最初の築城は戦国後期前3世紀に始まることになったが、瓦から見れば、戦国と前漢の瓦があることになったので、建物の修復あるいは改築は明らかである。であれば、城内の包含層にも上下で少しは年代上の差が出るのではないかという関心があった。

主要遺物表の上の方の区間では、戦国貨幣である明刀銭と漢代貨幣が混在して出ている状況があり、明刀銭が漢代まで残存したのものとして、戦国時代単独層の存在は報告書では意識されなかった。しかし、主要遺物表を子細に見ると各発掘区で、明刀銭はより下から単独で出ていることが分かることは以前から筆者が述べているところである。そのことから、あるいは牧羊城の築城を戦国時代後期まで遡らせることができるのではないかと考えるにいたり、今回、遺物の全面的な再検討をおこなったのである。

より古いものが何かの人為的な所為により上の層に紛れ込むことはよくあることではあるが、より新しい時代の遺物がより下の層に紛れ込むことはあまりないはずである。したがって、たとえ上の方の層で、明刀銭と漢代貨幣が一緒に出ても、それが明刀銭が漢代まで流通した結果なのか、あるいは下の層からの紛れ込みなのかは決定できない。逆に言えば、土器も瓦も戦国から漢代の遺物が同じ層に混ざっていて、分離できないから、牧羊城の年代を決めるのが難しかったのであるから、明刀銭だけを混在ではないといえない。上の方では、戦国と漢代の遺物が混在していても、もっとも深いところでは戦国時代の単純遺物を出す層があったのではないかという思いがある。

今回の整理では、明刀銭以外にも、一部にしか注記がないため出土層準が明らかなものは少ないが、戦国時代に遡りそうな遺物には、「5」という層準が書かれていることがある。

このような問題意識から、瓦は全点の整理分析がおこなわれたが、ほとんど墨書注記がないので、このような検討はできなかった。ただし、無文半瓦当は東V区5層との注記があり、無文半瓦当は築城以後の包含層の最も深いところから出ている。また、遺物表で「走馬画像半瓦当」とされている、戦国時代燕系の走獸文半瓦当は東区のIV区の6－7区間という深いところから出ていることになっている。これも重要な所見であるが、しかし、東IV区はそれほど深くない。

残念ながら、今回の作業では、1類土器は少数のため、ほぼ全点を分析整理報告したが、2、3類土器は膨大な量のため、この作業が完了していない。ただし、2・3類土器の分析を担当した一人である、石川は戦国系の土器はより深い層から出る傾向にあったことを指摘している。

第3章2節で石川と鄭が牧羊城出土の戦国時代土器について触れているが、石川の図1－1と鄭の図5－3はかつての報告書では挿図12－1に出ているもので、かつての第2類土器である。燕下都から出土する土器によく類似すると当時から指摘されていたものである。この土器はEIV区5層から出ている。つまりもっとも深いところから出ているのである。

なお、牧羊城周辺では砦頭墓地や劉家村石墓の銅鏃に類似する、1類土器に伴ったであろう古い銅鏃が戦前から採集されている（報告：挿図8－13～15）。このような銅鏃は墓の副葬品であった可能性が高いから、牧羊城周辺は1類土器の時代の墓地があった可能性が高い。

2 - 3. 牧羊城周辺および関連する遺跡

大貫 静夫

1. 牧羊城周辺の遺跡

1) 尹家村

尹家村遺跡は大連市旅順口区尹家村の西南、南河の北岸にある。それは牧羊城の南約 800 m に位置する。戦前の牧羊城址の調査の際には、前漢時代の貝墓 1 基 (IV号)、漢代以前の石墓 3 基 (I~III号) と前漢時代の甕棺墓 2 基 (I、III号) が調査され、報告されている。戦前の報告では、尹家村官屯子地点として紹介されている地点である。

その後 60 年代の中朝共同調査では、包含層および墓、土坑などの遺構が調査されている。それらは下層 1 期、下層 2 期、上層期に分けられている。

*本書、第 4 章-1 に伝官屯子出土の銅剣の紹介がある。

2) 南山裡

南山裡もまた尹家村の中の小地名である。官屯子より東方のより高い場所に位置している。前漢の墓とは位置が異なり、より高い場所に移動している。この地点には後漢の磚室墓が広がっており、戦前に東亜考古学会による調査がおこなわれ、『南山裡』という報告書が出ている。後漢の磚室墓 7 基が調査、報告されている。

*東亜考古学会 1933 『南山裡』

3) 于家村遺跡

于家村集落遺跡は牧羊城の西約 1 km の地点にある。海に突き出た岬の手前に于家村遺跡があり、



岬の突端に砵頭積石塚がある。では双砵子 1 期文化に属する下層で 6 軒の住居が調査され、双砵子 3 期文化に属する上層では住居一軒が調査されている。

*旅順博物館・遼寧省博物館
1981 「旅順于家村遺址発掘簡報」
『考古学集刊』1981-1.88-103. 頁。

4) 砵頭積石塚

砵頭墓地は于家村遺跡から約 100 m 離れた、岬の先端にある、積石墓地である。一部が破壊されており、調査時には 56 の墓室があった。一

図 1 于家村遺跡附近

つの墓室に葬られた人数の最多は21人で、合計で200人以上が葬られていた。

副葬された土器は多様であり、この墓地は長期にわたって営まれた墓地である。他方、于家村遺跡では住居一軒しか調査されていないが、その土器は砦頭墓地の土器とは時期が異なる。集落遺跡のたった1軒の調査であるから、継続期間は不明で、相互の厳密な対比は出来ない。

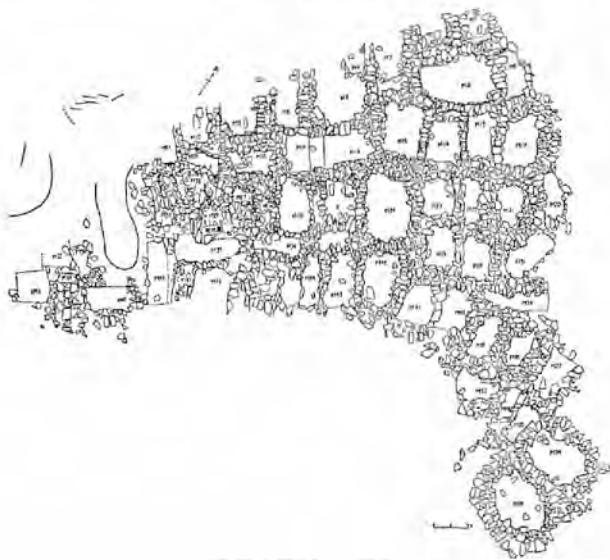
砦頭積石塚では多人数埋葬がおこなわれた。最大21人という墓室がある。火葬は確認されておらず、一人一人死亡する毎に、墓室の埋め石を除いて、前の死体を露出した上に死体を置くという作業を繰り返したと報告には書かれている。そして、死体の方向は一定せず、交錯して重なっていたという。二次葬であれば同時に十数体の埋葬が可能であるが、そうでなければこのような追葬方法をとるのであろうか。崗上墓、楼上墓では、数体分の人骨が間層もなく重なり、頭骨の方向は交互に置いていた。さらに成人の骨も小児も骨もあったことを複数の死体が同時に埋められた証拠としている。砦頭では、最後の火葬はないが、それ以外の死体の発見状況はよく似ている。砦頭では、新しい死体を葬るたびに、卵石を掘り返して下の死体を掘り出し、密着して新しい死体を埋めたとしているが、石を掘り返したかどうかをどうやって判断するのか分からない。掘り返したと言うことがなければ、実際の発掘所見は火葬を除けば、上下の死体が密着して重なり、頭位方向が互いに異なり、成人も小児もいるという点では共通する。それが砦頭では順次埋葬の証拠となり、崗上、楼上では同時埋葬の証拠となっ



図2 砦頭墓地遠景



図3 砦頭墓地の一部



図二 于家村砦頭積石塚平面図

図4 砦頭墓地の全体図

ている。砦頭の順次埋葬の論理が正しいのであれば、崗上、楼上墓の埋葬の理解にも適用可能になるのではないかと。またその逆もしかりである。砦頭墓地と崗上墓・楼上墓の葬制はそれぞれの報告に従うかぎりかなり異なるが、本当にそれほど異なるのだろうか。

下記の崗上墓や楼上墓では、やはり多人数埋葬があるが、同時に火葬されたと考えられている。殉葬があったと考えることはないので、同時に十数人も死亡することがよくあったとは考えられないから、二次葬であったと考えるべきであろうか。砦頭墓地の報告では崗上墓や楼上墓と多人数埋葬墓と言う点でよく似ていると述べているが、ずいぶん異なることになる。二次葬であれば人骨の出

方からある程度分かるはずだが、火葬されて残りは悪いから判断ができないのだろうか。

*旅順博物館・遼寧省博物館 1983「大連千家村砮頭積石墓地」『文物』1983-9,39 - 50 頁。

5) 羊頭窪貝塚

牧羊城の北約 4 km の鳩湾に突き出る岬の斜面にある。現在は土取により破壊されており、残存部があるのか不明である。

戦前に、東亜考古学界により調査、報告されている（水野清一編 1942）。ここからは方形に石壁を作る住居が見つかった。構造がよく分からないのだが、積み石だけで単独で壁立ちするとは考えにくい。しかし、大嘴子遺跡などでは積み石壁の平地住居が報告されているので、竪穴か平地か判断が難しい。双砮子遺跡では竪穴住居内の壁に積んだ石積みは隅丸方形で、大嘴子の平地住居の石積みは角が直角である。羊頭窪は角が直角であるから、平地住居の可能性はある。角が隅丸から直角になるのが双砮子遺跡での変化の方向（本書第 3 章 1 - 2）を参照）であるから、羊頭窪の住居は双砮子 3 期の中でも新しい可能性がある。

大きく見れば、貝層がこれらの住居を覆っていた。住居を埋める貝層があるのだから、住居を廃絶後、貝層が形成されていることになる。さらに、間層を挟んで貝層が二枚あったり、石壁の下にまた別の貝層があったりと、実態はかなり複雑だったようだ。遺物が豊富なのは貝層の下部で、その下からは住居の石積みが散在しているから住居と関係があるというが、貝層に伴うものであれば、確実にその下の住居とは無関係であり、より新しいことになるはずだ。住居に伴う遺物あるいは住居より古い遺物があることになれば、必然的に時期差があることになるが、今となっては分からない。多くは貝層の下部から出ていると言うことでまとまりがあったようだが、ある程度の時間差をもつ土器が含



図 5 羊頭窪貝塚遠景

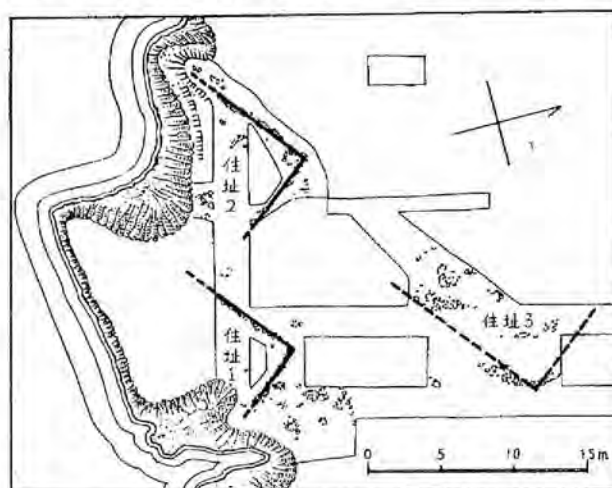


図 6 羊頭窪貝塚の遺構平面図

まれている可能性はある。しかし、土器は地点や層位にかかわらず一括して報告されているため、検討は難しい。

*本書、第 8 章 - 3 に遺物の紹介がある。

6) 郭家村貝塚

牧羊城の東約 1.5 km にある。小高い山の中腹、海拔約 60m にある新石器時代の貝塚である。長期わたって継続する貝塚であり、古くより知られている。基本的に、カキなどの貝類および魚類は海産である。下層は小珠山中層文化に属し、上層は小珠山上層文化に属する。



図7 郭家村貝塚にて

*本書、第4章-1に遺物の紹介がある。

7) 老鉄山・將軍山積石塚

郭家村集落に伴う墓地であろう、小珠山上層期の積石塚が老鉄山から北へ延びる尾根上に連なっている。地点により、老鉄山、將軍山積石塚と呼び分けられているが、一連の墓である。現在でも、林の中に点々と石室が並んでいる。

*旅大市文物管理組 1978「旅順老鉄山積石墓」『考古』1978-2,80-85,118頁。



図8 將軍山遠景（郭家村貝塚より）



図9 將軍山積石塚の積石

2. 營城子周辺の遺跡

1) 營城子壁画墓

營城子周辺には、前漢から後漢あるいは一部は西晋まで下る多数の墓がある。東亜考古学会は營城子牧城駅付近で2基の後漢磚室墓を調査し、1934年に『營城子』報告書が刊行されている。このうち、2号墓は壁画墓であり、現在も保存公開されている。戦後は、營城子附近で多数の漢代の貝墓、貝石墓、貝磚墓、磚室墓が調査されている。分布範囲が広いので、通称營城子壁画墓は現在は沙崗子の漢墓として、營城子とは区別されている。しかし、沙崗子村は鉄道の北にかなり離れてあり、墓は前牧城駅村との中間にある。前牧城駅の古墓群もまた分離して呼ばれるようになっているが、切れ目なく連なっているために、それぞれの古墓群のまとまりをどのように捉えているのか明らかではない。

*本書の第4章-1)の鄭論文で言及されている。



図10 營城子壁画墓展示施設

2) 崗上墓

後牧城駅村の東北約400mにある。崗上は東西約100mの円形の丘の上にある。1964年に中朝共同調査隊により調査されている。楼上墓の

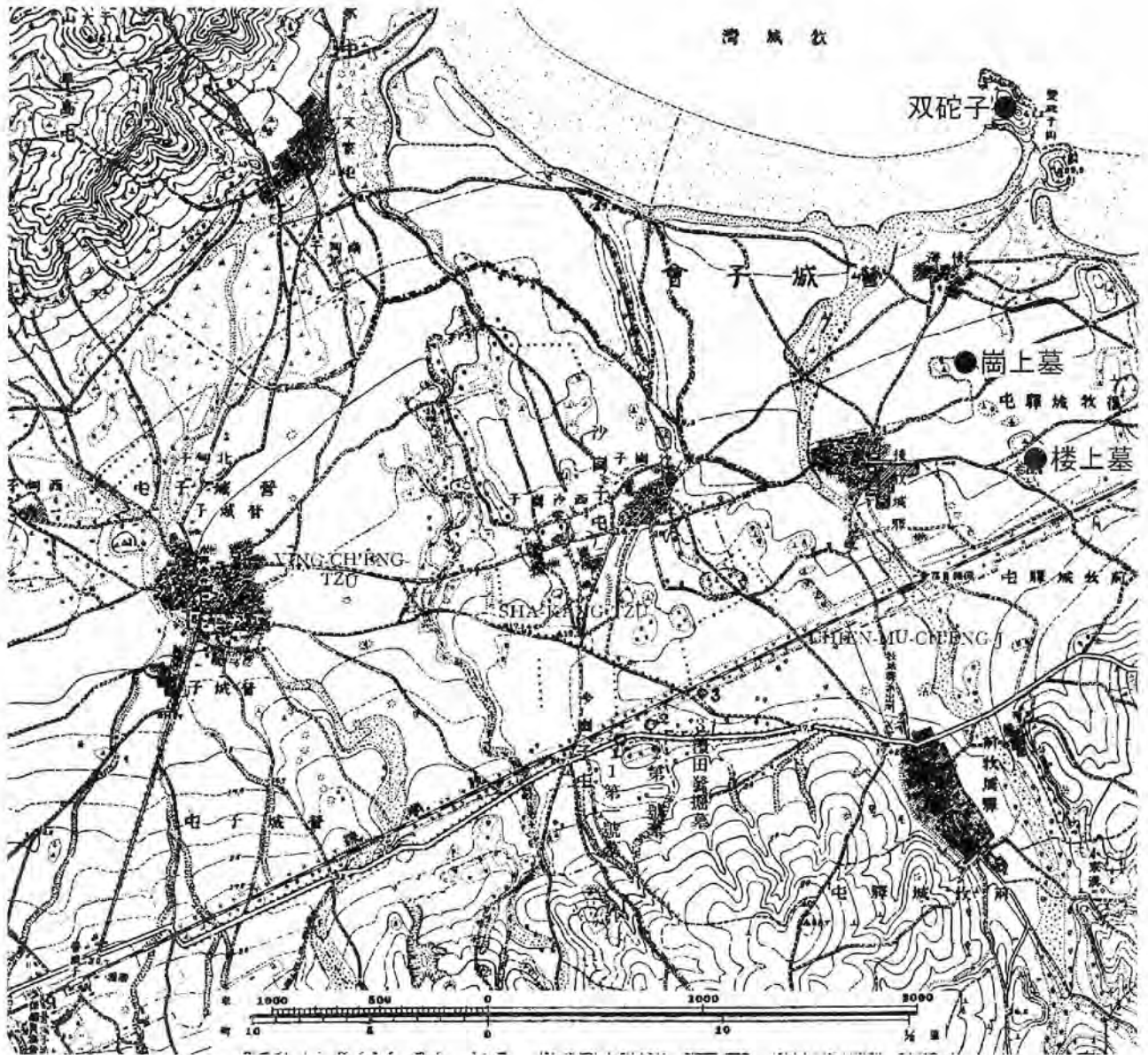


図11 宮城子附近の地図

補充調査を実施した際に、周辺で別の墓地が見つかり、併行して調査がおこなわれたようだ。現在も塀に囲まれて保護された丘が畑の中にある。中央に大きな板石が今でも確認できる。7号墓の底板石である。板石の上には木炭の層があった。火葬に伴うものであった。ここでは数人から十人以上の死体を同時に火葬した。このことは、同じ多人数埋葬のある下記の楼上墓でも確認された。

*中国社会科学院考古研究所編 1996 『双砣子与崗上一遼東史前文化的発現和研究』科学出版社。



図12 崗上墓遠景

3) 楼上墓

後牧城駅村の東約 100 m のところにあった。最初、1958 年に大連第七中学の学生と教師が土取の際に発見し、その後旅順博物館が遺物を回収し、1960 年に当該教師、学生の協力を得て、その際に見つかった 3 基の墓を調査した。当時は、東西 70 m あまり、南北約 20 m あまり、高さ 10 m あまりあったが、現在は消滅している。

1 号墓はまだ破壊が進んでおらず、2 体の被葬者があったらといううちの一体の周辺部分だけはまだ残っていたのでその部分を調査した。ただし、1958 年時点ですでに取り出されてしまった遺物はもう一つの 3 号墓からの回収品と区別ができないために、その出土状況が明らかな青銅短剣 1 本のみをその副葬位置を特定した上で 1 号墓出土品として報告された以外は、これらの確実な副葬品と区別するために、すべて 3 号墓の副葬品として報告（旅順博物館 1960）された。60 年の調査で青銅短剣 2 本を腰の左右の原位置で発見し、58 年に採集された短剣は腕の脇に置かれていたという証言に従い、平面図に位置が示されている。このもっとも確実な資料の中には、明刀銭も鉄器もない。

2 号墓は盗掘を受けていたと判断されている。これも 2 体合葬墓と推定されている。墓室の中からはわずかに銅飾りが 4 点出ただけである。鉄器残片が報告されているが、それは墓室内ではなく、封土中である。58 年時点ですでにほとんどなかったようであり、1、3 号墓副葬品と混同されることはなかった。

3 号墓はすでに破壊がひどく、遺物は原位置では見つかっていないようだ。3 号墓出土品として紹介されているものは、すでに区別できなくなった、1 号墓から出たものも含んでいる。したがって、1 号墓より一括性の信頼性は低い。ただし、3 号墓として報告されている青銅短剣 4 本は、1 号墓のものである可能性はきわめて低い。1 号墓の 2 体から夫婦合葬墓の可能性を考えているのも、1 号墓では 3 本以外出ていないという聞き取りに基づいているはずである。とすれば、それら 4 本は 3 号墓出土品の可能性が非常に高い。ほかの小型の青銅製装飾品は 1、3 号墓何れからも出たために、分離することはできなかった。

完形土器が 1 点だけ報告されている。完形の壺が封土から出るのは考えにくいので、これが 1 号墓なのか 3 号墓なのかが問題である。これも目立つはずだから、採集者の記憶に残るはずだが、1 号墓に入れてないところを見ると、1 号墓にはなかったという証言に基づいているのだろうか。3 号墓の可能性が高いがこれは確かではない。

ほかに、明刀銭と鉄鎌が 3 号墓出土品として報告されている。この時の報告では、青銅短剣は戦国時代のものと考えており、これらが青銅短剣に伴うということに疑念を持っていない。つまり、明刀銭や鉄鎌が伴ったから青銅短剣を戦国時代のものと考えたのではなく、当時の一般的な年代観がそうだったのであり、だから明刀銭や鉄鎌と一緒に出たという証言に何の疑問も抱かなかったのであろう。この報告の際に、最近の遼寧式銅劍の報告例として、十二台營子の墓（考古学報 1960 - 1）があがっているが、十二台營子の報文では、その年代を春秋後期あるいは戦国時代と今から見るとかなり新しくしていた。もう一つ取り上げられている烏金塘の墓（考古 1960 - 5）もまたその報文では戦国時代と今から見れば新しすぎる年代にしていた。

その後、墓地全体の構造を明らかにするために、中朝共同調査隊が 1963 年にトレンチを開け、64 年に全面的な調査をおこなった。

丘の上を整地し、さらに礫の混じった黒土を盛り、東西 21.9 m、南北 21.4 m で、高さ約 1 m の台を作っていた。

中国版報告書では、楼上墓の報告で、北朝鮮版にはなかった「六、討論」という章が最後に追加されている。そこでは、63、64 年の調査で、同様のものが出なかったこと、攪乱土層から五銖銭が出

ていることや、60年の調査でも封土中から鉄器が出ており、明刀銭と鉄鎌の遼寧式銅剣墓中の副葬品であるという60年の簡報の理解を否定している。そして、楼上墓の年代は春秋中・後期であり、戦国時代に下ることはないとする。

北朝鮮版の報告書にはこのような記載はないが、北朝鮮版も中朝共同で執筆したものであり、60年代当時から中朝共同調査隊の共通理解として楼上墓の年代を春秋時代と考え、明刀銭や鉄鎌の伴出を否定していたことは、例えば崗上墓の年代を8-6世紀と推定していることや、楼上墓の全面的な発掘の結果、崗上墓と同じ葬制がおこなわれていたことが分かっており、やや遅れる程度と理解していた。

ところが、この中朝共同調査報告は中国では文化大革命の中で、封印されてしまった。北朝鮮側では独自に報告書を刊行し、かつそれらの調査成果を下にして、次々と紀元前一千年期に関する、それまでの枠組みを組み替える意欲的な論文が発表されたが、我が国では受け入れられなかった。その思考の背景は、旅順博物館が明刀銭や鉄鎌が伴って当然と考えてしまった、それ以前の遼寧式銅剣の年代観にあった。地元遼寧省の研究者と北京の研究者の間で意見が異なるという状況がしばらく続き、しだいに遼寧省の研究者の間でも否定されるようになったのである。

その後も、楼上墓のM3は明刀銭や鉄鎌が伴う、戦国時代後期の墓として我が国では一般に扱われてきた。それゆえ、日本の考古学界に通じていた執筆者の安志敏がわざわざ一章を追加して、そのことにあえて触れたのであろうとも憶測する。

*旅順博物館 1960「旅順口区後牧城駅戦国墓清理」『考古』1960-8,12-17頁。

中国社会科学院考古研究所編 1996『双砬子与崗上—遼東史前文化的發現和研究』科学出版社。

朝・中合同考古学発掘隊（東北アジア考古学研究会訳）1986『崗上・楼上—1963-1965中国東北地方遺跡発掘報告—』六興出版。

なお、遼東の紀元前一千年期をめぐる研究史については、以下を参照。

小川（大貫）静夫 1982「極東先史土器の一考察—遼東半島を中心として—」『東京大学考古学研究室紀要』1,123-149頁。

大貫静夫 2004「研究史から見た諸問題—遼東の遼寧式銅剣を中心に—」『季刊考古学』88,84-88頁。

4) 双砬子遺跡

双砬子遺跡は崗上墓や楼上墓のある後牧城駅村のさらに北にある、南北二つの小山からなる。北の小山は海に突き出て、三面を海に囲まれている。北側の小山の南、東斜面に住居址がある。60年代の中朝共同調査の成果として双砬子1, 2, 3期文化が設定された。双砬子2期文化は山東の岳石文化の地方類型としてもよいもので、山東との関わりがもっとも強かった時代であることが分かっている。双砬子3期文化は山東との強い関係が切れた後の在地化の過程を示すものである。

双砬子3期文化の住居址は、竪穴住居で壁に石を積んで補強するところに特徴がある。同一場所で複雑に重複していて、定着性の強さを示している。

双砬子遺跡の発見は1930年代の江上、駒井、水野の調査にある。江上らは山頂部で積石塚を発見した。現在でも山頂部にその痕跡を示す石を見ること



図13 双砬子遺跡の遠景

ができ、土器片も散布している。

*中国社会科学院考古研究所編 1996 『双砦子与崗上一遼東史前文化的発現和研究』科学出版社。

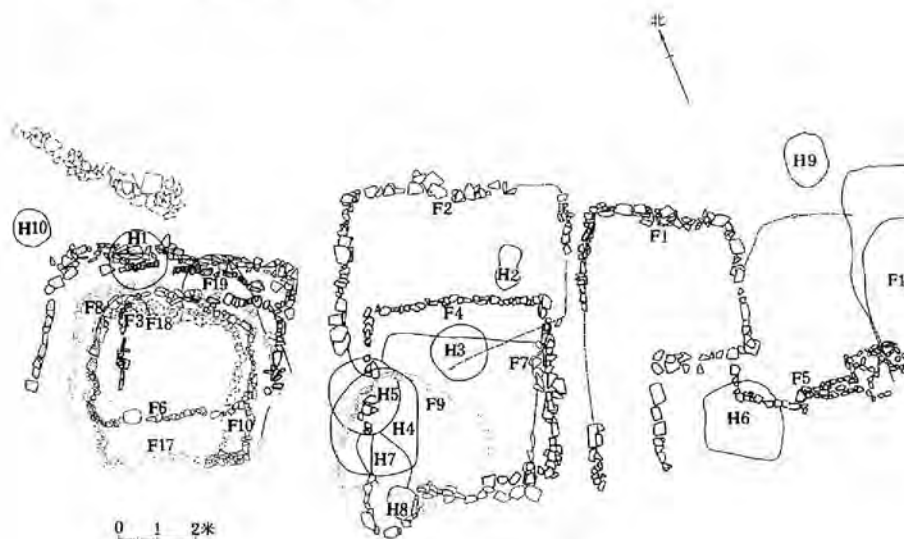
江上波夫・駒井和愛・水野清一 1934 「旅順双台子山新石器時代遺跡」『人類学雑誌』49-1,1 - 11 頁。

大貫 1982 (前出) で、江上らの採集品の一部を紹介している。双砦子 2 期文化の土器であり、それが積石塚に伴うものであれば珍しい存在である。



図 14 双砦子遺跡の崖面に見える住居の石積

図 15 双砦子遺跡住居配置図



3. そのほかの遼東半島の遺跡

1) 大嘴子遺跡

1987 年に道路を通すための緊急調査がおこなわれた。1992 年には学術調査が実施された。

報告が出るのは 1992 年が早い。1987 年の報告は住居址毎に遺物をほぼすべて紹介するという、中国では珍しく、貴重な資料となっている。

遺跡は大連湾に面して突き出た台地の先端にある。海拔約 10m。東北部が高く広く、西南部は低く狭くなる。東と南は海に落ちる断崖となっており、崖面に住居址が露出している。道路際の断面に双砦子 1 期文化の貝層が露出している。

発見されている住居址は 87 年調査で 39 軒、92 年調査で 12 軒であった。



図 15 大嘴子遺跡

*遼寧省文物考古研究所・吉林大学考古系・大連市文物管理委員会 1996 『遼寧大連市大嘴子青銅時代遺址的発掘』『考古』1996 - 2,17 - 35頁。

大連市文物考古研究所編 2000 『大嘴子—青銅時代遺址 1987年発掘報告—』大連出版社。

2) 廟山

大連市金州区七頂山郷老虎山村にある。岩山の斜面に双砬子3期文化の住居址が見つかっている。1991年に吉林大学、旅順博物館、遼寧省文物考古研究所が調査をおこなった。

調査区に一部だけに見られた2A層と全面にわたっていた2B層の双砬子3期の土器を出す包含層があり、調査された12軒の住居址（F8の1軒だけが平地住居、残りは壁際に石積みをする竪穴住居）はその下の3層を皆掘り込んでいた。3層もまた双砬子3期文化の包含層であったが、2,3層には、報告で後期A類とされた、双砬子2期文化に近い一群の土器が少量含まれていた。その下の4層は双砬子1期文化の包含層であった。

平地住居のF8は竪穴住居F6に壊されており、切り合い関係があった。

3) 双房墓地

双房遺跡は新金県安波徳勝にある。道路からやや離れた小丘の頂上および斜面に支石墓6基と石蓋石棺墓3基が見つかっている。周囲に平地が広がる丘の先端でもある。

2号支石墓の側板石はまだ立っている。

遼寧式銅剣と土器を出したのは、石蓋石棺墓M6である。

*許玉林・許明綱 1983a「新金双房石柵和石蓋石棺墓」『文物資料叢刊』7,92 - 97頁。

許玉林・許明綱 1983b「遼寧新金県双房石蓋石棺墓」『考古』1983 - 4,293 - 295頁。

4. 戦国秦漢古城址の踏査

1) 張店古城

普蘭店市花児山郷張店村の北にある。かつての牧羊城に変わって、漢代沓氏県城の候補として有力となっている城址である。詳しい報告は未だ無く詳細はよく分からない。規模は南北約340m、東西約240mであるという。

劉俊勇の『大連考古研究』の記載では、現在でも城壁は地表面よりやや高くなって残っていると書



図16 大嘴子遺跡の貝層



図17 廟山遠景



図18 双房遺跡

いているが、我々が踏査したかぎりでは城壁らしきものを確認できなかった。踏査したときの現地の住民の話では、大躍進の時の土取で失われたという。ただし、以前の城壁にそって畑に段差があり、一部の城壁の位置はおおよそ推測できた。

城の築城は戦国に遡るとされている。戦国時代の貨幣安陽布や「臨濊丞印」封泥が出ているが、明刀銭の出土は報じられていない。

周囲には、いくつかの前漢以来の漢代墓地がある。かつて花兒山漢代貝墓として報告されたのもその一つである。

銅斧や銅斧の鋳型が出ていると書かれているので、遼寧式銅剣時代の遺跡もその下にあるのだろう。牧羊城もそうであったが、戦国秦漢時代に城が築かれた場所は、その以前からもその地域の中心的な場所であり、だからこそそこに城が築かれたのである。

*劉俊勇 2003 『大連考古研究』哈爾濱出版社。



図 19 張店古城東壁附近

2) 二龍湖城

吉林省に所在する戦国秦漢時代の城址である。吉林省四平市の東 32.5 km の梨樹県にある。東遼河と小子河とが合流する場所にできた龍湖ダムに面する台地上にある。城は西北部が破壊されているが、他はよく残っている。西壁約 190 m、北壁 185m、東壁 193m、南壁 183m でほぼ方形の城である。

現状では城壁の高さは最大 3.5 m である。1987 年に吉林大学などが調査している。

出土遺物から、戦国燕の時代から漢代初めの城とされている。この時期の城としてはもっとも北に位置する城である。一時的にここまで中原系勢力は到達したが長くは続かなかつたらしい。

*第 2 章 1) の鄭論文で紹介されている。

四平地区博物館・吉林大学歴史系考古專業 1988 「吉林省梨樹県二龍湖古城子調査簡報」『考古』507-512 頁。



図 20 二龍湖古城 城内から城壁を見る

3) 小荒地古城

遼西錦州市の西 25 km にある。小荒地村の西にあり、城内には小学校がある。周囲の城壁はほぼ完全に残っている。1988 年に吉林大学と遼寧省文物考古研究所が共同で調査している。周長約 900m のほぼ方形である。城壁は基槽を掘らず、平地に直接建てている。

第 1 期と 2 期は先行する時代の文化層で、2 期は魏營子類型と戦国燕の中間の年代の地方類型であった。



図 21 小荒地古城遠景

3期1段は戦国燕下都と類似する遺物が多く、戦国後期から統一心までの段階である。3期2段は前漢である。もっとも新しい遺物は貨泉であり、後漢までは下らないとする。戦国燕の遺物と前漢の遺物が層位的に分離され点で重要である。上の二龍湖城では層位的には分離できておらず、牧羊城の戦国燕と罐の遺物を分離する際に貴重な比較資料である。また、牧羊城が後漢時代にどうなっていたかを検討する際に重要な比較資料である。

ここからは遼寧式銅剣が出ており、ここもまた燕の城址が作られる前から地域の中心的な場所であったろう。異系の遼西式銅戈が出土している傘金溝はすぐ北にある。

*第2章1)の鄭論文で紹介されている。

吉林大学考古系・遼寧省文物考古研究所 1997「遼寧錦西市?集屯小荒地秦漢古城址試掘簡報」『考古学集刊』11,130-153頁。

4) 安杖子古城

安杖子古城は凌源県の西南4kmの地点にある。大凌河南岸の九頭山の麓の平坦な台地上にある。大凌河は城の北を西から東に流れる。古代南北の交通の要衝として重要な場所であった。右北平郡石城県城と推定されている。1979年に遼寧省文物考古研究所が調査した。

城は南北を向いた長方形の古城とされているが、不規則な形をしている。南北の長さ150～328m、東西の幅200～230mである。東北角に平面台形の小城がある。小城の南北の長さ128m、東西の幅80～116mである。

大城の城壁は地下に基槽がある。この点は小荒地や牧羊城とは作り方が異なるようである。現在でも大城の城壁は1mていどの高さがあると報告されているが、踏査した際にははっきりしなかった。大城の範囲は周囲が低く崖のようになっていることで、その輪郭を知ることはできた。

下から夏家店下層、戦国燕、前漢の遺構、遺物が層位的に分離されて出ている。この城址の資料も、前漢までであり、牧羊城の資料を分析する際に重要な比較資料である。

**第2章1)の鄭論文で紹介されている。

遼寧省文物考古研究所 1996「遼寧凌源安杖子古城址発掘報告」『考古学報』1999-235頁。



図22 安杖子古城城内



図23 安杖子古城 外から東北角を見る

5) 黒城

黒城は内モンゴルの寧城県の西南約60kmの地点にある。老哈河に黒里河が注ぎ込む合流点にある。ここは古代から南の華北平原と北の草原地帯をつなぐ重要な要衝の地であった。

黒城というのは、遼代の城を指す。城壁の残りはよい。その外側に漢代の大型の城、外羅城がある。

東西 1800 m、南北 800m と大きい。1979 年の調査では西側の城壁がまだ残っていることになっているが、現在はよく分からない。現在では右北平郡治平剛の所在地であったと考えられている。

我々にとって興味深いのは、北側にある花城と呼ばれる小城である。東西 200m、南北推定 280m である。残りが悪い。

花城は戦国燕の軍事防御用の城堡であった。大城の外羅城は統一秦から王莽の時代までの城であった。燕の時代の城の規模を知ることができ、牧羊城を考える際に重要な資料である。

老哈河の対岸には中原系青銅礼器を伴う青銅短剣墓で有名な小黑石溝墓地がある。時代を超えて地域の中心的な場所であった。その附近に燕の墓地もある。

*馮永謙・姜念思 1982「寧城県黒城古城址調査」『考古』1982-2,135-164 頁。

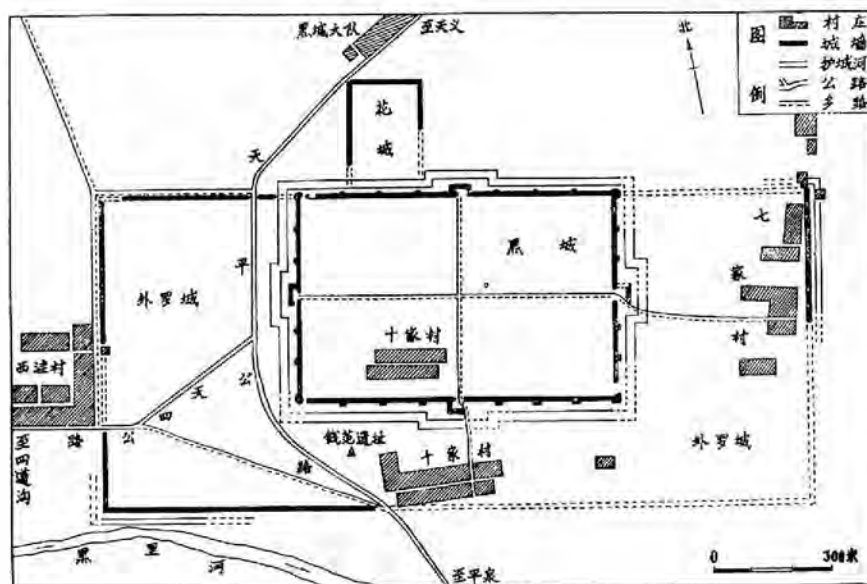


図 24 寧城黒城城址全体図

*本稿で紹介した遺跡のうち、多くは今回の研究費により踏査した成果を報告したが、ほかにも、80年代からの踏査の記録を利用したものがある。本研究費以外の踏査では、今回の課題の研究分担者でもある秋山進午大手前女子大学教授を団長とした、遼寧省文物考古研究所との共同研究の成果、あるいは、宮本和を九州大学教授を団長とする調査団に参加した際の研究成果をも利用させていただいた。遼寧省文物考古研究所との共同研究では郭大順、故孫守道、辛占山という歴代所長のお世話になった。上記してお礼を申し上げます。

3 — 1. 牧羊城 1 類土器の分類

古澤義久・大貫静夫

1. はじめに

遼寧省大連市旅順口区老鉄山山麓に所在する牧羊城址および周辺の古墓は 1928（昭和 3）年に、東亜考古学会および関東庁博物館により調査された。その報告は 1931 年に方考古学叢刊第二冊『牧羊城』として東亜考古学会より刊行されている。牧羊城部分の執筆は駒井和愛、周辺の古墓については原田淑人がその責を負っている。

報告で駒井は牧羊城出土土器を 3 類に分けている。黝黒色を呈し、焼成やや堅緻な 2 類土器は戦国時代から漢代に亘るものとされ、3 類は漢代に盛行したものを一括したとされている。これら 2 類、3 類土器は牧羊城址に関連するとされた。

1 類土器の下限年代を考える際に牧羊城の築城時期、つまりこれら 2、3 類土器の年代が問題となる。牧羊城の築城時期を報告書の結論部（63 頁）では前漢期としているが、現在、中国では戦国時代から始まるとする見方が一般的なようだ。今回の我々の再検討でもそのような結論になっている。

1 類土器は、『牧羊城』によれば、表面を研磨した原始的な土器であるとされている。多くの発掘区では、2、3 類土器と共に混在して出土したが、東西の城壁を断ち割った地点では、その「基底部に接して」1 類土器のみが、貝殻、獣骨と共に包含されていた。そのため、報告では、築城に際し、その付近に所在した遺跡の土壌を運んできたものであろうとしている。2 類、3 類土器とはある意味で層位的に分離され、牧羊城址より古いことになるため、筆者の一人（大貫 1982）はかつて中国側の呼称（遼寧省博物館ほか 1981）に従い、「牧羊城下層」の土器と表現したことがある。しかし、戦前の調査を検討した章で述べているように、1 類土器を単純に出したという城壁の基礎の石畳下で見つかったピットから「漢式黝色土器」が出ているように、1 類本来の包含層が見つかったわけではない。誤解を招かないように『牧羊城』報告の呼称に従い、ここでは牧羊城の「1 類土器」（ただし、『牧羊城』では「一」であるが、ここでは「1」とする）と呼ぶことにする。

『牧羊城』報告書では、図 11 および図版 22～24 に示されている土器である。壺と甕が多いとされている。本書に収録した土器には、『牧羊城』に収録されていないものや、その後接合したものもあるが、全体の内容を大きく変えるものではない。

2. 「1 類土器」について

牧羊城 1 類土器は城内の包含層中では、後の時代の 2、3 類土器と混ざって出土している。ところが、城壁の土の中は、1 類土器だけで、牧羊城自体と関わりがあると考えられた 2 類、3 類土器は入っていなかった。その城壁中の資料を根拠に、1 類土器が設定され、城壁内以外の包含層から 2、3 類土器とともに出土したものの中からも抽出されて、1 類土器として報告されたのである。城壁築城以前のものであるから、牧羊城址より時代的に古いと理解された。

かつて、本研究室所蔵の牧羊城出土の城址以前とされる土器の再整理をおこない、その際の所見を述べたことがある（大貫 1982、以下では「前稿」と称する）。その際に、中国側の呼称（遼寧省博物館ほか 1981）にしたがい、「牧羊城下層」と呼んだ。ただし、より古いものではあるが、厳密には「下層」という層はないので、戦前の牧羊城の報告書（以下ではたんに「報告書」と略す）の呼称にしたがい、1 類土器と呼ぶ。あるいは、この台地上に 1 類土器の時代の層があったのが、築城に際

しての整地により、本来の包含層が破壊されているのかも知れない。ただし、1類土器と報告された資料のうち、どれが城壁中より出たもので、どれが型式学的に城内包含層中の資料から抽出したのか、すべてに注記があるわけではなく、分からないものが多い。

1類とされた資料中、図版22-1の土器口縁部破片とされた資料は平瓦の破片であった。もう1点、図版23-2の土器底部として扱われたものは、無文半瓦当の破片であった。これらが城壁中から出たとすれば、城壁の築城について語る重要な資料ではあるが、注記がないので、判断できない。焼成がほかの2、3類土器と異なることから1類に入ったのかもしれない。ただし、報告書では、城壁部分は大きく上下二枚の層に分かれているが、2004年秋および2005年春におこなった現地踏査の蔡に、その中の上部分の層の中に、縄文のある破片を見ている。城壁外の断面での観察であり、確実ではないが、それが平瓦の可能性であった可能性もある。報告書では、1類土器は、城壁部分の土層の下半分から1類土器が単純に出たことを詳しく説明する。そして、城壁の土の中からは1類土器しか出ていないと書いているから、上半部の層に縄文のある破片があるのは疑問だが、報告書の1類土器には縄文のある破片が含まれている。それらの胎土、色調は2、3類の「漢代黝色土器」とは明らかに異なるので、当時は1類土器として認識された可能性が高い。つまり、城壁中からは「漢代黝色土器」が出なかったとしても、瓦が出ていなかったとは言えないのである。何れにしろ、これらは瓦の破片なので、1類土器から除外する。

報告書には、1類として報告された中に、上記の図版22-1は瓦だから除外しても、もう1点ある。図版22-15である。破片を見るかぎり、ほかの1類土器とはまったく異質の、叩きによる縄文のある土器であり、1類土器よりは時代的にも後出のものであろう。なぜほかの1類土器と同類として扱われたのか疑問の残る土器である。あるいは城壁内から見つかったため、城壁構築以前ということで1類に入れられたのかも知れない。しかし、燕が当地に進出し、それから築城したと考えれば、城壁内に戦国系の土器が入ることは十分にありそうである。しかし、築城以前の土器ということが、即1類土器ということになるわけではない。ここでは、1類土器に土器型式としての意味を持たせるために、これは含めないことにしておく。

前項で述べられているように、1類土器は、黒色から黒褐色のものが多い。さらに器面を磨研した丁寧な作りのものが多いのが特徴である。かつての報告書では報告されていないが、それらとは異なり、砂質で褐色の土器片が少量あった。それらは2、3類土器よりも古いことも明らかであった。現在の知見からすれば、それらは尹家村下層2期と呼ばれる段階の土器であり、ほかの大多数の土器とは異質である。戦前の調査時に、尹家村官屯子附近の1号石墓から出た土器がこの段階の土器であるが、報告書ではそれらは1類土器とは別のものとして認識して、1類には含めていなかった。したがって、これも築城以前の土器には違いないが、1類土器の型式学的なまとまりをいたずらに拡大することなく、これも1類土器からは除外しておく。

3. 1類土器の分類

黒色から黒褐色を呈し、泥質の胎土で、器面は研磨されているのが主なものである。現在本研究室に収蔵されている資料を見るかぎりでは、文様のある口縁部と底部、そして把手が多い。とくに大形の平底及びやや上げ底の底部片と横向きの橋状把手片が目立ち、それらが同一器種の一部であろうと推察されるのだが、それらに対応するであろう大形土器の無文の口縁部片はほとんどない。本来ならかなり多いはずである無文の胴部片も非常に少ないことから、収蔵資料は、考古学的な情報を多く持つ土器片の比重が高く、恣意的な選別を意識させる。しかし、たとえ無文であろうとも、口縁部片を

抽出しないことはありえないだろうから、とりあえずは現状の資料を基礎に分析するしかない。

小片が多く、全体の器形を知りうるものはない。そのため、以下の分類ではおもに口縁部片を基準にして分類している。

4. 土器の出土状況

出土位置を知ることができる資料は少ない。牧羊城 1 類土器に記された注記をもとに出土位置がわかる牧羊城 1 類土器を集成したものが表 1 である。人工層位は 1 が浅く、5 が深い。表内部の数字は個体数を示す。東区では 3～5 層、南区では 2～3 層、北区では 2～4 層で多く出土しているようにも見えるが、一部の資料のみに注記を付しているだけであるため、本来の遺物の分布を反映している保障は全くない。この集成からわかることは深いところでも浅いところでも牧羊城 1 類土器が出土するということのみである。

表 1 人工層位別 1 類土器出土状況

人工層位	1	2	3	4	5
東区					
Ⅲトレンチ		3			
Vトレンチ		1		1	2
VIトレンチ			2	4	2
VIIトレンチ			1	1	5
南区					
Iトレンチ		1			
VIトレンチ		1	3		
VIIトレンチ		5	2		
VIIIトレンチ		1			
北区					
Ⅲトレンチ		1	2		
IVトレンチ	1	1	1		
Vトレンチ				5	
VIトレンチ		1		1	
VIIトレンチ			1		

5. 出土土器の様相

牧羊城 1 類の土器は器種としては、広口壺、鉢、台付鉢、高杯、甗、小型土器、把手などがみられる（図 1～4、写真図版 1～12、表 3）。

これらの器種及びその形態・文様をもとに牧羊城 1 類の土器を次のように分類した。この内 A 類と B 類は広口壺で、A 類は二重・肥厚口縁をもつもの、B 類は単口縁である。

A1a 類：二重・肥厚口縁の広口壺で、平行沈線と点列文が施文され、平行沈線が粘土により、分断されるもの。

A1b 類：二重・肥厚口縁の広口壺で、平行沈線と点列文が施文される。

A1c 類：二重・肥厚口縁の広口壺で、点列文のみが施文される土器とそれに関連する土器。

A2 類：二重・肥厚口縁の広口壺で、縦位の沈線によって構成される文様が施文される。

A3 類：二重口縁の広口壺で、平行沈線のみが施文されるものと無文のもの。

A´類：二重口縁・肥厚口縁の鉢に近い器形で、点列文と平行沈線が施文される。また、A類広口壺に関連する土器。

B1a類：口唇端部が外側にやや突出した広口壺で、刻目と平行沈線が施文される。

B1b類：文様はBa1と同様であるが、口唇端部が突出しない広口壺。

B2類：口唇端部が外側にやや突出した広口壺で、刻目のみが施文される。

B3類：広口壺で、斜格子文・横走魚骨文・斜線文が施文される。

B4類：広口壺で、平行沈線が施文され、その間を三角集線文や梯子形文が施文される。

B5類：無文の広口壺

B6類：B類の広口壺に関連する鉢類。

B7類：広口壺で、有文の胴部片。

C類：高杯や台付鉢

D類：甌

把手

底部

小型土器

(1) A 1 a類

1と2はわずかに粘土を付着させ、丁寧にナデつけることによって平行沈線を分断している。このような技法は口縁部だけではなく、3～5にみられるように胴上部でも確認される。3は、わずかに粘土を貼り、ナデつける際に目安にしたであろう割付線が確認される。本類は内外面とも横位のミガキ調整がなされるものが多い。沈線施文後に点列文が施文される。

(2) A 1 b類

6～9では頸部と胴部の間を幾度かにわたり調整した際についた浅く細い工具痕がかすかに残る。6では沈線施文後に点列文が施文される。

(3) A 1 c類

本類もA a 2類と同様に口縁部と胴部とも横位のミガキ調整が主となる。そして、10や14にみられるように頸部と胴部の間は横位のミガキがなされず、未調整として残る。

(3) A 2類

17は点列文と縦線による四角組帯文が施文される。点列文施文後、区画線が施文される。区画線は横位の沈線施文後、縦位の沈線が施文され、区画内を縦線で充填する。一部充填線が完全にナデ消えていない部分が観察されることから、縦の重点線を満遍なく施文した後ナデ消すことによって、交互に空白部を作出していると推察される。焼成は非常に甘いのが特徴的である。18と19は文様部分以外に縦位のミガキ調整が行われる。

(4) A 3類

20と21は平行沈線が施文される(A3a類)。20の頸部と胴部の境界には6～9にみられたような調整した際についた浅く細い工具痕がかすかに残る。無文のもの(A3b類)は内外面とも横位のミガキが主であるが、26は内外面とも回転によるナデが残る。23と27の頸部と胴部の境界は未調整として残る。このような特徴は10などでもみられる特徴である。

(6) A´類

29は点列と平行沈線が施文される。口縁下部はケズリ出され段が形成されている。30は平行沈

線施文後、点列文が施文される。唇形の貼り付け文が付着している。文様部分以外にミガキを施す。32は点列文のみが施文される二重口縁の鉢である。33と35は他のA類の二重口縁と比べ、扁平な二重口縁である。器種としても広口壺ではなくほかと区別される。横位のミガキが主である。34は内傾する器形の二重口縁である。36は無文の広口壺である。横位のミガキが顕著で、頸部と胴部の境界を工具によって掻きとっている。

(8) B1a類

37～42は口縁端部が若干突出し、突出部に刻目を施文し、その下部に平行沈線を施文している。平行沈線はA1b類では整然と施文されているのみ比べ、本類は粗雑で平行沈線が分断されているものも見受けられる。37では平行沈線施文後に点列文を施文していることがわかる。頸部と胴部の境界は37や41にみられるように幅1.5cm程度の板状工具で削りだしている痕跡が明瞭で、浅く細い工具痕の残るA a 2類とは対照的である。外面の調整はA1b類では施文部も横位のミガキ調整がなされるのに対し、本類では横位のミガキ調整が行われるのは胴部以下で頸部の平行沈線文の部分はミガキがなされず、工具による横位のナデ痕を残したまま、施文する。

(9) B1b類

本類はB1類と同様の文様帯を持つ。平行沈線はB1類と同様に粗雑に施文される。しかし、B1類では突出した部分に施文された刻目が、本類では口縁部上部に短斜沈線文が施文されるという差異がある。B1類と比較すると器壁が厚いのも特徴的である。42や45にみられるように頸部と胴部の境界はB1類と同様に幅1.5cm程度の板状工具で削りだしている痕跡が明瞭である。B1類と同様に施文部には工具などによるナデの痕跡を残したまま、施文に及んでいる。50は乱雑な沈線が施文される。51は点列文はなく平行沈線のみが施文されるが、平行沈線の粗雑な様相は44や47などに近い。B1類と同様に、本類でも横位のミガキ調整が行われるのは胴部以下で頸部の平行沈線文の部分はミガキがなされず、工具による横位のナデ痕を残したまま、施文する。

(10) B2類

52と53は口縁端部が外側に突出しており、Ba1類との関連が想定される。突出した口縁部に刻目が入る。54は口唇部に刻目をもち頸部と胴部の境界をケズリ出し段を作出した後丁寧に横位のミガキがなされる。

(11) B3類

55～59は口縁部に斜格子文が施文される(B3a類)。幅広の工具によるケズリで段を作出し、口縁を肥厚させている点や工具によるナデの痕跡を残したまま施文に及んでいる点で、B1類やB2類との共通性が認められる。60,61は口縁部に横走魚骨文が施文される(B3b類)。斜格子文が施文されるものと同様に幅広の工具によるケズリで段を作出し、口縁を肥厚させている。また、工具によるナデの痕跡を残したまま施文に及んでいる。62は粗雑な横線が施文される口縁部である。口縁部は若干粘土を貼り肥厚させているが、ケズリによりさらに段を作出している。63は斜線が施文されるが施文前の工具によるナデ調整の痕跡が顕著に残る。

(14) B4類

平行沈線内に刻みを入れるもの(64:B4a)と入れないもの(65-70:B4b)に分かれる。64は平行沈線の間を斜線で充填し、その後三角集線文を施文している。65と68は平行沈線施文後、梯子形文を施文している。文様部分以外は横位のミガキが施される。66は平行沈線施文後、平行沈線の間を斜線で充填する。その後三角集線文が施文される。64は平行沈線施文後、三角集線文が施文される。

69 は平行沈線の上に三角集線文が施文される。64～66,68 は文様施文部以外はミガキ調整がなされる。67 は平行沈線が施文される。

(15) B5 類

71 は頸部と胴部の境界に幅広の板状工具で調整した痕跡がみえ、B3 類などと共通する特徴をもつ。72 は無文の広口壺口縁部である。

(16) B6 類

73 は碗や鉢の口縁部である。74 は内傾する口縁である。横線→斜線の順に施文される。

(17) B7 類

75 は平行沈線の間を斜線で充填し、雷文を構成し、雷文の間を三角集線文を施文している。76 は平行沈線の間を斜線で充填し、平行沈線帯の間に区画線と斜格子文が施文される。77 は平行沈線の間を Z 字文や三角集線文を施文する。文様構成から 66 のような口縁部に対応する胴部片であると考えられる。78 は多歯具で斜線と平行沈線が施文される。79 は多歯具で Z 字文が粗雑に施文される。80 は平行沈線の間を三角集線文が施文される。77 と同様に 66 のような口縁部に対応する胴部であろう。81 は平行沈線間を斜線で充填し、三角形を構成している。浮文がつく。82 にも 81 と同様に浮文がつく。83 は平行横線施文後、点列が符される。その後、斜線の三角集線文が施文される。84 は三角形の区画線が施文された後、斜線で充填される。85,86 は浅い沈線で平行沈線間を斜線で充填した文様が施文される。75,76 は深い沈線で狭い平行沈線に斜線を充填するのと対照的である。87 は平行横線施文後、斜線が施文される。無文様帯にはミガキが施されるが、施文部には工具によるナデ痕を残したまま施文に及んでいる。このような技法は B3 類にもみられるものである。88 は斜線と沈線が施文される。89 は斜線が粗雑に施文される。90 は口唇状の貼付文がつく胴部片である。口唇状貼付文が同様に付着する 30 では口唇状貼付文を貼り付けた後、器壁に密着するようにナデ付けているのに対し、90 では粘土を口唇状にして貼りつけたまま調整はしていない。器壁は 3～4mm と薄く、同様に器壁が薄い B1 類との関連が想定される。

(18) C 類

91 は口縁端部が若干外反する高坏の口縁部である。砂質でナデ調整がなされる。92 は口唇部が丸く、内側に丸く突出する。93,94 は無文の脚部である。95～99 は脚下部に施文される脚部で、96 は三角集線文が施文され、95,97～99 は縦線文が施文される。95 は施文部に施文前の工具による強いナデ調整痕が残っており、同様の調整は B1 類や B3 類、B7 類で観察することができ、関連が想定される。100～103 は杯部と脚部の連結部である。103 は 2 条の沈線がめぐる。

(19) 甗

104 は甗の口縁部である。二重口縁下端部に刺突による刻目が付される。105 と 106 は甗腰部である。105 は腰部をわずかに肥厚させ、爪形を押し付けている。106 は明瞭に粘土紐をめぐらせ、隆帯上に爪形を施文している。107～109 は甗足である。いずれも縦位のミガキが顕著である。

(20) 把手

把手には 3 種類ある。110 のような断面楕円形の橋状把手と 111 のような断面長方形の橋状把手および 112 のような板状把手である。橋状把手は横位ミガキが多く、板状把手は縦位のミガキが多いが、これは把手を貼り付ける際のナデ付けの方向に関わる差異であろう。把手に多く見られる大粒の砂粒が混入する点、灰褐色のものが多く、器面調整の粗雑さなどは、これまで報告した器種では B3 類の胎土・色調・調整に最も近い。

(21) 底部

底部は相当量出土しており、113 や 114 のような平底のものは 39 点、118 ～ 120 のような上げ底のものが 50 点、116 や 117 のような高台がめぐるものは 5 点、121 ～ 124 のような圈足がつくものは 41 点確認された。平底のものは縦位のミガキ調整が多い。また器壁が薄いものは平底が多い。高台つきのものは厚い器壁のもの多く、116 のように縦位のミガキ調整をおこなうものと、117 のように粘土を粗雑に巻き上げているものがある。上げ底のものは 118 のように回転ナデを施したり、119 のように横位のミガキを施すものが多い。圈足がつくものは 121 のように斜線が沈線で施されるものがあり、122 のように回転ナデ調整が多くみられる。

(22) 小型土器

125 は碗状の小型土器である。126 は圈足のある小型土器でミガキ調整である。127 は縦位の沈線が施文される豆のような小型土器である。

6. A 類と B 類の分類と土器調整技法

主として二重口縁の有無から A 類と B 類を分離したが、4. で詳述したように土器製作技法でもこの A 類と B 類は対照的に分離される。

まず、広口壺の頸部と胴部の境界の処理方法であるが、A 類では 1cm に満たない短い工具痕がつき、比較的平滑に処理されるのに対し、B 類では 1 ～ 1.5cm の工具痕が深くつき、強く搔き出すことで段が形成されるものが見受けられる。

また、施文と調整の関係では、特に A1b 類では沈線間でもミガキが認められるのに対して、B1 類では沈線間にミガキが施されることはない。このことは、A1b 類と B1 類は同じような文様構成を持っているが、文様帯の幅が B1 類の方が狭くなっていることと関係するものと思われる。

このように B1 類では施文部にナデ調整の痕跡が残っているが、回転を利用した強い工具によるナデ痕が残るものも存在する。このような工具による強いナデ痕は B3 類で特に顕著で、斜格子文や横走魚骨文が施文された部分には必ずこの痕跡が残る。このような点も B3 類が B1 類と同じ B 類に分類される根拠の一つである。また同様の痕跡は B7 類や C 類の一部にもみられ、関連が想定される。以上の検討は器形・文様により分類された A 類と B 類という分類の蓋然性を高めるものと考えられる。

7. 器種組成

器種の組成を知るために、個体識別の可能な口縁部のみの個体数を器種ごとに集計したものが、表 3 である。但し、豆については杯部と脚部の連結部の数値を、甌に関しては足の個体数を括弧 () 内に示した。この表から明らかであるように広口壺が大部分を占めている。罐や鉢の類及び甌があまり見当たらないのが特徴的である。この点では罐や甌が一定数の比率を占める高麗寨や上馬石といった普蘭店市、庄河市及び長海県のような遼東半島東側の遺跡との大きな差異の一つであろう。次章で後述するが、A 類と B 類は時期差であると考えられるが、牧羊城では広口壺の個体数は B 類が若干多いものの、極端な量的差は認められていないため、A 類から B 類の時期にかけてあまねく牧羊城の土地が使用されたと見るべきであろう。

8. 尹家村下層 2 期の土器 (図 5)

牧羊城では極めてわずかであるが尹家村下層 2 期 (中国側の報告では尹家村 2 期) の土器片が出土しているので、以下に報告する。

1 は罐の口縁部である。口唇から若干下がったところに粘土紐を貼り付け、丸棒状工具で斜めに押

し付けて刻目状に施文している。

2は切株状の把手である。尹家村 H11 例で示されるように罐の胴部につくものであろう。牧羊城で出土した尹家村下層 2 期の遺物は他に胴部片があるが、上記遺物も含め焼成が甘く、黄褐色を帯び、胎土に多量の石英など砂粒を混入するのが特徴で、その他の牧羊城 1 類の土器とは完全に区別される。

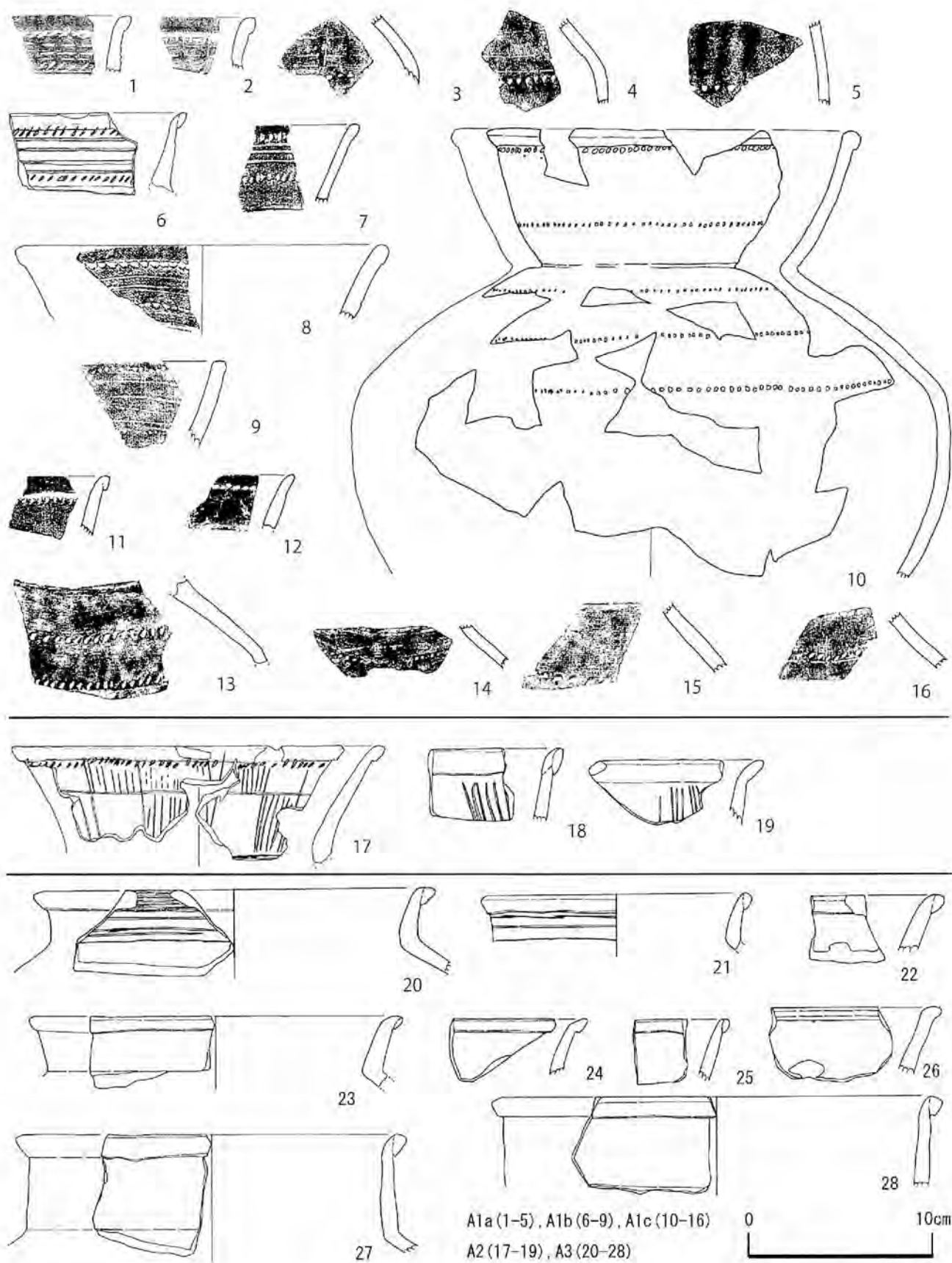


图1 牧羊城1類土器(1)

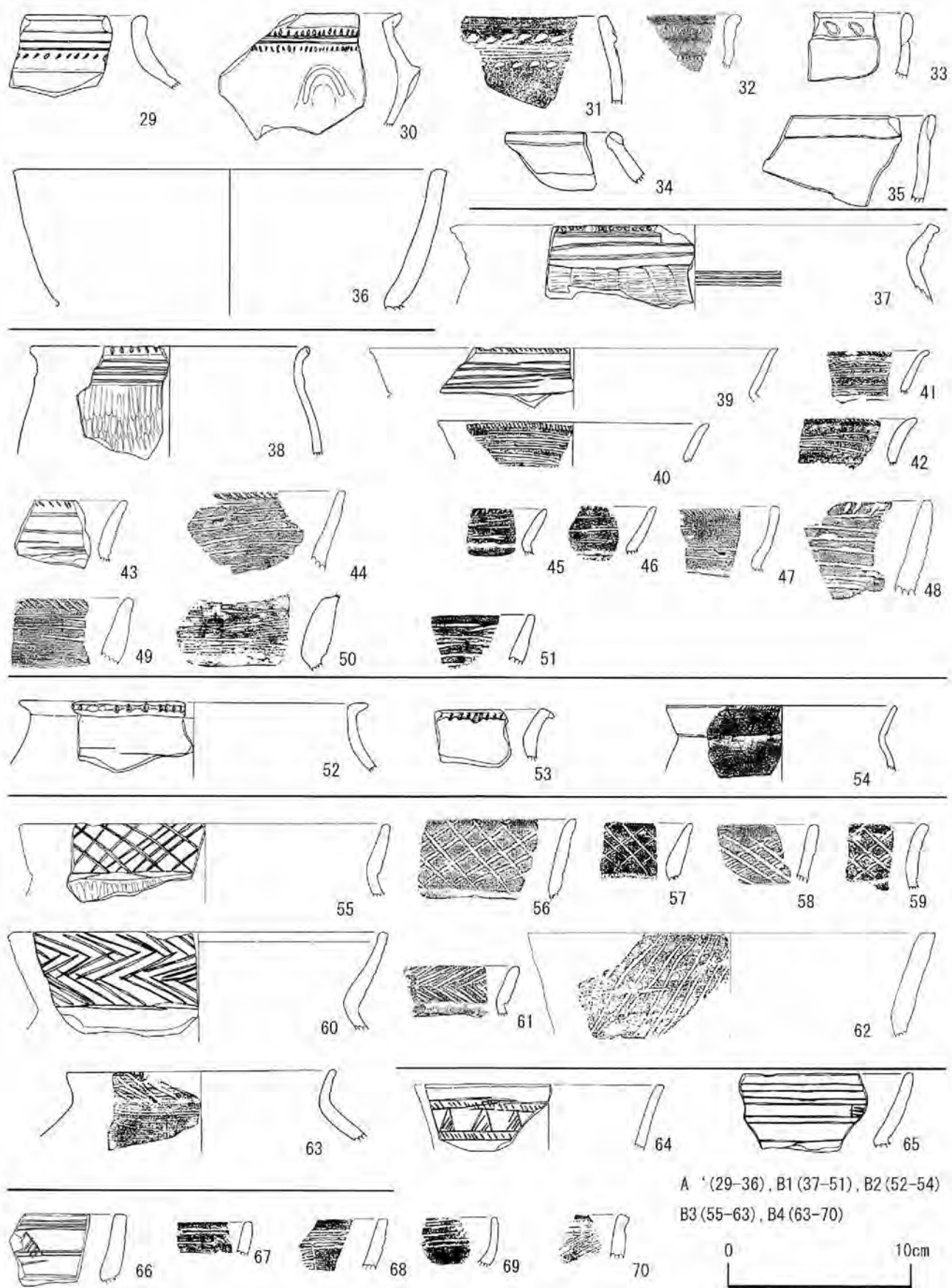


图2 牧羊城1類土器(2)

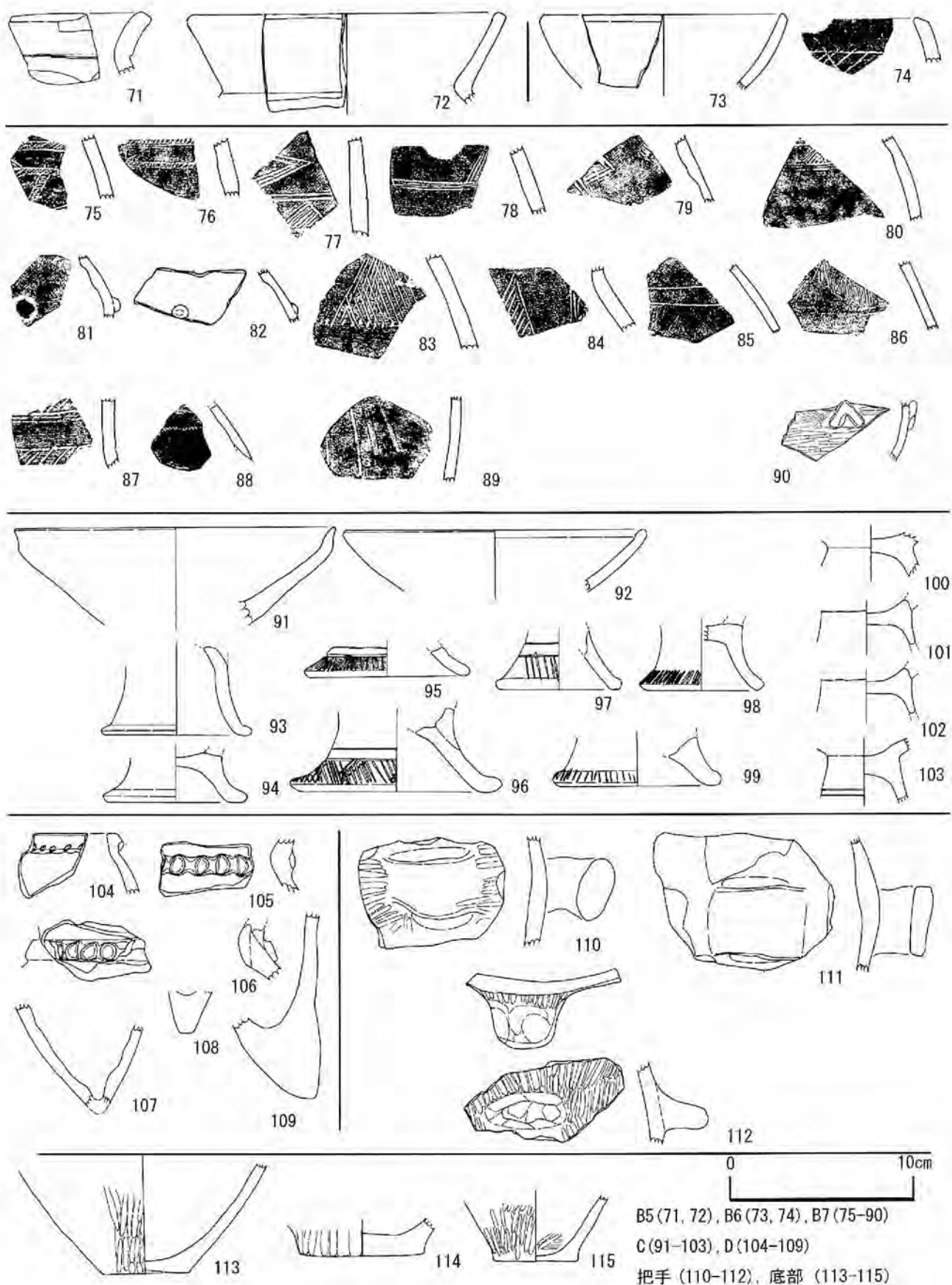


图3 牧羊城1類土器 (3)

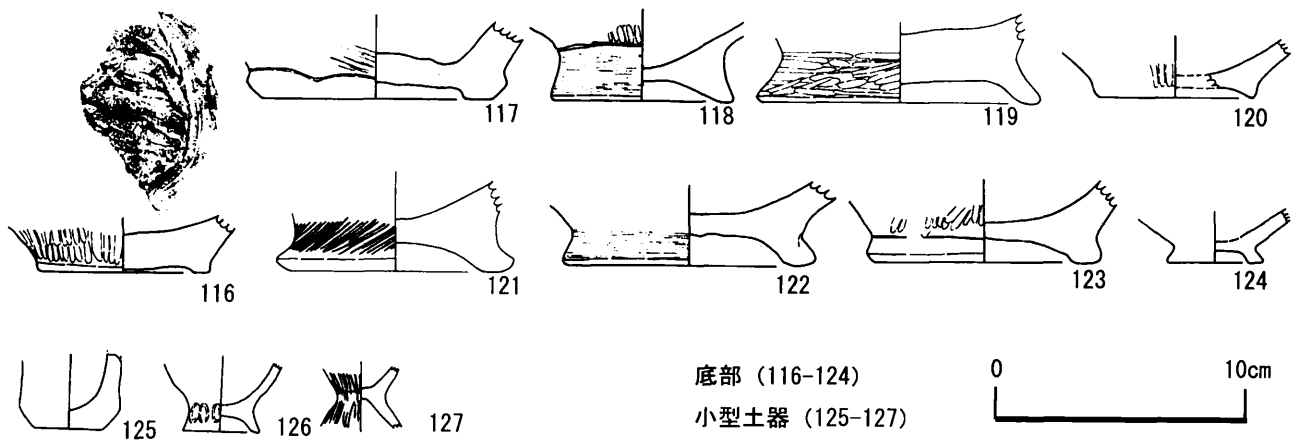


図4 牧羊城1類土器 (4)

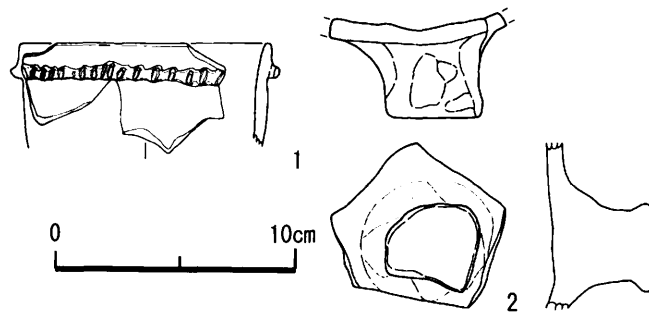


図5 牧羊城出土のそのほかの土器

表 2 1 類土器観察表

図番号	分類	器種	文様	色調	焼成	胎土	調整		原図面・図版
							外器面	内器面	
1	A1a	広口壺二重口縁	点列・平行沈線	暗褐	良好	長石・白雲母	横位ミガキ	横位ミガキ	図版 22・28
2	A1a	広口壺二重口縁	点列・平行沈線	黒褐	良好	長石・白雲母	横位ミガキ	ミガキ	
3	A1a	広口壺屈曲部	点列・平行沈線	暗褐	やや甘	長石・白雲母	ナデ	ミガキ	
4	A1a	広口壺屈曲部	点列・平行沈線	黒褐	良好	長石・白雲母	横位ミガキ	横位ミガキ	
5	A1a	広口壺胴部	点列・平行沈線	暗褐	良好	長石・白雲母	ミガキ	横位ミガキ	
6	A1b	広口壺二重口縁	点列・平行沈線	暗褐	良好	長石・白雲母	横位ミガキ	ミガキ	図版 22・29
7	A1b	広口壺肥厚口縁	点列・平行沈線	暗褐	良好	長石・白雲母	横位ミガキ	横位ミガキ	
8	A1b	広口壺二重口縁	点列・平行沈線	暗褐	良好	長石・白雲母	横位ミガキ	横位ミガキ	
9	A1b	広口壺肥厚口縁	点列・平行沈線	暗褐	良好	長石・白雲母	横位ミガキ	ミガキ	図版 22・17
10	A1c	広口壺	点列	黒褐	良好	白雲母・長石・石英	横位ミガキ	横位ミガキ	小川 1982 図 4-9
11	A1c	広口壺二重口縁	点列	褐	良好	長石・白雲母	横位ミガキ	横位ミガキ	
12	A1c	広口壺口縁部	刺突列	黒褐	良好	長石・白雲母	横位ミガキ	ミガキ	
13	A1c	広口壺肩部	点列	暗褐	良好	長石・白雲母	横位ミガキ	横位ミガキ	
14	A1c	広口壺肩部	点列	暗褐	良好	長石・白雲母	横位ミガキ	横位ミガキ	
15	A1c	広口壺肩部	点列	黒褐	良好	長石・白雲母	横位ミガキ	工具痕	
16	A1c	広口壺胴部	点列	暗赤褐	やや甘	長石・白雲母・石英	ナデ	工具痕	
17	A2	広口壺二重口縁部	点列・四角集線	暗褐	甘	長石・白雲母	ナデ	ナデ	図版 23-12. 小川 1982 図 4-10
18	A2	広口壺二重口縁	縦位沈線	暗褐	良好	長石・白雲母	縦位ミガキ	ミガキ	図版 23 2
19	A2	広口壺口縁	縦位沈線	暗褐	やや甘	長石・黒雲母	縦位ミガキ	ナデ	
20	A3	広口壺二重口縁	平行沈線	暗褐	良好	長石・白雲母	横位ミガキ	横位ミガキ	
21	A3	広口壺二重口縁	平行沈線	暗褐	良好	長石・白雲母	横位ミガキ	横位ミガキ	
22	A3	広口壺二重口縁		暗褐	良好	長石・白雲母	横位ミガキ	ナデ	
23	A3	広口壺二重口縁		暗黄褐	良好	長石・白雲母	横位ミガキ	横位ミガキ	図版 22-3
24	A3	広口壺二重口縁		黒褐	良好	白雲母・長石	横位ミガキ	ナデ	
25	A3	広口壺二重口縁		黒褐	良好	長石・金雲母	横位ミガキ	ナデ	
26	A3	広口壺二重口縁		褐	良好	長石・白雲母	回転ナデ	回転ナデ	
27	A3	広口壺二重口縁		暗褐	良好	石英・長石	横位ミガキ	横位ミガキ	
28	A3	広口壺二重口縁		黒褐	良好	長石・白雲母	横位ミガキ	ナデ	
29	A I	二重口縁	点列・平行沈線	暗褐	良好	長石・白雲母	横位ミガキ	ミガキ	
30	A I	鉢二重口縁	点列・沈線・唇状	暗褐	良好	長石・白雲母	横位ミガキ	ミガキ	
31	A I	鉢二重口縁	点列・沈線	暗褐	やや甘	長石・白雲母	回転ナデ	回転ナデ	図版 22-16
32	A I	鉢二重口縁	点列	暗褐	良好	長石・白雲母	横位ミガキ	ミガキ	
33	A I	罐二重口縁		暗褐	良好	長石・白雲母	横位ミガキ	ナデ	
34	A I	二重口縁		黒褐	良好	長石・白雲母	横位ミガキ	横位ミガキ	
35	A I	罐二重口縁		黒褐	良好	長石・白雲母	横位ミガキ	横位ミガキ	
36	A I	広口壺口縁		暗赤褐	良好	長石・白雲母	横位ミガキ	横位ミガキ	図版 22-2
37	B1a	広口壺口縁	刻目・平行沈線	褐	良好	長石・白雲母	横位ミガキ	工具痕	図版 22 20
38	B1a	広口壺口縁	刻目・平行沈線	黒褐	やや甘	長石・白雲母	縦位ミガキ	ミガキ	
39	B1a	広口壺口縁	刻目・平行沈線	黒褐	良好	長石・白雲母	ナデ	ミガキ	図版 22-19
40	B1a	広口壺口縁	刻目・平行沈線	黒褐	良好	長石・白雲母	ナデ	ミガキ	図版 22-18
41	B1a	広口壺口縁	刻目・平行沈線	黒褐	良好	長石・白雲母	ナデ	ミガキ	
42	B1a	広口壺口縁	刻目・平行沈線	褐	良好	長石・白雲母	ナデ	ミガキ	
43	B1b	広口壺口縁	刻目・沈線	黒褐	良好	長石・白雲母	ナデ	ナデ	
44	B1b	広口壺口縁	刻目・横沈線	黒褐	良好	白雲母	ナデ	横位ミガキ	図版 22-23
45	B1b	広口壺口縁	刻目・沈線	黒褐	良好	長石・白雲母	縦位ミガキ	横位ミガキ	
46	B1b	広口壺口縁	刻目・平行沈線	褐	良好	長石・白雲母	ナデ	ミガキ	
47	B1b	広口壺口縁	短斜沈線・平行沈線	暗褐	良好	長石・白雲母	ナデ	ミガキ	図版 22-22
48	B1b	広口壺口縁	短斜沈線・沈線	褐	やや甘	長石・白雲母	ナデ	横位ミガキ	
49	B1b	広口壺口縁	短斜沈線・沈線	明褐	やや甘	長石・白雲母	ナデ	横位ミガキ	図版 22-21
50	B1b	広口壺口縁	粗雑な沈線	黒褐	良好	長石・白雲母	ナデ	ナデ	
51	B1b	広口壺口縁	沈線	黒褐	良好	長石・白雲母	回転ナデ	ナデ	
52	B2	広口壺口縁	刻目	黒褐	良好	長石・金雲母	回転ナデ	横位ミガキ	図版 22 10
53	B2	広口壺口縁	刻目	暗褐	良好	長石・白雲母	横位ミガキ	横位ミガキ	
54	B2	広口壺口縁	口唇刻目	暗褐	良好	長石・白雲母	横位ミガキ	ミガキ	図版 22 9
55	B3	広口壺口縁	斜格子	褐	やや甘	長石・白雲母	回転ナデ	横位ミガキ	図版 23 4

56	B3	広口壺口縁	斜格子	暗灰	良好	長石・石英	横位ミガキ	横位ミガキ	図版 23 - 5
57	B3	広口壺口縁	斜格子	暗褐	良好	長石・白雲母	ナデ	横位ミガキ	
58	B3	広口壺口縁	斜格子	褐	良好	長石・白雲母	回転ナデ	横位ミガキ	図版 23 - 3
59	B3	広口壺口縁	斜格子	黒褐	良好	長石・白雲母	回転ナデ	横位ミガキ	
60	B3	広口壺口縁	横走魚骨文	褐	良好	白雲母	工具痕	横位ミガキ	
61	B3	広口壺口縁	横走魚骨文	暗褐	やや甘	長石・石英	横位ミガキ	横位ミガキ	図版 23 - 7
62	B3	広口壺口縁	斜線	黒褐	甘	長石・金雲母	ナデ	ナデ	
63	B3	広口壺口縁	斜格子	黒褐	良好	長石・白雲母	工具痕	ナデ	
64	B4	広口壺口縁	斜線充填平行沈線・三角集線	暗褐	やや甘		横位ミガキ	横位ミガキ	図版 23 - 11
65	B4	広口壺口縁	平行沈線・梯子形文	暗赤褐	良好	長石	ミガキ	ミガキ	
66	B4	広口壺口縁	平行沈線・三角集線文	暗灰褐	良好	長石・白雲母	横位ミガキ	横位ミガキ	図版 23 - 9
67	B4	広口壺口縁	平行沈線	暗褐	良好	長石・白雲母	ナデ	ミガキ	
68	B4	広口壺口縁	平行沈線・梯子形文	褐	良好	長石・白雲母	横位ミガキ	横位ミガキ	
69	B4	広口壺口縁	平行沈線・三角集線文	暗褐	良好	長石・白雲母	横位ミガキ	横位ミガキ	
70	B4	広口壺口縁	沈線	黒褐	良好	長石・白雲母	ナデ	ナデ	
71	B5	罐二重口縁		暗灰褐	良好	長石	回転ナデ	横位ミガキ	
72	B5	広口壺口縁		黒	良好	長石・白雲母	回転ナデ	横位ミガキ	
73	B6	碗		黒褐	やや甘	長石・白雲母	横位ミガキ	横位ミガキ	
74	B6	口縁部	沈線・斜線	暗灰	良好	長石・白雲母	回転ナデ	回転ナデ	
75	B7	広口壺胴部	斜線充填平行沈線・三角集線	灰褐	良好	長石・白雲母	横位ミガキ	ナデ	図版 23 - 25
76	B7	広口壺胴部	斜線充填平行沈線・梯子形文	暗褐	良好	長石・白雲母	横位ミガキ	ナデ	
77	B7	広口壺胴部	平行沈線・Z字文・三角集線	灰	良好	長石・白雲母	横位ミガキ	ミガキ	図版 23 - 24
78	B7	広口壺胴部	平行沈線・三角集線	灰	良好	長石・白雲母	横位ミガキ	ナデ	図版 23 - 18
79	B7	広口壺胴部	Z字文・斜線	暗褐	良好	長石・白雲母	横位ミガキ	ナデ	図版 23 - 22
80	B7	広口壺胴部	平行沈線・三角集線	黒褐	良好	長石・白雲母	横位ミガキ	ナデ	
81	B7	広口壺胴部	斜線充填平行沈線・三角集線・浮文	黒褐	良好	長石・白雲母	横位ミガキ	ナデ	図版 23 - 21
82	B7	広口壺肩部	浮文	黒褐	良好	長石・白雲母	横位ミガキ	工具痕	
83	B7	広口壺胴部	三角集線	暗灰	良好	長石・白雲母	縦横ミガキ	ミガキ	図版 23 - 27
84	B7	広口壺肩部	三角集線	黒褐	やや甘	長石・白雲母	縦位ミガキ	ナデ	
85	B7	広口壺胴部	斜線充填平行沈線	褐	やや甘	長石・白雲母	横位ミガキ	ナデ	
86	B7	広口壺胴部	斜線充填平行沈線	暗褐	良好	長石・白雲母	横位ミガキ	ミガキ	図版 23 - 26
87	B7	広口壺胴部	斜線充填平行沈線	褐	やや甘	長石・金雲母	横位ミガキ	ミガキ	図版 23 - 17
88	B7	広口壺胴部	斜線充填平行沈線	黒褐	良好	長石・白雲母	横位ミガキ	横位ミガキ	
89	B7	広口壺胴部	斜線	暗褐	やや甘	長石・白雲母	ミガキ	ミガキ	
90	B7	広口壺胴部	唇状貼付文	黒褐	やや甘	長石・白雲母	横位ミガキ	ナデ	小川 1982 図 4-12
91	C	豆口縁		暗黒褐	やや甘	長石・白雲母	ナデ	ナデ	
92	C	豆口縁		黒褐	良好	長石	横位ミガキ	横位ミガキ	
93	C	脚部		暗褐	甘	長石・石英	ナデ	ナデ	図版 24 - 21
94	C	脚部		暗赤褐	やや甘	長石・石英	回転ナデ	ナデ	
95	C	脚部	縦沈線	黒褐	良好	長石・石英	ナデ	回転ナデ	
96	C	脚部	三角集線	暗褐	良好	長石・石英	横位ミガキ	回転ナデ	
97	C	脚部	縦沈線	黒褐	良好	長石・石英	横位ミガキ	横位ミガキ	
98	C	脚部	縦沈線	黒褐	良好	長石・石英	ナデ	ナデ	
99	C	脚部	縦沈線	暗灰	良好	長石・石英	横位ミガキ	横位ミガキ	
100	C	豆		黒褐	良好	金雲母・長石	縦位ミガキ	ナデ	
101	C	豆		暗褐	良好	白雲母・長石	縦位ミガキ	ナデ	
102	C	豆		暗褐	良好	長石・石英・白雲母	縦位ミガキ	ミガキ	
103	C	豆		黒	良好	長石	ミガキ	横位ミガキ	
104	甌	甌口縁部	刻目	黒褐	良好	長石・白雲母	横位ミガキ	ナデ	
105	甌	甌腰部	つまみ出し	黒褐	良好	長石・白雲母	ナデ	ナデ	
106	甌	甌腰部	刻目突帯	黒褐	良好	長石・白雲母	ナデ	ナデ	
107	甌	甌足		黒褐	良好	長石	縦位ミガキ		図版 24 - 15
108	甌	甌足		明灰	良好	長石・石英	縦位ミガキ		図版 24 - 14

109	甌	甌足		赤褐	良好	長石	縦位ミガキ	横ナデ	図版 24 - 11
110	把手	橋状把手		黒褐	良好	白雲母・長石	ミガキ	ナデ	
111	把手	橋状把手		黒褐	やや甘	長石・白雲母	ミガキ	縦位の工具痕	
112	把手	板状把手		黒褐	やや甘	白雲母・長石	ミガキ	ナデ	
113	底部	底部		黒褐	良好	長石・石英	縦位ミガキ	横位ミガキ	
114	底部	底部		赤	甘	長石・石英	縦位ミガキ	指頭痕	
115	底部	底部		黒褐	良好	長石・白雲母	縦位ミガキ	横位ミガキ	
116	底部	底部(高台)		暗赤褐	やや甘	長石	縦位ミガキ	ナデ	図版 25 - 20
117	底部	底部(高台)		黒	良好	長石	ナデ	粗いナデ	
118	底部	底部(圈足)		黒褐	やや甘	長石	縦位ミガキ	横位ミガキ	
119	底部	底部(圈足)		暗赤褐	やや甘	長石	横位ミガキ	ナデ	図版 25 - 24
120	底部	底部(上げ底)		暗赤褐	甘	長石	指頭痕	ナデ	
121	底部	底部(圈足)	斜線	灰褐	良好	長石・石英	回転ナデ	ナデ	図版 24 - 25
122	底部	底部(圈足)		黒褐	良好	長石・石英	回転ナデ	横位ミガキ	
123	底部	底部(圈足)		黒褐	やや甘	長石・石英	横位ミガキ	ナデ	
124	底部	底部(圈足)		暗褐	やや甘	長石・白雲母	ナデ	ナデ	
125	小型土器	小型土器		黒褐	やや甘	長石	ナデ	ナデ	
126	小型土器	小型土器		暗灰	良好	長石・石英	ナデ	ナデ	
127	こ	小型土器	縦沈線	赤褐	甘	長石・石英	ナデ	ナデ	図版 24 - 16

表 3 1 類土器の器種構成

広口壺												碗・鉢		豆	甌	小型土器
A1a	A1b	A1c	A2	A3	其他	B1a	B1b	B2	B3	B4	B5	A I	B6			
5	4	7	3	9	1	6	9	3	9	7	3	7	3	5(4)	2(3)	4
29						38						10				
67												10				

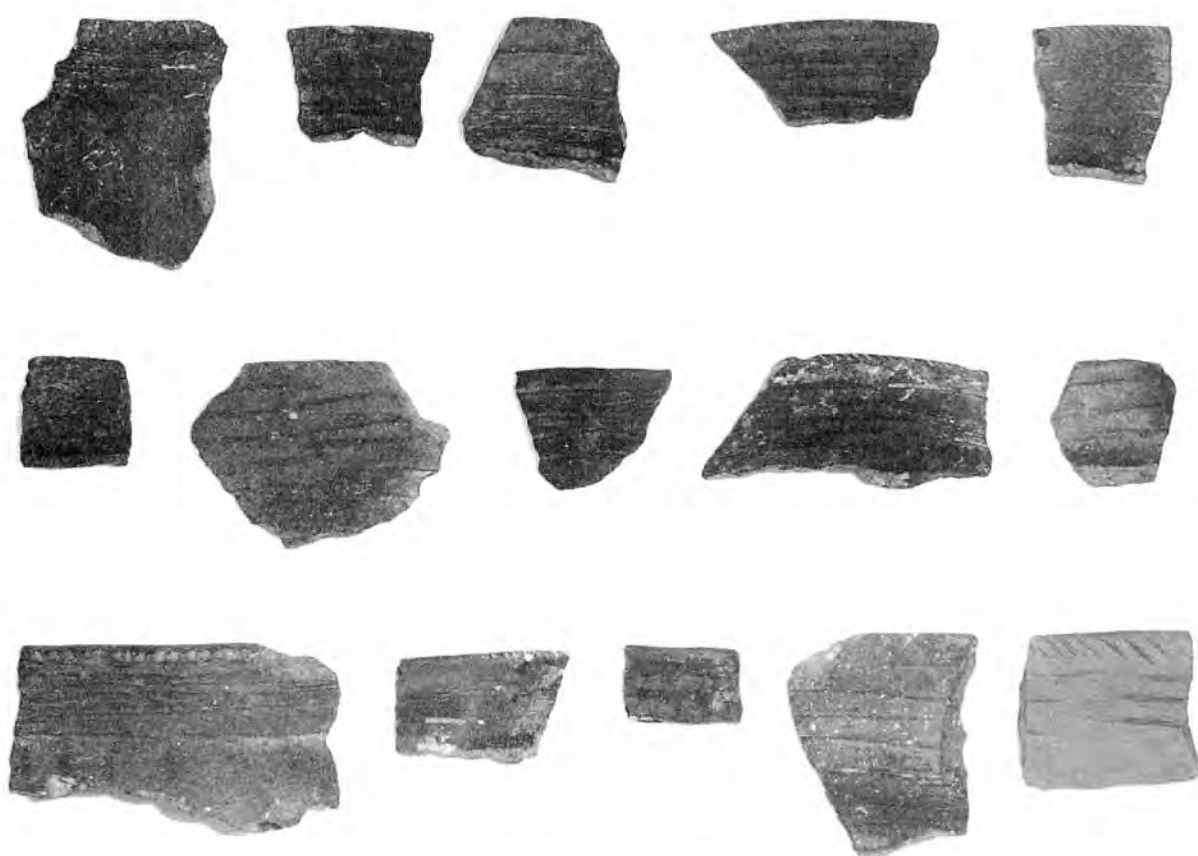
*本章は大貫、古澤の協議の上、大貫が1.、2.、3. を、4. 以下は古澤が執筆した。



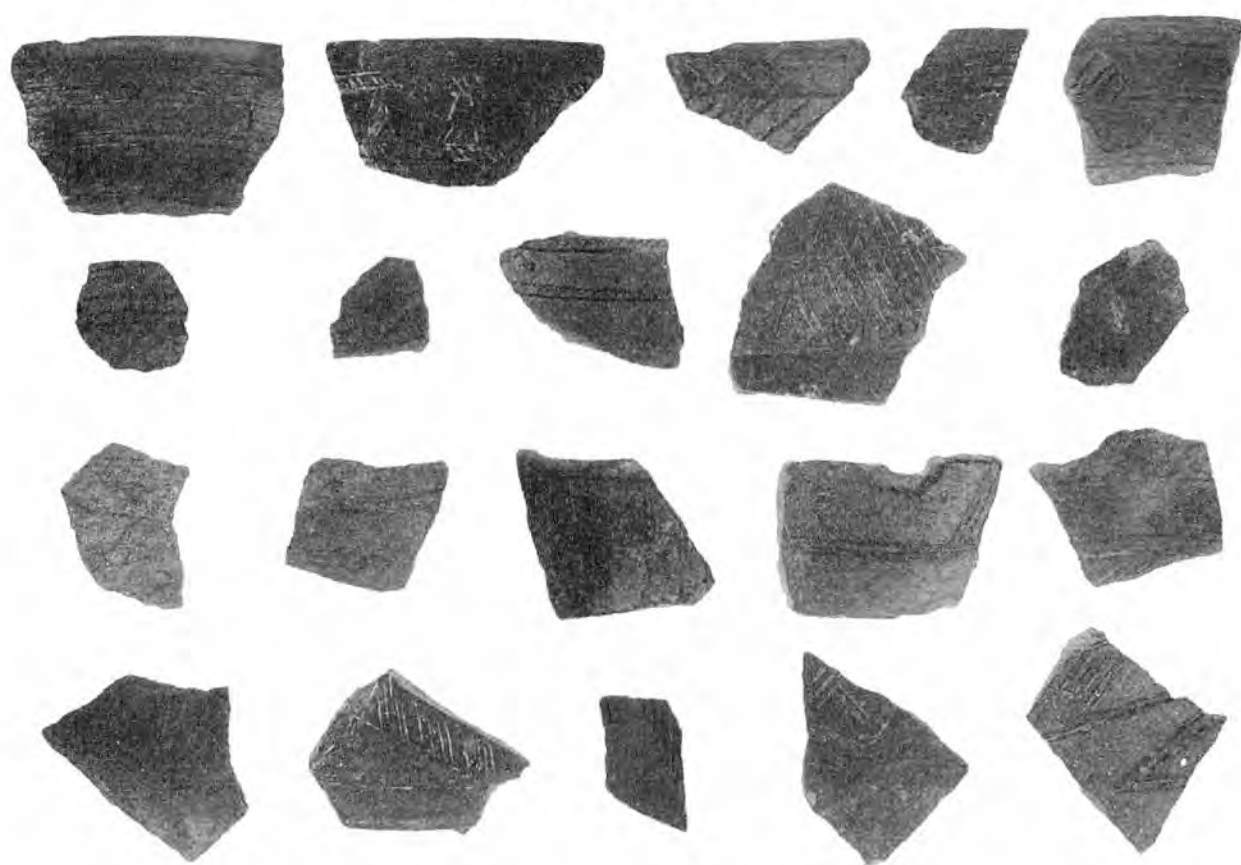
写真図版 1 1類土器 (1)



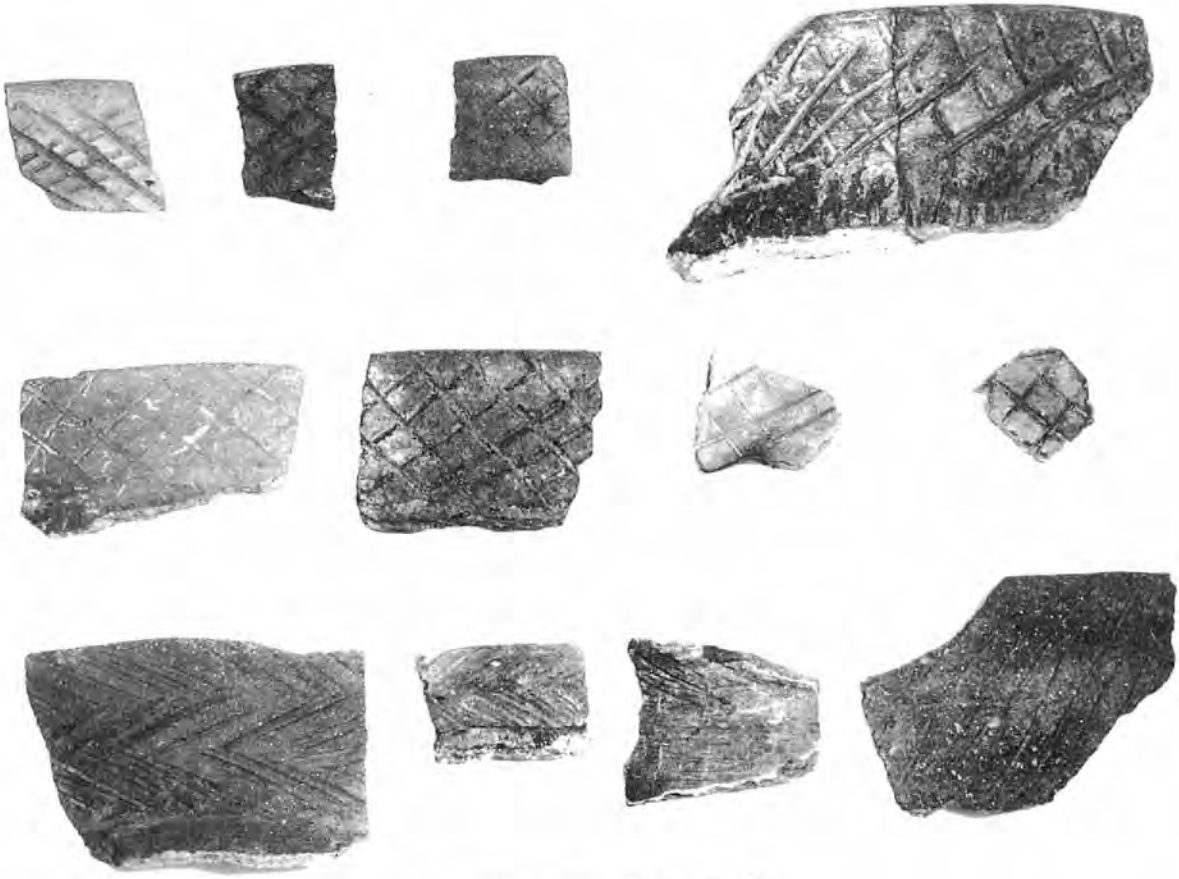
写真図版 2 1類土器 (2)



写真図版3 1類土器 (3)



写真図版4 1類土器 (4)



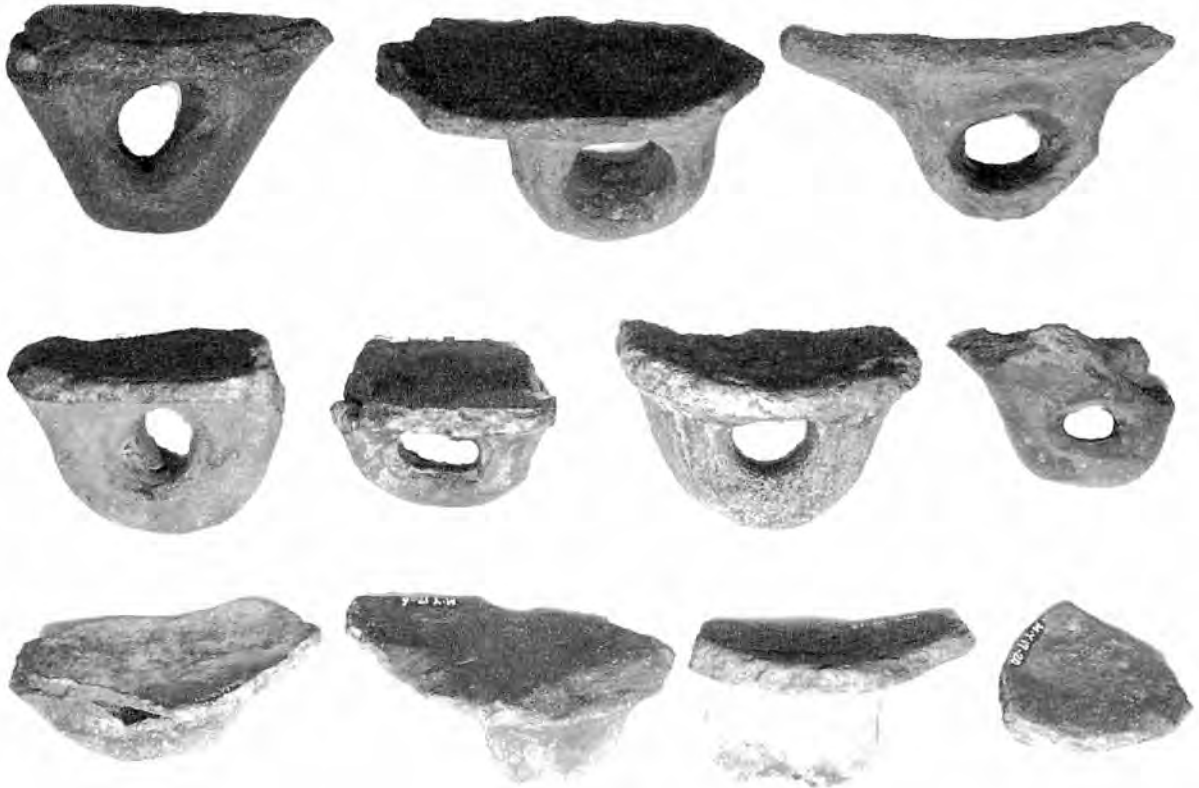
写真図版 5 1類土器 (5)



写真図版 6 1類土器 (6)



写真図版 7 1類土器 (7-1)



写真図版 8 1類土器 (7-2)



写真図版9 1類土器(8)



写真図版10 1類土器(9)



写真図版 11 1類土器 (10)



写真図版 12 1類土器 (11)

3 - 2. 牧羊城 1 類土器を考える枠組み

大貫 静夫

1. はじめに

最近の AMS 年代測定による弥生開始年代についての問題提起はそれまでの朝鮮半島、中国東北地方の研究にも大きな見直しを迫るものであった。とりわけ、中国中原地域と朝鮮半島・日本列島をつなぐ中間地域として重要な位置を占めている遼東の紀元前一千年期は大きな見直しを迫られることになった（大貫 2003a, b）が、現在までは、青銅短剣の年代の見直しが中心であった（宮本 2004、岡内 2004 など参照）。しかし、それは当然ながら土器編年あるいは土器の年代観と連動することになる。

中国では、1981 年に遼東半島先史土器の編年の枠組みの基礎となる長山列島の調査報告（遼寧省博物館他 1981）が出た。この中国の 1981 年報告に触発され、筆者は 1982 年に、本研究室所蔵資料を再整理しつつ、遼東半島の先史土器についてまとめたことがある（大貫 1982）。その主たる目的は、それまで我が国ではほとんど評価されず無視されてきた、遼東半島における 60 年代の中朝共同調査の成果を積極的に評価することから、極東先史土器の動態を再構築する基礎としようとしたことにあった。

しかしながら、筆者の前稿では、双砵子 3 期文化段階までを主に扱い、紀元前一千年期の遼寧式銅剣を伴う段階についてはほとんど触れることなく終わっている。それは、土器編年と密接な関係をもつ、当時我が国で主流であった遼寧式銅剣の年代観を前提にした場合、土器編年がうまく説明できなかったからである。なぜ触れられなかったかは、最近の弥生時代年代論争と密接な関係があったのである。宮本一夫（1985）はその後、筆者の前稿以後に報告された多くの資料を追加して、修正を加えながら、より広域に、そして筆者の言及できなかった前一千年期にまで範囲を広げた土器編年を提示した。その前一千年紀の土器編年は遼寧式銅剣の当時主流であった年代観と整合的であり、朝鮮半島、日本列島に至る前一千年期の枠組みを支えるものであった。その後の 1991 年に、紀元前一千年紀の部分について、未公開資料である上馬石貝塚の調査内容を紹介（宮本 1991）しながら、より詳細に土器編年を論じた。もともと 1985 年編年自体が上馬石貝塚の分析によるところが大きいため基本的に変わっていない。

しかしながら、最近の弥生時代年代の見直しに関連して、宮本（2004）自身や筆者（大貫 2004）などが指摘するように、従来主流であった遼東地域における遼寧式銅剣の年代の見直しが必要となった現在、当然ながら、それと連動して、あるいはそれを根拠の一部として組み立てられていた上馬石貝塚土器編年も改訂されねばならないのである。ただし、相対年代はそのままに全体に年代を古くすればよいというのではなく、相対年代自体に問題があったというのが筆者の理解である。

その際に、注目すべき仕事は、我が国や韓国ではあまり注目されてこなかったが、吉林大学出身の陳光（1989）、王巍（1989、2004）、徐光輝（1990、1996、1997）による土器編年である。遼東最古段階の遼寧式銅剣を伴う双房 M6 の年代は、陳光は殷末遅くとも西周前期とし、当初は西周後期の可能性も考慮していた徐（1996）は遅くとも西周中期、王（2004）も西周前中期として、足並みを揃えつつある。

遼東半島では、遼寧式銅剣出現以前の紀元前 2 千年紀後半頃に双砵子 3 期文化があることは誰し

も認めるところである。宮本によって組み立てられた遼東の紀元前一千年期の土器編年と王、徐の土器編年のもっとも大きな違いは、その双砬子3期文化の土器と遼寧式銅剣を伴う土器の間に、まだ別の土器型式が介在する大きな時間的な空隙があるか否かが大きな相違点であり、その結果として遼東半島における遼寧式銅剣の出現時期についてまったく異なる理解が生じた。

その年代観の分岐は、遼東では最古段階の遼寧式銅剣と誰しもが考えている双房 M6 (図 16) の年代上の位置づけにあった。その双房 M6 には土器が伴っている。極論すれば、宮本は傾斜編年をとる靳楓毅 (1982、1983) による双房の銅剣の年代観から双房の土器の年代を決めた。他方、王、徐は双房の土器の年代から双房の銅剣の年代を決めた。したがって、問題とすべきは、宮本の土器年代観の根拠になっている銅剣の年代観の根拠であり、王、徐の銅剣年代観の根拠になっている土器についての年代観の根拠である。

遼東の遼寧式銅剣を新しく見る立場からは、当然ながら、双砬子3期文化と双房 M6 の間には相当長い時間的な空隙が前提となる。それを土器編年という立場から説明したのが宮本の上馬石編年であった。他方の、吉林大学の林濤あるいはその後継者は遼東での遼寧式銅剣の出現を西周後期とされた遼西最古の遼寧式銅剣よりも古く考えることから、双砬子3期文化との間に大きな空隙を設定する必要はなかったし、空隙があるはずはなかった。つまり、単なる編年観、年代観の相違ではなく、背後に想定する歴史動態の理解がまったく異なっていたのである。本書の結論を多少ここで述べるならば、靳楓毅による遼東の青銅短剣の扱いに無理があることはすでに指摘した (大貫 2004) ところであり、その年代観に依拠すべきではない。双砬子3期文化と遼寧式銅剣を伴う土器文化の間には大きな空隙はなく、従ってその年代は古くなる。かつその終わりも繰り上がることになる。戦国時代前3世紀に中原系の勢力は確実に遼東半島にもおよんでいたものであり、そのような時代に楼上墓のような積石塚が築かれたことはありえない。楼上墓出土の土器はそれほど新しくないというのが、本稿の土器編年の結論でもある。

2. 牧羊城 1 類土器を考える枠組み

前稿 1982 年の時点では、牧羊城 1 類土器は遼東半島西部の基本的な変遷の枠組みである、双砬子3期文化に属する羊頭窪と、それに後続する上馬石上層文化 (中社考古研 1996 では「尹家村 1 期文化」と呼ぶ) あるいは楼上墓の間のどこかに位置することは分かっていたが、当時はこの兩者をつなぐ資料がなかった。また、60 年代に中朝共同で調査された尹家村遺跡や双砬子遺跡、崗上墓などの重要資料の報告は北朝鮮側から単独で 1966 年に出ていたが、我が国では入手困難であった。その閲覧が契機になって、1982 年の筆者の前稿がある。我が国では、筆者の所属する東北アジア考古学研究会がその日本語訳版を 1986 年に『崗上・楼上』と題して刊行したことでだいぶ研究環境は改善されたはずである。ただし、詳しい研究をするには写真図版に問題があり、その解決は 1996 年の中国側からの報告書の刊行まで待たなければならなかった。現在、この共同調査の報告書には北朝鮮版 (1966) およびその日本語訳版 (1986) と中国版 (1996) があることになる。北朝鮮版は写真図版が不鮮明でほとんど見えないため、日本語版では削除している。この点で、中国版の写真図版は鮮明である。中国版はその後の研究成果を取り入れて考察を加えている点でも優れている。ただし、だからといって、中国版だけを見ればよいとは言えない。調査の事実記載に於いては、北朝鮮版と一部くいちがいがあり、北朝鮮版だけにしかない記載もある。中国版を基本としながら、北朝鮮版で適宜確認するというのが正しい読み方である。以下では、中国版がその資料提示の点で優れていることから、煩雑になることもあり引用文献として一つだけあげるが、適宜北朝鮮版およびその日本語訳版も参照してい

ることを注意しておく。

その後、牧羊城のすぐ近くで、双砬子3期文化の于家村集落遺跡と砬頭墓地が調査され、報告された。大連湾に位置する大嘴子遺跡の調査、報告もあった（遼寧省文物考古研究所他1996、大連詩文市文物考古研究所編2000）。このような資料の増加に伴い、双砬子3期文化の土器についての研究は多くなっている。

双砬子3期文化の資料が増えるに従い、たんに編年を細かくするだけでは足りず、地域差というものを捉えるという視点が必要となっている。

また、遼東における遼寧式銅剣を伴う最古段階の双房6号墓が見つかり、それには北朝鮮で美松里型土器と呼ばれる土器に類似する土器を伴っていた。上馬石上層文化と双砬子3期文化の間を考える重要な資料であったが、墓であることや地域がやや異なるなど、その間の変遷を明らかにするにはほど遠い。

これらの資料によって、双砬子3期文化関連の資料は飛躍的に増えたが、上馬石上層文化段階の資料は青銅短剣墓が単発的に見つかっているが、集落遺跡の資料が増えることはなかった。

双砬子1期から始まる集落遺跡は間の双砬子2期を欠く場合やあっても貧弱な資料であるが、その上にはいずれも双砬子3期がある。その双砬子3期に急激に遺跡が増加し、かつその後続かない現象が起きている。反対に、遼寧式銅剣に関わる尹家村遺跡や上馬石貝塚では双砬子3期以後の段階から遺跡形成が始まる。これら、両者が重なる、つまり、両段階にまたがって集落が形成される遺跡ははっきりしない。双砬子遺跡や崗上墓では、双砬子3期の集落跡に、後続する遼寧式銅剣段階の墓地が形成されている。

その後の遼寧式銅剣に関わる集落遺跡は、たとえ集落数が実際に減ったにしても、墓地があり無人の地であったはずはないから、集落立地に大きな変化が生じたのであろう。それまでは、膠東半島とのつながりの強い双砬子2期から3期に在地化が進むが、その次の大きな画期は遼寧式銅剣に代表されるように、一転して遼西との関係を強める段階でもあった。遼東半島の歴史の中で大きな転換点がこの双砬子3期から上馬石上層の間に起きているのであり、きわめて重要な段階である。それを明らかにする上で、尹家村資料とともに、牧羊城1類土器は重要である。

長山列島で戦前に調査された上馬石貝塚の資料については、その参加者の一人であった澄田(1986, 88, 89)による簡報が出て、宮本(1991)によって詳細に報告され、双砬子3期文化以後、上馬石上層段階の遼東半島中部地域の様相が明らかになった。これもまた重要な研究である。この研究によって、双砬子3期文化から上馬石上層文化までの、遼東半島における遼寧式銅剣出現前後の変遷に関する理解が増すとともに、相互の差異をすべて時期差に置き換えられるほど単純ではなく、かなり地域差をも考慮する必要があることを知ることになった。

双砬子3期文化時代の地域性がその次の上馬石上層時代の地域性の背景となっているであろうことが予想される。

小珠山上層文化の老鉄山、四平山積石塚以来の大連周辺の積石塚の伝統は、遼寧式銅剣の時代の崗上、楼上墓に引き継がれるが、より東方の双房や上馬石の銅剣墓には積石塚はない。

筆者(大貫1982)はかつての論考中で、牧羊城1類土器には、中国1981年報告が指摘するように羊頭窪、双砬子3期と接続的な古いもの(本稿でのA類)とともに、楼上墓やそれと同時期とされた尹家村下層1期と同時期の新しい様相(同B類の大半)を含むとした。しかしながら、より詳細に述べることはなかった。その理由の一つに、当時は楼上墓の年代について、紀元前7-5世紀と古くする中朝共同研究の見解と、明刀銭の伴出を積極的に認め、戦国後期あるいは紀元前3世紀

とする中国、日本の遼寧式銅劍研究者の大方の見方に大きく分かれていたことがある（大貫 2004 参照）。

前者の説を採れば、牧羊城 1 類土器の時間幅は比較的短く、全体に古くなる。陳光や徐光輝の土器の年代観はこちらに近い。後者の説では、終末は戦国後期に下り、きわめて長い時間幅があるという見方に導かれることになる。後者の土器年代観を代表するのが宮本一夫の土器編年であった。ただし、前者と後者の間に、年代観の開きは大きくとも、相対的な順序は大きく変わることはない。にもかかわらず、なぜ違いが出たのかは以下に述べる。

結果論として現在述べるならば、土器の組列的な見方からはそれほど長時間にわたるものとは思えず、それを信じて、前者の説を採り、楼上墓の年代はそれほど新しくはならないとすべきであった。しかしながら、それによって遼寧式銅劍の年代の改訂を迫るほどの自信は当時の筆者にはなかった。筆者が前稿を発表した当時は、于家村集落、砦頭墓地や遼東最古段階の遼寧式銅劍とともに土器を伴った双房 M6 などが未報告で、双砦子 3 期と尹家村下層 1 期の間の変遷についての手がかりが少なかつたこともある。前稿と同時かその直後にこれら重要な資料が出揃ったため、ほんの数年の違いではあるが、それらを前提にして書かれた諸氏の論文と比べると見劣りすることは否めない。

その後、陳光(1989)が牧羊城 1 類土器について、少なくとも三時期に分かれると述べたことがある。陳光が『牧羊城』からその存在をどのように読みとったのかは分からないが、三時期に分けたのは、尹家村下層 2 期（＝ 1 号石墓）段階が牧羊城 1 類にあるとしたためである。しかしながら、尹家村下層 2 期と見られる土器がごく僅かにあることを最近の再整理で筆者自身知ることになったが、量的にはわずかであり、『牧羊城』では牧羊城 1 類土器と尹家村官屯子 1 号石墓の土器は別のものとしていた。したがって、陳光も牧羊城 1 類土器を羊頭窪類型の段階つまり双砦子 3 期文化と、尹家村下層 1 期や崗上墓の土器に類似する上馬石上層文化段階の大きく二段階に分けたことになり、筆者の前稿の理解と大差ないことになる。また、陳光が楼上墓より崗上墓との類似を指摘しているのは、口唇状把手に着目したものであろう。まずは、大枠として、この前者を 1 類土器の古段階、後者を 1 類土器の新段階としておく。次節では、まず牧羊城 1 類土器古段階関連資料をめぐって双砦子 3 期文化の土器の検討し、次いで、1 類土器新段階の関連資料をめぐって上馬石上層文化の土器を検討する。上述したように、遺跡形成が不連続のため、段階毎に別々に取り上げても大きな支障は出ないので、そのようにする。そして、最後にそれらを基礎に、牧羊城 1 類土器の位置づけについて触れることにする。

*なお、次節以後も参考文献のほとんどが重複するので、章の最後にまとめることにする。

3 - 3. 双砬子 3 期文化の土器編年

大貫 静夫

1. はじめに

北朝鮮版の 60 年代の中朝共同調査報告書で、双砬子 3 期文化が設定され、その後の北朝鮮の研究論文あるいは書にしばしば登場するようになった。しかしながら、しばらくの間北朝鮮以外では見ることの難しかった調査報告書であり、理解は進まなかった。当時は、双砬子 3 期文化の報告書といえば、戦前に東亜考古学会が調査、報告した羊頭窪遺跡（水野編 1943）の資料しかなかった。そのため、たとえば、陳光が 1989 年に発表した論文では、「羊頭窪類型」と呼ばれた。筆者（大貫 1992）の前稿も、当時検討しえた資料は双砬子、羊頭窪のみの、資料がきわめて制限された段階のものであった。この頃から急速に資料の蓄積が進む。牧羊城のすぐ近くで、双砬子 3 期文化の尹家村集落遺跡（旅順博物館ほか 1981）と砬頭墓地（旅順博物館ほか 1983）が調査され、報告された。

中国側では、陳光（1989）、王巍（1989、2004）、徐光輝（1990、1996、1997）による土器編年である。我が国では、宮本（1985）、千葉（1988）の研究がある。

その後、大連湾に位置する大嘴子遺跡の調査、報告があった（遼寧省文物考古研究所他 1996、大連市文物考古研究所編 2000）。とくに、後者の報告は発掘面積も広く、出土遺物の多くを遺構単位で報告しており、豊富な資料を提供した。

大嘴子遺跡の資料は双砬子遺跡に次ぐ、双砬子 3 期文化の良好な資料であり、双砬子 3 期文化の土器編年についての、華玉冰・陳国慶（1996）、張翠敏（2004、2006）の論文が出ている。

劉俊勇、王玖（1994）によれば、大連市旅順口区と甘井子区内では双砬子 3 期の遺跡が 21 カ所見つかっているが、その中双砬子 1 期、2 期と連続して重複する遺跡は 4 カ所で、双砬子 1 期と重複し、間の双砬子 2 期を欠く遺跡は 3 カ所、双砬子 2 期と重複する遺跡が 1 カ所である。双砬子 1 期から始まる集落遺跡は間の双砬子 2 期を欠く場合やあっても貧弱な資料であるが、その上にはいずれも双砬子 3 期の文化層がある。その双砬子 3 期に急激に遺跡が増加し、かつその後に続かない現象が起きている。反対に、遼寧式銅剣に関わる尹家村遺跡や上馬石貝塚では双砬子 3 期以後の段階から集落形成が始まる。これら、両者が重なる、つまり、両段階にまたがって集落が形成される遺跡ははっきりしない。双砬子遺跡や崗上墓では、双砬子 3 期の集落跡に、後続する遼寧式銅剣段階の墓地が形成されている。

その後の遼寧式銅剣に関わる集落遺跡は、たとえ集落数が実際に減ったにしても、墓地があり無人の地であったはずはないから、集落立地に大きな変化が生じたのであろう。それまでは、膠東半島とのつながりの強い双砬子 2 期から 3 期に在地化が進むが、その次の大きな画期は遼寧式銅剣に代表されるように、一転して遼西との関係を強める段階でもあった。遼東半島の歴史の中での大きな転換点がこの双砬子 3 期から上馬石上層文化の間に起きているのであり、きわめて重要な段階である。それを明らかにする上で、尹家村資料とともに、牧羊城 1 類土器は重要である。

双砬子 3 期文化の遺跡は山の斜面に多く見られ、上馬石上層文化以後は平地に進出するようにも見えるが、尹家村 1 期の集落はほとんど知られていないので確かではない。

2. 牧羊城周辺の遺跡

1) 羊頭窪貝塚

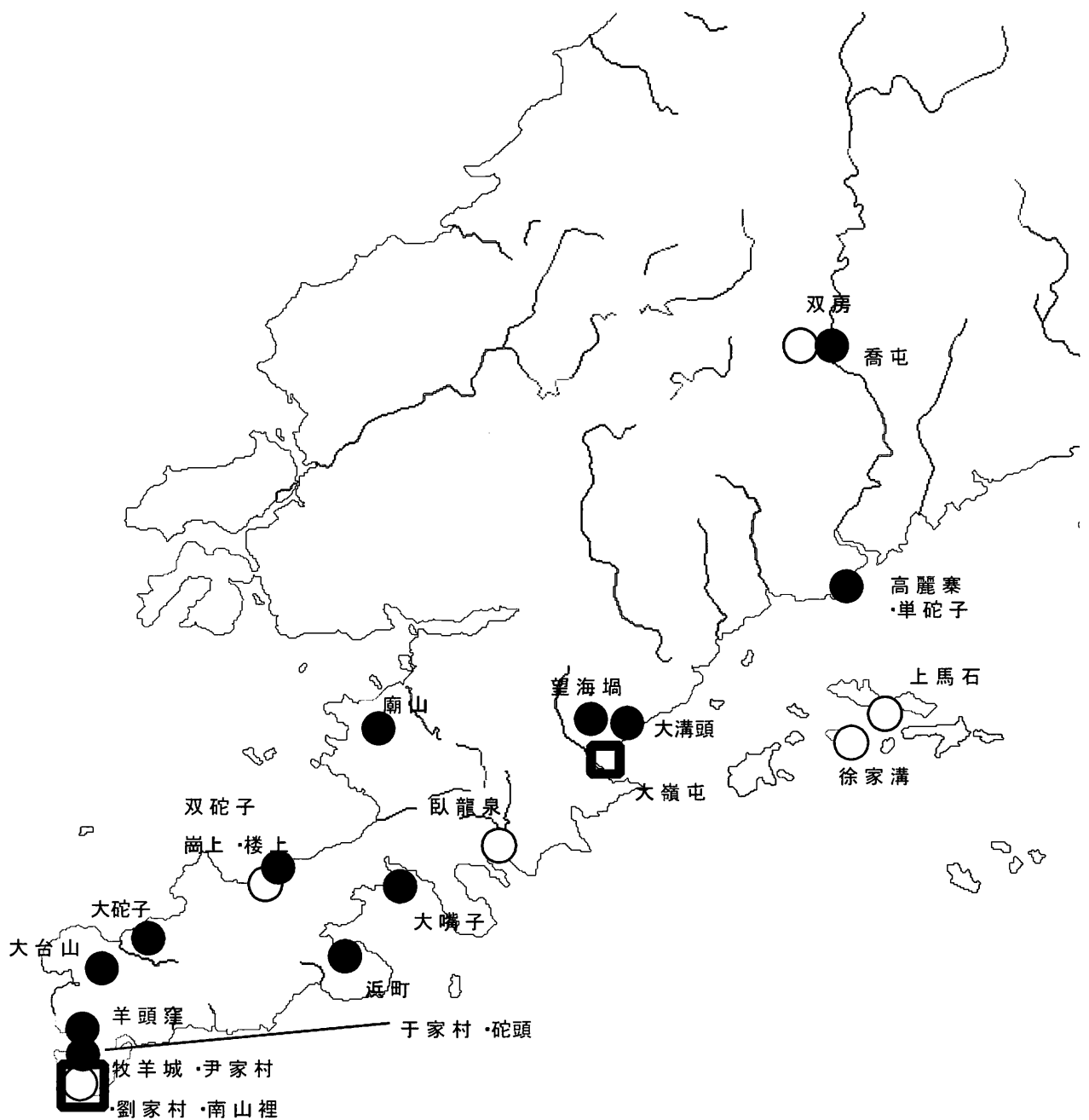


図1 関連する遺跡の分布

羊頭窪貝塚（水野編 1943）の土器（図2）は黒褐色土器が主体である。器種としては、壺がもっとも多い。大きく長頸の1型壺と短頸広口の2型壺に分かれる。2型の一部は口縁が外反する甕としてもよいものを含んでいる。両者に共通するものが多いが、傾向としては、1型には横走る条線とそれを縦に切る棒状貼付浮文が多く見られ、2型には1列ないし2列の点列をめぐらすものが多い見られる。

そのほかの器種として、簋と呼ばれるものを含む碗・鉢、高坏が目立つ。その文様は壺に付くものと同様である。碗や壺形の粗製小型土器が多いのも特徴である。甗は数が少ない。これらの土器の底部あるいは高坏の脚部が多数見ついている。やや上げ底の底部が多く、圈足状になるものも多い。それらの圈足は切り込みにより三足状になるのが特徴的である。また高坏の脚には透かし孔のあるものが多い。双砣子3期文化の中でもこれらの様相は羊頭窪に特徴的である。

文様は上記したような横走沈線文、棒状貼付浮文と横走点列文あるいは、2個一對の鈕状貼付文などに限られ、他の双砦子3期文化の遺跡の土器のように、沈線による幾何学文がない。壺の胴部にまれに沈線と点列があるが、無文がほとんどの点は双砦子3期文化に共通する。把手は見られない。

本書の別章の遺跡紹介で説明したように、遺跡の形成過程から見ると、さらに時期的に細別されるべき余地を残しているはずである。

羊頭窪の報告では、土器の主体は棒状貼付浮文などが付く黒褐色で滑澤があるが、磨研のない土器であり、それを2類土器とする。2類土器とは区別されて、黒陶と呼ばれるような薄手の黒色磨研土器の一群が製作技法も異なる1類として抽出されている(図2-49~56)。突陵状の隆起線がめぐるのが特徴的である。高坏の脚は長脚で段がない。

また、甌などの粗製土器が3類として分離されている。3類は同時期の器種差を反映していると考えられるので、3類は時期区分の目安にはならない。報告(同:63)では、少数の1類が主体をなす2類より古いとしている。その後に細別を試みた徐光輝(1991, 96, 97)は文様や器形からA組、B組と羊頭窪の土器を二分して、A類土器を古くしている。報告書の1類、2類土器は胎土、整形による分類であるが、A組は羊頭窪報告書の1類に近い。報告書の視点をさらに補強したものと言えよう。ただし、報告書に記されるように、胎土・整形による分類と器種・文様による分類は一致せず、中間的なものが多く、簡単には分離できない。たとえば、図2-2~5などは2類の中でも1類に近い口縁部形態である。1類あるいはA組のような一群が時期差として分離されるのか、あるいはより岳石文化的な要素を残す系統と在地化の進んだ系統との共存と解するかが課題として残されている。前稿では、筆者は古い様相をもつ土器を認めながらも、主体となるB組あるいは2、3類土器を中心に羊頭窪の土器を認識しておくにとどめ、全体として双砦子3期文化の中でも古い様相をもつとだけ述べた。同じ段階に器面を研磨したより精製の土器があることは容易に有り得るからである。一部が分離される可能性も否定できないが、最近報告された、以下に紹介する大砦子遺跡の資料の項で再論する。

羊頭窪には、口縁端が二重口縁状になるものがあるが、扁平なものが多い。棒状貼付浮文は短い単位をつなげるもので、全面にめぐらすこともなく、横走する条線の間隔もまばらである。

羊頭窪に多くの高坏の脚部が収録されているが、以下に見る双砦子、大嘴子、廟山では住居床面一括遺物からの出土はきわめて少ない。甌もまた住居床面一括遺物からの出土はきわめて少ない。住居外からの出土も多いわけではなく、これらはきわめて特殊な使い方をされていたと考えられる。双砦子3期の特徴は大型の広口壺が圧倒的に多いと言うところであり、その点では、以下の崗上墓下層や砦頭墓地では口頸部が退化して、広口壺と言うよりも甕と呼ぶべき器種が多くなっているのが、その後出性を物語る。

なお、2章2の遺跡紹介の項で触れているが、羊頭窪の積み石壁住居は下で検討する双砦子3期の住居の変遷の中では、それほど古くはならないだろう。住居と土器とのはっきりした関係は分からないが、羊頭窪の土器の多くは住居の中に堆積した貝層の下部から出たと言うから、多くはそれほど古くならない可能性があるだろう。

2) 于家村遺跡

于家村遺跡(旅順博物館他1981)は上下の2時期に分けられ、上層の1号竪穴住居が双砦子3期文化に属する。資料が少なく理解が難しいが、器種組成、文様とも羊頭窪に見られるものと大きく異なることはない(図5)。黒褐色土器が多く、器壁は薄く、無文が多く、磨研するものが多い。小型

のミニチュア土器が多いのも共通する。ただし、横走る条線の間隔がより密になり、横走条線に沿う列点が増加している、棒状貼付浮文の単位が長くなり、間隔が狭まるもの(1, 19)など、羊頭窪との違いがある。簋(4, 5)や杯(6, 7)にも横走条線が多用される点も羊頭窪とは異なる。杯には羊頭窪にはない把手が付く。大多数の底部は圈足で、一部に羊頭窪に特徴的な三カ所に切り込みを持つものがある。

陳光(1989)や宮本一夫(1985)のように、羊頭窪が古く、于家村1号住居を新しく考えるべきであろう。図5-1の広口壺の口唇部には粘土帯の貼付があり、その上に点列が加えられている。同一2も図から判断すると口唇部が肥厚している。羊頭窪とは異なり、下の砮頭墓地の土器に共通する、新しい特徴を持っているが、広口壺の頸部がしだいに短くなり、文様帯の幅が狭まるという傾向からも、于家村は羊頭窪と砮頭の間中である。

牧羊城1類土器の鞍形貼付文に類似する、鞍形貼付文を上下二段重ねるものがある(17)。明らかに把手ではなく装飾である。先行する羊頭窪にはV字形の貼付(図2-2)があるから、それとも関係があるのかもしれない。類例は崗上墓の下層(図20-38)や砮頭墓地(図3-22)、大連浜町遺跡(図13-2)にある。双砮子3期文化新段階の特徴である。

肥厚した口縁部がすぼまり、胴部がふくらむ無文の土器が出ている(図5-3)。類例は後述する崗上墓下層(図20-41)や大砮子H3(図6-19)にある。

于家村上層の1号住居の土器は崗上墓下層の土器と密接な関係があることが分かる。

3) 砮頭墓地

・砮頭墓地概観

砮頭墓地(旅順博物館他1983)は于家村遺跡に隣接する、多室の積石墓である。墓室毎の副葬土器の器種構成が一致せず、また、集落遺跡と共通する器種が少ないことも編年を難しくしている。于家村集落に隣接しており、于家村上層期の集落と同時期の双砮子3期文化の墓地と言うことになっている。しかし、于家村上層期はわずか1軒の住居が掘られ報告されているだけで、集落の実態が明らかではない。砮頭墓地の報告では、墓室内副葬土器および墓室中、墓室壁内に含まれる土器片が于家村遺跡の上層から出た土器と胎土、器形、文様などが同じだというのが、同時性の根拠となっている。しかし、胎土については分からないが、器形や文様では、于家村上層F1の土器と砮頭の副葬土器は、子細に見れば異なる。墓室内あるいは壁から出た土器片は、墓構築時の可能性もあるが、墓構築以前の土器が再堆積したとも考えられ、その場合は当然墓の副葬品より古い年代が与えられる。副葬土器という性格から器種に偏りがあること、あるいは明器的な性格を帯びていることも考えられ于家村集落遺跡との単純な比較は危険であることも注意しなければいけないが、宮本(1985)や陳(1989)のように、于家村上層F1が古く、砮頭墓地が新しい。

・土器の編年

砮頭墓地の類例のない土器の編年の根拠は墓地自体から求めるしかないが、墓室の構築順序と副葬土器の変遷の両方面から考え、両者が整合的に説明できる必要がある。

様々な編年案あるいは墓地形成論(陳1989、宮本1985、徐1990、千葉1988)がある。一室で18人というM8や17人というM24の埋葬が二次葬による一括埋葬ではなく、順次埋葬されたという報告の見解を重視して、長期間にわたって土器が順次副葬されたと考え、一括資料と見なさい考え方を千葉はとる。この場合、土器の組合せから時期を特定するのは難しい。報告の統計表には各墓室

から出た遺物の数量が出ている。一部に本文中の記載と符合しないものがあるが、おおむね正しいとすると、M8 や M24 のように多人数を埋葬している墓室でも、副葬土器は各器種別に見ると 1 点あるいは 2 点である。出土状況の詳細は不明なので確かなことは分からないが、これらを長期にわたって異なる器種を 1 点ずつ副葬していったと考えるよりは、異なる器種はセットであるから最大でも 2 回に分かれるだけで、あるいは 1 回かもしれないと考える。一つの墓室から出る複数の土器に同一器種で異なるものがなければ、同時期の組合せとして理解しておく。

いわゆる美松里型土器に類似する、胴部に横走条線をめぐらし、鞍状の貼付文を持つ、口縁がやや内湾する短頸広口の 1 式壺 (図 3 - 23) をもつ M 23 をもっとも新しい段階とすることは陳、宮本、徐に共通する。この短頸の口縁が内湾する広口壺は、遼東半島の最古段階の遼寧式銅剣を伴う双房 M 6 の副葬土器 (図 16) に類似するからである。

双房タイプの土器は報告では 1 式壺として分類されているが、無文の土器も含めている。報告の出土遺物一覧表と本文中の土器の記載での各型式別の数量との対比から、未報告の 1 式壺の出土墓番号を知ることができる。その結果、図 3 では、一部図の公表されていないものについては白抜きの輪郭で示している。1 式壺の定義は広口で頸部があり、球状の胴部で、底部は凹み底か圈足というものである。胴部の横走条線があるものと無文のものが図示されていることから、残りの未報告の 4 点が何れかは分からない。大事なことは、図示されたものだけで組合せを判断すると 1、2 式壺と台付鉢との強い相関を見損なうということである。

M 21、24、30 の 1 式壺、および 1 式壺に圈足の付いたような 2 式壺を出す M42 を見れば、棒状貼付浮文の付いた台付の鉢 (報告では「高圈足罐」) との相関が強いことが分かる。1 式壺を伴わない墓では、口縁が外反するか直立する甕 (報告では「直口深腹罐」) が目立つ。羊頭窪や于家村には見られなかった、ほとんど無文の甕である (M25、46、50、51)。M3、M8 の例のように、口縁が外反して、刻みがないものと、M40、46、49、51 のように口縁が直立するかわずかに外反して口唇部に刻みが付くものがある。

前者には、棒状貼付文をめぐらすものとめぐらさない台付鉢が伴っているが、後者には伴っておらず、台付鉢と伴出することのない盤や浅鉢を伴うことから、両者は副葬土器の組成が大きく異なる。つまり、1 式壺あるいはそれに圈足が付いたような 2 式壺と発達した棒状浮文の付いた台付鉢からなる B 組と、1 式壺を伴わない A 組に分かれる。A 組はさらに、外反する無文あるいは頸部に沈線をめぐらす甕と環状の把手の付いた杯を特徴とする M3、M8 の A2 組と、直立するかやや外反する口縁上端に刻みを施す甕と皿 (報告では「鉢」) ないし盆を特徴とする A1b 組の組成からなる M41、M46 がある。M50 は伴出する鉢と杯の図示がないため不確かだが、この組の可能性はある。口縁に刻みを持ち、頸部に沈線をめぐらす甕と羊の角状の把手を持つ M51 を A1a 組として分ける。

A 組と B 組では、もしも両者が時期差なら、宮本の考えるように A 組が古く、前者が新しい。そして、A1 型と A2 型組成も時期差なら、B 組と台付鉢が共通する A2 組がより新しい。宮本 (1985) の変遷案もおおよそこの順序になっている。宮本はとくに、M51 の広口壺 (36) を双砵子、大嘴子、羊頭窪など先行する双砵子 3 期文化の典型的な広口壺につながるものとして、もっとも古くする。

M44 の 49 は頸部に縦の刻み列があるが、これは棒状浮文の置換現象と見ることができる。A1b 組の M25 の口唇部に刻みのある甕 (40) や A1a 組の M51 の口唇刻みと頸部に沈線をめぐらす甕 (35) とはよく類似する。M44 の 1 式豆 (50) の胴部には上下を点列で画し、横走する条線の上に棒状浮文を貼り付けるものがある。これは M46 の盆 (45) の胴部文様 (* 報告では記載がないが、図から貼付浮文と判断した) とほぼ同じであり、A2 組 M3 の台付鉢 (5) の胴部文様とも近い。M44 の杯 (51)

の内湾する器形も、M3の杯(8)に近い。

B組の中では、M44の1式豆(50)とB組の台付鉢M24の13などとの類似性から、M24、あるいは14と類似する18を伴うM42などを古く考え、M21の台付鉢などを新しく考える。誰しもがもっとも新しい段階に置くM40には台付鉢がない。これを偶然としてB組の末期に組み込むか、あるいは有意の組成上の変化として、B組の後にC組を想定するかは不明である。

M41では、A1a組のM51の杯の双羊角状把手とは異なる単羊角状把手を持つ杯とA2組の環状把手が付く杯に近い環状把手の付いた杯が共伴し、かつそれに1式壺が伴うらしい。M31の杯は把手がないが、器形はM41の杯に類似する。このM41からは1式壺がやはり出ている。そして、それらとともに出ている台付鉢は棒状浮文がなく、平行沈線と点列からなる文様という点で、A2組のM8の台付壺(1)に近い。またM41やM3の杯の文様とも類似する。M3の台付鉢には、短い棒状浮文が付されており、M3がA型組成に近いことを示している。だから、A2組にも1式壺が伴い同時期であったとするか、M31、41をA2組からB組への移行段階とするかである。M31、41に伴うという1式壺が未発表のため検討が難しいが、共通点を重視するより、相違点を重視して、A2組とB組は段階差と考え、M31、41はその中間と見ておく。

なお、以上の変遷では、あくまでも墓の副葬品に何を入れるかという点での議論であり、そのままそれぞれの器種の文化内における生成消滅過程を意味するものではない。たとえば、台付鉢がA2組から副葬されるからと言って、あるいは、甕がB組には副葬されないからと言って、それがその器種の文化内の生成、消滅時期とは限らないということである。中国の考古学文化は主要な器種の組合せで設定されるからといって、そのまま副葬品の組合せの変化を考古学文化の変化と連動させた場合、陀頭墓地は墓地形成の途中で考古学文化が変わったということにもなりかねない。

・もう二つの土器編年

以上の変遷の順序は組合せの変化に従っており、同一器種の型式組列から導き出されていない点が弱点である。そこで、これらの組合せの違いは時期差ではなく、同時期に副葬の組合せが複数あったのだと考えるのはどうであろうか。徐と陳は墓室毎の組合せの違いを時期差として重視していない。陳は台付鉢が古、中、新の全段階にあると考える点で際立っている。1式壺を新しくするため、1式壺のB組はやはり新段階(陳のⅢ組)に置く。そして、A2組M8を古段階(同Ⅰ組)に、ここでA2組とB組の中間段階と考えたM31を中段階(同Ⅱ組)に置いているから、陳の変遷観も大差はない。しかし、おそらく宮本と同じ論理でM51を古くするのはよいが、なぜA1a組のM51をさらに古い段階を設定せずにA2組と同じ古段階に置かないのかは理由は定かではない。さらに、M50とM46の甕を古段階と中段階に振り分け、A2b組やB組の台付鉢と同段階の組成と考えている根拠も定かではない。おそらく、陀頭墓地を形成した段階の土器の器種としてB組に伴う甕はあったのだろう。しかし、それがつねに副葬されたかどうかは別に証明する必要があるはずだ。

また、1、2式壺をすべて新段階に含めるために、M21の台付鉢は中段階であるが、同じM21の1式壺は新段階とし、またM24の2式壺はやはり新段階に置くのに台付鉢は中と新の中間に置いている。1式壺を新出する外来の要素として捉えることから、すべてを新段階に出現したと理解したかったのであろう。同一墓室内出土土器に時期差を想定しており、追葬のような考え方をとっているようだが、あえてそのような見方をする必然性がないと考えたことは上述した。

ただし、双房-美松里型土器の分布を考えると、その西端のこの地で突然出現したと見るのはやはり不自然であることは同感である。双房-美松里型土器は口縁粘土帯を含む甕とセットになる点に特

徴があるのに、砵頭の組合せはそれとは異なる。

徐もまた M40 の 1 式壺をもっとも新しく考える一人であるが、徐の構築順序では M40 がもっとも新しい。そして、M24 がもっとも早く構築された墓の一つとなっている。

徐は M 46 - 44 例のような、直立する口縁上端に刻みが付く土器は後続する上馬石上層によく見られるとして新しい段階に置く。それを根拠に、A1b 組の甕を M40 の 1 式壺と同段階の新段階（徐の C 組）に置く。砵頭の甕について、古い段階にあり、新しい段階には消えるという宮本や陳の考えと徐のように、1 式壺とセットで途中から新たに登場したものであるとの徐の考えがある。口唇部に刻みを施す例は大嘴子にあるが、ほとんど頸がなく、胴部のふくらむ、双砵子 3 期に通有の広口壺であり器形が異なる（図 9 - 43）。このことは、牧羊城 1 類の B2a 類の理解に関わる重要な問題であり後述するが、それほど単純ではない。

また、頸部に沈線をめぐらす M 51 の土器（51）の類例を崗上墓下層の土器（図 20 - 28）に求めて、それを中段階（徐の B 組）に置く。

このようにして古段階では台付鉢だけで、中段階になると台付鉢の他に 1 式壺と甕が加わり、新段階にはすでに台付鉢はなくなり、1 式壺と甕の組合せに移行したと考える。台付鉢の伴わない C 組という組合せの存在を重視するのである。

徐はこれらの土器の変遷観の根拠を墓室の構築順序に置いている。その想定構築順序が正しければ、徐の変遷観は正しい。しかし、隣に墓室を作る場合、隣の古い墓室の壁を壊して新たに石を積んで壁を作るなら新旧関係は容易に分かるだろうが、砵頭墓地の全体図を見ても、たんに隣の墓室の壁を利用してそれにつなげて新たな墓室を作っているようにしか見えない。この場合、新旧関係の判断はかなり難しいのではなかろうか。発掘調査の過程ではあるいは分かる可能性はあろうが、報告にはそれについて何も触れていない以上、全体平面図からそれを判断するのはきわめて困難である。それにも関わらず構築順序を考えた徐に敬意を表するものの、それによって土器編年を決定できるほどの信頼性はないと考える。徐の想定では M24 が最古段階の墓の一つであるが、そこから M1 式壺が出ていることになっている。長期にわたって順次副葬された結果として理解せざるをえないことになる。

報告では、各墓室は家族墓で構成員が死亡するたびに順次埋葬されたとしている。21 人の埋葬があった M54 は 3.1x 2.3 m で、次いで 18 人と多い M8 は 2.4x 1.5 m、次の 17 人の M24 は 3.9x 2.9 m と、墓室は大きい。しかし、大きな墓室に常に多数の埋葬があるわけではない。順次埋葬する前に、将来を予定して規模が決定されているのだから当然ではある。

ただ注意すべきなのは、宮本や陳も古く考える M51 は墓域の西の端の、1.7x 0.8 m という小さな墓室であった。最初から、順次埋葬による多人数埋葬を想定していなかったとしか考えられない。M50 も 1.9x 0.73 m と小さい。砵頭の報告で、先行する四平山や老鉄山積石塚では一つの墓室に砵頭のように多人数を埋葬することはなく、積石塚の一つの墓室に多人数を埋葬する習俗は後続する崗上墓に見られることを指摘している。だとすれば、砵頭墓地で当初は多人数埋葬することはなく、順次多数埋葬を予定するようになり、しだいに大型の墓室も現れるようになったとも考えられよう。墓域の西側から構築が始まったという宮本（1985）の指摘は重要だと思う。

宮本の変遷観とここでの見方は、墓室の副葬品を一括品として捉えるという基本を共有することから当然のこととして、その結論に大きな差はないはずであるが、どこを重視するかで多少見方が異なることになるだけである。宮本は詳しい説明をしていないが、示された変遷図から読みとるかぎりでは、M40 や 36 のような 1 式鉢が単独で出る墓室を重視し、その段階を設定する。古段階からの甕は中段階の前半で終わり、台付鉢は中段階に限られ、それに伴う 1 式壺は無文であり、新段階になると、

台付鉢は消え、胴部に横走る条線のある 1 式壺が現れ、器種組成上の大きな転換があったと考えられているようだ。

以上のように、新段階に胴部に横走る条線を持つ 1 式壺があることは共通するが、それが他の器種とどのように組み合わせかとなると、大きく異なることが分かる。このことが砮頭墓地の歴史的な位置づけにも関わることになる。筆者の理解は宮本にもっとも近いのだが、すでに上でも述べているように、確かに単独で出る墓室があることは比定できないようだが、最終末に双砮子 3 期文化からの伝統的な土器を持たない 1 式壺単独の C 段階を設定できるのかどうか自信が持てないし、それを積極的に評価すべきか疑問だからである。それは双砮子 3 期文化の広口壺の系統、あるいは口頸部に横走る条線上に棒状貼付文をめぐらす土器の伝統は後続する上馬石上層文化につながり、断絶がないと考えているからである。

・砮頭墓地の評価

最後に砮頭墓地を全体としてどう評価するかの問題について触れておく。

陳は双砮子 3 期文化の土器の伝統を受け継ぐ台付鉢が全期間にわたって副葬されたと考えるので、砮頭墓地全体を双砮子 3 期文化の末期に位置づける。

徐は新段階に台付鉢が消失し、1 式壺と甕という新たな組合せが確立することを述べているように、古、中段階（徐の A、B 組）までは双砮子 3 期文化に入るが、新段階（徐の C 組）は双砮子 3 期文化からすでに逸脱した、次の上馬石上層文化との移行期であるとの認識を示す。

宮本（1985）は考古学文化という枠組みを用いず、代わりに「期」を用いることで知られるが、砮頭墓地の古段階（宮本の前期）は双砮子 3 期に入れていたが、中段階、新段階（同中期、後期）を上馬石 A 地点下層期の全期間にあてている。中段階に台付鉢が現れることを双砮子 3 期から分離する根拠としている点で、陳とはまったく逆の論理となっている。上馬石 A 地点下層期は上馬石上層の古段階に時間的に平行させていることからすると、徐よりさらに砮頭墓地の下限は新しくなっている。このような操作が遼東の遼寧式銅剣の年代を新しくしてきたのである。

筆者も一時、徐のように、砮頭の新しい部分は双砮子 3 期文化を逸脱した直後の段階と考えたが、後続すると考える尹家村 1 期との連続性や墓地としての一体性を考えると、連続した墓地形成の途中で考古学文化が突然変わるというのは理解を難しくするだけであると考えようになった。中国側の中朝共同調査報告の中で、安志敏が双砮子 3 期文化から尹家村 1 期文化（＝上馬石上層文化）へと単純な文化設定をしているが、それがもっとも分かりやすいと考えるに至った。ただし、尹家村下層 1 期には見られない、中部地域の高麗寨や上馬石上層の口縁粘土帯甕の存在からすると、移行の過程は地域によってかなり異なっていたようだ。

・銅鏃の年代について

最後に、砮頭墓地の年代に触れておく。その定点は M24 出土の 2 点の銅鏃（図 3 - 16, 17）である。M24 を宮本はすでに中段階に置き、筆者も B 組の中でも古い方に置いており、中ぐらいの古さであることに問題はない。宮本（1991）は林巳奈夫の『中国殷周時代の武器』を引いて、殷代中期から西周前期とする。林の当該書は 1972 年の執筆であり、その後の資料の追加は多い。それによって、さらに時期を限定できるのだろうか。それ以前に、陳（1989）は殷墟 3 期に始まり 4 期に流行するからとして、殷代末期の殷墟 4 期に限定した。

また、この銅鏃の下限を押さえる資料として、劉家村石墓から遼寧式銅剣とともに出たと伝えられ

る銅鏃（『牧羊城』、挿図 23、24）がある。林滄（1980）がかつて遼東の遼寧式銅劍を古くした際の根拠の一つとなったものである。林滄は劉家村の銅鏃は西周式であり、遅くとも春秋初期までしか下らないと述べていた。その遼寧式銅劍は双房 M6 よりは新しいから、伴出関係に問題がなければ、双房 M6 あるいは砦頭墓地の下限を押さえる資料でもある。砦頭墓地の銅鏃が西周前期以前ならば相対順序としては整合的である。

西周前期以前となると、遼西を経由した場合には、遼寧式銅劍以前となる。魏營子文化の段階に相当するが、この段階の資料は明らかではない。また、遼西から遼河下流域にかけて青銅製の武器が遼寧式銅劍以前に広がるが、その組成は刀子や斧であり、銅鏃はない。

海を挟んだ膠東半島に目を向けると、王青（2002）の研究に拠れば乳山南黄莊石槨墓（北京大学考古実習隊他 2000）や海陽上尚都墓で西周後期の銅鏃が出ている。その形態は劉家村の銅鏃に近い。この系統の銅鏃は膠州西庵車馬坑で西周中期まで遡るが、西周後期の鏃の方が劉家村の鏃に近い。砦頭から出た銅鏃は両翼の脊の末端下端で接するのが特徴的である。林文献を紐解くと、このような特徴を持つ銅鏃は当時の林の枠組みである「殷中期」から西周までであるが、殷後期に多い。『殷墟的発現与研究』（中社考研編 1994）によれば殷墟出土の銅鏃を 5 分類（図 1～5）しており、その中で 1 式と 2 式は殷後期の殷墟 1 期から 4 期までずっとある。砦頭の鏃は脊の下端に翼の下端がきており、1 式になる。林文献ではこの 1 式のより古いものとして輝県琉璃閣 M155 例が唯一あがっている。二里頭遺跡では 4 期、鄭州商城では二里岡下層 2 期、二里岡上層 1 期の銅鏃はすべて 2 式であり、1 式はない（河南省文物考古研究所編 2001）。河北台西遺跡（河北省文物考古研究所編 1985）で細別時期は不明だが、脊のやや太い 1 式がある。二里頭 4 期から長く継続する 2 式のほかに、最近提唱されている中商期頃に 1 式が現れ、殷後期に多くなるようだ。西周以後も 2 式は翼の形態を変化させながら継続するが、管見するかぎり、1 式の系統は西周の各時期の墓がある西安張家坡にも西周初期の長子口墓や琉璃河などでも見ることがない。また、長子口墓にその片鱗が見えているが、林がすでに指摘しているように、新しくなるにつれ翼の返しが長く尖るようになり、砦頭の銅鏃とは類似しなくなる。山東では、殷末か西周初期かで議論となっている蘇阜屯、前掌大の墓から出ているが、黄川田（2001、2004）の意見に従えば、これらは克殷以後の西周前期まで下ることになる。山東でもそれ以後にはつながらず、2 式の系統が続く。蘇阜屯を殷代末期と考える王青は別の墓を西周前期に当てている。それらがより下らないかぎり、蘇阜屯や前掌大は西周前期に下るとしてもそれほど新しくならないことになる。そして、王青の考える西周前期の墓からは 2 式が出るが、1 式は出ていない。例が少なく問題が残るが、山東に中原系の大墓が克殷のすぐ後に作られたときに 1 式鏃はあり、そしてその後消えたとなれば、砦頭の銅鏃はこのような大きな歴史的背景を以て、遼東半島の西端に現れたのだとも考えられよう。山東にはそれ以前の殷代二里岡上層期から大辛莊遺跡のように中原系の銅器を持つ集団がいた。大辛莊でどのような銅鏃が出ているのか分からないがすでに銅鏃はあった。双砦子 3 期文化はおおよそ二里岡上層以前に終末を迎えた山東の岳石文化に対応する双砦子 2 期文化の後であるから、中原地域の 1 式銅鏃の継続期間とほぼ重なるので、その確率の高低はどうか、より早い時期にも伝わる可能性があり、依然として宮本が述べた、殷代中期から西周前期の間という以上に厳密に絞り込むのは難しい。しかし、砦頭が双砦子 3 期文化の中でも終末の段階であることから、蘇阜屯、前掌大の大墓の出現と絡めて、さらに黄川田の理解に従って克殷直後の紀元前 1000 年頃を砦頭の中期段階の年代の目安と考えることに魅力を感じるのである。この年代は殷代末期に絞り込んだ陳の年代観とはその理由は少し異なるが大差はない。

牧羊城周辺からもかつて砦頭墓地とほぼ同様の銅鏃（報告：挿図 8 - 14、15）が採集されている。

牧羊城 1 類土器古段階に砮頭と年代的に近い部分がある傍証となる。

4) 小結

老鉄山周辺の双砮子 3 期文化は大きく見れば、しだいに棒状貼付浮文が発達するという流れがあり、羊頭窪→于家村上層→砮頭となることは大部分の研究者の認めるところであろう。その羊頭窪遺跡の資料は遺跡形成や土器自体から見ても、さらに細別が可能である。砮頭もさらに細別が可能であった。そして、これらのうちの最後の段階である砮頭墓地から出ている銅鏃は、遅くとも西周初期、紀元前 1000 年前後であり、砮頭墓地の終焉はそれからそれほど遅れることはなかろうから、紀元前 10 世紀頃であろう。

そして、この間の短頸広口壺には、頸部に斜格子や綾杉文に代表される沈線による帯状施文を持つものはなく、横走沈線と点列文が基本であった。このような系列は、下で見る、同じ双砮子 3 期とされる大嘴子遺跡の土器とは大きく異なるものである。大嘴子遺跡の土器は羊頭窪から砮頭への連続した流れの途中に組み込むことはできないから、地域差と見るべきであろう。最初に調査された遺跡にちなみ、双砮子 3 期文化の地域性を表すものとして、陳光のかつての名称を借用して、仮に「羊頭窪類型」と呼んでおく。羊頭窪類型の土器は、羊頭窪遺跡では褐色土器から黒色土器まで多様だが、褐色土器がもっとも多く、于家村、砮頭では黒褐色が基本であるというから新しくなると黒くなるようだ。

この双砮子 3 期文化羊頭窪類型が次の上馬石上層文化尹家村 1 期類型の母胎となる。

3. 営城子周辺の遺跡

1) 崗上墓

遼東半島南部の金州湾の南に位置する崗上墓は遼寧式銅劍時代の積石墓地として有名であるが、その下の 6 層が双砮子 3 期の包含層で、その層から住居 (F1) の床面とそれに伴う炉址が見つまっている (中社考研編 1996)。そのほかに 4 つの土坑 (H1 - 4) が調査されており、F1 → H3 → H4 という切り合い関係があった。包含層が床面を覆っているのであれば、包含層出土土器は住居と関連するもの、あるいはそれ以後のものが含まれていることになるが、包含層と住居床面との関係が明らかではない。H2 は包含層を切っているので F1・包含層 → H2 という関係である。H1 出土の土器は新石器時代の小珠山中層文化のものであるから、H1 は除外する。

土器はおおむね砂混じりの、褐色、灰褐色、赤褐色が基本であった。

・F1 出土土器 (図 20 - 27 ~ 32)

出土状況の写真を見ると住居床面附近からは、つぶれるようにして多数の土器が出ているので、一括性が高いものであろう。

口頸部に横走条線をめぐらした上に長い棒状貼付浮文を密に並べる広口壺 (29) は胴部の同様の破片は紹介されていないから、胴部が無文の広口壺になるのかも知れない。棒状貼付浮文が密に施されるものは于家村 (図 5 - 1) よりも砮頭の土器 (図 3 - 14, 18) に近い。砮頭の土器は副葬土器なので段階設定に向かないのではないかというおそれを払拭させてくれる資料である。

口縁が直立する、大小の甕が出ている (27, 28)。大形は無文で、小形はわずかに口縁に沈線が一条めぐらただけである。底部は中央部が凹んでいる。口唇部に刻みがない点が異なるが、砮頭 M 51 の

甕（図3-35）にもっとも近いことはすでに徐（1997）の指摘しているところである。

平行条線文の上に縦の棒状貼付文をめぐらす碗ないし鉢（30）には片口が付く。

台付きの無文の鉢が二点出ている。口縁が直立する（31, 32）。

・H2 出土土器（同33～38）

口頸部が短く、無文で、胴部上半に鈕状の貼付とおそらく長方形区画内に斜格子文を施す広口壺（35）。双砒子3期文化では一般にこの種の文様は簋と呼ばれる器種では胴部上半に施文されるが、広口壺では口頸部に施文され、胴部に施文されることはない。壺の胴部上半に区画沈線文を施文する土器は、上層の短剣墓段階に普及するものであり、双砒子3期文化の土器とすれば異質であり、後出性を物語る資料である。

口縁が直立する広口壺（33, 34）。一点は無文で、一点は頸部の上下に点列を施す。これらはF1の直立口縁広口壺と同類である。また、点列の付くものは于家村F1例（図6-2）に近いが、于家村例は口唇部が肥厚する点では、包含層のもの（42）により近い。

棒状貼付文をめぐらす鉢（36, 38）。一点は台が付き、一点は欠損のため不明。類例は双砒子3期文化の標式遺跡である双砒子遺跡の3期の包含層にある（図7-35）。また、底部を欠く鉢では、棒状貼付文をめぐらす間に逆V次字形の貼付を縦に並べている（38）。もう一点の器形不明の口縁部にも逆V次字形の貼付を縦に並べるもの（37）がある。于家村F1には類似した逆V字状の貼付が縦に並ぶものがあることや、また、砒頭墓地M40の壺に付く鞍状貼付とも近いことはすでに述べた。

・H3 出土土器（同39～40）

断面方形で肥厚する口縁を持つ、頸部が胴部と分離しない無文の壺（39）。包含層にも類例があるが、肥厚がより弱い。于家村F1に類例がある（図5-3）。下で見る双砒子遺跡3期包含層のもの（図7-38）は口縁が外反しない点でやや異なるがその仲間であろう。双砒子遺跡では特異なものとしており、数が少ない。大嘴子遺跡では刻みの付くものがあるが外湾せず、甗の口縁部とされている（報文の図219）。

高坏については、1996年中国版では、第1区から長脚が、H3から短脚が出ていることになっている。ところが、1966年北朝鮮版では、高坏は住居とH2から出ていることになっている。H2かH3から短脚が出ていて、1区かあるいは住居（12, 13区）から長脚が出ていることになる。北朝鮮版が正しければ、ここでは長脚が古く、短脚が新しいことになる。しかし、以下で取り上げる大嘴子遺跡では、新旧住居址出土の高坏はすべて長脚であるが、新旧の住居址の掘り込み面の間層である2層からは、長脚以外に短脚が出ている。于家村F1は短脚だが、砒頭墓地ではもっとも新しい段階であろうM40に長脚の高坏がある。長脚が古く括れのある短脚が新しいというのは困難である。

・包含層出土土器（同41～47）

11区画に、口縁が肥厚し、刻み列あるいは条線をめぐらし、棒状貼付文をめぐらす広口壺の口縁部片が図示したものを含め4点ある（44～47）。46は器面が磨かれ、棒状浮文およびその下の横走条線や点列が消えかかっている。47は棒状貼付浮文ははっきりしているが、その下の横走条線は消えかかっている。これらの様相は後で検討する牧羊城1類古段階のA類を検討する際に重要になる。H2は11区画の包含層を掘り込んでいるから、これらの土器は層位的にH2より古いことになる。F1が発見された13区画の包含層から出ているものは、F1出土のものにも刻み列がない点で共通す

る。

4区から波状沈線文が施文された器種不明の破片(48)が出ている。双砵子3期文化ではよく見られる文様モチーフであり、かつ後続する高麗寨にもあるので、時期を限定できない。

このように、3つの土坑はF1より新しいが、土坑から出ている土器は破片がほとんどで、再堆積の可能性もあり、かならずしも自動的にすべての土坑出土品がF1の土器より、あるいは、H2の土器が包含層の土器より新しくなるという保証はない。

可能性としては、台付鉢は完形なので混在の可能性がないとすれば、31, 32 → 36という器形の変化が考えられる。そして41 → 39, 27 → 33のような双砵子3期文化での新出の器種の器形の変化がうかがえるかも知れないが、類例の増加を待ちたい。

大きな流れとして、旅順の牧羊城周辺遺跡で言えば、羊頭窪より新しい砵頭、于家村に類例があることは明らかである。砵頭墓地の中で、崗上墓下層F1の頸部に沈線をめぐらす甕と対比された砵頭M51を宮本が砵頭の新段階においていることはすでに見た。棒状貼付文を頸部にめぐらす広口壺も于家村よりも砵頭に近い。39や41のような口縁が肥厚する土器は砵頭には見えないが、砵頭は副葬土器という器種上の偏りがあるはずなので、于家村にあり、砵頭にはないから、砵頭より古いとは言えない。H2の台付碗(36)に近いものは砵頭ではM11の図3-34であろう。伴出する杯の把手はM3に近い。M3は中ぐらゐの古さである。于家村的な要素も見受けられるから、おおよそ砵頭の新・中段階ぐらゐに平行するのではあるまいか。

崗上墓下層H2での横走沈線の上の棒状浮文や頸部に横走する点列文をもつ広口壺の存在からして、また他方で、次段階に普及する横向きの環状把手や口唇状把手は崗上墓地ではその上層から見つかっているように、この間に大きな画期を求めることができるから、その前までは双砵子3期文化の末期として現在は考えておきたい。徐(1990, 1997)がすでに砵頭中段階と崗上墓下層F1との併行関係を想定し、そこまでが双砵子3期文化の範囲で、砵頭墓地の新段階は移行期だとしたことは上で述べた。それは砵頭の新段階の器種組成の大変化が想定されているわけだが、上の検討および、本稿の最終目的である牧羊城1類土器の位置づけからはそれには否定的である。よって、おおむね砵頭墓地と崗上墓下層を同時期として、この段階が双砵子3期文化の終末と考える。考古学文化の設定は所詮は恣意的であるから、どれが絶対に正しいとは言えないが、それがもっとも分かりやすいと思うからである。

ただし、次節に触れる、地理的にさらに離れた高麗寨の資料ではやはり徐の言う移行期という段階を意識することになる。

宮本(1985)は逆に、崗上墓下層F1を上馬石A地点下層に対比する砵頭墓地の新段階より新しく、A地点上層期に対比させた。このことこそが崗上墓の上層にある遼寧式短剣墓の年代を新しくする上での重要な鍵となっていた。1985年の時には、その根拠となる上馬石貝塚各地点の内容が分からず、検討の余地がなかった。その後、その根拠となった上馬石貝塚の各地点の内容を1991年に宮本が明らかにしたので、検討が可能になった。筆者の理解では、崗上墓下層は上馬石貝塚のどの地点よりも古いと考えるので、このような年代観は成立しようがないが、我が国や韓国の研究者の間では、遼東半島の編年の基準として長らく受け入れられてきた。他方、すでに上で見たように、徐や陳に代表される中国の研究者はまったく別の理解を示してきたのであり、いくつかの論文は日本語で発表されているにもかかわらず、それらはずっと無視されて宮本編年が支持されてきたのであった。

宮本(1985)は集落・包含層遺跡と墓地遺跡を別々に組列化して、それらを融合するというやり方をとっている。そして、それぞれの組列における相対順序はおおむね首肯されるところであり、優

れた土器研究であったことは、上でもその一部を見てきたとおりである。筆者が唯一問題があると指摘できる（大貫 2004、2005）のは、上馬石貝塚で B II 区を A 区上・下層の後に位置づけたことだけである。B II 区の土器が崗上墓の遼寧式銅剣を伴う墓の段階の土器であることは異論はない。しかし、その論理については後で検討するが、そのことによって、崗上墓短剣墓の段階の前に A 区上層・下層という段階が設定され、崗上墓の下層がそこまで年代的に下る余地を与えてしまった。A 区下層の土器を双砦子 3 期直後に位置づけたことにはそれなりの型式学的な説明があるのだが、しかしながら、崗上墓の下層の土器はどう見ても、後の 1991 年に明らかにされた上馬石貝塚の A 区下層・上層の土器（次節の図 9）とは似ていない。宮本は双砦子 3 期以後は無文化が進行するという流れ（A 区下層→上層→B II 区）を想定した。そして、崗上墓下層 F1 は「無文化を特徴とするところから上層土器群に属する」との結論に至る。もちろん背景には、宮本が次の段階と考えた B II 区は崗上墓では上層の土器の段階であるとしたことがある。そして、F1 の棒状貼付浮文は残存であると理解した。F1 を A 区上層まで下らせたことの延長上で、砦頭墓地の中・新段階もまた A 区下層まで下ることになり、棒状貼付文は残存するのであった。「無文化」というきわめて一般的な説明で、これらまったく似ていない集落・包含層出土の土器の組列と墓地出土の土器の、それぞれ単独では優れて正しい組列が奇妙に融合してしまったのである。遼寧式銅剣の型式変遷から崗上墓より古い双房 M6 の土器は必然的に B II 区より古く、かつ砦頭墓地の下限が A 区下層であるから、その中間の A 区上層に、崗上墓下層 F1 とともに落ち着くことになった。これによって、遼東最古段階の遼寧式銅剣の年代は定まったのである。

筆者も前稿では、上馬石や高麗寨遺跡に代表される中部地域と大連周辺の西部地域には別の変遷が有り得るという前提で分けて考えたが、そのような地域性というものを考慮してもなおかつ、無文化などと言う一般的な説明の下に、上馬石貝塚の土器の組列の中に砦頭墓地や崗上墓下層の土器を併行させる余地はないと考える。その根幹となる上馬石貝塚の編年については次節で議論する。

2) 双砦子遺跡出土の土器

崗上墓に近接する双砦子遺跡（中社考研編 1996）（図 7）は、60 年代の中朝共同調査の際に調査された。1 期、2 期、3 期に大きく分かれる。

双砦子 3 期の土器は灰褐色土器が主であると報告されている。この点では、上の崗上墓下層の土器に近く、老鉄山周辺の土器とは異なる。しかし、一部彩色図版があるものを見るかぎり、黒みを帯びるものが多く、老鉄山周辺の土器群とそれほど色調が異なるとは言えないようにも思われる。

住居に伴う土器では大形の広口壺が多い。盛食器である碗あるいは鉢はきわめて少ない。高坏は包含層から 1 点出ているだけで、甌は破片が住居から 1 点出ているだけである。このことは有る無し論ではなく、器種構成上、あきらかに大型の広口壺に偏った特異な組成を示すのである。

双砦子遺跡第 3 期では 14 軒の住居址が見つかっている。ただし、重複が激しく、5 軒が重複する一群と 4 軒が重複する一群があり、2 軒ずつが一部切り合っている。

第 1 組 F17 → F10 → F8 → F6 → F3

第 2 組 F9 → F7 → F4 → F2

第 3 組 F5 → F1

第 4 組 F13 → F12

これらの新旧関係にある住居の中で、それぞれローマ数字で表されるタイプの広口壺が出ている。なお、中国版と北朝鮮版では分類が異なる。どちらが正しいと言うより、北朝鮮版では分類ごとの出土状況一覧表があるので、北朝鮮版の分類を用いているだけである。

第1組 F17 (Ⅲ 2、Ⅵ 1 (22)、Ⅷ 3 (23、24)) → F8 (Ⅷ 2) → F6 (Ⅵ 1、ⅩⅡ 1)

第2組 F4 (Ⅱ 1 (12)、Ⅲ 3 (7)、Ⅳ 1 (11)、Ⅸ 1 (4)、Ⅹ 2、ⅩⅠ 1 (3)、ⅩⅡ 3 (5、8)) → F2 (Ⅹ 2 (1)、ⅩⅡ 1)

第3組 F1 (Ⅹ2)

第4組 F13 (Ⅷ 1) → F12 (Ⅴ 1 (27)、ⅩⅡ 1 (25))

*ローマ数字に後ろのアラビア数字は点数を表す。()内は図7の番号を示す。

北朝鮮版の統計表ではF12からはⅤ類とⅩⅠ類が各1点出ている、ⅩⅡ類はないことになっている。しかし、本文では、ⅩⅡ類に分類されている25はF12の出土としている。中国版も25をF12の出土としているので、統計表の誤植で、F12にはⅩⅠ類はなく、ⅩⅡ類とする。

最大で5軒の重複があるのだから、当然ながら時間幅があり、細別されるべきであろう。しかし、これらの住居からすべて土器が出ているわけではなく、また出土した土器の一部だけが図示されているだけなので、また、広口壺が多様で組列化による分類ではないため、過去の研究者も細別に苦慮している。

F4の資料がもっとも多く報告されており、基準となるものである。それに先行するF7の遺構平面図を見ると多数の土器が出ていることになっているが、ほかの住居に類例のない大形の盆とわずかに2片の広口壺の口縁と見られる口縁部片が紹介されているだけである。分類は不明であるが、これらの土器片は小さいからと言って混入品などではなく、床面から出た復元不能な広口壺の一部であったと解されるから、小片とは言え、重要な意味を持っているはずである。

第1組の重複関係ではⅢ類、Ⅷ類が古くⅩⅡ類が新しい傾向を示す。Ⅵ類は共通している。第2組ではⅩ類とⅩⅡ類が共通するが、やはりⅢ類は古い方だけにある。第4組ではやはりⅧ類が古いほうにあり、ⅩⅡ類は新しい方にある。

ⅩⅡ類は直立した長頸の台付き壺(5、8、25)で、頸部と胴部に点列がめぐる。本文のⅩⅡ類の定義には点列も含まれているのだが、5は北朝鮮版では無文として図示されていて、編年を考える際に支障となった。点列が特徴的な長頸壺は老鉄山周辺では羊頭窪に近い。圈足に3カ所の切り込みがあるのは、羊頭窪、于家村上層にあり、砦頭、崗上墓下層にはなかった。

Ⅲ類は直立した短頸で、胴部がふくらむ。小さな平底か上げ底気味の底部である。ⅩⅡ類とは頸部が長いかわり、底部が台付かいなかで異なっている。

Ⅷ類は口唇部が肥厚する口縁が外反する短頸で、胴部はふくらみ底部は急にすぼまる。底部は上げ底気味である。例示されているものは大型である。

Ⅵ類は直立した短頸で、胴部は肩がふくらむ。底部は急にすぼまる。例示されているものからすると大型である。

Ⅹ類は直立短頸の口縁で、胴部はふくらみ、底部には低い圈足が付く。

類型毎に例示されているものを見るかぎり、広口壺の中で、Ⅵ類とⅧ類が大型で、底部は平底か上げ底気味のものである。圈足が付くのは、Ⅹ、ⅩⅠ、ⅩⅡ類だけである。

底部の傾向として、小さな平底か上げ底気味の底部が古く、圈足の付くものが新しい。

XⅡ類の三カ所の切り込みあるものを含む圈足付の長頸壺は新しい傾向がある。

次に各組間の関係を考える。重複の数を見れば、第1組と2組が5軒、4軒と多いのに、第3、4組は2軒ずつであり、4つの組が同時併存しながら、建て直していったとは考えにくい。他方、同じ場所で重複している組はおそらく連続して住み続けたためと理解すると、第1組と第2組が全体として新旧関係にあったとは考えにくい。したがって、第1組と第2組は同時併存したと考える。F2とF1は接近しているので、同時併存は難しそうだ。

その点で、第1組のF6の簋(17)が目される。第2組のF4の簋の器形と近く、かつ三つの点を三角状に配置する文様はF4の広口壺の口縁部にある。これによって、第1組と第2組の重複住居群が同時併存したと理解し、かつ、それぞれ新しい方から2番目であることから、それぞれの対応関係から、それぞれのもっとも新しいF3とF2が対応する可能性がある。そして、上でF2と同時共存が難しいと考えたF1を第2組でもっとも新しいF2よりさらに新しくするか古くするかである。何れの可能性も遺構配置自体からは有り得るので、鍵となるのは、双砵子3期の住居の中で、F1しか口頸部棒状貼付浮文の広口壺が出ていないことである。この土器は圈足が付く広口壺X類に分類されており、F1からはX類は2点出ている。

短い棒状貼付浮文の付いた短頸であり、口縁のすぐ下に点列がめぐる。口唇部の肥厚はなさそうに見える。口頸部の横走条線のことを報告に記載がないが、中国版の写真図版を見ると数条の条線がうっすらと走っているようにも見える。これにもっとも近いのは、崗上墓下層包含層の口縁部破片(図4-45から47)である。崗上墓下層の土器は口唇部が肥厚している点で異なるが、棒状貼付文をめぐる下には部分的に消えかかった条線が見えるものがある。

さらに、双砵子3期の集落の終わりを考える際には、包含層出土の土器が重要となる。

その前に包含層というものがいかなるものか見ておかなければいけない。3期の包含層は第2層である。一例として、2b層→F7→2a層→F4→F2→1c層という層序が示されている。包含層出土土器はかなり長期にわたる土器を含むと考えてよい。

2aと2b層に分かれるが、出てくる土器に変化はないという。もっとも多いのは各種の刻線文で、報告された唯一の高坏はこの層から出ているようだ。とすれば、層的には双砵子集落の変遷の中では少なくとも新しい段階のものではなく、それが羊頭窪の高坏(図2-37)と類似することに意味があろう。

このほかに、その上層に1c層という攪乱層がある。ここからは、後続する段階である崗上墓、楼上墓の土器と同じものが出るが、3期の土器がもっとも多く出たという。その3期の土器には棒状貼付文が多かった。つまり、傾向として、3期の中でも古い段階では、刻線文が多く、新しい段階に棒状貼付文が多いことになる。報告書で包含層出土として紹介されている棒状貼付文をめぐらす土器のようなものは住居より上の1c層から多く出ていることになるのであろう。このことはF1の位置づけに重要な示唆を与えるのである。

住居形態の観点から見ると、重複関係にある第2組の住居址群の中で、もっとも下にあるF9はD字形の平面形であり、門道がない。第2組のその次のF7は門道付の方形である。さらにその上の、F4、F2も方形である。D字形から方形へという流れがここにはある。第1組の次以後のF10は殆ど残っていないので形態は不明であり、その次のF8は方形に見える。その次のF6は斜面下側の前方部が斜めになっていてやや不整形ではあるが、後部はD字形より方形に近い。前方が斜めになるのは第4組のF12に類似する。この点で、第1組の他の方形住居は前方部がなくなっている住居が多いため

判断が難しいが、F6、F12は奥行きがない点で共通し、それがそのほかの住居と異なるように見える。さらにその次のF3は前方部を欠くが、やはり方形である。D字形というのは、後方の壁が直線でないことに特徴があるのだから、前方部が不明でも後方部が直線的な住居址がD字形より新しいという流れは第1組、第2組とも確認できたといえよう。これが認められれば、第1組でもっとも古いF17はF9と構造が類似するから、第1組の第2組の二つの住居址群は始まりが同時の可能性はある。そして、大きく見ると、南側の斜面の低い側から北側の斜面の高い側に向かって後退するように、住居が建て替えられているという流れがあったようだ。そうだとすると、全体図には、第1組の住居址群のF3、F8の外側のもっとも高い側に、遺構番号が振られていない大型の方形住居がある。規模は第2組でもっとも新しいF2に近い。斜面の下から上に向かったという建て替えの方向性の認定が正しければ、これが第1組でもっとも新しいことになる。これを加えると、第1組は合計6軒になってしまい、第2組が合計4軒で、第3組のF1を第2組に加えて、合計5軒にすると、第1組の番号なしを無視すればちょうど合うのだが、それはあまりに恣意的だから数に加えると、第2組側が1軒足りない。さらに第3組のF5を加え、つまり第3組と第2組と合算すると、第1組の数と合うというのがあるとは言えるがここまで来ると数あわせであり、考古資料からの証明は難しい。第1組の住居址と第2組（第3組も？）の住居址からなる2軒一対という基本的な配置があったらしいということで、細かい対応関係では始まりは同時でもその後はつねに同時に立て替えたかは不明であるという程度に抑えておきたい。

土器の面からも、X類はF1以外にF2とF4からしか出ていないから、F1は第2組の中で、新しい住居と密接な関係がありそうだ。上で見てきた住居址の建て替えの変遷過程の理解がそれほど外れていなければ、かつF2と同時でなければ、F4→F2→F1という住居の変遷があったと理解するのがよいだろう。

広口壺の口頸部に横走る条線をめぐらし、縦に長い棒状貼付文をめぐらす広口壺の口縁が包含層から1点報告されている（図7-34）。また、崗上墓下層で見たような、棒状貼付文をめぐらす碗は、双碇子では住居からは出ておらず、包含層から1点報告されているだけである（同-35）。このように、38の口縁が肥厚して内湾するものも崗上墓下層に類例があることを見てきた。このように、近隣の崗上墓下層の土器に類似するものは、F1および包含層に多く出ている。包含層にあり、他の住居にないと言うことは、F1以外にも棒状貼付浮文を伴う段階の未調査の住居が近くにあった可能性が高い。

ほかに注意すべき包含層の土器として、胴部上半部に長方形区画内に斜格子文を充填する簋と呼ばれる土器（36）がある。崗上墓段階の土器に続く新しい要素である。これによって、双碇子3期の集落変遷は途中の段階で羊頭窪の一部との類似が見てとれ、最終段階は崗上墓下層と近い時期まで継続したと解されることになる。ただし、F4の土器の中には、羊頭窪的な長頸壺で点列をめぐらすものがあるが、それ以外に、羊頭窪では見られなかった沈線による斜格子文や羽状文を頸部に帯状に施す短頸の広口壺や簋があり、その位置づけは別に考える必要がある。F7が羊頭窪類似のF4より古いと言う層位的な事実も考えておく必要がある。F7の19、20に見られる広口壺の口縁はF17の23に近い。

F17とF8の切り合い関係から、F8-18の口縁部がないのが残念だが、大型の広口壺は胴部最大径の位置が新しくなると上に来ることになる。F4-3もそのような変化上にあるとするとさらに新しい傾向を示すことになる。F12もF4に近い仲間である。

このような流れでは、F7やF17が古いグループになるが、それらの器種は大型の広口壺や盆しか

分からない。ほかにどのような器種が伴うのか分からないので、性格付けが難しい。中段階のF4およびF12のグループにもっとも羊頭窪的な色彩がある。ただし、羊頭窪も継続期間が長いと考えられるので、羊頭窪のすべてがこの段階に併行することはないだろう。この段階に、金州湾方面と老鉄山方面の共通性が強まったと理解すべきではなからうか。次のF2は資料が少なく性格付けが難しい。最後の段階は崗上墓下層や砬頭のような、棒状貼付浮文が盛行する段階である。この段階も両地域に引き続き共通する部分がある。

F2から三本の短い足を持つ碗が出ている。羊頭窪に特徴的である。また、包含層からは5本の瘤状の足を持つ底部が出ている。羊頭窪には4本のものがある。また、短い豆粒状の貼付文がある。これまた、于家村、砬頭あるいは崗上墓下層には見られない羊頭窪の特徴に共通する。

このような類例をこれまで検討してきた資料から探索すると、新しい傾向を示すXⅡ類に類するもの、あるいはF4、F2の土器に近いものは羊頭窪にあり、于家村や砬頭にはない。老鉄山周辺の変遷では、古い方に近いということになる。また、崗上墓と双砬子遺跡は目と鼻の先であるから、老鉄山周辺の変遷を考慮すれば、今知られる双砬子3期の住居址のうち実態のよく分からないF1段階を除けば、確実に崗上墓下層より古い。F1前後に于家村上層平行段階を考えておくべきであろう。

今までの研究者が考えていたように、双砬子3期住居址群がおおむね崗上墓下層より古い。崗上墓下層と砬頭墓地がおおよそ併行するから双砬子3期の大部分はそれより古い。

さて、それでは双砬子3期住居群は老鉄山周辺の双砬子3期文化の集落遺跡とはどのような関係になるであろうか。かつて、筆者はまだ于家村も砬頭も未報告の段階で、「双砬子3期はほぼ羊頭窪に相当するが、一部羊頭窪には見られない要素がある。羊頭窪は殆ど点線と平行線及び棒状貼付文からなる単純な様相を示しているのに対し、双砬子3期の幾何学的な文様は後続する牧羊城下層、高麗寨下層に近似する。」と述べたことがある。要するに、双砬子3期は後続する新しい要素を含んでいると述べたのだが、それゆえ羊頭窪が古く双砬子3期が新しいと断定することはなかった。当時から、双砬子3期はさらに細別される可能性があり、羊頭窪との関係を単純に先後関係と考えてよいのか確信が持てなかったからである。

その後公表された于家村や砬頭の資料を見るに、羊頭窪から于家村・砬頭の間双砬子3期住居の土器を組列として組み込むことはできないと思われた。だから、一系列を仮定するなら、羊頭窪以前に持っていきしかないとというのが陳光(1989)の考え方であったと筆者は理解する。これはこれで、もしも一系列であるという前提を設けたのであれば、非常に論理的な結論であると思う。しかし、一系列でなければ、すべてを羊頭窪以前におく必然性はなくなる。

宮本(1985)は別の一系列変遷案として、逆に羊頭窪→于家村上層1号住→双砬子3期4号住という流れを想定した。その根拠は、双砬子3期4号住居の頸部に斜格子文帯をもつ土器(3)に着目して、それが後続する高麗寨の文様に連続することにある。筆者がかつて述べた「高麗寨下層」に近似するという要素がまさにそれであるから、着目している点は同じだったが、さらに踏み込んだ見解を示した。おそらく、双砬子F4には棒状貼付文をめぐらす広口壺がないのを、双砬子3期文化の中の末期的な現象として理解されたのではなからうか。こちら、別の一系列案としては、論理的な一面を持っていることは認めなければいけない。

ただし、筆者はかつて、双砬子3期に後続する「高麗寨下層」との類似性は認めたが、高麗寨の位置する遼東半島「中部ではこの段階(*双砬子3期のこと)は明らかでない。」として、これまた地域性の問題がまったく分かっていなかったのも、それ以上踏み込まなかった。

すでに述べているように、中国版が1996年に登場するまで、写真図版として紹介された資料は分

析ができなかったことが大きな要因である。5が北朝鮮版では無文の土器として図示されていたことも、宮本の「無文化」の流れの中に位置づける際に影響したであろう。その写真図版資料を利用しながら、報告書の記載を丁寧に読み込んでいった結果、あやふやなところがまだあるが、細分案の基準たりうる要素を少しは抽出しえたつもりである。その結果として、双砦子F4は于家村上層F1より古いことになった。

住居址の形態変化で、D字形から方形へという流れを押さえた。戦前に調査された羊頭窪の住居はすべて方形の積み石があった。本来は竪穴住居であったと考えると、羊頭窪の住居は双砦子の変遷の中では最古にはならないというより新しい。双砦子F4が羊頭窪の主体的な土器に類似することは、このこととは整合的である。ただし、羊頭窪では積み石壁の下にも貝層があり、より古い層があったようだから、層位的には複雑であり、羊頭窪のすべての土器の位置が決まるわけではない。また、もう一つ考えておくべきは、地域性である。羊頭窪は膠東半島との交渉を考える場合にもっとも近い位置にある。双砦子3期が岳石の地域類型とでも言うべき双砦子2期の在地化を意味するものであると考えると、地域によってかなりその連続性の強弱がありそうだと予想されることから、双砦子3期の中ではすべての地域で一律にD字形が古いのか分からない。また、双砦子遺跡の中で、羊頭窪に近い一群はそれ以上あまり東には広がらず、逆により東方の遺跡の土器と類似する土器は老鉄山周辺には広がらないという地域性が見てとれ、土器の上でも、時期差と地域差が見てとれ、新しい時期に老鉄山周辺との類似性が強まるというように読み取れたのである。

3) 双砦子遺跡

最近、羊頭窪など老鉄山周辺の遺跡と双砦子、崗上墓の中間の地域で双砦子遺跡（大連市文物考古研究所他2006）が調査された。厳密には金州湾ではないが、ここに含めておく。

下層は双砦子2期文化の層で、上層の2期層が双砦子3期文化の層である（図6）。2期層からは5軒の隅丸方形竪穴住居（F1, F2, F4, F5, F7）と3軒の円形竪穴住居（F3, F6, F8）が見つかっている。羊頭窪や双砦子に見られた壁際の積み石は、F8の一部の壁に石組みがあるだけで、紹介されている他の住居の壁には積み石がない。F3の下からF4が見つかっているから、住居の形態に時期的な意味があるのなら、円形が新しく、方形が古いことになる。しかし、円形住居として唯一遺構平面図が紹介されているF8の平面形は隅丸方形に近い。D字形にも見え、それならば双砦子にも類例がある。双砦子では、二組の重複住居の変化の流れはD字形から方形のように見える。双砦子の住居の中では新しくはない。F6は全体図の中の略図では門道付の円形で、F8とは異なるのかも知れない。また、F3の遺物は紹介されていない。

2層が双砦子3期文化の層である。住居はF7のみ2層から掘り込まれ、その下の3層を掘り込んでいると報告されている。他の住居は記載がないか、すでに開口部が削平されて分からなくなっていた。

灰褐陶の夾砂陶が主体というから、双砦子遺跡3期層あるいは羊頭窪に近い。平底以外に3カ所に切り込みを持つもの、2, 4, 6の切り込みを持つ圈足もある。土器が報告されている住居は方形住居のF2, F4, F5, F7と円形(?)住居のF6, F8である。

F8の3カ所に切り込みのある圈足を持つ1は双砦子F4あるいはF12の長頸壺に近い。2, 3も含め、F8は双砦子F4の段階に近い。F2の10とF4の14は口縁部上端が内側に屈曲するのが特徴的である。14は3カ所切り込みの圈足のようだ。頸部に点列と二つのボタン状の貼付文を持つ点で共通する。これらと同じものは、双砦子では見られず、羊頭窪に類例がある（図2-5）。ボタン状の貼付と点

列が組み合うのは、羊頭窪では他に、37の高坏がある。口縁上端が内側に屈曲するものは羊頭窪では他に、55の例がある。55は報告書で第1類とされ、後に徐光輝が古いA類として分離した土器である。F8の長頸壺1にも頸部にボタン状貼付があるような図だが、本文の説明では、点列と沈線文としか述べていない。

F4、F2が古くF8が新しいと考える。長頸壺は12から1への変化が想定されることになる。短頸の広口壺の組列化では、F8にないため、F5やF6の大型短頸広口壺の位置づけが難しい。F4-13の広口壺は頸部に斜格子文帯があり、後述する大嘴子類型の土器に近い。双砵子F7の19の破片を介して、F17の23と器形が近い。胴部最大径の位置がその後上がるという双砵子での組列を適用するなら、F5の4はF4の13より新しい。F6は碗の8がF4の碗17と近いからF4と時期的に近いと考えておくと、F5、F6の位置づけは定かではない。

これら住居址からは出土していない棒状貼付浮文の付いた口縁部片が包含層の第2層から多数出ている(図6-22, 23, 30-33, 36)。拓本図では、38と44がG1:②で、残りはすべてT10からT15の②である。報文では、棒状貼付浮文の土器は胎土が硬いと、ほかの土器と性質が異なることを述べている。

双砵子遺跡でも住居址から出る土器と包含層から出る土器に違いがある場合には時期差と考えた。ここでも同様に、時期差の可能性はないだろうか。第2層と住居址との関係はF7のみ2層から開口し、3層を切るという表現がある。おそらく2層の下、3層上面が掘り込み面という意味であろうか。ほかの住居はすでに掘り込み面が削平されているものがあり、分からないが、第2層に住居より新しい土器が含まれていてもおかしくはなからう。もちろん、包含層から出てくる土器には住居址内の土器と同じものがあつたことは図や拓本(37から39)からも分かる。そうでなければ、報告の段階で分期されていたはずだからである。住居内と同じものを差し引いた残りという意味で、住居址から出ていないと言うことを正しく評価し、時期が異なるからだと考えたい。口唇部が肥厚し、頸部に横走条線を施した上に、密に棒状貼付浮文を施すものであるから、羊頭窪のものとは異なる。双砵子3期文化で棒状貼付浮文が盛行するのは、砵頭や崗上墓下層に代表される新段階であることを上で見てきた。ここでも同様に住居址の段階の後に、棒状貼付浮文の段階があつたと考える。

拓影図には、それ以外に、新しい段階と考えられるものに、21、47、48がある。21は今までも注意してきたが、双砵子3期文化の中でも新しく現れるもので、崗上墓包含層がもっとも近い。これは棒状貼付浮文の盛行段階であることと一致する。

47、48は43や44と類似するから、たまたま棒状貼付浮文がない部分なのかも知れないが、そうであっても、これらは本章の最後で議論することになる、牧羊城1類古段階の土器によく類似することを指摘しておく。

4) 小結

営城子周辺では、大きく見ると、双砵子→崗上墓下層であるが、双砵子遺跡は重複する住居が多く、かなりの時間幅を持っている。報告された資料が少なく、住居址の変遷と土器の変遷との関係がうまく説明できないが、住居を4段階に分けると、最初は後述する大嘴子類型に近いらしい。第2段階以後は羊頭窪類型の土器がほとんどになる。第2段階は羊頭窪遺跡の主体に近い。第3段階はよく分からず、第4段階のF1資料は崗上墓下層に近く、包含層の土器に見られる崗上墓下層的な土器との区別が難しい。包含層の棒状貼付浮文の付く碗を以て次の段階が設定できるのかは定かではない。

大嘴子遺跡は営城子周辺と老鉄山周辺をつなぐ資料であり、大きく住居段階と包含層段階の一部の

新旧 2 段階に分かれる。住居段階はさらに 2 時期に細別される可能性がある。住居の新段階 F8 の段階は羊頭窪の主体でもあり、双砦子にもあり、広い共通性を見せるようになる段階である。住居の古段階 F4 はこれと類似するものを羊頭窪の古段階とすると考えれば、羊頭窪の細別を考える際の重要な基礎となるものである。他方、これと類似するものは双砦子にはない。大砦子の F4 と双砦子の F7、F17 は同じく双砦子 F4 より古いと考えるが、それらが時期差か地域差なのかが問題である。双砦子の第 1 段階がそれ以後の段階とは異なり、大嘴子類型に近いとの考えが許されるならば、地域差とすることもできよう。ただし、双砦子 F7 は検討できる資料が少なすぎるのが難点である。

4. そのほかの地域の遺跡

1) 大嘴子遺跡

・大嘴子遺跡の調査について

大嘴子遺跡は大連湾に突き出す半島にある。ここでも遺跡形成は同じく双砦子 1 期、2 期、3 期と続き、そして終わる。1987 年の大規模な調査（大連市文物考古研究所編 2000）で 39 軒と 1990 年の調査（遼寧省文物考古研究所他 1996）で 9 軒、合計 48 軒の双砦子 3 期の住居址を発掘している。1992 年調査時の層位と 1987 年調査時の層位との対応関係は明記されていないが、ここで問題としている双砦子 3 期文化層は 1987 年の 2 層、3A 層と 1992 年の 2 層、3 層がそれぞれ対応するものとしておく。この対応関係が重要なので、それが崩れたら以下の議論は成り立たない。

双砦子 3 期文化の基本的な層序は 3A 層→2 層下住居→2 層・2 層中住居→1 層下住居である。発掘調査と報告の公表の先後が逆になっているため、研究史的により報告が早い 1992 年調査資料を先に検討する。

・1992 年調査の資料（図 8）

1992 年調査時の住居では 9 軒すべてが 2 層下で見つかり、3 層を掘り込んでいた。したがって、双砦子 3 期は 3 層→住居→2 層ということになる。

住居は大きく、土壁の竪穴住居 F1、3～5、9 と石を積んで石壁にする竪穴住居 F2、6～8 に大きく分かれる。住居址間の重複が 3 組ある。

3 層→F5 → F3 → F2・H1 → 2 層

3 層→F4 → F7 → 2 層

3 層→F9 → F8 → 2 層

3 組とも石壁住居が土壁の竪穴住居より新しい。ところが、竪穴住居は何れも火災住居で遺物が多いが、石積み住居は非火災住居で、遺物にとぼしく、その新旧関係を土器から見ることは難しい。

調査を担当した華玉冰、陳国慶（1996）が 1992 年資料を用いた大嘴子 3 期の細別編年をおこなっている。上の 3 組の層位関係とそれに関わる住居の形態や土器を総合的に判断して、前期に 3 層、F1、F5、後期前半に F3、F4、F9、H1、後期後半に F2、F4 埋土、F6、F7、F8、H3、H4、2 層をあてた。

新しい段階である石壁住居の良好な土器がないため、それに代わる資料として、4 号土壁住居の土器を細別している。土器は 4 号住居の床面の土器（6～9）と壁体や屋根が倒壊した後に堆積した土器（1～5）に分かれるという。その 4 号住居上層の土器が石壁住居段階の土器に対応し、F5 → F3

	前期	後期前半	後期後半
胎土	細砂混多、粗砂混・泥質陶一定量	細砂混多、粗砂混・泥質陶増加	細砂混、粗砂混、泥質陶増加
色調	二次焼成紅褐陶主、次に黒褐陶、灰褐陶きわめて少ない。	二次焼成紅褐陶主、次に黒褐陶、灰褐陶。	黒褐陶主、次に灰褐陶、二次焼成紅褐陶少、磨研黒皮陶少。
底部	切り込み圈足を含む数点の圈足以外は平底。	大型の壺・罐平底。小型罐平底。小型壺、篋圈足、仮圈足多。切り込み圈足なし。	切り込み圈足なし。
施文位置	壺の頸と胴部。盆。	壺の頸部と胴部。圈足罐と篋	壺の頸部と胴部と篋。小型壺と罐は無文。
文様	有文は少ない。横走沈線文と点列を加えた沈線文。	有文が増える。連続三角形充填平行線文、平行沈線区画内斜格子文、斜線三角文、点列を加えた沈線文、多重波状文など多様。	文様の種類と数量が減少。連続三角形充填平行線文、斜格子文、綾杉文、斜線三角文、点列文。
器種構成	壺が基本。少量の罐、碗、高坏、盆。	壺、罐、碗、高坏、圈足罐、器台。	罐、壺多。高坏、碗、鉢、篋、甌。
壺・罐の器形変化	胴部最大径は中央部。丸味をおびる。	肩が張り、胴が急にすぼまる。	細長くなり、肩が張る。

表 1 華・陳による大嘴子遺跡の時期区分

→F4 上という変遷をするのだという。

以上のように、二つの重複関係からなる土器変遷が捉えられた。

92F5 (28～32) → 92F3 (10～27) と 92F4 床面 (6～9) → 同埋土 (1～5) である。

華・陳は 92F5 の土器に代表される前期、92F3 と 92F4 床面の土器に代表される後期前半、92F4 埋土および F6 の土器に代表される後期後半を設定した。華、陳の説明を大きな流れとしてまとめるとおおよそ次のようになっている (図 8 下段、表 1)。

簡単にまとめれば、点列あるいは点列と横走る沈線文という単純な文様を持つ広口壺の土器群が前期 (= 早期)、口頸部に幾何学的な沈線文を持つ多数の頸部に文様を持つ広口壺の土器群が後期 (= 晩期) 前半であり、後期後半ではふたたび文様の種類と数量が減少するということであった。

92F3 が後期前半を代表する資料であるが、図 8 の下段では完形の土器だけを取り上げているため、やや長頸の壺の頸部に幾何学的な文様を施す一群が出ていない。頸部に斜線充填三角文 (13) や縦集線方形文 (14) を施文するものは、類例として、戦前に採集されている望海塙の資料 (島田・森 1942) (図 12) がある。口縁上端が肥厚し、以下の頸部に沈線による幾何学文が施文されるという特徴がある。それに類するものは、最近、金州湾の北側に位置する廟山遺跡 (吉林大学考古系 1992a) でも見つかっている。望海塙は大嘴子遺跡よりさらに東に位置する遺跡であるが、おそらくこの廟山の第 2 層段階の土器なのであろう。黒褐色磨研粗質土器とされているので、廟山の胎土、焼成と似ていることになる。採集品のため、同時性の保証がないが、望海塙では胴部に同様の文様が施文されたものがあり、崗上墓の土器など上馬石上層文化の土器への接近を示しており、後期後半にも同 6 のような斜線充填三角文があるから、まさにこのような文様を持つ土器、仮に望海塙タイプと呼んでおくと、それらが上馬石上層文化につながるのだと筆者自身理解していた。ところが、その後の 87 年調査資料の層位的な出方はかならずしもそのようにはなっていなかった。それは 87 年資料のところで述べる。

圈足付きの小型壺は双砵子 3 期文化の器種として特徴的なものであるが、土器変遷図には出てこない。このときの土器器種構成の変遷観では、前期には圈足がほとんど無く、後期に盛行するとしているから、後期に初めて出るかのようなのである。しかしながら、下で見る 87 年資料では、2 層下の住

居のさらに下の住居（図9－46, 47）から出ており、張（2004、2006）は92F5と同一段階としている。土器に共通性が無く、比較が難しいが、少なくとも後期後半とした92F3よりは古いのだろう。

1992年の報告は簡報であり、多くの土器は個数のみで図示がなく、詳細は不明であり、未報告資料を知りうる調査関係者である華、陳の分析は尊重しなければならないし重要であろうが、とにかく検証不能な部分がある。石壁住居の段階までも含んだ全体の編年になっているのかの保証はないのである。なおかつ、残念ながら、1987年調査の報告は公表が遅れ、彼らの分析時には未発表であった。層位との対応関係が確かならば、遅れて報告された1987年時の住居には2層を掘り込む、より新しい段階の住居があるのであるから、1987年報告の層位に問題がなければ、92年の華・陳の編年は大嘴子3期全体の細別とすることはできなくなった。また、後期後半の内容がはっきりしない資料的な難点がある。

しかしながら、大嘴子遺跡の層位的事例に基づいた華・陳による土器編年自体は無効になるものではない、重要な研究成果であり、そのことを否定するものではない。

・1987年調査の層位と住居址

1987年資料は、中国の報告書としては、めずらしく遺構、遺物についての網羅的な資料の提示があるものとして貴重である。

双砵子3期に属する39軒が報告されている。そのうち、10軒は多くが平地式の石壁住居であるというが、全体図や遺構平面図から周囲を石で囲う住居は確実なものは5軒で、うち3軒（F9、F16、F28）は1層下、2軒（F23、F32）は2層中の確認である。2層中の2軒は何れも方形で門道が付く。1層下のF16も方形で門道が付く。これら石積みの住居は何れも遺物が無く、時期の特定が難しい。

1層下（2層上面）の住居（17軒）

F3（楕円）、5（不規則円石）、7（不規則D）、8（隅丸方門道）、9（石方）、10（不規則D）、12（不規則D）、13（D）、14（方）、16（石方）、17（不規則石積み）、21（方）、29（不規則石積み）→24（方）、28（石方）、34（不規則方）、38（不規則）

上の住居と重複するが、確認面が特定されていない住居（8軒）

F6（隅丸方門道）（→5）、15（方門道）（→14）、19（不規則）→18（→17）、22（方門道）（→21）、36（隅丸方形）→35（隅丸方形）（→34）、39（残楕円形？）（→38）

2層中の住居（4軒）

F20（隅丸方）、23（方石）、32（方石）、37（方門道）

2層下（3A層上面）の住居（9軒）

F1（方）、2（方）、4（円）、11（方）、25（D）、27（方かD）→26（隅丸方）、31（D）→30（不規則方）

3A層中の住居（1軒）

F33（D）

* F17について5頁の層位説明の項と44頁の遺構の項で説明が異なるが、遺構説明を採用する。F29は遺構説明では掘り込み面の記載がないが、層位説明の項では1層下とする。矢印の左側が古く、右側が新しい。

*大嘴子87年報告は住居址別に遺物を載せるのが特徴だが、復元不能で図面のない土器がかなりあるため、全容を完全につかむのは不可能である。

大嘴子の竪穴住居の平面形は不規則なものが多く、分類が難しい。下の方では、D字形が目立ち、2層下では、D字形から方形という重複が2組あるから、D字形から方形へという双砦子で見た流れと符合している。ただし、この段階にF4の円形もあるし、双砦子では壁沿いの石積みが常にあったのとは異なる。

さらに上の2層中の住居では石積み方形が現れるが、層位的にはほかの方形の竪穴住居と併存している。この段階から門道付きが現れ、1層下で門道付きが増える傾向にあり、門道付きが新しい傾向であることも双砦子遺跡と同じである。

2層下では、重複関係にある2組があるので、最低2時期に分かれる可能性がある。87年資料では合計9軒、92年資料でも9軒で重複関係を持つ住居址群が4組あった。

2層中の住居というからには、第2層の層の中間に構築時の生活面が無ければならぬし、そうであれば第2層はさらに細別が可能であったことになる。また、この層の住居に2層下にはなかった方形石積みが現れるが、92年調査では、石積み住居は2層下のもっとも新しい段階であった。何れも遺物を伴わないから、相互の関係の検証は遺物からはできない。

1層（表土層）下には多様な形態の住居がある。表土層の下に確認面があるということはそれらの住居址の他の層以上に同時性を保証することにならないから、多様であるということは時期差のある住居を含む可能性がある。少なくとも同じ一層下の確認面を持つF29、F24という一組の重複関係はあった。不規則D字形としたものは、下層のD字形とはつながらないのであろう。中間の住居が方形を中心とするのに対し「不規則」というのが目立つ点に特徴がある。もっとも新しい1層下の住居以外に、その住居と重複してその下にあったが、掘り込みの確認面が特定されていないものがある。これらは、2層中以下の住居との対応関係が分からない。おおむね方形なので、もっとも古いD字形に遅れるとしても、2層下から方形が出ているので、2層下から1層下までのすべての段階の可能性を持つ。したがって、1層下住居に関係する最大で3軒の重複がそのまま2層下あるいは2層の住居よりすべて遅れることにはならない。

双砦子遺跡の組列では、D字形から方形であったが、大嘴子ではさらにその後の段階に不規則形という段階が設定されるのであろうか。伴出する土器からこの問題に迫らなければならないが容易ではない。

上で、2層下でおおよそ二細別すると一時期4、5軒となり、1層下も二段階とすると一時期9軒前後になる。一層下の住居と重複する住居群は8軒6組あり、それらが2層中、あるいは2層下の住居址に算入される可能性があるから、それらを含めると2層中、2層下の数が増し、もう少し増える。他方、1層下がさらに細別できるとすれば、一時期にだいたい6、7軒前後が、6段階前後にわたっているという数値が出てくる。もちろん集落全体の調査ではないから、集落の規模はさらに大きかった。ただし、一部の住居址は土器だらけで居住空間が無く、住居とは考えられないものまであるので、すべてを同一の性格として扱うわけにはいかなそうだ。

双砦子遺跡ではさらに同一場所で重複を連続して繰り返すという定着性を見せていたが、大嘴子も

また長期継続型の安定した集落であった。遼東半島西部に双砬子3期文化の段階の集落が突然増えるが、その集落自体も安定した集落であった。

・器種構成と用途

小型の甕（あるいは小型短頸広口壺と呼ぶべきもの。報告では「罐」であるが、中国考古学の「罐」の範囲はきわめて広いので、ある点では便利だが、ある意味では漠然としすぎているのでなるべく使わない。ただし、図がない場合は翻訳不能である。）は2層下の87F2の35, 36や2層中の87F37の25, 26では胴部が丸味をおびてかつ最大径が中央部にあるが、大型壺と同様に、87F10の5, 6では最大径が上に上がり、全体に細長くなっており、そのために相対的に口縁は低く径も大きくなり、ここまで来ると小型壺というよりは明らかに甕である。

双砬子3期文化の土器組成は大型の短頸広口壺と小型の甕（ないしは小型短頸広口壺。）からなるというのが特徴である。住居址一括遺物の器種構成も大小はあれ、大型の広口壺と小型罐がほとんどいう双砬子3期文化の器種構成を持っている。5点以上の土器が図示されている住居址毎の、報告書の器種分類による構成比をとると、大型の広口壺が約半数を占め、小型の罐と合わせると8割前後を占めることになる。その大型壺が無くなると見るか、中型化すると見るかの相違はあるが、大型壺自体が小型化の傾向がある。そして、元来小型のものが細長の甕らしい甕に変化しているところに、次の段階の尹家村1期文化の、より小型化した壺と甕がセットなる器種構成への移行期として、双砬子3期文化の器種構成上の変容と見ることができる。華・陳（1996）が後期後半の特徴として、壺が減少し、小型土器や細長い罐が増えると述べていたところである。

宮本（1991）が報告した上馬石貝塚の地点別中、もっとも古いと考えられ、双砬子3期文化の年代にもっとも近いBⅡ区の器種構成が壺、短頸壺、罐、甌に限られており、後続するA区下層、上層にある碗や高坏がないなど、器種が豊富ではないと述べていることはこの点で注目されよう。

・87年の層位と92年の層位関係から見た土器の変遷

1987年資料（図9、14）では、細砂灰褐陶が主で、少量の黒皮陶と泥質灰陶がある。二次的に火を受けた土器は灰褐色のものが紅色あるいは紅褐色に変色しているとする。1992年の土器は火災を受けた住居から出ている土器が多いから、そのため紅陶が多いのであり、本来差異はないと考えられる。

両調査時の層位別資料を統合して、張翠敏（2004）1）が大嘴子遺跡の土器編年を試みている。張は報告書に記された住居毎の確認面に従い、2層下は上で述べたように華・陳編年を修正し、A、Bの二段階に分け、1層下をD段階とし、その間のC段階には2層中の住居の他に、1層下の住居の下にあったが掘り込み面が確認できない住居やおそらく誤認であろう2層下の住居1軒も入れている。C段階は客観的な層位関係に基づくものではないが、大嘴子土器が層位に従い漸移的な変化を示しており、それを読み取るだけならそれによって破綻を示すことはない。土器をAからDの4段階に整理した。その結論として、住居出土の土器を報告された層位に従い4段階に分けてはいるが、漸移的な変化を示し、大きな差は認められないという結論になっている。確かに、1987年資料では、2層を挟んだ下と上の住居址から出る土器に類似点が多く、92年の2層下からの住居だけを用了土器編年では全体の理解が難しいのである²⁾。

図8の92年資料だけでは、羊頭窪的な、点列と横走沈線に代表される土器群が古く、大嘴子的な頸部に斜格子文や羽状文、あるいはさらに発達した幾何学的な文様をもつ、望海塢タイプの土器が

新しいことになる。他方、図 10 の 87 年資料だけでは、頸部に斜格子文や羽状文を持つ土器が古く、頸部に点列や横走沈線を持つ羊頭窪的な土器が新しい。そして、望海埞タイプの土器は中間の 2 層中から出ている。

図 9 では 87 年の出土土器を大型の短頸壺をもつ住居単位で下から上に層位的に並べている。中間の 2 層中 F37 の住居から出ている土器の胴部に点列や横走施文が目立つが、もっとも古い 2 層下ももっとも新しい 1 層下も胴部は無文で、頸部に沈線による帯状の施文帯を持つという特徴はよく類似する。2 層という鍵層を重視するかぎり、張の述べるように上下にほとんど変化がないが漸移的な変化はあった。そして、この漸移的な変化の中で、92F3 から出た望海埞タイプはきわめて異質に見える。

小型壺の場合、そこに変化を見ようとすれば、例えば、87F10 の 2, 3 の土器は器高が低くなり、口径が増し、ずんぐりとした形態に変化している。胴部の最大幅も上で見てきた変化と対応するように、中央部から上に上がり、肩が張り出すようになっている。その流れの中で、頸部の文様のモチーフはより下層では斜格子文であるが、より上層では綾杉文になっている。

図 9 の 1 層下の大型広口壺 (1) と図 10 の 2 層下の F25 の 32 の大型広口壺は頸部の集線鋸歯状文や器形がかなり似ている。2 層下の住居は華・陳編年ですでに細別されているように、細別されるべきとすると、1 層下の土器に近いことと、33 の頸部に三角充填斜線文があり、また、胴部の肩が張り最大径がかなり上にある点など、これは 87 年資料の中ではもっとも 92F3 資料に近いものであり、2 層下の中でも新しいと見る。34 は双砵子 F4 の圈足付き広口壺 (図 7 - 3) に類似することは否めない。双砵子でより古いと見た F17 の胴部形態は 92F3 より古い 92F5 に近いことも相対的な新旧関係を支持している。大砵子に 1 例だけある F4 の頸部斜格子帯状文をもつ広口壺は大嘴子の組列では、胴部最大径が中間付近で丸味を持つことから、2 層下でも F25 より古く、92F5 に近い。しかし、87 年資料に類例のない、頸部帯状施文広口壺を組成しない 92F5 がたんなる偶然でないとすれば、92F5 以後の段階に大砵子の土器は併行することになる。しかし、そうすると大嘴子では 92F5 のある段階から頸部帯状施文が突然出てくることになり、これはまだ分からない。少なくとも、大砵子 F8 は双砵子 F4 に併行する大砵子 4 より古くしていることから、相対順序は整合的である。

2 層下 87F2 のそろばん形の胴部を持つ小型壺 (37) も 1 層下の F8 の小型壺 (図 10 - 12) の器形とよく類似する。1 層下 F21 の胴部がくの字型に屈曲する台付の土器 (図 10 - 21) も 2 層下 F30 の土器 (同 26) と器形がよく類似する。口縁部を欠く台付壺の胴部形態は 2 層中 87F37 の 28 と 1 層下 87F10 の 4 ではほとんど変わるところがない。

2 層下の重複関係にある 2 組の住居址や、1 層下の重複関係にある住居址群では共通する器種が見いだせないため、土器の変化がうまく読み取れない。

・もう一つの組列化の視点

このような図 9 のような組列とは別に、しかしながら、やはり下から上に層位的に土器を並べた図 10 を見るとまったく別の印象を受けるであろう。

図 9 の 1 層下 87F10 の土器と図 10 の 1 層下 87F3、あるいは F38 の土器はまったく様相が異なるように、同じ層位であっても異なるという別の現象がある。図 9 の資料だけを抽出すると、2 層の下と 1 層の下とはまったく異なる土器である。

下段の 2 層下 F25 や F30 の土器組成と比較すると、もっとも異なる印象を与える原因は大型の頸部に沈線による帯状施文を持つ短頸広口壺がないためである。1 層下の F3 や F8 では中型の広口壺

に変わっていると見るか、たまたま大型の短頸広口壺が欠落していて本来あったと見るかである。

87F3は1層下の住居であり、2層下から確認された92年の住居のすべてより新しいはずであるが、点列と横走沈線だけの文様で胴部は無文が多いという特徴は華・陳編年ではもっとも古い前期の92F5の流れを直接引くように見えるのである。F8の7も頸部に一条の隆起線がめぐっている。大型の広口壺ではその隆起線と口縁部、あるいは頸部の間に帯状施文をしていたのが、無文化したのだとも見える。

87年資料の2層下の住居には92F3のような望海埒タイプの文様を持つ広口壺は見られず、包含層の2層に類例(図10-41~45)を知ることができる。ほかの器種では、48、49、51、52などがその仲間であろう。住居址の中では、2層下の87F25(33、34)や1層下のF17(16)に近いものがある。

従来の理解では、双碇子3期文化の土器は古いものは点列や点列と横走沈線文が一般的でかつ胴部無文の土器が多い段階から、新しくなると、沈線による幾何学的な文様が増え、かつそれらが胴部にも施文されるようになるとの理解であり、それは華・陳編年とは整合的であり、大嘴子遺跡92年資料はそれを裏付けると考えられたのである。そうであるとする、望海埒タイプの土器が大嘴子1層下住居段階と2層下住居段階の中間に位置することは考えにくいはずであった。これらに近い土器は92年では2層下のF3から出ており、何れにしても、87年と92年資料の層位の対応が正しく、かつ87年の層位が正しければ、望海埒タイプの広口壺は双碇子文化3期文化の中で末期のものではなくなる。そのような観点からもう一度、華・陳編年の内容を読み取ると、かれらも望海埒タイプの土器は後期前半に盛行し、後半には衰退するとしているのであるから、それより新しい1層下の住居に出てこなくなることは予想されていたとも言えよう。92F3という特異な住居址を代表にする、望海埒タイプの土器の段階が途中にあり、新しくなると再び点列と横走沈線を主として、文様が単純になり、減少する。華・陳編年でも後期後半になると望海埒タイプが衰退することになっていたが、さらに極端な形で望海埒タイプの広口壺は衰退している。そして、F17の篋とも呼ばれる台付鉢の胴部上半部の文様として残る。上馬石上層文化の土器には頸部に幾何学文を持つ広口壺は継承されず、頸部文様として継承されるのは、大嘴子の各層位の住居から一貫して出てくる斜格子や羽状の帯状施文である。そして、望海埒タイプのような文様は胴部に施文されるから、その点ではこのような変遷に大きな問題はないし、逆に整合的でもある。また、同じ望海埒タイプでも、92F3と2層ではやや異なり、2層の方が望海埒遺跡例に近いから、大嘴子の層序関係はその新旧の区別を示していると考えられる。

F38の土器(18-20)は異質な土器群で流れを追いにくい、口縁の平面形が楕円形になる土器に特徴があり、それは双碇子3期文化の中でも新しい碇頭墓地で舟形土器(図3-56)とされたものに近い。大嘴子では2層以下には出ていないし、伴出した土器も他の住居に類例がないものだから、大嘴子の1層下の住居の中でも新しい様相として区別されるべきには違いない。

1層下の87F34には大型の盆(図9-77)が出ている。同じく、1層下の87F3(図10-1)にもある。華・陳は大型の盆は前期に限られるとしていて、それが双碇子F7を彼らが前期に位置づける上でも重要な意味を持っていたが、F3やF34は2層を掘り込んでいるのである。92F1を古い大型盆の代表として、87F34を当たらしい段階の代表とすると、羽状文を頸部に持つ双碇子F7の盆は87F34により近い。ところが、同じ1層下の広口壺の文様も異質な87F3の大型盆(図10-1)は頸部が点列文様で、胴が長い点で、92F1に近い。他方、2層下には、F30の盆(図10-27)のように、胴が短いものがある。F30例はF34例よりやや小型だが、器形は相似形である。つまり、

大嘴子の大型盆には頸部に沈線か点列による単純な文様を持ち、胴が長い系列と、頸部に沈線文を施し、胴の短い系列が併存していたようである。したがって、今見つかった中では、双砦子 F7 例は大嘴子では 1 層下の例にもっとも近く、これは上で見てきた双砦子と大嘴子の併行関係に問題を生じさせるのである。広口壺から求めた併行関係である 2 層下新段階まで遡る可能性を残していると言えようが、問題を残す土器ではある。

・包含層出土のそのほかの土器

2 層包含層中の土器（図 10 - 37 ~ 69）は、もしも層位が理想的な在り方を示すとすれば、2 層下の住居址と 1 層下の住居址出土土器の中間的な土器を含むはずである。また、2 層中に確認面を持つ住居址の土器ともっとも近いはずである。他方、2 層中のどこかに住居址の構築面があるとすれば、2 層はさらにそれを境に上下に分層が可能だったはずであり、2 層中の住居より古い土器と新しい土器を含んでいることになる。

だが、実際には上下の住居の土器をつなぐ共通点を持つもの以外に 87 年の住居址からは出ていない異質な土器を含んでおり、第 2 層は複雑な内容を示している。

棒状貼付浮文（図 10 - 70、71）が 2 層から出ているが、70 の広口短頸壺の口縁のようであり、于家村 F1 や双砦子 F1 と砦頭に近いものであるが、棒状浮文の付いた碗 54 は崗上墓下層や双砦子の棒状貼付浮文の付いた碗よりは貼付の間隔が広く古そうである。

大連湾では、戦前の採集品であるが、浜町貝塚から出ている口縁を欠く土器に棒状貼付浮文の土器（図 13 - 1）があり、それは器形から見ても、砦頭の棒状貼付浮文のつく台付鉢と同様のものであり、また棒状貼付浮文の間に逆 V 字貼付文をめぐらす広口壺の口縁らしきもの（同 - 2）は、器形は異なるが、崗上墓下層の碗の文様と変わらない。大連湾にも砦頭・崗上墓下層段階の土器が広がっていたことを知ることができる。大嘴子の棒状貼付浮文はそれよりはやや古そうである。であれば、相対的な古さとして于家村上層ぐらいと考えておきたい。ただし、大嘴子の 1 層下の住居が砦頭、崗上墓下層まで下り、浜町貝塚とは別の分布圏を形成したか、あるいは大嘴子 1 層下がそれ以前のものかは確証がない。

3A 層から出る土器は層位的には、大嘴子のすべての住居の土器より古いことになる。碗や小型の罐（あるいは広口壺）、あるいは 3 カ所に切り込みのある圈足などは 2 層下の土器と大差なく、この層も報告されているとおり、双砦子 3 期文化に属す。

78 の長頸壺は隆起線が 4 本めぐる。長頸壺で、微隆起が頸部に何条も回るものとして想起されるのは、双砦子 2 期文化の単砦子 M1 の壺であり、器形は異なるが双砦子 3 期文化の中でも古相を示すものとして理解しうる。

双砦子 3 期文化の土器を代表する大型の広口壺は頸部に沈線文による帯状の施文のある大型広口壺が第 3 層から破片も紹介されていない。74 の文様は 2 層下の 92F3 にしか類例がないもので理解に苦しむし、76 も 2 層の 47 と大差ない。しかし、72 ~ 74 などが主ということになれば、そのことと陳・華編年で前期とされ、87 年の 2 層下に類例が認められなかった 92F5 や 87F27 にもそれがないことと符合し、頸部が無文や横走沈線と点列からなる 92F5 は 2 層下の中でもやはり古いということになる。

2) 廟山の土器

金州湾の北側に位置する廟山遺跡（吉林大学考古系 1992a）では、やはり遺跡形成では双砦子 1

期と3期が重複するが、主要な遺構、遺物は双砦子3期のものであった。12軒の住居はすべて2層ないし2層がさらに細別された場合は2B層下から3層を掘り込んでいた。8号住が平地式以外は壁に石を積む竪穴住居であった。

層位的に、3層→住居→2層（地点により2A、2B層に分層）となる。3層もまた双砦子3期文化の包含層であったが、2、3層には、報告で後期A類とされた、双砦子2期文化に近い一群の土器が少量含まれていた。

後期A類（図11-31、32）は少量しかないが、口縁直下に張り出しがあり段になる特徴があり、それが山東岳石文化あるいはその地域類型でもある双砦子3期文化の土器の特徴に類似する。しかし、その頸部には横走沈線城に点列を加えており、双砦子2期よりは3期の文様を持っている。したがって、双砦子3期の中でも古い一群とされた。口縁部に一對の縦の環状把手を持つのも双砦子3期には珍しい。

主体をなすのは、後期B群である。出ている土器は、黒褐陶が主で、灰褐陶が次ぎ、一定量の黒皮陶と光沢のある黒陶がある。

廟山の土器は、方形や三角形内充填文による幾何学的な頸部文様を特徴とする望海埧タイプの広口壺が特徴的である。そしてそれらは廟山遺跡内の層位関係では住居址より新しい第2層から出ている。

第2層から出る、広口壺の頸部に付く三角充填斜線文（8）や方形充填縦線文を千鳥に配する文様（9）あるいは菱形充填斜格子文（10）などは、大嘴子では、92F3と第2層に見られる文様であった。9は後述する牧羊城1類土器古段階の土器（5節図1-17）にも見られる文様である。

第2層から一緒に出ている2層の12あるいは2a層の1も大嘴子によく見られる大型広口壺頸部の文様と同じである。11の羽状文の間に線がある魚骨文のある圈足付き壺は大嘴子1層下F8-10にある。14の二重口縁で刻みの付く土器は甗ではなく「罐」と報告されている。遼東半島では遼寧式銅剣の時代以後に普及し、双砦子3期文化では一般に見られない器種であり、注目される。

第2層の下から発見されている住居址では、廟山のF6の土器は大嘴子の92F1:10の大型盆と呼ばれているものに近い。華・陳編年で前期に置かれているものであり、廟山の2層から出ている土器は、華・陳編年の大嘴子後期前半の92F3の多様な広口壺の頸部文様が共通するから、大嘴子2層下の92F3という不都合な事例を除けば、廟山の2層下住居→2層と大嘴子の2層下住居→2層は連動する部分がある。ただし、華・陳（1996）では、同じ雑誌に同時に掲載された報告での所見、F8平地住居はF6の竪穴住居により切られている、とは異なり、F6がF8に切られているからより古く、だから大嘴子華・陳編年の前期に該当すると述べる。報告を読むかぎりは報告の新旧関係を信頼すべきと判断されるから、F8が古い。そのF8では高坏（図11-21）しか報告されていないが、その高坏は大嘴子2層下87F2の高坏（13-42~44）とよく似ている。それよりF6は新しくなる。17の口唇に刻目のある甗も双砦子3期には珍しいもので、砦頭墓地や高麗寨の甗を想起させる。

住居址が掘り込んでいる第3層の土器（22~30）は層位的にそれらより古いはずである。

30の簋の器形は2a層の簋（3）の器形とは大きく異なる。大嘴子遺跡で類例を検索すると、92F3の簋（図8-27）が3層の簋に近い。92F3の有文の土器は大嘴子の層位では望海埧タイプの中ではより古いものであった。望海埧の資料（島田・森1942）（図12）は、おそらくこの廟山の第2段階の土器とともに、大嘴子の層序では、同じ望海埧タイプでも2層下の92F3の土器より2層の土器に近いので、相対的な新旧関係はあっている。

廟山や望海埧のような望海埧タイプの頸部に幾何学文を持つ広口壺は双砦子3期文化の中で新しい様相であることは間違いない。しかし、上馬石上層文化に受け継がれる広口壺の頸部文様は斜格子

や綾杉文の帯状施文であり、このような長い頸部に幾何学的な文様を施文する広口壺は、後続する上馬石上層には受け継がれない。受け継がれるのは、その文様であり、その文様は上馬石上層文化ではすべて胴部上半に移動している。大嘴子ではそのような胴部文様は2層包含層あるいは1層下の簋あるいは鉢に見られる。したがって、その点では大嘴子遺跡で1層下からは望海埧タイプの頸部幾何学文広口壺が出なくなり、頸部帯状施文の広口壺と同部幾何学文の簋ないし鉢という組合せになるのは、後続する上馬石上層文化との関係では整合的である。

ただ、注意されるのは、廟山には17のような口唇に刻みのある甕あるいは14のような刻み付きの粘土帯土器、27のような舟形土器という、双砮子3期文化でも砮頭に類例の多い、新しい様相をもつものがある。望海埧タイプにも時間幅があり、少なくとも大嘴子92F 3が古く、廟山や望海埧が新しいことが分かった。その上で、存続する下限がどこまで下がるかである。また上馬石上層文化との移行期あるいは同文化の最古の段階と考える高麗寨にはこれらの口唇刻み甕、粘土帯甕、舟形土器がすべてあることも、双砮子3期文化の中で廟山2層の下限年代があるいは大嘴子の1層下併行期まで下る可能性を残していることを示している。ただし、積極的な証拠もない。

3) 上馬石貝塚の甕棺墓

上馬石貝塚は、長山列島にあり、戦前から知られる貝塚であり、戦前に日本学術振興会がおこなった調査は澄田(1986, 1988, 1989)や宮本(1991)により紹介、分析されている。戦後は、1977年に甕棺墓と青銅短剣墓が調査され、翌1978年には長海県島嶼部の調査の一環として、上馬石貝塚が調査された。後者の調査の報告(遼寧省博物館ほか1981)で、小珠山下層文化に属する下層、小珠山上層文化に属する中層、上層に分けられ、上馬石上層文化類型(以下では上馬石上層類型とする)が設定された。双砮子3期文化(報告では于家村上層で代表)に甗が現れ、上馬石上層類型では甗が主となる。双砮子3期文化には点列と横走沈線文からなる文様があるが、上馬石上層類型にもある。上馬石上層類型には横向きの橋状把手と口唇状把手の付く罐と壺があるが、双砮子3期文化では稀である。以上から、上馬石上層類型は双砮子3期文化と同じ段階かあるいはやや遅れる段階とした。遅れて翌1982年に甕棺墓と青銅短剣墓の報告(旅順博物館ほか1982)があった。

青銅短剣墓も甕棺墓も78年のI区に位置する。青銅短剣墓は2層の上層文化層を掘り込んで、甕棺墓は3層の中文化層を掘り込んでいた。従って、I地区の上文化層の下限は青銅短剣墓で押さえられ、上限は甕棺墓で押さえられる。その甕棺墓の年代は上文化層と中文化層の間である。

双砮子3期文化より遅れる上馬石の上文化層および青銅短剣墓は次節で扱い、ここで扱うのは甕棺墓である。

75年調査の1基と合わせ合計17基が調査された。幼児や小児あるいは未成年の死体を土器に入れて土坑内に埋めたものである。未成年は二次葬であった。口縁を上に向けた甕棺では板石で蓋がしてあった。口縁を下にしたものでは底部が打ち欠かれていたが蓋はなかった。土坑内には、明器である小型の壺や罐、骨製の管、貝製の珠、石鏃が副葬されていた。

甕棺は砂混じりの黒皮陶である。副葬の小型土器も砂質の黒褐陶、黒皮陶であった。当時の報告では、図14-2の壺が双砮子2期文化に属する単砮子M1の壺(浜田編 1929)に似るとして、その時期とした。その後も、陳(1989)や徐(1990, 1997)は小型の壺(9, 10)の頸部に隆起線がめぐることに着目し、双砮子2期文化あるいはそれに時間的に併行する別系統の土器とした。それに続いて、高麗寨遺跡の資料が双砮子3期文化段階であるとの見方(華・陳1996など)がある。

しかし、図14-1の壺は上で見てきた双砮子3期文化のものとはほぼ同じであり、これをも含めて

双砦子 2 期文化段階に含めるのは無理があろう。頸部帯状文の上下を画するのが、甕棺墓の土器は双砦子 3 期文化と同様に隆起線なのに対し、後続する上馬石上層（宮本 1991）や高麗寨（浜田編 1929）にも同じような文様を持つ短頸の広口壺があるが、それは沈線で画す点で異なる。双砦子 3 期文化の広口壺の頸部は帯状施文の区画だけ磨かずに残すという特徴があり、おそらくこの磨きもその隆起線の作出に関与しているのであろう。

ただし、上馬石甕棺の頸部の調整は不明である。高麗寨にはさらに古い土器が少量含まれるようだが、古い部分の主体はかつて、牧羊城、上馬石、高麗寨を並べた（大貫 1982）ように、双砦子 3 期以後であると考えるので、次節で触れる。ただし、高麗寨は移行期的な様相があり、同一地域の上馬石上層とは内容が異なり、より双砦子 3 期に接近していることは確かである。その中には、頸部に沈線文による帯状施文がある点では大嘴子的であり、頸部に点列文がある点では羊頭窪的である。地理的に考えても上馬石上層類型が双砦子 3 期文化の大嘴子類型の基礎の上に羊頭窪的な要素も加えながら成立したことを逆に物語るのだと考える。そのことが逆に大嘴子類型の新段階である、1 層下の住居に大嘴子的な土器を持つ住居と羊頭窪的な土器を持つ住居があることの意味なのであろう。

頸部に隆起線をめぐらす壺は別の墓坑から出ているから、この墓地が双砦子 2 期から 3 期にわたって長期に継続したという考えもあろうが、そこまでを想定するほど、単砦子 M1 の長頸壺に似ているわけではない。頸部に隆起線を一条めぐらすだけであるなら、すでに大嘴子遺跡の 2 層の壺でも見た。双砦子 2 期文化と双砦子 3 期文化との連続性を羊頭窪類型とは異なる形で示す類型の一様相なのだと考えればよいのではないか。

4) 小結

廟山遺跡や望海塙に特徴的な望海塙タイプを除くと、羊頭窪や双砦子とは異なり、大嘴子遺跡では羊頭窪に典型的な横走沈線と点列からなる組合せ文様はわずかにあるが、基本は広口壺の頸部に沈線文によって施される帯状の文様である。これらを代表として、双砦子 3 期文化の「大嘴子類型」を仮に設定する。ただし、断っておくならば、純粋に片方だけの文様だけで成り立つ組成はほとんどない。混じり合う割合で分けるので、きれいに一線が引けるわけではない。そのことが歴史の実態なのであり、重要なのであろう。

たとえば、大嘴子 92F5 が単独の段階で設定できるのであれば、もっとも古い段階では羊頭窪類型との差はそれほど大きくはない。いつかは羊頭窪類型的なものが全体に広がらないと、鴨緑江下流域の新岩里 2 期文化と双砦子 3 期との類似が以前から指摘されていることの説明ができなくなるのである。両者が接点を持つのは、両者の間に割ってはいない大嘴子類型が隆盛する前か後でなければならない。その後とすると羊頭窪類型では砦頭のような段階であり、新岩里 2 期との対比にはふさわしくない。接触があったとすると双砦子 3 期文化のもっとも古い段階となろう。双砦子 2 期文化が双砦子 2 期文化の後裔であるとするれば、羊頭窪類型の方が変化を説明しやすいこともある。

また、従来は、漠然と大嘴子 92F3、廟山 2 層や望海塙のような幾何学的な沈線文が発達して、それらが半島中部では高麗寨につながるのだと理解していたが、大嘴子の層位を素直に理解すれば、そのような単純な変遷ではなく、胴部幾何学文を発達させるという点で、間接的につながることになった。しかし、廟山に見られる新しい要素は無視できないので、廟山がそのほかの双砦子 3 期文化の遺跡とは離れていることから、あるいは一部大嘴子類型と交錯しながら分布した別の類型で、地域的にはさらに末期まで継続したという可能性も考えておくべきかも知れない。

87F3 のような横走沈線と点列文を中心とする羊頭窪系とも言える土器群がもっとも新しい段階で

ある1層下の住居群の中で単独の段階を設定できるのかも分からない。1層下の同時期に87F10のように、沈線文による帯状施文の文様を持つ大嘴子系の土器群を持つ住居と共存したと考えるのは集落構造上面白い話になるが、経験的には時期差に収まると考えると、大嘴子の流れでは、87F10がその下からの継続であるから、途中で87F3が入るのは不自然であるとする、羊頭窪系がまた最後に出てくることになるが、砦頭や崗上墓下層あるいは大連浜町との差が大きすぎてその説明も難しい。ただし、羊頭窪類型の新段階の頸部の横走沈線は多条であることが特徴であり、大嘴子類型の頸部に見られるものは1条の横走沈線に点列を加えるものであり、羊頭窪類型そのものが新段階に東部に広がるわけではなく、どちらかといえば羊頭窪のあるいは羊頭窪系と呼ぶだけのことである。次段階との移行期とも言える高麗寨にも頸部帯状施文があり、それとの連続性では87F10のような頸部帯状施文の広口壺が最後まで続くべきである。大嘴子類型の始まりと終わりをめぐっては、まだ謎が多い。

5. 炭素14測定年代

双砦子3期文化に関わる炭素14年代（半減期5568年）には以下のようなものがある。

遺跡・遺構	測定値 (B.P.)	樹輪較正值 (B.C.)	資料	備考
大嘴子遺跡				
87F3	2860 ± 75	1157-923	炭化穀物	1層下
87F13)	3080 ± 75	1431-1264	炭化木柱	2層下
92F1	3288 ± 92	1691-1459	木炭	2層下
92F3	2693 ± 92	970-797	炭化穀物 (アワ?)	2層下3号壺内
双砦子遺跡				
F4	3030 ± 90	1416-1137	炭化木柱	
于家村				
F1	3190 ± 85	1516-1317	木炭	
崗上墓				
下層	3190 ± 90	1591-1405	木炭	
上馬石				
上層	3040 ± 100	1420-1137	貝殻	I区T5の2層
上層	3080 ± 150	1520-1131	木炭	II区T5の2層

*出典は

中国社会科学院考古研究所編 1991

中国社会科学院考古研究所実験室 1993

上馬石上層は上馬石上層類型資料であるが、年代が重なっているので提示した。

もちろん、中心値ではなく、誤差の範囲の重なりを重視すべきなのであろうが、これらの数値による新旧が、中国の研究者の土器の相対編年に大きな影響を与えているのが読み取れる。

我が国の研究者でこれに倣って編年を組んだ者はいないが、測定年代を無視して自ら信ずる編年を組んだことが今回の弥生年代問題であったことを考えると、やはり再度慎重に考えるべきであろう。

大嘴子遺跡の測定値はおおむね層位的な順序とは整合的であるが、問題の 92F3 だけが突出して新しい。床面出土の壺の中の炭化穀物を測っているので、サンプルの由来には問題がないのであろうが、いわゆる自然炭化というものに問題があるかも知れない。この若い測定値は 92F3 あるいは望海壩タイプの土器の年代を下げるのに根拠を与えそうだが、1 層下より新しくなりそうで、大嘴子の層位的な変遷とは矛盾を来すので受け入れられない。

双砮子 F4 と于家村との新旧はかつて陳（1989）が于家村を古く、双砮子を新しくしたことと関連するのであろう。宮本や徐は逆に考えた。本稿でも逆である。誤差の範囲では重なるから、そこまでは読み取る必要はないのであろう。

崗上墓下層の測定値は大嘴子の 2 層下 87F1 の年代に近く、于家村とほぼ同じ数値で、双砮子 F4 とは較正值でもほとんど重ならず古い。崗上墓下層は双砮子 3 期文化の新段階であり整合的ではない。

大嘴子 1 層下の 87F3 の較正年代は 67% で 1130BC と 910BC の間である。これは砮頭墓地の銅鏃から双砮子 3 期文化終末の年代、紀元前 10 世紀頃と整合的である。

上馬石上層類型の測定値は双砮子 3 期文化の数値とほとんど同じであり、中国ではそのことが重視されてきた。1 例が貝殻のため、海洋リザーバー効果のせいにもできるかも知れないが、木炭もほぼ同じ数値を出している。78 年調査時の上馬石貝塚上層の主体は戦前の B II 区と同様の土器であるから、双砮子 3 期文化に接近してもよいが、あまりに重なりすぎていてそのままでは使えない。

個別の新旧を問わなければ、これらの数値は双砮子 3 期文化がおおむね紀元前 2 千年紀後半頃であることを示しており、それほど外れることはなさそうだ。大嘴子 1 層下の較正年代が 10 世紀まで下ることも注意はしておきたい。

6. まとめ

上では、個々の遺跡毎に煩雑な検討を重ね、老鉄山周辺、営城子周辺の遺跡を双砮子 3 期文化の羊頭窪類型としてまとめ、それより東部の遺跡を双砮子 3 期文化の大嘴子類型として括った。大嘴子遺跡の良好な資料が出揃うまでは、双砮子 3 期文化の資料はほとんどが羊頭窪類型に属するものであったから、このような地域差を示す類型を意識することなく編年をおこなっていたのも仕方のないことであった。

その分布の境界は、新しい段階では北の渤海湾側では、それは双砮子・崗上墓と廟山の間であり、南の黄海側では大連浜町と大嘴子の間にあった。おおむね、大連湾と金州湾で括れるところが両者の境界線であった。ただし、古い段階では、北側では双砮子遺跡は大嘴子類型に入る可能性があり、より西の大砮子と双砮子の間に境界が移動する可能性がある。南側は、浜町以外の資料がよく分からず、境界を論じることができない。

それぞれの土器の特徴を両者に共通する広口壺で述べるとすると、羊頭窪類型では、新しくなると頸部に多条の横走沈線をめぐらすのが大きな特徴であり、それに点列や棒状貼付浮文を付加することがある。大嘴子類型では、頸部に斜格子文や綾杉文を帯状にめぐらすのが大きな特徴であり、横走沈線をめぐらす場合は一貫して多条にならないし、棒状浮文も発達しない。前者の特徴は上馬石上層文化の尹家村 1 期類型に継承され、後者の特徴は上馬石上層類型に継承される。

羊頭窪類型と大嘴子類型の何れも双砮子 2 期文化に由来するはずだが、まだ細かい点は不明である。双砮子類型の砮頭墓地が積石塚で多人数合葬墓であることは周知だが、大嘴子類型でも廟山集落遺跡の近くには土龍積石塚があるから、大嘴子集落の墓地は不明だが、おそらくそうなのであろう。

双砮子 3 期文化の集落は継続性があり、住居址が重複することが多い。そのことが編年を促すの

であるが、戦前の羊頭窪では層位関係が捉えられておらず、また双砦子遺跡では、伴出した土器が公表されていない住居が多いため、双砦子類型の細別の理解が難しくなっており、大砦子遺跡での在り方を重視した。大嘴子類型では基本的に大嘴子遺跡の層序に従った。

双砦子類型の細別では、老鉄山周辺に於いて羊頭窪→于家村 F1 →砦頭墓地という、宮本や徐の編年案を基本としてさらに細別の可能性を探った。そして、営城子周辺では、双砦子遺跡の住居の重複を基本に、崗上墓下層をもっとも新しい段階に置いた。そして、これら両地域をつなぐ大砦子遺跡の層位を根拠に両地域の併行関係を探った。双砦子 3 期文化の古段階における双砦子類型の分布範囲は老鉄山周辺から大砦子までは広がるが、双砦子遺跡の古い段階の様相には大嘴子的な土器が見られるが実態が明らかでないため分からない。系統的な変遷を示す類型の広がりには時期により異なる。

大嘴子類型では、型式学的に十分な説明ができていないわけではないが、大嘴子遺跡の住居址および包含層の新旧関係に従い機械的に並べた。その結果、従来次への移行的様相を示すと考えられてきた廟山・望海埧タイプの土器は 2 層下 92F3 の古段階から 2 層包含層の新段階に分かれる。この望海埧タイプを除けば、大嘴子類型は新旧の間にきわめて連続性が強い。したがって、その途中で別系統の土器を組み込むのは無理である。望海埧タイプは分布地域を異にする別類型で、異系統の共存として理解すべきかも知れない。その場合の存続期間はかならずしも大嘴子での層序だけでは決まらず、より遅れる段階まで下る可能性もある。

問題は双砦子類型の始まりと終わりである。始まりと終わりに羊頭窪類型的な様相を示す土器群があるが、それらはやはり羊頭窪類型そのものとは異なるし、単独の段階を構成したのかも明らかではない。鴨緑江下流域との関係ではどこかで新岩里 2 期文化と羊頭窪類型が接点を持ったはずであり、その場合は、大嘴子類型の始まりの頃の方が可能性が高いとは考える。終わりは次の上馬石上層文化とのつながりを考えると、移行期と考える高麗寨には大嘴子的な要素以外に一部羊頭窪的な要素と見ることができることから、そのような融合した状況があったのであろう。

遼東半島の東のどこまで双砦子 3 期文化がおよぶのかは未だに分からない。現在までの資料では、双砦子 2 期文化の東限である単砦子遺跡と大差はなく、双砦子 2 期文化から分布範囲を大きく変更することはなかったらしい。新岩里 2 期文化は大小の長頸壺が基本であり、ほかに高坏と鉢などがある（金・李 1966, 後藤 1971）。双砦子 3 期文化が大型の短頸広口壺と小型の罐（新しくなると甕らしい甕）、あるいは高坏、碗、簋、甗を主な組成とし、圈足が流行するのとは異なる。それらの段階毎の出現傾向を考えると新岩里 2 期文化はどちらとさえ、双砦子 3 期文化でも古い方に類似する。

羊頭窪類型の終末と大嘴子類型の終末が同時かもまだよく分からない。羊頭窪類型が上馬石上層文

	羊頭窪類型		大嘴子類型
	老鉄山周辺	営城子周辺	
新	↑? 砦頭 于家村 F1	大砦子 2 層 (+)	↑? 大嘴子 1 層下住 ↑? 大嘴子 2 層 望海埧新
中	羊頭窪 (主)	大砦子 F8	(92F3) 古
古	羊頭窪 (+) 羊頭窪 (+) ↓?	大砦子 F4	大嘴子 2 層下住 (92F5) ↓?

表 2 双砦子 3 期文化の類型別暫定編年表

化の尹家村 1 期類型と連続的であり、また大嘴子類型が上馬石上層類型と連続的であるから、尹家村 1 期類型の始まりと上馬石上層類型の始まりが同時ならば、羊頭窪類型と大嘴子類型の終焉も同時だと言えるが、まだ間の空白が埋まっておらずまだ分からない。砦頭墓地に見られる双房—美松里類似の土器を双砦子 3 期文化直後とする見方もあれば、高麗寨の土器を双砦子 3 期文化末期とする見方もあるように、移行期の扱いが難しいからでもある。次節でもまた触れる。

以上のように、それぞれの類型内の変遷も小地域ごとにはある程度分かるが、類型全体の段階設定に至るとまだ未確定の部分がある。また、相互の併行関係にもまだ未確定の部分があるため、なかなか示しづらいのであるが、最後におおまかな双砦子 3 期文化の編年表を示し、本節を終える。

最後に誤解の無いように述べるならば、羊頭窪類型に属する住居の土器には大嘴子類型そのものような土器が伴うこともあり、大嘴子類型の場合は羊頭窪類型的な土器が伴うことがある。それぞれ孤立した無関係な状況ではなく、より目立つ特徴を抽出して別の類型として扱うだけである。中国考古学における類型は文化の下の細別単位であり、個々の土器を指すものではない。

注

1) 張敏翠の 2004、2006 年論文はほとんど同じ内容であり、一つの論文として扱うので以下では、初出の 2004 年文献で代表させる。

2) かつて本学大学院修士課程に在籍していた吉野真如君にこの大嘴子遺跡の土器編年および集落変遷に取り組んでもらったことがあった。結局、87 年と 92 年の層位の両立が難しくその解決が困難なために論文として完成することはなかった。

3) 大連市文物考古研究所編 2000 では F14 とする。F14 は T42 の 1 層下の発見である。中国社会科学院考古研究所編 1991 では「T4 (2) F1」とある。F3 は「(1) F3」と表記するから、(2) は 2 層下のことである。T4 の 2 層下から見つかっているのは、F1 である。F1 の測定値の方が古いから、2 層下の F1 の測定値とした方が整合的でもある。

図出典

図 2：水野編 1943

図 3：16、17、34、40 は許玉林・許明綱・高美璇 1982、ほかは旅順博物館ほか 1983。ただし、後者の統計表と遺物出土墓とに食い違いが見られ、出土墓室の特定に問題が残っている。

図 4：中社考研 1996

図 5：旅順博物館ほか 1981

図 6：大連市文物考古研究所ほか 2006

図 7：中社考研 1996

図 8：6 は華・陳 1996 より、ほかは遼寧省文物考古研究所ほか 1996

図 9：大連市文物考古研究所編 2000

図 10：同上

図 11：吉林大学考古系他 1992a

図 12：島田・森 1942

図 13：島村 1942

図 14：吉林大学考古系他旅順博物館・遼寧省博物館 1982

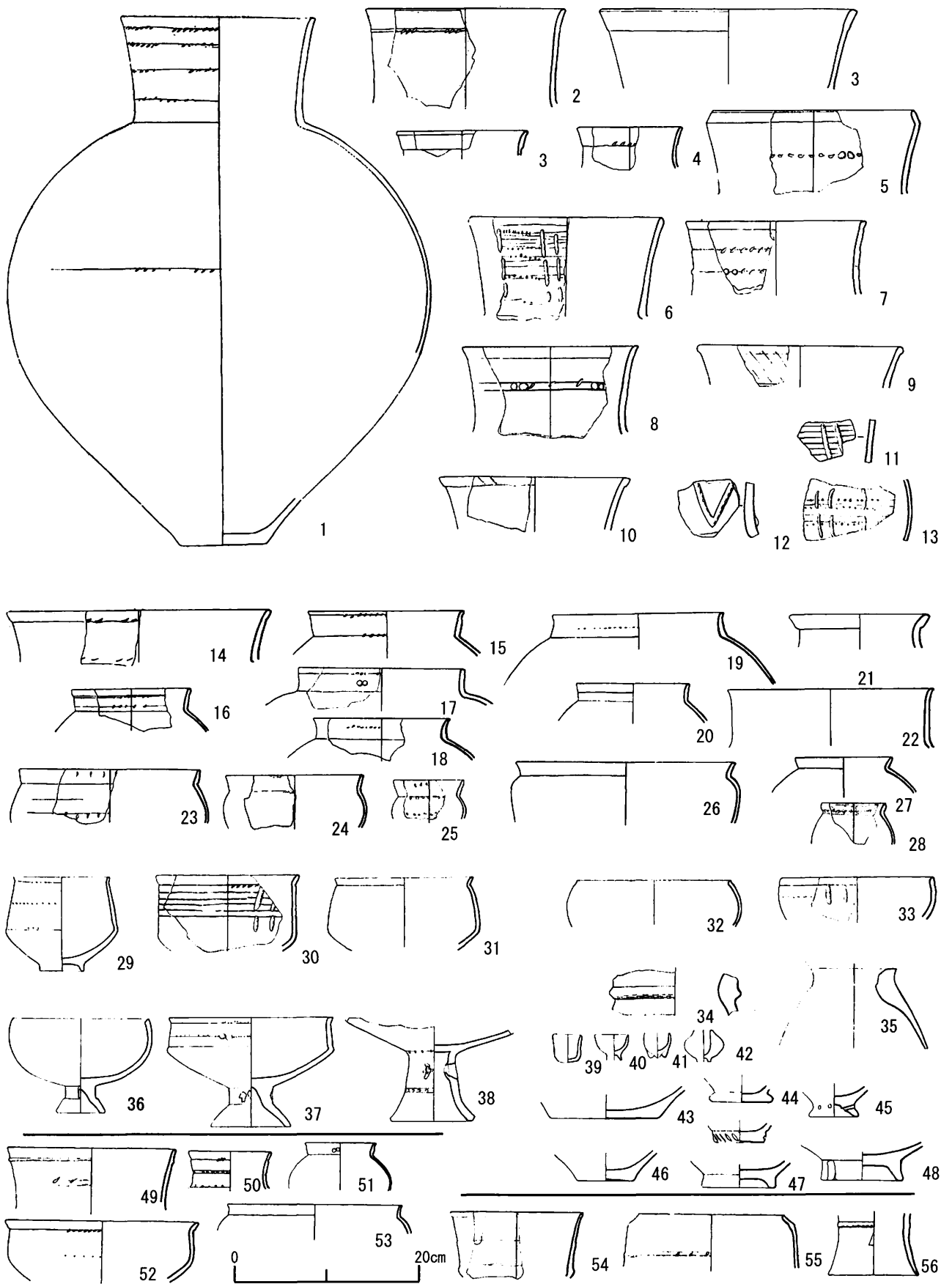
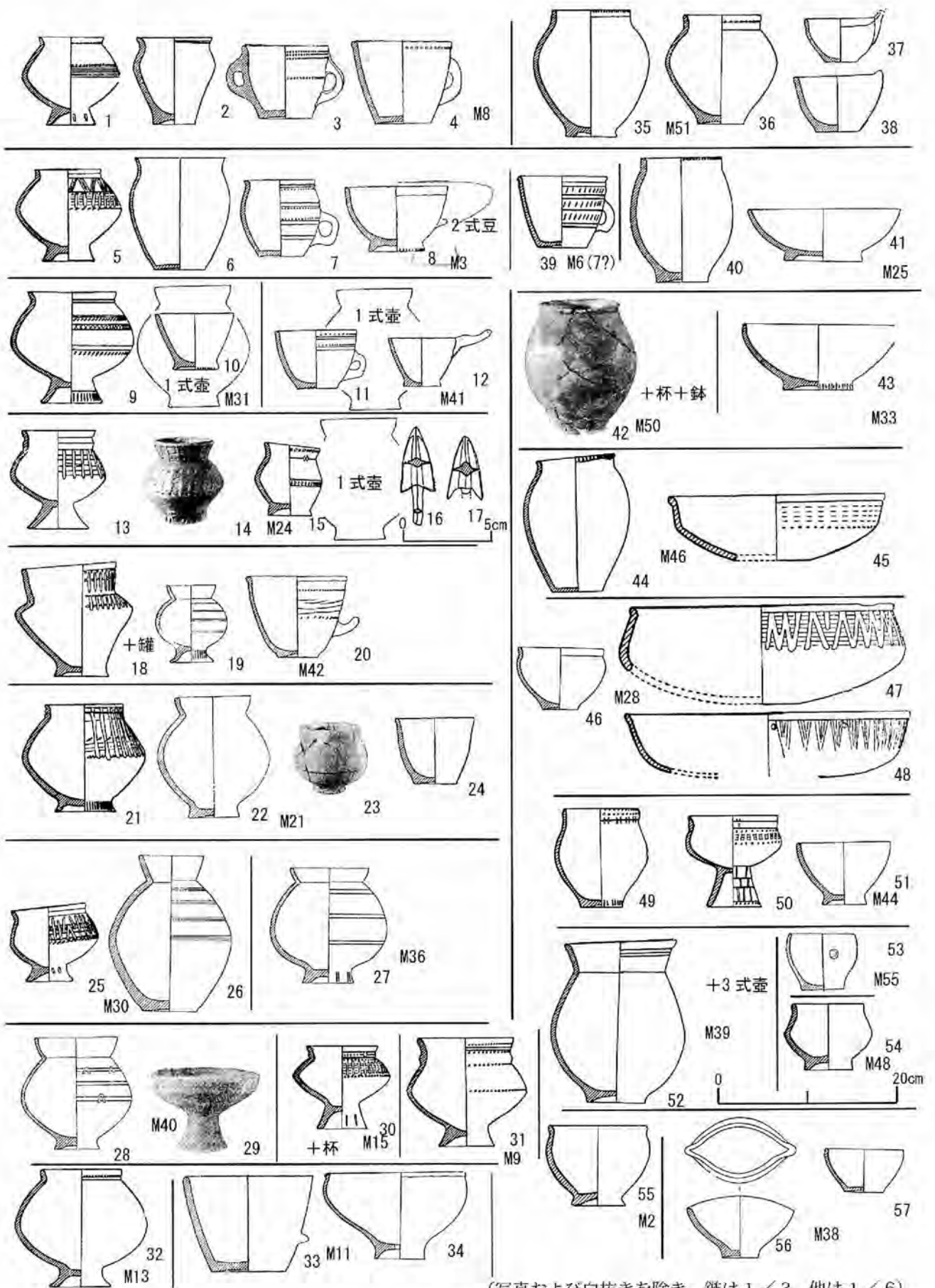


図2 羊頭窪出土の土器 (1 / 6)



(写真および白抜きを除き、鉢は 1 / 3、他は 1 / 6)

図 3 砦頭墓地出土の遺物

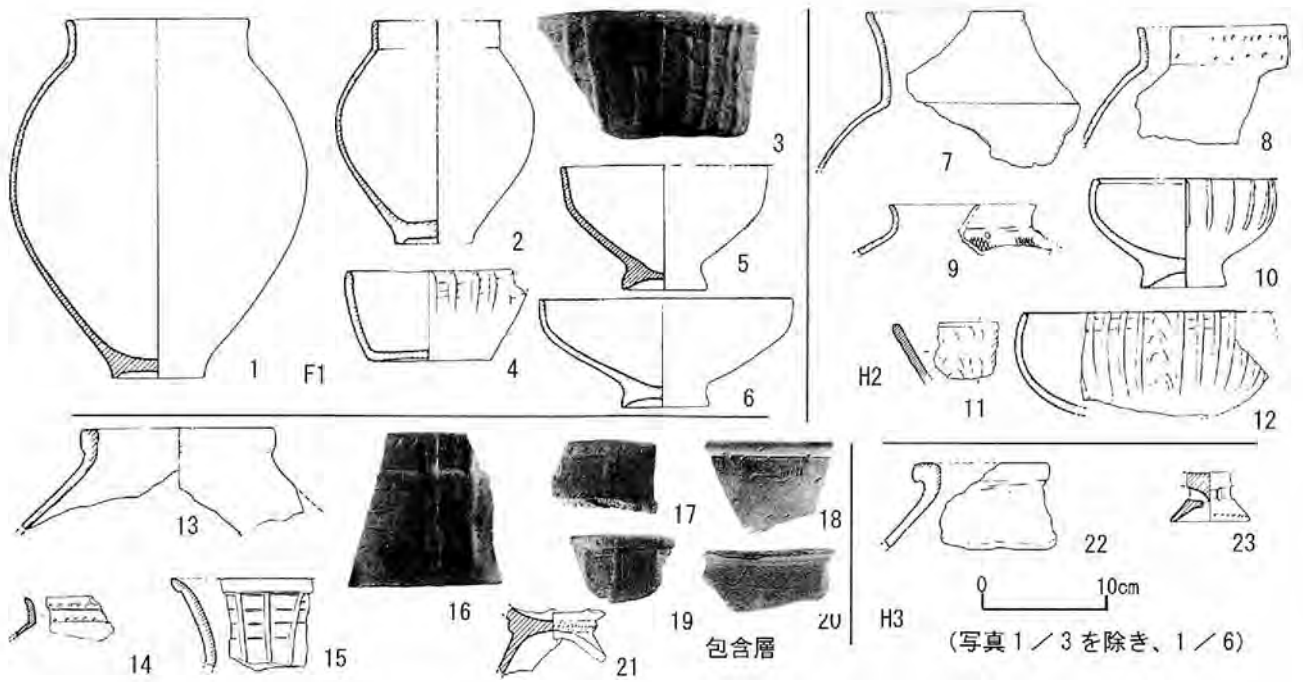


図4 岡上墓下層の土器

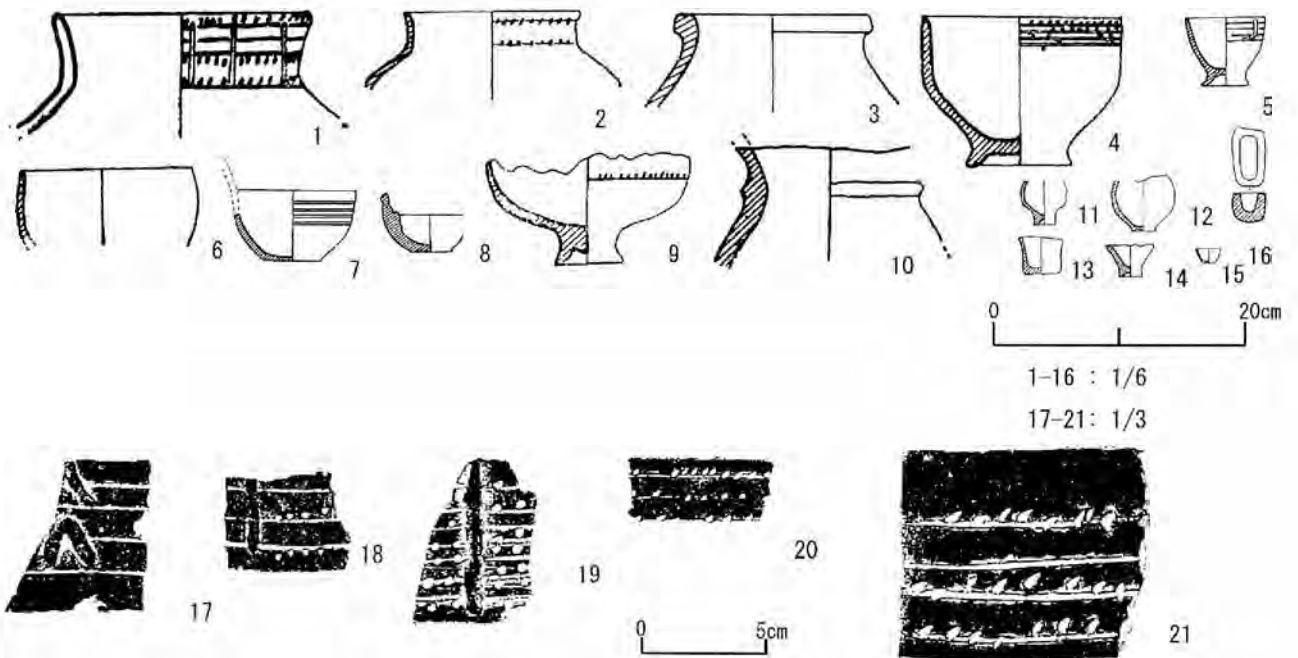


図5 于家村上層出土の土器 (1/6)

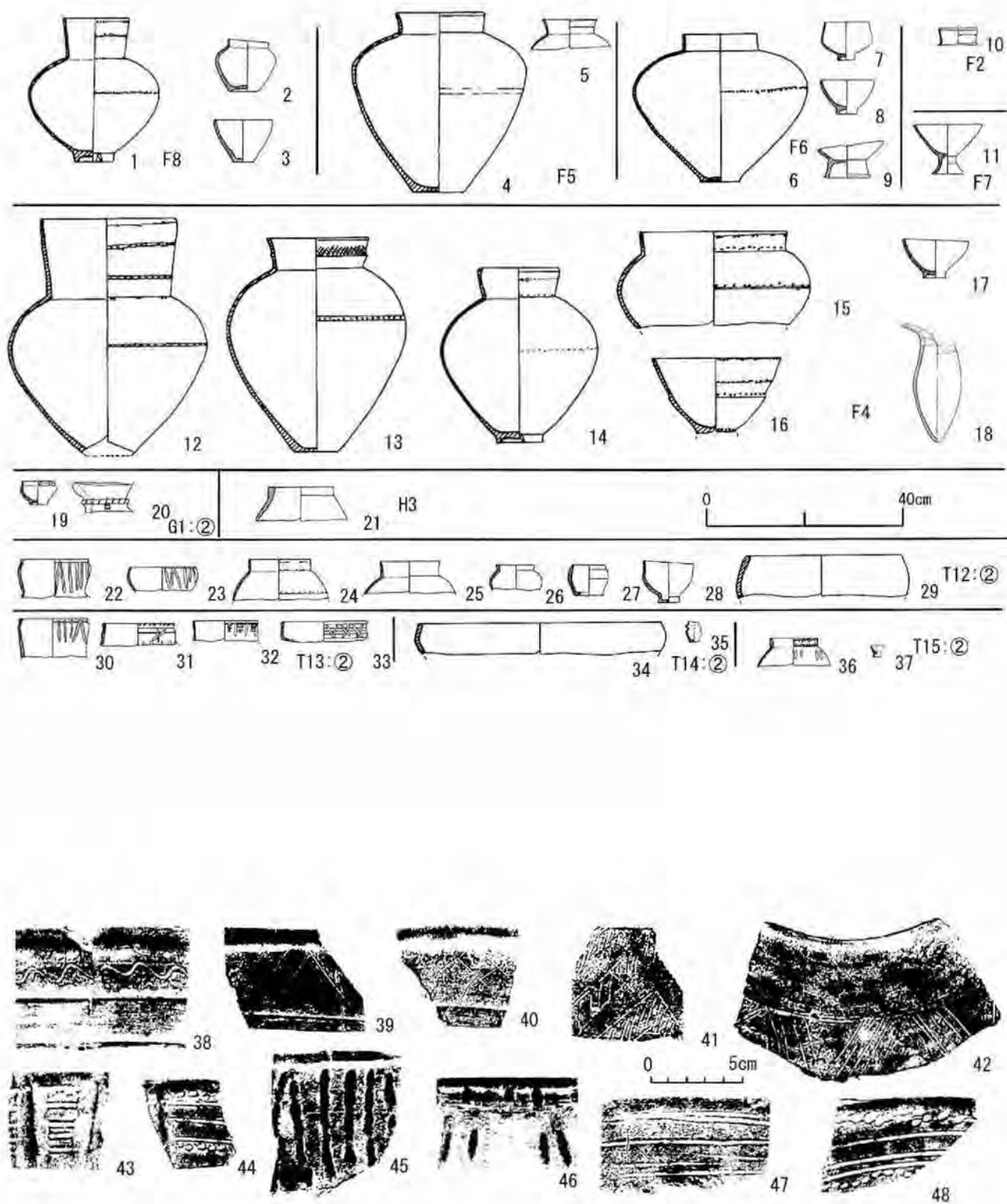


図6 大碓子遺跡出土の土器 (拓本1/3の他は1/12)

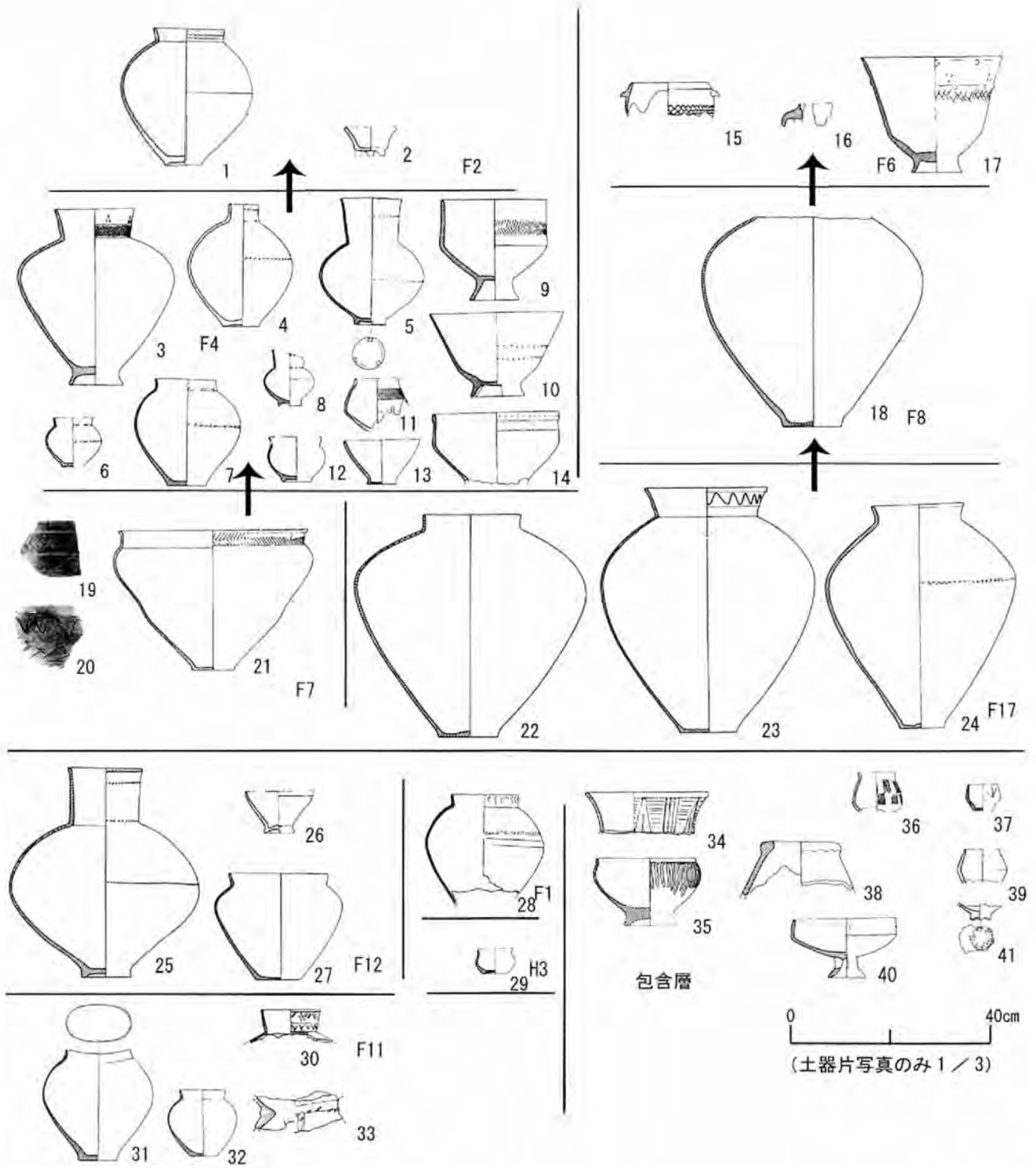
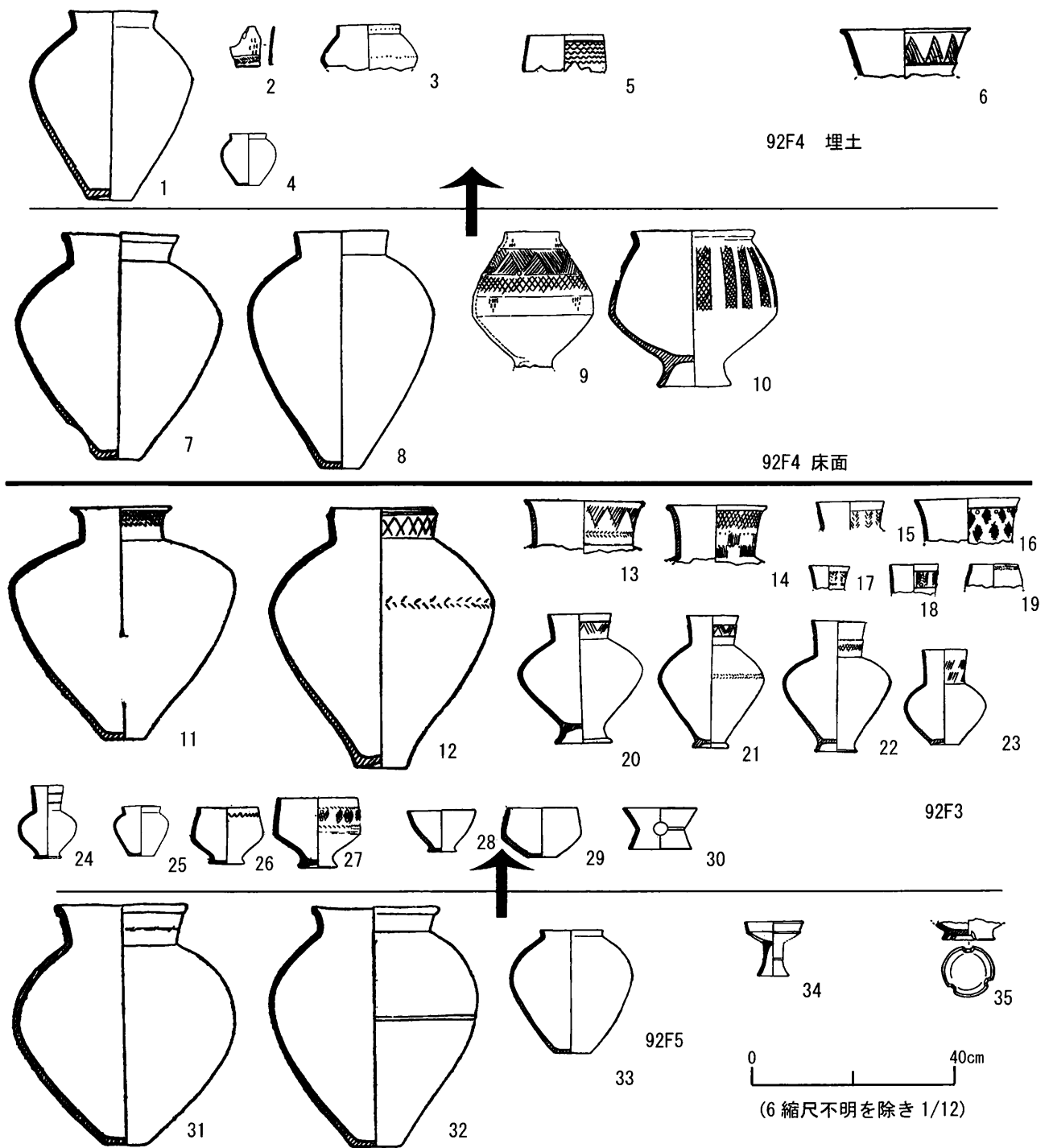


図7 双砵子3期の土器 (1 / 12)



92F4 埋土

92F4 床面

92F3

92F5

0 40cm

(6 縮尺不明を除き 1/12)

	A a 型壺	A b 型壺	B 型壺	蓋	晚	A a 型罐	A b 型罐	B 型罐	碗	豆
晩期后段										
晩期前段										
早期										

華・陳 (1996) による
大嘴子遺跡の土器細別
(左 6:F5, 8:F6, 右 4:F1, 7:F1,
9:F1, 11:F8, 13:T6②)

大型盆 (F1:10)

図 8 大嘴子遺跡 92 年出土の土器と華・陳による細別案

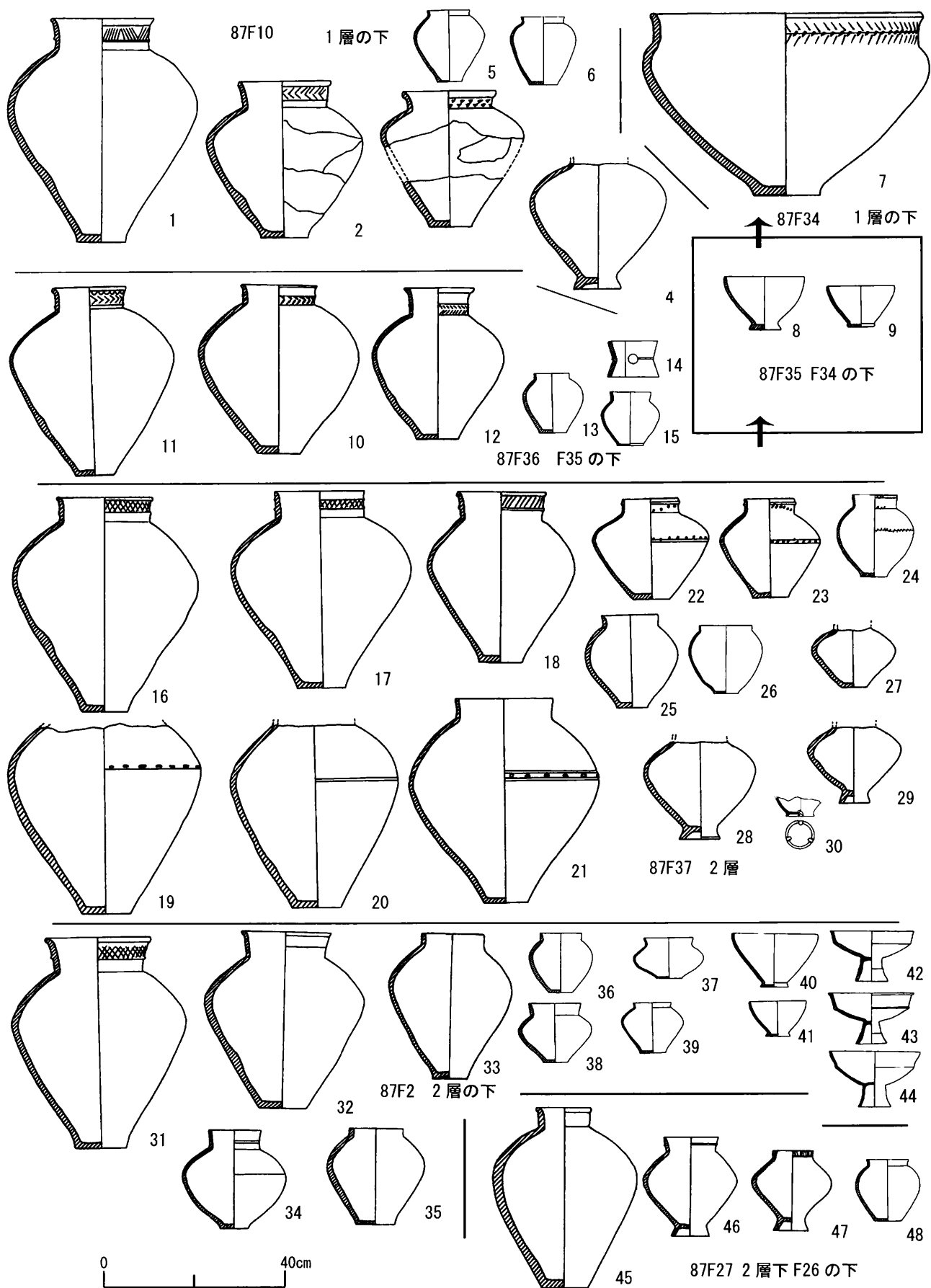


図9 大嘴子87年出土の土器1 (1 / 12)

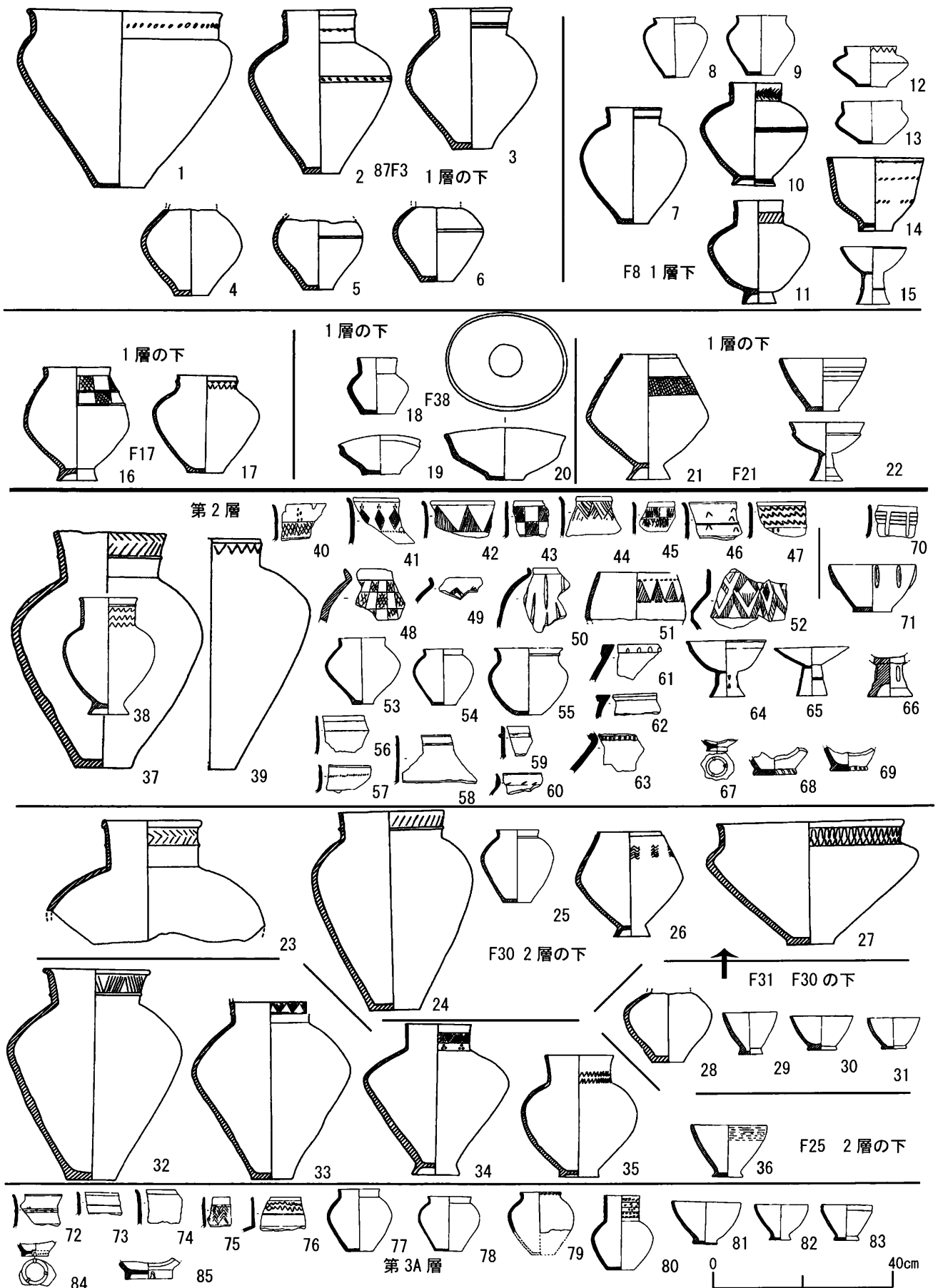


図10 大嘴子87年出土の土器2 (1/12)

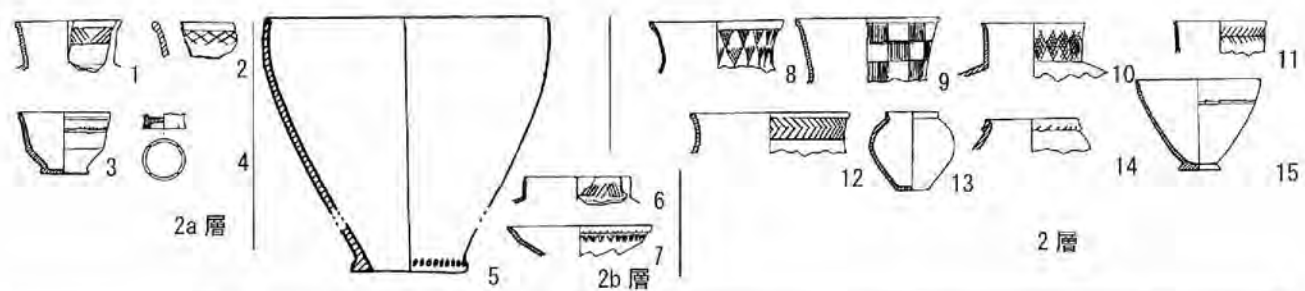


図 11 廟山遺跡出土の土器 (1 / 12)

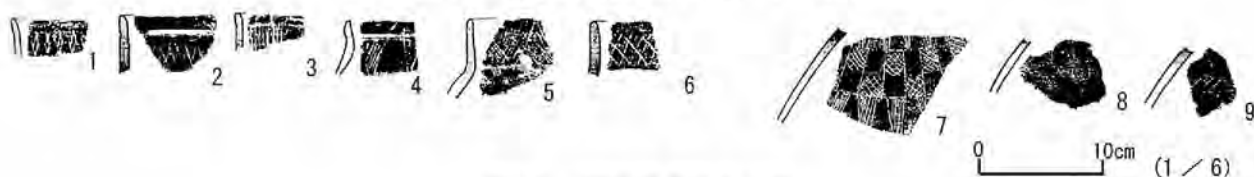


図 12 望海埇遺跡の土器

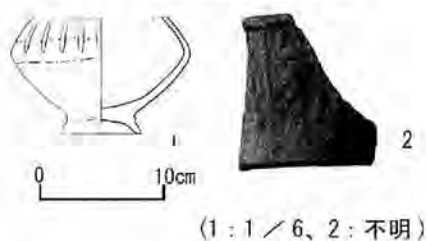


図 13 大連浜町出土の土器

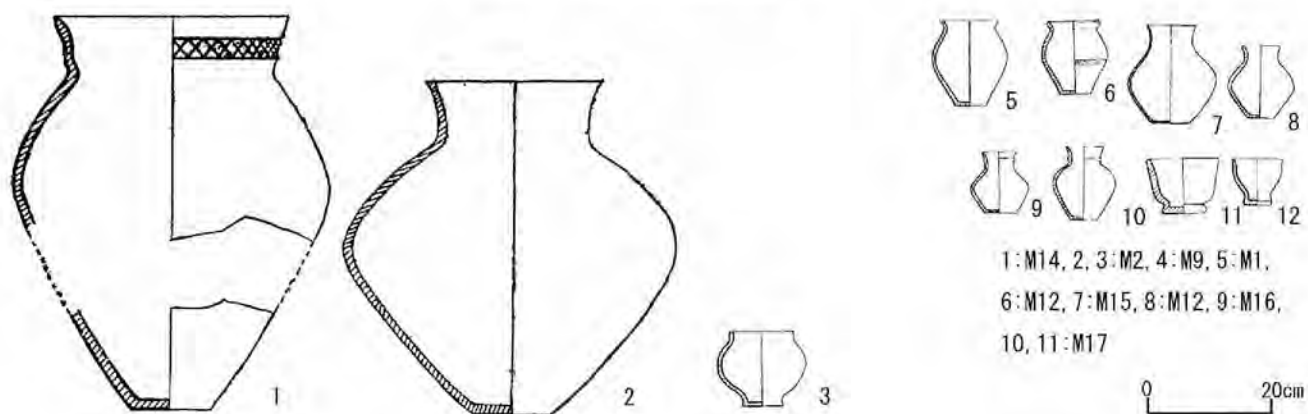


図 14 上馬石甕棺墓の土器 (1 / 12)

3 - 4. 上馬石上層文化の土器編年

大貫 静夫

1. はじめに

遼東半島の遼寧式銅劍の時代の集落遺跡の調査は少なく、墓地が主であり、出土した土器も少なく、土器編年研究に困難をもたらしているのが現状である。そのため、半島西端の尹家村遺跡、半島中部の上馬石貝塚の資料が重要な資料となっている。

1960年代の中朝共同調査で調査された尹家村遺跡の報告書では下層の資料をもとに、下層1期文化と下層2期文化と呼ばれた。北朝鮮版は1966年と早く出ており、北朝鮮の研究者はその報告書に基づいた論文(金、黄1968など)を陸続と発表した。その中では尹家村下層1期文化層という名称が用いられ、考古学文化としては考えていなかったようである。しかし、その日本語訳版が1986年に出版されるまで長らくの間、原報告に当たることは北朝鮮以外の多くの研究者にとって不可能であった。中国の多くの研究者にとっては、1996年になって中国版の報告書(中国社会科学院考古研究所編1996)が出て、初めて尹家村遺跡の資料に接し、その際に「尹家村1期文化」と命名された文化名を知ることになった。したがって、中国では尹家村(下層)1期文化というものは定着していない。

中国版報告書の安志敏によれば、「尹家村1期文化」の内容は次のようである。

「尹家村1期文化に特徴的な土坑火葬墓から、かつて脊のある曲刃青銅短劍(遼寧式銅劍)、T字形銅柄、扇形銅斧と双翼の銅鏃が出たことがある。発達した青銅器時代にすでに入っており、楼上墓の時代もおおよそこの文化に相当する。文化層出土の土器はおおむね砂質の灰褐陶であり、大部分は手びねりで、いくつかは回転台での調整がある。器種は罐、碗、高坏、甗などである。罐の橋状把手、板状把手および口唇状把手はすべてこの文化に新しく出現した、典型的で代表的なものである。文様の中で、口縁部に沈線文を施し、肩部に重畳三角文を施すものは、すべて楼上墓に近く、年代もおおよそ春秋中、後期、すなわち紀元前5、6世紀に相当する。長海県の上馬石出土の青銅短劍と角劍もみな脊のある曲刃劍であり、土器も尹家村1期文化と近く、おそらく同一文化系統に属するものであろう。」そして、双砮子3期文化と尹家村2期文化の間に位置するとされ、在地の双砮子3期文化を継承して発展したものであり、青銅器には北方の要素が濃厚だが、あくまでも在地の文化であるとした。つまり、「尹家村下層1期」の土器は楼上墓の土器との対比がされているように、かなり時間的に限定された資料であるが、「尹家村1期文化」というものは新段階を除く遼寧式銅劍の時代に相当する、より広い枠組みである。ただし、遼寧式銅劍を伴う墓にはわずかの副葬土器しかないから、多くの場合、土器によって定義された考古学文化との対応関係の把握が難しいことになる。上に引用された火葬土坑墓は『牧羊城』で紹介された官屯子火葬土坑墓「聖周墓」であり、ここからは土器が出ていない。上馬石の銅劍は77、78年の調査で、上馬石上層類型に後続する青銅短劍墓類型とされたものであり、尹家村1期文化の墓とする根拠は明らかではない。おそらく、「尹家村1期文化」は土器ではなく、尹家村2期文化に伴う刃部の突起の消失した新式の青銅短劍以前の青銅短劍を指標に設定されており、尹家村1期文化は春秋時代で終わり、戦国時代は尹家村2期文化であると考えていた。

中国では、戦後の1978年に調査され、81年に報告された上馬石貝塚の資料により、上馬石上層

文化類型というものが 81 年報告の中で設定された。

「土器は砂質の褐陶がもっとも多く、胎土は粗く、手びねりである。口縁は回転台を用いた調整がある。無文で磨かれ光沢があるものが主である。文様には沈線文と貼付文がある。器種は襷が高く括れ部が細く大きな袋足を持つ甗がもっとも多く、次いで、橋状把手の付いた壺と罐および杯、碗、高坏などがある。横向きの橋状把手、貼付把手、鶏冠状の把手が多い。石器は磨製で、偏平斜刃石斧、手斧、鎌、柳葉形凹基石鏃、環状石器、槍、紡錘車がある。骨器には釣り針、両端呑み込み針、錐、簪などがある。」

「于家村上層から甗が出始めるが、上馬石上層では甗が主になる。于家村上層では点線と沈線文が組み合う文様が主であるが、上馬石上層にもある。上馬石上層にある一對の横向きの橋状把手、貼付把手の付いた罐と壺は于家村上層では稀である。上馬石上層類型と類似するそのほかのいくつかの遺跡での層位状況から見ると、すべて戦国時代文化層の下にある。上馬石上層類型はおそらく于家村上層などの遺跡と同時期ないしより新しい。」

1981 年段階では、中国では中朝共同調査の成果は利用できないので、双砮子遺跡の資料が使われていない。そのため、双砮子 3 期文化との比較が十分ではないが、重要な視点は提供している。そして、この時の上馬石貝塚の調査では、青銅短剣墓がこの上層文化層を掘り込んでいたことから、あるいは炭素 14 年代（前節参照）が古く出ていたこともあり、遼寧式銅剣出現以前と考えられたようだ。複数の発掘区の集合体としての上馬石上層の年代的な位置づけについてはその後も確定していない。

このように、双砮子 3 期文化に後続する時代の集落資料としては、ほとんどこの 2 遺跡の調査しかない事情は今日に至っても変わらない。その点で、戦前に日本学術振興会が調査し、澄田（1986、88、89）や宮本（1991）が紹介した上馬石貝塚の地点別、層位別資料は重要なものである。

それと並んで、牧羊城 1 類土器もまた、尹家村下層 1 期のほとんど唯一の類例として貴重なものである。

以下では、牧羊城 1 類土器を理解するために、そのわずかな類例である、尹家村遺跡と上馬石貝塚を中心にして見てゆくことにする。以上の定義の内容からは、尹家村 1 期文化は遼寧式銅剣の時代であり、中部の上馬石上層文化類型より新しいはずだが、実際には土器から見れば両者は同じ段階を含んでいる。戦前の調査資料を扱った宮本論文（1991）によれば、78 年資料による「上馬石上層類型」は宮本の言う「上馬石上層」の一部に過ぎず、宮本によって、「上馬石上層」の時間幅は拡大し、遼寧式銅剣を伴う時代を含むことになった。ここでは宮本に従い、B II 区、A 区の資料を以て、「上馬石上層」と考える。これら両者には、共通する要素と異なる要素がある。これら共通する要素を重視すれば、双砮子 3 期文化の後に、どちらかの名称を冠した考古学文化の設定が可能である。そして、異なる要素をもとに、類型を設定するのである。あるいは異なる要素に着目して、双砮子 3 期文化に後続する二つの文化を設定するかである。資料の蓄積が進まない現状では暫定的に考えるしかない。

考古学文化を設定したものに尹家村 1 期文化があるが、不幸な研究史のため、あるいは類例が知られないわりに、尹家村遺跡の資料も貧弱であることから中国で一般化しているとは言えない。さらに、尹家村 1 期文化といった場合に、その指す内容は双砮子 3 期文化と尹家村下層 2 期の間のすべての土器を指す。「尹家村下層 1 期の土器」と「尹家村 1 期文化の土器」は同じ内容ではない。

上馬石上層類型という名称は今でも遼東半島の概説では双砮子 3 期文化に後続する段階として用いられるが、同じ報告で設定された、ほかの三つの文化類型「小珠山下層文化類型」、「同中層文化類型」、「同上層文化類型」はその後、「文化」に昇格して定着しているが、上馬石上層文化類型だけは調査資料はいまだ類例が増えないため、考古学文化として用いられることもあるが、一般的にはなっていない。

い。また、81年調査時の資料は貧弱で年代的な位置づけすら人によって異なるという現状である。

一つの文化に括るか、分けるかは中国人研究者の今後の理解に待ちたいが、本稿では、いたずらに文化を乱立させることはせず、仮に一つの文化として考える。その場合の一つの文化名は、澄田、宮本の紹介によって、長期の時期的な変遷が明らかとなっており、細別の指標となる上馬石貝塚資料を重視して、「上馬石上層文化」と仮に呼んでおく。

西部での包含層の調査は尹家村遺跡しか無く、中部ではほとんど上馬石貝塚だけであり、ほかの青銅短剣墓に伴う土器はわずかであり、あえて土器による地域類型を設定すべきかは疑問もあろう。それでも、尹家村下層1期の資料は併行する上馬石貝塚の資料とは明らかに地域差を示すから、仮称上馬石上層類型とは区別して、仮称尹家村1期類型を設定しておくのである。

2. 尹家村1期類型の土器をめぐって

1) 尹家村遺跡

報告(中国社会科学院考古研究所編1996)では細別の層位的根拠として、ある遺構の肩の線は表土I A層から始まり、それらは下層2期に属し、ある遺構の肩の線はII A層から始まっており、それらは下層1期に属すると記している。II A層を切るものとII B層を切るものがあるという意味なのか要領を得ないが、層位的に弁別されたい。

遺構単位のみとまりとしては、下層1期の遺構には褐色、灰褐色の沈線文土器が多く含まれ、下層2期の遺構には無文の褐色土器が多く含まれており、2時期に細別する根拠となっている(図1)。下層2期の石墓M12あるいはH11から出ている土器は戦前の『牧羊城』に収録されている尹家村1号石墓と同段階のものである。このことから、牧羊城の再整理で今回見つかった1号石墓類似土器は尹家村下層2期に含まれ、下層1期とは分離されることが明らかとなった。

・下層1期の土器

下層1期からは、広口壺、浅鉢、鉢、高坏、杯、甗が出ている。沈線文を施文した土器と無文の土器がある。

図2-1~10は大小の広口壺の口縁部とおそらくその胴部片である。1類の1, 2は口頸部にやや乱れながら横走る条線を断続的に配し、口唇部に刻目が施される。2類の3, 4, 7は横走る条線がより整然としており、口唇部の刻みはない。3の横走条線の最下段には点列がある。胴部にはボタン状の貼付が一对ある。5は頸部の横走条線の上端に点列がめぐる。胴部上半の肩の部分に横走る点列で区画した中に、斜格子充填三角文を並べている。6はその胴部片であろう。双砵子3期文化の広口壺の胴部には、点列と沈線が1条ないし2条めぐる例が少数あるが、無文が基本であったのとは異なる新しい様相である。7は5の口頸部とほぼ同じである。ただし、本文での説明がないためよく分からないのだが、頸部の横走条線がほぼ等間隔で途切れており、意図的に磨り消しているように見える。

これらの広口壺の口頸部の文様は、前節で見た砵頭墓地など双砵子3期文化羊頭窪類型の新段階の特徴である、広口壺の頸部多条の横走条線の上下端を点列で画するものや、7の場合はさらに条線の上に棒状貼付浮文を縦に並べて、条線が途切れているのとよく似た文様構成である。それらからの変化であると理解する。そして、このような広口壺が下で扱う上馬石貝塚では報告されていない。さらに、粘土帯口縁の土器は少量で、かつ甗の口縁であり、上馬石貝塚ではよく見られる粘土帯口縁の甗がないかほとんどない。双砵子3期文化から別の変化を示した地域的な土器群として上馬石上層

類型から分離して尹家村 1 期類型を設定する根拠となる。

牧羊城 1 類 3a 類相当の 8 は頸部に上下両端を平行沈線で画した帯状の斜格子文のある広口壺である。同 3b 類の 9 は口頸部に斜格子文を施し、10 は羽状文を施す。口頸部に帯状に斜格子、羽状文をめぐらすのは、双砵子 3 期文化大嘴子類型の特徴であったものに類似する。8 のように、上下端を画するものはさらに大嘴子類型に近いが、大嘴子類型では隆起線で画する点が異なる。9、10 は上下を画する沈線がないから、さらに異なる。これらも双砵子 3 期文化から変化したものであると考えられる。

11 は壺の口頸部に平行沈線を三段めぐらし、その間に三角集線文をめぐらしている。この土器こそが楼上墓の土器（図 6 - 1）との関係が指摘された土器である。

12 はおそらく胴部上半部であろうが、平行沈線間に斜線を充填しており、やや異なる。その間にやはり平行沈線間に斜線を充填した、リボン状の文様（？）を挿入する。

これらの壺に共通しているのは、頸部の下端の胴部との接合部が帯状に細く凹んでいることである。これは双砵子 3 期の土器には見られない特徴であり、峻別する際の指標となる。

胴部には横位の橋梁状把手、偏平長方形の把手、角状の把手がつく。広口壺の底部は平底が少なく、圈足が多い。碗や杯にも圈足が付く。

下層 1 期の資料の類例は、牧羊城 1 類土器と楼上墓および上馬石貝塚の土器しかない。牧羊城 1 類土器の広口壺には 1 類、3b 類があるが、2 類と 3a 類がない。2 類の 7 など双砵子 3 期直後のようだが、H4 ではともに出ており、2 類が 1 類より古いという一連の変遷となる保証はない。下で触れる上馬石 A 区下層では 3a、3b 類とともに 11 に近い小型壺が出ている。下層 1 期ははまだ細別の余地がありそうだが、これらの遺跡で主なものは共通するという方を今は重視したい。

・下層 1 期の年代

金・黄（1968）は、下層 1 期からは、口唇状把手が出ておらず、ほかの文様も含め、口唇状把手が出ている崗上墓よりは、出ていない楼上墓と共通する、つまり、尹家村下層 1 期の土器は崗上墓より新しく、楼上墓の時代の土器としていた。

66 年に北朝鮮から出版された共同調査報告書では上層の上限を紀元前 2 - 3 世紀と戦国後期まで遡るとしたことで、より古い下層 2 期は前 4 - 5 世紀となり、下層 1 期はさらに古く前 5 世紀以前とした。96 年の中国版報告では上層は前漢初期となり上限がやや新しくなっているが、下層 2 期は戦国前期に近い時期、紀元前 4 世紀前後、下層 1 期は春秋中後期、前 5 - 6 世紀としており、66 年報告の年代観とあまり変わっていない。そのため、上層と下層 2 期との間、つまり紀元前 3 世紀が空白となっている。なぜ、上層の年代の改訂に連動して下層 2 期が紀元前 3 世紀に下らなかったかと言えば、下層 2 期 M 12 出土の、脚部に多節の稜をもつ高坏（図 2 - 12）をほかの在地系の高坏とは異なる、戦国燕系の高坏と見なし、その年代が紀元前 4 世紀頃としているためである。徐光輝（1997）も燕下都の高坏との比較から少なくとも戦国後期よりは古いとしている。この高坏からの尹家村下層 2 期の評価は、本書第 4 章 2 節の石川論文などを参照されたい。

3. 営城子周辺の青銅短剣墓

営城子周辺では上馬石上層文化に属する青銅短剣墓が調査されている。しかし、この地域では、同時代の包含層や住居址の調査がなく、土器からこの地域の様相を知ることは難しい。

1) 楼上墓出土の土器

・1958年資料

遼東半島の青銅器文化の年代を決める際の鍵となっていた楼上墓は1958年に遼寧省大連市旅順口区後牧城駅村付近で地元の中学校の教師、生徒による土取の際に見つかった(旅順博物館1960)。それらの資料はその重要性にもかかわらず、多くが採集資料のため、明刀銭などとの伴出関係が明らかでなく、その後、今に至るまで多くの研究者の理解を混乱させ悩ませてきた(大貫2004)。伴出関係の不明な楼上墓の資料にあまりこだわるのは生産的ではないことから、楼上墓は検討の対象から外すというのが最近の動きのようだが、青銅短剣、土器共に類例のない墓であり、ほかに確実な資料が現れるまで無視すればよいというものではあるまい。土器の側からの再検討を試みることにしたい。

図6-1の土器は1958年の採集品の中の一点でM3から出た可能性がある小型の壺である(旅順博物館1960)。

原報告では「缸」と呼んでいるもので、泥質の紅陶で、高さ10.1cm、口径6.7cmとある。図を見ると、頸部から胴部上半にかけて5段の平行沈線をめぐらし、その間に斜線充填三角文を挿入している。上二段の平行沈線はそれぞれ二条で、その下はそれぞれ一条からなる。胴部には縦位につく一對の把手がある。底部は上げ底気味になっている。大連浜町採集の土器(図5)も同類である。楼上墓例は一對の縦の小型環状把手が付き、浜町ではボタン状の貼付が一對付き、両者とも底部が上げ底(中国でいう圈足に相当)である。楼上、浜町例からみるとこれらは小型の壺であり、器形的には砮頭墓地の双房系の壺からの流れであると考えられるが、そうであれば口縁が内湾する浜町貝塚の方がより砮頭、双房例に近い。文様構成の面では、双砮子3期からはつながらない新出の壺である。

簡報では、土器そのものについての分析はないが、楼上墓は、鉄器や明刀銭を伴出する、戦国墓と見なしていた。その後も、青銅短剣の年代観しだいで、この土器を戦国時代後期まで下げる研究者が多かったが、明刀銭と鉄器を混在として銅剣から考えた研究者は楼上墓を春秋後期頃と考えた。そのどちらの年代観をとるかにかわらず、以下の崗上墓の土器が古く楼上墓の土器が新しいと考えられた。

・1964年資料

1964年、中朝共同調査の一環として、再び楼上墓が調査された。その際に、M5とM6からそれぞれ1点の土器、そして封土中より土器片が出ている。ここでは写真図版の鮮明な1996年版の記載におもに従っておく。

(A) M6出土の広口壺(図6-10)。

報告では「罐」とされている、手びねりの、細かい砂を含む泥質紅褐陶。器面を研磨している。口唇部には刻目がめぐる。頸部には断続的な3、4条の横走る沈線がめぐる。高さ11.7cm、口径7.8cm。底部はやや上げ底気味。火葬時の加熱により口縁が変形している。文様構成は尹家村1期下層の土器(図2-1, 2)と同様だが、より粗雑な印象を受ける。M6ではこの土器とともに青銅短剣(同12)が出ている。火を受け変形しており、本来琵琶形の刃部であったか分からないという。図や写真図版を見るかぎり、M3として報告された典型的な琵琶形刃部の剣(同4~7)よりもM1出土の剣(同2, 3)の刃部に近く見える。土器や剣からM6とM1がM3より多少新しくなるのかも知れない。

(B) M5出土の長頸壺(同11)。

胎土、調整は M6 と同様。口縁部を欠いているが、再加工している。肩の部分に一对の縦の瘤状把手が付いている。

(C) 封土出土の土器片 (図 3)。

封土内出土の土器は楼上墓と関係があると報告書は述べている。楼上墓でも崗上墓でも封土出土土器片と墓坑内副葬土器との間には多くの共通点が見られる。封土は礫混じりの黒土で、楼上墓でも崗上墓でも墓地全体を最終的に覆った封土であるとするから、時間的には墓造成の最終段階である。そこに含まれる土器は遅くとも墓地形成の最終段階の土器である。あるいは、すでにその時には土器片として周辺に散乱していたものが二次的に混入したものであれば、墓室構築時の人々が用いた土器であり、墓室構築時と同時と考えることもできる。また、墓室構築以前のより古い土器ということもありうるが、崗上墓では前節で検討した、より下層にある双砵子 3 期文化の土器は封土からは出ていない。他方で、58 年の墓の混乱は明刀銭や鉄製品が墓室内でなければ封土から出た可能性があることである。しかし、より精緻な調査をした 64 年では、封土の残りは悪く、攪乱層から五銖銭が出ている。礫が主体であれば空洞ができて、間に落ちそうだし、攪乱も礫石層の場合見分けにくいであろう。それでも、戦国燕以降の土器であれば、一見して分かる新しい土器片は報告されていない。

すべて小片。泥質灰褐陶が主で、手びねりで、器面を磨研するものがある。器形には「碗」「罐」「壺」「豆」がある。文様は沈線文を主とする。把手には乳突起状のものと橋梁状のものがある。北朝鮮版では、中国版で橋梁状把手とするものを口唇状把手と記している。しかし、図版の写真 (図 6 - 21) はそのようには見えないし、共同調査の成果を論じた金・黄 (1968) は、口唇状把手は崗上墓にはあるが、楼上墓にはないことを強調していることから、中国版の記載を採用する。ただし、中国版では橋状把手は縦に配置されているが、北朝鮮版では横に置かれている。尹家村下層 1 期では、橋状ないし環状の把手は横であり、下層 2 期になると縦の環状把手が現れる。楼上墓封土の土器は上馬石上層文化に含まれると考えることから、北朝鮮版を採用し、ここでも横向きの橋状把手と理解する。

底部は平底が多いが、圈足もあるという。尹家村下層 1 期では圈足が一般的であるから、多少は違いがありそうだ。

4 は口唇直下に刻目列をめぐらし、頸部に横走条線をめぐらす、広口壺の口頸部のようだ。同様の M6 よりも横走沈線が整然としており、口唇部の刻目ではなく、横走沈線の上端を画するように点列をめぐらしている点はより双砵子 3 期的である。

13 は平行沈線間に三角集線を挿入する。14 は胴部片で、平行沈線によるジグザグ文を挿入しているが、その上の段に見えるものは三角集線文であろう。15 では平行沈線でハの字を描くものがあるが、その下の段の端に見えるのは三角集線文の一部かも知れない。以上の 3 点は 58 年の土器 (同 1) と類似するものであり、また大連浜町貝塚の土器 (図 18) に類似する。浜町貝塚の壺にも乳状突起が付いているから、楼上墓の墓坑及び封土出土土器と同時期と考える。同一 3 のハの字は同じ浜町貝塚から採集されている高坏の脚部の文様に近い。

胴部片では、沈線に沿うように刻目を並べる文様が特徴的である。これに近い文様は尹家村下層 1 期の高坏の脚部 (図 2 - 19) にある。

以上見てきたように、58 年の土器、64 年の墓室出土土器、封土出土土器の何れも尹家村 1 期下層と類似することは 1966 年の北朝鮮版報告書以来すでに指摘されてきたことである。ただ異なるのは、口頸部に帯状に羽状あるいは斜格子文を施文する土器がないことである。墓室副葬品の器種が限定されるのは当然であるが、封土の土器も甌が報じられていないように、特定の器種に偏っていることに起因するののかも知れない。そのため、所属土器類型の判断が難しいのだが、10 や 17 のように

頸部に横走条線をめぐらす広口壺は下に見る上馬石上層類型にはないので、尹家村 1 期類型に近いものと考えておく。

・ 楼上墓の年代

1960 年代には楼上墓については、孫守道・徐秉琨（孫・徐 1964）などによる戦国後期（紀元前 3 世紀頃）と金用珩・黄基徳（1968）などによる紀元前 7～5 世紀（春秋中後期から戦国初期頃）というまったく理解を異にする年代観が出ており、それが遼東の青銅短剣の理解に大きな違いをもたらしたのである。前者の戦国後期という年代観がその後の研究史で大きな影響力を持つことになったが、後者の方を現在ではとるべきである（大貫 2004 など参照）。そして、土器が青銅短剣と同時期であるとすれば、当然ながら遼東半島紀元前一千年期の土器編年もそれに連動して大きく相違することになった。これ以外に、林澧（1980）のように、楼上墓 M1 に明刀銭の伴出を認め戦国後半期としながらも、M3 の銅剣は西周後期から春秋中期とし、長期にわたって営まれた墓地であるとの見方をとる研究者もいた。この場合、封土や M1、M 3 何れか出たか不明の土器などは年代を特定することができなくなるし、実際言及されていない。

楼上墓の多くの資料は採集品で伴出関係が不明であり多くを語ることはできないが、推定 M3 出土の壺や剣が鄭家窪子 M6512 より古いとすると紀元前 6 世紀前後となる。ただし、鐸や動物形装飾品などはそれほど古くなるとは考えられず、銅製劍柄（秋山 1969、宮里 2006）を伴う M1 などはやや遅れるであろう。臥龍泉墓よりは古く、下っても紀元前 5 世紀前半であろう（大貫 2004）。上馬石 A 区上層併行まで下るかもしれない。中朝共同調査報告の年代観と大差はないことになる。

2) 崗上墓出土の土器

楼上墓の近くから、もう一つ青銅短剣期の墓地が見つかり、中朝共同調査団によって調査されている。青銅短剣などから、調査当初から崗上墓は楼上墓より古いと見なされている。ここから出ている土器には、墓坑内出土の副葬土器以外に、封土中から出土した土器、墓より古い時期の集落に伴う土器がある。墓の下には、前節で検討した双砵子 3 期の住居および土坑があり、当然ながら、崗上墓はそれより新しい。崗上墓の墓室は、楼上墓も同様だが、厳密に言えばすべてが同一時期に営まれたものではない。劉（2003）は崗上、楼上墓の多人数埋葬は砵頭墓地と同様に順次埋葬だとする。ならば、個々の墓室は同時に長期併行して利用された可能性もある。土器との関係はさらに複雑になるが、しかし、各墓室に伴う土器の器種が一定せず、土器から崗上墓の細別をおこなうのは難しい。

封土出土の土器の意味するところは楼上墓と同様である。

・ 副葬土器（図 7 - 1 ~ 10）

すべて泥質紅褐陶であり、器面は研磨されている。器種は多様であり、小型の壺は、長頸のもの、短頸で広口のものがある点は、楼上墓と同様である。

長頸壺には頸部に平行沈線で区画した中に斜格子を充填する帯を多段に施文するもの（1）がある。

5 は無文で胴部に一對の口唇状把手がつく。頸部が直立する点では、楼上墓 M 5 の壺に近い。3 の短頸の小型広口壺では、胴部上半に斜線を充填した細長い三角文を並べ、上下を沈線で画する。瘤状の突起が 4 カ所に付く。7 は口縁が二重口縁状であり、ひだ状にならぶ指頭圧痕がある。

・ 封土出土の土器（16 ~ 26）

封土出土の土器片に墓坑副葬土器と類似するものと、副葬土器には見られないものがある。

長頸壺では 16 が副葬土器に近いが、それ以外に沈線に沿って斜線を配する 17 や 18 のような短

頸の壺がある。19は口唇部が肥厚して、刻み列を施し、以下に横走する平行条線を施す。楼上墓M6の土器文様に類似するが、より整然としている。20は広口の鉢であろうか。M12の壺(3)に類似する文様である。双砵子3期文化の土器でも、鉢の肩に斜格子充填長方形を千鳥に配する文様があったが、その系譜を引くものである。ここでは斜格子充填三角文を横に並べる。21は広口壺の肥厚口唇部の直下と頸部下に点列をめぐらす。双砵子3期羊頭窪類型の土器の系譜を引く。22は口頸部の斜格子文とすれば、尹家村下層1期の広口壺に共通する、双砵子3期文化大嘴子類型の系譜を引くものである。23は点列だから、あるいは羊頭窪類型の系譜を引くものである。胴部の文様には、斜格子充填長方形、縦線充填長方形による千鳥文、斜格子充填帯状文と三角文の複合するもの、平行沈線が鋸歯状になるもの、斜線充填平行沈線が幾何学的になるものなどがある(24～28)。平行沈線が鋸歯状になるものは、より長いが楼上墓の文様(14, 15)に近く、連続的な変化が考えられる。

封土からは口唇状把手(29)だけで20点以上出ている。その中にはより小型の馬蹄形の貼付(30)がある。それ以外に、横の橋状把手(31)やより小型の横の環状把手(32)や、ボタン状の貼付がある。長頸壺や文様や口唇状把手が副葬土器と封土出土土器に共通し、かつ楼上墓や尹家村下層1期の土器とは異なる点が多いことは明らかである。ただし、横位の橋状把手があることや、斜格子充填三角文も共通する点などは尹家村下層1期に共通する。

従来から言われているように、崗上墓の副葬及び封土出土土器は楼上墓、あるいは尹家村下層1期の土器より古いと考えるが、類似点もあるのが重要である。目に付きやすい把手の変化では、横向きの橋状把手は両者に共通するが、口唇状把手は楼上墓段階にはない。老鉄山周辺にも崗上墓の段階があることは南山裡採集の長頸壺(図12)が物語っている。

段階は決定しても、所属土器類型の判断は楼上墓以上に難しい。19の土器は尹家村1期類型の系統であるが、あえて、営城子地域の遼寧式銅剣の段階が老鉄山周辺と同じ土器類型であったかの強い根拠はまだない。

4. 上馬石上層類型の土器について

1) 上馬石貝塚

・従前の研究史

上馬石貝塚は遼東半島中部の大長山島にある。主な資料は、1942年に日本学術振興会によって調査されたもの(図9, 図11)と、戦後1977, 1978年に遼寧省博物館と旅順博物館など(1981)が中心になっておこなった調査資料(図10)である。

上馬石貝塚は遼東半島の先史時代の土器編年にとってきわめて重要な遺跡であるが、地点あるいは層位により異なる土器が出るのが澄田(1986, 88, 89)宮本(1991)により指摘されている。

・78年調査の資料

1977, 1978年には青銅短剣墓も調査された(旅順博物館ほか1982)。いずれも上層類型の貝層(第2層)を掘り込んで作られていたので、上層類型よりその短剣墓は新しい。その短剣墓は戦国時代初期とされたから、上層類型は春秋時代以前となる。ただし、この遼寧式青銅短剣は新しい段階のものであったから、より古い青銅短剣との先後関係は決められるはずがないが、C14年代がB.P.3320±160, 3365±195と測定されたことも影響しているであろう。上層類型は遼寧式銅剣出現以前の前期青銅器時代と見なされた。

78年の調査地点はI区からIV区までであったが、双砵子3期文化の甕棺(前節図14)や遼寧式短

劍墓（図 13 中段左）と重複していたのは、I 区 2 層の資料である。上馬石上層類型設定資料の多くはこの I 区のものであるから、ここであつかう土器も当該短劍墓との層位関係が明らかな I 区 2 層出土のものに限定した（図 10）。ある特定の土器群がある特定の短劍墓 M3 の銅劍や副葬土器より層位的に古いという基本から始めるためである。

陳光（1989）は、上馬石上層 78 年資料の細別を論じる中で、双房に類似する古い I 組（1, 2, 5, 6, 7, 9, 13, 14）と、崗上墓や尹家村下層 2 期に類似する新しい II 組（3, 4, 10, 12）があるとした。双房から尹家村下層 2 期まではすべて青銅短劍が伴う段階であり、青銅短劍の存続する期間と重なることになる。陳光の理解は下記の宮本と多少異なるが、上馬石上層類型は青銅短劍墓の時期を含むと考える点では共通していた。

I 区 2 層の土器の下限が尹家村 2 期文化まで下るという陳光の理解では、I 区で 2 層を切っていた青銅短劍墓より新しいことになりかねず、I 区の層序はさらに複雑なことになる。陳光が下限をそこまで下げる理由がはっきりしないが、10 の把手を「柱状耳」とし、尹家村 2 期文化に特有の切り株状の把手と結びつけたのかも知れない。この 10 はあえて切り株形とする必要はないので、そこまで下げる理由はないが、42 年資料では把手の上端に刻みを入れる類例が A 区上層にある。これと合わせてもう一例注意すべきは 2 の口縁部に刻みのある土器片である。42 年資料にも A 区上層に口縁部粘土帯貼付の端部を刻む例があるが、それよりも尹家村下層 2 期の図 1 - 8 に近く、これを陳光は尹家村 2 期の土器と考えたのであろう。しかしながら、尹家村下層 2 期、そして上馬石 A 区上層の例は口縁部に粘土紐の貼付による隆起線があり、それを刻んだものである。78 I 区の例は図から判断するかぎり、それとは異なるようにも見える。高麗寨にも似たような土器が報告されており、さいわい本学所蔵の高麗寨資料の中にそのような土器片がある。それについて、8 章 2 節で古澤が詳細な観察を記しているので参照されたい。しかし、仮にそのような新しい土器が含まれていたとしてもわずかであり、かつ、依然として、M3 の銅劍や副葬土器が 2 層の土器より新しいという層位関係を否定すべき根拠は何もないことを確認しておく。そのほかの細別の可能性については以下の地点別資料との対比が必要になる。

・ 42 年調査の資料

1942 年には、A, B I, B II, C, D の 5 地点が調査された。ただし、1978 年調査時の調査地点との関係では、あるいは 78 年の III 区附近ではないかとも考えるが、よく分からない。

42 年調査資料は、戦後、当時の調査に参加した澄田正一（1986, 1988, 1989）が簡略な報告をし、その後、一部について宮本一夫（1991）が詳細な分析をおこなった。宮本が詳細を報告した A, B II 区の資料（図 9）は宮本自身の遼東半島の紀元前一千年紀の土器編年の根幹となっている。ほかに、澄田は C 区の資料（図 11）を紹介している。遼寧式銅劍を模した角劍が出ている地点である。

東北アジアの広い地域をカバーした、この当時としては画期的な宮本編年（1985）の鍵語は「無文化」である。A 区は無遺物層を挟んで、上下 2 枚の貝層があった。再整理をおこなった宮本は、層位と地点の違いに基づき、A 区下層→A 区上層→B II 区という時期細別をした。宮本は、それぞれの実年代については、A 区下層＝西周→A 区上層＝春秋→B II 区＝戦国前半期とした。

2) 上馬石上層編年の問題点

すでに、宮本（2003, 2004）は弥生年代論に関連して、遼東の遼寧式銅劍の年代について自説を撤回し、新しい年代観を出している。青銅短劍墓と上馬石の土器編年との対応に訂正がないのであれば、土器の年代も必然的に修正されることになる。かつて A 区上層に比定された双房 M 6 は春秋と

された。その根拠は、靳楓毅（1982、1983）による遼寧式銅劍の年代観に従っている。その年代観はそのままで、続く B II 区に比定された崗上墓もかつての戦国前半から双房 M6 と同じ春秋期に遡らせた。つまり、全体的に古い方に圧縮することによって、遼東の問題点は解消されたと理解しているようだ。しかしながら、宮本編年の特徴は東北アジアの広い地域のそれぞれの地域ごとに細別し、それら相互の併行関係を決定して、地域間をつなぎながら、全体の編年網を構築しているところにある。緻密な論理に基づいた、その構造的な枠組みに説得力があったからこそ、最近の本人の撤回にもかかわらず、いまだに弥生短期年代論の論拠となっていたりするのである。したがって、どこかの地域の年代を動かすことは連動する周辺地域の年代を動かすことにならざるをえない。そのために、今回の筆者の再検討でも、かなり広域の地域を扱わざるをえなかったのである。

上馬石貝塚の場合、周辺地域との相対的な編年で重要な役割を果たしているのが、A 区上層が瀋陽地区の鄭家窪子 M6512 と併行し、B II 区が崗上墓と併行するという判断であった。つまり、鄭家窪子 M6512 銅劍→崗上墓銅劍という順序と上馬石土器編年は一体である。かつての宮本（1991）の、上馬石での A 区上層＝鄭家窪子 M6512 劍→B II 区＝崗上墓劍という変遷観は朝鮮半島における龍興里劍→松菊里劍というそれまでの有力な変遷観と連動したものであった。したがって、崗上墓の年代を古くすれば、B II 区が古くなり、宮本がより古いとする A 区上層の年代もより古くなる。鄭家窪子 M6512 の年代だけは据え置くというわけにいかないのが、宮本広域編年であるから、鄭家窪子 M6512 の年代も古くならざるをえない。ところが、鄭家窪子 M6512 の年代は宮本自身中原との関係で春秋後期あるいは前 6 世紀と決定しており、それほど動かせる余地がないから、それより相対的に新しい崗上墓が春秋後期あるいは前 6 世紀より新しいことも動かせないはずである。

朝鮮半島の青銅短劍の変遷の順序は逆であり、かつて岡内（1982）が並べたように松菊里劍→龍興里劍とすべきというのが、最近の弥生長期編年論であり、朝鮮半島の銅劍の変遷の逆転には上馬石貝塚編年の逆転や瀋陽地区の変遷の見直しなど広域の枠組み全体の再編成が必要であるというのが筆者の理解である。

結論から言うならば、下で述べるように、A 区上層と鄭家窪子 M6512 との併行関係を求めたかつての宮本の想定は正しく、B II 区→A 区下層→A 区上層という変遷に再編成することにより初めて崗上墓の上限年代の呪縛が解かれ、崗上墓劍→鄭家窪子 M6512 劍という順序が可能になるというのが筆者の最近の理解である。そのことは、東北アジア考古学研究会 2003 年 11 月開催の月例会で明らかにしているが、2004 年、2005 年文献中にも上馬石貝塚編年は逆転されるべきとしてわずかに触れている。逆転するとすれば、A 区上、下層の関係は動きようがないから、当然ながら、それは A 区と B II 区の先後関係が逆転することを意味するのは賢明な研究者なら気づくことであり、中村大介（2006）はいちはやくこれに賛意を示してくれた。詳細については、この科研費による牧羊城遺跡出土土器の再検討および澄田が一部紹介しながら宮本が扱っていない上馬石貝塚の C 地点の資料の実見を待って触れる予定だったので、多少遅れることになった。

遼東半島の遺跡形成では、双砵子 1 期から始まり 3 期に終わり、次の遼寧式銅劍を伴う段階の集落とは重ならない集落遺跡が多い。崗上墓の場合も、双砵子 3 期文化の集落跡が次の尹家村 1 期類型の墓地になっていた。上馬石貝塚では逆に、甕棺は見つかっているが、小珠山上層期に対応する上馬石中層類型直後の双砵子 1 期から双砵子 3 期までの居住を示す貝層が空白となっている。I 区は双砵子 3 期文化に墓地であったが上馬石上層類型の間は貝塚を形成し、その後再び墓地となった。ここに大きな遺跡形成状の画期があり、それは土器の不連続性として現れる可能性が高い。しかしながら、華北三足器系の煮沸具である甌を遼寧式銅劍の段階でも継続して用いているように、遼西や遼

東東部地区の遼寧式銅剣を伴う段階とは異なる、在地的な連続性もあった。そのような連続と不連続を念頭に置きながら、先行する双砵子3期文化からの流れを追う必要がある。

上馬石貝塚BⅡ区出土土器は、宮本も指摘するように、崗上墓の副葬土器や封土出土土器の一部と明らかに類似する。その大きな共通点として、長頸壺や口唇状把手がある。このことは確かだし、これが編年作業の定点となる。

宮本はA区上下層が1981年報告で設定された上馬石上層類型に、BⅡ区が上馬石青銅短剣墓類型に相当するとした。A区の上層と下層は無遺物層を挟んで上下に重なっている層位に基づいているので相対的な新旧は動かしがたく、かつ連続性が強くその中間にBⅡ区を介在させる余地はないことは宮本の認めるとおりである。したがって、この対比が正しければ、1978年調査時の層位関係（A区上下層に対応する上馬石上層類型→BⅡ区に対応する青銅短剣墓）から上記の変遷が傍証されることになる。しかしながら、BⅡ区の土器を上馬石青銅短剣墓類型に対比し、A区の後には置くのは、型式学的な操作によるので盤石のものではない。また、78年の上馬石上層類型が42年のA区に対応するのもかも再考の余地があろう。

宮本は青銅短剣墓との対比では、BⅡ区は土器の類似から崗上墓の時期であるとした。そして青銅短剣墓の変遷で崗上墓より新しい楼上墓はBⅡ区以後とした。ここまでは何の問題はない。

そして崗上墓より古い双房M6はA区上層期であるとしている。崗上墓の下層から見つかり、前節でも検討した双砵子3期文化新段階の土器は、無文化を根拠にA区上層期とされ、それより層位的に新しい崗上墓がBⅡ区に下る傍証となっている。これらが以下の検討の対象となる。

問題は、どのような根拠から、78年上馬石上層類型資料がA区に対応し、崗上墓に後続する楼上墓はB、A両地区のいずれよりも新しいことになったのか。また、崗上墓より古い双房M6の土器（図3）がA区上層に比定されることになったかである。

筆者の理解では、A区下層に類似する土器は、牧羊城（1類土器）、楼上墓、尹家村下層1期にある。この考え方が認められるのであれば、崗上墓が古く、楼上墓、尹家村下層1期が新しいというのが、60年代の中朝共同調査以来の共通の理解であるから、BⅡ区→A区下層→A区上層となるのが穏当である。崗上墓以前には、双房M6があり、尹家村では続く下層2期にも末期の遼寧式銅剣が伴うから、BⅡ区からA区上層は、遼寧式銅剣の最古段階と末期段階を含まないことになる。

崗上墓や楼上墓という墓地出土の土器と上馬石や尹家村、牧羊城のような生活遺跡の土器を同列に論じることに疑問を生じさせるかも知れないが、どこから出ようと同一土器であれば、同じとして扱って問題はあるまいというのが筆者の理解である。ただし、遺跡の性格による偏りがあるはずだから、ある特定の器種が出ていないということに大きな意味を持たせるのは危険であるということを重視すべきであろう。

宮本がBⅡ区をA区より新しくした論拠は、すでに判明している周辺地域における土器の変遷観と連動させるよりも、両者よりあきらかに古い双砵子3期との連続性に着目したことにあるようだ。とくに、A区下層の広口短頸壺の外反する口頸部におもに斜格子文からなる帯状の文様帯をもつことに着目した。牧羊城1類土器や尹家村下層1期にもある。広口短頸壺の頸部に、斜格子文や羽状文による帯状の文様帯を持つ広口壺が発達するのが双砵子3期大嘴子類型の特徴であるから、それからの変化と考えたのである。

他方、BⅡ区の土器では、広口壺の口頸部が短く、無文であることから、双砵子3期との関係ではA区の土器よりさらに離れており、より退化、無文化した段階と判断したのである。そして、崗上墓の銅剣自身についての斬楓毅の年代観がそれを支えた。

B II区はA区下層・上層に比べ、壺、短頸壺、罐、甗と器種が少なく、それもあって無文が多いという現象として現れてもいるが、それが資料的な制約なのか実態なのか明確ではないと宮本自身が述べている。これは筆者にとっても大きな関心事であった。宮本は分析の対象としていないが、澄田の簡報ではC区にも口唇状把手に代表されるようなB II区と類似する資料が提示されている。C区は上馬石中層類型期の資料も多く見られ、層位的に分離されていないので、B II区との比較は容易ではないが、提示されている資料を見るかぎり、やはり器種は少なく、かつ無文が多いという傾向を示し、B II地点の資料は同段階の実態を表しているのかとの印象を持ったが、全容を知る必要を感じていた。今回、牧羊城1類土器の再整理にあたり、京都大学総合博物館のご厚意で、上馬石貝塚など遼東半島の資料を見学する機会を得ることが出来た。その結果、澄田の提示したC区資料はおおむねC区の該当時期の土器の様相を反映していると判断した。つまり、上馬石貝塚では、口唇状把手を伴う段階の土器の器種は少なく、甗が多い。かつ、それと関連するためでもあるが、無文が多いということである。そして、B II区とC区には横向きの橋状把手が多数ある。この把手の付く土器として、1978年調査資料の無文広口壺(図10-1)にその器形を知ることが出来る。1978年調査時に設定された上層類型の内容は複数の発掘地点の資料から抽出されており、編年の基準資料には安易に使えない。そのような資料ではあるが、斜格子帯の付いた長頸壺があり、甗が多いとされ、口唇状把手と横付きの橋状把手があり、無文の土器が多いとされる点で、C、B II区との共通性が高い。頸部帯状施文の広口壺が報告されていないことも共通している。とくに、上層類型の甗あるいは甗の口縁部には円形刺突列の付いた粘土帯が付くことが特徴としている。B II地点の口縁粘土帯には何も付加されないが、C地点の口縁粘土帯には刺突文の付加されたものが多いことからすると、78年上層類型の資料はC地点の土器により近いものが多いとは言えよう。78 I区2層を主とする84年報告の「上馬石上層類型」の主な土器は42年資料のA区ではなくB II区に対比される。従って、77、78年調査で層位的に分かったことは、B II区は78年の青銅短剣墓段階ではなく、B II区=崗上墓→上馬石M3→同M2という、青銅短剣墓および短剣自身の相対的な新旧関係であった。

筆者の逆転編年を支持する中村大(2005)は、B地点よりさらにA区との異質性が目立つC地点をB II区より古い段階の資料として分離しようとしている。なお、C地点資料を実見した際に、うち1点は双砵子3期文化大嘴子類型の土器との峻別が難しいが、頸部帯状施文の広口壺の口縁部が数点あることを確認した。崗上墓封土の22の破片もその可能性があろう。また、崗上墓段階の長頸壺の頸部にめぐらされる斜格子充填帯状施文をその系譜と無関係ではないとの理解は可能である。B II区にないのは資料的な制約に起因する側面もあると考えるが、78 I区2層にも例示がないことからすると、たとえあったとしても頸部帯状施文の広口壺がきわめて少なく、この段階では長頸壺と口縁粘土帯甗、そして口縁粘土帯の甗が主要な器種組成であることに変わりはない。この点に着目すれば、宮本の変遷観はそれなりの合理性があるのだが、問題はそれを認めると、以下に述べるほかの属性変遷との不整合が生じてしまうということである。

粘土帯を口縁に貼り付ける土器は甗の口縁になるものと甗の口縁になるものがあるようだが、識別は難しい。このような土器は、二重口縁になる場合と、口唇部直下の突帯文になる場合がある。

B II区では、粘土紐を内湾する口縁に巻き付けただけで、素文である。A区上層では、粘土紐が突帯文状になり、その端部を刻むものが多い。口縁は外反して括れるものが多い。A区下層では頸部が内湾する二重口縁の口縁が直立し、やや括れていて、B II区とA区上層の中間的である。さてその上で、B II区とA区上層のいずれの粘土帯が古いのであろうか。末期の遼寧式銅剣を伴う尹家村下層2期の土器では、口縁に刻みの付いた突帯をめぐらし、球形の胴部の上で括れて外反するものが多い。

上馬石の各地点とも口縁粘土帯口縁の土器が出ているが、A区上層では粘土帯が突帯状になり、その上に刻みを施すのが目立つ。このような粘土帯甕は尹家村2期文化の粘土帯甕に近く、その中間にBⅡ地点の口縁粘土帯甕を位置づけるのは無理であろう。中村もこのような大きな流れとしての筆者の変遷観を支持した上で、より詳細な説明を試みようとしている。

78Ⅰ区やC区にはそれ以外に粘土帯上に点列をめぐるものがある。類例は宮本が注意したように、戦前の資料ではA区下層(50)にある。後述する高麗寨(図8-46など)にもある。78Ⅰ区にはBⅡ区には見られない双房的な口縁部(5)もあり、高麗寨例(26)と共通する。宮本が双房の類例とする上馬石壺Ⅲ類はA区下層にあり、上層にはない。さらに、文様が異なる。双房M6の壺に関連する土器は馬蹄形貼付ないしは口唇状把手を含めると、78Ⅰ区、BⅡ区、A区下層、高麗寨にあり、双房M6をA区上層段階とする積極的な根拠はない。

BⅡ区に先行する双房系の多条の横走沈線が胴部にめぐる土器は類例が遼東半島中部以西では砦頭墓地以外に出ていない。この段階の墓地が見つかっていないためかも知れないが、とにかく出ていないのだから対比は困難である。口唇状把手から見ると、双房の馬蹄形の貼付はとてども把手として機能しているとは考えられない。前節で扱った砦頭墓地の土器の貼り付け装飾に近い。それに比べると、78Ⅰ区2層、C区、BⅡでは小型の他に大型のものが出ており、より把手としての機能を持っているようだ。砦頭墓地からの変遷を見れば、馬蹄形貼付装飾がより古くからあり、遅れて大型化し外に張り出した把手状になる、いわゆる口唇状把手が現れる。それには上馬石上層文化段階から現れる横向きの橋状把手との接触が大きな契機となったのではなかろうか。

そして、C地点未報告の頸部帯状施文の広口壺がある。このようなA区下層との類似点もないことはないが、78Ⅰ区やC区は長頸壺、口唇状把手などBⅡ区と共通するものがほとんどであり、それほど大きな差を見いだせない。

横の橋状把手は上馬石では、C地点では断面が扁平長方形板状の橋状把手だけが多数あり、それに加えてBⅡ区では、突起状の把手があり、A区下層では断面がやや丸味をおびた棒状の環状の把手が新出する傾向がある。A区上層では橋状把手もあるが少数で、角材状の把手が新出する。後続する尹家村2期文化では橋状把手がなくなり、切り株形把手となる。

また、双房の二重口縁粘土帯甕は円筒状であるが、粘土帯に点列がない素文であり、BⅡ区のもの(図9-62)はやや内湾し、78Ⅰ区は採集品の完形品があるが、やはり内湾する。

双砦子3期文化の大嘴子の甗の肥厚口縁部は内湾する点で、高麗寨やBⅡ区の二重口縁粘土帯土器に近い。宮本論文では、地点層位別の土器の質的な変化には触れるが、数量的な変化に触れていない。澄田の簡報によれば、甗はC地点に多く、A区下層ではやや多く、A区上層ではきわめて少数であるという。BⅡ区について数量的な記載はないが、C地点に準じて考える。78年の資料でも甗は多かった。時期的な増減を反映したものであろう。華北三足土器系の煮沸具である甗は、双砦子3期文化では組成はするが、数はきわめて少なく、続く高麗寨、あるいはC地点、BⅡ、78Ⅰ区2層段階で増加し、再び減少に向かったことになる。尹家村下層2期段階には消滅するようだ。

高坏は逆にBⅡ区にはなく、A区下層、上層にある。78Ⅰ区にはあるからBⅡ区段階に本当にないか分らないが、A区上層の高坏は長脚であり、後続する尹家村2期文化の高脚の高坏に続く。

双砦子3期文化に施文される文様は主に、広口壺の頸部である。それ以外に、口縁がやや内湾する簋と呼ばれる器種が少数あり、その胴部上半部に、広口壺の頸部に施される文様と同じモチーフの文様が施文されている。その代表的なモチーフとは三角形あるいは四角形の中に斜線ないし斜格子を充填するものである。

平行沈線間に互い違いに縦線列を挿入する文様が双砵子 3 期文化の廟山、大嘴子 3 期にある。それに比べると幅は狭いがやはり同様のモチーフが B II 区 (71)、崗上墓封土 (25) にある。また、胴部に縦の平行線区画の中に斜線を充填する文様を施文するものが B II 区に多く、A 区下層、上層にはない。

また、斜線充填三角文を横に並べさらに上下に重ねる文様がある。上馬石貝塚の中で、それにもっとも近いのは 78 I 区の土器 (図 10 - 17) である。斜格子の充填である。崗上墓では小型のため一段しかない。尹家村 1 期 (図 2 - 5) では区画が沈線ではなく、点列である。

崗上墓封土で口縁下に刻目列をめぐらすもの (図 7 - 21) は、さらに双砵子 3 期文化の土器に近い。しかし、この種の口縁部の土器は上馬石貝塚 B II、C 地点には報告されておらず、封土出土という点で一括性に難点があり、確たる論拠とするには弱いのは否めない。

文様の面から、上馬石 B II 区、78 I 区や崗上墓の土器は少なくとも A 区上層より双砵子 3 期文化に近い。A 区上層はそれらから最も遠い。宮本の指摘どおり A 区下層も双砵子 3 期文化に近いことは否定しないが、他方で、AA 区上層と下層の間に B II 区を入れることもできないから、一部に説明できない部分もあるが、B II 区を A 区下層の前に置くしかないというのが筆者の現在の理解である。

・高麗寨遺跡資料について

東亜考古学会が調査した、上馬石貝塚に地理的に近い高麗寨遺跡 (図 8) の資料は本書 8 章 2 節に古澤による東京大学所蔵資料の資料紹介があるので参照されたい。

高麗寨には、中原系土器以前の土器として、黝褐色、黒褐色の、泥質で器面を磨研した A4 類と色黝色で非磨研の泥質土器である B 類がある。図 8 のすべてについて、どちらに帰属させるか分からないが、大きく見ると、大小の壺や口縁粘土帯甕、甗は B 類非磨研で、碗や鉢が A4 類磨研である。前稿 (大貫 1982) では、高麗寨 A4 類と B 類の調整の違いは精製土器と粗製土器の関係とし同時期のものと考えた。楼上墓の壺の類例がないことを根拠にして、牧羊城の新段階 (= 上馬石 A 区下層) より古く、上馬石 78 I 区 (= B II 区) との関係重視した。高麗寨報告書の所見では、A4 類土器は B 類より下層から単独で出ているというが、土層図によればどのトレンチでも BC 類より下層で A4 類が単独で出ていることはない。考えられるのは、本書の資料紹介でも指摘されているように、ここでは図示していないが高麗寨には双砵子 1, 2 期の土器らしきものが少量あるから、それらのことを指しているのかも知れない。

81 年の上馬石の報告でも、高麗寨は上馬石上層類型に属する遺跡とされていた。しかし、最近では高麗寨を双砵子 3 期文化の末期に含めるのが中国では一般的になりつつあるようだ。しかし、大嘴子類型では上下を画するのが隆線だが、高麗寨では沈線であり、やはり異なる点が重要であろう。また双砵子 3 期文化の大嘴子や廟山には横向き橋状把手はない。

文様のある土器は、この頸部に斜格子あるいは羽状文充填の带状文のある広口壺 (1 ~ 7) のほか、口縁下の列点文の付く広口壺 (8 から 14) や浅鉢 (49) とおそらく短頸の広口壺の胴部上半の幾何学的な沈線文 (15) が主である。甗が多く出た B トレンチから、21、35、47、48 の土器が伴出している。21 は広口壺でも、35 は口唇部に刻目が付く甕である。粘土帯口縁の土器には無文と刻目付きがある。これがもっとも同時性の高いものである。しかしながら、これだけでは広口壺や碗や鉢が含まれず、器種が不完全であり、時期差とは考えがたい。

宮本 (1985、1991) は带状施文の広口壺に着目して、上馬石 A 区下層に対比した。尹家村下層 1 期にもあるから、地理的にも近い A 区下層段階に併行させたことはもっともである。粘土帯状の円

形刺突文も共通する。高麗寨遺跡では大型の口唇状把手や頸部に帯状の文様が付く長頸壺が出ておらず、これらを地域差あるいは調査区の性格に置き換ええないかぎり、上馬石 B II、C 区に対応させる根拠はない。

ただし、高麗寨には上馬石 A 区下層段階とすると理解できない部分もある。A 区下層、上層に有文長頸壺に代わって現れる逆 Z 字文の壺がない。これが許されるなら、有文の口唇状把手付き壺が出ていないことが直ちに時期差の根拠にはならないことになる。それにふさわしい口縁部は出ているのだから。A 区下層に多い有文壺Ⅲ類 (34, 35) が高麗寨にはない。併行関係の基礎となっている頸部斜格子帯状施文広口壺もよく見れば似ていない。極端に短くなった短頸の広口壺 (29 ~ 39) が目立つが、上馬石では B II 区の 58 ~ 60 がそれに類似する。その B II 区の口縁粘土帯襖は幅の狭い二重口縁状の無文であり、A 区下層より高麗寨に近いと言えよう。胴部の斜線充填三角文 (8 章 1 図 1 - 11) が B II 区段階の斜格子充填三角文に近い。

頸部の小波状文 (15 ~ 17) あるいは頸部の点列文は双砦子 3 期文化によく見られる文様である。継続して用いられたと解するしかないが、上馬石ではどの地点からも出ていない。

B II 区に頸部斜格子文広口壺がないかぎり、高麗寨が A 区下層にもっとも近いことは確かだ。だが、共通する器形や文様がないことや、あってもやや異なるということと、双砦子 3 期文化との連続性から、双砦子 3 期→高麗寨→A 区下層という流れが読み取れる。高麗寨の位置づけは上馬石 A 区下層を双砦子 3 期文化直後とし、B II 区を A 区上層の次とした宮本編年の論理と連動するものであり、両者は一体として考えるべきであり、それを認めることによる問題点も同じである。B II 区の小型長頸壺の祖形を高麗寨の長頸壺に求めたり、C 区や崗上墓での頸部帯状施文の存在の可能性で多少の説明はできるが、高麗寨から A 区下層への連続性とどう両立させるかまだ確かな答えを出せない。高麗寨には上馬石の各地点からは出たことのない土器が出ている。そのことから今後これらを細別できるかを議論しなければいけないが現在の筆者の理解では難しい。ただし、この問題を解消するために器種組成を解体するような安易な細別をすべきではない。すなわち、逆転編年における高麗寨をめぐる問題点を明らかにしておく。

・ 楼上墓の壺と上馬石貝塚の土器

続いて、楼上墓の壺 (図 6 - 1) に見られた二条一単位の平行沈線間に三角集線文を挿入する文様についてみることにする。大連浜町貝塚採集品 (図 5 - 1) にも口頸部に同様の文様が施されるが、胴部では三角集線の代わりに、くの字あるいは逆 Z 字になる平行沈線が挿入されている。

二条の平行沈線間に三角集線文や、くの字あるいは逆 Z 字文を挿入するモチーフは双砦子 3 期に直接その祖形を求められない。上馬石貝塚では、B II 区の土器に、横走する沈線に重ねた連続刻み列の間に三角集線文を挿入する土器 (67) がある。平行沈線でもなく、また多段になることもない。壺の口頸部が直立する点でも異なる。崗上墓封土には乱雑ではあるが、平行沈線間に鋸歯文を挿入する、祖形的な文様がある。A 区下層には、平行沈線間に逆 Z 字文と三角集線を多段にして重ねる文様 (41) がある。宮本は浜町貝塚の壺の器形が A 区下層の壺の器形に類似することを指摘している。A 区上層では、平行沈線間に逆 Z 字文を挿入するもの (10) があるが、多段にはならない。B II 区では、三角集線文を挟むのは、先行する双砦子 3 期文化羊頭窪類型によく見られた横走沈線に点列を加えたもので、平行沈線ではない。A 区下層では平行沈線間の三角集線文に逆 Z 字文が加わり、A 区上層では三角集線が消えて逆 Z 字文だけであり、この順序で推移したと考えれば合理的である。A 区下層の未報告資料にはより浜町貝塚の文様に近いものがあるから、A 区下層が浜町貝塚の土器にもっとも

近い段階であることは宮本の指摘するとおりでである。その浜町貝塚の土器と楼上墓の土器を宮本のよ
うに、間に A 区上層と B II 区を介在させて、離ればなれにさせるのは無理であろう。浜町貝塚と楼
上墓の壺を切りはなさいとすれば、いずれも崗上墓段階と考えられる B II 区より新しいと考えるべ
きであり、A 区下層は B II 区の土器より新しい。

5. 遼寧式銅劍墓と上馬石上層文化

中朝共同調査報告の段階では、崗上→楼上→尹家村下層 2 期と編年された。その後、現在遼東半
島最古の遼寧式銅劍墓とされる双房 M 6 や上馬石短劍墓が追加された。楼上墓はその大半が採集品
であることから編年の基準としては相応しくないとして用いず、その後見つかった上馬石短劍墓を代
わりの基準資料として用いる研究者が多くなっている。その場合、双房 M 6 →崗上→上馬石 M 3 →
尹家村下層 2 期 M 12 となるしかない（徐 1996、劉 2003）。このような新旧の序列はほとんどの研
究者が共有する理解である。上馬石短劍墓 M 3 の年代は報告では、戦国初期とされていた。楼上墓は
崗上と上馬石 M 3 の間に入るというのがこれまたほぼ共通の理解であろう。その楼上墓の年代観に
大きな差があったために、全体をきわめて新しくする（そのため上馬石短劍墓の位置する場所の確保
が難しくなり、崗上墓から楼上墓に併行する段階に置くしかなかった）というのが日本では主流で
あった。そのことが今日の弥生年代論につながったのである。しかしながら、後には遼寧式銅劍遼東
起源論と結びつくのはともかくとして、これとは異なり、楼上墓を古く位置づけることで全体を通じ
た別の位置づけをおこなう研究者が中国では、中朝共同研究調査団の一員であった安志敏、吉林大
学の林濤、その教え子である徐光輝などであり、我が国では千葉基次が代表的である（大貫 2004、
2005）。後者の理解がなぜ主流となりえなかったかが研究史上の問題であった。

ただし、これらの青銅短劍墓に副葬される土器に限られ、かつ集落遺跡の調査が不十分なため、土
器編年あるいは類型に結び付けるのはいまだに難しい。

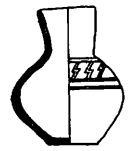
上馬石貝塚との関係では、崗上墓 = B II 区、楼上墓 M 3 (?) = A 区下層 → A 区上層 → 尹家村 M
12 = 尹家村 2 期となる。崗上墓の前には双房 M 6 が来る。横の橋状把手は双砵子 3 期文化以後であ
り、かつ砵頭の土器との関係や遼寧式銅劍の序列からは崗上墓以前となる。崗上墓が B II 区に対比
できるのであれば、双房 M 6 はそれ以前であるが、対応する所属土器文化を特定するのは難しい。双
砵子遺跡の短劍墓（図 4）は遼寧式銅劍の刃部突起部の発達それに伴う下方への移動という流れから
すると、宮里（2006）も認めるように、双房と崗上墓の剣の間に入ることになる。土器も崗上墓の
土器より双房に近いから整合的である。対応する土器文化の特定は難しいが、あえて上馬石上層文化
から除外する理由もない。

・鄭家窪子第 3 地点出土の逆 Z 字文壺

宮本（1985、1991）が、瀋陽鄭家窪子第 3 地点から出ている逆 Z 字（雷）文の付いた壺（参考図 1）
を上馬石 A 区上層の土器に対比したのは慧眼であった。この土器は靳楓毅（1982）の論文の中だけに、
鄭家窪子第 3 地点出土の墓および包含層出土の土器として紹介されているもので報告はない。問題
の逆 Z 字文壺はその説明が全くなく、靳を信頼すればこの層の段階のものであるとしか考えようが
ない。上馬石では逆 Z 字文は A 区下層、上層にあり一概に限定できないが、宮本は A 区上層の灰陶
長頸壺が M6512 と形態が類似することから、同じ第 3 地点から出たという逆 Z 字文壺も A 区上層
併行であろうとした。

第 3 地点は中朝共同調査団が 1965 年 5 月から 6 月に調査した地点である。この共同調査の報告

は北朝鮮版共同調査報告書に含まれるほか、中国では単独の報文（中国社会科学院考古研究所東北工作隊 1989）として出ている。同じ 65 年の 8 月に中国側が単独で再び調査し 14 基の墓が見つかったが、報告されているのは大型墓 M6512 と小型墓 M659 のみであり、ほかは未報告である。靳楓毅はおそらく共同調査時の資料は見ておらず、逆 Z 字文壺が第 3 地点であれば、この 8 月時の調査資料であろう。一部の遺物の出所は不明であるが、かつて筆者が瀋陽の鄭家窪子陳列館で見た鄭家窪子出土の陳列品がその図の中に含まれている。M6512 を含め、遼寧式銅剣が見つかった第 1（＝肇工街）、2、3 地点は第 3 地点の包含層を含めすべて同時期とした。靳楓毅に依れば、その土器の胎土には夾砂褐陶と泥質灰陶があり、墓のほとんどの副葬土器はこれら二種の長頸壺であり、あるものには頸部、胴部に条線文があった。そして、そのような長頸壺を伴う包含層からは長脚の灰陶高坏が多く出たが、鉢類はなく、三足器も少なかったという。



参考図 1 鄭家窪子
第 3 地点の壺

宮本（1985, 1991）は靳楓毅（1982）の示した、M6512 他の墓の副葬品および第 3 地点包含層の遺物を A 区上層併行の春秋時代新楽上層期のものとした。

第 3 地点では中朝共同調査時に 2 基の墓が見つかったが、3 層を切っていたが、同時期と考えてよいとされた。その M2 から出ている青銅短剣は刃部にまったく湾曲がなく、突起もない新しいものである。第 3 地点 3 層から出ている土器は、北朝鮮版によれば、二重口縁粘土帶甕、長頸壺、高坏、皿、杯、甌である。M2 など 2 基の墓を含めて、北朝鮮版は尹家村下層 2 期段階としている。共同調査団の当時の共通見解では、戦国時代前 4、5 世紀と見ていたことになる。

ところが、その後の 1989 年の中国側の単独報告で安志敏らは、これらの資料を遼西の夏家店上層文化に併行する新楽上層文化期のもので、春秋期とした。宮本はすでに 85 年の段階で、「鄭家窪子第 3 地点」を新楽上層文化段階の春秋期として捉えていたから、89 年の中国側報文の見解を先取りしていたとも言える。北朝鮮から出版はされたが、あくまでも共同調査報告書であり、中朝共同調査にたずさわった安志敏が北朝鮮版の報告書の見解を知らなかったとは考えられない。にもかかわらず、それと異なる見解を出している。そして、それと靳楓毅の見解はほぼ共通する。つまり、靳楓毅が長脚の灰陶高坏が特徴とも言っているように、共同調査の際の鄭家窪子 1 期の土器と靳楓毅の第 3 地点の土器というのは同じ包含層のほぼ同じ内容を指しているとした考えられないのである。安志敏や靳楓毅は長脚の灰陶高坏を尹家村 2 期文化併行期まで下げることはしなかったのである。

靳楓毅の紹介した鄭家窪子第 3 地点の遺物包含層と中朝共同調査時の鄭家窪子 1 期の遺物包含層は実は同じ層を指していると考え、安志敏は春秋時代の新楽上層文化とし、靳楓毅は春秋戦国の境から戦国前期頃、北朝鮮版の共同調査報告は戦国期前半尹家村下層 2 期併行期のものとする。靳楓毅は尹家村下層 2 期を戦国末、前漢初としていたから、三者三様なのだが、誰も鄭家窪子第 3 地点に戦国時代後半の層があるとは考えておらず、それほど年代観に開きはない。

中国側報文では、北朝鮮版に比べ省略されていて、包含層の遺物の提示が少なくなっている。罐、壺、高坏、盤、杯が提示されており、甌がない。結語では鄭家窪子第 1 地点（＝肇工街）の 2 期と内容は同じで、鼎、鬲、甌、高坏などがあるとする。鼎と鬲が増えているが、このような資料は北朝鮮版にはないし、中国版にもない。安志敏らは自らの調査時には出ていないにもかかわらず、その後の知見から、第 1 地点肇工街 2 期と同時期と考え、本来あるべきと考えた器種組成を述べただけなのではあるまいか。第 1 地点の肇工街遺跡の資料は、北朝鮮版では単一時期の資料として報告された。それに依拠した筆者の 82 年論文では偏堡類型に袋足の鬲あるいは甌が伴うと言うことを根拠に、偏

堡類型を双砵子 1 期や新岩里 1 期より新しくするという誤りを犯し、双砵子 1 期と郭家村上層との関係にも混乱をもたらした資料である。このことについては宮本（1985）により誤りが指摘されているが、当時それらを筆者は混在と見抜けなかった。

筆者の前稿と同じ 82 年に東高台山遺跡（瀋陽市文物管理弁公室 1982）が報告され、瀋陽地区の研究に重要な影響を与えた。東高台山では新楽上層期の単純層が見つかり、偏堡類型には三足器が伴わず、新楽上層より古いとされた。89 年中国版報文は肇工街を偏堡類型の 1 期と髙あるいは甗を伴う 2 期に分離しており、安志敏らは実質的に共同調査報告時の所見を訂正したことになる。

82 年の東高台山報告はさらに、鄭家窪子 M6512 を代表に夏家店上層文化鄭家窪子類型を設定し、そこには三足器がなく、高坏と、罐と壺が主な器種であるとした。M6512 と東高台山とは同じ機関により調査報告されており、重要な証言である。それは安志敏らの報告した器種組成と一致するが、それでは北朝鮮版の甗や斬楓毅の提示した髙足が説明できない。さらに、鄭家窪子類型は一時的に新楽上層文化類型と共存して、新楽上層文化として融合したとも述べる。それならば甗や髙があってもよいことになる。そして、新楽上層文化鄭家窪子類型と呼んで文化帰属を変更している。

鄭家窪子第 3 地点 3 層の実態は長頸壺と罐と長脚の高坏が主体なのであり、甗は共同調査の担当者はあるといい、単独調査時の担当者はないという程度の僅少のものだったのであろう。併行する遼東半島の上馬石 A 区上層の器種組成から見れば納得できるところである。また、第 1 地点肇工街 2 期の新楽上層文化に属する鼎や髙などの三足器は第 3 地点の鄭家窪子（1 期）類型とは関係がないことが地点別に出たことで証明された。斬楓毅の新楽上層風の髙足はどこから出たか分からないが、第 3 地点の鄭家窪子類型からは分離される。また、このような、甗はともかくとして髙も鼎もない器種組成の鄭家窪子類型を新楽上層文化に含めるかどうかは所詮定義しただが、あまりに器種組成上の乖離が激しく、やはり分離して新楽上層文化の後に鄭家窪子類型が来ると理解するのがよいのではないか。

・新楽上層文化と鄭家窪子第 3 地点

鄭家窪子第 3 地点第 3 層の無文の土器を基本とする遺物を中国報文で安志敏らは「新楽上層文化」と呼び、春秋時代とした。新楽上層文化の標式遺跡である新楽遺跡の報文（瀋陽市文物管理弁公室他 1985）中で、新楽上層文化を殷末周初と述べるとともに、広義の夏家店上層文化に属すとも述べていた。その標式遺跡である新楽遺跡で「新楽上層文化」として設定された内容とは器種および器形に於いてかなり隔たりがある。新楽遺跡にある鼎、髙や、口頸部に一對の縦の環状把手の付いた壺が鄭家窪子第 3 地点にはない。大貫 1982 年文献では新楽報文に従い新楽上層を鴨緑江下流の新岩里 2 期文化、遼東半島の双砵子 3 期文化に併行するものとしている。

新楽遺跡の上層に代表される典型的な新楽上層文化には、口頸部に一對の環状把手が付く壺が特徴的であり、新楽上層文化に近い類例はより北の湾柳街、順山屯、勝利村にあり、これらには青銅刀子、青銅の斧などの武器・工具が伴うことが知られている（大貫 1997）。東は撫順の望花や施家東山でも青銅刀子が出ており、調査資料が貧弱のため出ている土器に口頸部一對の環状把手付きの壺があるかは不明だが、横の橋状把手の付く鼎など類似する土器が出ている。これらに共通するのは、大型の鼎、髙、甗という煮沸具が多く出ることである。この望花や施家東山のすぐ近くには双房型の遼寧式銅剣と壺を出した大甲邦石棺墓があり、前期青銅器時代と後期青銅器時代とに分けて報告されている（撫順市博物館考古隊 1983）。この前期青銅器文化は、遼西から広がる文化の系統の東端であり、遼河下流域にとどまり、廟後山文化の展開する遼東山地には入っていかなかった。遼東の遼寧式銅剣のもつ

廣川守（1995）は、検討した窖藏 5 基中、西周前期までの窖藏が 3 基、それ以外に 2 基の窖藏に西周中期の銅器を含むとした。その一つ馬廠溝の盃は林巳奈夫（1984）が誤植でなければ、一時西周前期としたこともあるものである。残りは山湾子窖藏の 2 点の簋である。青銅器に疎い筆者に独自に断代する能力はないが、諸氏の断代との側視形を重視した併行関係から琉璃河報告前期末の M54 前後と判断した。琉璃河墓地では M54 が青銅礼器を副葬する最後の段階である。それと窖藏が関係するなら、両者に関わる何か大きな動きがあったと予想される。以上から、琉璃河報告の年代観が正しければではあるが、一部の窖藏が廣川の述べるとおり中期まで下る余地は十分にあるが、下っても中期初頭ないし前半までと判断する。

遼河下流域の大型三足土器群の年代も以上のような年代幅で考えるしかない。二里崗上層期以後における北方あるいは東方への殷の進出は周辺地域の変動とも連動していた、あるいは促したのであろう。そして、伴出する青銅刀子などの武器は殷代後期殷墟期を中心とするものであることは確かだ。一部は在地での鑄造の開始の証拠でもある模倣品であるが、作りが悪く形状も模倣対象物とは異なっているとの秋山（2000）の指摘がある。粗雑だからすぐ後出とはならず、同時期の製品を模倣しても形状が異なることがあるという点は、続く双房型の剣が遼西の剣とは形状が異なり、粗雑な非実用品が多いことと関連して注意されよう。

おおよそ、その年代幅は双砮子 3 期文化と同じと考える。つまり、遼東半島では甗を持つ双砮子 3 期文化の後、遼河下流域では新楽上層文化など、甗、鬲、鼎の大型三足器土器文化の後に、遼寧式銅剣の時代が始まるのであるから、両者の交替は連動していた。双砮子 3 期文化の始まりはおおよそ前二千年紀中頃であり、終末の砮頭墓地の年代は下限が西周前期の前 10 世紀に下る可能性をすでに述べたから、あるいは魏營子類型の終末が多少遅れるかも知れないが、大差はないであろう。

・鄭家窪子類型の位置づけ

このような視点から再度鄭家窪子第 3 地点の資料を見ると、上馬石 A 区上層の突帯文のような口縁粘土帯土器に類似するものや、高坏の脚が長く、脚内面に輪積み痕を残す A 区上層の高坏に類似するものが出ている。これらを北朝鮮版では尹家村下層 2 期とほぼ同じとしていた。当時は、上馬石貝塚の戦前資料は知られていないから、尹家村下層 1 期と 2 期とどちらに近いかといえば、長頸壺、あるいは長脚の高坏という点で、当時の資料の中でより近い尹家村下層 2 期に対比したのは当然であったろう。しかしながら、現在ではその中間の上馬石 A 区上層がある。

鄭家窪子第 3 地点 3 層（＝鄭家窪子 1 期）の土器はどちらかといえば粘土帯の端部に刻みがある尹家村下層 2 期よりは、宮本の見解どおり上馬石 A 区上層の土器に近いであろう。粘土帯甗のほとんどの二重口縁部が無文であることは A 区上層の土器ともやや異なるが、細かい時期差というよりは地域差なのかも知れない。北朝鮮版（およびその日本語訳版）では写真図版が不鮮明なため実態が捉えにくいのが横の環状把手と口唇状把手があるという。橋状把手は A 区上層でも問題ないが、口唇状把手があるならば上馬石貝塚では B II 区との類似が指摘されることになり、鄭家窪子第 3 地点 3 層はかなり長期にわたるものであるということになる。しかしながら、それが付くという壺の説明をする中国の報文では「鈕形耳（ボタン状突起）」と説明している。鮮明な写真図版があればすぐに解決する問題ではあるが、ここでは中国報文の記載に従っておき、口唇状把手はないものとする。二道河子で双房型土器に伴う高坏の脚部は碗を逆さにしたような形状で、鄭家窪子にはない。M2 のような新しい剣を伴う長頸壺も 3 層の壺と類似するといいい、3 層とだいたい同時代だという。そうであれば 3 層には上馬石 A 区上層併行期以後の段階の資料をも含むことになるが、図示されたものを見る

かぎり、主体はやはり上馬石 A 区上層併行期としたい。

斬楓毅はこの壺を紹介した論文で、M6512 および第 3 地点第 3 層を春秋戦国移行期から戦国前期とした。斬楓毅は M6512 の年代を推定し、それを 3 層の年代にもあてはめているだけである。逆 Z 字文壺は墓から出た可能性が高いと思うが、M6512 と第 3 層あるいは逆 Z 字文壺との関係は筆者には検証不能である。宮本の指摘どおり上馬石上層類型の逆 Z 字文壺との類似から逆に鄭家窪子の問題の壺の年代が推定できるだけであり、いずれも上馬石 A 区上層に対比できそう。

斬楓毅は M6512 もこの 3 層と同時期としているから、M2 の剣と M6512 の剣がいずれも 3 層を紹介すると同時期ということなり、不可解ではある。M2 の長頸壺は秋山 IV 式の遼寧式銅剣である亮甲山 M5 の長頸壺と形態が類似する。この点では尹家村 2 期文化により近い。鄭家窪子 M6512 の 3 点の長頸壺や M659 の例、あるいは共同調査時の M2 の例も器形から言えばそれほど差異はない。これらの長頸壺を墓から分離した場合、それらの先後関係の評価は難しいであろう。劉俊勇 (2003) は上馬石 M3 の長頸壺の同時期の類例として鄭家窪子 M6512、659 ととともに亮甲山 M5 の壺をあげているほどだ。無文の長頸壺はあまり変化していないということであり、長頸壺の器形による単純な時期判定は慎重を要する。逆に尹家村 2 期文化の長頸壺はこれらとは器形が異なる。長脚の高坏も尹家村 2 期文化に突然出てくるものではない前史があるという視点が必要である。鄭家窪子第 3 地点 (= 鄭家窪子 1 期) は上馬石 A 区上層併行説をとるべきだが、尹家村 2 期文化との間は時間的に接近しており漸移的な変化であったことを逆に示唆するのである。この長頸壺と粘土帯甕の組合せのうち、長頸壺が新たに燕系の縄文壺に換わったのが上堡墓地である。鄭家窪子 3 層は M6512 と同段階かやや遅れる段階を含む可能性もあるが、より古くなる資料はない点が重要である。

この鄭家窪子類型に属すると見られる竪穴住居 1 軒が新民公主屯後山遺跡 (周 1990) で見ついている。無文の外湾する粘土帯口縁の甕が基本であり、切り株状把手が付くものもある。計 4 点。他に鉢が 1 点しか出ておらず、器種構成は不明だが、報告では鄭家窪子の青銅短剣遺跡と同時期としている。斬楓毅が提示した数少ない第 3 地点の口縁粘土帯甕の口縁も外湾し、柱状の把手が付いている。鄭家窪子 M6512 の剣が遼西系であるといわれる (宮本 1998) ように、遼西の遼寧式銅剣を伴う凌河文化の土器と共通する特徴を持つ。あるいは凌河文化鄭家窪子類型としてもよいのではないか。より遅れる秋山 IV 式剣の段階の亮甲山 M5 の口縁粘土帯甕は口縁の粘土帯が扁平になり点列がめぐり、把手が斜め上に跳ね上がっている点で、鄭家窪子や公主屯と異なる。

中原系の青銅器を伴うわけではない鄭家窪子 M6512 の年代を絞り込むのは難しい。遼寧式銅剣に詳しい岡内 (2004) は春秋後期 (前 570 - 475 年) と幅を持たせ、宮本 (2004) は前 6 世紀としている。ここでは南洞溝墓の年代に近いことから前 500 年前後と考えておくが、目安に過ぎない。

斬楓毅の理解に従い M6512 が第 3 地点第 3 層や逆 Z 字文壺と同時期であるとすれば、それが宮本の指摘どおり上馬石 A 区上層に対比できるので、上馬石 A 区上層の年代上の定点として春秋後期の前 500 年前後を中心とする頃を考えておく。

この段階がおおむね上馬石 A 区上層で、M6512 の段階であるから、筆者の理解によれば A 区下層対比の楼上墓 M3 (?), B II 区対比の崗上墓は当然それより古い。上馬石 M3 が鄭家窪子 M6512 より新しいとすれば、上馬石上層類型 A 区上層以後の可能性が高くなる。想定される年代が異なるが、上馬石上層類型→上馬石青銅短剣墓という、81 年上馬石報告の内容が追認されるのであろう。

・上馬石上層文化の終焉と遼寧式銅剣

劍柄については、秋山進午 (1968, 69) 以来多くの研究者による分析がある。最近、宮里 (2006)

が新たな視点から剣柄の分類と変遷についてまとめていて参考となる。楼上墓の移行期を境に遼東半島西部の短剣墓では銅製の剣柄が付くようになる。西部の楼上墓M1と尹家村M12の間には官屯子河北岸で見つかった火葬土坑木棺墓(図13中段「聖周墓」)が入るであろう。上馬石で層位的に新しいM2の剣身と類似するものに京都大学蔵伝撫順出土剣があり、伝撫順出土剣にも類似する剣柄が伴う。M3の剣柄との形状の違いをあえてあげれば、より盤部が低く、偏平になっていて、柄も細長くなっている点であろう。次の徐家溝の剣柄に近づいている。そのような変化系列を仮定すると、聖周墓の剣身および剣柄は上馬石M3とM2の間に入ることになる。

上馬石M3は、それが切る78I区2層からA区上層に見られる把手が出ており、土器1点にもその可能性があった。鄭家窪子M6512・第3地点を介して、上馬石M3はA区上層よりさらに新しい可能性が高くなった。鄭家窪子M6512が上馬石M3より古いということでもあり、年代観はともかく宮本(1991)、千葉(1992)、岡内(2004)などに共通する新旧関係である。

上馬石M3の泥質褐陶の無文長頸壺は崗上、楼上の副葬壺とはまったく異なる系統である。他方、頸部がより短い尹家村下層2期文化の長頸壺とは異なる。上述の鄭家窪子M6512との中間に入るべき壺であろう。

最近、山東出土として注目されている遼寧式銅剣を伴出した杏家荘M2の年代を宮本(2004)は紀元前6世紀後半から前5世紀前半としていた。杏家荘M2の年代が春秋後期であるとの見方は中国の研究者の間でほぼ共有されているようだが、さらに実年代でいつになるかとなると要領を得なくなる。宮本が同時期とする海陽嘴子前墓群の中期M4、M6を王富強(2002)は春秋後期古段階とする。それならば、前6世紀後半となりそうだ。しかし、王はM4の被葬者を銘文の解釈により田乞とし、田乞の没年からすると前480年頃の墓であるとする林仙庭らの案に賛同している。杏家荘M2の陶製の鼎の足はM4より、新しいM6の銅鼎の足に近い。杏家荘M2から出ている車軸頭に広域に分布するものがあるから、それから考えると中州路M2729や燕の龍湾屯墓、遼西の南洞溝墓が同じ年代に並んでくる。この段階を筆者は前5世紀第一四半期を中心とする年代と見るので、田乞の墓か否かについては筆者の理解を超えるが、年代的には射程に入る。すでに考古学的な年代比定上では誤差の範囲のような議論であるが、古くとも前500年頃と見ておく。

杏家荘M2から出た剣は刃部に湾曲と突起があるから、伝撫順や上馬石M2よりは古く、王青(2003)はかつて遼東積石墓の一つである、臥龍泉墓地の短剣と近いとした。官屯子木棺土坑墓例にも近いように見える。剣身の形態から杏家荘M2の方が鄭家窪子M6512よりも少し新しそうだ。

証拠はないが、尹家村2期文化が遼東半島中部までの広い範囲を覆ったと仮定しても、上馬石貝塚ではA区上層以後にはまだ時間的な空白があり、上馬石M3と尹家村M12の間にはM2の段階があるはずだが、その間の無文化の変遷過程は分かっていない。

問題となるのは臥龍泉積石墓地出土の短剣の位置づけである。墓の構造からは崗上、楼上墓と同一の系統であり、官屯子土坑墓や上馬石土坑墓M3とは系統が異なる。千葉(1992)や岡内(2004)は崗上墓と上馬石M3の間で、鄭家窪子と同一段階と見る。4本の剣は一例を除き採集品であり、かつそれぞれ異なる墓室にともなうであろうと報告されている。それらの剣身の形態は刃部に突起部があるものからほとんどないものまで少しずつ異なるが、刃部下半部の幅が狭く、細身の剣身であり、崗上墓から上馬石M3への剣身の形態変化の中間に置くのは無理があり、鄭家窪子M6512の剣身の形態に近い。鄭家窪子M6512には3本の剣身があるが、突起部の明瞭なものから不明瞭なものまであり、この突起部の特徴は時期差にはならないことを明らかにしている。3本に共通するのは、刃部下半分がくの字形に屈曲し、末端が鋭く曲がって茎に接するなど、それ以外の形状である。臥龍泉の

4本の微妙な突起部の差異もまた同時期の変異として捉えられる。臥龍泉に共通するのは、刃部下半部の膨らみがさらに弱まり、鋒が長くなるなど鄭家窪子の系統としてもM6512よりやや新しいように見える。上馬石上層類型段階の遼寧式短剣墓は積石墓ではないかもしれないが、尹家村1期類型の遼寧式短剣積石墓もこの頃に終焉し、官屯子土坑墓はその後であると考えられる。ただし、後続する尹家村M12や徐家溝墓では石槨（棺？）墓であるから、石を使う伝統は残る。この封土からは、口縁が内湾する双房的な広口壺や口唇状把手が出ている。中国版報告では、銅剣は楼上墓と同時期かあるいはさらに遅れると見ているが、楼上墓段階には口唇状把手がないのだから、中朝共同調査団は当然、崗上墓、楼上墓と異なり、銅剣の年代と封土の土器の年代が合わないことを意識していたに違いない。北朝鮮版では封土の土は住居址の覆土であるという。おそらく、周辺にあったより古い住居を破壊した土を盛ったと理解したのであろう。

安志敏（1996）は「尹家村1期文化」に官屯子火葬木棺土坑墓や上馬石短剣墓を含んでおり、尹家村M12のような最末期の剣以外はすべて1期文化の範囲と考えている。しかし、それらに伴出する土器が不分明で、どこまでが上馬石A区上層の範囲なのか、上馬石上層文化の終焉をどこに置くべきか判然としない。劉家村石墓では型式の異なる剣身を分離すべきとした（大貫2004）が、すでに遼西と遼東では異なる形態変化を示すことが宮本（1998）によって全身長と最大幅に比率を指標に指摘されている。その中で、鄭家窪子M6512は遼西のグループであった。宮本は宮本I式の古い剣のみを扱ったのであるが、同じ指標を用いると臥龍泉、上馬石M3、官屯子例はいずれも遼西グループに入る。これは鄭家窪子以後、両地域に共通して細身の剣身になるためである。しかし、その中でも、上馬石M3の剣身は刃部下半部が幅広く、崗上墓など遼東グループの流れを引く点で、臥龍泉とは単なる時期差の問題ではないと考えられる。慎重であるべきだとは思いますが、臥龍泉の相対的な位置づけが正しければ遼東での剣身の型式変化をすべて一系列で捉えられないという結論になる。その後の末期の剣身も多様だから、それでよいのだろう。

・劉家村石墓の銅鏃について

『牧羊城』に収録された劉家村石墓の銅剣は2本の剣身が古式と新式であったため、その後の研究に混乱を招いたが、林澐が新式剣を一括遺物から外したのは慧眼であったと考える（大貫2004）。残りの劉家村石墓資料でも、『牧羊城』は長短2点の銅斧を紹介しているが、旅順博物館員であった森修（1930、37）は一貫して短斧1点のみであるとしている。従うべきであろう。このように採集資料であるゆえにその一括性が完全に保証されているわけではないが、それ以外は一括と認めておく。古式剣に伴出したとされる劉家村の銅鏃は西周式であり、遅くとも春秋初期までしか下らないと林澐（1980）が指摘し、遼寧式銅剣遼東起源説の大きな論拠になったことはよく知られている。

参考図3に管見した銅鏃を地域、時期別に配置した。この図が当該時期のすべての銅鏃の型式を網羅しているか不安がないではないが、そこに、劉家村石墓の銅鏃2点も並べている。劉家村以外の年代観は各研究者の見解に従っているが、おおよその目安である。劉家村石墓の銅鏃は2点とも鋒がなく、脊が上端まで突き抜けて、胡が細長く直線的で、喉が深い。1点（41）は胡の末端が尖らないのが特徴で、そこに着目すると管見した資料から見ると、西周中期（31）から春秋前期（44）に類例があることが分かる。もう1点（42）はほぼ同じだが、翼の端がやや尖り気味であるがやはり尖ってはいない。西周後期南黄莊例（36）も近いが、もっとも近いものは春秋前期虢国墓地M1747であろう。林澐のかつての指摘に近く、春秋前期まではあげてよいのではなかろうか。そして、この剣身は突起部から上が長く、双房、双舵子剣より崗上墓の剣に近いことは誰しも認めることであ

	陝西	中原	河南	北京周辺	遼西	泰山周辺	膠東半島	遼東
春秋前期	虢国墓 M1052 42	虢国墓 M1747 43 44	応国墓 M8 45 46		南山根 M101 23 24 25 26 十二台堂子 M1 47 48	仙人台 M6 33	呂家阜 37 38	劉家村 1 42
西周後期	虢国墓 M2001 10 11 12 13 14			琉璃河 M268 21		魯国古城 M138 32	南黄莊 34 35 36	誠信 47 48 49
西周中期	張家坡 M152 9				水泉 M7701 22	膠州西庵車馬坑 (縮尺不明) 31		
西周前期	洛陽北窯 6	長子口墓 7 8		琉璃河 15 16 17 18 19 20		新泰市区墓 (縮尺不明) 30		
殷後期		殷墟 1 2 3 4 5		琉璃河 M1		蘇阜屯 M1 前掌大 91M3 27 28 29	0 5cm	砣頭 M24 39 40

参考図3 中国各地の銅鏃の変遷

ろう。このことは遼東の遼寧式銅劍の年代にとってきわめて重要であるが、何しろ一括性に不安の残る資料である。

遼西では建平水泉 M7701 で矛形柄銅劍に伴って類例があるが、翼の末端が欠落するため、41 と 42 の何れに近いかわかり不明。靳楓毅（1982）は南山根より古いと認めている。

あと、崗上墓より古い双房タイプの土器を伴う遼寧式短劍墓では、二道河子 1 号石棺墓（遼陽市文物管理所 1977）の資料に銅鏃の石製鑄型がある。脊が通り、両翼の挟りが小さく、脊と茎の間に段がない。これが華北の銅鏃の変化と連動するのであれば、参考図の類例ではやはり古い。しかし、靳楓毅（1982）に依れば、二道河子 M1 の銅鏃は両翼の幅が狭く細長く、西周の銅鏃とは異なり、遼西の十二台営子 M1 の銅鏃よりもさらに新しいとする。その十二台営子 M1 の銅鏃（47, 48）を虢国墓地 M1747、M1767 や洛陽中州路 1 期 M2415 の銅鏃に対比している。確かに二道河子と十二台営子の鏃は類似するが、十二台営子の方が古いという積極的な根拠があるとも思えない。虢国墓地などとの類似点を翼がそれ以前に比して、下に垂れて先端附近が非直線的になることに求めている。しかしながら、中原の銅鏃は翼の末端の胡が伸びて、深い切れ込み（喉）があり、類似の程度は低い。林滄も同じ根拠から、十二台営子 M1 の銅鏃を春秋中期とした。虢国墓地 M1052 などを春秋前期の代表として、それと異なるからより新しいと見たからであろう。しかし、虢国墓地の中での細別時期が明らかでない墓が多いので細かい議論はできないが、靳楓毅は別の墓地で、春秋前期（前半？）に属する M1747 のような例に着目して、虢国墓地春秋前期例と同時期とした。林滄の論理ではあえて春秋中期まで下げる根拠はなくなった。岡内（2004）も根拠が不明だが、春秋前期とする。最近、春秋前期前半頃とする河南応国墓地 M8（河南省文物考古研究所ほか 2007）で有脊両翼で喉の切れ込みの浅い銅鏃（46）が見つかった。南山根の属する夏家店下層文化とは奴魯児虎山脈を挟んで対峙した凌河文化の古い段階である十二台営子墓も南山根に近い年代に置くことができる。虢国墓地が重要な位置にあることは、同墓地から銅鏡が出ていることでも知られる。

もう一例、西豊誠信石棺墓の例がある。ここからは銅鏃（49）そのものと鑄型（47, 48）が出ている。銅鏃は脊がない断面菱形であり、胡が発達せず、鑄型から考えられる銅鏃は非常に長い胡がある。両者の型式はまったく異なる。脊のない銅鏃は今回の集成図では殷代を除くと西周後期から再び現れる。ただし、平面形は類例がない。地方型として独自に理解するべきであろうか。柳葉形凹基の磨製石鏃が伴出しており、銅鏃がその形状を模倣してもおかしくはない。誠信石棺墓の鑄型の例は胡が異常に発達して細長い、あえて華北に類例を探せば山東の西周後期の例（32, 35）に近い。地理的に間を埋める資料がないが、誠信石棺墓の報文でも西周移行期としているからほぼ近い年代である。以上の危うい銅鏃の議論ではあるが、誠信石棺墓が古く、二道河子 M1、劉家村石墓が新しいという銅劍の変遷観を合わせると、おおよそ西周後期から春秋前期頃という目安となる年代が出てくる。また、牧羊城周辺からはかつて劉家村石墓類似の銅鏃が別に採集されていた（報告：挿図 8 - 13）。官屯子木棺土坑墓の特異な銅鏃が注目されるが、類例を探せておらず年代が分からない。

・遼東における双房型壺と遼寧式銅劍の出現年代

遼東最古段階の遼寧式銅劍を伴う双房 M6 の年代は吉林大学出身の研究者によって古い年代が与えられてきた。陳光（1989）は殷末遅くとも西周前期とし、当初は西周後期の可能性も考慮していた徐光輝（1990、1996、1997）は遅くとも西周中期、王巍（1989、2004）も西周前中期として、足並みを揃えつつある。彼らは双房の土器の年代から双房の銅劍の年代を決めた。我が国では千葉（1992）がそれを支持してきた。靳楓毅（1982、1983）は双房の上限年代を二道河子の銅鏃から、

春秋前・中期以前に遡らないとした。

双房系の短剣墓は遼東半島中部から遼東山地にかけて広く分布している。遼東半島西部では双房系の土器・銅剣からなる墓は見つかっていないが、双房 M6 は時間的には砦頭墓地と双砦子短剣墓・崗上墓の間に時間的に併行すると考えられている。しかし、上馬石上層文化の広がる半島中西部では、上馬石 B II、C、78 I 地点、あるいは双砦子、崗上墓のような土器があり、遼寧式銅剣を伴う双房型（＝美松里型）壺は出たことがない。少なくとも長期に継続する余地はない。瀋陽地区では上馬石 A 区上層併行期以前の相当する段階は空白であり、東部での双房型（＝美松里型）壺の広がりを考え、多少の時期幅を考える研究者が多い。ただし、遼東東部山地にも二道河子タイプの銅剣が及んでおり、双房型剣が遅くまで残ることはない。それはまた双房型壺の成立をどこに求めるかにも関わる。砦頭墓地の土器は双房系の祖形ではなく、周辺にすでに成立していた双房系土器の影響を受けただけと考える陳光は双房系土器の成立が砦頭墓地と同時期の殷代まであがる可能性を指摘する。現在の考えの主流は砦頭墓地を祖形にして双房型壺が成立するという徐や王や年代観は異なるが宮本の理解であり、双房型壺の成立は砦頭墓地より新しいというものである。

相対年代的には確かに壺はその通りであろうが、半島西端の砦頭墓地に出自するにもかかわらず、半島の中・西部にはその後の双房型壺が見つからず、東に広がった地域で隆盛するというのが不可解である。双房型壺を出す墓は大石蓋石棺墓や石棺墓だから、双砦子 3 期の砦頭墓地などの積石墓から継承する崗上、樓上墓とは異なる、別の系譜に属すると考える。また、双房 M6 では、上馬石上層文化に盛行する把手であるが、双房型の壺に横の環状把手が付く。また、副葬土器の組合せとして、粘土帯口縁の円筒形の甕が出現する。これらは砦頭が属す双砦子 3 期文化に求められない。もちろん遼寧式銅剣もである。遼西の遼寧式銅剣を伴う文化である凌河文化にも粘土帯二重口縁円筒形甕があるが、それを王立新（2004）は遼東起源であろうとする。これは遼寧式銅剣遼東起源説と連動した見方なので注意を要するが、遼東東部が関与はしているのであろう。双房系土器組成は遼東西部と東部の融合から成立し、かつ遼西とも連絡があったというのが現在での理解である。

すくなくとも、砦頭墓地よりは遅れるとすると、砦頭の銅鏃の年代が前 1000 年を前後する頃であり、双砦子 3 期文化の終末の年代は大方の理解通り遅くとも周初の頃、すなわち前 10 世紀の西周前期までと考える。それはおおよそ遼河下流域では新樂上層文化の、遼西では魏営子類型の終焉の年代でもある。環渤海湾においてほぼ同時に大きな変動が起きたのであり、その後成立したのが遼寧式銅剣を伴う各地の諸文化であった。今まで遼西起源説を採る研究者は小黒石溝 M8501 の一鑄式という変わった曲刃式の類遼寧式銅剣をその最古として、伴出した中原系青銅礼器の年代からその上限を西周後期（岡内、宮本 2004）とし、筆者も従ってきた。たしかに、遼西の銅剣では小黒石溝を越える古さを示す根拠を持つものはない。問題はこの一鑄式という特異な有柄の銅剣が別鑄式の銅剣の祖形になるのだろうかという点である。柄の形態から考えて、それをあえて一鑄で作るのが祖形であるというのはやはり理解が難しい。周辺にすでに、柄は木柄であれ、すでに剣身を別に作る剣があり、それを模倣したのが小黒石溝の銅剣なのではないだろうか。だとすれば、模倣の対象の剣はさらに古くなくても論理状の問題はない。しかし、そのような古さの年代が明らかな剣身が遼西では見つかってはいない。ただ、遼西では先行する魏営子類型の終焉を西周前期末前後とすると、まだ現在見つかった遼寧式銅剣との間にはまだ時間的な空白があり、可能性としてはその間を埋める、より古い西周中期に遡る銅剣の発見がありうる。小黒石溝の剣もつい最近見つかったように。

他方、遼東では双房 M6 の年代はどのように決められるのか。遼西を介在しないかぎり、中原系の青銅礼器の伴出から年代を割り出す方法は不可能である。また炭素 14 年代もありうるが、肝心の銅

劍墓の測定例がない。上で検討してきた銅鏃がややその可能性を秘めているといえよう。

上で見た、誠信石棺墓や二道河子 M1 の土器や銅劍は双房 M6 より新しい。それらの銅鏃から、双房 M6 は西周後期以前となる。また、伴出関係に疑問を残す、一括性に問題を残す劉家村石墓の銅劍は二道河子よりさらに崗上墓の銅劍に近い。二道河子の銅鏃は特徴に乏しいが、より新しい劉家村石墓の銅鏃が春秋前期頃ということから、西周後期から春秋前期の間となり、推定年代と抵触することはない。双房 M6 は西周後期以前となる。他方、双砦子 3 期終末の砦頭墓地の年代はおおよそ西周初期であった。双房 M6 はこの両者に挟まれており、西周前期と後期の間、おおよそ西周中期頃というのがここでの結論である。徐や王など吉林大学系の研究者のかつての年代観に近づくことになった。ただ、現在ではこの段階の銅劍は遼東にしか知られていないが、遼西の場合、凌河流域の西周中期は空白となっており、夏家店上層文化の小黒石溝劍はとも初現期のものとは考えられず、たんに現状での最古の年代を示しているに過ぎない。より古いものが凌河流域で見つかる可能性を残していると考え。あるところで発生したものが隣接地域に広がるのに多くの時間を必要とするという先験的な傾斜編年が以前の弥生年代の誤りを引き起こしたのだと考える（大貫 2004）。遼東起源説もまた別の傾斜編年であるから、やはりこれもよほどの根拠がないかぎり避けるべきである。考古学的な時間幅では遼西・遼東同時出現の可能性を残している。このような理解から以前は筆者も遼西の小黒石溝の年代を遼東にも当てはめ、遼東も西周後期を越えることはないだろうと考えたのであるが、その併行段階が西周中期まで上がりうると言うのが現状での理解である。

ただし、弥生年代論で問題となった松菊里劍は遼東では双房型劍の次の崗上型劍との関連を持つべきであり、その上限年代は今回の検討でも依然として春秋前期であり、以前考えたごとく上限が前 8 世紀であること（2003b）に変わりはない。双房型の上限年代が上がることにより影響を受けるのは、朝鮮半島の、比来洞などのより古い一群の劍である。庄田（2004）の述べるように、弥生時代の始まりは比来洞劍と松菊里劍の間で押さえられるが、その幅が古い方にやや広がることになる。

6. 結語

前節での双砦子 3 期文化の再検討に続いて、上馬石上層文化の土器編年を見直し、それに青銅器からえられる知見を合わせ、遼東の前一千年期前半の大きな流れを捉えようとした。

大きく見ると、西周に入り、魏營子文化、新樂上層文化、新岩里 2 期文化、双砦子 3 期文化が終焉を迎え、遼寧式銅劍を伴って、遼西では凌河文化、遼東中・西部では上馬石上層文化が成立する。東部は鴨緑江下流域の美松里文化とでも呼ぶべきもの以外、双房型の集落遺跡が分からず、様相は不明である。上馬石上層文化への移行過程は連続性が予想されるがまだ判然としているわけではない。

次に遼西、遼東ともに大きな変動を迎えるのは凌河流域に燕系の墓地が現れる春秋後期の段階である。遼西の西部では夏家店上層文化が終わり、水泉文化に代わり、そして東部では凌河文化の前期から後期に移行する。この段階には燕系の青銅礼器とともに在地系の土器を伴う墓地が東部に現れており、このことが遼西あるいはさらに遼東にまで大きな影響を与え、それが画期をもたらしているとも言えよう。

最後の大きな変動は遼東に燕が進出したことが考古資料から明らかとなる前 4 世紀中頃以降の段階である。遼東の最後の在地系土器文化が尹家村 2 期文化である。

仮称上馬石上層文化は半島西部の尹家村 1 期類型と中部の上馬石上層類型に分けた。両類型に共通する大きな特徴としては、横向きの橋状把手を持つ土器があげられる。口唇状把手は古い段階には両方の地域に現れるが、新段階になると消えるので、全体の指標にはならない。ただし、墓は副葬土

器だけからは帰属類型の判断は難しい。

上馬石上層文化時代の半島西部は双砦子短剣墓→崗上墓→楼上墓・尹家村下層 1 期の段階に分かれている。尹家村 1 期類型の土器は双砦子 3 期文化羊頭窪類型から変化したものである。

上馬石上層文化と後続する尹家村 2 期文化との大きな違いは、2 期文化ではほとんど無文化することであろう。それとともに、双砦子 3 期文化の系譜を持つ、頸部に文様を持つ広口壺が 2 期になると消える。やはり双砦子 3 期以来の圈足付土器も 2 期には消え、甌も消える。2 期文化では壺と甕の組合せが基本になる。その甕は口縁粘土帯土器が基本であり、遼寧式銅剣とともに遼東あるいはさらに朝鮮半島まで広がったものであり、共通性を強めた。遼東半島西部では双砦子 3 期文化の影響の強い尹家村 1 期類型が残り、しばらくは受け入れなかったが、2 期文化の段階ではそれらを受け入れ、遼東半島西部も遼東の他の地域との一体性を強めたのである。ただし、まだ中間に間隙がある。

上馬石上層類型は、一部に問題を残しているが C・B II 区→A 区下層→A 区上層となる可能性が高い。C・B II 区は 78 I 区とほぼ同じで、崗上墓の段階であり、A 区下層が楼上墓 M 3 (?) に併行する。続く A 区上層は遼河下流域の鄭家窪子第 3 地点 1 期 M6512 に併行する段階である。双房 M6 は上馬石 B II 区より古い。

この段階に残る双砦子 3 期文化の広口壺の系譜では、上馬石上層文化に多い、羊頭窪類型の流れを引く、頸部に断続的な横走条線を施文する、上馬石上層文化に目立つ壺は上馬石上層類型にはない。反対に、大嘴子類型の系譜を引く、頸部に上下を沈線で画し、帯状に斜格子文や羽状文をめぐらす文様を持つ広口壺は上馬石上層類型など中部に多い。

今回の再検討の結果は、その両文化の交代期を示すことでもある、遼東における双房型の遼寧式銅剣の出現が西周中期まであがる可能性があるということであり、吉林大学系の研究者である林濤、徐光輝などの研究の再評価が必要だというのが結論である。双房型でも遅れる誠信石棺墓が西周後期頃とすると、朝鮮半島の松菊里型剣に關与する崗上型剣はその後である。ただ、西周、春秋三時期区分は一時期 7、80 年から 100 年前後を単位とする大別区分であるから、西周後期に次段階が入ってもかまわないし大まかな目安である。型式の変化の速度が一定である保証などないのだから。また、人により同じ時期区分名で異なる実年代を示すことがあり、世紀による時期区分の方がよいのだが、何しろ関連する遺物の年代がほとんどこの時期区分名になっているため、致し方ない。

上馬石 A 区上層が鄭家窪子 M6512 の段階であることから上馬石上層文化の今知られる下限は春秋時代後期後半の前 5 世紀前半頃となっている。最終末の遼寧式銅剣を伴う尹家村 2 期文化の年代の定点は戦国時代の前 4 世紀後半頃である。その戦国時代の古い段階に上馬石短剣墓、官屯子短剣墓が入るが、土器型式としての設定はできない。もし、尹家村 2 期文化の古段階として組み込まれることになれば、尹家村 2 期文化は少なくとも遼東半島に燕が到来するまでの戦国時代の前・中期段階の文化として認識できることになるが、今のところ尹家村 2 期土器文化の分布が確認できるのは西部に限られ、中部に及んだ証拠はない。逆に上馬石上層文化に含まれることになるなら、上馬石上層文化の終末は戦国前期まで下ることになる。

* 青銅器については本学院生の角道君の助力を得た。

図出典 図 1: 中社考研 1996 図 2: 同上 図 3: 許・許 1983 b 図 4: 中社考研 1996 図 5: 水野編 1942 図 6: 中社考研 1996 図 7: 中社考研 1996 図 8: 浜田編 1929 図 9: 宮本 1991 図 10: 遼寧省博物館ほか 1981 図 11: 澄田 1988, 89 図 12: 旅順博物館 1943 図 13: 『羊城』録以外は各報文より 参考図 1: 靳楓毅 1982 参考図 3: 各報文より。

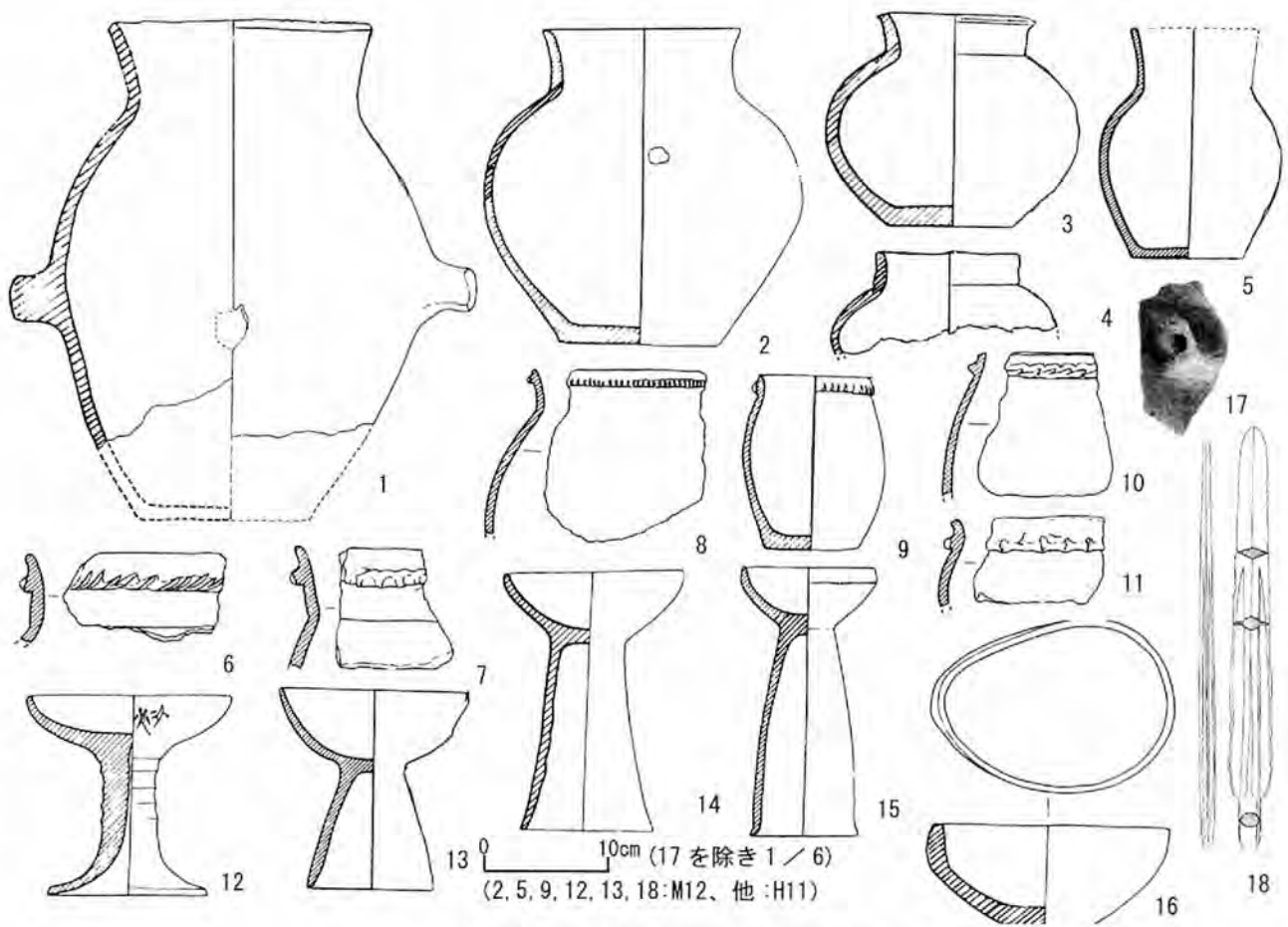


図1 尹家村下層2期の土器および青銅短剣

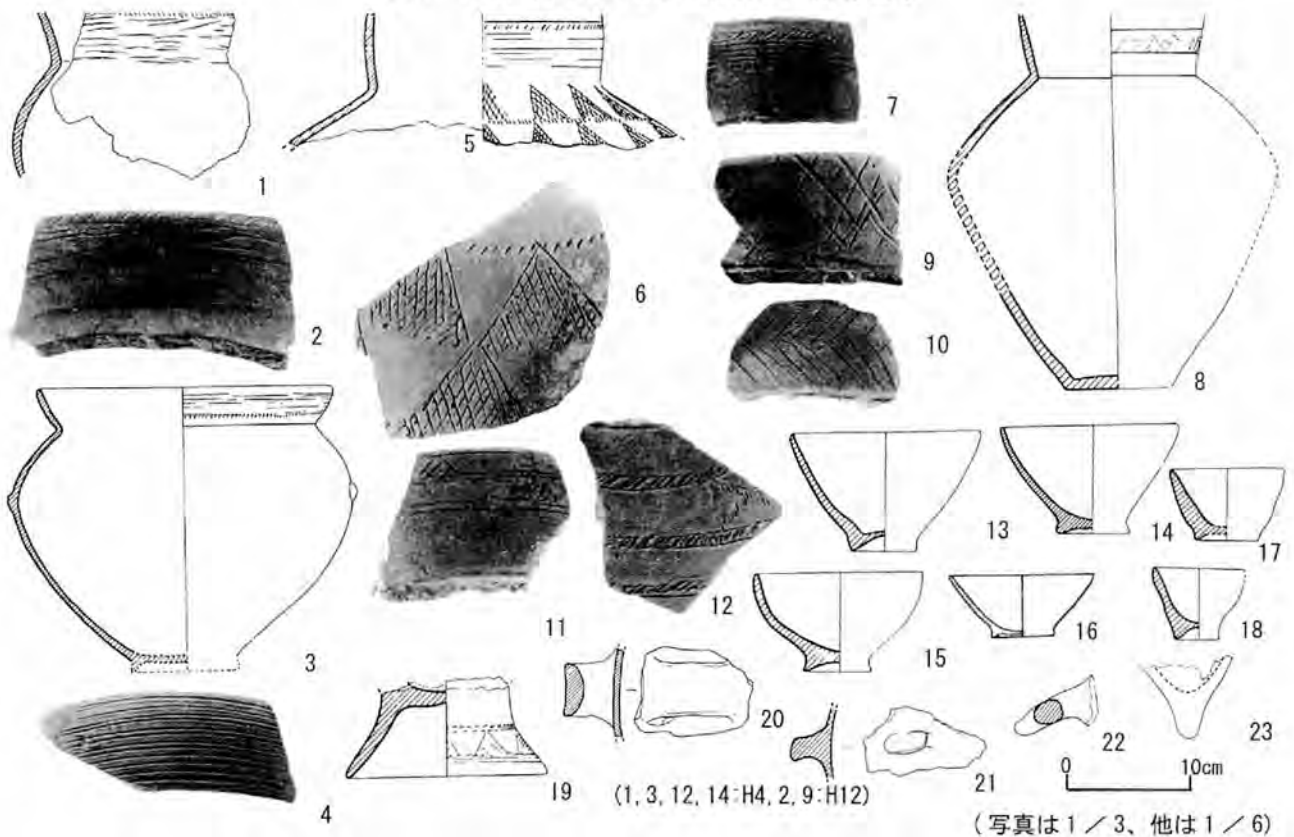


図2 尹家村下層1期出土の土器

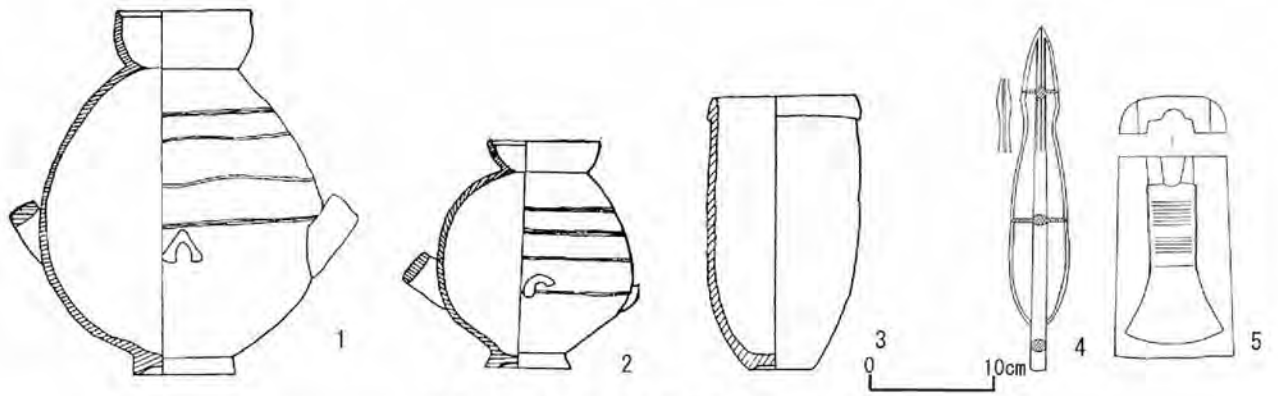


図3 双房 M6 出土の遺物 (1 / 6)

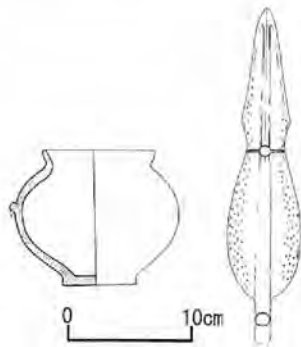


図4 双砵子短剣墓 (1 / 6)

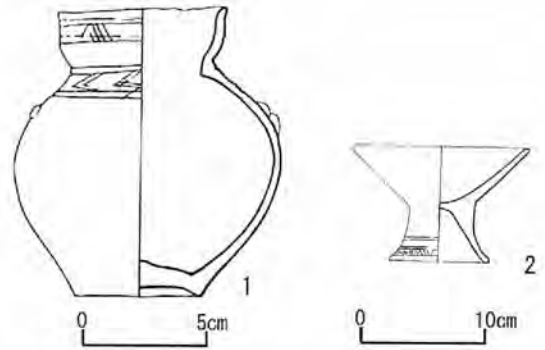


図5 大連浜町採集の土器 (1:1 / 3, 2:1 / 6)

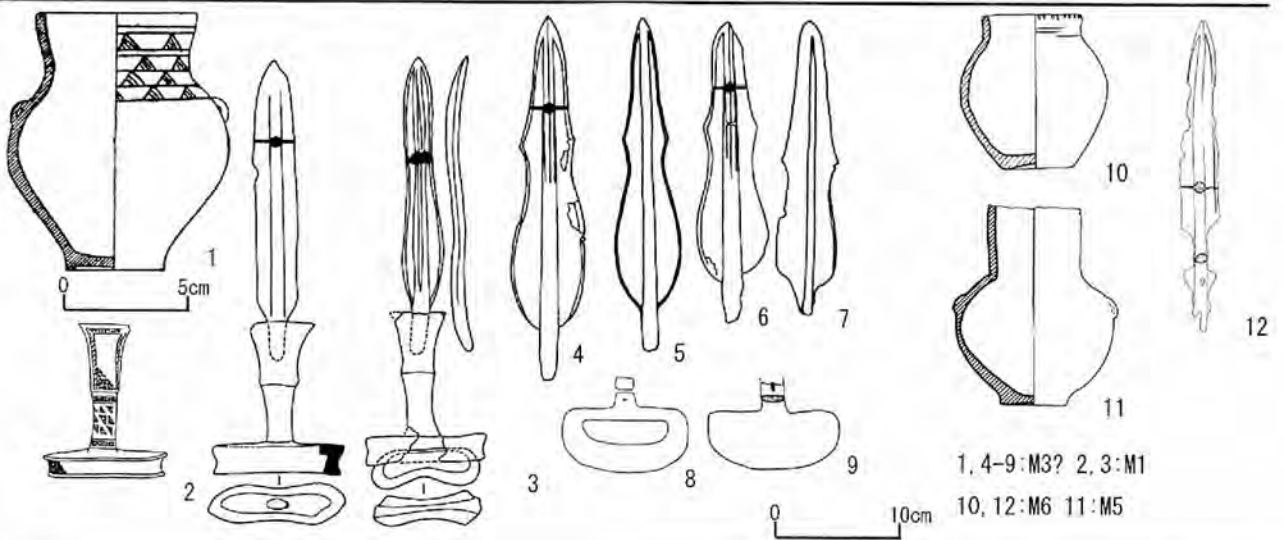


図6 楼上墓出土の遺物 (1と写真1 / 3の他は1 / 6)

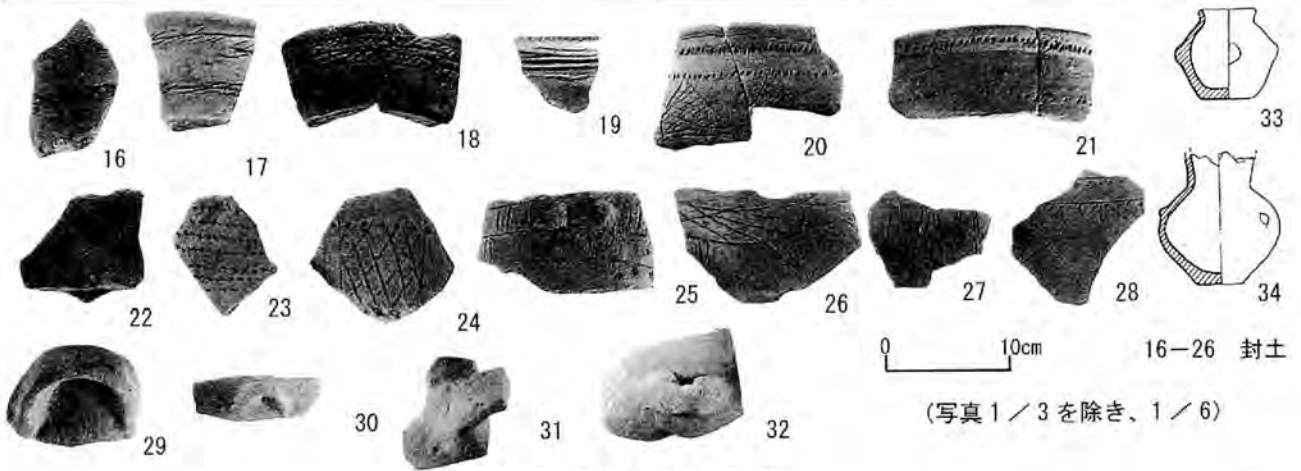
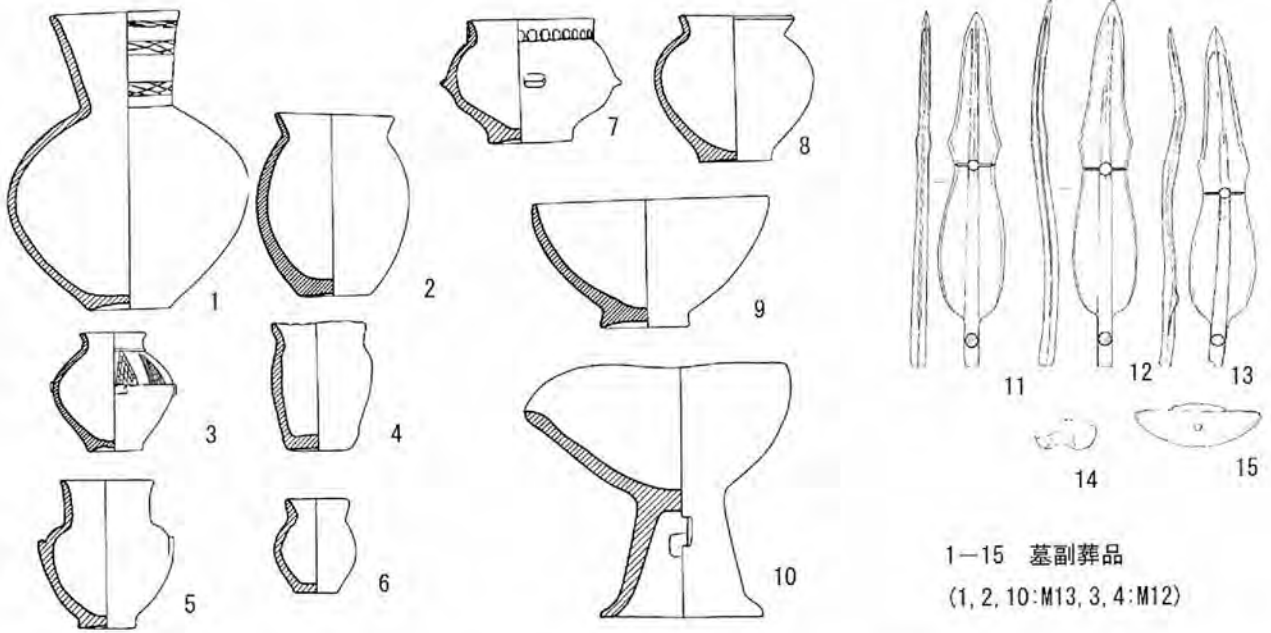


図7 岡上墓出土の遺物

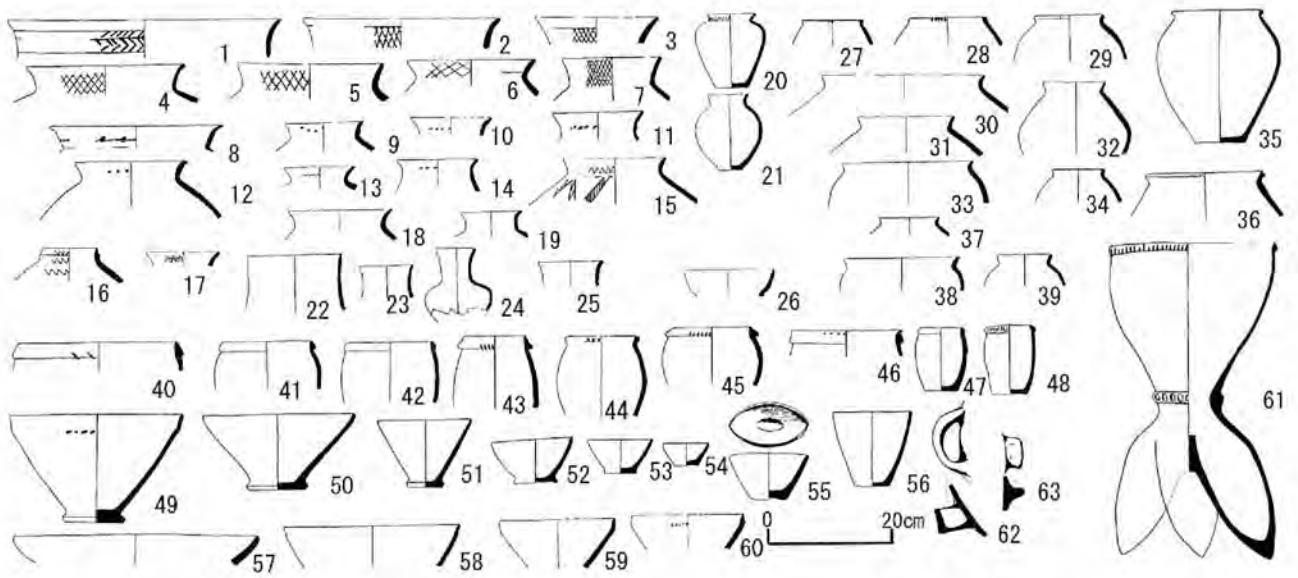


図8 高麗寨出土の土器 (1 / 12)

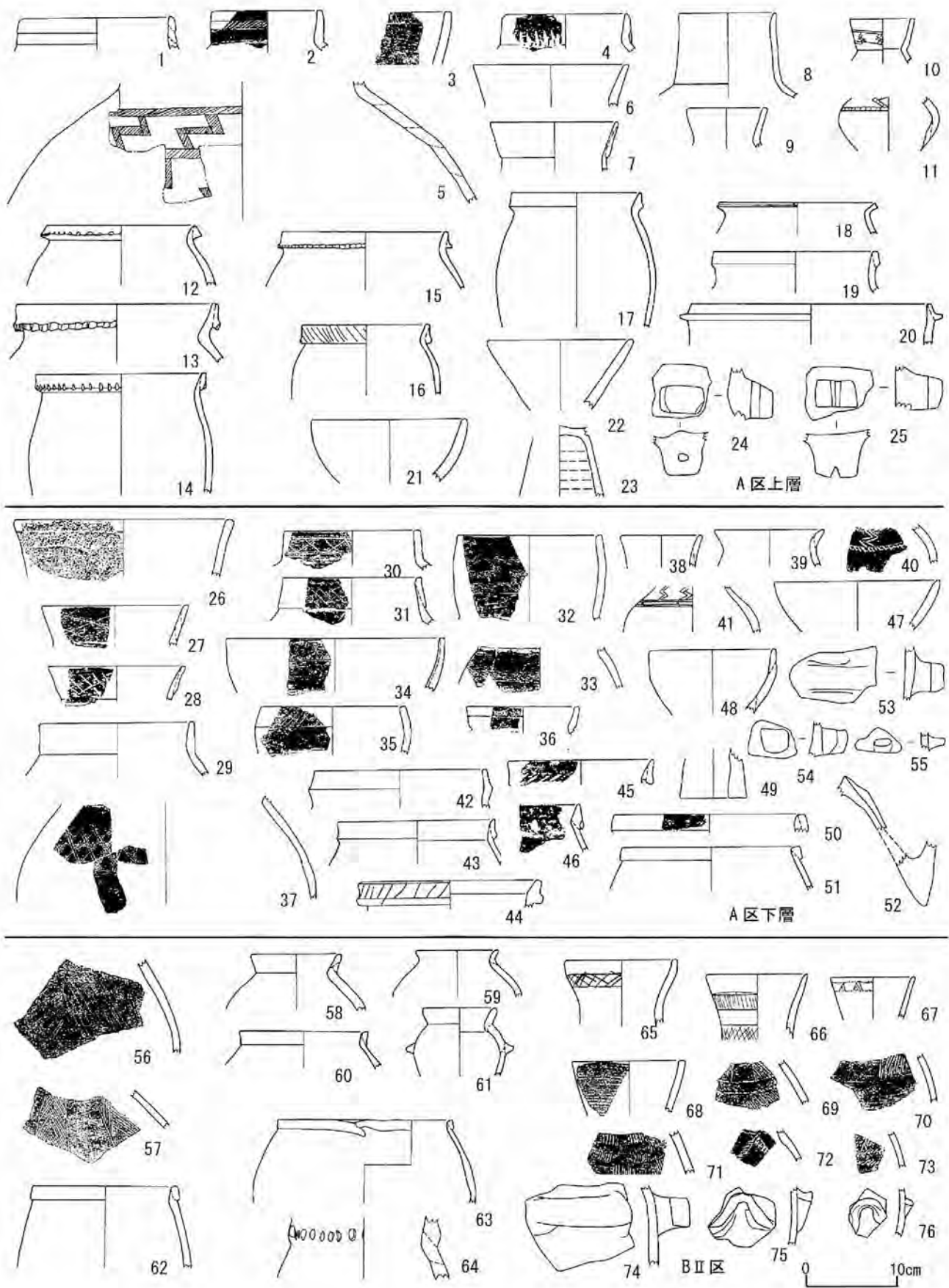


図9 上馬石貝塚 A,B II区出土の土器 (1/6)

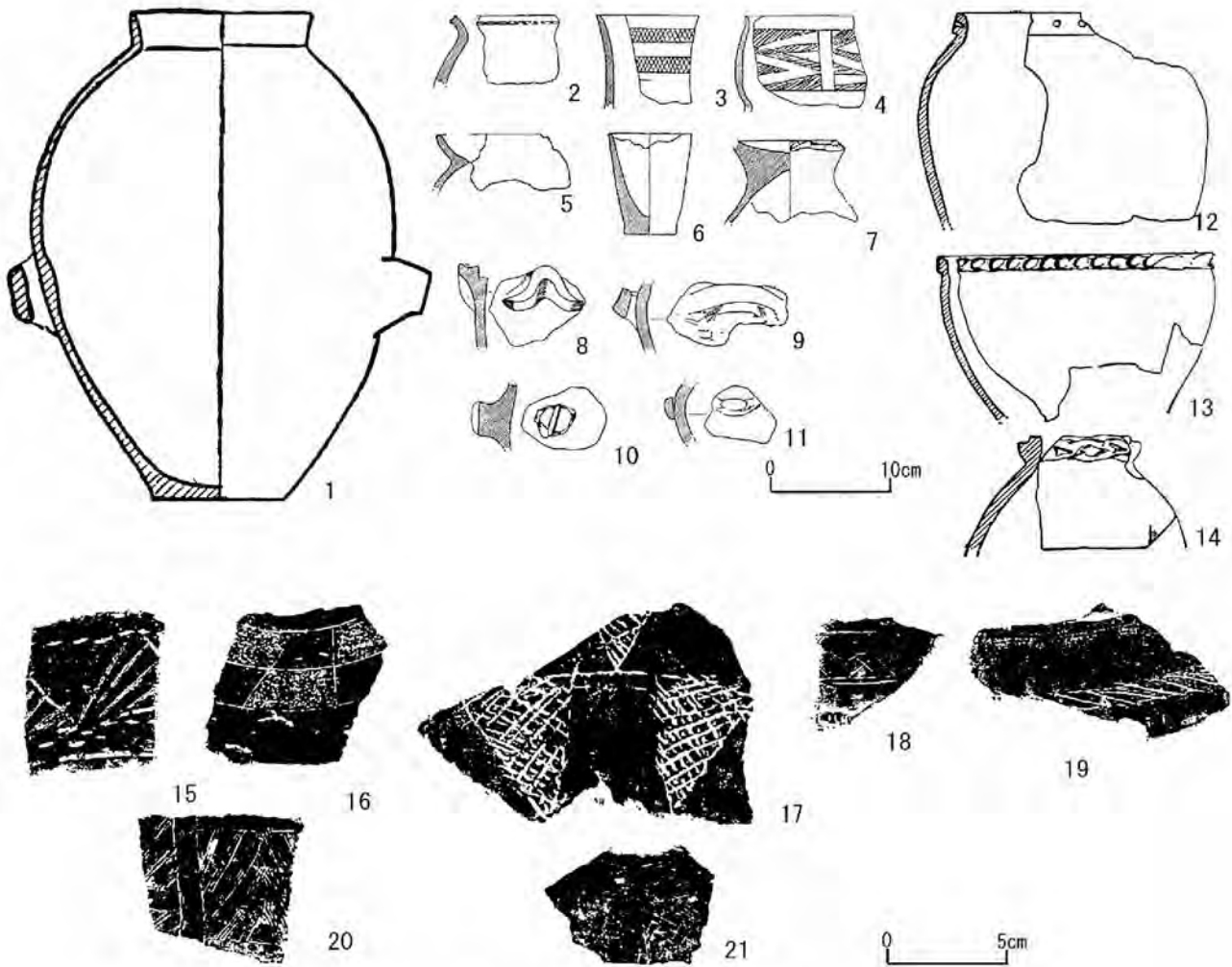


図10 上馬石貝塚78第1地点出土の土器（拓影1/3、他は1/6）



図11 上馬石貝塚C区出土の遺物



図12 南山裡採集の長頸壺

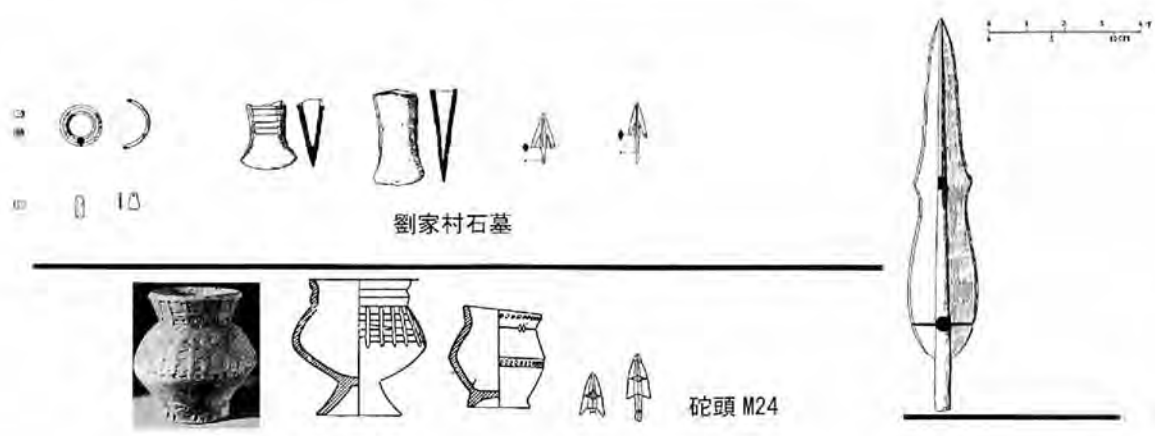
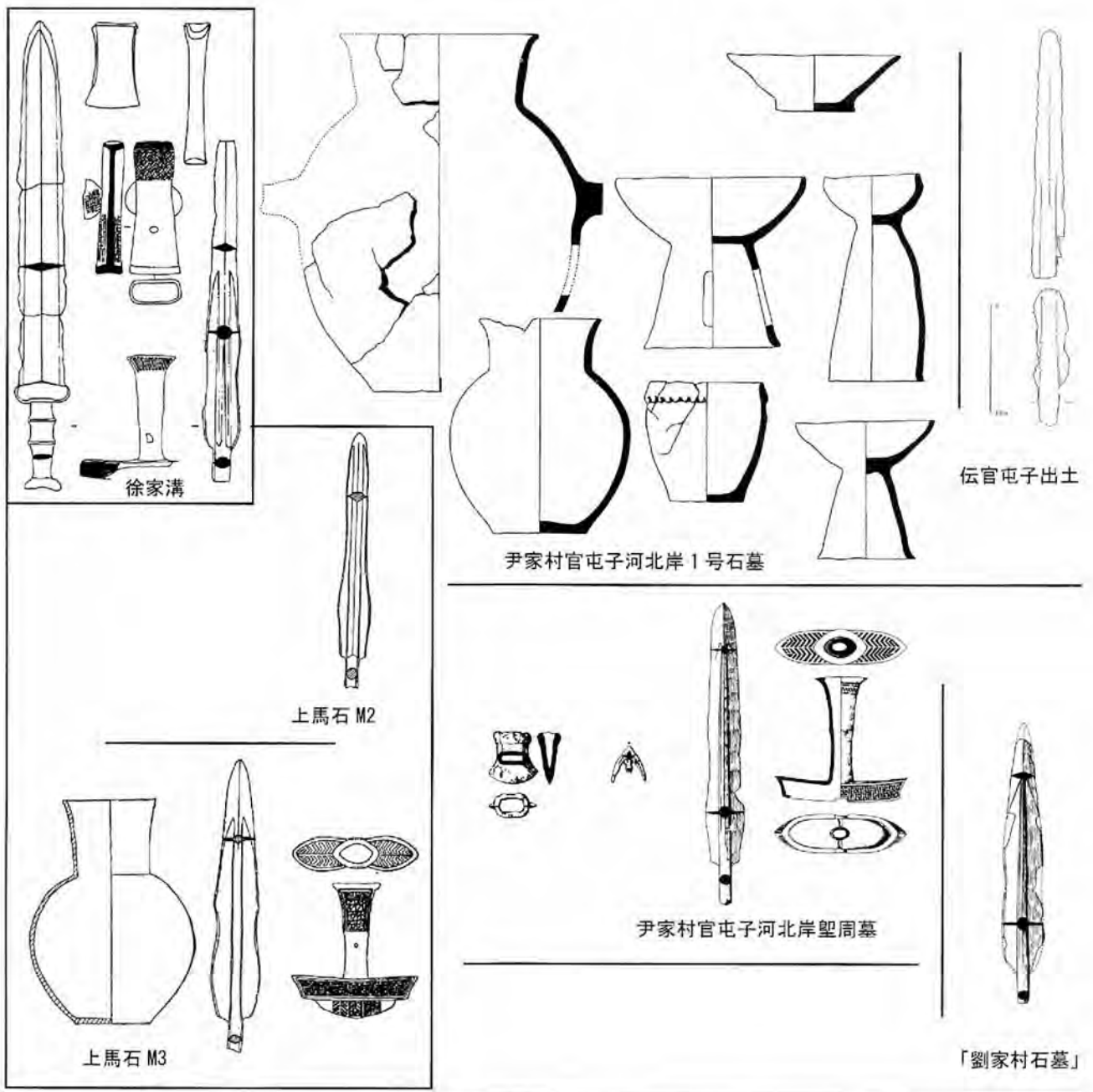


図13 『牧羊城』収録の青銅短剣墓および関連する墓

3-5. 牧羊城 1 類土器の再検討

大貫 静夫

1. はじめに

前節まで、牧羊城 1 類土器理解の前提となる既存関連資料の検討を行ってきた。本節では、それらを背景に、牧羊城 1 類土器の再検討をおこなう。なお、本節の扱う資料の 1 類土器の図は 3 章 1 の図 1～4 である。

前稿（大貫 1982）ではまだ于家村、砦頭墓地さえ知られておらず、牧羊城 1 類土器は、羊頭窪や双砦子遺跡との比較から、双砦子 3 期文化に接続する古い一群と楼上墓や尹家村下層 1 期に対比される新しい一群が含むと述べた。

今回の分類では A 群とした広口壺が古段階を代表するものであり、B 群とした広口壺がおおむね新段階に相当する。

82 年以後、続々と関連資料が報告されたが、とくに重要なのが距離的にも近い砦頭墓地の資料であった。これによって、双砦子 3 期文化直後と考えた古い一群の一部は砦頭墓地にもっとも近いものとなった。

無文の土器をはじめとする一部の土器の帰属に問題を残すが、牧羊城 1 類土器は古、新の 2 段階に分けることができる。およそ A 類が双砦子 3 期文化に関連する古段階の土器であり、B 類、D 類の甔、把手が上馬石上層文化に関連する新段階の土器である。C 類の高坏、その脚あるいは別器種の圈足には双砦子 3 期文化のものが紛れ込んでいる可能性も否定できないが、大半は上馬石上層文化のものであろう。

明らかに地域差を排除できる牧羊城周辺では、双砦子 3 期文化の羊頭窪貝塚、于家村遺跡、砦頭墓地、尹家村 1 期文化、2 期文化の尹家村遺跡が比較の対象となる。そして、双砦子 3 期文化と尹家村 2 期文化の土器を両極に置くと、上馬石上層文化の尹家村 1 期類型の大別的な特徴は以下のようになろう。

口頸部を中心とする棒状貼付浮文が双砦子 3 期文化にあり、尹家村 1 期類型、2 期文化にはない。横位の環状あるいは橋状の把手は先行する双砦子 3 期文化、後続する尹家村 2 期文化にはなく、尹家村 1 期類型だけにある。

幾何学的な沈線文が双砦子 3 期文化、とくに羊頭窪類型にはほとんどないが、尹家村 1 期類型には多い。前者では施文は口頸部に集中するが、後者では胴部に施文する例が多くなる。尹家村 2 期文化では文様が消失する。

双砦子 3 期、上馬石上層文化に共通する点としては、前者、後者を問わず、広口壺の割合がきわめて高いことであろう。後続する尹家村 2 期文化では、口縁粘土帯土器の登場とともに、口縁がやや内湾する甔（あるいは深鉢）が遼東半島の西端に現れる。ある意味では、極東平底土器系統の再来と言ってもよい。遼東半島中部では、口縁に粘土帯をめぐらす無文の深鉢土器（甔）は双房 M6 や上馬石、高麗寨にあり、上馬石上層文化の段階にはすでに口縁粘土帯土器が広がり、壺と甔の組合せがあったのとは異なる。これは地域差として理解すべきであろう。尹家村 2 期文化になって、半島の西端まで粘土帯土器が広がり、このような器種構成上の特異な地域性は解消される。

2.1 類土器の分類と時期区分

今回の再整理報告に当たって、すべては二次堆積であり、層位的なまとまりも空間的なまとまりも手がかりにならないため、本章 1 節では土器自身の持つ属性のうち、とくに口頸部の形態に従い分類、分析した。

短頸の広口壺で口頸部に横走る条線をめぐらすものには口唇部が肥厚する A 群と口唇部が肥厚しない B 群がある。A 群には口頸部、胴部に横方向の磨きのしっかりした器面調整の丁寧な黒色或いは、黒褐色でやや厚手の土器が多い。A3 類は、胎土、色調、調整などの点で、B 類よりは A 1、A2 類と近く、これらと同一時期の平行条線が簡略化されたもの、あるいは無文のものと考えておく。B2 類は B1a 類と口唇部が張り出して、そこへ刻むという点が共通するので、同じ無文でも、A3 類より遅れ、B1 類と同段階と無文の土器と考える。

そして、B 類には、胎土や器面調整がより劣り、口頸部への磨きがなくなり、胴部には横方向以外に縦方向の磨きがある。黒色、黒褐色以外に褐色の土器が混じる。小型で薄手のものには黒色、黒褐色が多く、器面は丁寧に調整されているが、厚手、大型のものは褐色のものが増え、器面がより粗いものが多い。

これらのうち、とくに口頸部に横走る平行条線とその両端の刻み列をもつ土器、A1a、A1b 類の広口壺と、B1 類の口唇部の刻みの下に横走るやや乱雑な短条線列を持つ広口壺に注目する。

A1a 類 (1 - 5) には、平行沈線が断続的にめぐるように見える文様があるが、それは、わずかに縦の棒状の薄い粘土の貼付によって、条線がとぎれているのである。粘土の貼付は丁寧な調整によりきわめて薄くなって、たんに器面を磨いて条線を消しているようにも見える程度である。口頸部および胴部上半部にそのような施文がされていることが分かる。A1b 類はこのような縦の区切りを持たない、平行条線文がめぐる。これら両者に共通するのは、平行沈線の上下を画するように、口縁肥厚帯直下と頸部直上に点列をめぐらす点である。A1c 類は A1b 類のから平行沈線が省略されたもののようになっている。図 1 の 15、16 は胴部に上半にもかすかに縦の粘土紐貼付がある。ほとんど胴部と一体化しておりよほど注意しないとたんに縦の細い磨き痕のように見えてしまう。これらの土器は色調や胎土、整形においてよく類似しており、共通点が多い。

戦前の羊頭窪貝塚 (3 - 3 図 2 及び 8 - 3) に縦の棒状貼付文を持つ土器がある。ほかに、牧羊城近傍の于家村集落遺跡 (同図 5)、砦頭積石墓 (同図 3) から出ている。それらは現在、砦頭の一部に問題を残すが、双砦子 3 期文化羊頭窪類型に属す。その中でも、砦頭墓地の例 (図 3 - 14) が器形的にもっとも近い関係にある。

B 群には、この A1 類と文様構成が類似する B1 類がある。広口短頸の壺の口頸部に施文されている。その文様は、平行の沈線であるが、断続的に途切れる条線が続けて引いているものが多い。そしてその上には刻み列がめぐっている。これら B1 類の文様構成は、A1 類の口縁端の肥厚部がなくなり、縦の棒状貼付で区切られていた横走る条線が、断続的な沈線に置き換わったものと考えられる。A1 類では横走数条線の上下を点列で区画していたが、B1 類では上端のみで、下端の点列はなくなる。それに代わって、頸部の屈曲部のところで、溝状に括れている。

多少どちらに分けるか微妙なものもあるが、B1 類の中でも、口唇部が外に張り出し、その角を刻むものと B1a 類と、口唇部は丸みをもち、その外側に刻み列がめぐる B1b 類に分けることができる。B1a 類のほうが、黒色で、薄手の作りのよい土器が目立つ。B1b 類のほうは、厚手でやや内湾し、茶褐色に近いものが目立つ。横走る断続的な条線も後者の方がより雑になる傾向がある。B1a 類は A



1: 羊頭窪 2: 砵頭 3, 4: 牧羊城 5, 6: 双砵子3期
7: 崗上墓下層 8: 尹家村下層1期 (縮尺不同)

参考図1 A1類棒状貼付浮文の土器および関連する土器

類に比べると横走る条線はやや崩れているが、それでもB1b類のものの方が、短い単位の断続で横走る条線の乱れが大きい。

このような、短頸の広口壺という同一の器種間での文様構成上の類似から、A1類からB1類への変化という組列を想定し、それを時間軸の基本に置きたいと考える。

この場合、B1a類とB1b類では、前者の方が、よりA1類に近く、より古い可能性もある。A類に関係する砵頭墓地に無文のやや外反する口縁端に刻み列を施すものがあることは、B1a類およびB2類がB類の中でも古い段階のものであることを示すのかも知れない。しかし、前者に小型で丁寧な作りのものが多いのに対し、後者にはより大型で器面調整がそれほど丁寧でないものがあり、器種の違いに起因する可能性もなくはない。

附近の尹家村遺跡では、下層1期にB1b類、B3類、B4類土器が出ており、1類新段階の主要な土器は尹家村下層1期の段階である。尹家村下層1期は営城子の楼上墓、上馬石貝塚のA区下層に對比される。それらは営城子では崗上墓、上馬石ではBⅡ区より新しい。

したがって、A群とB群の主体との間には少なくとも崗上墓、上馬石BⅡ区併行の段階があることになる。そのことを明らかにするのが、南山裡採集の長頸壺(前節図12)である。87の頸部破片の文様も崗上墓段階の長頸壺を思わせる。厚手の赤みを帯びた胎土で、ほかの新段階の土器とは区別される。頸部横走条線文のA1類からB1類への系統的な連続性を考えると、この段階にも頸部横走条線形の広口壺がなければいけない。それがB1a類なのかは確証がないし、たとえそうだとしたとしてもまだ両者には懸隔がある。

3. 1類土器をめぐる諸問題

a) 1類古段階の土器と砵頭墓地

古段階のA1a類は双砵子3期文化の最終末の砵頭墓地の土器に近い。その砵頭墓地には双房M6(8-4: 図3)の器形や文様に類似し、直前段階とされる資料(8-3 図3-28, 36等)がある。こ

の砦頭墓地の双房類似土器について、砦頭の中ではもっとも新しいことから、双砦子3期文化から分離してその直後に一段階を設定する考えがある。

以前（大貫1982）にも述べているが、A1c類の図1-10は器形が遼寧式銅剣と関係する双房-美松里型壺に類似するが、文様は羊頭窪類型の文様である。A'類とした36の無文の口縁は双房系の壺の口縁と見られる。これだけでは時期的な限定ができず、上馬石上層文化に下る可能性もあるが、胎土や色調から古段階に属すと考える。同じくA'類に含めた30は小型の鉢のような器形だが、胴部に馬蹄形の貼付と言うより、口唇状把手に近いものが付いている。30の口縁部は肥厚する粘土帯があり、頸部は平行条線の上下を点列で画する。これは古段階の特徴であり、あえてこの土器を口唇状把手の故に、新段階に含めることはできない。

このような土器の存在から、前稿では双砦子3期文化よりは新しく、その直後と考えたのである。砦頭墓地での双房系の壺の祖形の発見により、10や36のような器形自体は砦頭墓地の段階でもありうるようになった。しかしながら、依然として、30のような貼付は砦頭墓地の双房系土器にはまだなく、次の上馬石上層文化の崗上墓段階の大型の馬蹄形貼付により近いものである。砦頭よりは新しく、崗上墓よりは古いと考えるが、いまだに問題を残す土器である。

1類土器の古段階の棒状貼付浮文（参考図3,4）は双砦子3期文化新段階砦頭（同2）や崗上墓下層（同7）のものに比べると退化が著しい。砦頭墓地から出る土器は副葬品であるから、同時期の集落遺跡から出る土器と同じ保証はないが、30のような口唇状把手類似の貼付の存在は、棒状貼付浮文の退化にも時間的な意味があり、古段階の多くは砦頭墓地より遅れるのではないかと考える。それにもかかわらず、痕跡的ではあるが棒状貼付浮文の存在や横走る点列文や条線文は双砦子3期文化の特徴的な文様であり、あえて双砦子3期文化から分離すべき必然性はないと考え、その最末期の段階として現在は理解する。すると、砦頭墓地より新しい段階まで、双砦子3期文化系統の土器文様は継続することになる。そして、そのような文様の系統は尹家村1期につながり、断絶がないというのが筆者の理解である。尹家村下層1期の断続的な横走条線文の土器（同8）は縦のミガキで消されているように見える。1類A1類（同3）がさらに退化したものと見ることができよう。尹家村下層（前節図2）ではこのような土器とB1b類がH4でも出てくるから、かならずしも時期差にはならないようだ。

したがって、砦頭墓地では、その末期にはたまたま双房型の祖形となる壺が副葬されただけで、双砦子3期文化本来の広口壺が消えたわけではないと言うことは3-3ですべて述べたごとくである。逆に言えば、双房M6のような土器群が純粋に存在する段階は老鉄山周辺にはないということでもある。

このように考えた場合に問題となるのが、双房M6との時間的な関係である。双房M6は同じく移行期の土器であるが、双砦子3期文化の次の上馬石上層文化上馬石上層類型の最古段階とみる高麗寨と近い時期だと前節で述べた。

双房M6は墓の副葬品であり、同時期にいかなる土器が組成するのか分からない。双房M6の逆V字形の貼付に近いものは、1類土器では新段階に含まれると想定した90の胴部片がある。この胴部片は薄手で、その胎土や色調から、新段階でも尹家村下層1期資料より古い可能性のあるB1a類の口縁部である41のような口縁部の下に付くであろうと前稿の段階から考えていた。普通に考えれば、90が古く、30が新しいとしたいところだが、逆になっている。30が新段階に入ることはないから、90が41と関係がなく、古段階に含めれば解決する側面があるのだが、留保しておく。双房M6は砦頭墓地よりは新しいが、牧羊城1類A1類土器までも双砦子3期文化に含め、それに30のような

土器が伴うと考えた場合は双砦子3期文化の末期に併行することになりかねない。すると、遼東半島の西部と中部で双砦子3期文化から上馬石上層文化への移行が少しづれることになる。この辺の細かい状況はより資料が増えないと判断ができないので、双房M6は両文化の移行期に近い段階であるとしか今は分からない。

A3類は頸部が短いのが特徴の口縁が肥厚する広口壺である。中部の高麗寨では、口縁が肥厚することはないが、短頸の広口壺が盛行することから、双砦子3期文化から分離する根拠ともなった。A1類が砦頭より新しいとすれば、整合的かも知れない。

A'類ではすでにふれた30、36以外に、33から35の粘土帯で肥厚する口縁が内湾するか内湾する鉢か甕のような土器がある。双房や高麗寨に粘土帯口縁の甕があることからするとこれもA1類に伴うものであろう。

以上のように、A類の多くは砦頭墓地より新しい段階であり、中部の双砦子3期文化直後である双房や高麗寨との関係を考えなければいけない段階であると考えた。その段階を双砦子3期文化羊頭窪類型の最末期と考えておく。3節では従来の資料を検討した結果、双砦子3期文化の終末は西部、中部でほぼ同じ頃としたが、1類土器をこまかく見ると多少の差があった可能性がある。

そのほかの古段階の土器ではA2類が問題となる。A2類の中で、17だけは、茶褐色の色調と砂質の胎土で器面調整がそれほどでもないという点で、ほかのA2類とは区別される。この種の文様を持つ土器が牧羊城周辺では類例を見ず、望海壩や金州湾の廟山遺跡に類例を見ることから、異系統の搬入品なのかも知れない。

従来、望海壩タイプの土器は双砦子3期文化の新しい段階になるから、A2類はA1類と同時期としてかまわないと考えていた。しかし、本章3節で検討したように、望海壩タイプの頸部に幾何学的な文様を持つ土器は大嘴子遺跡では最新の段階ではなく、中間の段階にある。それに従えば、砦頭墓地よりさらに新しい段階までは下らないから、時期的に分離されることになる。しかし、これだけ独立させた段階が老鉄山周辺に存在するのか疑問といわざるをえない。ただし、3節でもその可能性を考えたように、望海壩タイプが大嘴子類型とは地域差として存在して、併存したと考えればその継続期間は、大嘴子での共存層位にしばられずに、より新しい段階まで下ると考えることも可能ではある。これも今後の課題である。

b) 1類新段階土器と尹家村下層1期の土器

新段階は尹家村1期類型に属する。その比較としての集落関係資料は尹家村遺跡に限られる。他の資料は墓から出ているため資料的な制約がある。そのために細別に限界があり、遠い中部の上馬石上層類型の細別に併行関係を求めながら、1類新段階土器の細別を考えるしかない。尹家村遺跡下層から出ている資料も少数であるが、1類新段階土器との間には相互に出入りがある。

尹家村下層1期にはB1b類があるが、B1a類がないことはすでに述べた。

B3類は、斜格子になる文様が口頸部に施文されるものが多い。ほかに羽状になるものがある。尹家村下層1期には両種がある。類例は上馬石A区下層に羽状のものがある。

B4類はやや小型の壺で、口頸部に横走る沈線がめぐり、その間に集線三角文などを挿入するものが多い。平行沈線による4b類は口頸部の断面形はB1b類とよく類似し、やはり尹家村下層1期に類例がある。平行沈線間に斜線を入れる4a類は口縁が直立し、薄手の土器という点で異なる。これも尹家村に胴部片ではあるが、類例がある。この類に近い壺は楼上墓、大連浜町貝塚の壺である。そして、上馬石A地点下層にも類例がある。

以上の B1 ～ 4 類の広口壺は A 類の広口壺に後続する段階の広口壺と考えておく。

B5 類は無文の広口壺であり、器面調整や器形から A 類よりは B1 - 4 類に伴うものと考えたが、特徴に乏しく、時期判断が難しい。

B6 類にはそのほかの器種をまとめたが、これも同様に難しい。あえて A 類に入れる根拠もないため、B 類の仲間とした。

B7 類は 1 類新段階に属しそうな有文胴部片をまとめた。ほとんどは壺の胴部である。B4 類壺の胴部文様になる可能性が高いものが多い (75 ～ 80)。三角集線文の下端を点列で画すもの (83) は尹家村 (5, 6) に類例がある。乳房状の突起 (81, 82) も尹家村に類例 (3) がある。87 の頸部破片だけは尹家村にはなく、崗上墓段階の長頸壺に類似する。

C 類は高坏の坏部と脚部である。長脚のものは問題がないが、短脚のものは、広口壺の台部になる可能性もある。文様のあるものは、B3 類との共通性から B 類の時期であろう。高坏は尹家村下層 1 期の高坏の器形が分からないため、時期判断が難しい。羊頭窪や于家村、砵頭という A 類関連の近隣の遺跡の高坏の坏部の器形とは若干異なる。91 にもっとも近いものは、戦前の望海塙の資料であろう。そして、口唇部が外湾しない点で異なるが、やや異なる坏の口縁部は高麗寨にある。望海塙には複数の時期があり、高麗寨は尹家村下層 1 期以前であるが、位置づけが難しい。A 類か B 類か何れかに帰属するとすると、器面調整などに B 類との共通性が見られることから消極的にはあるが B 類に入れておく。

D 類の甗もこれだけで判断するのは難しい。A 類ともっとも近い関係にある砵頭は墓地で甗を副葬していない。于家村上層の甗は括れ部の隆帯に刻みがない。羊頭窪の甗の括れ部の隆帯にも刻みがない。他方、尹家村下層 1 期の甗は口縁部、括れ部が出ていないため様相が分からない。高麗寨の甗は隆帯を刻む。これも消極的であるが、どちらかと言えば B 類に入れておく。

把手で特徴的なものは横向きの環状把手で、断面扁平な把手と断面が丸味のある把手がある。3 章 1 節の執筆者の一人である古澤の観察では、B3 類の器面調整が把手の調整痕と類似するから、B3 類のような広口壺の胴部に付いていたのだろう。

尹家村にあって、牧羊城にないものの一つは、頸部に平行沈線で区画した中に斜格子文を挿入する広口壺 (前節図 2 - 8) がある。ほかには、上で棒状浮文の名残かと思われた文様を持つ土器を含む、口唇部に無文部を残し以下に横走条線をめぐらす広口壺 (同 3 ～ 5, 7) がある。尹家村では広口壺のかなりの割合を占めるから、牧羊城にないことに意味があるとすれば、8 の土器は双砵子 3 期文化大嘴子類型の文様に近いことからやや古い可能性があるが、上馬石 A 区下層、高麗寨では頸部の斜格子文には上下を区画するものとししないものがあるので、あえて区画の有る無しで時期差とは言えない。今後の資料の増加で尹家村下層 1 期に細分の余地があることを考えておくだけにしておく。

以上のように、新段階の土器や尹家村 1 期は一部に細別の余地があるが、おおよそは尹家村下層 1 期と共通し、それらは楼上墓や上馬石 A 区下層に併行する時期と考えられる。牧羊城からは戦前の調査時に多条の突線帯が付く銅斧の滑石製鋳型 (報文: 挿図 6 - 1) が出ている。秋山 (1968, 69) により楼上墓の銅鑿の文様との類似がすでに指摘されている。1 類新段階の土器に伴うものであろう。

古段階との間には少なくとも崗上墓の段階がある。崗上墓の封土から、器形がはっきりしないが、B1a 類近似の土器 (前節図 7 - 19) が出ている。同 22 は B3 類の土器に見える。南山裡の長頸壺の存在から老鉄山周辺にもこの段階の土器があることは確かであり、楼上墓以前の遼寧式銅劍の存在からも何れこの空白は埋まることになろう。

参考文献

(日文)

- 秋山進午 1968、1969 「中国東北地方の初期金属器文化の様相（上）（中）（下）」『考古学雑誌』53 - 4、54-1、4-234-261、1-24,21 - 47 頁。
- 秋山進午 2000 『東北アジア民族文化研究』同朋舎。
- 王巍 1989 「美松里型土器の研究」『考古学論攷』14,9 - 33 頁。
- 小川（大貫）静夫 1982 「極東先史土器の一考察」『東京大学考古学研究室紀要』1,123 - 149 頁。
- 大貫静夫 1997 「北方系青銅刀子」『考古学による日本歴史 10』137-140 頁。
- 大貫静夫 2003a 「正統と異端—遼東・朝鮮半島の青銅短剣と土器の年代をめぐる二つの流れ—」『考古学研究会第4回東京例会AMS年代法と弥生時代年代論—考古学研究会東京例会第4回例会研究発表資料集—』37 - 46 頁。
- 大貫静夫 2003b 「松菊里石棺墓の銅剣を考えるための10の覚え書き」『第15回東アジア古代史・考古学研究会交流会予稿集』51 - 52 頁。
- 大貫静夫 2004 「研究史から見た諸問題—遼東の遼寧式銅剣を中心に—」『季刊考古学』88,84 - 88 頁。
- 大貫静夫 2005 「最近の弥生時代年代論について」『人類学雑誌』113,95-107 頁。
- 岡内三眞 1982 「朝鮮における銅剣の始源と終焉」『考古学論考』787-844 頁。
- 岡内三眞 2004 「東北式銅剣の成立と朝鮮半島への伝播」『弥生時代の実年代』181 - 197 頁。
- 関東庁編 1943 『旅順博物館図録』座右宝刊行会。
- 黄川田修 2004 「斉国始封地考—中国山東省蘇阜屯遺跡の性格—」『東洋学報』86-1,1-36 頁。
- 黄川田修 2001 「曲阜以前の魯国の所在に対する一試論」『考古学雑誌』86-3,1-48 頁。
- 金用珩・黄基徳（永島暉臣慎・西谷正訳） 1968 「紀元前1000年紀前半期の古朝鮮文化」『古代学』14 - 3/4,245 - 263 頁。
- 近藤喬一 2000 「東アジアの銅剣文化と向津具の銅剣」『山口県史資料編考古1』709-794 頁。
- 後藤直 1971 「西朝鮮の「無文」土器」『考古学研究』17-4,36-65 頁。
- 島田貞彦・森修 1942 「望海塙—関東州亮甲店附近望海塙先史遺蹟—」『羊頭窪』101-104 頁。
- 島村孝三郎 1942 「大連浜町貝塚の記」『羊頭窪』157-162 頁。
- 庄田慎矢 2004 「比来洞銅剣の位置と弥生暦年代論（上）」『古代』117,1-29 頁。
- 徐光輝 1996 「遼寧式銅剣の起源について」『史観』135,64 - 81 頁。
- 澄田正一 1986 「遼東半島の先史遺跡（調査抄報）—大長山島上馬石貝塚—（一）」『愛知学院大学人間文化研究所紀要』2,36 - 45 頁。
- 澄田正一 1988 「遼東半島の先史遺跡（調査抄報）—大長山島上馬石貝塚—（二）」『愛知学院大学人間文化研究所紀要』3,37 - 52 頁。
- 澄田正一 1989 「遼東半島の先史遺跡（調査抄報）—大長山島上馬石貝塚—（三）」『愛知学院大学人間文化研究所紀要』4,1 - 9 頁。
- 千葉基次 1988 「遼東半島積石墓」『青山考古』86 - 98 頁。
- 纏頭生（島村孝三郎） 1942 「大連浜町貝塚の記」『羊頭窪』157 - 162 頁。
- 東亜考古学会 1931 『牧羊城』東亜考古学会。
- 千葉基次 1992 「青銅器世界との遭遇」『新版古代の日本2—アジアから見た古代日本—』69-96 頁。
- 朝・中合同考古学発掘隊（東北アジア考古学研究会訳） 1986 『崗上・楼上』六興出版。
- 中村大介 2005 「無文土器時代前期における石鏃の変遷」『待兼山考古学論集』51-86 頁。

- 中村大介 2006 「遼寧式銅劍の成立と展開」『日本中国考古学会 2006 年大会発表資料集』23 - 32 頁。
- 東亜考古学会（浜田耕作編）1929 『貔子窩』東亜考古学会。
- 東亜考古学会（原田淑人編）1931 『牧羊城』東亜考古学会。
- 水野清一編 1943 『羊頭窪』東亜考古学会。
- 宮里修 2006 「朝鮮式細形銅劍の成立過程再考—東北アジア琵琶形銅劍の展開の中で—」『第 18 回東アジア古代史・考古学研究交流会予稿集』61-70 頁。
- 宮本一夫 1985 「中国東北地方における先史土器の編年と地域性」『史林』68 - 2,1 - 51 頁。
- 宮本一夫 1991 「遼東半島周代併行土器の変遷」『考古学雑誌』76 - 4,60 - 86 頁。
- 宮本一夫 1998 「古式遼寧式銅劍の地域性とその社会」『史淵』135,125 - 160 頁。
- 宮本一夫 2004 「青銅器と弥生時代の実年代」『弥生時代の実年代』198 - 218 頁。
- 宮本一夫 2006 「杏家荘 2 号墓出土の遼寧式銅劍」『東方はるかなユートピア—煙台地区出土文物精華—』91-95 頁。
- 森修 1930 「閩東州方家屯屯南山裡牧羊城址並其の附近出土銅鏃に就て」『史前学雑誌』2-5,19-26 頁。
- 森修 1937 「南満州発見の漢代青銅器遺物」『考古学』8-7,299-348 頁。

(中文)

- 王巍 2004 「双房遺存研究」『慶祝張忠培先生七十歲論文集』402 - 411 頁。
- 王青 2002 『海岱地区周代墓葬』山東大学出版社。
- 王富強 2002 「海陽嘴子前墓群的年代、特点及相關問題」『海陽嘴子前』164-179 頁。
- 王立新 2004 「遼西区夏至戰国時期文化格局与經濟形態的演進」『考古学報』243-270 頁。
- 華玉冰・陳国慶 1996 「大嘴子上層文化遺存的分期及相關問題」『考古』1996 - 2,66 - 72 頁。
- 郭大順 1987 「試論魏營子類型」『考古学文化論集 1』79-98 頁。
- 河南省文物考古研究所編 2001 『鄭州商城（上）（中）（下）』文物出版社。
- 河南省文物考古研究所・平頂山市文物管理局 2007 「河南平頂山市応国墓地八号墓發掘簡報」『華夏考古』2007-1,20-49 頁。
- 河北省文物考古研究所編 1985 『藁城台西商代遺址』文物出版社。
- 吉林大学考古系・遼寧省文物考古研究所 1992a 「金州廟山青銅時代遺址」『遼海文物學刊』1992-1,7-24 頁。
- 旅順博物館・金州博物館
同上 1992b 「金州大溝頭青銅時代遺址試掘簡報」『遼海文物學刊』1992-1,25-30 頁。
- 許玉林・許明綱 1983a 「新金双房石棚和石蓋石棺墓」『文物資料叢刊』7,92 - 97 頁。
- 許玉林・許明綱 1983b 「遼寧新金縣双房石蓋石棺墓」『考古』1983 - 4,293 - 295 頁。
- 許玉林・許明綱・高美璇 1982 「旅大地区新石器時代文化和青銅時代文化概述」『東北考古与歷史』1,23-41 頁。
- 建平縣博物館・朝陽地区博物館 1983 「遼寧建平縣青銅時代墓葬及相關遺物」『考古』1983-8,679-694,713 頁。
- 周陽生 1990 「新民縣公主屯後山青銅時代遺址調查」『遼海文物學刊』1990-2,9-11 頁。
- 孫守道・徐秉琨 1964 「遼寧寺兒堡等地青銅短劍与大夥房石棺墓」『考古』1964 - 4,277 - 285 頁。
- 朱風瀚 1999 「論中国東北地区与朝鮮半島出土短茎曲刃青銅短劍」『中国歷史博物館考古部記念文集』
- 朱風瀚 2006 「再論有關短茎曲刃青銅短劍的幾箇問題」『二十一世紀的中国考古学』587 - 597 頁。
- 瀋陽故宮博物館・瀋陽市文物管理弁公室 1975 「瀋陽鄭家窪子的兩座青銅時代墓葬」『考古学報』1975-1,141-156 頁。
- 瀋陽市文物管理弁公室 1982 「瀋陽新民縣高台山遺址」『考古』1982-2,121-129 頁。
- 瀋陽市文物管理弁公室・瀋陽故宮博物館 1985 「瀋陽新樂遺址第二次發掘報告」『考古学報』1985-2,209-222 頁。
- 徐光輝 1990 『旅大地区新石器時代晚期至青銅時代文化遺存分期』環渤海學術討論会提出論文。

- 徐光輝 1997 「旅大地区新石器時代晚期至青銅時代文化遺存分期」『考古学文化論集四』188 - 210 頁。
(学会で配付した資料である徐 1990 と内容は同じである。)
- 靳楓毅 1982 「論中国東北地区含曲刃青銅短劍的文化遺存 (上)」『考古学報』1982 - 4,387 - 426 頁。
靳楓毅 1983 「論中国東北地区含曲刃青銅短劍的文化遺存 (下)」『考古学報』1983 - 1,39 - 53 頁。
- 大連市文物考古研究所編 2000 『大嘴子—青銅時代遺址 1987 年發掘報告—』大連出版社。
- 大連市文物考古研究所・遼寧師範大学歴史文化旅游学院 2006 『遼寧大連大砬子青銅時代遺址發掘報告』『考古学報』
2006-2,179-204 頁。
- 中国社会科学院考古研究所實驗室 1993 「放射性碳素測定年代報告 (二〇)」『考古』1993-7,645-649 頁。
- 中国社会科学院考古研究所編 1991 『中国考古学中碳十四年代数据集 1965 - 199』文物出版社。
- 中国社会科学院考古研究所編 1994 『殷墟的發現与研究』科学出版社。
- 中国社会科学院考古研究所編 1996 『双砬子与崗上一—遼東史前文化的發現和研究』科学出版社。
- 中国社会科学院考古研究所編 1999 『偃師二里頭— 1959 ~ 1978 年考古發掘報告—』中国大百科全書出版社。
- 中国社会科学院考古研究所東北工作隊 1989 「瀋陽肇工街和鄭家窪子遺址的發掘」『考古』1989-10,885-892 頁。
- 張翠敏 2004 「大嘴子第 3 期文化聚落遺址研究」『博物館研究』2004 - 2,60 - 71 頁。
- 張翠敏 2006 「大嘴子第三期文化聚落遺址研究」『華夏考古』2006-3,61-73 頁。
- 陳光 1989 「羊頭窪類型研究」『考古学文化論集二』113 - 151 頁。
- 撫順市博物館考古隊 1983 「撫順地区早晚兩類青銅文化遺存」『文物』1983-9,58-65 頁。
- 北京市文物考古研究所編 1995 『琉璃河西周燕国墓地— 1973 - 1977 —』文物出版社。
- 北京大学考古實習隊・煙台市文物管理委員会 2000 「乳山南黄莊石槨墓」『膠東考古』244-268 頁。
- 劉俊勇・王玖 1994 「遼寧大連市郊区考古調查簡報」『考古』1994 - 4,306 - 318 頁。
- 林澐 1980 「中国東北系銅劍初論」『考古学報』1980 - 2,139 - 162 頁。
- 林澐 1994 「早期北方系青銅器的幾箇年代問題」『內蒙古文物考古文集第一輯』291-295 頁。
- 林澐 1997 「中国東北系銅劍再論」『考古学文化論集四』234 - 250 頁。
- 旅順博物館 1960 「旅順口区後牧城駅戦国墓清理」『考古』1960 - 8,12 - 17 頁。
- 旅順博物館・遼寧省博物館 1983 「大連于家村砬頭積石墓地」『文物』1983 - 9,39 - 50 頁。
- 旅順博物館・遼寧省博物館 1981 「旅順于家村遺址發掘簡報」『考古学集刊』1981 - 1,88 - 103 頁。
- 旅順博物館・遼寧省博物館 1982 「遼寧長海県上馬石青銅時代墓葬」『考古』1982 - 6,591 - 595 頁。
- 遼寧省博物館・朝陽市博物館 1986 「建平水泉遺址發掘簡報」『遼海文物學刊』1986-2,11 - 63,102 頁。
- 遼寧省博物館, 旅順博物館, 長海県博物館 1981 「長海県広鹿島大長山島貝丘遺址」『考古学報』1981 - 1,63 -
109 頁。
- 遼寧省文物考古研究所・吉林大学考古学系 1992 「遼寧阜新平頂山石城址發掘報告」『考古』1992-5,399-417 頁。
- 遼寧省文物考古研究所・吉林大学考古系・大連市文物管理委員会 1996 「遼寧大連市大嘴子青銅時代遺址的發掘」『考
古』1996 - 2,17 - 35 頁。
- 遼陽市文物管理所 1977 「遼陽二道河子石槨墓」『考古』302-305 頁。

(朝文)

- 金用珩・李順鎮 1966 「1965 年度新岩里遺跡發掘報告」『考古民俗』1966-3,20-31 頁。
- 朝・中合同考古学發掘隊 1966 『中国東北地方遺跡發掘報告— 1963 ~ 1965』社会科学出版社。

4-1. 牧羊城出土のいわゆる2、3類土器の性格と編年

鄭 仁盛

(高麗大学考古環境研究所)

1. はじめに

牧羊城出土のいわゆる2、3類土器は胎土の種類によって四群に分かれる。第1群は混和材が殆どないいわゆる灰陶、第2群は混和材や胎土の殆どが滑石からなるもの、第3群は砂粒を多く含む酸化炎焼成すなわち無文土器質のもの、第4群は混和材として石英をいれた白色の土器である。そのうち1群が圧倒的に多く、2~4群は比較的少ない。1群には短頸壺(罐)、盆、豆などの器形が多く、2群には燕式釜に類似して口縁部に粘土帯をめぐらしたものと、胴部が大きく膨らむ甕類が代表的である。3群には甕形土器の破片や燕式釜に似た釜形土器や豆類がある。石英入りの4群土器は器形全体を分かるものが少ないが楽浪土城や楽浪古墳出土の断面S字形口縁をもつ大型甕に似ている。本稿は牧羊城の築造及び使用年代を推定することが目的であるため時期同定に適す土器を対象にその時間的位置を検討する。

2. 『報告書』での2、3類土器

牧羊城出土の土器の中で城の築造年代と関連して鍵となるのは『報告書』分類の第2類土器と3類土器である(東亜考古学会1931)。

まず報告の説明では2類土器は灰黒色を帯びて比較的高温で焼成された瓦器で、口頸部に陶車使用痕が残るが胴体調整がきれいではないものとしている。口縁部が外へ折れて腹部には縄文が残され、さらに横条線がいくつか施される。さらに胴部の下にも縄文が集中的に施され底部は丸底に近いが不安定なものが多いとしている。そしてこの類の土器は中国の戦国時代から漢代にかけて流行したものと判断し河北省の燕下都遺跡出土資料と比較した。東京大学考古学研究室所蔵の銘文いり叩き文短頸壺が漢代以前であると判断して牧羊城の叩き文土器の年代を見積る基準としたことを報告書は明らかにしている。3類土器は灰黒色を帯びていること、白色や滑石を混ぜて赤褐色を帯びるものであるとした。胴体に比べて口縁部が厚くて長いことが特徴で2類に比べて技術の進歩が著しいと述べたが、3類土器が流行するようになっても2類土器もしばらくは使われたと判断した。

すなわち2類と3類土器を区分する最大の基準は叩きの可否である。さらに楽浪古墳出土土器や遼東地域の漢代遺跡出土土器も編年の参考にすることが分かる。全般的に叩きが行われた土器が2類(古式)で、打捺が少ない土器を3類(新式)と判断する。

しかしこのような分類がはたして時間性を反映する意味のある属性を基準にして一貫性をもって行われたとはいえない。それは同一型式の土器を叩きの有無だけをもって分けるとか、同型の盆形土器であるにもかかわらず叩きのある底部は2類と、叩きのない口縁部は3類と判断することからも分かる。そして楽浪古墳出土土器と口縁部が似ている甕形、壺形土器はほとんど3類、打捺が認められる土器は2類と判断したが、楽浪古墳の場合は3世紀代以降の古墳にも叩き文土器が副葬されるという事実は考慮されなかったことを見ると報告書を作成した時にはまだ楽浪土器に対する認識水準が低かったことを窺わせる。

結局、報告書の2類と3類は今の認識からすると時期区分の意味ある分類基準ではないことは明

らかである。したがってここでは『報告書』の2,3類の分類を意識せず、比較的編年に有効な属性を持っているいくつかの器種を中心にしてみる。

3. 土器資料の検討

1) 釜形土器

牧羊城からは戦国燕の特徴的土器の一つである燕式釜と形態が類似する土器が多く出土した。これらの土器は『報告書』では殆ど2類と判断した。

(1) 釜形土器A類

燕下都の典型燕式釜と一番似ている土器である。完形はないものの丸底に近い底部に直立する胴部、また口縁部がななめに外反するもの、外反する口縁の端部がすこし内湾するものなどが見られる。これらの土器は胎土に石砂粒が多量に含まれるが、灰色のものと赤褐色を帯びるものがある。成形は粘土帯の積み上げと成形叩き、回転を利用しての口縁部調整の後に底部丸底化叩きを加えて仕上げる。ここでは実物資料の一部を紹介して理解を助ける。

資料1(図1)

胴最大径が器の上位にあり口縁部はななめに外反する。胎土は石英と長石粒が多く含まれて灰青色を帯び焼成度は比較的高い。粘土帯積み上げの後に縦方向縄文叩きで1次成形する。さらに回転力を利用して口縁部を調整した。口縁部調整の後には胴体部に横条線を施す。回転台から土器を切り離れた後に横方向の縄文叩きで底部を丸底化した。1次成形時はもちろん底部叩き時にも円形の無文当て具を用いた。

資料2(図2)

口縁部がななめに外反するが端部が若干内湾する釜形土器である。資料1と同じく胎土には石砂粒が多く含まれて焼成度は高い。色調は灰青色が基本で部分的には灰褐色を帯びる所もある。胴体部には横方向の縄文叩き痕が残り横条線が観察出来る。口縁部は回転ナデで仕上げた。成形叩き時の当て具は無文である。底部は欠けている。

資料3(図3-1,2)

3-1は口縁と底部が破損された。胴体部に縦方向の縄文叩きが観察され、底部近くには斜方向の底部丸底化叩き痕がある。成形叩き時の当て具は円形で文様はない。縄文叩き時の縄目圧痕が太くて深い特徴があり胎土には石砂粒が多く含まれる。図3の2も口縁部と底部が欠けているが胴部外面に縦方向の縄文打捺が底部近くは横方向の丸底化縄文叩きが施された。叩き時の当て具は無文である。胎土には石砂粒が多く含まれていて色調は灰色である。

資料4(図4-1,2,3)

釜形土器の口縁部破片である。胎土は砂粒が多く含まれて黄褐色である。口縁部はななめに外反するもの(図4-1,3)と階段のように段が設けられた(図4-2)ものがある。外面には太い縄文叩き痕跡が観察出来る。

(2) 釜形土器 B 類

資料 1 (図 4-4)

胎土に滑石が多量に含まれ焼成度は良好な土器である。口縁部の断面形態は三角形に近く、口縁部外面には指先で押さえた痕跡が連続して残る。

資料 2 (図 4-5)

胎土に滑石が多量に含まれた土器である。胴の最大径が口縁部に位置する典型的な燕式釜ではないが、その影響が充分認められる器形であるため(図 11-4) 釜形土器とした。この土器の口縁断面も三角形で同型式の他の資料(図 11-4) も断面形が三角形粘土帯土器の口縁に似ている。ところでこの土器の内面には布の圧痕が鮮明に残るものがあり、粘土帯土器とは異なる〈型作り技法〉で成形された。

2) 甕形土器 (図 5-1, 2, 図 11-6)

牧羊城では胎土に滑石が多く含まれた甕形土器がある。胴体部が大きく膨らんで口縁端部が上方、あるいは上下に出っ張る特徴がある。口縁部破片だけが数点発見されて全体の形と製作技法は詳しく分からないが、型作りによる痕跡は見えない。このような種類の土器は中国の他の地域ではまだ報告例がない。

3) 叩き紋短頸壺 (図 5-3, 4, 5)

牧羊城出土の叩き文短頸壺は口縁端部が水平に近く折れて外反するものが多い。胎土は精選された泥質で、色調は灰青色あるいは灰黒色が多い。口径部外面には回転ナデ痕の下にきれいな縄文叩き痕が観察でき胴体部外面にも縄文叩き痕がはっきりと残り、さらに横方向には沈線が走る。成形叩き時の当て具は無文が多く縄文当て具を基本とする楽浪土器とは異なる。口径部が比較的に大きくて胴部も大きく脹れているのが牧羊城出土の叩き文短頸壺の特徴である(図 5-4, 11-5)。そして肩にある最大径に装飾帯を廻らせて、その上位の叩きを磨研できれいに消した土器(図 5-5) も注目しておく必要がある。

肩部の叩きを消した土器は牧羊城周辺で甕棺として発見されている(図 12-2)。この甕棺は叩き文短頸壺に燕式釜の影向が窺える釜形土器 A を合わせ、さらに無文土器質の甕を組み合わせたもので早くから遼東地域への燕文化の拡散を語る考古資料として理解されて来た。

牧羊城周辺の貝墓でも特に叩き文短頸壺の出土が多い。胴部が大きく脹れて口縁端が水平面をなして外反する。また胴部の外面には成形時の縄文叩き痕が著しい(図 12)。

4) 豆形土器と盆形土器

豆形土器は大きく 2 種類がある。一つは泥質素地で作られたもの、他の一つは石砂粒混入で酸化焔で焼成された無文土器質のものである。泥質胎土の豆に文字が押印された例はない。脚端部の内面には捻られた痕跡が残る。

無文土器質の豆は牧羊城周辺の古墳や尹家村下層 2 期出土の豆と似ていて受部には段差がなく色調は褐色あるいは赤褐色が多い。

盆形土器はみな泥質胎土で、焼成度は瓦質が殆どである。口縁部が傾斜をもって外反するが口縁の折れる部分の内側には突帯を廻らしている。底部は平底気味で縄文叩きを施したものが多いが完形のものはない。底部には手持ちへラケズリ痕が見えるが、回転へラケズリ痕は見当たらない。

5) その他

その他にも内湾口縁の大形の甕形土器(図 11-8)も編年には参考になるが、2種類ある。一つは楽浪古墳と土城から出土する石英混入系に属する白色土器に似ているもので、他の一つは泥質系土器である。石英混入系土器には口縁部が外反するものがあるがこれは楽浪地域出土のものとは異なる型式である。

また、無文土器質の豆形土器と壺形土器の破片、そして棒状把手等が多数出土したが殆どが破片であるため復元出来るものはない。ただ、牧羊城周辺で発見された墓からは無文土器質の壺形土器と粘土帯土器、そして豆形土器などが出土してあり(図 12-1)、牧羊城出土の同種土器の器形推定に参考になる。

4. 比較資料の検討

1) 燕下都出土遺物

燕下都遺跡で牧羊城出土土器の編年と関連して特に注目しないといけない土器類は燕式釜と叩き文短頸壺である。燕下都の釜は大きく2種類がある。一つは頸が縮約してからさらに広く外反するもの(図 7-2)で、もう一つは頸部縮約なしで外反するもの(図 7-1,4)である。それぞれを燕式釜 A 類と燕式釜 B 類に分類する。東大文学部考古学研究室にも燕下都で採集した数点の燕式釜が保管されているが全てが滑石混入系の土器である。色調は例外なく赤褐色であり焼成度は良好である。外面には叩き痕があるが皆が縦方向の縄文である。土器内面には部分的に無文当て具痕もみえるが型作り痕は見えない。口縁部は回転ナデで仕上げている。

報告書『燕下都』に紹介された資料を見ると、燕式釜は戦国前期に出現して後期まで続く。また口縁部の形態によっていくつかの種類に分類できる。報告書の編年どおりに土器を並べて見ると A 類は口縁部が徐々に内湾するものから内湾度が大きい方向へと変化する。B 類は口縁部が緩やかに外反するもの(B I)、曲線的に外反する口縁の内側に段差を設けた突線があるもの(B II)、突線がなく階段のように折れる口縁を持つもの(B III)に分けられ、中でも B I と B II は戦国の前期に発生して後期まで続くが、B III は戦国中期に発生して後期になってもっとも盛行する。戦国後期に盛行する型式が前期にも見られるなど、報告書の編年をそのまま受け入れることは出来ないが、古い段階では B I、B II 類が多く、戦国後期になると B III へと変化すると判断して大きい間違いはないだろう。上で見たように牧羊城の釜形土器 A 類は胎土と縄文叩き目の大きさと燕下都とは差があるものの形態は非常に似ている。概して燕下都の B I と B III に似ているものもあるが B III と類似するものをもっとも多いことから牧羊城の釜形土器 A 類は戦国後期を中心年代として考えてもよからう。

釜形土器 B は燕下都では出土例がないが口縁部は遼東半島在地の粘土帯土器と通じるところがある。

しかし滑石を大量で混ぜて型作り技法で作る点は燕下都の瓦当にその起源を求めることが出来る。したがって釜形土器 B は在地の粘土帯土器が燕の土器や瓦文化の影響を受けて誕生した変形であると判断して問題はなからう。

燕下都の叩き文短頸壺は釜形土器と同じく外面にきれいな縄文が押捺されると同時に内面には無文当て具痕が多く(図 7-5)、部分的に布の圧痕が残るものもある。胴最大経が位置する肩部と胴体部の境界に装飾帯があってその上位が急に縮約される土器は戦国中期に出土例があり、さらに肩部叩きをきれいに消した土器は燕下都の場合、戦国後期に見られる。燕下都の叩き文短頸壺(図 10)はその多

くがやや細長い胴が特徴であるが、後期になると胴部が風船のように大きく膨らみ、口縁経が大きい器種が登場する。これらの土器は無文当て具と縄文叩き具で成形し、口縁部は回転ナデで調整する。胴部にいくつかの横条線を廻らすのも特徴である。底部には胴部とは方向の異なる別の縄文叩きが見えるが、これは底部丸底化のための叩きであろう。

ところで牧羊城で出土した叩き文土器は燕下都の戦国後期に出土するもの(図10の下段右側)と器形上高い類似性がある。牧羊城周辺貝墓出土短頸壺も燕下都の戦国後期土器と通じるところが多い。そして牧羊城周辺で発見された肩部叩きを消した叩き文土器は燕下都の場合、戦国後期に編年出来る。

2) 高麗寨遺跡(図13～15)

上で述べた牧羊城出土の遺物組合ともっとも類似性が高い遺跡として同じ遼東半島に位置する高麗寨が挙げられる。高麗寨出土土器は牧羊城での分類をそのまま適用することができるほどそっくりである。まず壺形土器、棒状の把手付き壺、豆形土器のような無文土器質の土器があり(図14-1、15-1左側)、釜形土器も牧羊城のように2種類に分類できる。石砂粒が多数混入された灰褐色あるいは赤褐色の外反口縁のもの(釜形土器A)と滑石混入が多くて粘土帯土器に類似する器種(釜形土器B)がそれぞれである。釜形土器の器種構成も燕下都に非常に似ている(図6-4,6)。

叩き文短頸壺も口縁が水平に近く外反するもの、口縁端が下へと曲がるなどの属性を持つものがある。もちろん肩と胴部に施される横沈線も牧羊城土器に見られる同じ属性である(図6-8,9、図14-4)胴が風船のように大きく膨らみ縄文叩きが施される点も牧羊城と似た特徴である。このような属性は上でも見たように燕下都の戦国後期土器の特徴と一致する。盆形土器には口縁端の上面に研磨された痕跡が、さらに口縁の内側に突起が一周する型式があり(図6-5、15-2)、これもまた燕下都では戦国後期に確認できる属性である。豆は破片が多いが、中には口縁と脚端部を残すものも少なくない。はんこの押されたものは見当たらないが、台脚に×印を入れたもの、牧羊城や燕下都出土の戦国中後期の豆形土器に似たもの、また脚端の形が哀台子遺跡の前漢代の豆に極めて似ているものがある。さらに高麗寨遺跡からは内面に布の圧痕がみられる滑石入りの甕も出土した(図6-7)。滑石入りの型作り技法による土製品の製作は燕下都の半瓦当に見られる。

高麗寨では多くの金属製品も出土した。青銅器には銅製の把头飾、三翼、三稜鏃、明刀銭や布銭が、鉄器類には鎌や鋤先そして斧などの鑄造品があり、細竹里一蓮花保類型に似ている。

3) 大嶺屯城と王家屯古墳

大嶺屯城もまた牧羊城と土器組成が殆ど同じである。釜形土器A(図16-3)は緩やかに外反する口縁、階段のように内面に端差を設けて口縁を仕上げたものがある。釜形土器Bは三角形粘土帯土器の口縁部に似ていて牧羊城や高麗寨の同形土器と比較できる。盆形土器も口縁部の内側には一周する突起が見える(図16-5)。豆は脚に回転ナデ痕や押捺印があり戦国後期の特徴を保持する。また大嶺屯城からは多くの金属器も出土したが、銅鏃の組成は牧羊城や高麗寨のそれに似ている。鉄器も鑄造製の斧が多いなど牧羊城とよく似ている。

大嶺屯城から遠くない所には王家屯磚室墓群がある。遼東半島特有の文様を持つセンで造られた古墳が多いが、古墳の形態と出土遺物から見て後漢代以降に編年できる。ところでこれら後漢代以降の古墳から出土する土器(図16-7)は大嶺屯城からは殆ど出土していない。この点はこの土城だけではなく似ている遺物組成を見せる牧羊城や高麗寨の下限年代を推測するのに参考となる。

4) 梨樹県二竜湖古城

二竜湖古城では多様な形態の鑄造鉄器とともに明刀銭、半両、五銖銭などの貨幣が出土しておりおよその年代が押さえられる(図17)。出土した土器の中で注目されるのは燕式の釜形土器に燕下都分類のBⅡ、BⅢそしてC型の存在する点である。形態的に牧羊城のA類に似ているが縄文の叩き目が小さくて滑石が多量に混入されている点は牧羊城とは少し異なる。特にC型の土器は滑石混入であり、このような形式の土器は燕下都や唐山地域などでは出土例が知られるが牧羊城や高麗寨、大嶺屯城など遼東地域ではまだ出土例の報告がない。一方、ある程度の差はあるものの胴部が細長い叩き文短頸壺と口径部の直径が大きくて口縁端が水平に外反、さらに胴部が大きい短頸壺が共半する様相は牧羊城と似ているために、出土土器の年代は燕下都の編年を参考にすると戦国の後期にあたる。無文土器質の土器は見当たらない。報告書はこの城の中心年代を戦国末から前漢までであると判断している。

5) 安杖子古城

この城の出土品には半瓦当、円瓦当、鑄造鉄斧、大刀、三翼鏃、三稜鏃などがありおよそ戦国から前漢代にかけての遺跡であることが分かる(図18)。

出土した土器は燕式の釜形土器と打捺文短頸壺が多い。釜形土器は滑石混入の口縁部が緩やかに外反する典型的なものである。打捺文短頸壺は胴部が細長いものと肩部叩きがきれいに消されたものがあり牧羊城、高麗寨土器と類似性が認められる。豆形土器も脚端部の形態が牧羊城のそれと似ている。ところで安杖子古城出土土器の中には三足盤、底部外縁が削られた碗など、後漢代埽室墓から出土する土器に似ているものがありこの土城の全体使用年代をある程度は推測できる。

6) 小荒地古城

遼寧錦西市の小荒地土城で出土した遺物は牧羊城、高麗寨遺跡と形態上よく似ている。報告者はこの遺跡を戦国時代の右北平郡の県城として把握し前漢代まで使われたものと理解する。城から出土した三翼鏃と二條突帯鑄造鉄斧、長方形鑄造鉄斧などのような金属器の組合はもちろん土器組合でも類似性が窺える。土器には多様な型式の釜形土器、口縁端が水平のように外反する叩き文短頸壺などが特徴である。もちろん叩き文土器には口径が小さいものも含まれる。長胴ながら肩部叩きが消された土器と口縁部内側に突起のある盆形土器などは上で述べたように燕下都の戦国時代後期に流行する土器らの形態的特徴である。牧羊城出土土器とは形態的に似ている点が多いが釜形土器に滑石を多く混ぜた点、無文土器質の土器がない点、牧羊城、高麗寨などの釜形土器Bが見当たらない点など、お互いに異なる点もある。

7) その他

他にも牧羊城出土2,3類土器の年代と関連して参考になる資料は尹家村下層二期12号墓と尹家村上層の墓である。これらの墓から出土した土器と同じ型式の土器が牧羊城でも確認されることから二つの遺跡が時間的に非常に近いと言える。また、鄭家窪子遺跡の甕棺も牧羊城出土土器と形態的また製作技法の面で類似性が高いため参考になる。

これらの遺物は燕下都の戦国後期に属する遺物と似ていることは上で述べたとおりである。

5. 牧羊城周辺磚室墓資料の検討

ここでは牧羊城の下限を決めるため周辺の磚室墓出土遺物を観察する。牧羊城周辺には早くから磚室墓の存在が知られているが、中でも營城子古墳が代表的である。營城子磚室墓からは様々な種類の土器が出土したがその大部分が明器を含む泥質系の土器である。その個々の形態や製作法は牧羊城出土品とは異なる。外反壺や口縁が内湾し胴部が直立する井戸形土器、盤形土器、高杯などの器種も牧羊城出土品には似たものがない。また、三足付きの円筒状土器や耳杯、円筒状土器も牧羊城では出土例がない。製作技法の面でも營城子墓出土土器に見える底部への回転ケズリは牧羊城土器には見当たらない。また円筒土器の底部に見られる回転ナデ痕も牧羊城出土土器にはない。そして円筒土器の底部外縁を斜めに削る調整も牧羊城の土器にはない。

そして營城子磚室墓出土土器に見られるこのような特徴は遼東半島のみならず遼陽漢墓など後漢代以降の遼寧地域のほぼ全域で見られる特徴でもある。

したがって牧羊城の2、3類土器の年代は遼東地域で磚室墓の造営が始まる後漢代よりは古い。

6. 牧羊城の年代

以上、牧羊城の中心年代を決めるためにいわゆる2、3類土器を出土遺物の組成が似ている周辺地域の土城遺跡及び基準になる燕下都資料を観察してお互いを比較した。その結果、牧羊城から出土した遺物は概して戦国時代後期から前漢代までが中心年代であることが明らかになった。これは比較的に築造時期が明らかな楽浪古墳出土遺物との比較を通じても検証できる。すなわち牧羊城から出土した金属器と土器などの組成はその殆どがB.C.1世紀代の楽浪古墳出土品より古いからである。

一方、營城子磚室墓から出土した土器らは形態的にも製作技法の面でも牧羊城のそれとは異なる。したがって、牧羊城の下限は遼東半島で磚室墓が造営される後漢代よりは古い。

参考文献

- 李盛周 1996「青銅器時代東アジア世界体系と韓半島の文化変動」『韓国上古史学報』第23集。
遼寧省文物考古研究所 1996「遼寧凌源安杖子古城址発掘報告」『考古学報』1996-2期。
東柱臣 1956「考古学上漢代及漢代以前の東北疆域」『考古学報』第1期。
四平地区博物館 1988「吉林省梨樹県二竜湖古城址調査簡報」『考古』1988-6期。
遼寧省博物館文物隊 1990「遼寧省袁台子西漢墓 1979年発掘簡報」『文物』1990-2期。
吉林大学考古学系 1997「遼寧省錦西市集屯小荒地秦漢古城址試掘簡報」『考古学集刊』第11集。
社会科学院出版社 1966『中国東北地方の遺蹟発掘報告』
金ジョンムン 1964「細竹里遺跡発掘中間報告」(1)『考古民俗』1964-2、社会科学院考古学及び民俗学研究所。
金ヨンウ 1964「細竹里遺跡発掘中間報告」(2)『考古民俗』1964-4、社会科学院考古学及び民俗学研究所。
王増新 1964「遼寧省撫順市蓮花堡遺址発掘簡報」『考古』1964-10期。
三宅俊成 1933『大領屯城址』満洲文化協会。
徐俊岩 1991「遼陽上伯官漢墓整理報告」『遼海文物学刊』1991-2期 遼寧省考古博物館学会外。
于臨祥 1958「營城子貝墓」『考古学報』1958-4期。
撫順市博物館 1992「撫順小甲邦東漢墓」『遼海文物学刊』1992-2期 遼寧省考古博物館学会外。
許玉林 1993「遼寧蓋県東漢墓」『考古』1993-4期。
河北省文物研究所 1996『燕下都』文物出版社。

遼寧省博物館，遼陽博物館 1985「遼陽旧城東門里壁画墓發掘報告」『考古』1985-6期。

1995「東北文物工作隊 1954 年工作簡報」『文物參考資料』55号。

東亞考古学会 1929 東方考古学叢刊第一冊。

東亞考古学会 1931『牧羊城』東方考古学叢刊第二冊。

東亞考古学会 1933『南山裡』東方考古学叢刊第三冊。

東亞考古学会 1934『營城子』東方考古学叢刊第四冊。

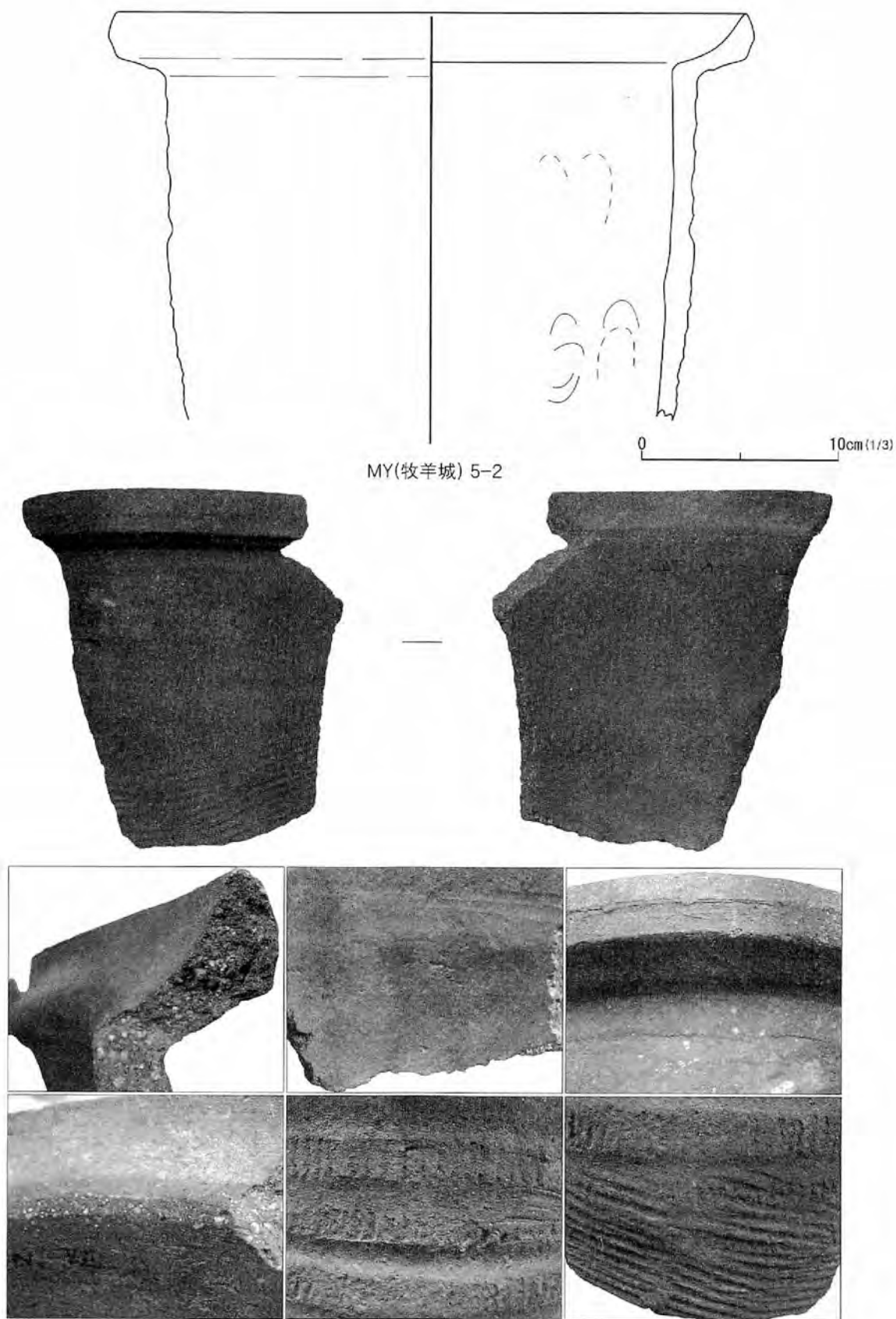
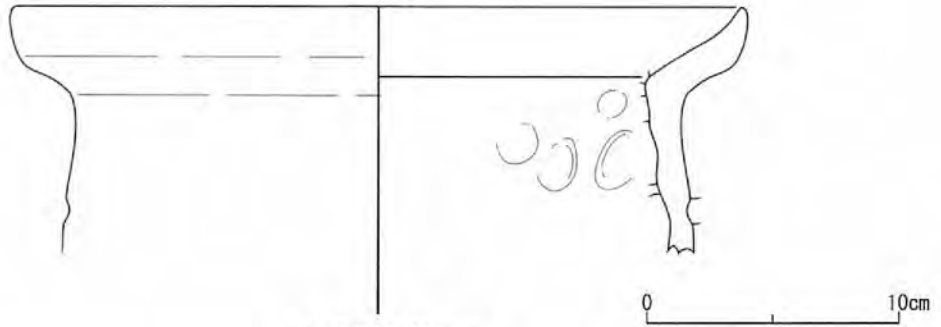
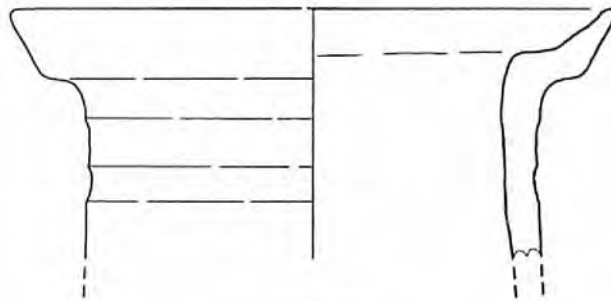


図1 牧羊城の変形燕式釜 A 類 I



1.MY(牧羊城) 5-5



2.MY(牧羊城) 5-7

0 10cm (1/3)

図2 牧羊城の変形燕式釜 A 類 II

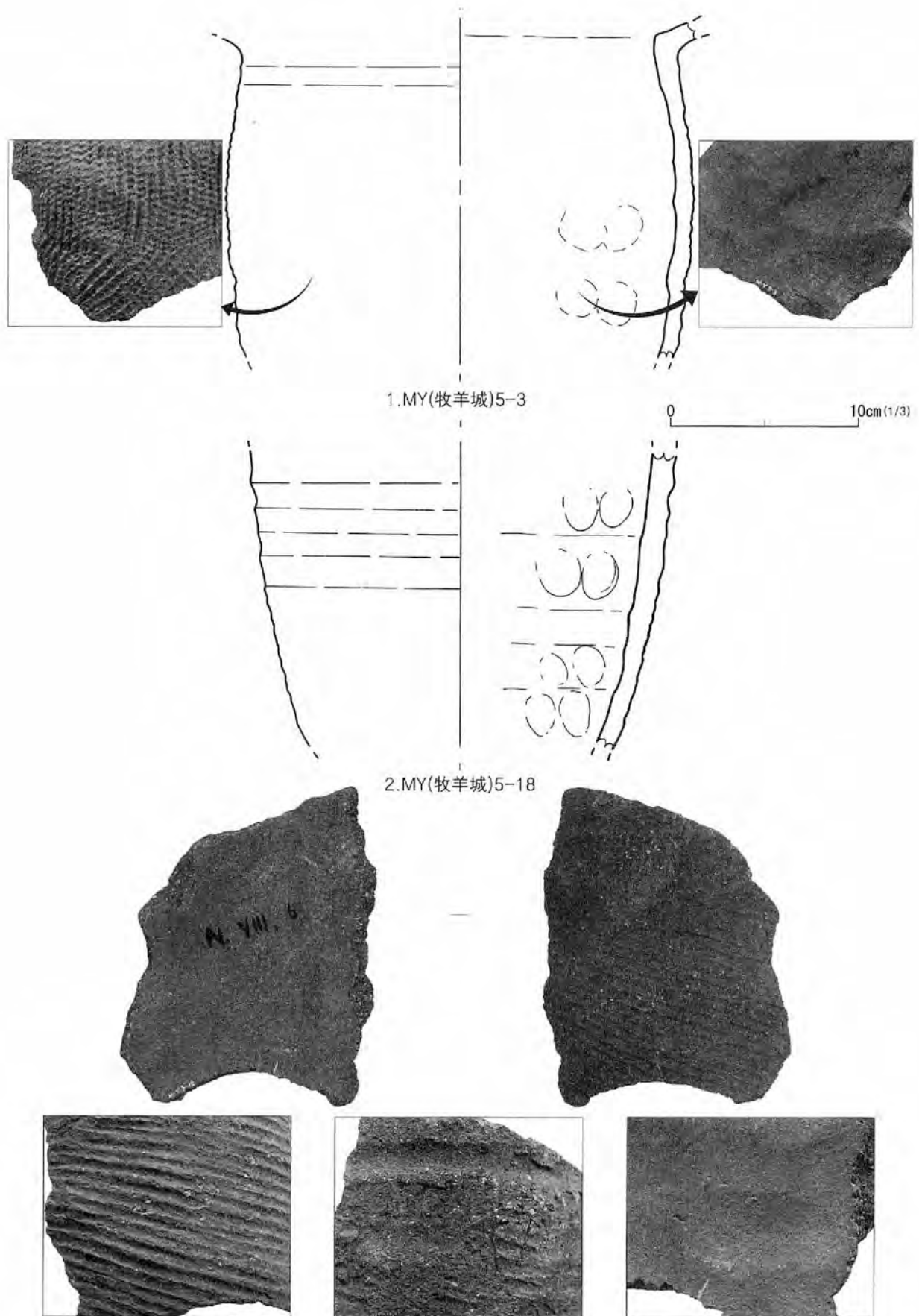


図3 牧羊城の変形燕式釜 A 類Ⅲ

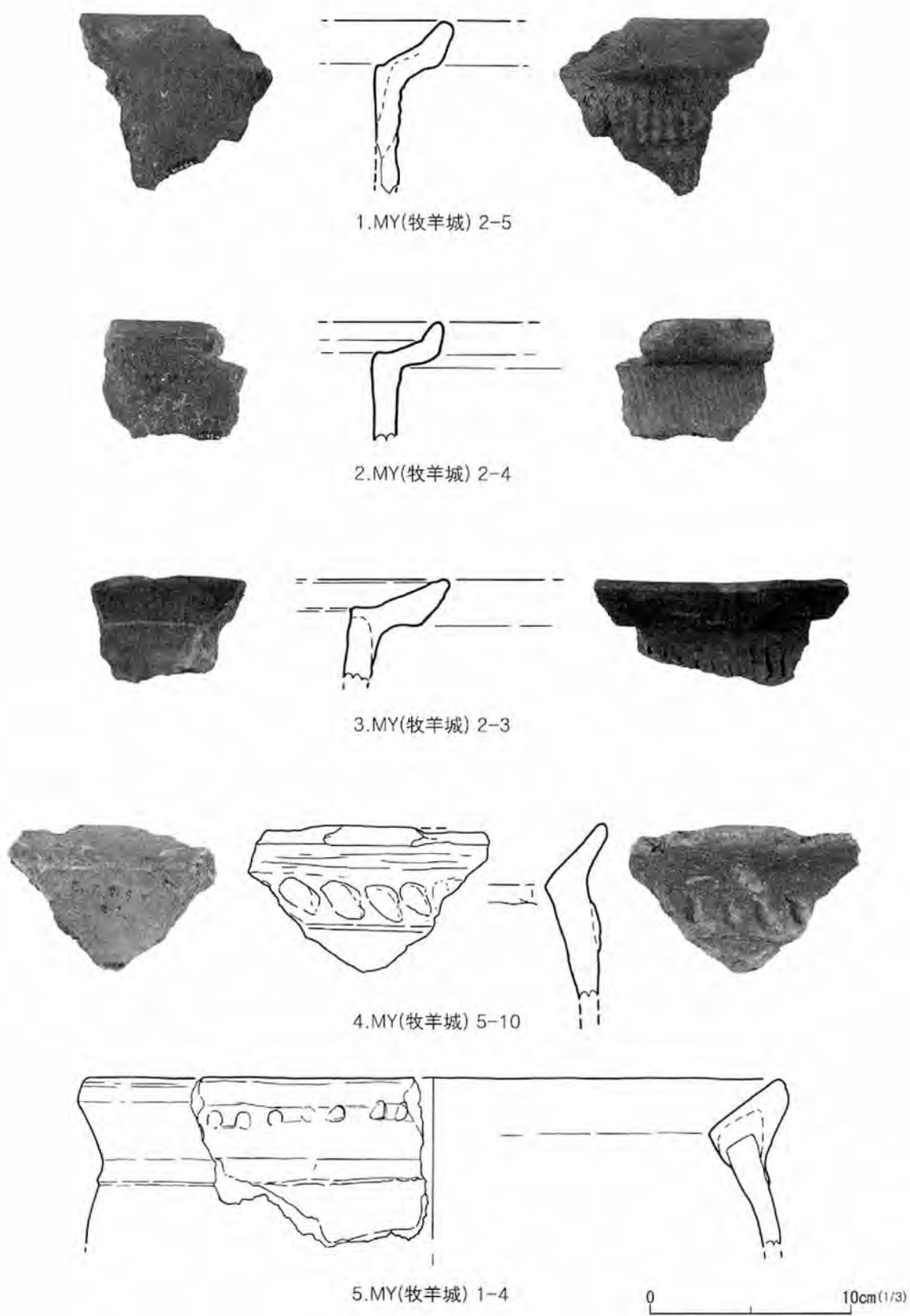
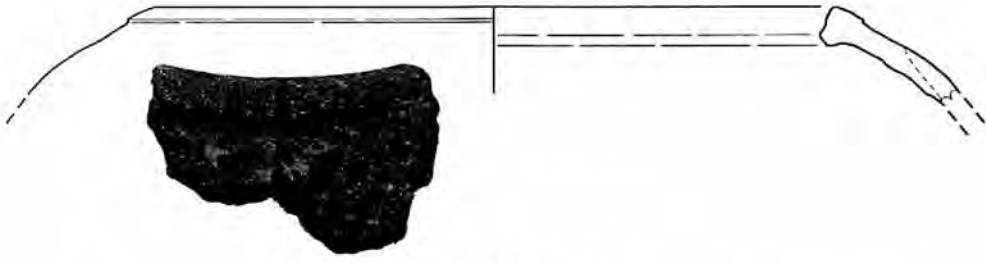
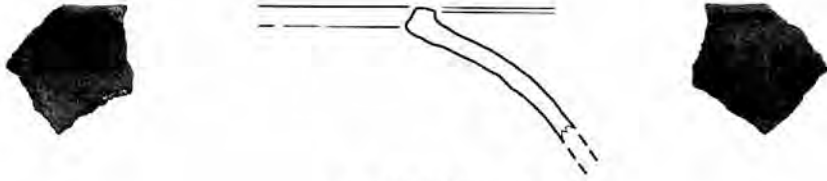


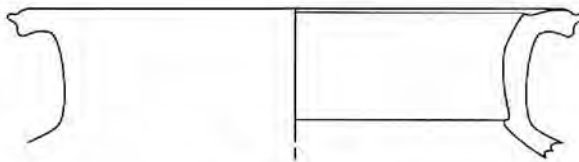
図4 牧羊城の変形燕式釜 A類：1-3, B類：4-5



1.MY(牧羊城)5-14

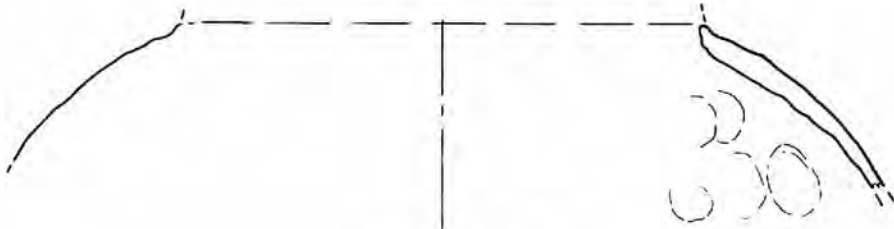


2.MY(牧羊城)7-19



3.MY(牧羊城)

0 10cm(1/3)

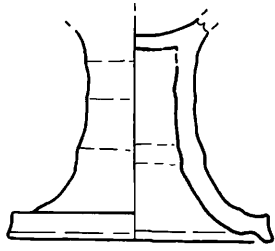


4.MY(牧羊城)5-9



5.MY(牧羊城)35-72

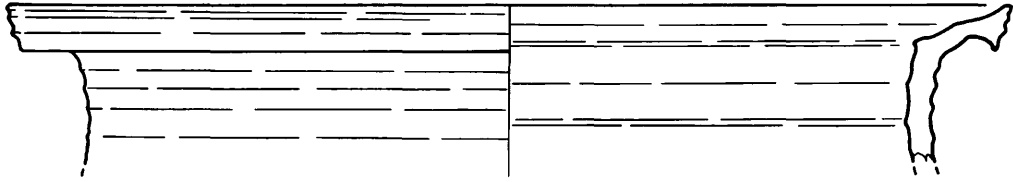
图5 牧羊城出土遺物 (5は甕棺) II



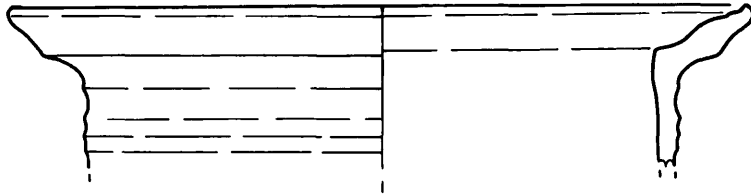
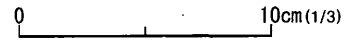
1.MY(牧羊城)5-15



2.MY(牧羊城)



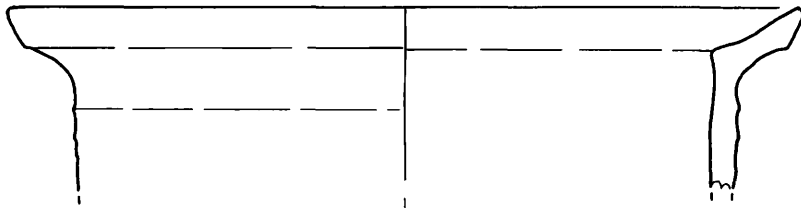
3.MY(牧羊城)37-1



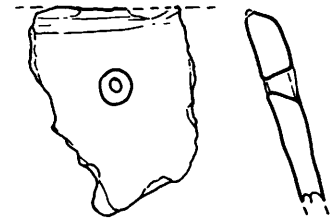
4.高麗塞(京都大学)



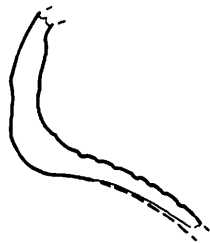
5.高麗塞



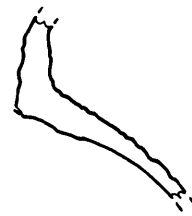
6.高麗塞 1-1



7.高麗塞



8.高麗塞



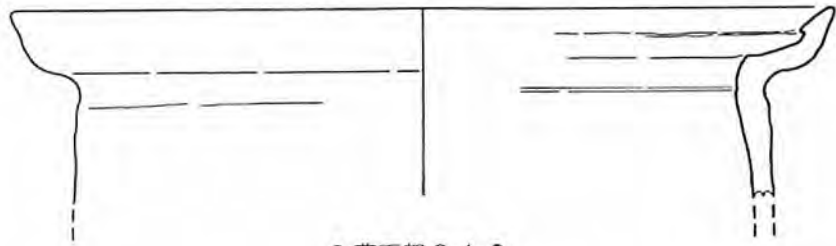
9.高麗塞

図6 牧羊城および高麗寨の土器

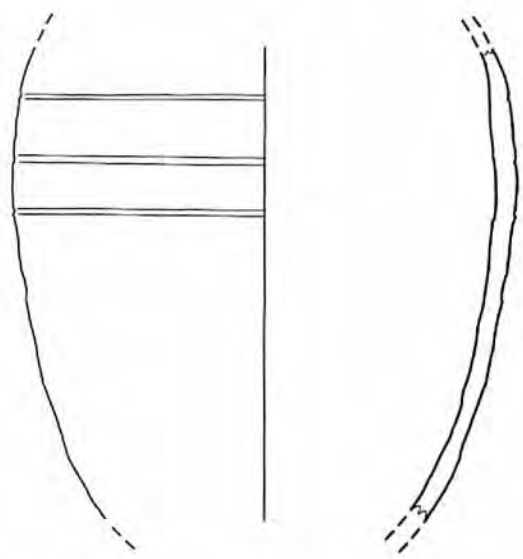


1. 燕下都 2-57

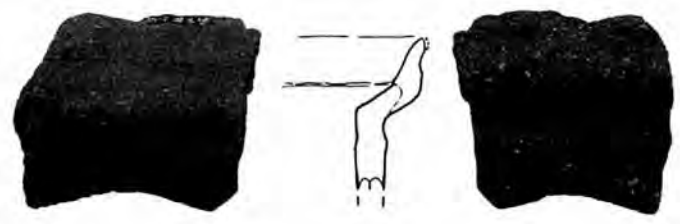
2. 燕下都 2-54



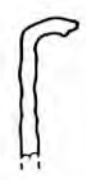
3. 燕下都 3-1-6



5. 燕下都



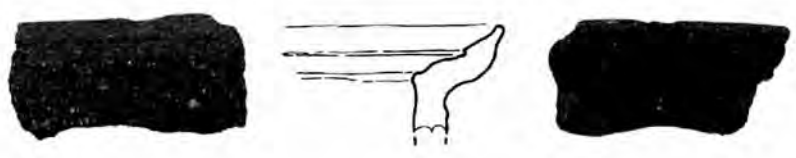
4. 燕下都 2-48



6. 燕下都 2-59



7. 燕下都 2-53



8. 赤峰

图7 燕下都および赤峰出土土器類


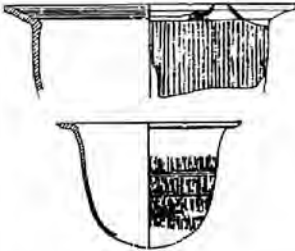
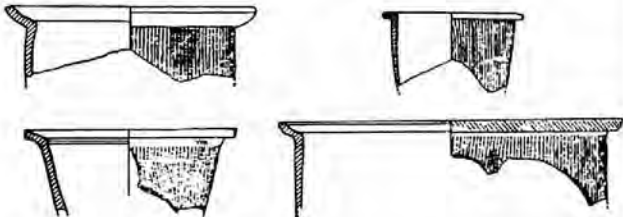
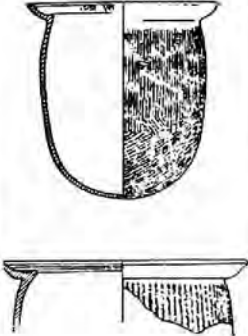
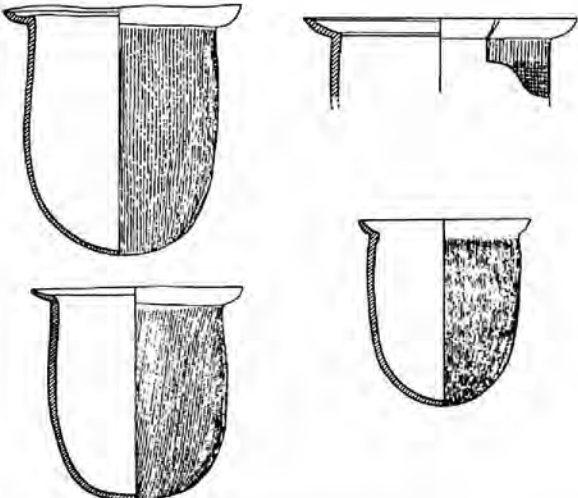
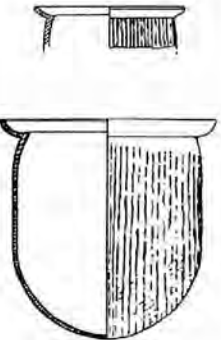
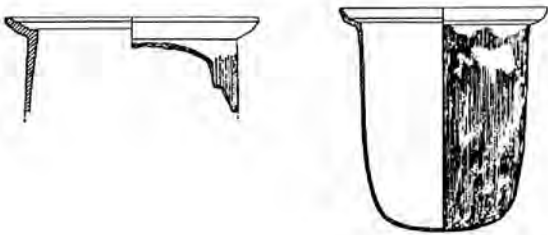
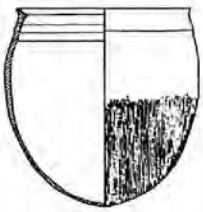
	燕式釜 A	燕式釜 BI	燕式釜 C
春秋後期			
戦国前期			
戦国中期			
戦国後期			

図8 燕下都出土燕式釜の分類と変遷 (1)

	燕式釜 BII	燕式釜 BIII		
戦国前期				
戦国中期				
戦国後期				

図9 燕下都出土燕式釜の分類と変遷(2)

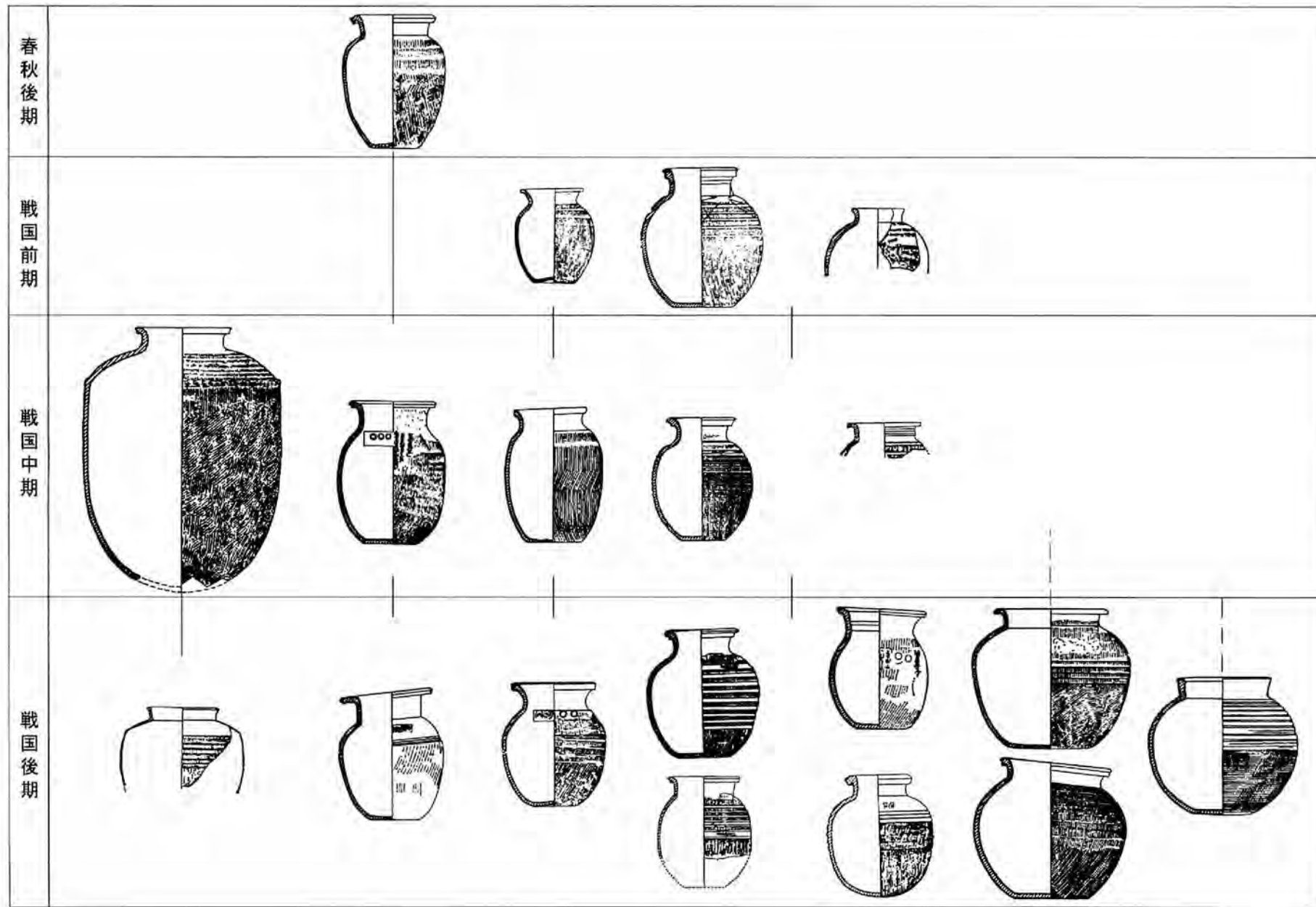


図 10 叩き紋短頸壺の変遷

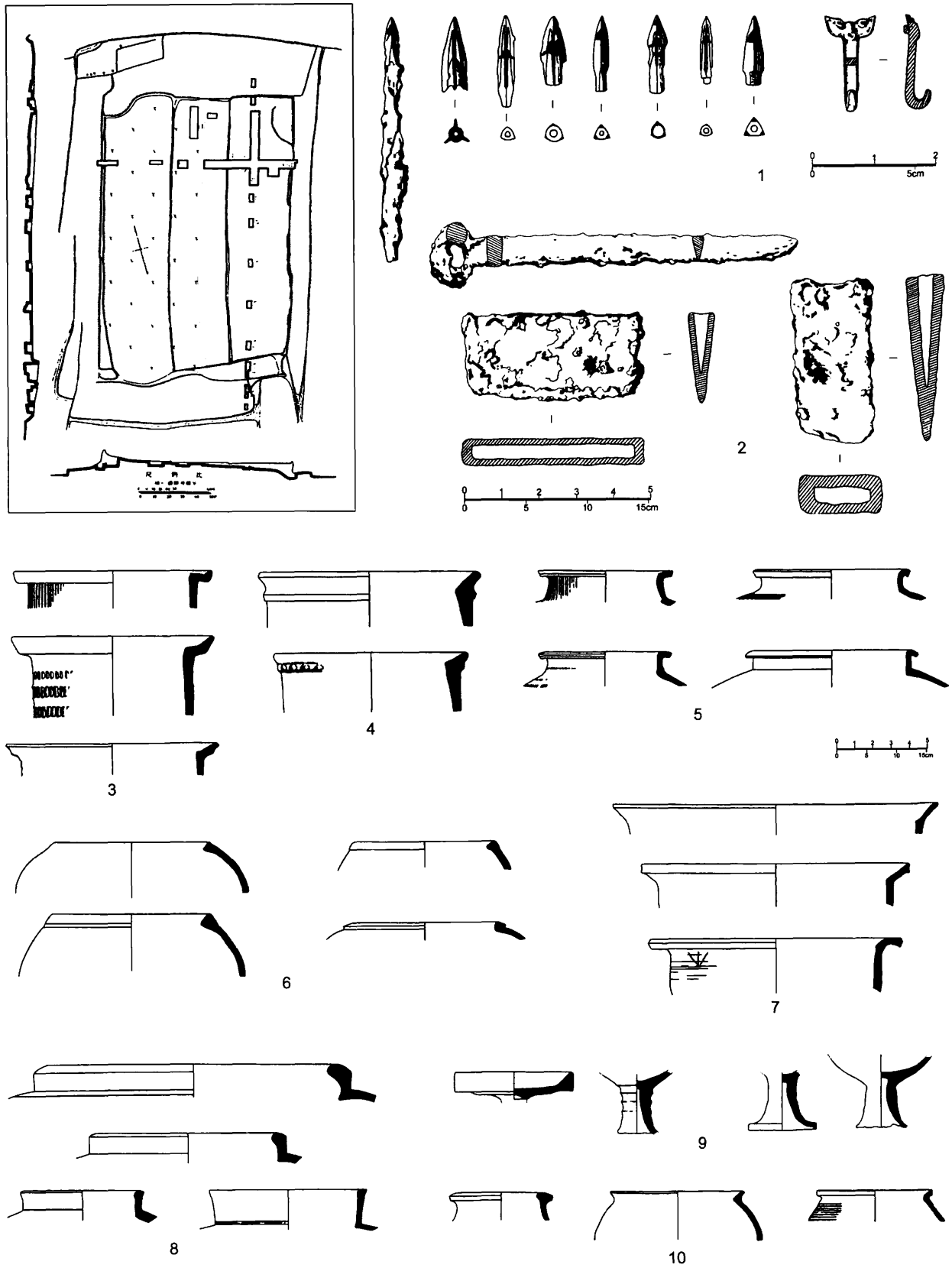


图 11 牧羊城出土遺物

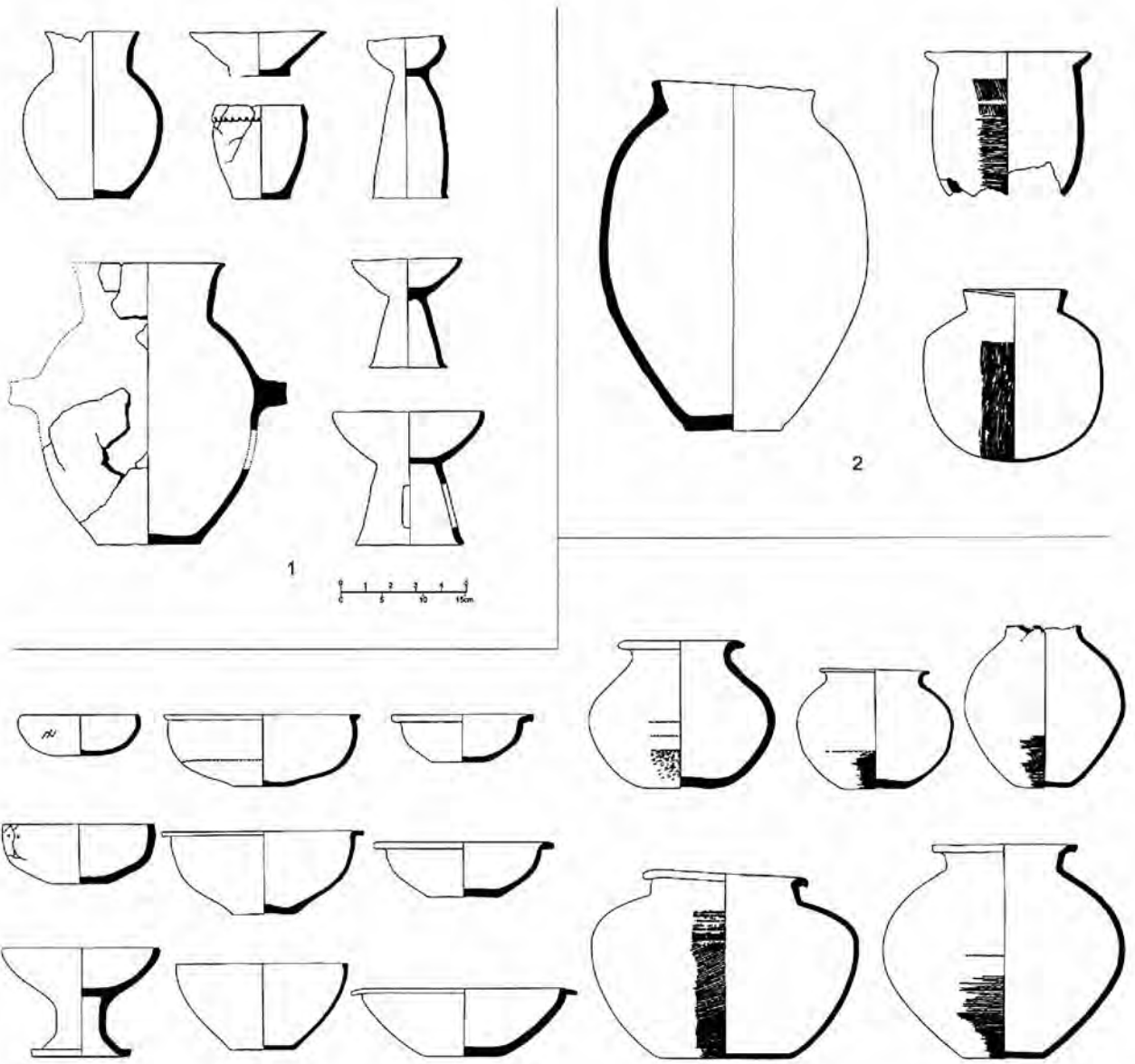


图 12 牧羊城周辺の墓出土遺物

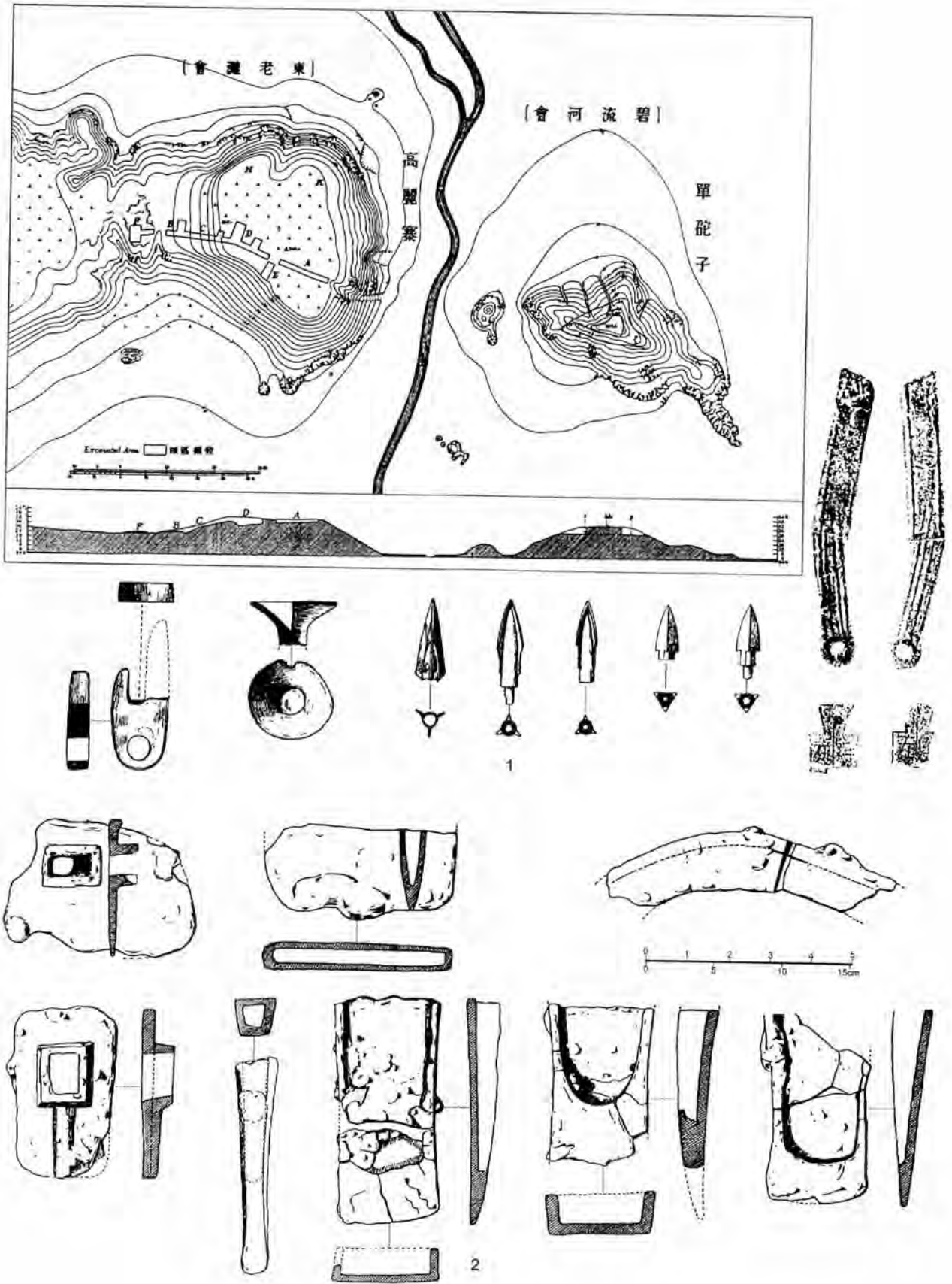


图 13 高麗寨出土遺物 I

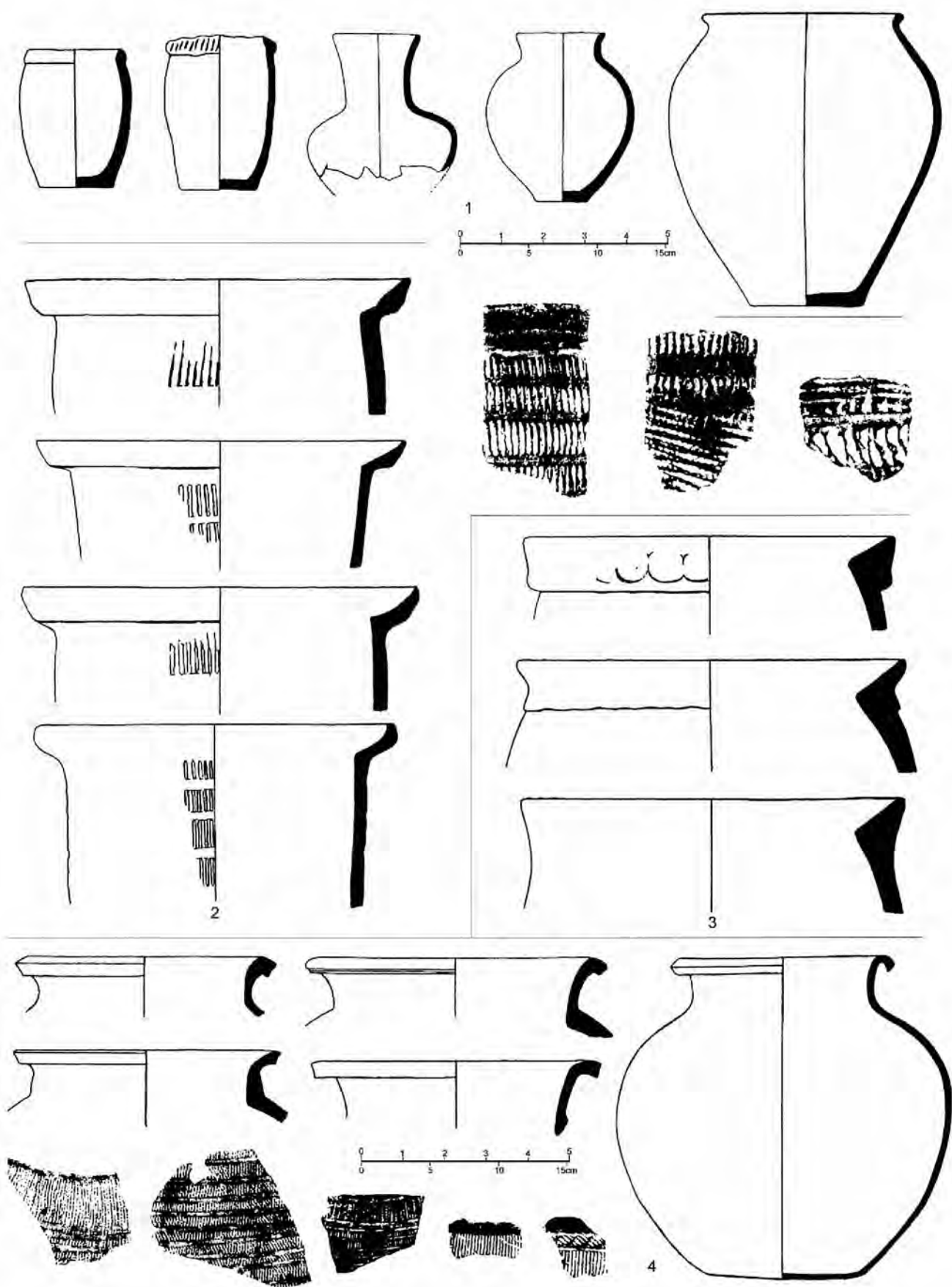
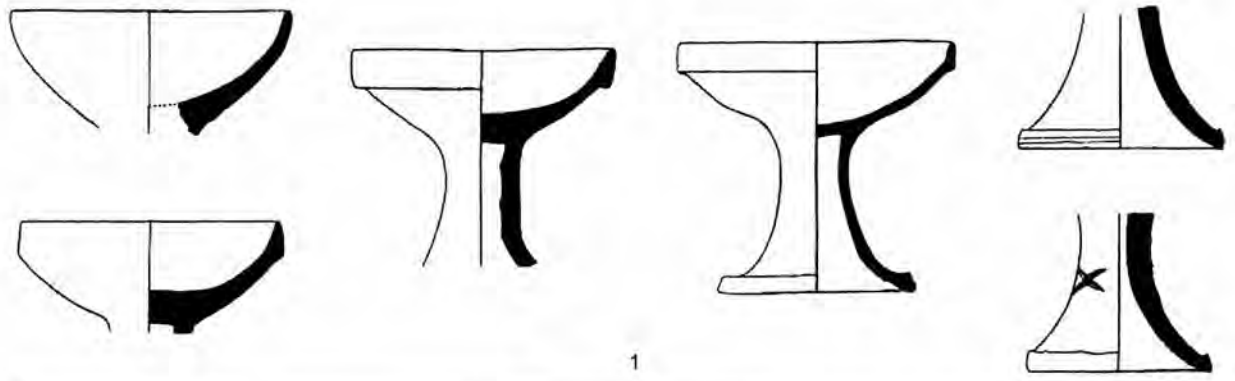
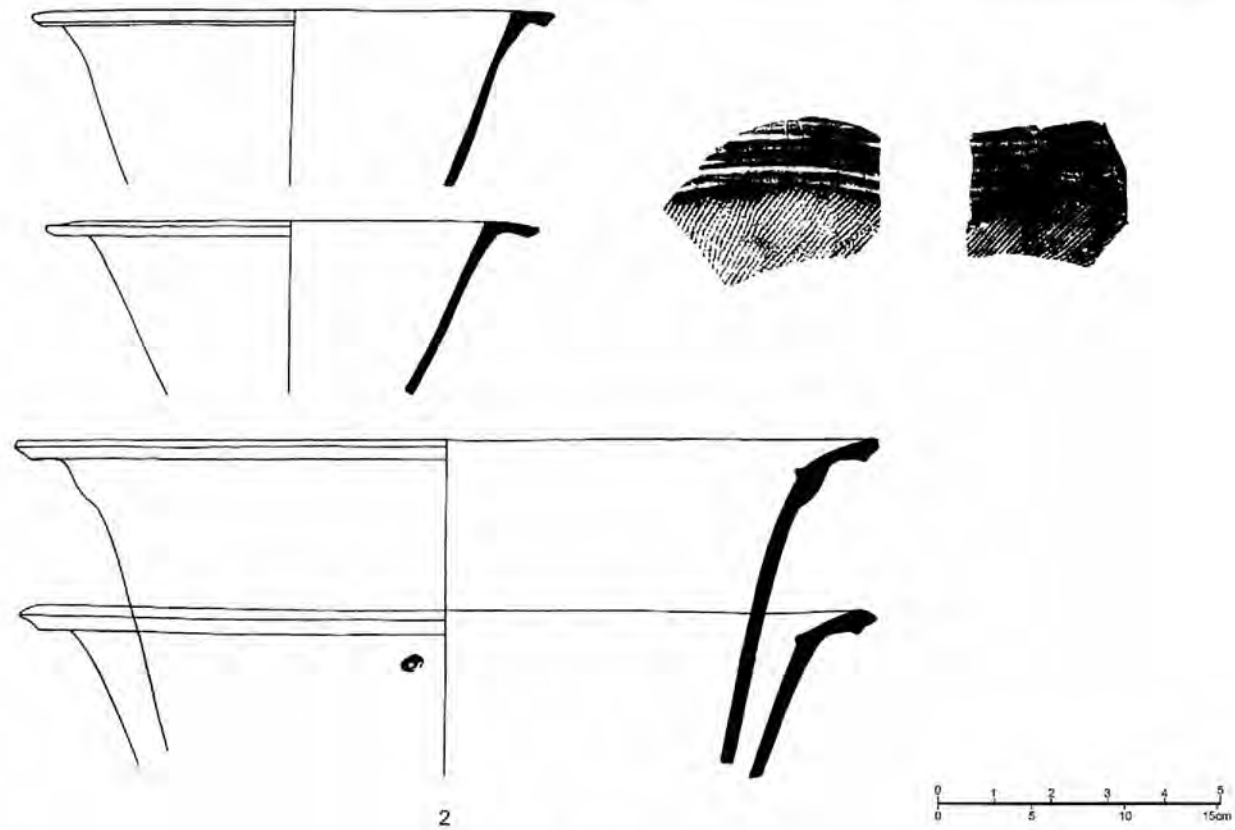


图 14 高麗寨出土遺物 II



1



2

0 1 2 3 4 5
0 5 10 15cm

图 15 高麗寨出土遺物 III

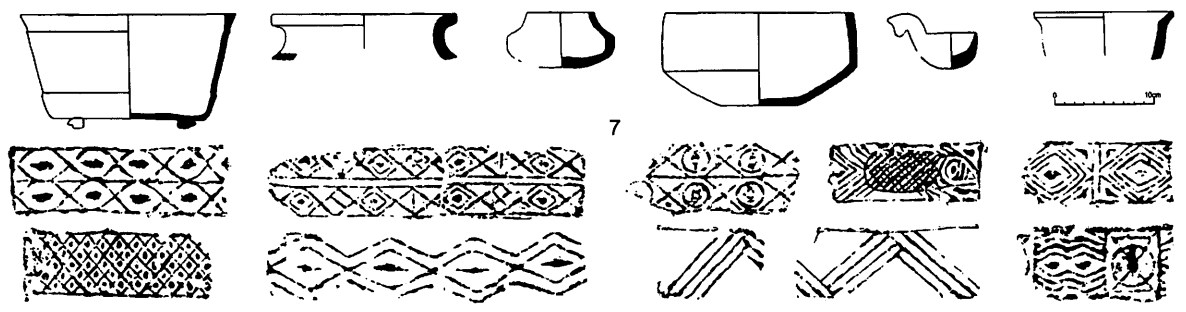
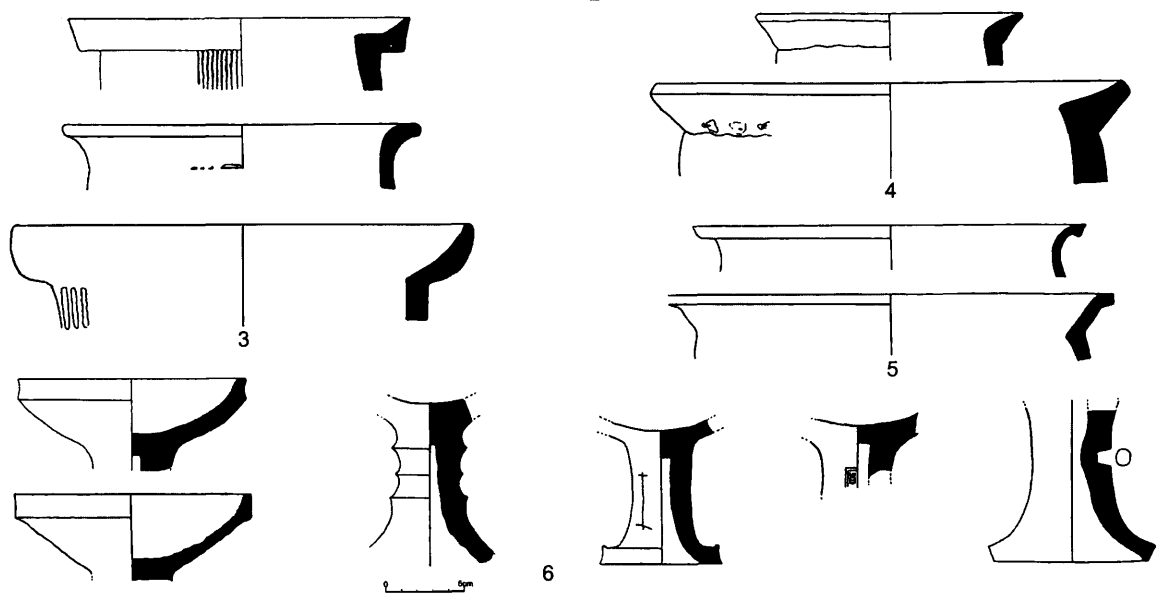
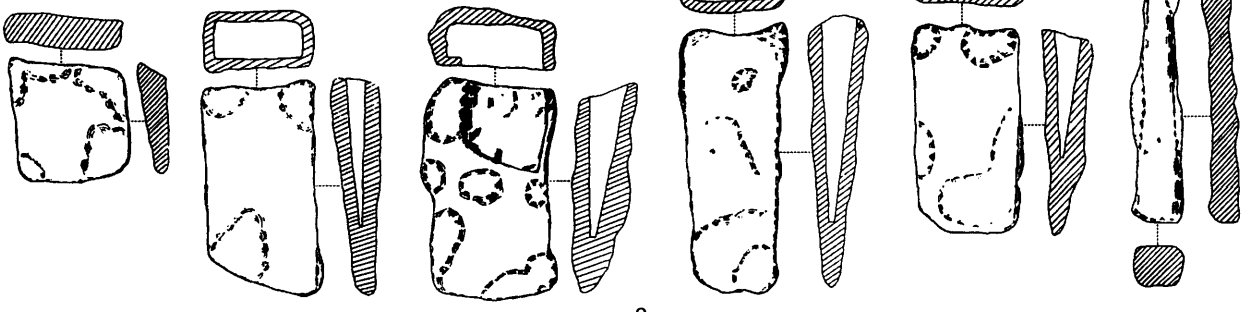
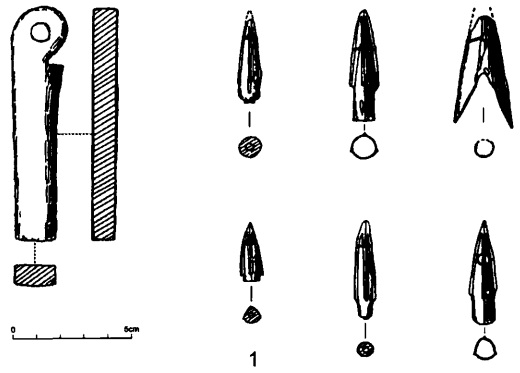
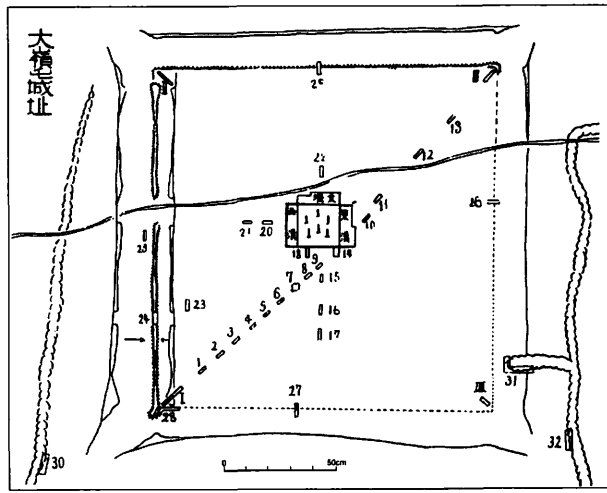


图 16 大嶺屯城出土遺物 (上)、王家屯磚室墓出土遺物 (下)

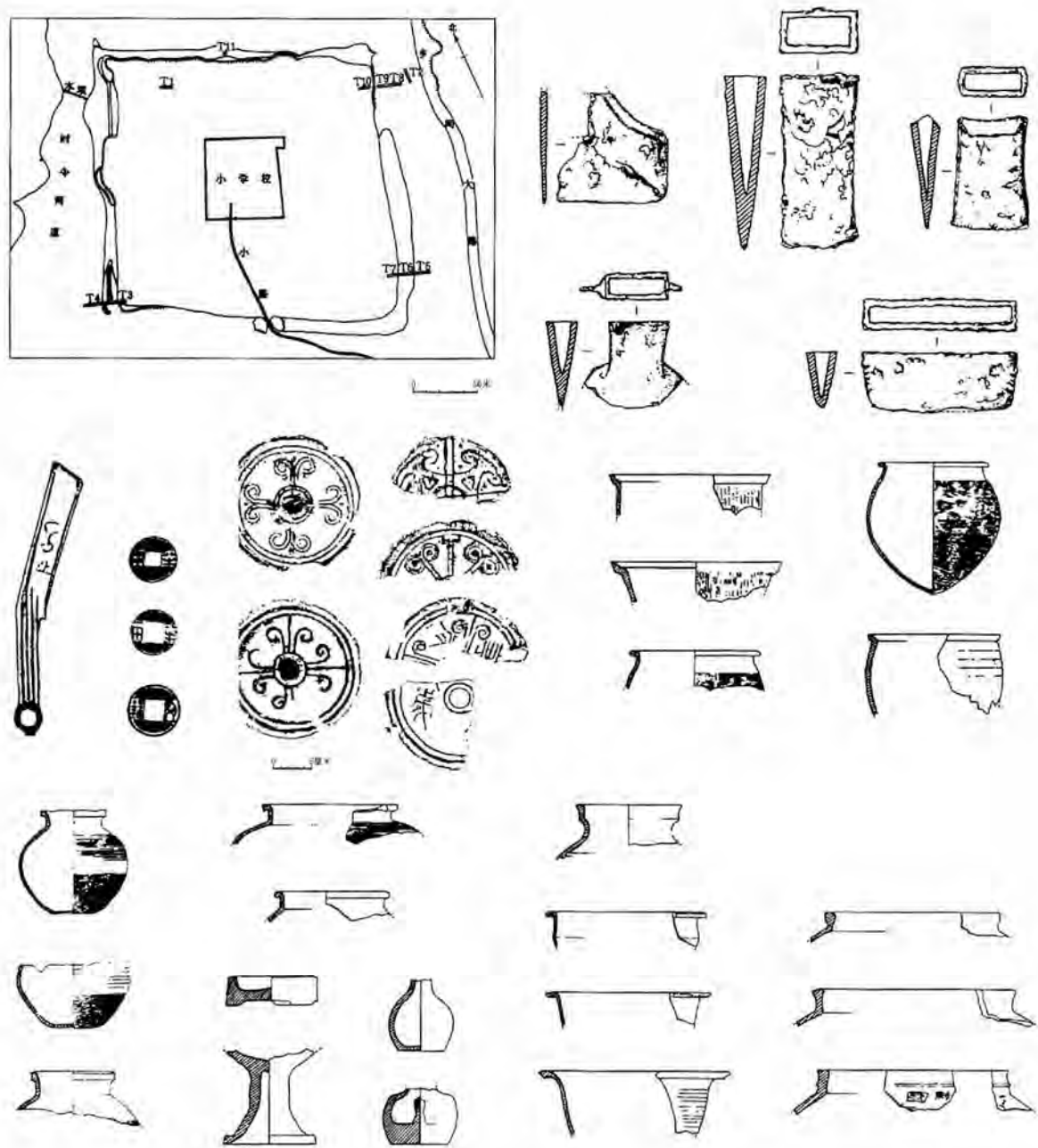


图 17 吉林省梨樹縣二龍湖古城出土遺物

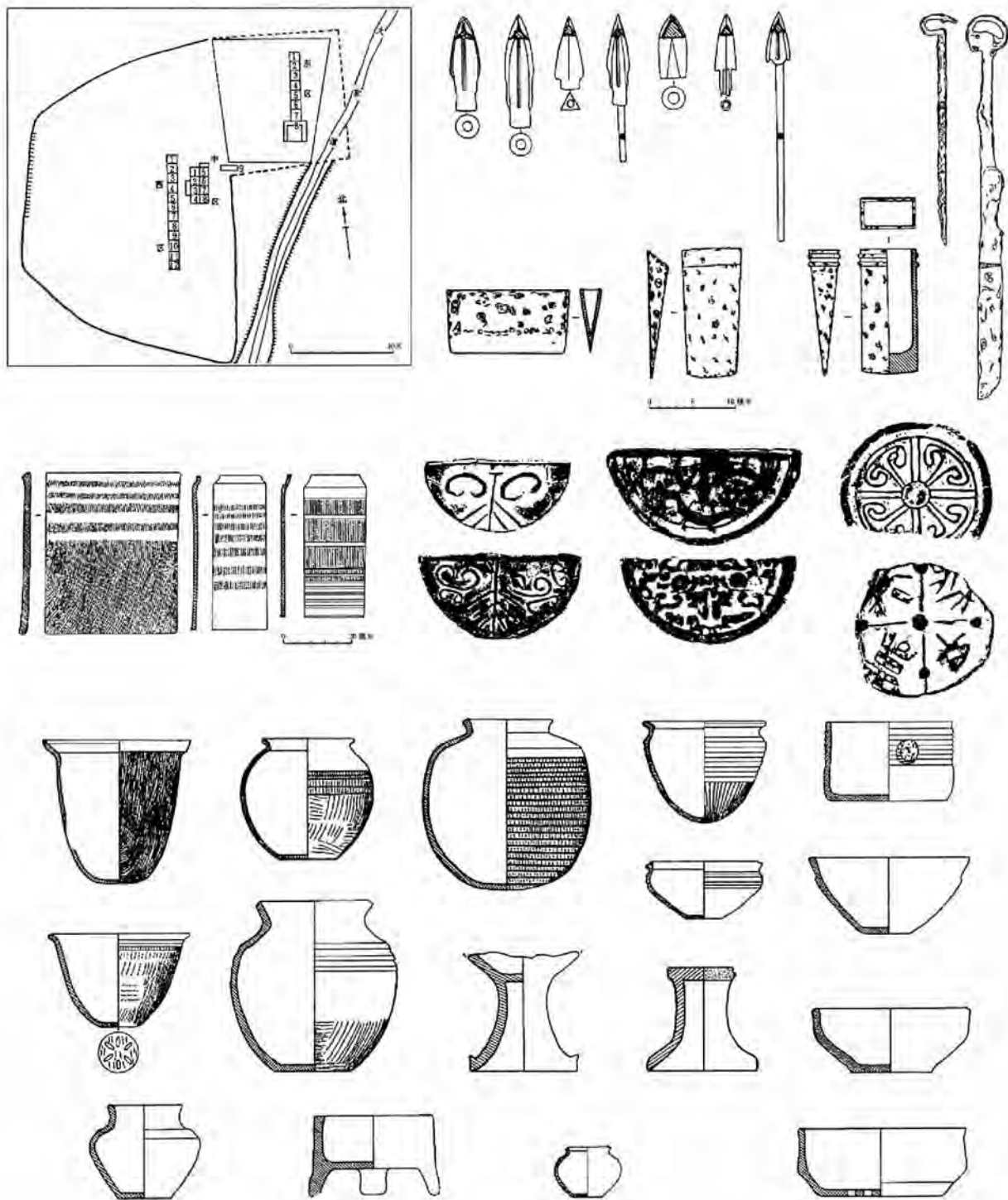


图 18 辽宁省凌源安杖子古城出土遗物

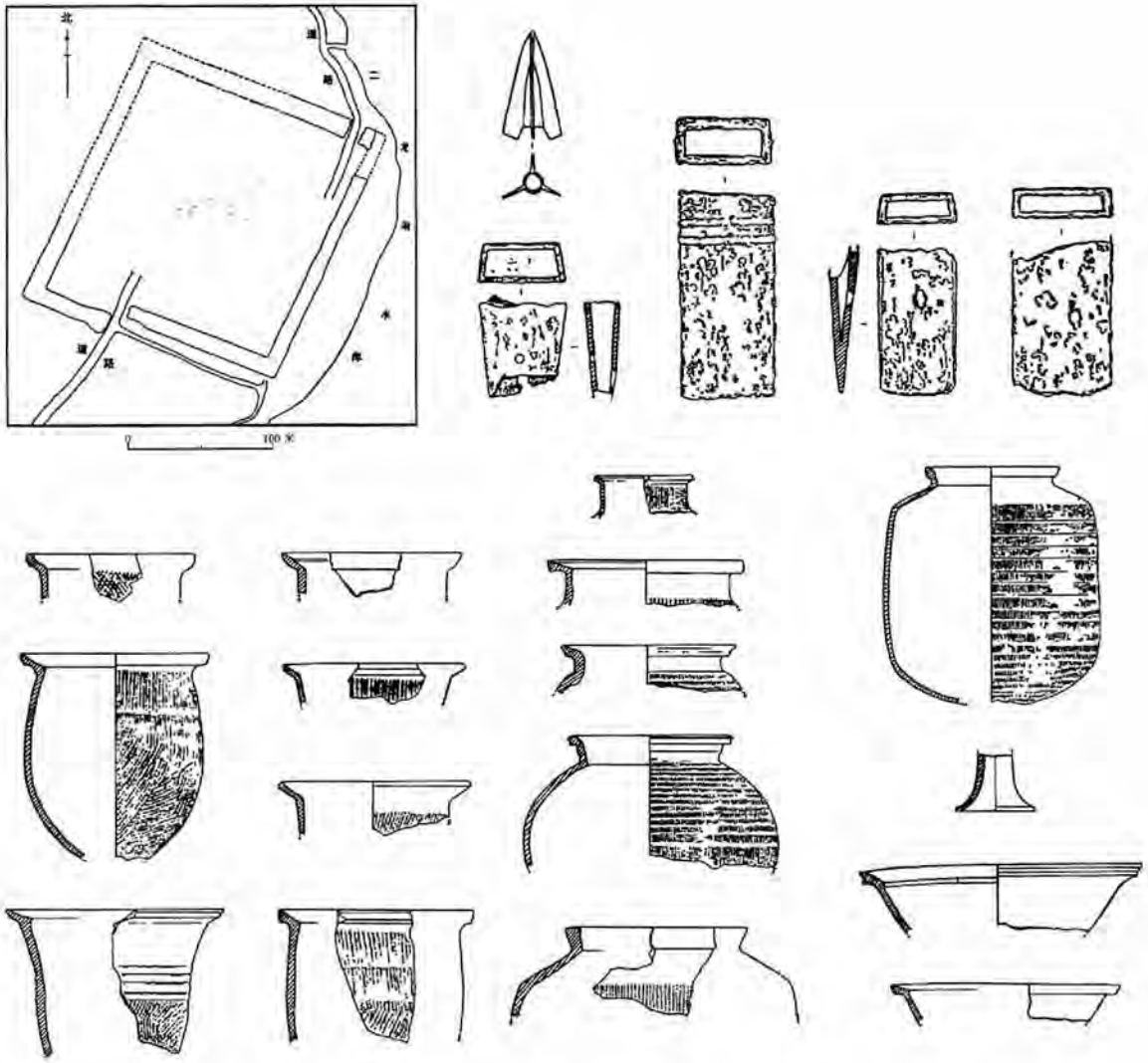


图 19 辽宁省锦西市小荒地古城出土遗物

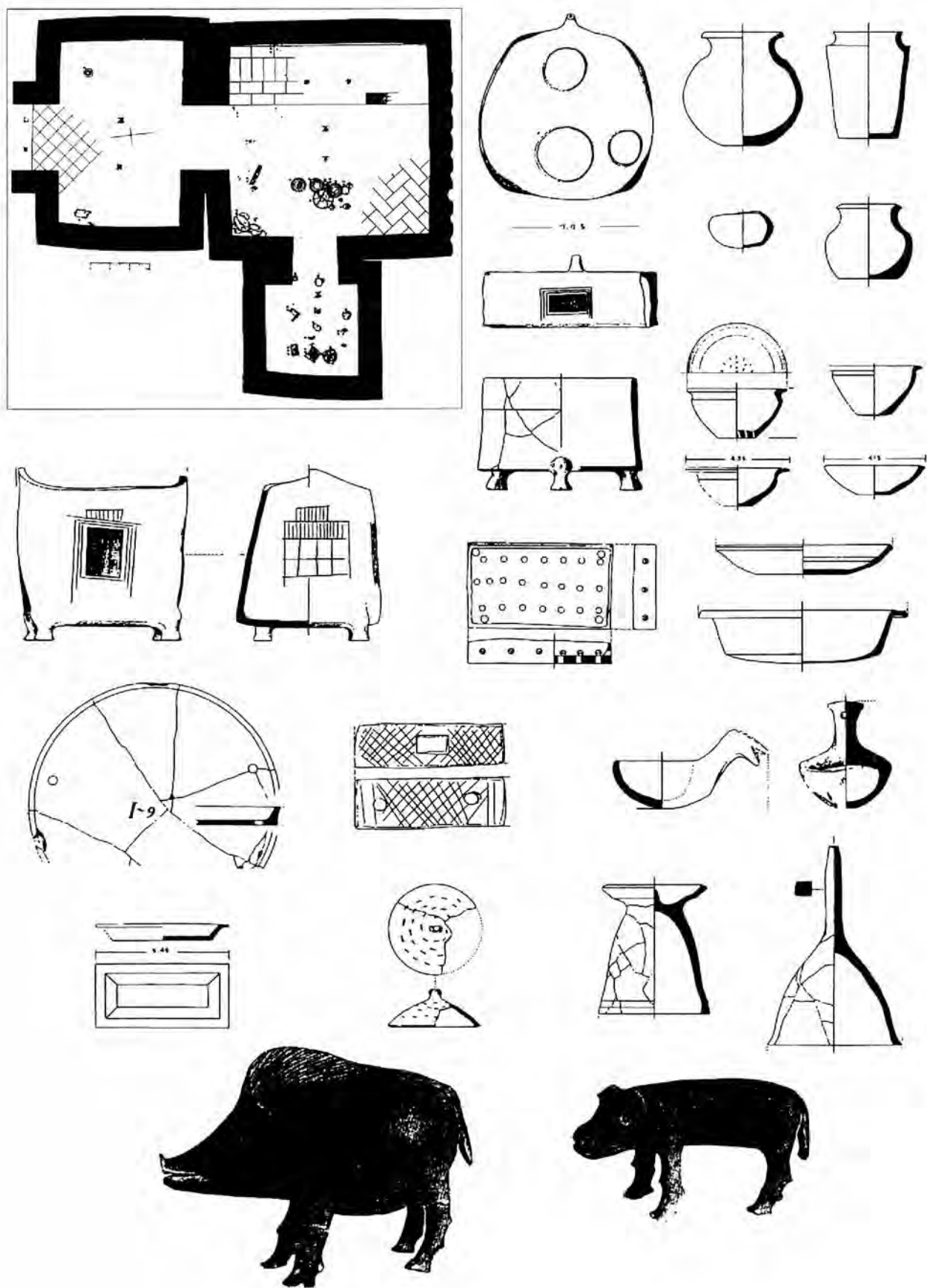


图 21 宫城子 2 号墓 出土遗物 II

4-2. 「牧羊城二・三類土器」における戦国時代土器

石川 岳彦

1. はじめに

戦前の東亜考古学会による調査に基づく『牧羊城』（東亜考古學會 1931）において、牧羊城出土の土器は三種に大別された。このうち「第二類土器」及び「第三類土器」は以下のように報告文に記載されている。

「第二類土器」は「黝黒色を呈し稍堅緻な焼成を示した瓦器」、「第三類土器」は「黝黒色を呈するもの最多く、白堊を含んだ白色のもの、又滑石末を混じた赤褐色のものもある」とし、ことに「第三類土器」は轆轤の使用による調整が顕著であると述べている。そしてこの二種の土器群の差異は時間差と解釈し、その実年代として「第二類土器」を「戦国時代から漢代に亘って盛行したもの」、「第三類土器」を「主として漢代に入って盛行したと考へられる型式」と結論付けている。

本論考では、東亜考古学会による牧羊城の発掘調査により出土した土器のなかで、東京大学考古学研究室に所蔵される資料のなかから、かつて「第二類土器」「第三類土器」と報告された土器のうち、牧羊城の造営・上限年代とも関連する戦国時代にまで遡及する燕系の土器を紹介し、今日までに中国国内で出土している資料との比較を行いながら、その年代を検討するとともに、遼東半島先端部における在地青銅器文化終末期から中原勢力進出期の様相を考察したい。

2. 牧羊城出土の戦国時代燕系の土器

現在までに中国河北省から遼寧省にかけて墓葬や都市、城砦などの戦国時代・燕の遺跡が相当数調査、報告され、戦国時代の土器の実態が明らかになってきている。なかでも燕の戦国時代の都城址である燕下都遺跡（河北省文物研究所 1996）では広範囲にわたる発掘調査が実施され、その出土土器は燕国内各地の併行する時期の土器との比較資料としてきわめて重要である。

本論考でも牧羊城出土の土器と主に燕下都遺跡出土の資料との比較検討を行うが、まず東京大学考古学研究室所蔵の牧羊城出土の土器のなかに含まれる燕系の土器を紹介したい。なお、戦国時代から前漢時代の生活遺跡においては長期にわたって同一の器種が使用される例が多い。また、これまでに中国側の調査によって報告されている資料数の制約から時期による器形や紋様の変化を明瞭に見出すことのできる器種は必ずしも多くない。このような事情により、時期的変化が明瞭である器種として本論考では罐と甗（燕式釜、以下本文中ではすべて「甗」と記す）を用いて分析を行う。また牧羊城出土の資料のなかで『牧羊城』出版に際して行われた整理作業により土器に墨書の注記が残存するのは出土位置が確認できる良好な資料であり、それらを分析の中心としたい（註）。

図 1-1 は E トレンチ IV 区から出土した罐である。色調は深い黒灰色で、残高 5.6 cm、復元した口縁直径は 21.5 cm だった。口縁部から頸部内面は回転によるミガキ、頸部下・胴部内面にかけては回転ナデ調整が観察される。一方、頸部外面を中心に叩きによる幅 1 mm ほどの浅い細縄紋がみられる。

図 1-2 は E トレンチ VII 区から出土した罐で、やはり色調は深い黒灰色である。残高 4.5 cm、復元した口縁直径は 21 cm で、口縁端部の形状が段状となっている。口縁部から頸部の外面は回転ナデ調整、胴部外面には叩きによる幅 1.5 mm 程度の細縄紋がみられる。また口縁部から頸部内面は回転ミガキ調

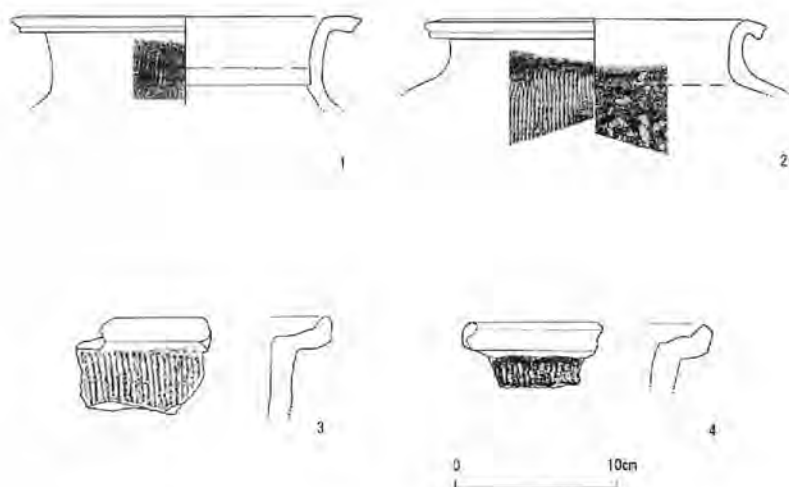


図1 牧羊城出土の戦国燕系の土器

区から出土したやはり甗の口縁部附近の破片である。色調は全体に黒灰色を呈する。色調は図1-3とは異なるものの、胴体部外面にはやはり幅3mm程度の叩きによる縄紋がみられる。また丁度口縁部内側の上方に屈曲する部位に明瞭な横方向の溝が形成されている。

上記2点の甗は色調こそ異なるが、胎土にはやや大粒の白色砂粒を含む。

3. 燕下都出土の戦国期土器との比較

上述した牧羊城出土の燕系土器について、燕下都遺跡から出土している戦国時代の土器との比較を行う。

燕下都ではこれまで広範囲の発掘調査が行われているが（河北省文物研究所1996）、発掘された遺跡内でも比較的長期間にわたる土器の変遷が層位関係により裏付けられる遺跡として郎井村10号作坊遺跡をあげることができる。かつて筆者は燕の墓葬と関連してこの作坊遺跡の年代について触れたことがあり（石川2001）、現在はその2期、3期の実年代をそれぞれ紀元前4世紀後半と紀元前3世紀と考えている。この遺跡から出土した土器は生活・工房関連の遺跡から出土したものであるが、墓葬出土の副葬陶器との間で年代的併行関係を追うことのできる資料であり、土器の年代を比較・考察するには非常に有用であり（図2）、本論考でも牧羊城と燕下都郎井村10号作坊遺跡2期（図3）、3期（図4）の甗及び甗との比較を試みたい。

牧羊城で出土した黒灰色の甗に関連するものとしては、郎井村10号遺跡の3期の甗があげられる（図4-1～8）。3期の甗は口頸部が比較的短いもの（図4-1～6）、と頸部から口縁部にかけて長く、かつ大きく開く「大口甗」と称される器種（図4-7・8）に大きく二分される。さらに前者には胴部が丸く膨らむ「鼓腹甗」（図4-3・4）や口縁部が水平に錨状の形状をなす甗（図4-5・6）が存在する。一方、郎井村10号遺跡において3期を遡る時期の2期の甗（図3-1～5）においては「大口甗」の類例（図3-4・5）は少なく、また「鼓腹甗」なども出土していない。このような多様な器形の甗の登場は3期の特徴といえよう。さらに、口縁の形態でも3期の甗は段状となる口縁端部の肥厚が2期に比べ比較的弱い傾向も見出される。

牧羊城出土の甗のなかで図1-1例は黒灰色の色調、また叩きによる縄紋が頸部にまで見られる点、錨状の口縁部など、燕下都郎井村10号作坊遺跡3期の図4-5・6の例に極めて近い。また図1-2例は燕下都郎井村10号作坊遺跡3期にみられる鼓腹甗（図4-3・4）に大きさや形状が類似する。

整を行っており、胴部内面には当て具痕とみられる麻点紋が消されずに残っていた。

図1-3はNトレンチV区から出土した甗の口縁部附近破片である。色調は内面および口縁附近外面は灰褐色を呈し、胴部外面は赤褐色を呈する。胴体部外面には口縁部直下から叩きによる幅3mmほどの縄紋が施されている。口縁部から内面にかけては回転ナデを行っている。

図1-4はEトレンチV・VIS

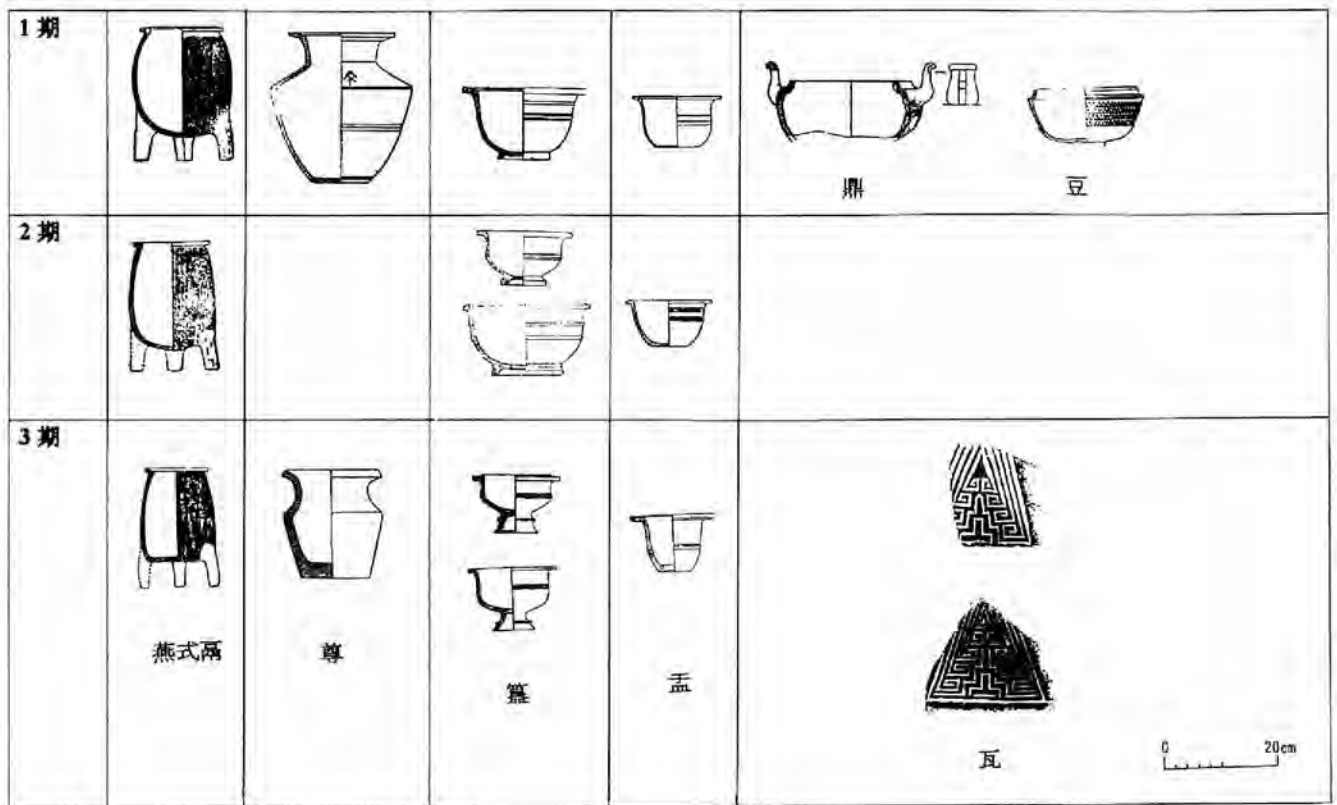


図2 燕下都10号作坊遺跡出土土器の編年(石川2001)

また、甗は燕下都においては戦国時代を通じで見られる器種である(図3-6・7、図4-9～11)。この器種の形態の時期的な変遷は明瞭であるとはいえないものの、時期が下るにつれて胴部の外形が丸みを帯びるものから直線的なものへと変化するようであり、これは製作技法において連関性の想定される燕式甗の形態変化(石川2001)に対応する可能性も指摘できよう。

郎井村10号作坊遺跡3期の甗では口縁部が比較的直線的に屈曲するもの(図4-9・10)が多い。一方、甗自体は漢代にも存在しており、牧羊城と地理的に極めて近い尹家村遺跡では漢代の文化層と

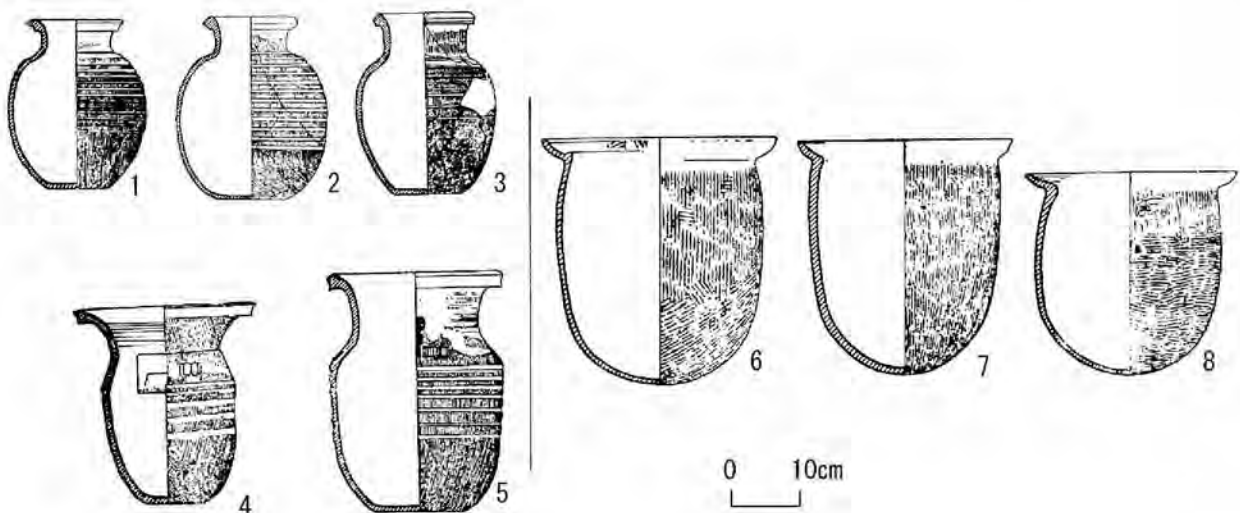


図3 燕下都郎井村作坊遺跡2期土器

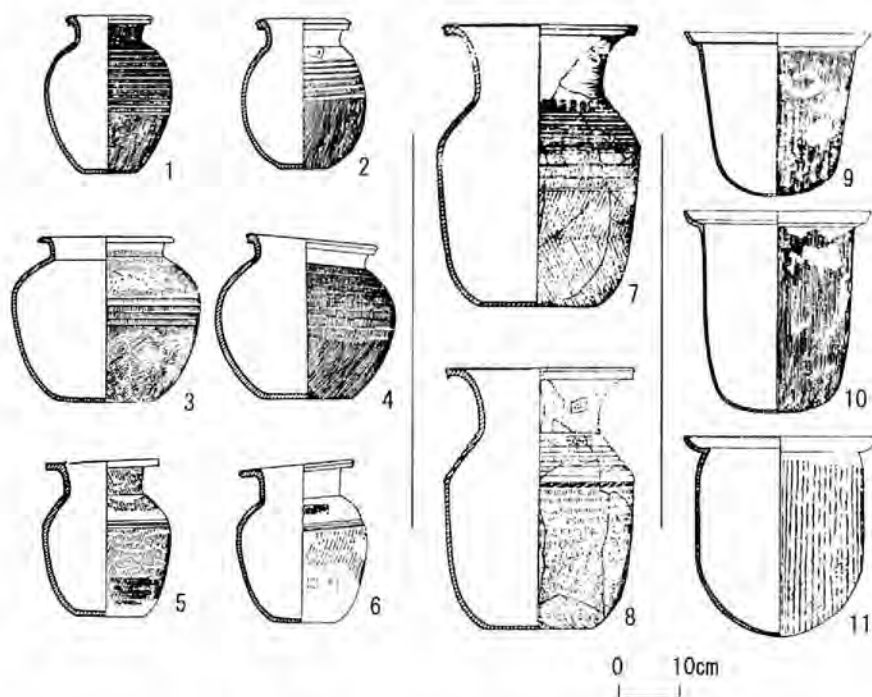


図4 燕下都郎井村作坊遺跡3期土器

墓葬から甗が出土している（図5-5～7）。これを燕下都出土の甗と比較した場合に最も大きな相違点は胴部の縄紋にある。燕下都などで出土する戦国時代の甗では縄紋が口径部直下から胴部前面にわたって見られ、口縁の外側にすら縄紋が観察される例も存在する。それに対して尹家村遺跡出土の前漢代の甗は縄紋が口径部やや下から胴部にかけて施され、さらに胴部上半には蛇腹状に縄紋を横方向になで消した調整が施されることが多い。このような胴体部に蛇腹状の無紋帯が存在する甗の例は漢代の河北省、遼寧省から出土している甗でも同様であり、甗

に関して戦国時代から漢代への時期的な変化を観察する際の大きなメルクマールとなるものである。

このような甗の形態、紋様の年代的な特徴を考慮すれば、牧羊城出土の図1-3例は縄紋が口頸部直下から施され、赤みがかった褐色の色調など郎井村10号作坊遺跡3期の資料に極めて近いということができよう。また口縁部形態も上記時期のものに近い。また図1-4例を紹介した際に触れた口縁部屈曲部内側に形成される溝は『燕下都』によると「戦国晩期」に編年される甗に多くみられる特徴だという（河北省文物研究所1996）。ただし、牧羊城の出土の甗は、胴部の形態を識ることが殆ど存在せず、全体形状からの比較は容易ではない。

4. 遼東半島先端部における戦国時代の考古遺跡・遺物

以上のように牧羊城出土の土器には戦国時代後半にまで遡る土器の存在を戦国時代燕の遺跡から出土した土器との比較検討を行うことにより、改めて確認することができた。牧羊城の年代に関しては中国側でも最近、劉俊勇氏がその築造時期が戦国時代後期であろうとの認識を示している（劉俊勇2003）。そこで牧羊城築造の歴史的な位置付けに関連する遼東半島青銅器文化終末期、そして燕進出期における遼東半島先端部の文化様相を考古遺跡・遺物から考察する。

遼東半島先端部の遼寧式銅劍及びその副葬墓の年代でその下限に位置づけられているのは、尹家村第12号墓とそこから出土した青銅短劍である（図6）（中国社会科学院考古研究所1996）。この墓からは青銅短劍のほか在地の夾砂陶、さらに燕系の豆が出土している。この豆は蓋が付属せず脚部が節状の形状をなすところに特徴がある。報告では春秋時代後半から戦国時代前期がその主たる年代である河北唐山賈各莊墓葬（安志敏1953）出土土器と第12号墓出土の燕系豆が類似するとの判断を示し、尹家村2期の年代を「戦国時代早期」としている。しかし、賈各莊墓葬出土の土器と尹家村第12号墓出土の燕系豆には相違も大きい。

一方、燕下都出土の土器のうち、さきにも牧羊城出土土器との比較で利用した郎井村10号作坊遺

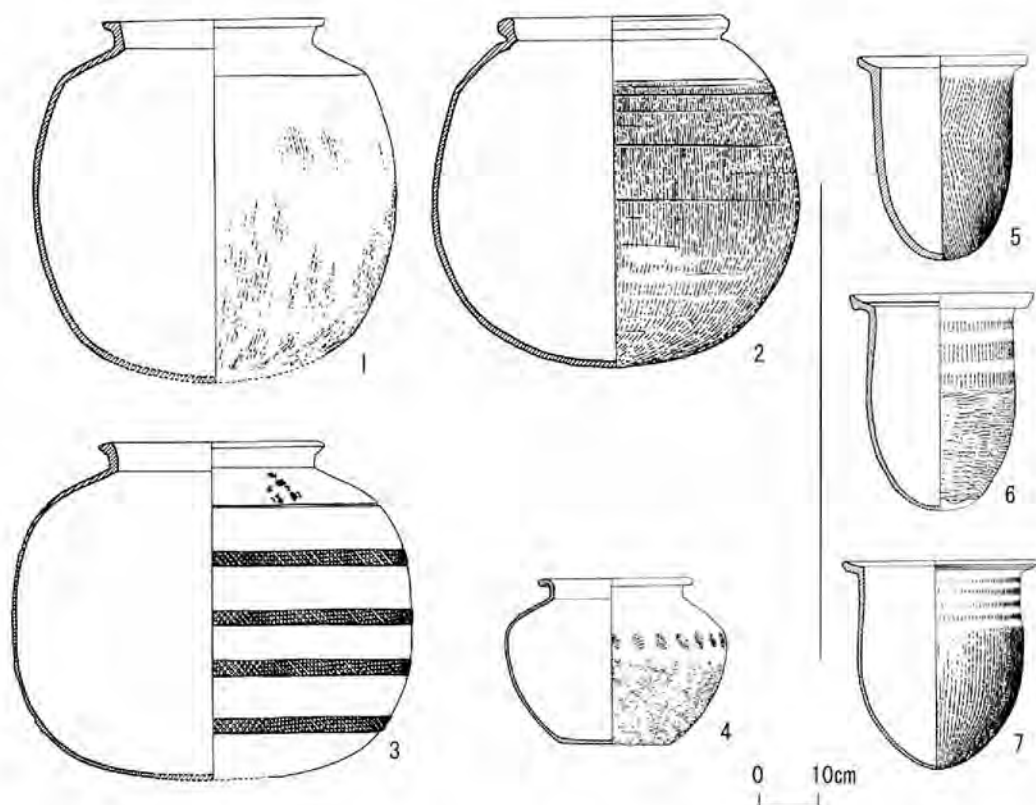


図5 遼寧尹家村遺跡出土 前漢時代土器

跡から出土している土器に上記燕系豆にきわめて形状や無蓋で節状の脚部という特徴等の類似する例が存在する(図6)(河北省文物研究所1996)。燕下都郎井村10号作坊遺跡で出土した豆は報告では「戦国中期」の年代が与えられており、筆者の編年観では燕下都郎井村10号作坊遺跡2期に相当し(石川2001)、筆者は現在この豆を含むこの時期の実年代を紀元前4世紀代後半頃であると考えている。

このような豆は燕下都の調査において出土した土器にも他に例をみず、尹家村第12号墓出土の燕系豆との比較に有効であり、この墓葬の時期を紀元前4世紀代に位置づける有力な根拠となりえよう。

このように尹家村2期墓葬の年代を考えたとき、牧羊城出土の燕系土器との年代関係は以下のようになるであろう。すでに考察した通り牧羊城出土の燕系土器は尹家村2期に併行する燕系の土器(燕下都郎井村10号作坊遺跡2期)に後続する、燕下都郎井村10号作坊遺跡3期の土器と比較対照することが可能な資料であった。そのことから牧羊城出土の「第二類土器」「第三類土器」は尹家村2期に後続する時期以後の遺物である可能性が高いと結論付けられる。なお、尹家村2期の在地土器の一器種である高杯は脚が大変高いという形態の特徴を有し、同様の形態の高杯は中国東北地区や朝鮮半島の広範囲に分布しており、その年代は鉄器が出現する直前段階という点で共通している。

ただ、今回分析することのできた牧羊城出土の燕系土器の数量は決して多くなく、戦国時代・燕の土器との比較に耐えうる資料も少ない。今後も牧羊城における燕系土器についてはさらに検討を深めていく必要がある。また、牧羊城の燕系土器の上限年代と牧羊城築城の時期に関連して、最後に一点問題点を指摘したい。今回の整理調査のなかで、牧羊城発掘当時の野帳を目にすることができた。このなかで『牧羊城』には報告されていない事実として牧羊城の城壁土層下遺構から「漢式黝色土器」が出土したとの記載があることを初めて知った。この遺構から出土した「漢式黝色土器」が具体的にいかなるものであったかはすでに現在では知る由もないが、燕系土器の時期以後のものであることは

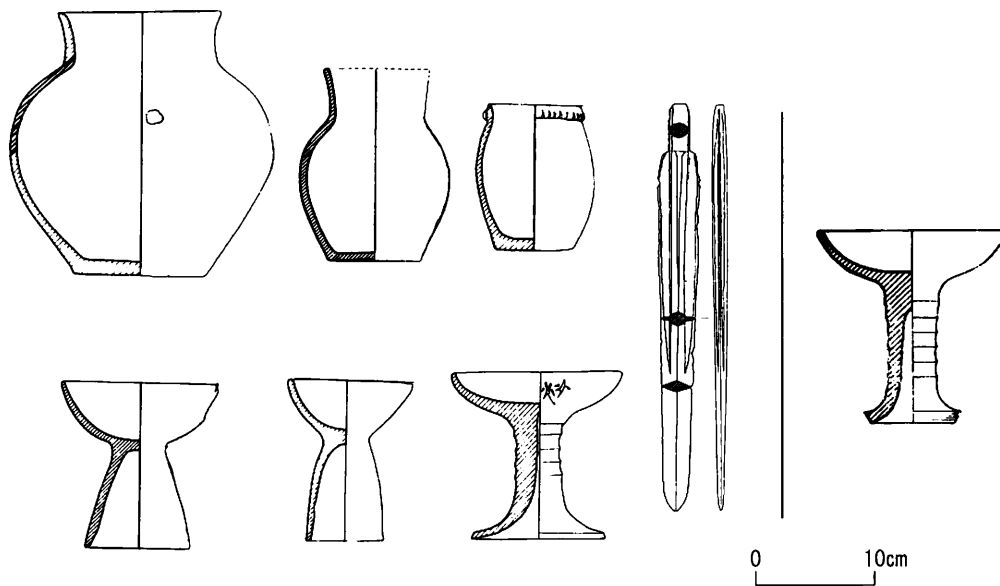


図6 尹家村12号墓（尹家村2期）の土器と青銅短剣（左）と燕下都10号作坊遺跡出土の豆（右）

確実であろう。このことから燕系土器の上限年代が城壁をともなう牧羊城築城時期と併行するものではないことがわかる。つまり、燕系土器を製作、使用した集団が城の築造以前にすでに流入してきていることをこの事実は示唆している。また同様に燕の城址において城壁下から燕の土器が出土した例は遼西にある邵集屯小荒地古城址でも報告されている（吉林大学考古学系・遼寧省文物考古研究所1997）。このことは、遼寧地域への燕とその文化の進出の実態を考えていく際に大変に重要な点であると考えられる。

いずれにしろ、尹家村2期と牧羊城出土燕系土器の時期は東北アジアにおける中原勢力とその文化の拡大、拡散期としての大きな画期をなすものであるといえよう。

参考文献

<中国語>

安志敏 1953「河北省唐山市賈各莊発掘報告」『考古学報』第6冊:57-116

河北省文物研究所 1996『燕下都』文物出版社

吉林大学考古学系・遼寧省文物考古研究所 1997「遼寧錦西市大部集屯小荒地秦漢古城址試掘簡報」『考古学集刊』11:130-153

劉俊勇 2003『大連考古研究』哈爾濱出版社

<日本語>

東亞考古學會 1931『東方考古學叢刊 甲種第二冊 牧羊城 南滿洲老鐵山麓漢及漢以前遺蹟』

石川 岳彦 2001「戦国期における燕の墓葬について」『東京大学大学院人文社会系研究科・文学部考古学研究室研究紀要』第16号:1-58

（註）牧羊城出土土器の墨書による注記は「E.I.3」や「N.IV.5」などのように記され、最初のアルフベットはトレ

ンチを次のローマ数字がトレンチ内の発掘区域を示すことがわかる。そして最後のアラビア数字はおそらく出土した深さを示すものと推測される。しかしその単位がメートルなのか尺なのかあるいは層位なのかは現在判然としない。しかし、層位であるにしろメートルであるにしろ、アラビア数字の数値が出土位置の深さに比例すると考えたとき、燕系の土器には「5」などのように大きい数字が注記される例が多く、燕系土器が比較的深い地点から出土していることを示す可能性が高い。

5 - 1. 瓦の分類

中村亜希子

陶瓦質の建築材料には主に軒丸瓦、丸瓦、平瓦、磚がある。これらの遺物は合わせて500点以上を数え、牧羊城から出土した遺物の中でも極めて数量が多い。以下では現在東京大学文学部考古学研究室に保管されている牧羊城出土瓦磚の大まかな分類を試みる。なお、各遺物の詳細については表1から表4の遺物観察表を参照されたい¹⁾。

(1) 軒丸瓦

すべて小破片であり、完形に復原できるものはない。旧報告書に記載された「楽央字半瓦当」、「長未字半瓦当」、「双馬画像半瓦当」は存在しなく、わずかに無紋半瓦当が数点と「蕨手文瓦当」とされた巻雲紋瓦当が確認された²⁾。瓦当紋様から無紋軒丸瓦・巻雲紋軒丸瓦の2類に分かれる。

第1類 11点。無紋の瓦当である(図1-1～7、写真図版1-1・2)。すべて小破片であり、半瓦当のみが確認された。色調は暗褐色を呈するものが多いが灰色のものもある。半瓦当の断面はヘラ切りが主流だが、1点のみ糸切りのもも存在する。丸瓦部分の残存状況は悪く、瓦当部分との接合のためにナデを施しているため凹面の当て具痕の観察は難しいが、無紋の当て具痕らしきものが確認されている。丸瓦部分の側面は円筒の外側からナイフ状工具によって分割截線を入れ乾燥後に割ったものと、側面全体がナイフ状工具によって切断されたものがある。凸面の状態は縄目の叩き具の痕跡を横ナデによって消しているものと、さらに強い横ナデを行うことによって蛇腹状の凸帯が確認されるものがある。なお、MY14-2(図1-1)は旧報告書では第一類土器の底部として紹介されたが、瓦当の分割截線が確認されたことから無紋の半瓦当であることが判明した。

第2類 約10点。旧報告書に「蕨手文瓦当」とされた巻雲紋瓦当である(図1-8～13、写真図版1-3～8)。色調はすべて灰色を呈する。小破片がほとんどだが1点のみ旧報告書に掲載されたものがある(図1-11)。瓦当中央は円の内部を網状に充填しており、外区は重線によって4つの扇形の区に分けられている。各区にはC字型巻雲が配され、その内部から重線及び中心の円網に向かって凸線が伸びている。周縁部ははっきりと隆起している。瓦当裏面には丸瓦の不要部分を糸切りによって切断した痕跡が確認された。丸瓦部分の凹面には麻点紋の当て具痕が確認されるものがある。

(2) 丸瓦

完形品はなくすべて破片もしくは部分的に欠損した資料である。凹面の状態から5類6型式に分類できる。

第1類A式 約27点。凹面に無紋の当て具痕が確認される(図2、写真図版2-1・2)。暗灰色や黒色に近い暗褐色など色調が黒めのものが目立つ。玉縁部分は長さ3cm以下で短く、全体的に薄手のものが多い。分割截線は外側からのものだけであり、凸面は縄目を横ナデによってナデ消している。燕下都から出土する戦国時代の丸瓦に近似のものが確認されている。

第1類B式 約59点。凹面はナデによる無紋である³⁾(図3・図4、写真図版2-3～3-1)。色調は灰色系のものが大半である。ナデは横方向⁴⁾のものが目立ち、その強さによっては蛇腹状になるものも存在する。玉縁部分の長さは様々であるがすべておよそ5cm以内である。凸面は縄目を横ナデや

沈線で消している。分割截線は内側からのものと外側からのものが確認された。

第2類 約25点。凹面には麻点紋の当て具痕が確認される(図5・図6-1、写真図版3-2～4)。麻点紋には大小様々あり、当て具の表面に小石が埋め込まれていたと思われる大型の麻点紋のものや、当て具の胎土にやや大きめの砂粒が多く混入したからかと思われる小型の麻点紋のものがある。基本的に色調は灰色である。凸面は縄目であり部分的に横ナデを施している。玉縁は5cm程のものが確認された。側面の分割截線は外側から施すものと内側から施すものがある。

第3類 8点。凹面には縄巻きの棒状の当て具痕が見られる(図6-2～5、写真図版4-1・2)。色調は灰色である。凸面は全体的に縄目の叩き具の痕跡が見られるが、玉縁付近の破片では全面的に横ナデを施している。側面は外側から分割截線を入れたものの他に全面をナイフ状工具で切断したものがある。

第4類 約2点。凹面に格子目の当て具痕が観察される(図7-1、写真図版4-3・4)。数量が非常に少なく、かつ当て具痕が確認される部位が玉縁の先端付近や端面近くということもあり、或いは補足の叩きを施した時の痕跡である等用途が限られていた可能性もある。灰色を呈し、凸面は縄目を横ナデによってナデ消している。側面の状態を確認できる資料は存在しない。

第5類 約17点。凹面には一面に布目痕が見られる(図7-2～7、写真図版5-1・2)。第4類までが叩き板当て具技法によって作られていたのに対し、第5類は模骨を用いた型作り(模骨法)によって製作されていたことを示す⁵。布目痕が玉縁部分まで連続して見られるため、玉縁部分も胴部と一体で模骨によって作られたことが見て取れる。凸面は全体的にナデによって縄目を消していることが多く、その上からさらに沈線を施したものもある。玉縁は4～5cmのものが主流である。側面は確認できるもののすべてが内側からの分割截線を施している。色調は灰色でやや黄色味があったものもあり、胎土は砂目である。焼成も甘く軟質のものが目立つ。

(3) 平瓦

すべて破片である。凹面の状態から5類7型式に分けられる。牧羊城出土平瓦については旧報告書において3類に分ける分類が行われたが、その中の1つは湾曲が強いこと等からおそらく丸瓦であることが窺われる。また、分類基準とされた凸面の状態は個体内での部分差が大きく、小さな破片を分類するには用いることができないので新しい分類を試みた。なお、瓦円筒を分割する際の分割截線はすべて円筒の内側から入れられていた。

第1類A式 約10点。凹面には無紋の当て具痕が確認される(図8-1・2、写真図版5-3・4)。凸面は全体的に縄目の叩き具の痕跡が見られ、数本の横ナデが施されているが蛇腹状になるほど強いものはない。色調は基本的に灰色だが、若干数褐色系のもも存在する。丸瓦第1類A式とともに燕下都出土のものに非常によく似ている。

第1類B式 約212点。凹面はナデによって無紋になっている(図8-3～図11-3、写真図版6-1～3)。圧倒的に数量が多い。凸面胴部中ほどでは蛇腹状の凸帯になる強い横ナデを施しているものが多く、そこに対応する凹面側もやや強い横ナデが施される場合が多い。蛇腹状の凸帯は次第に沈線へと取って代わることがあり、部位によって状態に変化が見られる。端面はナデによって丸みを帯びているものの他に、縄叩きを施しているものもある。中に1点旧報告書図版23-1に第一類土器として紹介されたものがあるが、分割截線があることから瓦であることが判明した(写真図版6-1)。色調は灰色系が多いが褐色系も一定数存在する。

第2類 約66点。凹面には麻点紋の当て具痕が確認される(図11-4～図12-6、写真図版6-4・

7-1)。麻点紋の種類は丸瓦の場合と同じく大小様々ある。凸面は蛇腹状の凸帯があるものも存在する。端面は凸面と同じ縄叩きを施すものとナデを施すものが存在する。色調は圧倒的に灰色系のものが多い。

第3類 1点。凹面に縄目痕が見られるが丸瓦第3類とはやや異質な感がある(図13-1、写真図版7-2)。凸面は一面に叩きの縄目痕が見られる。灰色を呈し、焼きもしっかりとしている。

第4類 約24点。凹面の当て具痕は格子目である(図13-2～図14-5、写真図版7-3～5)。格子目の大きさには大小様々あり、中には1個体中に大小の格子目が共存しているもの(MY24-12)もある。凸面は縄目の上から横ナデを施しているものが多く、部分的に等間隔の沈線や蛇腹状の凸帯を持つ破片もある。他に比べて黄褐色を呈し軟質のもの割合が高い。

第5類A式 6点。凹面には布目痕が見られ模骨法で作られたことが分かる(図15-1～5、写真図版8-1・2)。上からナデが施され布目痕が消されている場合もあった。凸面の状態は縄目の上から横ナデや沈線を施しているもの、一面に縄目が広がるもの、蛇腹状に強くナデが施されるものなど様々である。色調もまちまちである。

第5類B式 2点。凹面は布目痕の上に格子目の当て具痕が見られる(図15-6・7、写真図版8-3・4)。おそらくは模骨法がもたらされたばかりのもので、模骨によって成形した後に叩き板と当て具でさらに補足の叩きしめを行ったことによるものだろうか。凸面側は2点とも丹念にナデが施されている。色調はどちらも灰色で焼きはしっかりとしている。

(4) 磚

すべて破片である。基本的に旧報告書において報告されたものと同類のものしか認められなかった為、旧報告書の分類に従う。

第1類 表面には交差した凸帯が表され、一端に幅3cm程の凸縁が置かれている(図16-1～3、写真図版9-1・2)。裏面は無紋。出土した磚の大半を占め、20点が確認された。総じて灰色を呈し、胎土は非常に砂目で細砂・細石を多量に含む。焼成は甘く軟質で、気泡が多く認められる。

第2類 表面は第1類と同じ凸帯による紋様だが、裏面に縄巻きの叩き板による痕跡が認められる(図16-4・5、写真図版9-3)。4点存在した。特徴は第1類と大差がないが、やや黒味を帯びた色調のものが目立ち、胎土中の大きな気泡は見られない。表面も第1類に比べると凹凸が少なく滑らかである。

第3類 紋様がない無紋の磚(図16-6・7、写真図版9-4・5)。しかし、細分すれば片面に縄目の叩き板の痕跡を持つものと持たないものがある。3点見られた。胎土や色調等は前者が第2類、後者が第1類に近い傾向がある。

(5) 小結

瓦磚の類は他の遺物に比べると発掘当時の注記によって出土地点が分かるものがほとんど存在しない。磚に関しては旧報告書の記載等からほとんどが第2層以上で出土したことが伺われるが、瓦、特に丸瓦や平瓦の出土層位に関してはほとんど記録が残っていない。よってここでは製作技法等を考察するに止まった。

上記のように観察を行うことによって牧羊城から出土した丸瓦と平瓦では用いた当て具に大差が見られないことが分かった。しかし、各型式の全体に占める割合を考えると若干の傾向が見られる。まず、平瓦は圧倒的の大多数がナデによって当て具の痕跡が消された第1類B式であるということが挙げら

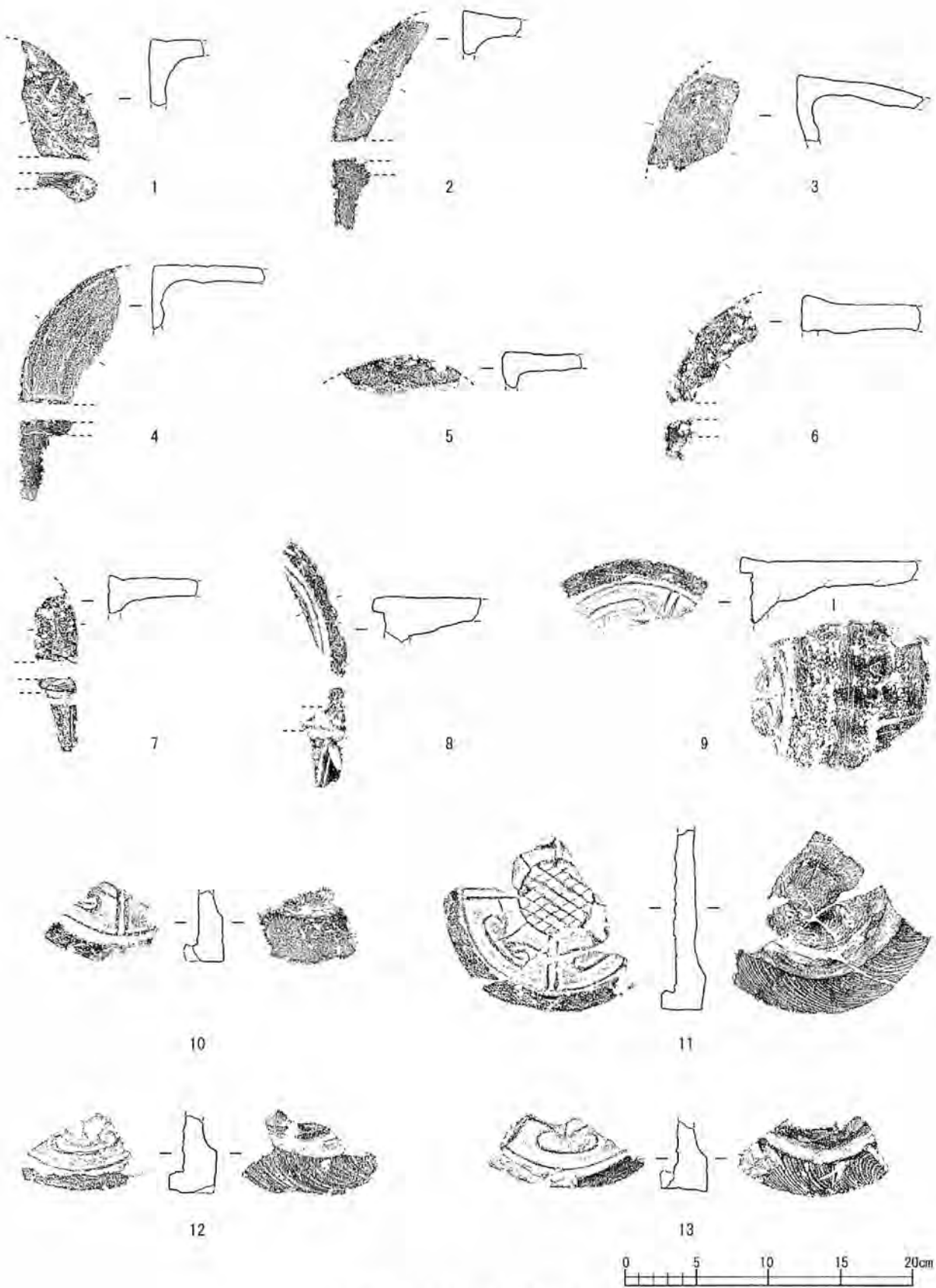
れる。丸瓦も第1類B式が大多数を占めてはいるものの、その全体に占める比は平瓦には及ばない。これにはおそらく平瓦円筒は丸瓦円筒に比べて径が大きく凹面にナデを施して調整を行うのが容易であること、そして屋根に葺かれる際に平瓦は凹面側を上にして葺かれること等が関係しているのではないかと思われる。次に、第4類が平瓦においては一定の割合を占めているのに対し、丸瓦はごく少数に止まっていることも指摘できる。格子目の当て具は平瓦第5類B式の存在から模骨法が取り入れられた後にも用いられていたということが明らかだ。このことは丸瓦では第5類がある程度まとまって見られるのに対し、平瓦は第5類の割合が低いということも関係するのではないのだろうか。おそらく模骨法の普及は丸瓦の方が平瓦よりも早く、一方で平瓦は模骨法を導入した後も当て具を用いて補足の叩きを施していたのだろう。この叩き板当て具技法から模骨法への過渡期に使用されていた当て具が第4類の格子目の当て具だということが推測される。

なお、丸瓦と平瓦の製作技法の違いは瓦円筒を分割する際の分割截線にも見られる。瓦円筒の径が小さな丸瓦においては分割截線が内側から入れられたものと外側から入れられたものがあるのに対し、瓦円筒の径が大きな平瓦はすべて分割截線が円筒の内側、即ち凹面側に認められたのである。さらに丸瓦の分割截線が入れられた面と凹面の状態にはいくらか関係があるようだ。つまり、丸瓦第1類においては分割截線がすべて瓦円筒の外側から入れられていたのに対し、模骨法が導入された後の丸瓦第5類はすべて分割截線が内側に認められるのである。模骨法の瓦が叩き板当て具技法の瓦に対して新しいものであるということは明らかである。さらに第1類は凸面や玉縁の形態等の特徴も含め燕下都から出土した戦国後期の丸瓦に非常によく似ていることから最も古手のものだということが窺われる。このことから丸瓦の分割截線ははじめ円筒の外側から入れられていたが、次第に内側から入れるものに淘汰されて行き、模骨法が普及した頃にはすべてが内側から入れられるようになったことが考えられる。

牧羊城出土の瓦はほとんどが破片資料であるため、その全体像については不明な点が多い。しかし、ここでは各製作技法の特徴など一部を明らかにできたと思う。それぞれの瓦の年代に関しては「5-2. 瓦から見た牧羊城の位置づけ」で詳述する。

注

- 1) 表1～4の観察表における各数値の単位はcmであり、「胎土」の項目の「泥」・「砂」はそれぞれ「泥質」・「砂質」を示す。
- 2) 「楽央字半瓦当」は戦前の関東庁博物館だった現在の旅順博物館に收藏されている。谷豊信氏によると「楽央字半瓦当」の瓦当断面には糸切り痕が確認されたという。
- 3) 瓦の凹面は部分的もしくは全体的にナデが施されることが多く、破片によっては当て具を特定することができないことが多い。第1類B式もすべて完形品ではないため、これらのナデが部分的であった可能性は排除できない。そのためこれらには第1類B式以外のすべての型式の瓦が含まれる可能性がある。型式分類としてはやや妥当性に欠けるが数量の関係からナデによる無紋として1型式を設定した。
- 4) この場合の「横」とは瓦円筒を立てた状態での横方向を指す。
- 5) 第1類B式に関しては模骨法で作られた可能性をすべて排除できるわけではないが、第5類丸瓦に凹面をナデ消したものが存在しないこと等からおそらくほとんどが叩き板当て具技法によって作られたことが窺われる。



第1類 1:MY14-2 2:MY21-9 3:MY23-56 4:MY23-63 5:MY33-50 6:MY38-5 7:MY33-53
 第2類 8:MY23-62 9:MY38-1 10:MY38-3 11:MY38-4-11 12:MY38-6 13:MY38-8

图1 軒丸瓦 縮尺 1/4

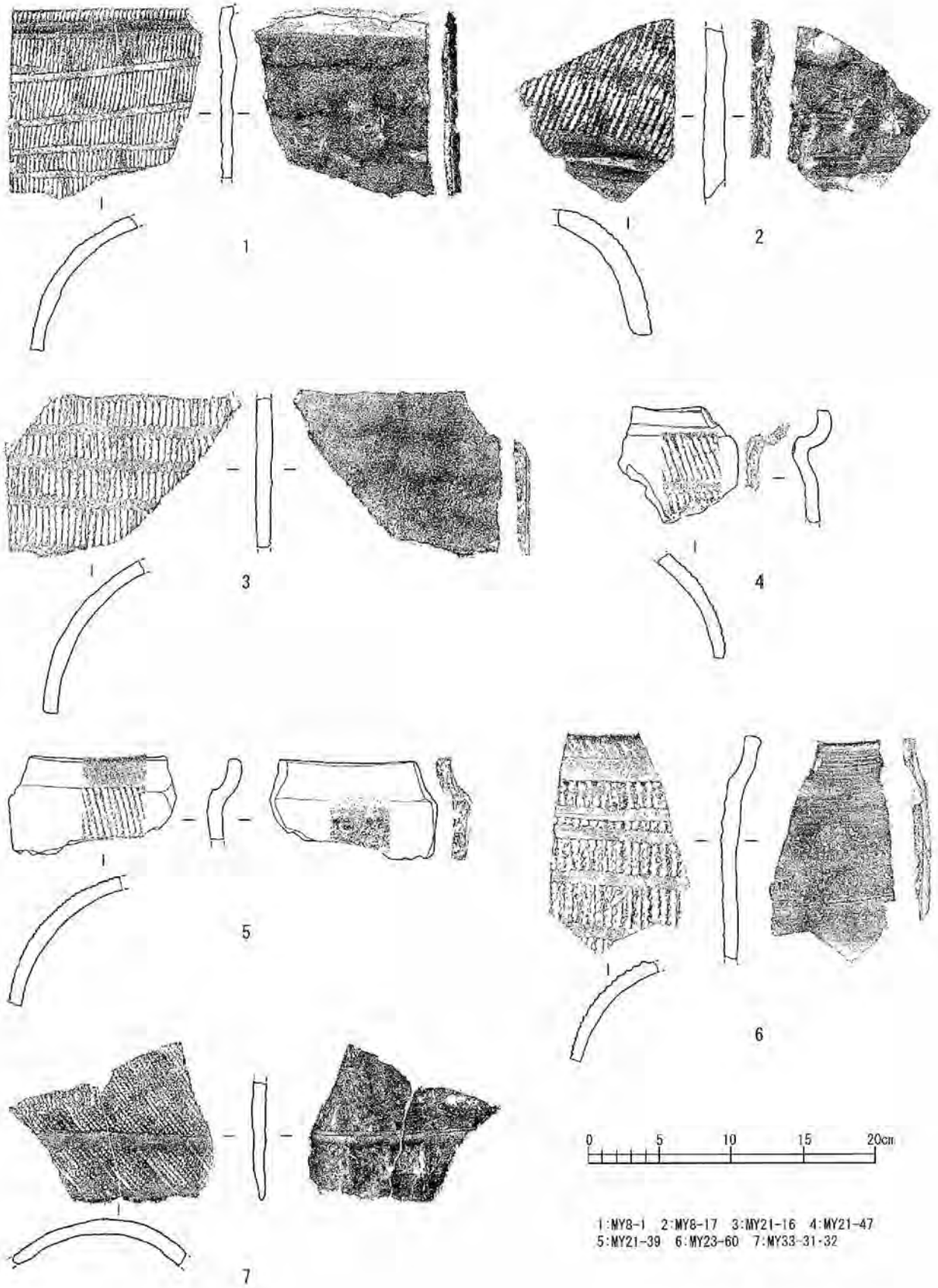


图2 丸瓦第1類A式 縮尺1/4

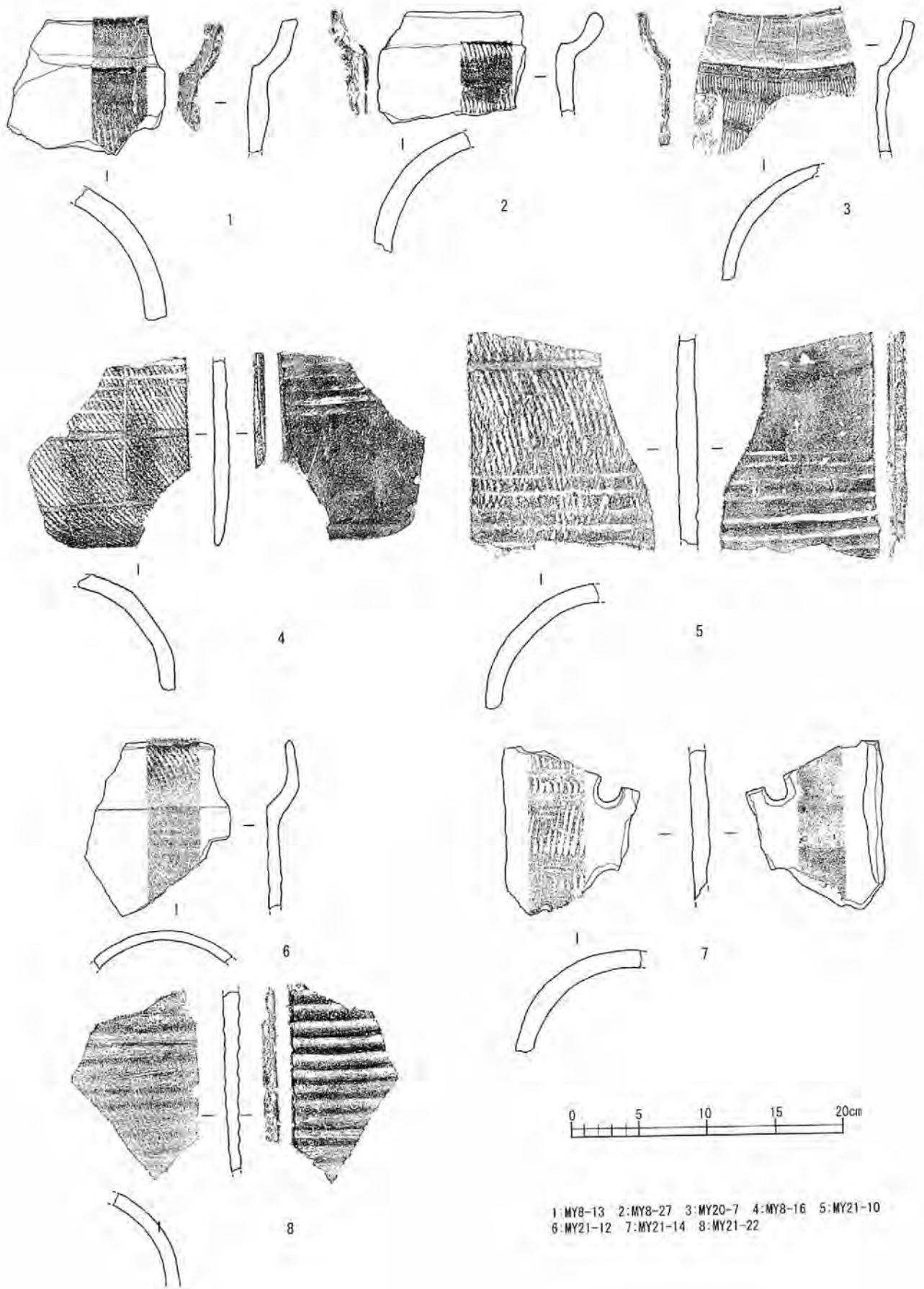


图3 丸瓦第1類B式 縮尺 1/4

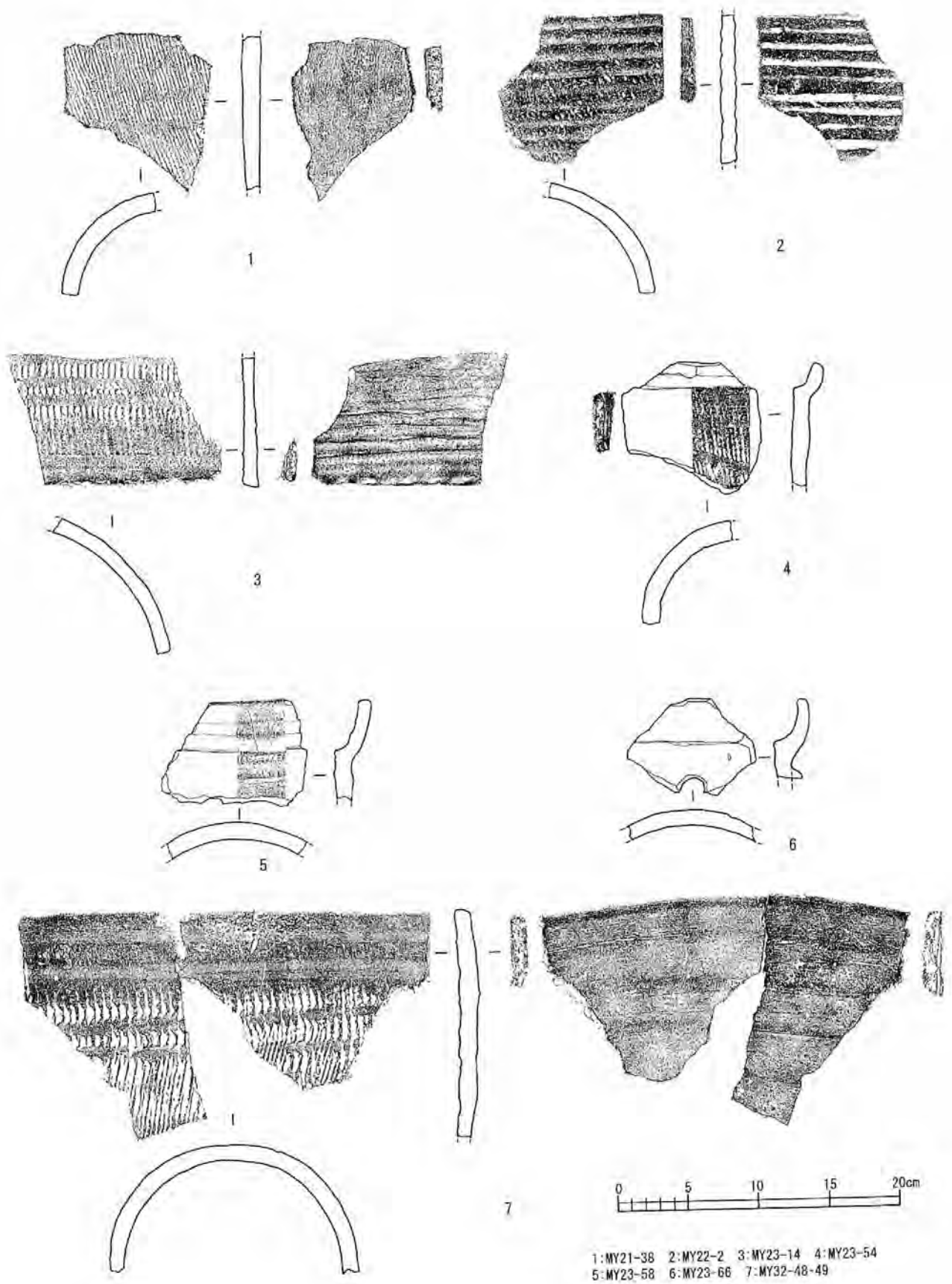


图4 丸瓦第1類B式 縮尺 1/4

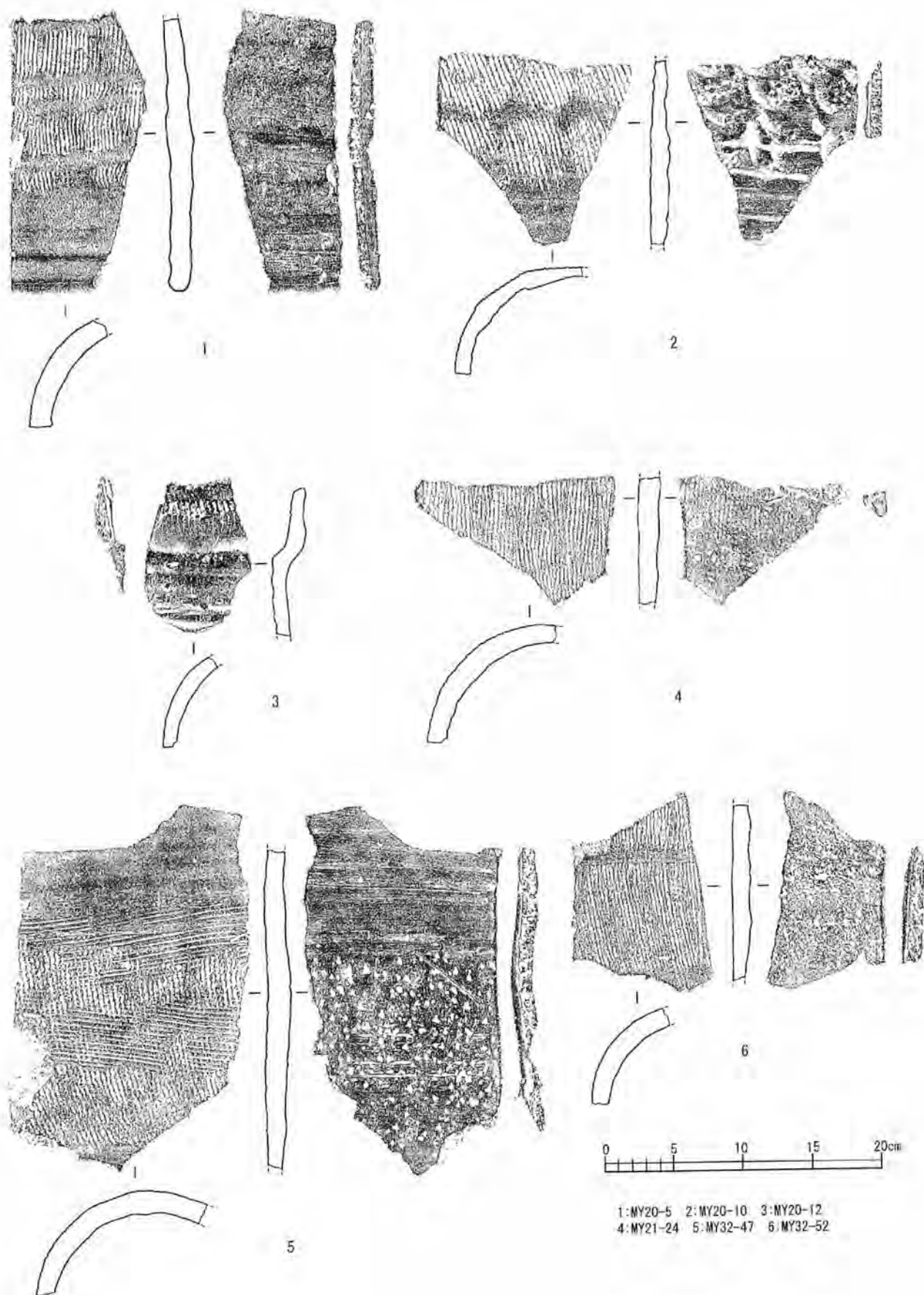


图5 丸瓦第2類 縮尺 1/4

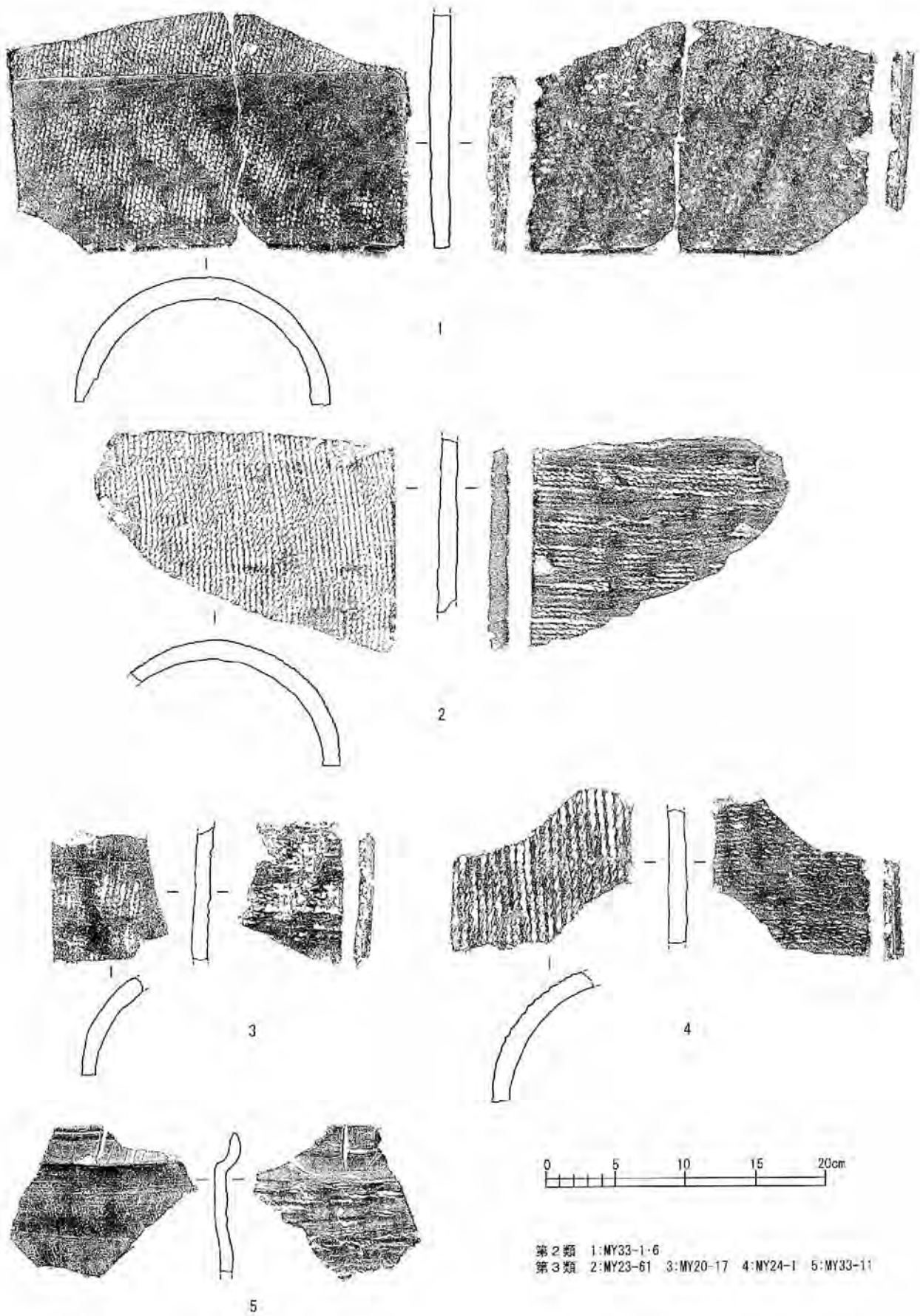


图6 丸瓦第2類・3類 縮尺1/4

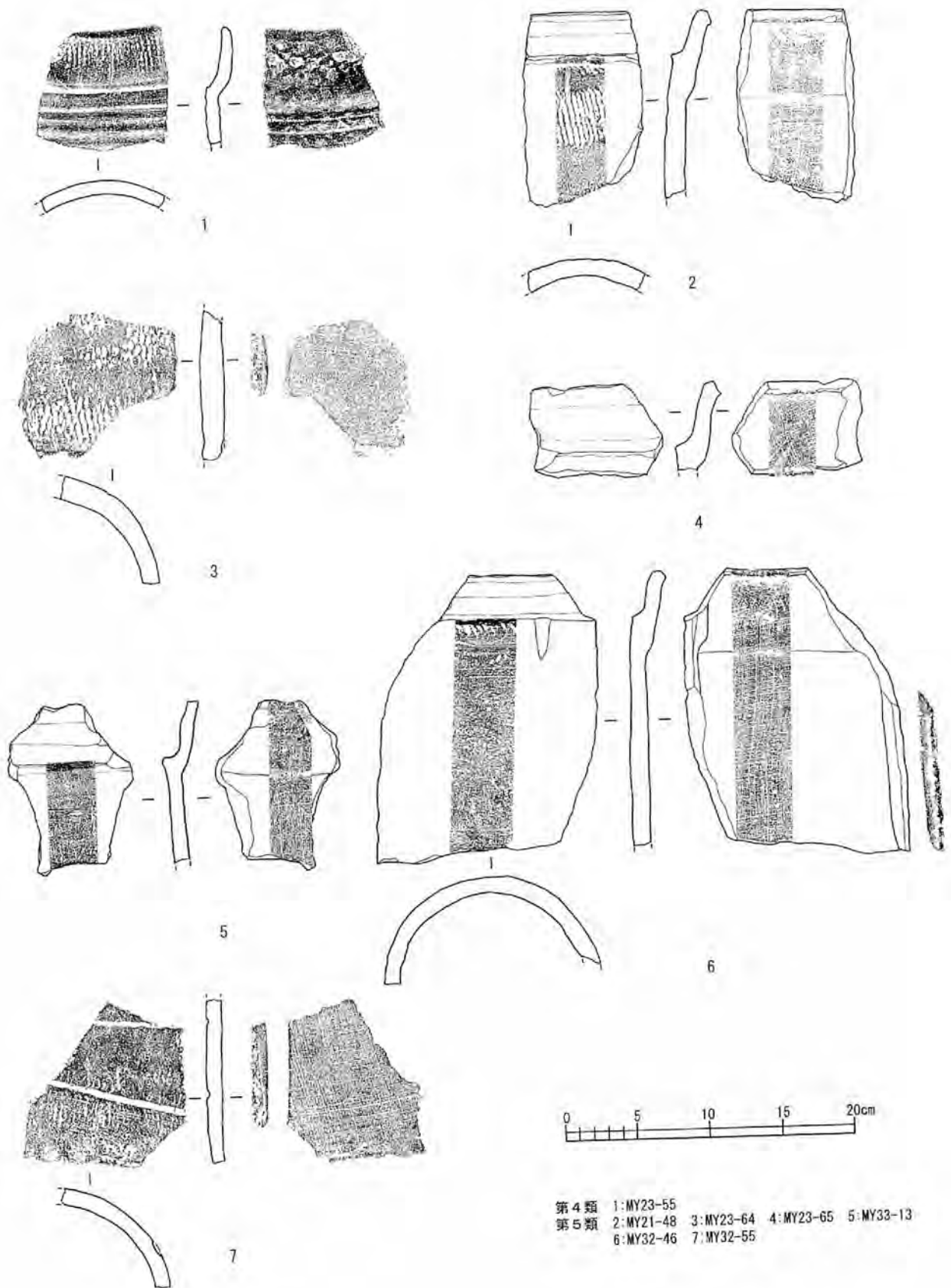


图7 丸瓦第4類・5類 縮尺 1/4

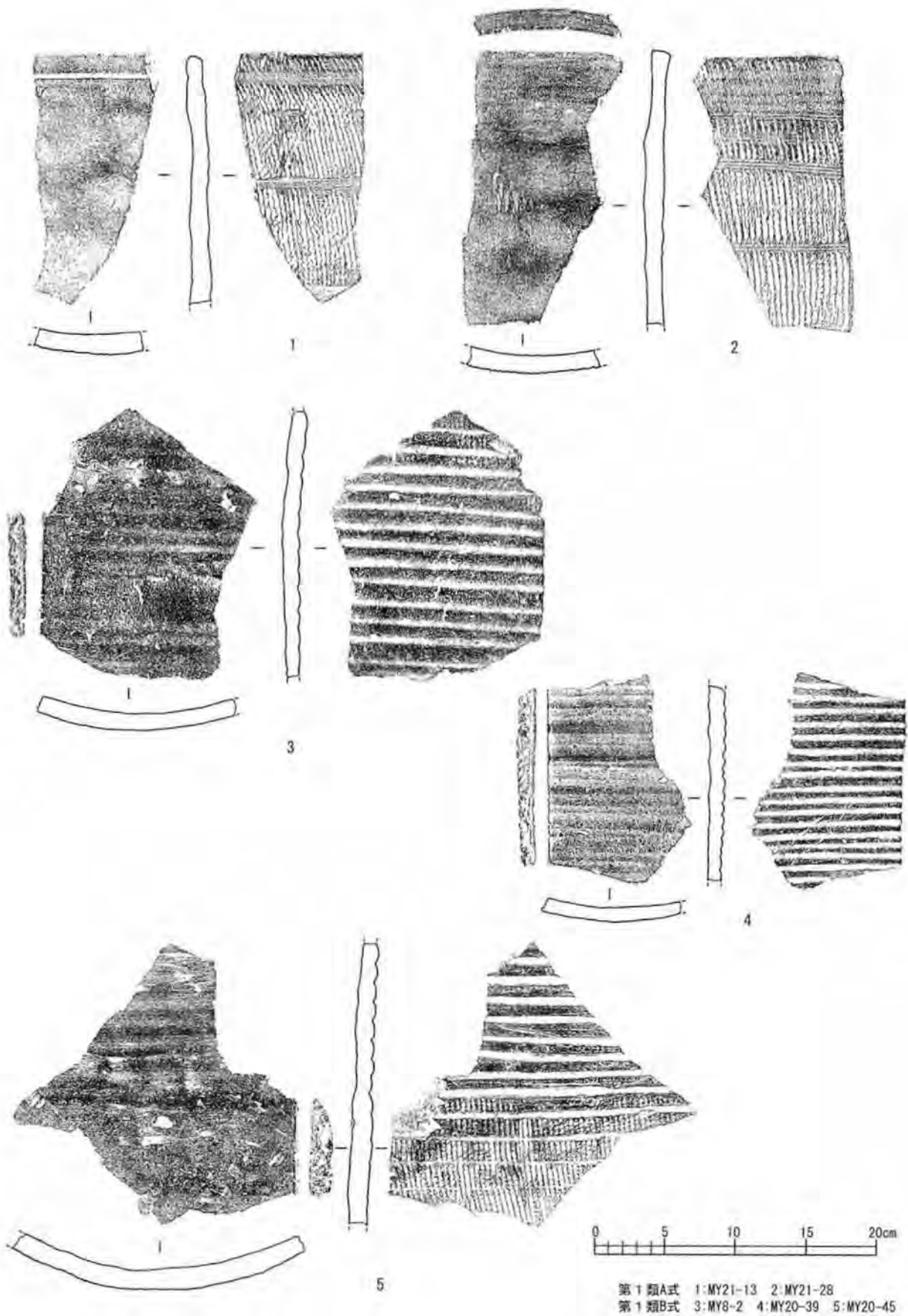
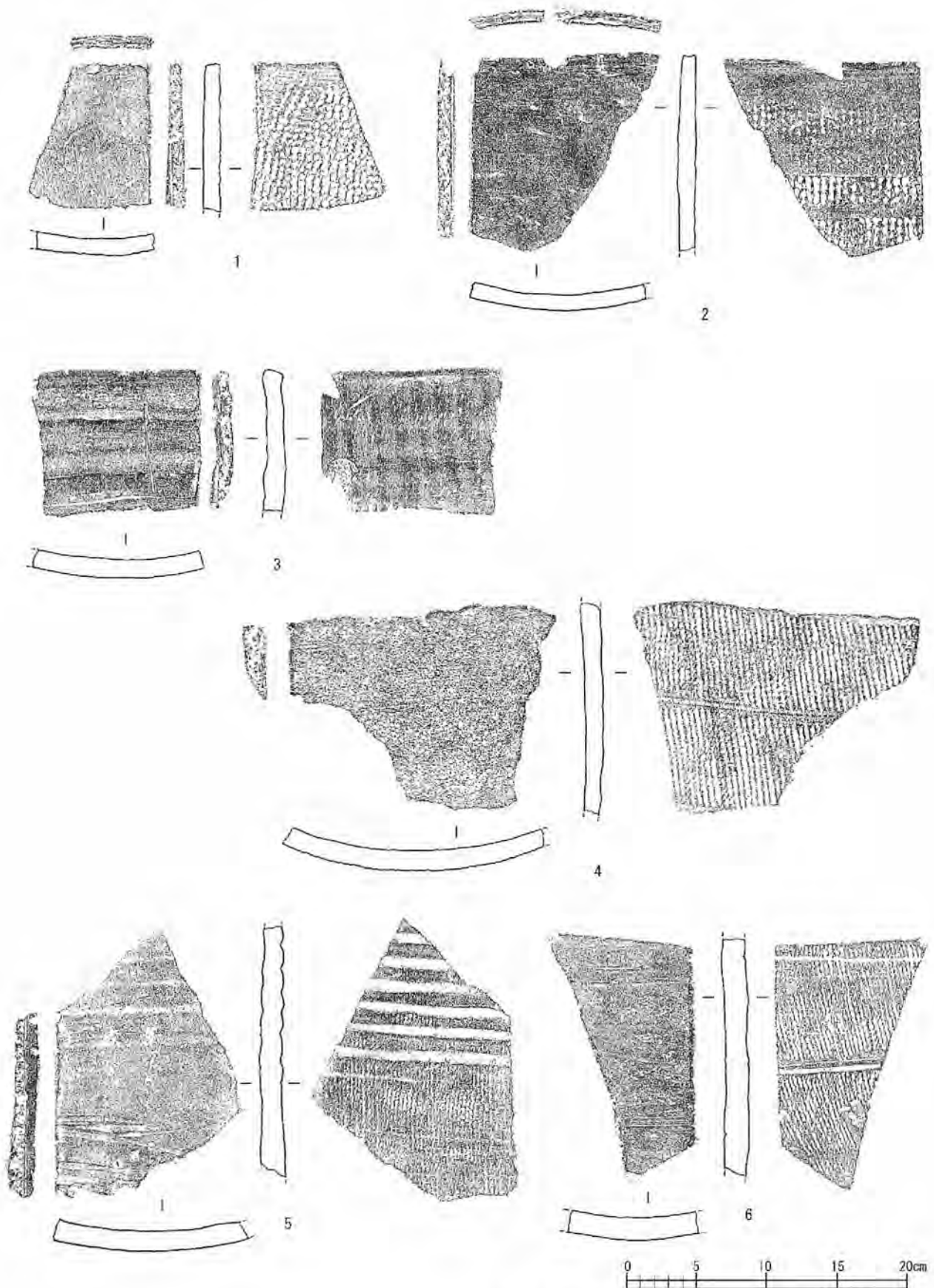


图8 平瓦第1類A・B式 縮尺 1/4



1:MY21-34 2:MY22-10 3:MY22-11 4:MY22-20 5:MY23-2 6:MY23-3

图9 平瓦第1類B式 縮尺 1/4

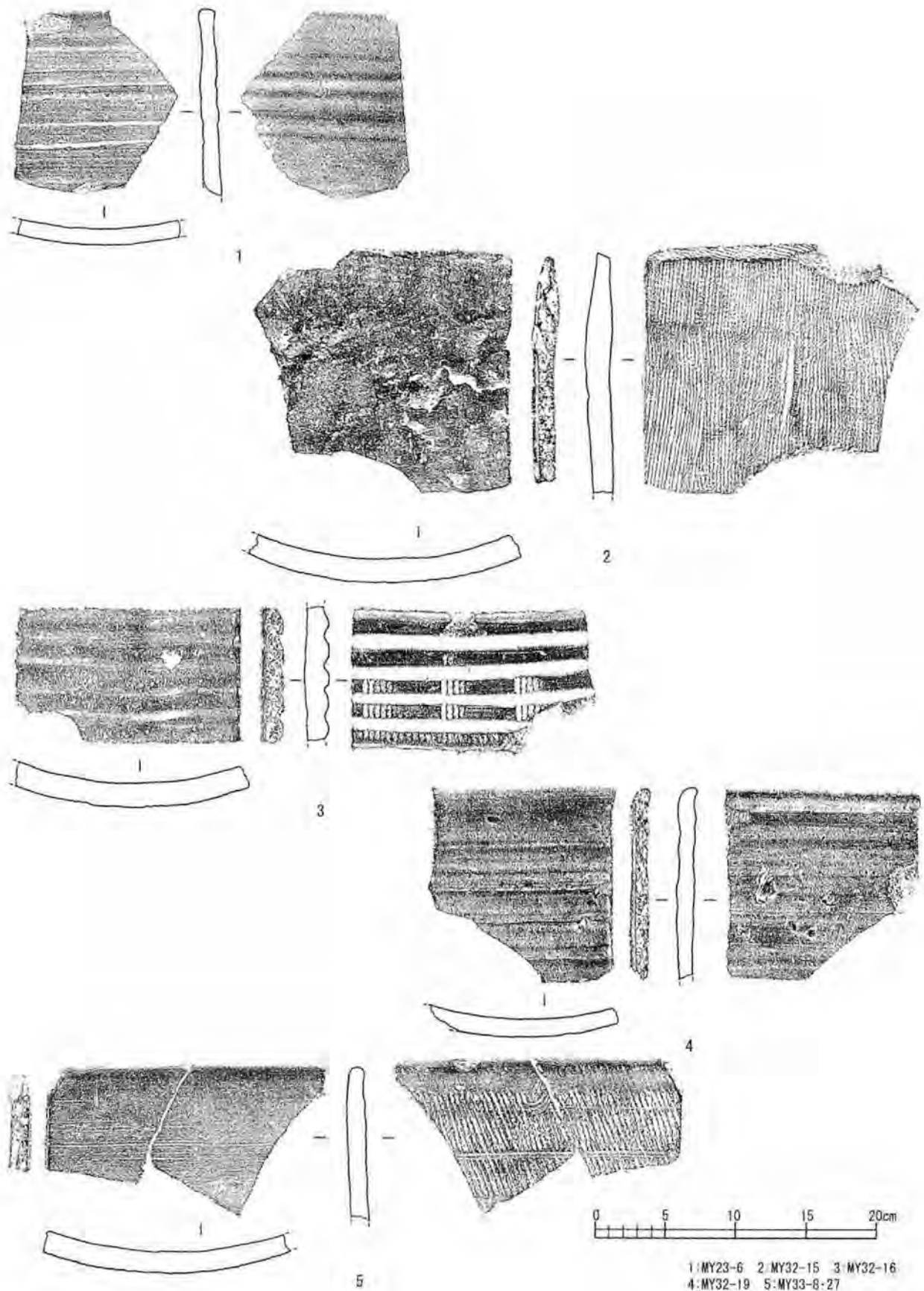


图10 平瓦第1類B式 縮尺1/4

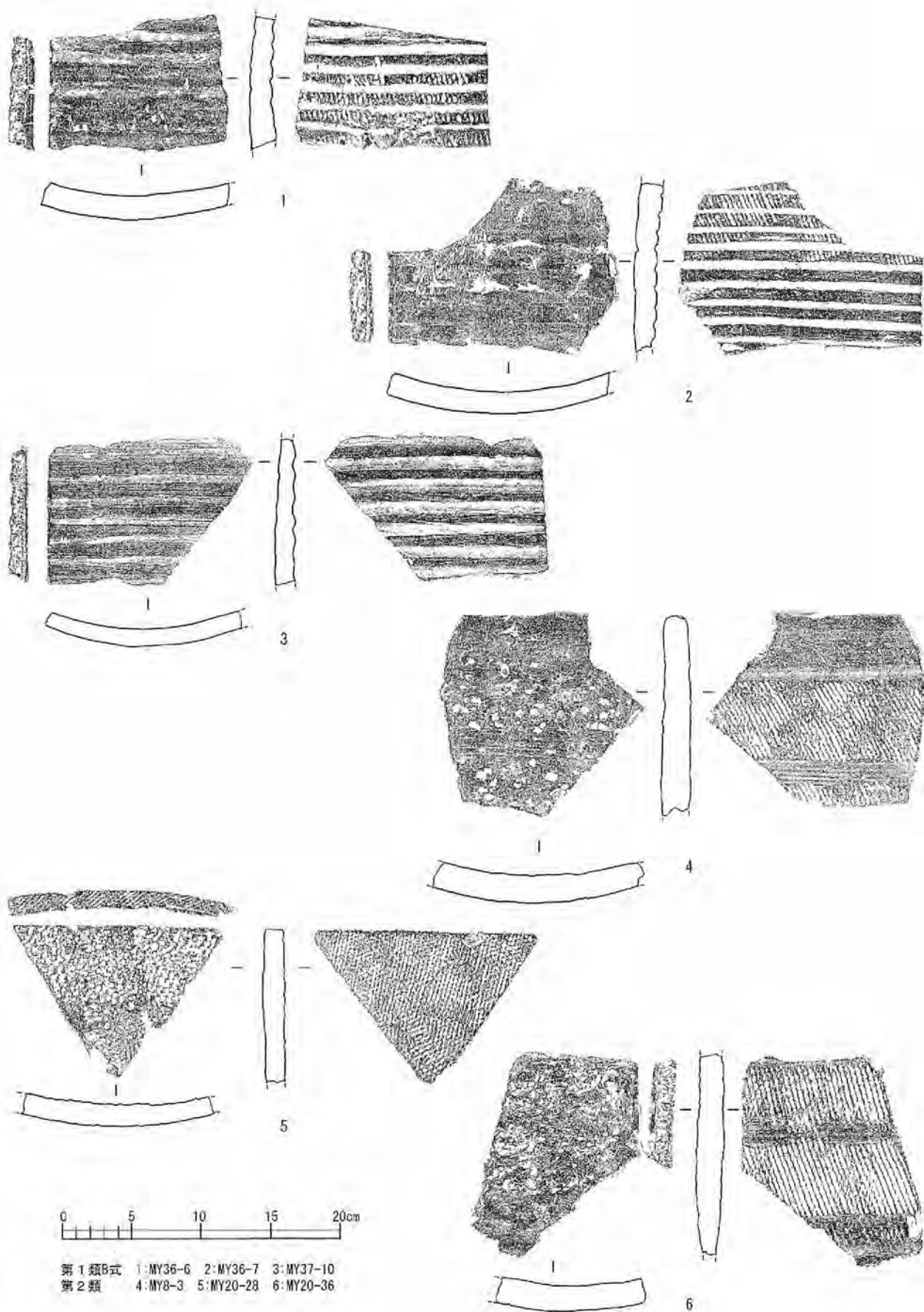


图 11 平瓦第 1 類 B 式 · 第 2 類 縮尺 1/4

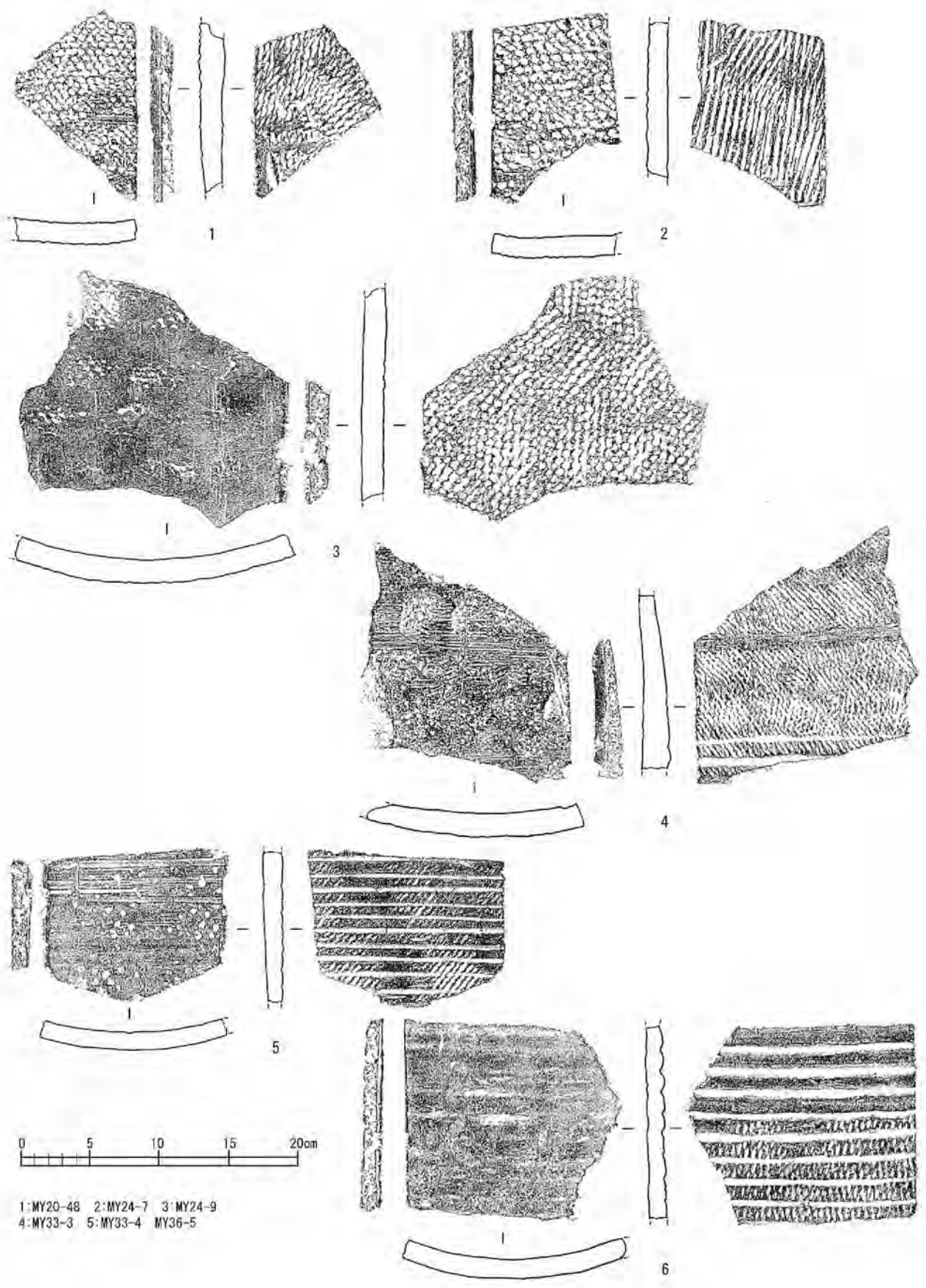
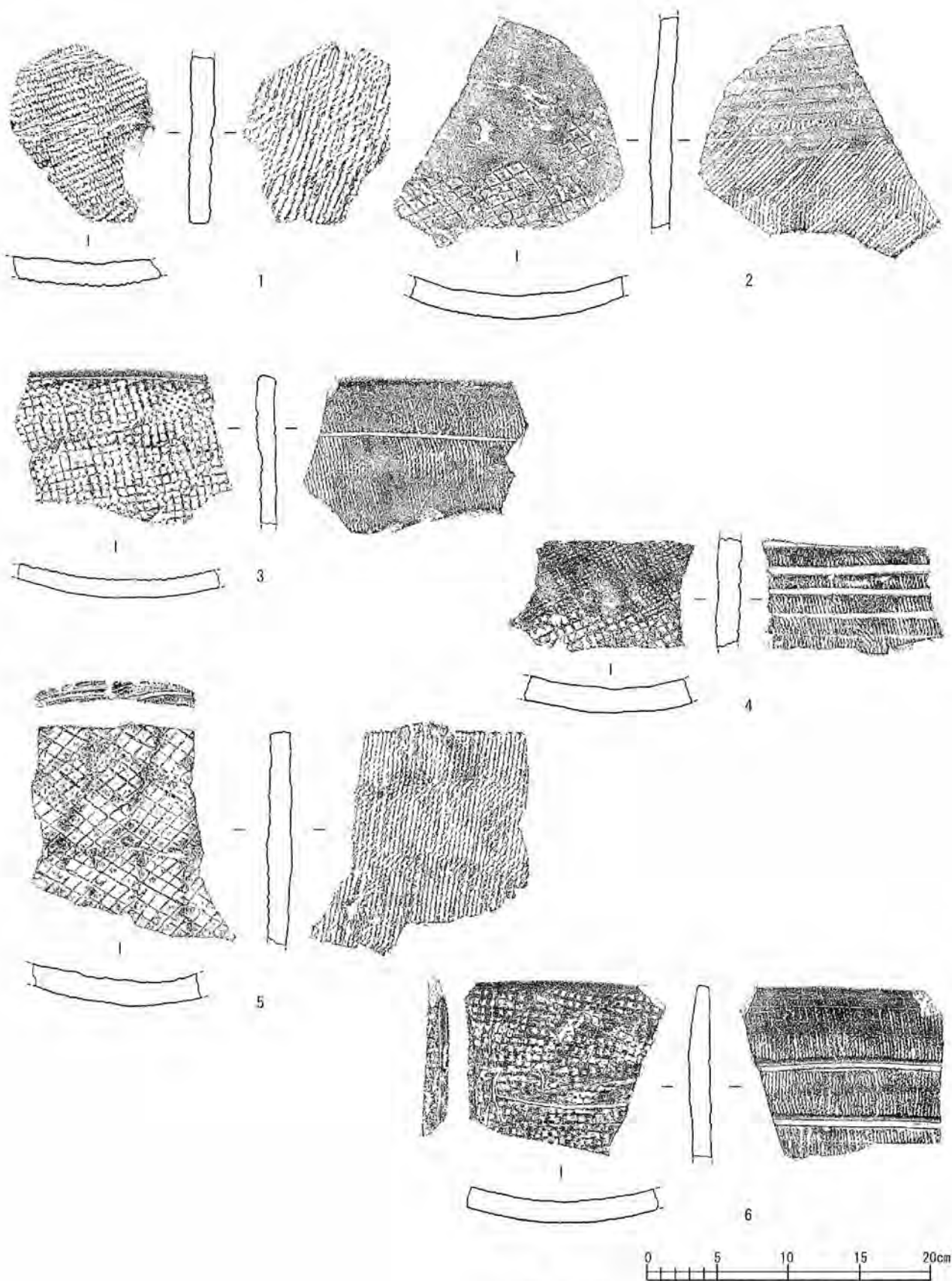
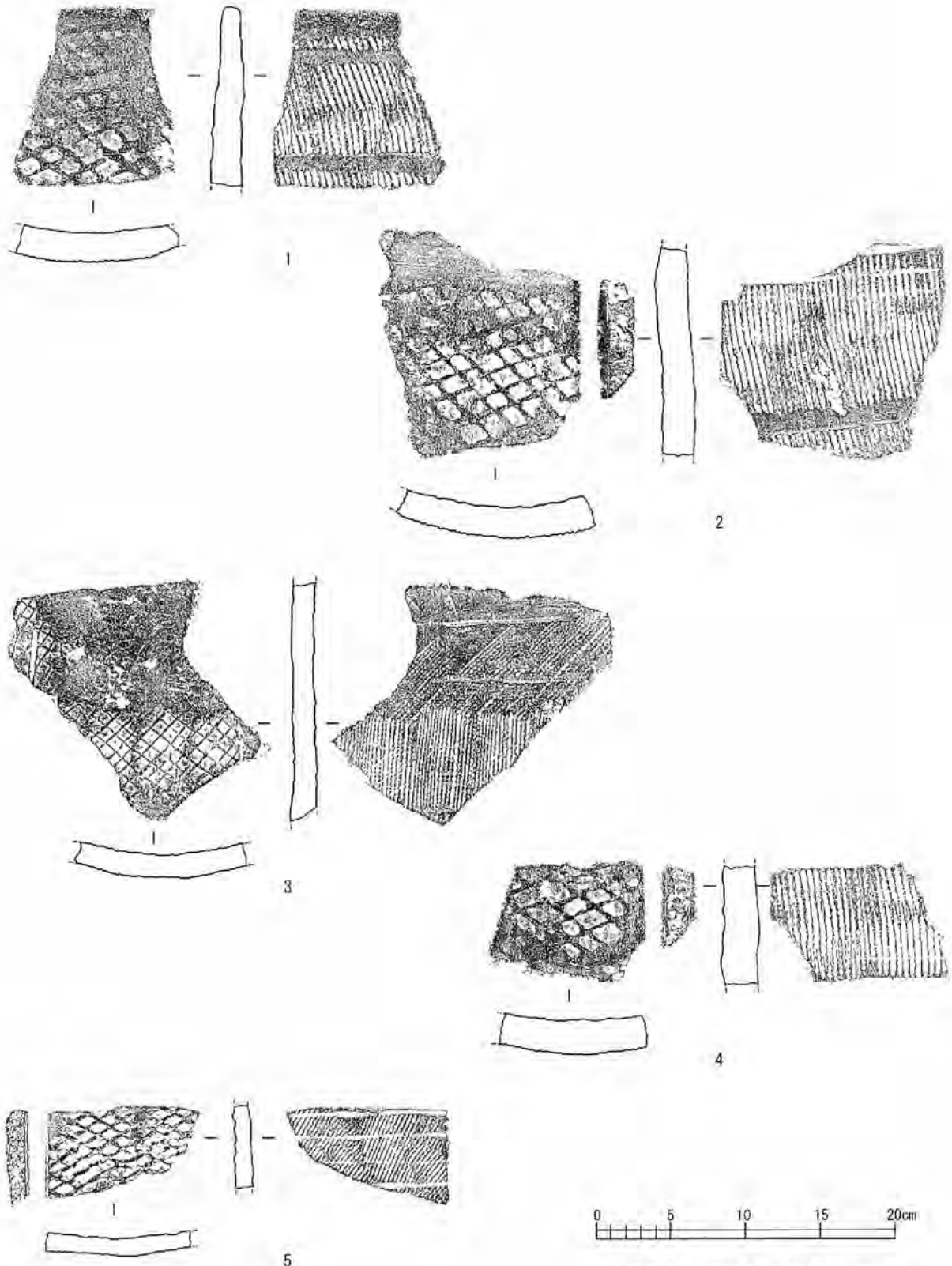


图12 平瓦第2類 縮尺 1/4



第3類 1:MY33-21
 第4類 2:MY21-26 3:MY23-5 4:MY24-12 5:MY24-14 6:MY24-15

圖13 平瓦第3類・第4類 縮尺1/4



1:MY32-21 2:MY33-2 3:MY33-5 4:MY33-19
5:MY38-10

图 14 平瓦第 4 類 縮尺 1/4

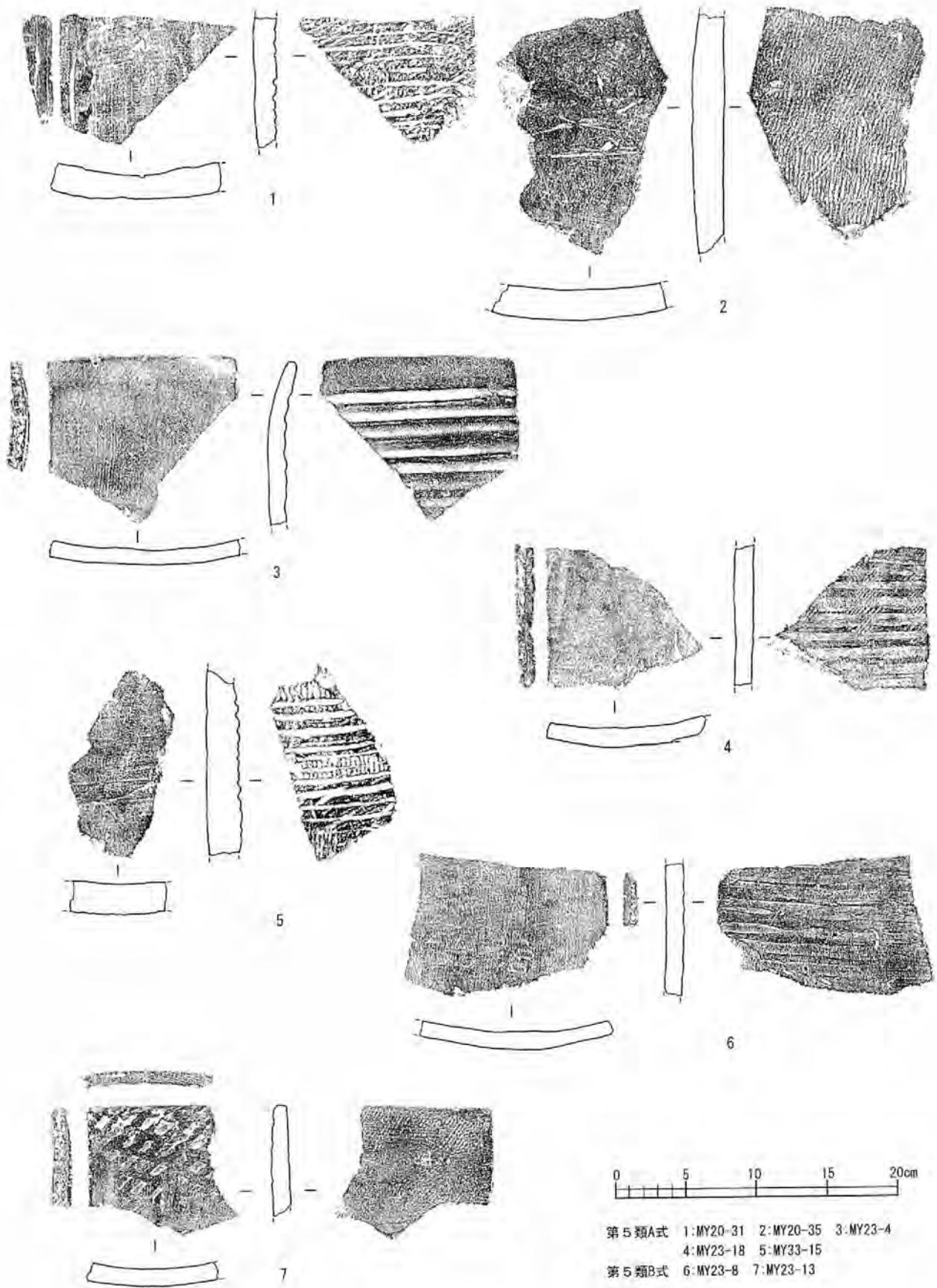


圖 15 平瓦第5類A・B式 縮尺 1/4

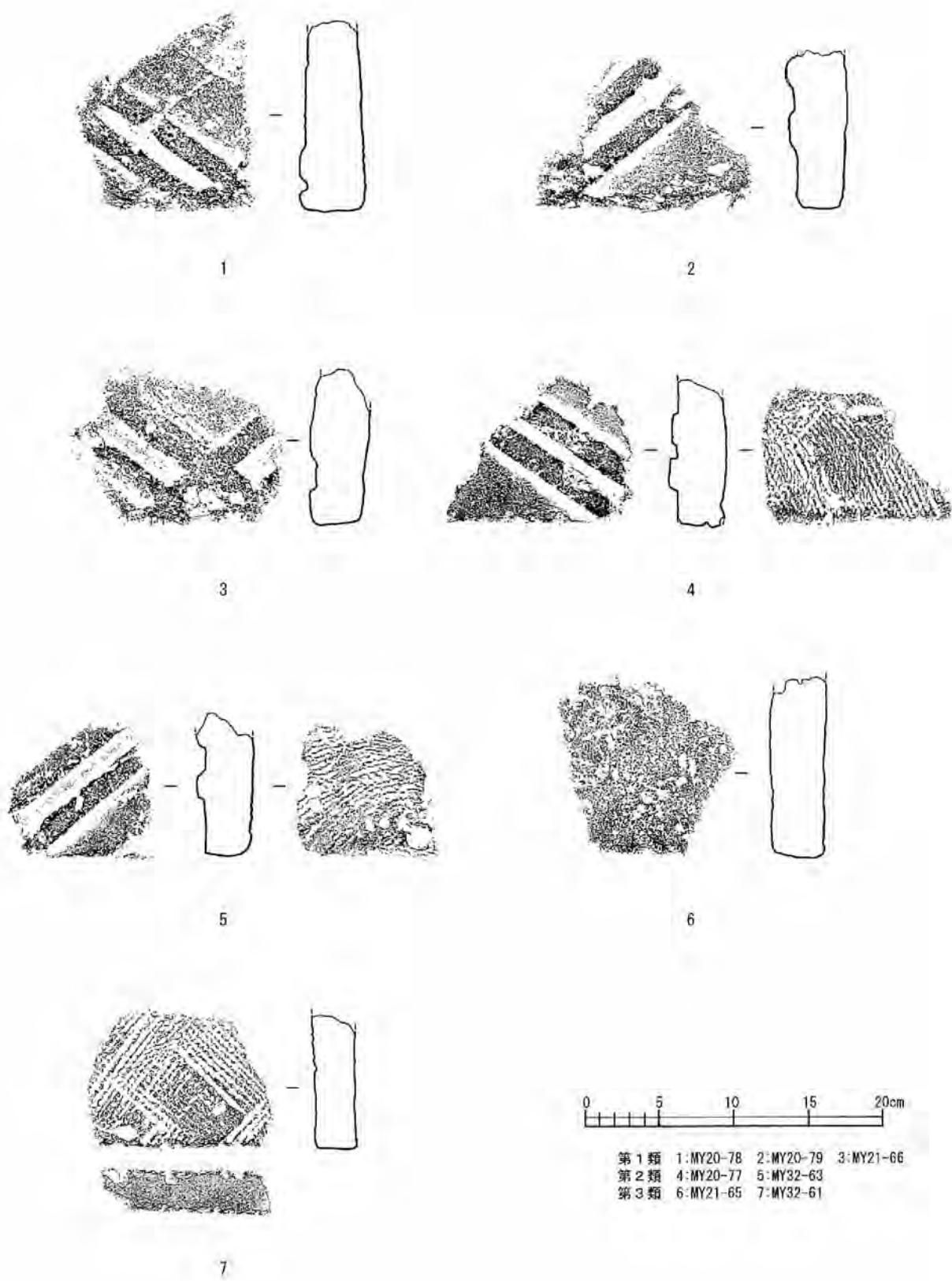


图 16 磚 縮尺 1/4



1



2



3



4



5



6



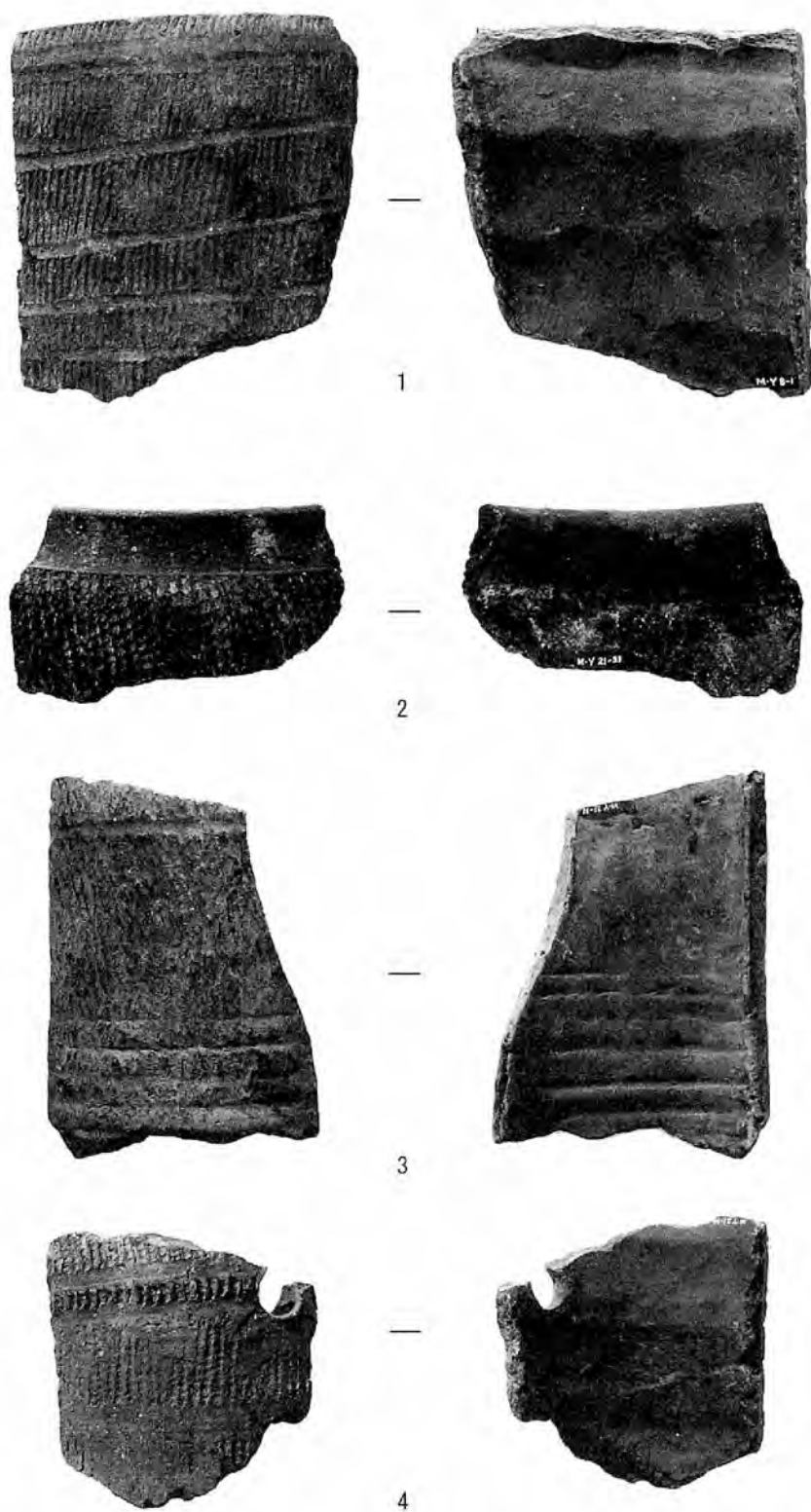
7



8

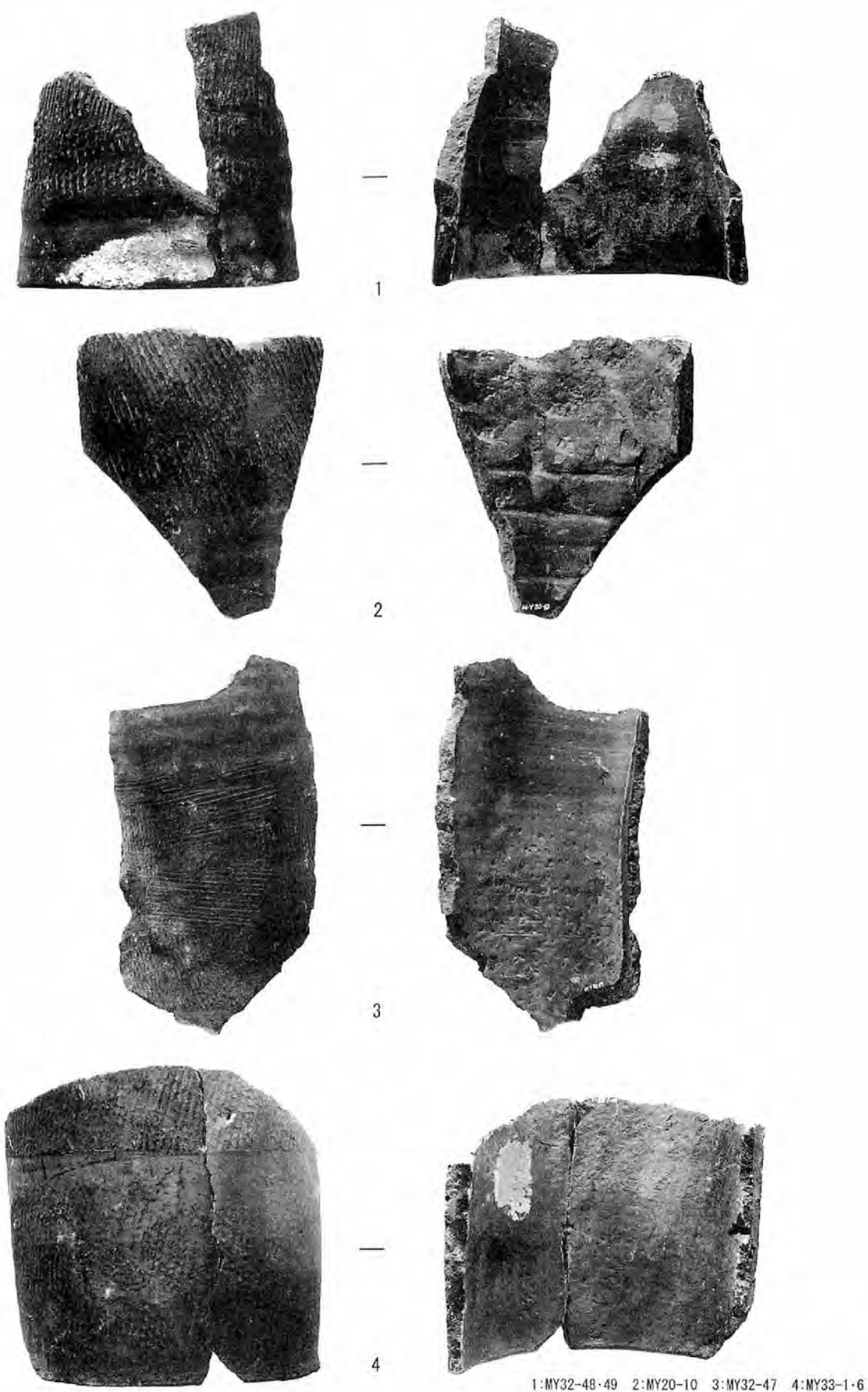
1:MY23-63 2:MY23-56 3:4:MY38-1
5:MY38-3 6:MY38-4-11 7:MY38-6 8:MY38-8

图版1 軒丸瓦



1: MY8-1 2: MY21-39 3: MY21-10 4: MY21-14

图版 2 丸瓦第 1 类 A·B 式



图版3 丸瓦第1類B式·第2類



1



2



3



4

1: MY23-61 2: MY33-11 3: MY23-55 4: MY32-60

图版 4 丸瓦第 3 类·第 4 类



1



2



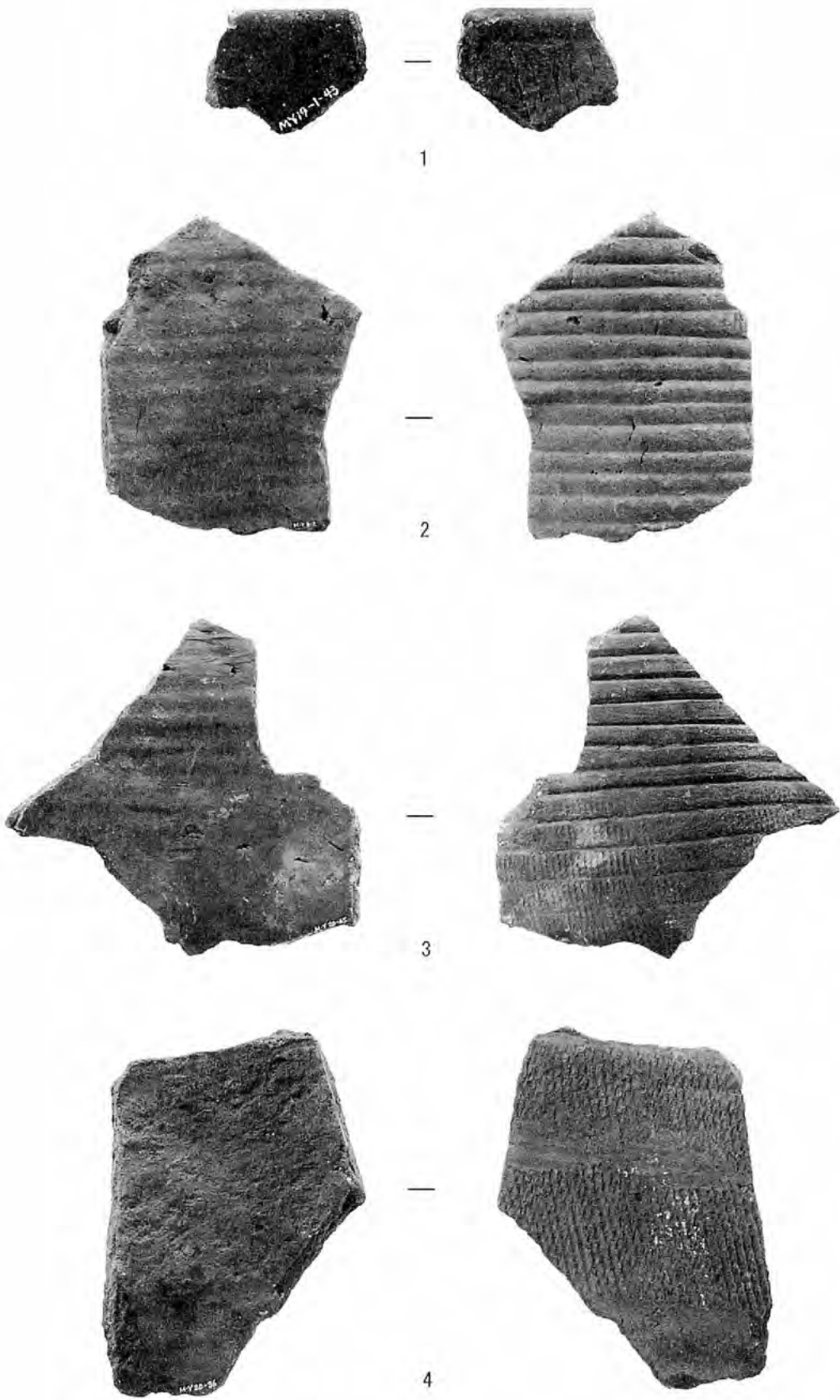
3



4

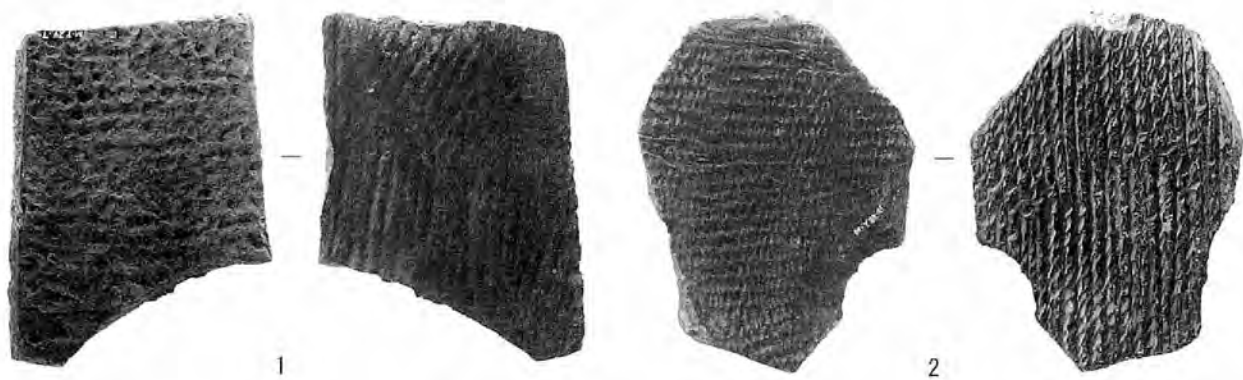
1:MY21-48 2:MY32-46 3:MY21-13 4:MY21-28

图版5 丸瓦第5類·平瓦第1類A式



1:MY19-1-43 2:MY8-2 3:MY20-45 4:MY20-36

图版6 平瓦第1類B式·第2類



1

2



3



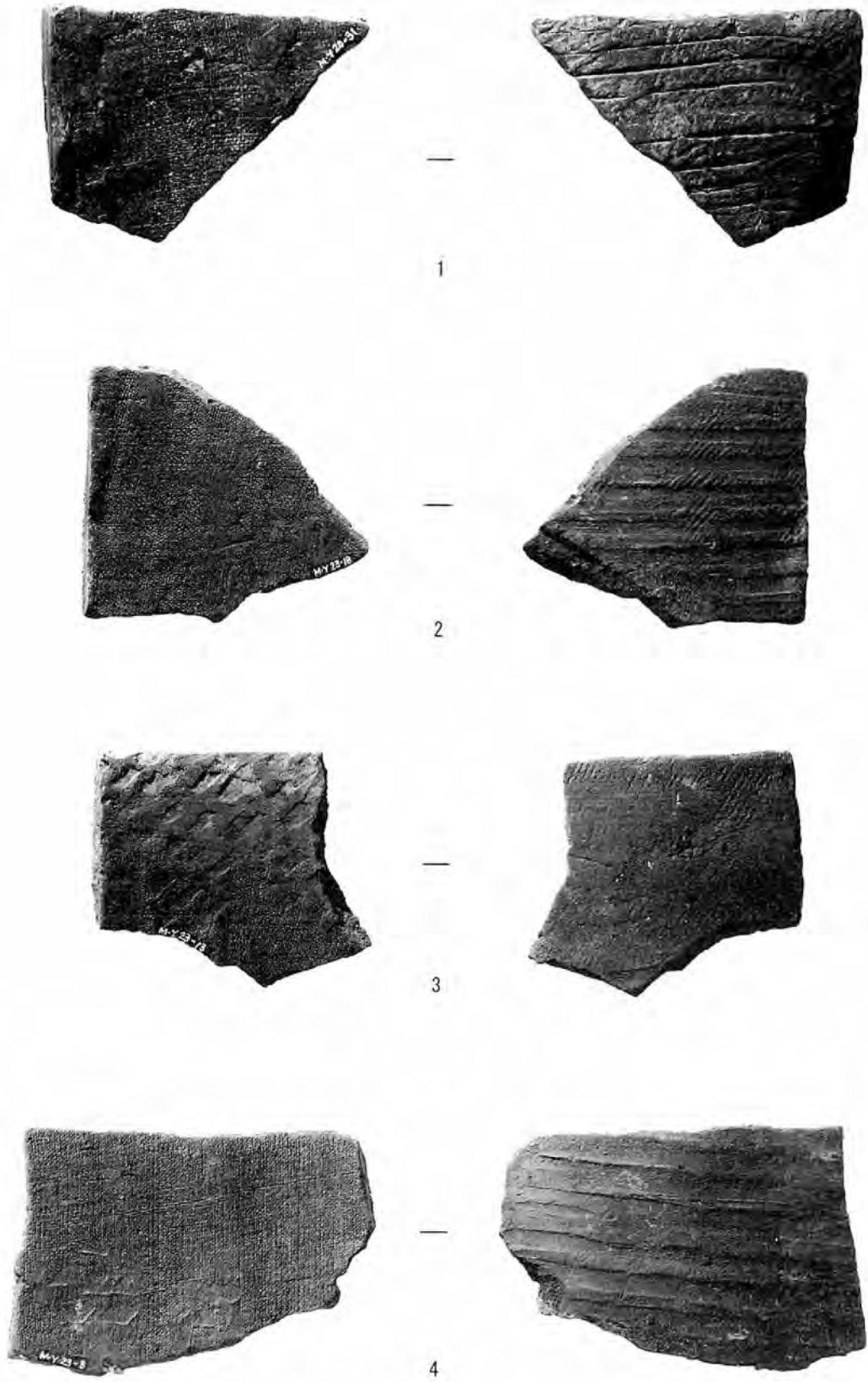
4



5

1: MY24-7 2: MY33-21 3: MY24-12
4: MY33-2 5: MY33-5

図版7 平瓦第2類～第4類



1:MY20-31 2:MY23-18 3:MY23-13 4:MY23-8

图版8 平瓦第5类A·B式



1



2



3



4



5

1: MY20-79 2: MY21-66 3: MY20-77
4: MY32-61 5: MY21-65

图版9 砖

表1 軒丸瓦観察表

遺物番号	分類	色調	胎土	焼き	部位	筒長さ	厚さ	瓦当切断	側面切断	凹面	凸面	旧注記	備考
MY08-025	第1類	灰色	砂	やや軟	瓦当・筒破片	12	1.5			横ナデ	横ナデ		軒丸かやや微妙
MY10-91	第1類	褐色～暗灰色	泥・細砂	やや硬	瓦当・筒破片	6	1.2			横ナデ	横ナデ		
MY14-02	第1類	黄褐色	砂	軟	瓦当・筒破片	3.5	1.2	全面ヘラ				E. V. 5	凸面に刺突痕あり
MY20-11	第1類	灰色	泥・細砂	硬	瓦当・筒破片	14	1.5	ヘラ	外	横ナデ	蛇腹		
MY21-09	第1類	暗褐色	泥・細石	やや硬	瓦当・筒破片	5.5	1.2	全面ヘラ	外?		中縄・横ナデ		
MY23-56	第1類	暗灰色	砂・細砂	硬	瓦当・筒破片	9	1			無紋当て具?	中縄・横ナデ		
MY23-63	第1類	暗褐色	砂・細砂	やや硬	瓦当・筒破片	7.5	1	全面ヘラ	全面	無紋当て具?	中縄・横ナデ		
MY33-50	第1類	灰色	砂・細石	硬	瓦当・筒破片	5.5	1				横ナデ		
MY33-53	第1類	暗褐色	泥・細石	やや硬	瓦当・筒破片	9	1.7			無紋当て具?	横ナデ		
MY37-10	第1類	暗褐色	砂・細砂	硬	瓦当・筒破片	7	0.9				中縄・横ナデ		
MY38-05	第1類	褐色	泥	やや硬	瓦当・筒破片	6	1	糸切り	外			牧羊城	
MY23-62	第2類	灰色	砂・細砂	硬	瓦当・筒破片	7.5	1.8		外		横ナデ		棒穴あり
MY38-01	第2類	灰色	砂・細石	やや軟	瓦当・筒破片	12.2	1.8			麻点	細縄・横ナデ	牧羊城	粘土紐
MY38-02	第2類	灰色	砂・細石	やや軟	瓦当・筒破片	8	1.6	糸切り		麻点	細縄・横ナデ	牧羊城14	
MY38-03	第2類	灰色	砂・細石	やや軟	瓦当			糸切り				牧羊城9	
MY38-04・11	第2類	灰色	砂・細石	硬	瓦当			糸切り				牧羊城4	
MY38-06	第2類	灰色	泥・細石	硬	瓦当			糸切り				牧羊城8	
MY38-08	第2類	灰色	泥・細石	硬	瓦当			糸切り				牧羊城7	
MY38-12	第2類	淡灰色	砂・細石	やや硬	瓦当								
MY22-04	第2類?	灰色	泥・細砂	硬	筒部	8	1.5	糸切り	外	横ナデ	横ナデ		
MY38-09	第2類?	灰色	砂・細石	やや硬	瓦当・筒破片	5						牧羊城	

表2 丸瓦観察表

遺物番号	分類	色調	胎土	焼き	部位	サイズ	厚さ	側面切断	凹面	凸面	旧注記	備考
MY08-001	第1類A式	暗灰色	泥・細砂	硬	胴部	13.0×12.5	1	外	無紋	細縄・横ナデ		棟用か?あて具は無紋
MY08-010	第1類A式	暗灰色	泥・細砂	やや軟	胴部	9.5×10.0	1	外	無紋	中縄・横ナデ		あて具無紋?・玉縁直下
MY08-017	第1類A式	暗褐色	泥・細石	軟	胴部	13.5×11.0	1.3	外	無紋	中太縄・横ナデ		あて具無紋?
MY08-036	第1類A式	灰色	砂	軟	胴部	7.5×6.0	1.1		無紋	細縄・横ナデ		磨耗・無紋あて具?
MY08-044	第1類A式	暗灰色	泥・細石	硬	胴部	6.5×6.5	1	外	無紋	中太縄		
MY08-078	第1類A式	褐色	泥	硬	胴部	4.0×6.0	0.9		無紋	中太縄		土器?
MY08-089	第1類A式	淡灰色	泥・細石	硬	胴部		1.2		無紋	細縄		小片
MY08-091	第1類A式	黄灰色	砂	軟	胴部	7.0×4.5	1.1	外	無紋	細縄・横ナデ		
MY09-26	第1類A式	暗灰色	泥	硬	胴部	7.5×7.0	1		無紋	中太縄・横ナデ		無紋あて具?

遺物番号	分類	色調	胎土	焼き	部位	サイズ	厚さ	側面切断	凹面	凸面	旧注記	備考
MY10-27	第1類A式	灰色	泥	硬	胴部	7.0×5.0	1		無紋	細縄・横ナデ		
MY10-79	第1類A式	灰色	泥	やや硬	胴部	7.0×5.5	1		無紋(ナデ)	中縄・横ナデ		
MY20-06	第1類A式	褐色～黒色	泥	やや軟	胴部	10.5×8.0	1.1	外	当て具・横ナデ	中縄・横ナデ		
MY20-14	第1類A式	暗灰色	泥	硬	胴部	11.0×8.5	1		無紋・横ナデ	細縄・横ナデ		
MY20-15	第1類A式	黒色	泥・細砂	硬	胴部	7.0×9.0	1	外	無紋・横ナデ	中縄・横ナデ		
MY20-21	第1類A式	褐色～黒色	泥・細砂	やや硬	胴部	8.5×10.5	1.3		無紋	中縄・横ナデ		
MY20-24	第1類A式	灰色	泥・細砂	硬	胴部	小片	1		無紋	中縄		
MY21-16	第1類A式	淡灰色	泥	やや硬	胴部	11.0×14.5	1	外	無紋	中縄・横ナデ		
MY21-39	第1類A式	暗灰色	泥・細砂	やや硬	玉縁含む	6.5×11.5	0.9	外	無紋	中縄		玉縁2cm強
MY21-47	第1類A式	暗灰色	泥・細石	硬	玉縁含む	8.0×8.0	0.9	外	無紋	中太縄・横ナデ		玉縁2cm・ゆがみ
MY23-59	第1類A式	灰色	泥・細石	硬	胴部	17.5×9.5	1.1		無紋	中縄・横ナデ		
MY23-60	第1類A式	灰色	泥	軟	玉縁含む	15.5×9.0	1	外	無紋	太縄・横ナデ		玉縁3cm
MY32-51	第1類A式	灰色	砂・細砂	やや硬	端面付近	13.5×10.0	1.6		無紋	中縄・横ナデ		
MY33-16	第1類A式	暗灰色	砂・細石	硬	胴部	9.5×9.0	0.9		無紋	中太縄・横ナデ		玉縁直下・玉縁2cmの薄手のものか
MY33-31	第1類A式	灰色	砂・細砂	硬	端面付近	11.0×11.5	1		無紋	細縄・横ナデ		MY33-32と接合
MY33-32	第1類A式	灰色	砂・細砂	硬	端面付近	11.0×11.5	1		無紋	細縄・横ナデ		MY33-31と接合
MY33-34	第1類A式	暗灰色	泥・細砂	やや硬	胴部	13.0×8.0	1.4		無紋	中縄・横ナデ	N. VII?	無紋あて具か・釘穴
MY33-54	第1類A式	灰色	泥	硬	胴部	10.0×9.0	1.1		無紋	細縄・横ナデ		
MY08-006	第1類B式	灰色	砂・細石	やや軟	玉縁含む	7.0×9.5	1		無紋	中縄・横ナデ		玉縁2cm
MY08-007	第1類B式	灰色	砂・細砂	やや軟	胴部	10.5×10.0	0.9	内	無紋?	中縄・横ナデ		
MY08-013	第1類B式	灰色	砂・細石	やや軟	玉縁含む	10.0×11.0	1.3	外	無紋	中縄・横ナデ		玉縁4cm
MY08-016	第1類B式	暗灰色	砂	やや軟	端面付近	13.5×11.0	1.3	内	無紋・蛇腹	中縄・横ナデ・蛇腹		
MY08-018	第1類B式	灰色	砂・細砂	やや軟	玉縁含む	8.0×10.0	1.2		無紋	細縄・横ナデ		玉縁4cm強
MY08-026	第1類B式	黄褐色	泥・細砂	やや硬	胴部	8.0×10.0	1		無紋	細縄・横ナデ		
MY08-027	第1類B式	灰色	泥・細石	やや軟	玉縁含む	8.0×10.5	1.2	外	無紋	中縄・横ナデ		玉縁2.5cm
MY08-028	第1類B式	黄灰色	砂	軟	玉縁含む	8.0×10.5	1.3	内	無紋・ヨコナデ	横ナデ		玉縁5cm弱
MY08-033	第1類B式	黄灰色	泥・細砂	やや軟	胴部	15.5×8.0	1.3	内	横ナデ	中縄・横ナデ		
MY08-034	第1類B式	灰色	砂	軟	端面付近	6.0×9.0	1.2		無紋	中縄・横ナデ		
MY08-035	第1類B式	暗灰色	砂・細石	やや硬	胴部	10.0×8.0	1.3	内	蛇腹	中縄・横ナデ		
MY08-038	第1類B式	暗灰色	泥・細砂	やや硬	玉縁含む	7.0×7.5	1		無紋	中縄・横ナデ		玉縁4.5cm
MY08-042	第1類B式	暗灰色	泥・細砂	硬	玉縁含む	6.5×5.0	1.1		無紋	横ナデ		玉縁4.5cm
MY08-052	第1類B式	暗灰色	泥	硬	胴部	7.0×8.5	1.2	外	無紋	中縄・横ナデ		粘土紐
MY08-056	第1類B式	黄灰色	砂・細石	軟	玉縁含む	8.0×11.5	1	内	無紋・磨耗	縄・横ナデ		
MY08-069	第1類B式	灰色～褐色	泥	やや硬	端面付近	7.5×7.5	0.9		横ナデ	横ナデ		
MY08-076	第1類B式	灰色	泥	やや硬	胴部	5.0×7.0	1.2		無紋	中縄・横ナデ		
MY09-24	第1類B式	褐色	砂・細石	やや軟	胴部	8.0×6.0	1		無紋	中太縄・横ナデ		玉縁直下

遺物番号	分類	色調	胎土	焼き	部位	サイズ	厚さ	側面切断	凹面	凸面	旧注記	備考
MY13-10	第1類B式	灰色	泥・細砂	やや硬	胴部	10.0×9.0	1		無紋・蛇腹	中太縄・横ナデ		
MY20-07	第1類B式	灰色	泥	硬	玉縁含心	10.5×11.0	0.7	外	無文・横ナデ	細縄・横ナデ		
MY20-09	第1類B式	黒色	泥・細砂	硬	玉縁含心	6.0×7.5	1.1	外	小点・横ナデ			玉縁3.5cm
MY20-13	第1類B式	黒色～褐色	泥・細石	硬	端面付近	12.0×12.5	1.3		当て具・横ナデ	細縄・横ナデ		
MY20-16	第1類B式	灰色	泥	硬	玉縁含心	7.0×10.5	1		横ナデ	横ナデ		玉縁3.0cm
MY20-18	第1類B式	淡灰色	泥	やや軟	端面付近	8.0×11.5	1	外	横ナデ	中縄・横ナデ		
MY20-19	第1類B式	灰色	泥・細砂	やや軟	玉縁含心	7.0×10.0	1.1	外	横ナデ	中縄・横ナデ		玉縁2.5cm
MY20-23	第1類B式	灰色	泥	やや軟	胴部	小片	1.2		ナデ	細縄・横ナデ		
MY21-10	第1類B式	灰色	泥・細石	やや軟	胴部	17.0×12.0	1.5	内	無紋・蛇腹	中縄・横ナデ・蛇腹		
MY21-12	第1類B式	灰色	泥・細砂	硬	玉縁含心	13.0×10.0	1		無紋	中縄・横ナデ		玉縁5cm
MY21-14	第1類B式	褐色	泥・細砂・雲母	やや硬	胴部	12.5×12.0	1.3	外	無紋	中太縄・横ナデ横ナデ		釘穴あり
MY21-22	第1類B式	灰色	泥・細石	硬	胴部	13.0×9.0	1	内	蛇腹	横ナデ		
MY21-27	第1類B式	暗灰色	泥・細砂	やや硬	胴部	15.5×14.0	1.5	外	無紋	中縄・横ナデ		
MY21-31	第1類B式	暗灰色・褐色	泥・細砂	硬	玉縁含心	6.0×10.5	0.9	外	無紋	横ナデ		玉縁3cm強
MY21-32	第1類B式	黄褐色	砂・細砂	軟	胴部	10.0×8.0	1		横ナデ	中縄・横ナデ・蛇腹		磨耗
MY21-38	第1類B式	黄褐色	泥	やや硬	胴部	11.5×9.5	1.2	内	無紋・ヨコナデ	中縄・横ナデ		
MY21-40	第1類B式	暗灰色	泥・細石	硬	側面付近	12.0×6.0	1.1	外	無紋	中太縄・横ナデ		
MY21-54	第1類B式	暗灰色・褐色	泥・細石	やや軟	玉縁含心	5.0×7.0	1.1		無紋	中縄・横ナデ		玉縁2.5cm
MY22-02	第1類B式	灰色	泥・細石	やや硬	胴部	10.5×10.5	1	外	弱蛇腹	中縄・弱蛇腹		
MY22-03	第1類B式	灰色	泥・細砂	硬	胴部	8.0×7.0	1.4	内	横ナデ	蛇腹		
MY22-40	第1類B式	灰色	泥	軟	胴部	7.0×10.5	1.9		無紋(ナデ)	中縄・横ナデ		
MY22-47	第1類B式	灰色	泥・細砂	硬	胴部	7.0×4.0	1.4		横ナデ	蛇腹		
MY23-14	第1類B式	灰色	泥	硬	胴部	9.0×12.0	0.9	外	無紋	太縄・横ナデ		
MY23-54	第1類B式	黄褐色	泥	軟	玉縁含心	9.0×9.5	1.1	外	無紋	細縄・横ナデ		玉縁2cm弱
MY23-57	第1類B式	黄褐色	砂・細石	軟	胴部	6.0×12.0	1.5	外	無紋	細縄・横ナデ		粘土紐
MY23-58	第1類B式	灰色	泥	硬	玉縁含心	7.0×10.0	1.2		無紋	細縄・横ナデ		玉縁4cm弱
MY23-66	第1類B式	灰色	泥	硬	玉縁含心	7.0×9.0	1		無紋	横ナデ		玉縁3cm強・釘穴
MY23-68	第1類B式	灰色	泥	硬	玉縁含心	6.5×8.0	0.8		無紋	不明		玉縁部に薄く縄叩きの痕あり・玉縁4.5cm
MY23-69	第1類B式	灰色	砂	やや軟	胴部	9.0×8.5	0.9	内	蛇腹	横ナデ		
MY32-48	第1類B式	暗灰色	泥・細砂	硬	端面付近	16.5×18.0	1.5	外	無紋	中太縄・横ナデ		MY32-49と接合。未接合。径測定可
MY32-49	第1類B式	暗灰色	泥・細砂	硬	端面付近	16.5×18.0	1.5	外	無紋	中太縄・横ナデ		MY32-48と接合。未接合
MY32-50	第1類B式	暗灰色	泥・細石	硬	胴部	14.0×12.0	1.3	内	無紋・ヨコナデ	中縄・横ナデ		粘土紐
MY32-53	第1類B式	黄灰色	泥・細砂	硬	玉縁含心	6.0×14.0	1	外	無紋	細縄・横ナデ		玉縁3.5cm
MY32-54	第1類B式	暗灰色	泥	硬	玉縁含心	10.0×12.0	1.1	外	無紋	中縄・横ナデ		玉縁4cm
MY32-56	第1類B式	褐色	砂・細石	やや軟	端面付近	12.0×9.0	2.1		無紋	中縄・横ナデ		粘土紐・端面付近削り
MY32-57	第1類B式	黄褐色	砂・細石	硬	胴部	15.0×8.0	0.7~1.2	内	無紋・ヨコナデ	中縄・横ナデ		

遺物番号	分類	色調	胎土	焼き	部位	サイズ	厚さ	側面切斷	凹面	凸面	旧注記	備考
MY32-58	第1類B式	黒色・褐色	泥・細砂	硬	胴部	7.0×8.0	1	外	無紋	中縄・横ナデ		玉縁直下
MY32-59	第1類B式	淡黄灰色	砂	硬	胴部	8.5×10.0		1	蛇腹	横ナデ		
MY33-12	第1類B式	黄灰色	泥・細砂	やや軟	玉縁含む	8.0×11.0		1	外	無紋		玉縁2.5cm
MY33-38	第1類B式	暗灰色	砂・細石	硬	胴部	4.5×7.0		1		無紋		玉縁直下・玉縁2cmのものか
MY37-09	第1類B式	淡灰色	泥	やや軟	玉縁含む	7.5×8.0		1	外	無紋		玉縁4cm
MY08-020	第2類	黄褐色	砂・細石	やや軟	端面付近	8.5×7.0		1		小点		
MY08-055	第2類	暗灰色	泥・細砂	硬	胴部	10.0×4.0		0.9		小点		
MY08-061	第2類	灰色	泥	硬	端面付近	5.0×7.5		0.8		麻点		
MY08-062	第2類	灰色	泥	硬	胴部	10.0×4.5		0.7		小点		
MY08-065	第2類	灰色	泥	硬	胴部	6.5×10.5		1.1		麻点?		玉縁直下
MY12-36	第2類	灰色	泥・細砂	硬	端面付近	6.0×6.5		1.1	外	麻点		
MY18-37	第2類	暗灰色	泥	硬	玉縁含む	3.5×6.0			外	小点		玉縁部のみ残存
MY20-05	第2類	暗灰色	泥・細砂	やや硬	端面付近	20.0×9.5		1.5	外	小点・横ナデ		
MY20-10	第2類	暗灰色	泥	硬	胴部	13.5×12.0		1.2	内	麻点・横ナデ		
MY20-12	第2類	灰色	泥・細砂	やや硬	玉縁含む	11.0×7.0		1	外	小点・横ナデ		中縄・横ナデ・弱蛇腹
MY20-20	第2類	灰色	泥・細砂	やや軟	胴部	10.0×8.5		1.1		小点・横ナデ		
MY20-22	第2類	灰色	泥・細砂	硬	胴部	7.0×8.5		1.2		ナデ		
MY20-57	第2類	灰色	泥・細石	やや軟	胴部	8.0×7.0		1.2	内	麻点		
MY20-59	第2類	灰色	泥	やや硬	端面付近			1	内	麻点		小片
MY21-24	第2類	淡灰色	泥・細石	やや硬	胴部	9.0×12.5		1.5	外	麻点?		
MY22-01	第2類	灰色	泥	硬	胴部	12.0×12.0		1.2		小点?ナデ		
MY22-58	第2類	灰色	砂・細石	やや硬	胴部			1.2		小点・ナデ		小片
MY23-50	第2類	灰色	泥・細石	硬	端面付近	7.5×7.0		0.9	外	麻点小		
MY23-67	第2類	淡灰色	砂・細石	軟	胴部	16.0×8.0		1.2		麻点大?		
MY24-02	第2類	灰色	砂	やや軟	玉縁含む	6.0×6.0				麻点大		玉縁部のみ残存・玉縁5cm
MY32-47	第2類	暗灰色	泥・細石	硬	胴部	26.0×14.0		1.5		麻点・横ナデ	E. V.	新しい断面
MY32-52	第2類	黄灰色	泥・細石	硬	胴部	14.0×9.0		1.5	内	小点		粘土紐
MY33-01	第2類	褐色	泥・細砂	やや硬	端面付近	17×18.5		1.5	外	麻点大		径復元可能・MY33-06と接合
MY33-06	第2類	褐色	泥・細砂	やや硬	端面付近	17×18.5		1.5	外	麻点大		径復元可能・MY33-01と接合
MY33-36	第2類	灰色	泥・細砂	硬	端面付近	8.5×6.0		0.7		小点		現物なし
MY20-17	第3類	灰色	泥・細石	硬	胴部	10.0×8.0		1	外	縄・横ナデ		
MY21-30	第3類	淡灰色	泥・細石	硬	胴部	8.5×13.0		1		縄		
MY23-61	第3類	灰色	泥	硬	胴部	15.0×16.0		1.4	全面	縄		
MY24-01	第3類	灰色	泥	やや硬	胴部	10.0×11.5		1.2	外	縄		
MY24-03	第3類	暗灰色	泥・細砂	硬	胴部	10.0×11.0		1.2		縄		火を受けたか
MY24-06	第3類	灰色	泥	やや硬	端面付近	15.0×10.0		1.5		縄		
MY33-11	第3類	暗灰色	泥・細砂	硬	玉縁含む	11.0×11.0		1		縄		玉縁2cm

遺物番号	分類	色調	胎土	焼き	部位	サイズ	厚さ	側面切断	凹面	凸面	旧注記	備考
MY33-35	第3類	灰色	泥・細砂	硬	胴部	6.0×10.0	1.1	外	縄	中縄		火を受けたか
MY23-55	第4類	灰色	泥	硬	玉縁含む	8.5×8.5	0.8		格子大	細縄・弱蛇腹		玉縁4.5cm
MY32-60	第4類	灰色	泥	硬	端面付近	7.5×7.0	1		格子大	中縄		
MY21-42	第4類?	黄褐色	砂	軟	側面付近	10.0×7.5	1		磨耗	中縄		かなり磨耗
MY08-037	第5類	灰色	泥・細砂	やや硬	側面付近	10.0×6.5	1.2	内	布目	細縄・横ナデ		
MY08-043	第5類	灰色	泥・細砂	やや硬	胴部	8.0×6.0	1	内	布目	横ナデ		
MY08-048	第5類	黄褐色	泥・細砂	軟	玉縁含む	7.0×7.0	1.2		布目	横ナデ		玉縁4.5cm・磨耗
MY08-066	第5類	灰色	砂	やや硬	玉縁含む	4.5×8.5	0.9		布目	中縄・横ナデ		
MY13-12	第5類	黄褐色	砂・細砂・雲母	軟	胴部	7.0×11.0	1.3		布目	横ナデ		磨耗
MY20-08	第5類	灰色	砂	やや軟	胴部	10.0×9.0	1.1		布目	ナデ		
MY21-48	第5類	灰色・褐色	泥	やや軟	玉縁含む	13.5×8.5	1.4		布目	中縄・横ナデ		玉縁3cm強
MY23-64	第5類	淡灰色	泥	軟	胴部	10.0×9.5	1.4	内	布目	中太縄・横ナデ		
MY23-65	第5類	灰色	泥	硬	玉縁含む	7.0×9.0	1.5		布目	細縄・横ナデ		玉縁5cm弱
MY24-04	第5類	黄褐色	砂・細砂	軟	胴部	13.0×5.0	1.2	内	布目	横ナデ		
MY32-46	第5類	黄灰色	砂	軟	玉縁含む	19.0×14.5	1	内	布目	横ナデ	N. III. 3	中縄だったらしい。径復元可
MY32-55	第5類	灰色・雲母	泥・細砂	硬	端面付近	11.0×10.0	1.1	内	布目	中縄・横ナデ	S. IV?	
MY33-13	第5類	灰色	砂	やや軟	玉縁含む	11.0×9.0	1		布目	細縄・横ナデ		玉縁4cm
MY33-39	第5類	灰色	砂・細石・雲母	硬	胴部		1.1		布目	中縄・横ナデ		小片
MY33-49	第5類	灰色	泥・細砂	硬	胴部		1.1	内	布目	横ナデ		小片
MY35-75	第5類	灰色	砂・細砂	やや硬	玉縁含む		1		布目	横ナデ		小片
MY37-11	第5類	黄褐色	砂・雲母	やや軟	胴部	13.0×7.0	1.2		布目	中縄・横ナデ		
MY08-057	不明	淡灰色	砂・細砂	軟	胴部	7.5×7.5	1		磨耗	細縄		磨耗
MY08-058	不明	黄褐色	砂	軟	胴部	7.0×6.0	1.1		磨耗	横ナデ		磨耗
MY08-067	不明	黄褐色	砂・雲母	軟	胴部	9.0×7.0	1		磨耗	横ナデ		磨耗

表3 平瓦観察表

遺物番号	分類	色調	胎土	焼き	部位	サイズ	厚さ	側面切断	凹面	凸面	旧注記	備考
MY10-81	第1類A式	灰色	泥・細砂	硬	側面付近	5.0×5.0	1	内	無紋	中太縄・横ナデ		
MY21-13	第1類A式	灰色	泥・細砂	やや硬	端面付近	18.0×9.0	1.5		無紋	中縄・横ナデ	牧羊城	
MY21-28	第1類A式	灰色	泥・細石	硬	端面付近	20.0×10.0	1.1		無紋	中縄・横ナデ		
MY21-29	第1類A式	褐色・暗褐色	泥・細砂	やや硬	端面・側面付近	14.0×11.0	1.5	内	無紋	太縄・横ナデ		
MY22-17	第1類A式	黄灰色	泥	軟	端面付近	13.0×11.0	1.6		無紋(当て具)	中縄・横ナデ		
MY22-19	第1類A式	灰色	砂	やや硬	中央	11.5×10.5	1.4		無紋(当て具)	太縄・横ナデ		
MY22-21	第1類A式	黄褐色～灰色	泥	やや硬	中央	11.0×11.0	1.6		無紋(当て具)	細縄		
MY22-43	第1類A式	褐色	泥	やや硬	中央	6.5×11.8	1.3		無紋(当て具)	細縄		

遺物番号	分類	色調	胎土	焼き	部位	サイズ	厚さ	側面切断	凹面	凸面	旧注記	備考
MY22-53	第1類A式	灰色	泥・細砂	やや軟	端面付近	5.5×7.5	1.3		無紋(当て具)	中縄・横ナデ		
MY23-01	第1類A式	暗灰色	砂・雲母	硬	中央	16.5×14.0	1.3		無紋	中縄・横ナデ		
MY08-002	第1類B式	灰色	泥	軟	側面付近	19.2×15.0	1.2	内	横ナデ	蛇腹		
MY08-005	第1類B式	黄灰色	泥	軟	端面付近	11.0×11.0	1		横ナデ	蛇腹		
MY08-008	第1類B式	灰色	泥	やや軟	端面付近	11.0×11.0	1		無紋	蛇腹		粘土紐
MY08-009	第1類B式	灰色・黄褐色	砂・細石	やや軟	端面付近	11.0×11.5	1.6		無紋	中太縄・横ナデ		
MY08-012	第1類B式	淡灰色	砂	軟	中央	12.5×14.0	1.3		無紋	中縄・蛇腹		
MY08-014	第1類B式	黄灰色	砂・細石	やや軟	中央	9.5×8.0	1.2		横ナデ	中縄・蛇腹		
MY08-021	第1類B式	淡灰色	砂	軟	中央	8.5×7.0	1.4		蛇腹	蛇腹		磨耗
MY08-022	第1類B式	褐色・暗褐色	砂・細石	やや軟	中央	11.0×7.0	1		無紋	中縄・横ナデ		
MY08-023	第1類B式	黄褐色	泥・細砂	硬	端面・側面付近	6.0×7.0	1.2	内	無紋	中太縄・横ナデ		
MY08-024	第1類B式	灰色	砂・細石	やや硬	端面・側面付近	8.5×8.5	1.3	内	無紋	中縄・横ナデ		
MY08-030	第1類B式	暗灰色	泥・細砂	硬	端面付近	12.5×8.0	1.4		無紋	中縄・横ナデ		
MY08-031	第1類B式	灰色	泥・細石	やや硬	端面付近	9.0×8.0	1.5		無紋	中縄・横ナデ		
MY08-032	第1類B式	灰色	泥	やや硬	端面付近	8.0×7.0	1		横ナデ	横ナデ		
MY08-039	第1類B式	灰色	砂	軟	中央	3.0×8.0	1.2		横ナデ	蛇腹		磨耗・小片
MY08-040	第1類B式	灰色	砂・細石	軟	中央	6.0×6.0	1.5		無紋	太縄		
MY08-041	第1類B式	灰色	砂	やや軟	端面付近	7.0×8.0	1		横ナデ	横ナデ		
MY08-045	第1類B式	灰色	砂・細石	やや硬	端面・側面付近	6.5×6.5	1.6	内	横ナデ	中縄・横ナデ		
MY08-046	第1類B式	黄褐色	砂	軟	中央	8.0×10.0	1.6		横ナデ	中縄・横ナデ・蛇腹		
MY08-047	第1類B式	淡灰色	砂・細石	硬	中央	9.0×9.0	1		横ナデ	横ナデ		
MY08-049	第1類B式	灰色	泥・細石	やや硬	端面付近	4.5×6.5	1.2		無紋	中縄・横ナデ		
MY08-050	第1類B式	淡灰色	砂・雲母	軟	中央	9.0×5.0	1.2		無紋	中太縄		磨耗
MY08-051	第1類B式	黄褐色	砂・細砂	軟	端面付近	6.5×6.5	1		無紋	横ナデ		磨耗
MY08-053	第1類B式	灰色	砂・細石	やや軟	端面付近	7.5×8.5	1.2		無紋	中縄・横ナデ		
MY08-054	第1類B式	灰色・黄褐色	泥・細砂	やや硬	中央	6.0×8.0	1.6		無紋	細縄		
MY08-060	第1類B式	灰色	砂	軟	中央	7.5×7.5	1.2		無紋	横ナデ		磨耗
MY08-064	第1類B式	黄褐色	砂・細砂	軟	中央	7.5×7.0	1		無紋	蛇腹		磨耗
MY08-068	第1類B式	灰色	泥・細砂	やや硬	中央	4.0×7.5	1.4		無紋	太縄		
MY08-070	第1類B式	黄褐色	砂・細石	やや軟	側面付近	4.5×9.0	1.2	内	横ナデ	中縄・蛇腹		
MY08-071	第1類B式	黄褐色	砂・細石	軟	中央	5.0×7.0	1.1		蛇腹	蛇腹		
MY08-072	第1類B式	灰色	泥・細石	硬	中央	3.0×9.0	1.6		無紋	中縄・蛇腹		
MY08-075	第1類B式	淡灰色	泥・細石	やや軟	側面付近	7.5×6.5	1.5	内	無紋	中縄・横ナデ		
MY08-077	第1類B式	黄褐色	泥・細砂	やや硬	中央	6.0×6.5	1.2		無紋	蛇腹		
MY08-079	第1類B式	褐色	泥・細石	やや軟	中央	5.0×6.0	1.5		無紋	中縄・横ナデ		
MY08-085	第1類B式	灰色	砂・細砂	軟	中央		1.1		横ナデ	蛇腹		小片
MY08-086	第1類B式	灰色	砂・細砂	軟	中央		1.4		横ナデ	蛇腹		小片

遺物番号	分類	色調	胎土	焼き	部位	サイズ	厚さ	側面切断	凹面	凸面	旧注記	備考
MY08-087	第1類B式	灰色	砂・細砂	軟	中央		1.1		横ナデ	蛇腹		小片
MY08-088	第1類B式	灰色	砂・細砂	軟	中央		1.5		横ナデ	蛇腹		小片
MY08-090	第1類B式	灰色	砂・細砂	軟	中央		1.3		横ナデ	蛇腹		小片
MY10-39	第1類B式	暗灰色	泥	硬	側面付近	5.0×5.0	0.8	内	横ナデ	横ナデ		
MY10-78	第1類B式	褐色～黒色	泥・細砂	やや硬	中央	6.5×5.5	1.2		無紋(ナデ)	細縄・横ナデ		
MY10-83	第1類B式	淡灰色	砂	やや軟	中央		1.1		横ナデ	横ナデ		小片
MY10-84	第1類B式	灰色	砂	硬	中央		1.2		横ナデ	蛇腹		小片
MY10-87	第1類B式	暗灰色	泥	硬	中央		1.2		無紋(ナデ)	中縄・横ナデ		小片
MY12-39	第1類B式	灰色	泥	硬	中央	5.0×11.5	1		横ナデ	横ナデ		土器？
MY12-76	第1類B式	灰色	泥	硬	側面付近		1.1	内	無紋	中縄・横ナデ		小片
MY19-1-43	第1類B式	灰色～暗灰色	砂	硬	端面付近		1	内	無紋	中縄		『牧羊城』図版23-11に第1類土器として紹介
MY20-27	第1類B式	灰色	砂	硬	中央	11.0×9.0	1.4		ナデ	中太縄		
MY20-32	第1類B式	褐色	泥・細砂	硬	中央	9.0×15.5	1.2		横ナデ(条痕)	細縄・横ナデ		
MY20-33	第1類B式	灰色	泥・細砂	やや軟	側面付近	7.5×11.5	1.5	内	横ナデ	中縄・蛇腹		
MY20-37	第1類B式	暗灰色	泥・細石	硬	中央	9.0×13.0	1.6		蛇腹	蛇腹		
MY20-38	第1類B式	褐色	砂	やや軟	側面付近	8.0×12.5	1.5	内	横ナデ	蛇腹		
MY20-39	第1類B式	灰色	泥	硬	側面付近	14.5×10.0	1.1	内	蛇腹	蛇腹		
MY20-40	第1類B式	暗灰色	泥・細砂	硬	端面付近	11.0×12.0	1.2		横ナデ	蛇腹		
MY20-41	第1類B式	灰色	泥	硬	中央	8.0×13.5	1.3		横ナデ	細縄・横ナデ		
MY20-42	第1類B式	灰色	泥	硬	端面付近	12.0×10.5	1.5		横ナデ	蛇腹		
MY20-45	第1類B式	灰色	泥・細石	硬	側面付近	20.0×20.0	1.7	内	横ナデ	中縄・蛇腹		
MY20-49	第1類B式	灰色	泥	やや硬	中央	10.0×9.0	1.5		蛇腹	蛇腹		
MY20-50	第1類B式	灰色	泥・細砂	硬	中央	16.0×10.0	1.8		横ナデ・無紋？	中縄・横ナデ		
MY20-51	第1類B式	淡黄褐色	泥・細石	硬	中央	9.0×14.0	1.3		漆喰	中縄		
MY20-52	第1類B式	淡黄褐色	砂・細石	やや硬	側面付近	14.5×13.0	1.7	内	横ナデ	中縄・横ナデ		
MY20-54	第1類B式	灰色	泥	硬	中央	9.0×9.0	1.5		蛇腹	蛇腹		
MY20-55	第1類B式	灰色	砂・細砂	硬	側面付近	6.0×9.5	1.3	内	蛇腹	中縄・横ナデ		
MY20-58	第1類B式	灰色	砂・細石	硬	中央	6.0×9.0	1.5		ナデ	太縄・横ナデ		
MY20-60	第1類B式	灰色	泥	やや硬	中央	11.5×8.0	1.1		横ナデ	中縄・横ナデ		
MY20-61	第1類B式	灰色	泥・細砂	やや軟	側面付近	小片	1.1	内	ナデ	蛇腹		
MY20-62	第1類B式	暗灰色	砂・細石	硬	側面付近	小片	1.5	内	無紋・横ナデ	中太縄・横ナデ		
MY20-63	第1類B式	灰色	泥・細砂	やや硬	中央	小片	1.3		横ナデ	蛇腹		
MY20-64	第1類B式	灰色	泥・細砂	硬	中央	小片	1.3		横ナデ	ナデ		
MY20-65	第1類B式	灰色	泥・細石	やや硬	中央	小片	1.1		蛇腹	蛇腹		
MY20-67	第1類B式	褐色	泥	やや軟	側面付近	小片	1.1	内	ナデ	細縄		
MY20-68	第1類B式	褐色	砂・細石	やや硬	端面付近	小片	1.3		磨耗	磨耗		

遺物番号	分類	色調	胎土	焼き	部位	サイズ	厚さ	側面切断	凹面	凸面	旧注記	備考
MY20-69	第1類B式	淡褐色	泥・細砂	やや軟	側面付近	小片	1.4	内	横ナデ	中太縄		
MY20-72	第1類B式	暗灰色	泥・細砂	やや硬	中央	小片	1.5		無紋	細縄		
MY20-73	第1類B式	黄褐色	泥・細石	硬	中央	小片	1		ナデ	蛇腹		
MY20-74	第1類B式	淡灰色～灰色	泥	硬	中央	小片	1.5		横ナデ	中太縄		
MY20-75	第1類B式	灰色	砂	やや軟	側面付近	小片	1.1	内	横ナデ	細縄・横ナデ		
MY21-15	第1類B式	黄褐色	泥	やや軟	中央	12.0×20.0	1.6		無紋	蛇腹	牧羊城	
MY21-17	第1類B式	灰色	砂・細石	軟	側面付近	11.0×10.5	1.2	内	無紋	太縄		
MY21-19	第1類B式	黄褐色	砂	軟	中央	12.0×14.5	1.5		無紋	太縄		
MY21-21	第1類B式	黄褐色	砂・細石	やや硬	端面付近	10.0×13.0	1.2		無紋	太縄・横ナデ		端面部に縄痕
MY21-23	第1類B式	黄褐色	泥	軟	端面付近	10.0×7.0	1.2		無紋	横ナデ		
MY21-25	第1類B式	暗褐色	泥・細石	硬	中央	10.0×7.0	1.3		無紋	中縄・横ナデ		
MY21-33	第1類B式	灰色	泥・細石	硬	端面付近	10.0×7.0	1.2		無紋	中縄・横ナデ		
MY21-34	第1類B式	灰色・暗褐色	砂・細石	硬	端面・側面付近	10.5×9.5	1.2	内	無紋	太縄		
MY21-37	第1類B式	褐色	泥	やや硬	中央	10.0×6.0	1.9		無紋	中縄・横ナデ		
MY21-41	第1類B式	灰色	泥・細石	やや軟	中央	12.5×7.0	1.3		蛇腹	中縄・横ナデ・蛇腹		
MY21-43	第1類B式	灰色	砂・細石	軟	側面付近	8.5×15.0	1.2	内	蛇腹	蛇腹		
MY21-44	第1類B式	黄褐色	泥	やや硬	中央	8.5×9.5	1.5		無紋	蛇腹		
MY21-45	第1類B式	黄褐色	砂	軟	端面付近	6.5×9.0	1.1		無紋	蛇腹		
MY21-46	第1類B式	灰色・黄褐色	泥・細砂	やや軟	中央	11.0×16.5	1.5		無紋	中縄・横ナデ・蛇腹		
MY21-49	第1類B式	灰色	泥	やや軟	中央	6.0×10.0	1		横ナデ	中縄・蛇腹		
MY21-51	第1類B式	淡灰色	泥	やや硬	側面付近	6.5×5.0	1.2	内	無紋	中縄・横ナデ		
MY21-52	第1類B式	暗褐色	泥	やや硬	側面付近	8.0×7.0	1.6	内	無紋	中太縄・横ナデ・蛇腹		MY21-57・59と接合
MY21-56	第1類B式	灰色	泥・細石	やや軟	中央	5.0×7.5	0.6		横ナデ	蛇腹		小片
MY21-57	第1類B式	暗褐色	泥	やや硬	側面付近	8.0×7.0	1.6	内	無紋	中太縄・横ナデ・蛇腹		MY21-52・59と接合
MY21-59	第1類B式	暗褐色	泥	やや硬	側面付近	8.0×7.0	1.6	内	無紋	中太縄・横ナデ・蛇腹		MY21-57・52と接合
MY21-60	第1類B式	灰色	泥	軟	中央	4.0×7.0	1.1		無紋	蛇腹		小片
MY22-08	第1類B式	暗褐色	泥・細砂	やや硬	中央	14.5×14.0	1.8		横ナデ	細縄・蛇腹		
MY22-09	第1類B式	黄褐色	泥・細砂	やや硬	中央	14.0×17.5	1.6		無紋(ナデ)	中縄・横ナデ・蛇腹		
MY22-10	第1類B式	暗灰色	泥	硬	端面・側面付近	13.5×13.5	1.2	内	無紋(ナデ)	太縄・横ナデ		
MY22-11	第1類B式	暗灰色	泥・細石	やや硬	端面・側面付近	10.5×12.5	1.3	内	無紋(ナデ)	縄・横ナデ		
MY22-12	第1類B式	灰色	泥	やや硬	中央	11.0×18.2	1.6		無紋(ナデ)	細縄・横ナデ		
MY22-13	第1類B式	暗褐色	砂	やや硬	中央	17.0×11.5	1.1		無紋(ナデ)	細縄・横ナデ		
MY22-15	第1類B式	暗灰色	泥	硬	側面付近	11.0×21.5	1.7	内	無紋(ナデ)	中縄・蛇腹		
MY22-18	第1類B式	暗灰色	泥・細石	やや硬	中央	14.8×13.1	1.6		無紋(ナデ)	中太縄		
MY22-20	第1類B式	黄灰色	砂・細砂	軟	側面付近	14.8×19.0	1.3	内	無紋(ナデ)	中縄・横ナデ		
MY22-22	第1類B式	灰色	泥・細砂	やや硬	端面・側面付近	7.0×10.0	1.2	内	無紋(ナデ)	縄・横ナデ		
MY22-24	第1類B式	灰色	泥・細砂	やや硬	側面付近	7.0×11.0	1.5	内	無紋(ナデ)	太縄		

遺物番号	分類	色調	胎土	焼き	部位	サイズ	厚さ	側面切断	凹面	凸面	旧注記	備考
MY22-25	第1類B式	灰色	泥	軟	側面付近	9.0×12.0	1.6	内	無紋(ナデ)	蛇腹		
MY22-26	第1類B式	灰色	泥・細砂	やや硬	側面付近	9.0×13.5	1.5	内	無紋(ナデ)	太縄		
MY22-27	第1類B式	灰色	泥・細石	硬	側面付近	9.0×9.0	1.3	内	横ナデ	中縄・蛇腹		
MY22-30	第1類B式	灰色	砂	やや軟	中央	8.0×12.5	1.6		無紋(横ナデ)	中縄・横ナデ		粘土紐
MY22-31	第1類B式	暗褐色	泥・細砂	硬	側面付近	6.5×9.0	1.5	内	無紋(ナデ)	中太縄		
MY22-32	第1類B式	灰色	泥	やや硬	端面・側面付近	8.0×8.3	1.4	内	無紋(ナデ)	細縄・横ナデ		
MY22-34	第1類B式	灰色	泥	やや軟	端面付近	7.5×12.1	1.7		無紋(ナデ)	太縄・横ナデ		
MY22-35	第1類B式	灰褐色	砂	軟	中央	6.0×10.7	1.5		無紋	細縄・横ナデ		
MY22-37	第1類B式	褐色	泥・細石	硬	中央	4.3×14.5	1.9		無紋(ナデ)	中縄・横ナデ		
MY22-38	第1類B式	灰色	泥・細石	やや硬	端面付近	10.0×10.6	1.5		無紋(ナデ)	中縄・横ナデ		
MY22-39	第1類B式	黄褐色	泥・細砂	やや軟	側面付近	4.5×13.0	1.3	内	無紋(ナデ)	蛇腹		
MY22-41	第1類B式	灰色	泥・細砂	やや硬	側面付近	6.0×9.2	1.9	内	無紋(ナデ)	中太縄		
MY22-44	第1類B式	暗褐色	砂	やや軟	中央	6.7×7.0	1.3		無紋(ナデ)	中縄・横ナデ		
MY22-45	第1類B式	黄褐色	砂・細石	硬	側面付近	7.5×6.5	1.6	内	無紋(ナデ)	中縄・横ナデ		
MY22-49	第1類B式	灰色	泥・細砂	やや硬	中央	6.0×6.7	1.5		無紋(ナデ)	中縄		
MY22-50	第1類B式	灰色	泥・細砂	やや軟	中央	5.0×6.0	1.3		横ナデ	横ナデ		
MY22-51	第1類B式	灰褐色	泥・細砂	やや硬	中央	9.2×8.0	1.4		無紋(ナデ)	中縄・横ナデ・蛇腹		
MY22-52	第1類B式	暗灰色	泥	やや硬	中央	7.0×8.2	1.2		無紋(ナデ)	中縄・横ナデ		
MY22-56	第1類B式	灰色	砂	軟	中央		1.3		横ナデ	蛇腹		小片
MY22-59	第1類B式	灰色	砂	やや軟	中央		1.2		横ナデ	中縄・蛇腹		小片
MY22-60	第1類B式	黄灰色	泥	軟	中央		1.8		蛇腹	蛇腹		小片
MY22-61	第1類B式	暗灰色	泥	やや軟	中央		1.3		横ナデ	細縄・蛇腹		小片
MY23-02	第1類B式	灰色	泥・細砂	硬	側面付近	20.0×14.0	1.3	内	無紋	中縄・蛇腹		
MY23-03	第1類B式	黄灰色	砂・細石	硬	側面付近	18.0×10.0	1.6	内	無紋	中縄・横ナデ		
MY23-06	第1類B式	灰色・黄褐色	泥・細砂	やや軟	端面付近	13.0×11.5	1.1		無紋	横ナデ		
MY23-07	第1類B式	黄褐色	泥・細砂	やや硬	中央	17.0×14.0	0.9~1.5		無紋	蛇腹		
MY23-09	第1類B式	黄灰色~黄褐色	砂・細石	硬	側面付近	12.0×8.0	1.6	内	無紋	太縄		
MY23-11	第1類B式	灰色・朱塗り?	砂・細石	硬	側面付近	12.0×14.0	1.8	内	無紋	中縄・蛇腹		
MY23-12	第1類B式	黄褐色	泥・細砂	硬	中央	6.5×12.5	1.6		無紋	太縄		
MY23-15	第1類B式	灰色	泥・細砂	やや硬	側面付近	14.0×10.0	1.3	内	無紋	蛇腹		
MY23-16	第1類B式	灰色・朱塗り?	泥・細砂	硬	中央	9.5×8.0	1.4		無紋・朱塗り?	太縄		
MY23-17	第1類B式	褐色	泥	硬	中央	11.0×11.0	1.2		無紋	太縄		
MY23-19	第1類B式	黄褐色	泥	やや軟	端面付近	9.5×11.5	1.7		無紋	中縄・横ナデ		
MY23-20	第1類B式	灰色	泥	軟	側面付近	10.0×15.0	1.2	内	蛇腹	蛇腹		
MY23-21	第1類B式	暗灰色	泥・細石	やや硬	中央	8.0×12.5	1.4		無紋	中縄・横ナデ		
MY23-22	第1類B式	黄灰色	砂・細石	軟	端面付近	10.5×11.0	1.3		無紋	中縄・横ナデ		
MY23-23	第1類B式	灰色	泥・細石	硬	中央	16.0×9.0	1.2		無紋・蛇腹	中縄・蛇腹		

遺物番号	分類	色調	胎土	焼き	部位	サイズ	厚さ	側面切断	凹面	凸面	旧注記	備考
MY23-24	第1類B式	暗褐色・褐色	泥・細石	硬	中央	18.0×14.0	1.5		無紋	中縄・横ナデ・蛇腹		MY23-28と接合
MY23-25	第1類B式	褐色	泥	やや硬	端面付近	6.5×12.0	1.1		無紋	細縄・横ナデ		
MY23-28	第1類B式	暗褐色・褐色	泥・細石	硬	中央	18.0×14.0	1.5		無紋	中縄・横ナデ・蛇腹		MY23-24と接合
MY23-29	第1類B式	灰色	泥・細石	硬	中央	10.0×7.0	1.3		無紋	太縄・蛇腹		粘土紐
MY23-30	第1類B式	灰色・黄褐色	泥	やや軟	側面付近	9.0×7.5	1.3	内	蛇腹	横ナデ		
MY23-31	第1類B式	黄褐色	泥・細石	やや軟	側面付近	7.0×11.0	1.5	内	無紋	中縄・蛇腹		
MY23-32	第1類B式	淡灰色	泥・細石	軟	中央	9.0×12.5	1.4		無紋	蛇腹		
MY23-34	第1類B式	黄灰色	泥・細砂	やや軟	端面付近	10.0×11.5	1.4		無紋	中縄・横ナデ		
MY23-35	第1類B式	灰色	泥・細石	やや軟	中央	11.0×6.5	1.7		無紋	太縄・横ナデ		
MY23-36	第1類B式	黄褐色	砂・細石	やや硬	中央	10.0×7.0	1.2		無紋	中太縄		
MY23-38	第1類B式	灰色	砂	軟	端面・側面付近	7.0×7.0	1.3		蛇腹	蛇腹		
MY23-41	第1類B式	淡灰色	砂・細砂	やや軟	中央	10.0×11.5	1.5		無紋	太縄		
MY23-44	第1類B式	灰色	泥	硬	中央	7.0×7.0	1.5		無紋	中縄・横ナデ		
MY23-45	第1類B式	灰色	砂	やや硬	側面付近	6.5×5.5	1.5	内	無紋	中縄・横ナデ・蛇腹		
MY23-46	第1類B式	暗灰色	砂・細石	硬	側面付近	5.0×4.5	1.9	内	無紋	細縄		
MY23-48	第1類B式	灰色	砂・細砂	やや軟	中央	8.5×8.5	1.2		無紋	蛇腹		
MY23-51	第1類B式	灰色	泥	硬	中央	5.0×8.5	1.3		蛇腹	蛇腹		小片
MY23-53	第1類B式	黄褐色	泥・細砂	硬	中央	2.0×4.5	1.2		無紋	中縄		小片
MY32-04	第1類B式	淡灰色	砂・細石	やや軟	端面付近	10.5×10.5	1.5		無紋	中太縄・横ナデ		
MY32-06	第1類B式	淡灰色	泥・細砂	硬	端面・側面付近	9.0×16.0	1.5	内	横ナデ	細縄・横ナデ		
MY32-07	第1類B式	灰色	泥・細砂	やや軟	中央	12.0×13.0	2		無紋	細縄・横ナデ		土器？
MY32-08	第1類B式	黄褐色	泥・細砂	硬	側面付近	11.0×15.0	1.5	内	横ナデ	中縄・横ナデ・蛇腹		
MY32-09	第1類B式	灰色	泥・細砂	やや軟	端面・側面付近	9.5×11.0	1.1	内	横ナデ	中縄・横ナデ		
MY32-11	第1類B式	淡灰色	泥	軟	側面付近	11.0×12.5	1.2	内	無紋	中縄・蛇腹		
MY32-12	第1類B式	淡褐色	泥	硬	側面付近	10.0×13.0	1.5	内	無紋	太縄・横ナデ		
MY32-15	第1類B式	黄褐色	泥	硬	端面・側面付近	17.0×19.0	1.5	内	無紋	中縄		端面縄叩き・粘土紐
MY32-16	第1類B式	暗灰色	泥・細砂	硬	側面付近	9.5×17.0	1.5	内	横ナデ	中太縄・蛇腹	E. IV.	
MY32-18	第1類B式	灰色	泥・細石	やや硬	端面・側面付近	14.0×18.0	1.5	内	無紋	中太縄・横ナデ		
MY32-19	第1類B式	淡灰色	砂	やや硬	端面・側面付近	13.5×13.5	1.1	内	横ナデ	横ナデ		
MY32-22	第1類B式	褐色・黒色	泥・細石	やや軟	中央	12.0×9.0	1.5		無紋	蛇腹		
MY32-23	第1類B式	黄灰色	泥	やや硬	中央	8.5×15.0	1.5		無紋	細縄・横ナデ		
MY32-26	第1類B式	淡灰色	泥・細砂	軟	端面・側面付近	18.0×13.0	1.7	磨耗	無紋	中太縄・横ナデ		不定形・MY32-43と接合
MY32-27	第1類B式	褐色	泥・細石	軟	端面付近	11.0×13.0	1.5		無紋	中縄・横ナデ		
MY32-28	第1類B式	淡黄灰色	砂・細石	軟	側面付近	10.0×12.0	1.5	内	無紋	蛇腹		
MY32-29	第1類B式	灰色	泥・細砂	硬	端面付近	12.0×8.0	1.4		横ナデ	中縄・横ナデ		
MY32-30	第1類B式	淡褐色	泥・細砂	軟	中央	10.0×13.0	1.2		横ナデ	蛇腹		

遺物番号	分類	色調	胎土	焼き	部位	サイズ	厚さ	側面切断	凹面	凸面	旧注記	備考
MY32-31	第1類B式	灰色	泥・細石	やや軟	側面付近	10.0×7.0	1.5	内	無紋	細縄・横ナデ		
MY32-32	第1類B式	淡灰色	泥・細砂	硬	中央	12.0×11.0	1.3		横ナデ	中太縄・横ナデ		
MY32-34	第1類B式	淡黄褐色	泥・細石	やや軟	中央	13.0×10.0	1.3		横ナデ	横ナデ		
MY32-35	第1類B式	淡黄灰色	泥・細砂	軟	端面付近	9.5×10.0	1.5		無紋	ナデ		
MY32-36	第1類B式	灰色	泥・細砂	硬	中央	14.0×7.5	1.5		無紋	中太縄・横ナデ		
MY32-37	第1類B式	暗褐色・褐色	泥	やや硬	中央		1.8		無紋	中太縄・横ナデ		小片
MY32-39	第1類B式	淡灰色	砂・細砂	軟	中央	6.0×14.0	1.5		無紋	磨耗		
MY32-40	第1類B式	褐色	砂・細石	硬	中央	8.5×10.0	2		無紋	横ナデ		
MY32-41	第1類B式	灰色	泥・細砂・雲母	軟	中央	7.5×12.0	1.3		蛇腹	蛇腹		
MY32-42	第1類B式	淡黄褐色	泥・細砂	やや硬	中央		1.5		無紋	中縄・横ナデ		小片
MY32-43	第1類B式	淡灰色	泥・細砂	軟	端面・側面付近	18.0×13.0	1.7	磨耗	無紋	中太縄・横ナデ		不定形・MY32-26と接合
MY32-44	第1類B式	黄褐色・黒色	泥・細砂	硬	側面付近		1.5	内	無紋	中縄・蛇腹		小片・粘土紐
MY32-45	第1類B式	オレンジ	泥・細砂	やや軟	中央	6.0×10.0	1.5		無紋	太縄		
MY33-08	第1類B式	黄灰色～黄褐色	泥・細石	やや硬	端面・側面付近	11.0×19.0	1.4	内	無紋	中縄・横ナデ		MY33-27と接合
MY33-10	第1類B式	灰色	泥・細石	硬	中央	8.0×10.5	1.5		無紋	中太縄		
MY33-17	第1類B式	灰色・黄褐色	泥・細石・雲母	やや硬	中央	10.0×14.0	1.2		無紋	中縄		
MY33-18	第1類B式	淡黄褐色	砂・細砂	軟	側面付近	8.0×11.5	1.6	内	無紋	蛇腹		
MY33-20	第1類B式	暗褐色	砂・細石	硬	中央	7.5×11.0	1.2		無紋	太縄		
MY33-24	第1類B式	淡灰色	泥・細石	軟	側面付近		1.2	内	無紋	太縄		小片
MY33-27	第1類B式	黄灰色～黄褐色	泥・細石	やや硬	端面・側面付近	11.0×19.0	1.4	内	無紋	中縄・横ナデ		MY33-08と接合
MY33-30	第1類B式	淡黄褐色・灰色	泥・細砂	硬	端面・側面付近	8.0×8.0	1.1	内	無紋	蛇腹		
MY33-33	第1類B式	灰色	泥・細砂	硬	中央		1		無紋	蛇腹		小片
MY33-40	第1類B式	灰色	泥・細砂	硬	中央	10.0×5.0	1.5		ナデ	中縄・横ナデ		MY33-45と接合
MY33-43	第1類B式	灰色	砂・細石	やや軟	中央		1.4		無紋・小点?	中太縄		小片
MY33-45	第1類B式	灰色	泥・細砂	硬	中央	10.0×5.0	1.5		ナデ	中縄・横ナデ		MY33-40と接合
MY33-47	第1類B式	褐色	泥・細石	やや軟	中央		1.5		無紋	中縄・蛇腹		小片
MY33-48	第1類B式	灰色・黄褐色	砂	軟	中央		1		無紋	蛇腹		小片
MY36-004	第1類B式	灰色	泥	硬	側面付近	13.0×12.5	1.7	内	無紋	中縄・蛇腹		
MY36-006	第1類B式	暗灰色	泥・細石	硬	側面付近	9.5×13.5	1.5	内	無紋	中縄・蛇腹		
MY36-007	第1類B式	黄褐色	泥・細砂	硬	側面付近	12.5×17.5	1.5	内	無紋	中縄・蛇腹		
MY37-10	第1類B式	淡褐色	砂・細砂	やや硬	側面付近	10.5×15.0	1.4	内	無紋	蛇腹		
MY08-003	第2類	暗灰色	砂・細石	軟	端面付近	14.0×16.0	2		麻点大?	中縄・横ナデ		
MY08-004	第2類	灰色	砂・細石	やや軟	端面・側面付近	14.0×9.0	2.1	内	麻点大?	中縄・横ナデ		
MY08-011	第2類	灰色	泥・細砂	やや軟	端面・側面付近	10.0×1.0	1.5	内	麻点?	中縄・横ナデ		
MY08-015	第2類	灰色	泥・細砂	やや軟	端面・側面付近	9.0×8.0	1.4	内	小点	細縄・横ナデ		
MY08-019	第2類	黄褐色	泥・細砂	やや軟	端面付近	7.5×8.5	1		小点・横ナデ	中縄・横ナデ		
MY08-074	第2類	灰色	砂	やや軟	中央	4.5×7.0	1.5		小点	中縄・蛇腹		

遺物番号	分類	色調	胎土	焼き	部位	サイズ	厚さ	側面切断	凹面	凸面	旧注記	備考
MY08-081	第2類	灰色	泥・細石	硬	中央		1.7		麻点?	中太縄・横ナデ		小片
MY08-094	第2類	淡灰色	泥・細砂	硬	中央		1.2		小点	中縄・横ナデ		小片
MY10-77	第2類	褐色～黒色	砂・細石	軟	中央	8.5×9.0	1.7		麻点?・横ナデ	中縄・横ナデ		
MY13-11	第2類	灰色	泥・細砂	やや硬	中央	9.0×8.5	1.5		麻点?	中縄・横ナデ		粘土紐
MY20-25	第2類	灰色～淡褐色	砂	やや軟	端面・側面付近	13.0×9.0	1.5	内	麻点?・横ナデ	中縄・横ナデ		
MY20-26	第2類	淡灰色	泥・細砂	やや硬	端面・側面付近	9.5×9.0	1.2	内	小点・横ナデ	中縄・横ナデ		
MY20-28	第2類	暗灰色	泥・細石	硬	端面付近	11.0×16.0	1.5		麻点	中縄		端面縄叩き
MY20-29	第2類	灰色	泥	硬	側面付近	9.0×16.5	1	内	無紋(小点)	細縄・横ナデ		
MY20-34	第2類	灰色	泥・細砂	硬	端面・側面付近	9.0×11.0	1.3	内	麻点・横ナデ	中縄・横ナデ		
MY20-36	第2類	灰色	砂・細石	やや硬	側面付近	15.0×11.0	1.8	内	麻点	中縄・横ナデ		
MY20-43	第2類	灰色	泥・細砂	硬	中央	10.5×6.0	1.1		小点	中縄・横ナデ		
MY20-44	第2類	灰色	泥・細砂	やや軟	側面付近	10.0×9.5	1.2	内	小点?	細縄・横ナデ		
MY20-46	第2類	淡灰色	泥	硬	中央	12.0×10.5	1.5		麻点・条痕	中縄・横ナデ		
MY20-47	第2類	褐色	泥・細石	硬	側面付近	12.0×8.0	1.3	内	麻点・条痕	細縄・横ナデ		
MY20-48	第2類	灰色	泥	硬	側面付近	13.0×9.0	1.5	内	麻点	中太縄・横ナデ		
MY20-53	第2類	灰色	泥・細石	硬	端面付近	12.0×11.0	1.7		麻点・横ナデ	中縄・横ナデ		
MY20-56	第2類	灰色	泥・細砂	やや硬	中央	8.0×9.0	1.3		麻点・横ナデ	中縄・横ナデ		
MY20-71	第2類	灰色	泥・細砂	やや軟	中央	小片	1.5		麻点?	細縄・横ナデ		
MY21-11	第2類	褐色	泥・細石	やや軟	側面付近	12.0×13.0	1.5	内	麻点?	中太縄・横ナデ・蛇腹		
MY21-18	第2類	灰色	泥・細砂	やや硬	中央	10.0×15.5	1.3		麻点?・横ナデ	中太縄・横ナデ		
MY21-36	第2類	灰色	泥・細石	やや硬	端面付近	10.0×10.5	1.3		麻点大	細縄・横ナデ		
MY21-50	第2類	灰色	泥・細砂	硬	中央	7.0×8.5	0.7~1.1		麻点小?	細縄・横ナデ		土器の可能性あり
MY22-07	第2類	灰色	泥・細石	やや軟	側面付近	17.3×14.0	1.5	内	麻点?(磨耗)	中縄・横ナデ・蛇腹		
MY22-14	第2類	灰色	泥	硬	中央	8.5×18.0	1.3		小点	細縄・横ナデ		
MY22-16	第2類	暗灰色	泥	やや硬	中央	13.0×12.0	1.4		麻点	中縄・横ナデ		
MY22-28	第2類	暗灰色	泥	硬	端面付近	8.0×11.0	1		小点	細縄・横ナデ		
MY22-33	第2類	灰色	泥	やや硬	端面付近	8.0×9.0	1.1		麻点(小)	中縄・横ナデ		端面縄叩き
MY22-36	第2類	灰色	泥・細砂	やや硬	中央	6.8×8.2	1.3		小点	中縄		
MY22-42	第2類	灰色	泥・細砂	やや軟	端面付近	10.3×7.0	1.5		小点・ナデ	中縄・横ナデ		
MY22-54	第2類	暗灰色	泥	硬	中央	6.0×7.2	1		麻点	中太縄・横ナデ		
MY22-55	第2類	褐色	泥・細砂	硬	側面付近	9.0×7.7	1.6	内	麻点	中縄		
MY22-57	第2類	灰色～淡褐色	泥	やや硬	中央	7.0×5.6	1.2		小点	中縄・横ナデ		
MY23-26	第2類	黄灰色	泥・細石	硬	中央	12.5×12.5	1.3		麻点小	中縄		
MY23-27	第2類	淡灰色	泥	やや硬	端面付近	14.0×8.5	1.9		麻点	中縄・横ナデ		
MY23-33	第2類	淡灰色	泥・細砂	硬	中央	9.0×6.5	1.2		麻点?・横ナデ	細縄・横ナデ		
MY23-37	第2類	淡灰色	砂	やや硬	端面付近	8.0×7.5	1.4		麻点大?	中縄・横ナデ		
MY23-39	第2類	黄灰色	砂・細砂	軟	中央	8.5×10.5	1.4		麻点大	細縄		

遺物番号	分類	色調	胎土	焼き	部位	サイズ	厚さ	側面切断	凹面	凸面	旧注記	備考
MY23-40	第2類	暗灰色	砂・細石	やや軟	端面付近	7.0×8.0	1.6		麻点大	細縄		凹面に分割失敗線
MY23-42	第2類	灰色	泥・細石	硬	端面付近	11.5×6.5	1		小点	中太縄・横ナデ		凹面やや粗い
MY23-49	第2類	褐色	泥・細石	硬	側面付近	6.0×9.0	1.4	内	麻点	太縄		
MY24-05	第2類	灰色	泥	やや硬	側面付近	8.0×7.5	1.2	内	麻点大	中太縄		
MY24-07	第2類	灰色	泥	やや硬	側面付近	12.0×10.0	1.5	内	麻点大	太縄・横ナデ		
MY24-08	第2類	灰色	泥・細石	やや硬	端面付近	6.0×6.0	1.2		小点	中太縄・横ナデ		
MY24-09	第2類	灰色・黄褐色	泥	やや硬	側面付近	19.0×20.0	1.5	内	麻点大・ナデ	太縄		
MY24-13	第2類	黄褐色	泥・細砂	軟	端面・側面付近	11.0×7.5	1.5	内	麻点大	細縄・横ナデ		
MY32-10	第2類	黄褐色	砂	やや硬	中央	14.0×9.0	1.1		小点	中太縄・横ナデ		
MY32-13	第2類	灰色	泥・細石	やや軟	中央	13.0×12.0	2		麻点大?	中縄・横ナデ		
MY32-14	第2類	暗灰色	泥・細砂	硬	端面・側面付近	18.5×13.5	1.1	内	小点	細縄・横ナデ		歪み
MY32-17	第2類	褐色	泥・細石	硬	側面付近	12.5×16.0	1.7	内	麻点	中縄・横ナデ・蛇腹		
MY32-20	第2類	暗褐色	泥・細石	やや硬	側面付近	18.0×20.0	1.5	内	麻点	中縄		粘土紐
MY32-24	第2類	淡褐色・暗褐色	泥・細砂	軟	中央	13.0×13.0	1.8		麻点大	中縄・横ナデ		
MY32-25	第2類	暗褐色	泥	やや軟	端面付近	9.5×15.0	1.6		小点	中縄・横ナデ		
MY32-38	第2類	淡灰色	砂	硬	側面付近	5.0×13.5	1.1	内	麻点小	中太縄		
MY33-03	第2類	暗灰色	砂・細石	硬	側面付近	15.0×15.0	1.8	内	小点	中縄・横ナデ・蛇腹		
MY33-04	第2類	灰色	泥・細石	硬	側面付近	11.0×14.0	1.3	内	麻点大	中縄・蛇腹		
MY33-09	第2類	灰色・黄褐色	泥・細石	やや硬	端面・側面付近	10.0×16.5	1.6	内	麻点	中縄		端面にも縄叩き
MY33-22	第2類	褐色	泥・細砂	硬	側面付近	7.5×10.0	1.4	内	麻点	細縄・横ナデ		
MY33-26	第2類	淡灰色	泥	硬	中央	13.0×8.0	1.6		麻点?ナデ	中縄・横ナデ		
MY33-46	第2類	灰色	砂・細石	硬	中央		1.3		麻点?	中太縄・横ナデ		小片
MY36-005	第2類	灰色	泥・細砂	硬	側面付近	14.0×16.0	1.3	内	小点	中縄・横ナデ		
MY21-20	第2類?	暗褐色・褐色	砂・細石	やや硬	側面付近	16.0×15.0	1.7	内	麻点?磨耗	中太縄		粘土紐
MY33-21	第3類	灰色	泥	硬	端面付近	13.0×10.5	1.2		縄	中太縄		凹面痕跡明確
MY08-059	第4類	灰色	砂・細石	軟	側面付近	5.0×12.5	1.7	内	格子大	中縄・横ナデ		
MY08-097	第4類	褐色	砂	軟	中央		1.2		格子	中縄・横ナデ		小片
MY20-30	第4類	灰色	泥	硬	側面付近	11.5×11.0	1.5	内	横ナデ・格子	細縄・蛇腹		
MY20-70	第4類	淡黄褐色	泥	やや硬	側面付近	小片	2	内	格子大	ナデ		
MY21-26	第4類	暗灰色・褐色	砂	やや軟	中央	15.0×16.0	1.5		格子大	中縄・横ナデ		
MY21-35	第4類	黄褐色	砂	軟	中央	9.0×11.0	1.4		格子大	中縄		
MY21-55	第4類	黄褐色	泥・細石	軟	中央	5.5×6.0	1.3		格子大	中縄		小片
MY23-05	第4類	黄褐色	泥	やや軟	端面付近	11.0×14.5	1.2		格子	細縄・横ナデ		
MY23-43	第4類	黄褐色	泥	軟	中央	7.0×10.0	1.1		格子	細縄・横ナデ・蛇腹		
MY23-52	第4類	黄褐色	砂	軟	中央	3.0×7.0	1.5		格子	中縄		小片
MY24-10	第4類	灰色	泥・細砂	やや硬	中央	7.5×5.0	1.2		格子	細縄・横ナデ・蛇腹		

遺物番号	分類	色調	胎土	焼き	部位	サイズ	厚さ	側面切断	凹面	凸面	旧注記	備考
MY24-12	第4類	灰色	泥・細砂	やや軟	中央	7.5×12.0	1.5		格子大⇒格子小	細縄・横ナデ・蛇腹		
MY24-14	第4類	褐色	泥	やや硬	端面付近	16.5×13.0	1.6		格子大	中縄		端面糸きりで歪・粘土紐
MY24-15	第4類	黄褐色	泥	硬	端面・側面付近	12.0×14.0	1.5	内	格子	細縄・横ナデ		
MY32-05	第4類	暗灰色	泥	やや硬	中央	13.0×10.0	1.5		格子大	中縄・横ナデ・蛇腹		
MY32-21	第4類	灰色	泥・細石	やや軟	端面付近	12.0×11.0	1.9		格子大	中太縄・横ナデ		
MY33-02	第4類	灰色・暗褐色	泥・細石	硬	側面付近	15.0×14.0	2.2	内	格子大	中縄・横ナデ・蛇腹		MY33-19に似ている
MY33-05	第4類	灰色	泥	やや軟	中央	16.0×12.0	1.4		格子大	細縄・横ナデ	S. I ?	
MY33-14	第4類	灰色	砂	軟	中央	11.5×15.0	1.2		格子大	細縄・横ナデ		粘土紐
MY33-19	第4類	灰色・暗褐色	泥・細石	硬	側面付近	8.0×10.0	2.3	内	格子大	中縄	E. IV	MY33-02に似ている
MY33-25	第4類	暗灰色	泥・細石	硬	側面付近	5.0×9.0	1.5	内	格子	細縄・横ナデ		
MY33-28	第4類	オレンジ	泥・細石	軟	中央	11.0×7.0	1.5		格子大	中縄		
MY33-37	第4類	淡灰色	砂・細石	軟	端面付近	6.5×10.0	1.2		格子	細縄・横ナデ		
MY38-10	第4類	暗灰色	泥	硬	側面付近	6.0×10.5	1.2	内	格子	細縄・横ナデ		
MY20-31	第5類A式	褐色～灰色	泥・細砂	やや硬	側面付近	9.0×12.5	2	内	布目	中縄・横ナデ		
MY20-35	第5類A式	灰色～褐色	泥・細石	硬	中央	17.0×12.0	2.2		布目・横ナデ	中縄		
MY22-62	第5類A式	灰色	泥	やや軟	側面付近		1.3	内	布目	蛇腹		小片
MY23-04	第5類A式	灰色・褐色	泥・細砂	やや軟	端面・側面付近	12.0×13.5	1	内	布目	蛇腹		
MY23-18	第5類A式	灰色	泥・細石	硬	側面付近	10.0×11.0	1.2	内	布目	細縄・横ナデ		布目の上から叩き？
MY33-15	第5類A式	黒色・オレンジ	泥・細砂	硬	中央	14.0×7.0	2.1		布目	中縄・横ナデ・蛇腹		
MY21-53	第5類B式	黄褐色	砂・雲母	軟	中央	7.5×6.0	1.2		布目・格子大	中縄		磨耗
MY23-08	第5類B式	灰色	砂・細砂	やや硬	側面付近	10.0×14.0	1.2	内	布目	横ナデ		布目の上から叩き？
MY23-13	第5類B式	灰色	泥・細砂	硬	端面・側面付近	9.5×10.5	1.4	内	布目・格子大	細縄・横ナデ		端面付近の凹面のみ叩き
MY08-098	不明	黄灰色	砂	軟	中央		1.1		磨耗	中縄・横ナデ		小片
MY08-099	不明	黄灰色	砂	軟	中央		1.5		磨耗	中縄・横ナデ		小片
MY12-35	不明	灰色	砂・細石	軟	側面付近	4.5×8.0	1.2	内	磨耗	中縄・横ナデ		磨耗
MY12-48	不明	灰色	泥	やや軟	端面付近	5.0×6.0	0.7		磨耗	蛇腹		磨耗
MY12-49	不明	オレンジ	泥	軟	側面付近	5.0×5.0	1	内	磨耗	中太縄・横ナデ		
MY20-66	不明	灰色	砂・細石	軟	端面付近	小片	1.2		磨耗	中縄・横ナデ		
MY22-23	不明	黄灰色	砂・細石	軟	中央	8.0×12.3	1.3		無紋(磨耗)	蛇腹		
MY22-46	不明	灰色	砂・細石	軟	中央		1.6		磨耗	蛇腹		小片
MY23-10	不明	黄褐色	砂・細砂	軟	側面付近	15.5×13.5	1.2	内	磨耗	太縄・横ナデ		

* この他丸瓦か平瓦か判別不可能な瓦の小破片が約27点存在した

表4 磚観察表

遺物番号	種類	分類	色調	胎土	焼き	サイズ	厚さ	面1	面2	旧注記	備考
MY08-100	磚	第1類	灰色	砂・細石	軟	5.5×6.0	4	斜線紋様	凹凸		気泡多い
MY20-78	磚	第1類	灰色	砂・細砂	軟	12.0×12.0	3.2	斜線紋様	無紋		気泡多い
MY20-79	磚	第1類	灰色	砂・細砂	軟	14.0×10.5	2.9	斜線紋様	無紋		気泡多い
MY20-80	磚	第1類	灰色	砂・細砂	軟	10.3×6.0	4	斜線紋様	無紋		
MY21-63	磚	第1類	灰色	砂・細石	軟	10.0×11.5	3.9	斜線紋様	凹凸		気泡多い
MY21-64	磚	第1類	灰色	砂・細石	やや軟	13.0×13.5	3.4	斜線紋様	凹凸		気泡多い
MY21-66	磚	第1類	灰色	砂・細石	やや軟	10.5×15.0	3.8	斜線紋様	凹凸		気泡多い
MY21-67	磚	第1類	灰色	砂・細石	軟	10.0×7.0	3	斜線紋様	凹凸		気泡多い・角残る
MY22-63	磚	第1類	灰色	砂・細石	軟	8.5×9.5	3.7	斜線紋様	凹凸		気泡多い
MY22-64	磚	第1類	灰色	砂・細石	軟	7.8×6.5	3.5	斜線紋様	凹凸		気泡多い
MY23-70	磚	第1類	灰色	砂・細石	やや軟	9.0×7.0	3.3	斜線紋様	凹凸		気泡多い
MY23-72	磚	第1類	灰色	砂・細石	軟	10.0×9.0	3.9	斜線紋様	凹凸		気泡多い
MY23-74	磚	第1類	灰色	砂・細石	やや軟	10.0×7.0	3.9	斜線紋様	凹凸		気泡多い
MY32-62	磚	第1類	灰色	砂・細石	軟	10.0×11.5	4.2	斜線紋様	凹凸		気泡多い
MY32-64	磚	第1類	灰色	砂・細石	軟	9.5×9.0	3.2	斜線紋様	凹凸		気泡多い
MY32-65	磚	第1類	灰色	砂・細石	軟	12.0×10.0	3.5	斜線紋様	凹凸		気泡多い
MY33-57	磚	第1類	灰色	砂・細石	やや軟	11.0×8.0	3.8	斜線紋様	凹凸		気泡多い
MY33-58	磚	第1類	灰色	砂・細石	軟	8.0×7.0	3.8	斜線紋様	凹凸		気泡多い
MY33-59	磚	第1類	灰色	砂・細石	やや軟	8.0×8.0	3.7	斜線紋様	凹凸		気泡多い
MY33-60	磚	第1類	灰色・淡黄褐色	砂・細石	軟	9.5×12.0	3.8	斜線紋様	凹凸		気泡多い
MY20-77	磚	第2類	灰色	砂・細石	軟	12.0×9.5	3.2	斜線紋様	中縄		
MY23-71	磚	第2類	暗褐色	砂・細石	やや軟	12.0×11.0	2.8	斜線紋様	中縄		
MY23-73	磚	第2類	暗灰色	砂・細石	軟	8.0×8.5	2.2	凸線紋様	中縄		
MY32-63	磚	第2類	暗灰色	泥・細砂	やや硬	10.0×11.5	3	斜線紋様	中縄		
MY21-65	磚	第3類	灰色	砂・細石	軟	12.0×12.0	3.5	無紋	無紋	N. IV. 2	気泡多い
MY32-61	磚	第3類	暗灰色	泥・細砂	やや軟	13.0×8.5	2.6	無紋	縄交差		
MY35-78	磚	第3類	灰色	砂	軟	6.0×6.0	3	無紋	無紋		角のこる

5 - 2. 瓦から見た牧羊城の位置づけ

中村亜希子

牧羊城址内からは各種の軒丸瓦や丸瓦、平瓦が出土した。ここでは旧報告書(東亜考古学会 1931)に記載があるが現在は東京大学考古学研究室に保管されていないものも含めて出土した瓦を概観し、その年代を考察する。

軒丸瓦

瓦当を持つ軒丸瓦は第1類の無紋半瓦当(図1-1)や第2類の卷雲紋円瓦当(図1-3・4)に加え、旧報告書に「双馬画象半瓦当」と表現された双獣紋の半瓦当(図1-2)、「楽央字半瓦当」のように樹木紋の左右に文字を配した半瓦当(図1-5)等が出土した。

双獣紋の半瓦当は燕下都等といった戦国の燕の遺跡に出土例が見られるものであり(河北省文物研究所 1996)、これが燕の影響下で作られたということについてはまず疑いない。山東省に位置した斉の国でも半瓦当に双獣の紋様をあしらうことがあるが、この場合の獣紋は斉に特徴的な瓦当紋様である樹木紋の左右に置かれることが多い(山東省文物考古研究所 1999)。しかし牧羊城から出土した双獣紋瓦当は破片ではあるものの獣紋が主要な瓦当紋様であることは明らかだ。このような双獣紋瓦当は燕の様々な遺跡で出土している(劉・呉 2004)。

第2類の卷雲紋円瓦当は統一秦から漢初の遺跡に非常に多く見られる紋様の瓦当である(陝西省考古研究所 2004)。麻点紋の当て具を用いていることや、円瓦当糸切り技法によって不要な丸瓦部分を切断しているという製作技法上の特徴も、各地から出土する瓦当中心に円網、外区に卷雲紋を配するこの種の紋様の軒丸瓦によく見られるものである。

半瓦当の中央に樹木紋を持つ半瓦当は「楽央」字を持つものの他に「長未」字が配されたと思われるものの破片が出土した。おそらく漢代の吉祥言葉「長楽未央」が彫り込まれた円形の瓦当円盤を半裁したのだろう。なお、瓦当中央に見られる樹木紋は上述したように山東半島に位置した戦国の斉の瓦当の主要な紋様だ。樹木紋の瓦当は山東半島周辺地域では前漢になると瓦当円盤の中心に半球状隆起を持つ等というような変化を生じるようになる(中村 2006)。なお、漢代の典型的な瓦当紋様である卷雲紋瓦当の中心に大きな半球状隆起が配されるようになるのは山東省曲阜では前150年頃に建てられた靈光殿からである。よって、そのような瓦当紋様の影響を受けて生じたと思われる牧羊城の樹木紋瓦当も前150年頃以降のものであることが窺われる。一方、曲阜では前150年頃瓦当紋様の変化に伴って製作技法にも叩き板当て具技法から模骨法へと変化が生じる。さらに東京大学美術博物館に収蔵されている臨淄齊故城出土の樹木紋半瓦当を持つ軒丸瓦の中には丸瓦部分凹面に模骨法で作られたことを示す布目痕を持つものがあるため「楽央字半瓦当」も模骨法で作られた可能性があると言える。ただし、楽浪土城等では明らかに模骨法の普及が遅れていたことを考えると、多少製作技法の伝播にかかる時間を考慮する必要はある(谷 1984)。しかし、現在「楽央字半瓦当」は旅順博物館に収蔵されており実物を実見していないためこれ以上の推測は止めておく。

第1類のような無紋半瓦当は古くは西周から用いられてきた(陝西周原考古隊 1981)。しかし、無紋半瓦当が大量に出土した臨淄齊故城出土資料の製作技法の検討からは無紋半瓦当が必ずしも古いわけではなく、紋様を持つ瓦当と同時期に製作されていたものも多いということが判明した(中村 2006)。牧羊城出土の第1類半瓦当はというと、半瓦当糸切り技法より相対的に古い傾向がある半瓦

当ヘラ切り技法によるものがほとんどであり、かつ胎土や色調が後述する丸瓦第1類に酷似するものが多い。あるいは糸切り技法で切断された第2類の瓦当や「楽央字半瓦当」よりも古くから製作されていた可能性が高いと言える¹⁾。

丸瓦

丸瓦は旧報告書において分類がなされていなかったため今回初めて分類を行った。

第1類A式の丸瓦は径がやや大きいため旧報告書では平瓦として紹介されていた。玉縁は3cm以下と短く、凸面側の肩部は丸味を帯びている(図1-6)。丸瓦円筒を分割する際の分割截線はすべて円筒の外側、即ち凸面側に入れられていた。凸面は縄目を何本かの横ナデによって消している。凹面に表れる当て具痕はナデによって消されているもの以外はすべて無紋の当て具のものだった。これらの特徴は燕下都の郎井村10号作坊遺跡の戦国後期²⁾の遺構から出土した丸瓦に見られる特徴である(河北省文物研究所1996)。さらに戦国の燕の住居址と前漢の住居址が見つかった遼寧省の安杖子古城では両住居址から出土する丸瓦に明確な違いが見られるという(遼寧省文物考古研究所1996)。饜餮紋や山形紋といった燕の半瓦当が出土した戦国の住居址から出土した丸瓦は玉縁の短い第1類A式のような丸瓦であり、樹木紋の半瓦当を伴った前漢の住居址から出土する丸瓦は玉縁が長くなり凹面に布目痕を持つものが多くなるという³⁾。

第2類の丸瓦(図1-7)は当て具が麻点紋のものであり、この種の当て具痕は上述のように統一秦の瓦に多く見られるものである。丸瓦部分が厚手のものが見られ、分割截線も内外両方から入れたものが見られる等第1類A式の丸瓦とは明らかに様相が異なる。年代としては第2類の軒丸瓦が製作された年代とそう遠くはないだろう。

第3類に関しては数量が少なく、これが牧羊城出土瓦の中で少数派であったことは明らかだ。このような縄を巻いた棒状の当て具による痕跡は楽浪土城出土の瓦に多く認められるという(谷1984)。製作年代に関しては定かにできなかったが、あるいは遼東以東で用いられた製作技法だろうか。今後の検討を要する。

第4類は丸瓦ではさらに少数派である。見つかった破片が玉縁部分や端面付近など瓦の端の部分のみだったこともあり、格子目の当て具は丸瓦では部分的に用いられたものだった可能性も否定はできない(図1-8)。この当て具は後述するように平瓦では模骨法で製作された瓦の補足の叩きの際にも用いていた(平瓦第5類B式)ということから、叩き板当て具技法で製作された瓦の中では相対的に新しいものであるということが窺われる。

第5類は唯一模骨法で製作された丸瓦であり、凹面には胴部から玉縁部分まで連続した布目痕が観察される(図1-9)。第5類の丸瓦の玉縁部分は比較的長く、凸面の肩部もしっかりと段をなしている。分割截線はすべて瓦円筒の内側から入れられているところにも特徴が見られる。即ち、模骨によって丸瓦円筒を成形した後、粘土が乾燥する前に模骨を取り出し分割截線を入れたということを示している。模骨法の普及する時期が山東半島と大差がなければ第5類丸瓦の出現は前150年頃である。

平瓦

平瓦に見られる製作技法も基本的には丸瓦と同じである。唯一明らかに異なるのは分割截線を瓦円筒の外側から入れたものが存在しないということだ。このことには瓦円筒の径が関係していると思われる。丸瓦円筒の場合径が小さく分割截線をわざわざ円筒の内側に入れることは困難である。分割截線を入れるのにかかる労力を考えると円筒の外側に入れるほうが明らかに早い。しかし、最も新しい

と思われる第5類の丸瓦がすべて手間のかかる内側分割截線を採用していることを考えると、内側分割截線を入れるメリットがあったために外側分割截線が淘汰されていったということが窺われる。瓦円筒を乾燥させる際に内側分割截線を入れたものの方が歪みにくかった等といった理由からだろうか。一方で平瓦円筒は径が大きい為凹面側に手や工具を入れて作業するのが容易である。よってはじめから内側分割截線のみを用いていたのだろう。

第1類A式平瓦(図1-10)は凹面側にはっきりとした無紋の当て具痕を残すものであり、第1類A式丸瓦と共に燕下都の戦国後期の遺構から出土する瓦に酷似している(河北省文物研究所1996)。これらの瓦には牧羊城の瓦の多くに見られる蛇腹状の凸帯は見られない。

第2類平瓦に見られる麻点紋は第2類軒丸瓦や第2類丸瓦に見られる麻点紋と大差がない(図1-11)。一方で第3類は平瓦にはほとんど見られないということに若干注意が必要だ。逆に丸瓦ではごく少数しか見られなかった第4類は平瓦では一定の割合を占めており、格子目のサイズにも大小様々のバリエーションが見られる。このことから第3類及び第4類は丸瓦と平瓦である程度住み分けが行われていたことが窺われる。

第5類の平瓦は模骨で成形した後に格子目の当て具を用いて補足の叩きを行ったか否かでA式とB式に細分される。もっとも格子の当て具痕が確認されなかったA式(図1-13)はすべて破片資料であるため、完形になるとB式に分類されるかもしれない。そもそも第5類の平瓦は非常に少なく、全体における比で考えると明らかに丸瓦における第5類の占める割合よりも小さくなる。模骨法で作られた平瓦はしばしば凹面側をナデによって消されているため若干その割合は大きくなるかもしれないが、丸瓦に比べて平瓦では模骨法の普及が遅れていたと考える方が妥当であろう。模骨法によって成形された瓦にさらに当て具を用いて補足の叩きを行うB式(図1-12)の特徴が平瓦にのみ見られたのもこのことを裏付けていると言える。なお平瓦第5類B式のように製作された平瓦は山東省の臨淄齊故城でも出土しており⁴⁾、模骨法の伝播の過程で一定の地域で用いられた製作技法であることが窺われる。言わば第5類B式は瓦の製作技法が叩き板当て具技法から模骨法へと遷り変わる過渡期の段階のものだと考えられるのである。同時にここで用いられた当て具が格子目のもののみだったということから、格子目の当て具が各種の当て具の中で相対的に新しいものだったということも分かる。

第1類B式については丸瓦・平瓦共に成形の際の痕跡をナデによって消されてしまっているため年代を判断することは困難である。ただ、第1類B式が全体における大半を占めているということは、牧羊城の瓦は凹面にナデを施したものが一般的だったということの意味する。特に平瓦においてナデを施す率が高いことには、瓦円筒の状態で凹面にナデを施しやすいということと、葺かれた時に表面に出るのが凹面だということ等が関係するのだろう。

このように考察していくと図1のような瓦の編年案ができる。年代は大きく分けて第Ⅰ～Ⅲ期のⅢ期間に区分される。第Ⅰ期は牧羊城において瓦葺の建物が出現した段階である。丸瓦や平瓦は無紋の当て具を用いて成形したものであり、特に丸瓦は玉縁の形態が不安定で短く明らかに漢代の瓦とは異なった様相を呈する。これらは燕下都の戦国後期の遺構から出土した瓦に近似する。この時期に用いられていた軒丸瓦はやはり燕の遺跡に類例を求められる双獣紋半瓦当の軒丸瓦が考えられる。また、無紋の半瓦当も製作技法や胎土、色調などの特徴からこの時期に作り始められたと考えられる。続く第Ⅱ期は麻点紋の当て具を使用した瓦に代表される。もっとも第1類B式の瓦にはナデによって当て具の痕跡が見えなくなっているが凸面の状態などが第2類の瓦に近いものが多く存在する。年代としては円瓦当の紋様からおおよそ統一秦から漢初と考えられる。この時期に丸瓦円筒の分割の仕方に変化が生じた。

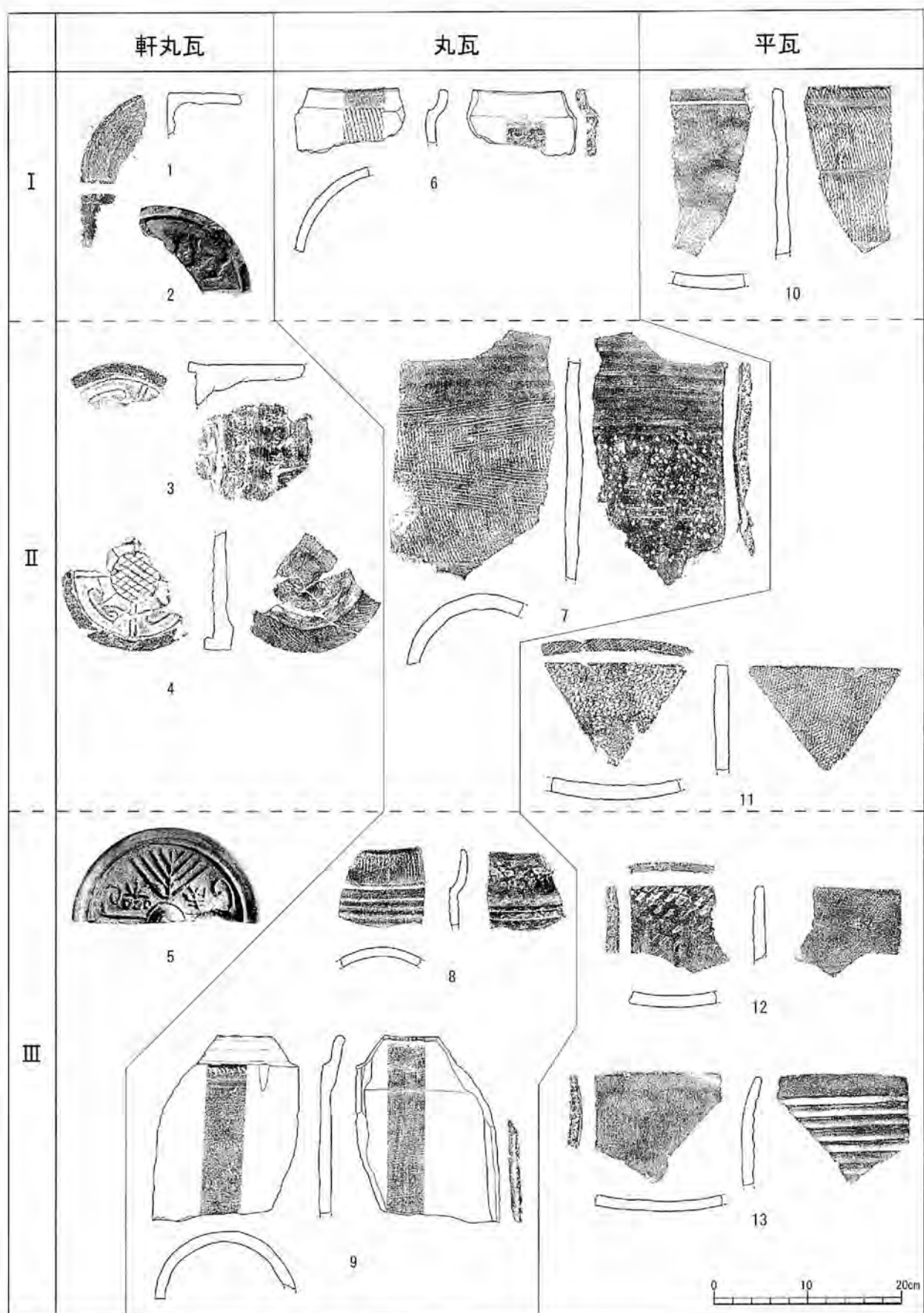


图1 牧羊城瓦編年案 縮尺約 1/3

第Ⅲ期になると瓦の製作に模骨法が導入されるようになる。格子目の当て具は瓦の製作が叩き板当て具技法から模骨法に変化する過渡期に用いられていた。即ち牧羊城においては第4類の瓦が叩き板当て具技法で製作されたもっとも新しい瓦であるということが窺われるのである。模骨法が普及する年代は対岸の山東半島では前150年頃と考えられる。牧羊城で模骨法が独自に生み出されたとは考え難く、主に山東で用いられていた樹木紋の瓦当が牧羊城から出土したことからも牧羊城への模骨法の伝播は海を渡って山東半島からもたらされたと考えられる。樹木紋の瓦当も戦国時代の斉国で用いられていたものとは異なり、中央に半球状の大きな隆起を持つ等といった漢代になってからの特徴が見られる。瓦当中央に大きな半球状隆起を持つようになるのは山東では模骨法の導入と同じ頃と考えられるため、「楽央」の文字を持つ牧羊城出土の樹木紋半瓦当も第Ⅲ期の遺物として比定されるのである。第Ⅲ期の下限を決めることは困難だが、後漢代に特徴的な紋様の瓦当が出土していないことや一般的に凹面全面をナデ消しはしない布目痕を持つ瓦(第5類)の数量が決して多くないことを考えると、後漢代に盛んに瓦が作られていたとは考え難い。後漢代に瓦葺の建物が存在していたことを否定するわけではないが、存在していたとしてもあくまで前漢代に建てられた建物に小規模な修復を行った程度だろう。

なお、旧報告書では報告された第1類土器に一部無紋半瓦当や平瓦等が含まれている。城壁を構成する土層からは土器は第1類土器しか出土しなかったという。もしこの中に瓦が含まれていたのだとすれば牧羊城の城壁が築かれた時には既にこの地に瓦葺の建物があったということになる。

遼東半島での戦国秦漢期の出土瓦に関する発掘報告や研究は非常に少ないため、牧羊城から出土した瓦の明確な前後関係を知ることは非常に困難である。かつ、今回扱った資料は全て破片資料であり、遼東半島先端に位置する牧羊城という遺跡における瓦の全貌を明らかにしたというには程遠い。今回の考察も推論の域を超えないものが多いことは否めない。しかし、幾つかの特徴を含め牧羊城出土の瓦の様相の一部を明らかにできたと思う。

注

- 1) 谷豊信氏によると旅順博物館に収蔵されている「楽央字半瓦当」の瓦当断面には糸切り痕が確認されたという。
- 2) 燕下都の報告書では早期・中期・晩期の時期区分を行っているが、ここでは便宜上、前期・中期・後期と訳す。
- 3) 報告書では安杖子古城から出土した樹木紋の半瓦当を戦国時代の遺物として扱っているが、これらの出土地点は前漢の住居址であることから漢代にこの地で樹木紋の瓦が葺かれていたことが理解される。
- 4) 東京大学美術博物館収蔵の米内山庸夫氏寄贈品に存在する。なお、米内山庸夫資料を観察する際には東京大学美術博物館の折茂克哉氏に大変お世話になった。

参考文献

- 河北省文物研究所 1996『燕下都』文物出版社
- 群力 1972「臨淄齊故城勘探紀要」『文物』1972年第5期、45-54頁
- 劉德彪・吳啓軍 2004『燕下都瓦当研究』河北大学出版社
- 張龍海 2006「山東臨淄齊國故城陶窯遺址的調查」『考古』2006年第5期、91-94頁
- 駒井和愛 1950『曲阜魯城の遺蹟』東京大学文学部考古学研究室
- 山東省文物管理处 1961「山東臨淄齊故城試掘簡報」『考古』1961年第6期、289-297頁
- 山東省文物考古研究所 1982『曲阜魯國故城』齊魯書社
- 山東省文物考古研究所 1999『新中国出土瓦當集録・齊臨淄卷』西北大学出版社

- 陝西省考古研究所 2004 『秦都咸陽考古報告』 陝西省考古研究所田野考古報告第 25 号
- 陝西周原考古隊 1981 「扶風召陳西周建築群基址發掘簡報」 『文物』 1981 年第 3 期、10-22 頁
- 谷豊信 1984 「西晋以前の中国の造瓦技法について」 『考古学雑誌』 第 69 卷 3 号 334-361 頁
- 1994 「戦国秦漢時代の軒丸瓦製作技法」 『MUSEUM』 通号 519 4-24 頁
- 東亜考古學會 1931 『牧羊城』 東方考古学叢刊甲種第 2 冊
- 中村亜希子 2006 『戦国秦漢期の瓦に関する考古学的研究—山東省を中心として—』 東京大学大学院人文社会系研究
科平成 18 年度修士論文（発表予定）
- 李舜林 1990 『齊故城瓦當』 文物出版社
- 遼寧省文物考古研究所 1996 「遼寧凌源安杖子古城址發掘報告」 『考古学報』 1996 年第 2 期、199-236 頁
- 林仙庭 2006 「秦磚漢瓦帝王家」 『考古煙台』 煙台市博物館編、齊魯書社、164-175 頁

6 - 1. 牧羊城出土の鉄器

笹田 朋孝

関野雄氏の記述（関野 1956）にあるように、東京大学に保管されていた鉄器の多くは未報告資料である。収納状況は、封筒に密封された状態と、標本ケースに収納された状態であった。

牧羊城調査時の学会の状況を見るに、鉄器に関する興味関心は未だ低く、『貔子窩』で高麗塞出土鉄器の自然科学的分析が行われたことの方がむしろ稀有な事例といえる。そのためか、鉄器の多くは、調査時に入れられた封筒（関東庁博物館の封筒）に密封されたままであった。封筒の表には調査時に鉛筆書きで、整理時に墨書きで、日付・出土地区・層位・出土地点（尺寸で表記）などが記載されている。土器や瓦など他の資料が、出土位置の情報を欠くことに対して、鉄器の多くは出土位置が判明している。一方、資料的価値の高かった鉄器は、標本ケースに再収納され、朱で注記されていた。外気に触れていたため錆化が著しく、原形を留めていない。また注記に関する台帳が存在しないため、出土地点は不明である。

資料の全容を示すため、一覧表を提示した（表1）。資料は調査区、層位ごとに並べた後に番号を付している。種別は、錆化の肉眼観察から鑄鉄か鍛鉄かを判断している。一部の資料では、鑄造割れと鍛造割れが共存している。器種名は、中国考古学における名称（「鑊」・「鏟」・「鍤」など）を採用すべきであるが、完形の資料が無い場合資料の細分は困難であった。間違いが多くなることを懼れ、簡略な名称を用いている。また、スペースの都合で「鉄器」という言葉は省いている。封筒の情報は、そのまま記載しているが、一部の略字などに関しては変換している。

全体の組成としては、鑄造品が多く、その殆どが袋部（空首・蓋部）をもつ資料である。これらは、加工具（刀子・斧・錐）ないしは農具（鑊・鏟・鍤）であり、武器の類は少ないといえる。

遺存状態の良い資料の図・写真を提示した（表中のグレーの網掛けと対応）。1～25は袋状の斧形製品である。突帯をもつ鉄斧、双合範と思しき資料は確認されなかった。1～4などは両刃で、斧としての機能が想定される。5は片刃で鑊の可能性がある。この他の袋状鉄斧は残片であり、器種分類は不可能であった。なお、1は、『牧羊城』の挿図10-2、PL.21-7に掲載されている。唯一の報告資料である。26・27は鉄鎌である。26は折り返し部をもつ鉄鎌であり、形態から秦漢以降であろう。27は小型の鎌であり、折り返し部などは確認されていない。28・29は鍬と釘である。時期が異なる可能性が高い。30は鉄鍬で茎部分の断面は六角形である。31・32は棒状製品である。33のように鉤状に折れ曲がっている。他にも棒状鉄器が多いが、これらには銅鍬の鉄柄が混じっている可能性がある。34・35は鍛冶滓である。浜田耕作氏の調査時にも鉄滓が採集されており、牧羊城内で鍛冶活動が行われていたことを指摘できる。

先秦兩漢時代の鉄器の研究史については、白雲翔の本に詳しい（白 2005）。発掘調査によって、この時期の鉄器がはじめて確認されたのは、1928年5月の貔子窩高麗塞遺跡の調査であり、その次が1928年10月の牧羊城の調査であるため、学史的に重要な資料といえる。資料的制約から組成を論じることは困難であるが、後述するように自然科学的分析を行っており、鉄器製作技術に関する一定の成果は得られている。

関野 雄 1956『中国考古学研究』 東京大学東洋文化研究所

白 雲翔 2005『先秦兩漢鉄器的考古学研究』 科学出版社 北京

収納番号	調査区	層位	No.	種別	器種	長さ	幅	高さ	重さ	観察所見	封筒情報ほか
MY25-1	N1区	第二層	1	鑄鉄	袋状鉄斧	—	—	—	45.0	複数片。	『十月七日/北第一区/第二層初メノ/黒ク澁タ所ノ内ノ鉄片。』
MY25-2	N1区	第二層	2	鍛鉄	棒状	—	—	—	4.0	複数片。	『北第一区/第二層黒土ノ中ノ鉄片及貝。』
MY25-3	N1区	第二層	3	鑄鉄	板状	4.4	4.8	0.5	12.5		『十月七日/北区第一区第二層/出土鉄片。』
MY25-4	N2区	第一層	1	鑄鉄カ	板状	12.8	8.6	0.6	137.5	斜めに切断されている。	『十月九日/北第二区第一層/深一尺六寸/西壁ヨリ三尺。』
MY25-5	N2区	第四層	1	鑄鉄	板状	—	—	—	64.5	複数片。	『十月十二日/北区第二区鉄片/四層出土。』
MY25-6	N2区	点上げ	1	鑄鉄	袋状鉄斧	9.5	4.6	1.9	166.5	鉄斧の下半部。	『北第二区/鉄器断片 深四尺/東口口/南ヨリ十一尺。』
MY25-7	N2区	点上げ	2		不明	—	—	—	18.0	棒状鍛造品と小型の板状鑄造品。	『十月十日/北区第二区/鉄片/南ヨリ九尺 深一尺八寸/西ヨリ二尺。』
MY25-8	N2区	点上げ	3	鑄鉄	板状	7.9	5.1	0.3	67.0	鑄鉄脱炭カ。	『十月十日/北第二区/鉄片/深三尺/西ヨリ六尺/南ヨリ十尺。』
MY25-9	N3区	表土中	1	鍛鉄	棒状	8.0	1.1	1.2	12.0	断面方形。	『十月七日/北第三区/表土中(深サ一尺以内)/鉄器片。』
MY25-10	N3区	表土	2	鍛鉄	棒状	8.6	0.4	0.4	8.0		『十月七日/北第三区表土中/鉄器片。』
MY25-11	N3区	第一層	1	不明	板状	4.2	5.3	1.0	48.5	鑄鉄脱炭カ。	『十月九日/北第三区(地下一〜二尺)/鉄器片。』
MY25-12	N3・4区	第二層	1	鑄鉄	板状	6.9	5.4	1.4	41.0		『十月十一日/北第三・四区第二層/鉄片。』
MY25-13	N3・4区	第二層	2	鑄鉄	袋状鉄斧	5.3	4.8	1.3	44.5		『十月十一日/北第三・四区第二層/鉄片。』
MY25-14	N4区	第四層	1	鑄鉄	板状	3.6	6.0	0.9	43.0		『十月十三日/北第四区/第四層/鉄器。』
MY25-15	N4区	第四層	2	鑄鉄	袋状鉄斧	5.1	6.9	1.2	111.0		『十月十三日/北第四区第四層/鉄器(深4.0尺)。』
MY25-16	N5区	点上げ	1	鑄鉄	袋状鉄斧	7.8	5.3	3.2	100.0		『十月十七日/北区第五区/鉄片 南ヨリ十一尺五寸/西ヨリ九尺五寸/深サ一尺五寸。』
MY25-17	N5区	点上げ	2	鑄鉄	袋状鉄斧	6.5	3.0	1.6	95.5		『十月十七日/北区第五区/鉄片 南ヨリ三尺/西ヨリ三尺/深二尺一寸。』
MY25-18	N5区	点上げ	3	鑄鉄	袋状鉄斧	8.5	3.4	3.1	111.0		『十月十八日/北五/鉄片/南ヨリ一〇尺/西ヨリ六尺/深二尺六寸。』
MY25-19	N5区	点上げ	4	鑄鉄	袋状鉄斧	10.7	3.1	2.4	98.5		『鉄片/十月廿日/北五/南ヨリ十一尺/西一尺/深四尺。』
MY25-20	N5区	点上げ	5	鑄鉄	袋状鉄斧	—	—	—	159.0		『十月廿日/北五/鉄器断片/深四尺二寸/南ヨリ十二尺/西ヨリ六尺五寸。』
MY25-21	N5区	点上げ	6	鍛鉄	刀子	3.7	1.2	0.4	5.0	小型。断面長三角形。先端欠損。	『十月十八日/鉄片/北五区/南ヨリ十尺/西ヨリ八尺/深2.5尺。』
MY25-22	N5区	点上げ	7	鍛鉄	鍬	3.9	1.3	0.3	4.5	茎部(断面六角形)欠損。	『十月十九日 北五/鉄片(鍬1) 從南七尺/西ヨリ五尺/深三尺。』
MY25-23	N5区	第二層	1	鍛鉄	円盤状	4.0	4.7	0.8	47.5		『十月十七日/北五第二層出土/鉄片。』
MY25-24	N5区	第四層	1	鍛鉄	鉤状	12.7	3.4	1.4	46.5	環付の鍬カ。	『北五/第四層下部鉄片/十月十九日。』
MY25-25	N6区	点上げ	1	鑄鉄	不明	—	—	—	157.5		『鉄片/北六区 南ヨリ三尺五寸/西ヨリ八尺/深五尺六寸。』
MY25-26	N6区	第一層	1	鑄鉄	板状	—	—	—	21.0		『十月十九日鉄片/北区第六区第一層出土/北ヨリ三尺/東ヨリ2.5尺/深八寸。』
MY25-27	E2区	不明	1	鍛鉄	板状	3.4	4.4	0.4	25.5		裏に「18」東二区一尺口ノ北の口口ノ鉛筆書き・『關東廳博物館』のプリント
MY25-28	E3区	表土	1	鑄鉄	締金具	1.9	2.1	1.9	14.5		『十月二日/東第三区/表面/鉄器。』
MY25-29	E3区	第二層	1	鍛鉄	棒状	8.3	0.5	0.5	5.0		『十月二日 東第三区第二層/鉄器数片。』
MY25-30	E3区	第二層	2	鑄鉄	袋状鉄斧	5.2	4.9	2.3	40.0		『十月二日 東第三区第二層/鉄器数片。』
MY25-31	E3区	第二層	3	鑄鉄	袋状鉄斧	4.7	3.2	1.4	37.5		『十月二日 東第三区第二層/鉄器数片。』
MY25-32	E3区	不明	1	鍛鉄	棒状	—	—	—	11.5		『十月五日/東第三区地下二尺の所ヨリ/発見(島村氏)/釘様鉄器。』
MY25-33	E4区	点上げ	1	鑄鉄	袋状鉄斧	6.1	5.0	1.9	50.5	やや薄手。	『十月六日/東第四区/鉄器片(地下二尺)。』
MY25-34	E4区	点上げ	2	鍛鉄	棒状	5.3	0.5	0.5	2.5		『十月六日/東第四区地下/三尺八寸(口口)。』
MY25-35	E4区	点上げ	3	鍛鉄	鈎針	3.1	2.3	0.3	1.0	軸部若干欠損。	『十月二日/東第四区/鉄製針鈎/鉄口/同レベル。』
MY25-36	E4区	点上げ	4		鉄滓	2.2	2.8	2.1	2.5	ガラス質。	『十月二日/東第四区/鉄製針鈎/鉄口/同レベル。』
MY26-1	E5区	点上げ	1	鍛鉄	棒状	4.7	1.6	0.5	5.5	両端欠損。	『十月六日/東第五区/鉄器(地下2.7尺)。』

表1-1 牧羊城出土鉄器一覧表

収納番号	調査区	層位	No.	種別	器種	長さ	幅	高さ	重さ	観察所見	封筒情報ほか
MY26-2	E5区	点上げ	2	鑄鉄	不明	2.8	1.4	1.1	7.0		『十月十二日/東第五区 深三尺五寸/西より六尺/南より五尺/鉄片/71』
MY26-3	E5区	点上げ	3	鍛鉄	板状	2.4	5.3	0.5	10.0	刃部あり。	『十月十三日/東第五区/深三尺六寸/北より五尺/東より三寸/鉄片/13. 9』
MY26-4	E5区	点上げ	4	鑄鉄	不明	—	—	—	63.5	骨片一点混じる。	『十月十二日/東第五区/深三尺/南より六尺/西より七尺/鉄片/70』
MY26-5	E5区	点上げ	5	鍛鉄	棒状	8.6	0.6	0.5	8.5		『十月十三日/東第五区/地下二尺五寸/鉄片/東より一尺/南より三尺』
MY26-6	E5区	点上げ	6	鑄鉄	板状	3.5	3.4	0.5	16.5		『十月十二日/東第五区/深二尺五寸/鉄片/南より一尺/西より五尺/72』
MY26-7	E5区	点上げ	7	鍛鉄	帯状	8.6	1.9	0.6	19.5	刃部なし。孔なし。	『十月十三日/東第五区/深三尺一寸/西より七尺三寸/南より五寸/鉄片/13. 11』
MY26-8	E5区	点上げ	8	鑄鉄	板状	3.8	3.0	0.7	18.0		『十月十四日/東第五区/深一尺八寸/北より五尺/東より二寸/鉄片/14. 1』
MY26-9	E5区	第三層	1	鑄鉄	袋状鉄斧	2.8	3.9	0.8	9.5	小片。	『十月十四日/東第五区第三層/14. 2/鉄片/(平たい方)東より二寸/北より四尺/(細い方)北より六尺五寸』
MY26-10	E5区	第三層	2	鍛鉄	棒状	5.3	0.8	0.6	5.0		『十月十四日/東第五区第三層/14. 2/鉄片/(平たい方)東より二寸/北より四尺/(細い方)北より六尺五寸』
MY26-11	E5区	深層	1	鑄鉄	袋状鉄斧	8.9	3.4	3.0	139.5	厚さ0.5cm。	『十月七日/東第五区深層(瓦層下地盤上)/鉄器片』
MY26-12	E5区	深層	2	鍛鉄	不明	4.2	4.4	1.2	11.0	厚さ0.2cm。	『十月七日/東第五区深層(瓦層下地盤上)/鉄器片』
MY26-13	E5区	深層	3	鑄鉄	不明	2.4	2.0	1.0	10.0		『十月七日/東第五区深層(瓦層下地盤上)/鉄器片』
MY26-14	E5区	深層	4	鍛鉄	棒状	—	—	—	8.0	複数片。	『十月七日/東第五区深層(瓦層下地盤上)/鉄器片』
MY26-15	E5区	地盤直上	1	鑄鉄	袋状鉄斧	12.8	4.6	3.6	101.0	縄力。	『十月七日/東第五区/鉄器/地盤直上(地下二尺七寸)』
MY26-16	E5区	南溝	1	鑄鉄	袋状鉄斧	4.8	2.6	1.8	22.0		『十月十一日/東第五区南溝/鉄片/(虫食いのため不明)63』
MY26-17	E5-6区南溝	第三層	1	鑄鉄	袋状鉄斧	5.8	2.8	1.2	63.5		『十月十七日/東第五第六区南溝第三層/17. 16/鉄片/西ヨリ二尺/北ヨリ五尺』
MY26-18	E5-6区南溝	点上げ	1	鑄鉄	板状	7.1	9.1	0.4	40.5		『十月十七日/東第五第六区南溝/深二尺/南ヨリ九尺/西ヨリ八尺/17. 8/鉄片』
MY26-19	E5-6区南溝	第三層	2	鑄鉄	帯状	4.8	1.4	1.6	31.0		『十月十七日/東第五第六区南溝第三層/17. 15/鉄片』
MY26-20	E5-6区南溝	点上げ	2	鑄鉄	板状	3.9	1.9	0.8	5.5		『十月十四日/東第五第六区南溝/深三尺/西より五寸/南より八尺/鉄片/14. 16』
MY26-21	E5-6区南溝	点上げ	3	鑄鉄	板状	4.1	6.4	0.7	29.5		『十月十四日/東第五第六区南溝/深四尺/東より五尺/南より七尺/14. 4/鉄片』
MY26-22	E6区	点上げ	1	鑄鉄	板状	5.7	3.7	1.0	35.5		『十月十四日/東第六区 深四尺三寸/北より六尺七寸/西より一尺五寸/14. 10/鉄片』
MY26-23	E6区	第二層	1	鑄鉄	袋状鉄斧	4.3	4.2	2.0	36.0		『十月十八日/東第六区第二層/深一尺九寸/鉄片/南ヨリ/東ヨリ三尺五寸』
MY26-24	E6区	第三層	1	鍛鉄	板状	4.2	2.8	0.4	10.5	断面が歪む。	『十月十四日/東第六区第三層/14. 3/鉄片』
MY26-25	E6区	第三層	2	鑄鉄	板状	7.6	3.6	0.8	30.5		『十月十四日/東第六区第三層/14. 4/鉄片』
MY26-26	E6区	第五層	1	鑄鉄	不明	—	—	—	15.5	複数片。	『十月十六日/東第六区第五層/17. 4/鉄片』
MY26-27	E6区	第五層	2	鍛鉄	板状	—	—	—	4.0	複数片。	『十月十七日/東第六区第五層/鉄片/17. 9』
MY26-28	E6区	南溝	1	鑄鉄	袋状鉄斧	5.1	2.9	1.3	42.5		『十月十九日/東第六区南溝/19.4/深四尺四寸/東ヨリ三尺八寸/北ヨリ0尺』
MY26-29	E6区	南溝	2	鍛鉄	棒状	—	—	—	12.5	複数片。	『十月十八日/東第六区南溝/鉄片/18. 9/深一尺九寸/北ヨリ0寸/東ヨリ三尺八寸』
MY26-30	E6区	南溝	3	鑄鉄	板状	6.1	3.2	0.4	38.0		『十月二十一日/第六区南溝/深四尺五寸/東七尺五寸/北0尺/鉄片』
MY26-31	E6区	南溝穴址中	4	鍛鉄	不明	—	—	—	9.5	複数片。	『十月十九日/東第六区南溝穴址中/鉄片』
MY26-32	E6区	南溝	5	鍛鉄	棒状	7.8	1.3	1.0	5.5		『十月十一日/東第六区南溝/鉄片/深一尺/東より一尺/北より二尺/53』
MY26-33	E6区	南溝	6	鍛鉄	棒状	4.4	1.2	1.0	5.5	下端尖る。	『十月十一日/東第六区南溝深一尺二寸/鉄片/東より五寸/北より二尺/54』

表1-2 牧羊城出土鉄器一覧表

収納番号	調査区	層位	No.	種別	器種	長さ	幅	高さ	重さ	観察所見	封筒情報ほか
MY26-34	E6区	南溝	7	鍛鉄	板状	5.9	3.1	0.4	18.5		『十月十二日/東第六区南溝深二尺二寸/鉄片/東より0尺/南より一尺/64』
MY26-35	E6区	南溝	8	鑄鉄	袋状鉄斧	—	—	—	37.0	複数片。	『十月十二日/第六区南溝深四尺三寸/南より三尺五寸/東より三尺五寸/鉄器/72』
MY26-36	E7区	点上げ	1	鍛鉄	板状	6.4	5.2	0.7	50.0	木質や魚骨等が付着。	『十月二十三日/東第七区/深六尺/東より五尺/鉄片 南六尺』
MY26-37	E7区	点上げ	2	鍛鉄	袋状鉄斧	4.1	3.1	0.8	29.5	小礫付着。	『十月七日/東第七区/鉄片/深一尺四寸/東より二尺/南より五寸』
MY26-38	E7区	点上げ	3	鍛鉄	棒状	5.1	0.6	0.5	4.5	釘か。	『十月十四日/東第七区 深四尺五寸/北より0尺/西より三尺/14. 50』
MY26-39	E7区	点上げ	4	鑄鉄	袋状鉄斧	—	—	—	257.0	複数片。	『十月六日/東第七区/深二尺二寸/南より一尺七寸/東より五寸五寸』ママ
MY26-40	E7区	点上げ	5	鑄鉄	袋状鉄斧	14.2	6.8	3.8	864.0	錆。	『十月六日 鉄器/東第七区 深二尺七寸/東より四尺/北より二尺七寸』
MY26-41	E7区	第二層	1	鍛鉄	棒状	11.4	1.9	1.0	36.5	断面方形。	『十月二十日/南第二区第二層/鉄器』
MY26-42	E7区	第二層	2	鍛鉄	棒状	4.9	0.9	0.4	4.0	断面扁平。	『十月二十日/南第二区第二層/鉄器』
MY26-43	E7区	第二層	3	鑄鉄	板状	5.3	2.0	0.6	12.5	刀子の可能性も。	『十月二十日/南第二区第二層/鉄器』
MY26-44	E7区	第二層	4	鑄鉄	袋状鉄斧	4.8	2.4	0.7	13.0	一文字働か。	『十月二十日/南第二区第二層/鉄器』
MY26-45	E7区	第二層	5	鑄鉄	袋状鉄斧	—	—	—	148.5		『十月二十日/南第二区第二層/鉄器』
MY26-46	E7区	第四層・点上げ	1	鍛鉄	鉄鏃	20.4	3.2	0.6	137.0	右上に折り返し。	『東第七区第四層/深三尺五寸/西より三尺五寸/南より五寸/鉄器/十月六日』
MY26-47	E7区	第四層・点上げ	2	鍛鉄	棒状	4.1	0.5	0.6	2.0	釘ないしは針か。	『十月六日/東第七区第四層/西より二尺/北より三尺』
MY26-48	E7区	第四層・点上げ	3	鍛鉄	板状	3.5	1.7	0.5	7.0		『十月六日/東第七区第四層/西より二尺/北より三尺』
MY26-49	E8区	点上げ	1	鑄鉄	袋状鉄斧	6.3	5.4	1.6	70.5		『十月二十二日/東第八区/鉄器/深五尺八寸/北より五尺/西より四尺八寸』
MY26-50	E8区	点上げ	2	鑄鉄	不明	5.6	4.9	3.1	107.0	塊状。	『十月二十一日/東第八区/鉄塊/三尺二寸/北三尺/西八尺三寸』
MY26-51	E8区	表土のカクラン	1	鑄鉄	板状	3.9	2.9	0.3	12.0		『十月十八日/東第八区 深さ一尺七寸/表土の攪乱せる者口』
MY27-1	不明	不明	1	鑄鉄	袋状鉄斧	9.6	7.8	3.9	581.0	錆か。	小箱入り
MY27-2	不明	不明	2	鑄鉄	板状	12.5	8.3	0.8	247.0		小箱入り
MY27-3	不明	不明	3	鍛鉄	半筒状	14.1	5.9	2.1	167.5	籠手か。厚0.5cm。	小箱入り(500)
MY27-4	不明	不明	4	鑄鉄	袋状鉄斧	7.1	7.0	3.3	121.0		小箱入り(589/A)
MY27-5	不明	不明	5	鍛鉄	板状	12.8	8.1	1.5	141.5	MY27-3に似る。	小箱入り(589/A)
MY27-6	不明	不明	6	鍛鉄	不明	—	—	—	26.5		小箱入り(589/A)
MY27-7	不明	不明	7	鍛鉄	棒状	7.1	0.6	0.7	9.0		小箱入り(8~10は同じ箱)
MY27-8	不明	不明	8	鍛鉄	棒状	8.1	0.6	0.6	11.5		小箱入り(8~10は同じ箱)
MY27-9	不明	不明	9	鍛鉄	棒状	9.6	0.7	0.4	7.5	鏃か。	小箱入り(8~10は同じ箱)
MY27-10	不明	不明	10	鑄鉄	袋状鉄斧	10.4	6.8	2.0	283.5	押区10-2 PL.XX 1-7.	小箱入り(8~10は同じ箱)
MY27-11	不明	不明	11	銅	不明	4.6	0.7	0.6	5.5	「銅器残片」として既報告。	小箱入り(11~13は同じ箱)
MY27-12	不明	不明	12	鍛鉄	不明	—	—	—	43.0	釘か。	小箱入り(11~13は同じ箱)
MY27-13	不明	不明	13	鑄鉄	不明	—	—	—	146.5	複数片。	小箱入り(11~13は同じ箱)
MY27-14	不明	不明	14	鑄鉄	袋状鉄斧	10.6	6.2	2.7	247.5	錆か。	小箱入り(117)
MY27-15	不明	不明	15	鍛鉄	不明	—	—	—	87.5	複数片。	小箱入り(642)
MY27-16	不明	不明	16	鍛鉄	刀子か	—	—	—	46.0	複数片。	小箱入り
MY27-17	不明	不明	17	鍛鉄	薄板状	—	—	—	45.0	複数片。	小箱入り
MY27-18	不明	不明	18	鍛鉄	薄板状	—	—	—	45.0	複数片。	小箱入り
MY27-19	不明	不明	19	鍛鉄	棒状	—	—	—	96.5	複数片。	小箱入り
MY27-20	不明	不明	20	銅	棒状	—	—	—	8.0	複数片。	小箱・以下同じ箱
MY27-21	不明	不明	21	銅	玉状	1.3	0.9	0.5	3.5		小箱・朱書き「12」
MY27-22	不明	不明	22	銅	板状	2.4	1.0	0.4	3.0		小箱・朱書き「13」
MY27-23	不明	不明	23	銅	三角形	2.9	0.9	0.4	4.0		小箱・朱書き「15」
MY27-24	不明	不明	24	銅	不明	1.8	2.1	1.0	11.5		小箱・朱書き「14」
MY27-25	不明	不明	25	鍛鉄	棒状	—	—	—	25.0	複数片。錆か。	小箱
MY27-26	不明	不明	26	鍛鉄	棒状	—	—	—	35.5	複数片。錆か。	小箱
MY29-1	S1区	点上げ	1	鑄鉄	袋状鉄斧	7.1	7.4	1.5	113.5		『十月二十日/南第一区 深三尺四寸/東五尺三寸/南一尺』
MY29-2	S1区	点上げ	2	鑄鉄	袋状鉄斧	10.4	7.6	3.0	233.0	大型。	『十月二十日/南第一区 深三尺/南より一尺/東より一尺三寸』
MY29-3	S1区	第一層	1	鑄鉄	鉄片	3.7	1.6	1.3	16.0		『十月十四日/南第一区第一層/従北三尺/従東三尺八寸/深一尺/鉄塊』
MY29-4	S1区	第一層	2	鍛鉄	折釘	10.5	0.8	0.8	38.5	頭部が重厚な造り。	『十月十四日/南第一区第一層/従北四寸/従西六寸/深一尺/鉄釘』
MY29-5	S1区	第一層	3	鑄鉄	不明	—	—	—	9.5		『十月十五日/南第一区第一層/従北二尺/従西四尺/深一尺九寸/鉄塊』

表1-3 牧羊城出土鉄器一覧表

収納番号	調査区	層位	No.	種別	器種	長さ	幅	高さ	重さ	観察所見	封筒情報ほか
MY29-6	S1区	第二層・ 点上げ	1	鍛鉄	鉤状	8.1	3.1	0.6	7.0	鍛造により断面を 円形にする。	【十月十四日/南一區第二層/從南三尺二寸 從西四尺六寸/深一尺三寸/鉄鉤】
MY29-7	S1区	第二層・ 点上げ	2	鑄鉄	袋状鉄斧	7.9	2.9	1.5	70.0	やや細身。	【十月十五日/南一區第二層/從北二尺四寸 從東五尺/深一尺八寸/鉄器 斧残片】
MY29-8	S1区	第二層・ 点上げ	3	鑄鉄	袋状鉄斧	4.7	6.6	1.2	73.0		【十月十五日/南一區二層/從北三尺 從東 四尺四寸/深二尺四寸/鉄塊】
MY29-9	S1区	第二層・ 点上げ	4	鑄鉄	袋状鉄斧	7.6	7.9	2.1	141.0	刃部やや弧を描 く。	【十月十五日/南第一區第二層/從南一尺 從東一尺/深一尺八寸/鉄片】
MY29-10	S1区	第二層・ 点上げ	5	鑄鉄	袋状鉄斧	5.2	1.8	1.9	23.5	やや細身。	【十月十五日/南一區第二層/深一尺五寸從 北五寸從西三尺/鉄塊】
MY29-11	S1区	第二層・ 点上げ	6	鍛鉄カ	板状	4.3	4.2	0.8	21.5		【十月十五日/南一區二層/深二尺三寸/從 西三尺五寸從北三尺/鉄塊】
MY29-12	S1区	第二層	7	鑄鉄	板状	3.9	3.4	0.8	19.0		【十月十五日/南一區二層/所得殘鉄】
MY29-13	S1区	第二層	8	鑄鉄	不明	—	—	—	15.5	複数片。	【十月十五日/南一區二層/所得殘鉄】
MY29-14	S1区	第二層	9	不明	鉄滓	—	—	—	12.5	発泡。	【十月十五日/南一區二層/所得殘鉄】
MY29-15	S1区	第二層・ 点上げ	10	鑄鉄	板状	4.2	3.1	0.9	20.5		【十月十六日/南一區第二層/從東(南の間 違)三尺 從(西)四尺二寸/深二尺九寸/鉄 塊】
MY29-16	S1区	第二層・ 点上げ	11	鑄鉄	袋状鉄斧	4.8	4.2	1.5	55.5		【十月十六日/南一區二層/深二尺七/從東 三尺/從南一尺/鉄塊】
MY29-17	S1区	三層	1	不明	鉄滓	—	—	—	35.0	発泡。	【十月十五日/南一區三層/從西一尺七寸/ 深二尺一寸/從北一尺/鉄塊】
MY29-18	S2区	点上げ	1	鑄鉄	板状	3.3	2.3	0.5	9.0		【十月十八日/南二區 从西四尺三寸/从南 五尺四寸 深二尺三寸/鉄片】密封
MY29-19	S2区	点上げ	2	鑄鉄	板状	6.8	6.0	0.5	48.0		【十月十八日/南二區 从西四尺三寸/从南 五尺四寸 深二尺三寸/鉄片】密封
MY29-20	S2区	点上げ	3	鍛鉄	柄部	7.8	2.0	1.0	30.5	刀子の柄カ。	【十月二十日 深三尺九寸/南第二區 東方 六尺五寸/南方一尺五寸/鉄片】密封
MY29-21	S2区	点上げ	4	鑄鉄	塊状	5.7	3.2	3.3	71.0		【十月十八日/南第二區/从西五尺深一尺一 寸/鉄片】
MY29-22	S2区	点上げ	5	不明	不明	—	—	—	28.0	複数片。	【十月十八日/南二區 从北十寸/从西七寸 深二十寸/鉄塊】
MY29-23	S2区	点上げ	6	鍛鉄	棒状	6.9	1.0	0.7	14.0		【十月十八日/南第二區 从口(西)十五寸/ 从北二十寸 深二十五寸/鉄器】
MY29-24	S2区	点上げ	7	鍛鉄	板状	5.9	3.6	1.5	44.0	刃部は確認でき ない。	【十月二十日/南第二區 深三尺六寸/東ヨリ 七尺八寸/南ヨリ四尺四寸/鉄片】
MY29-25	S2区	点上げ	8	鑄鉄	板状	—	—	—	38.0	複数片。	【二十一日/南II 深三尺五/東ヨリ二尺七寸 /南ヨリ二尺七寸/鉄片】
MY29-26	S2区	点上げ	9	鑄鉄	袋状鉄斧	5.0	3.2	2.4	32.5		【十月十四日/南第二區(八幡)/地下二尺四 寸/鉄斧破片?】
MY29-27	S2区	点上げ	10	鑄鉄	袋状鉄斧	6.4	3.9	3.2	42.5		【十月十四日/南第二區(八幡)/地下二尺四 寸/鉄斧破片?】
MY29-28	S2区	点上げ	11	鍛鉄	棒状	2.3	0.5	0.5	1.5		【十月十七日/南第二區 深一尺一寸/从南 三尺六寸 从東五尺七寸/鉄塊】
MY29-29	S2区	点上げ	12	鑄鉄	不明	—	—	—	39.0	複数片。	【十月十九日/南第二區/深二尺八寸/東ヨリ 二尺/北ヨリ五寸/鉄片】
MY29-30	S2区	点上げ	13	鑄鉄	鉄斧	5.5	5.4	1.3	46.5	やや薄手	【二十一日/南第二/深三尺五寸/東ヨリ一尺 /南ヨリ二尺三寸】
MY29-31	S2区	点上げ	14	鍛鉄	袋状鉄斧	5.2	4.6	0.2	28.5	薄い	【十月十八日/南第二區/从西三十寸 北0 深二十五寸/鉄塊】
MY29-32	S2区	点上げ	15	鍛鉄	鉄鎌	11.7	2.5	0.5	57.0	基部を欠く鉄鎌カ	【十月十八日/南第二區/深二尺四寸/从東 一尺三寸 从北三尺三寸/鉄片】
MY29-33	S2区	点上げ	16	鍛鉄	棒状	—	—	—	9.5	複数片。	【十月十八日/南二區/从西三十寸/从北二 十寸/深二十六寸/鉄塊】
MY29-34	S2区	点上げ	17	鑄鉄	板状	7.3	3.9	1.8	102.5	重量感があり、や や厚手。	【十月十八日/南第二區/从南四十三寸 从 東十五寸/深二十寸/鉄器】
MY29-35	S2区	第一層	1	鑄鉄	板状	7.0	5.8	0.6	90.5	挟りあり。	【十月十六日/南二區第一層/从西三尺从北 三尺深一尺/鉄片】
MY29-36	S2区	第一層	2	鍛鉄	鉤	3.4	8.1	0.6	21.5	一般的な鉤。新し い。	【十月十六日/南二區一層/从西四尺一寸 从南四尺二寸/深八寸/鉄鉤】
MY29-37	S2区	第一層	3	鍛鉄	棒状	4.7	0.6	0.4	5.5	断面方形。	【十月十六日/南二區一層/从南四尺四寸 从西四尺七寸/深七寸/鉄具残片】
MY29-38	S2区	第三層	1	鑄鉄	板状	—	—	—	10.5	複数片。	【十月十九日/南第二區 第三層/鉄片】密封
MY29-39	S2区	第三層	2	鑄鉄	板状	—	—	—	7.5	複数片。	【十月十九日/南第二區 第三層/鉄片】密封
MY29-40	S2区	第三層	3	不明	無	—	—	—	—	無	【十月十九日/南第二區第三層/鉄片(中口 刀子様のものあり)/】(東北部)】

表1-4 牧羊城出土鉄器一覧表

収納番号	調査区	層位	No.	種別	器種	長さ	幅	高さ	重さ	観察所見	封筒情報ほか
MY29-41	S4区	一括	1	不明	不明	—	—	—	81.5	大型の白封筒に在中。	『十月十五日/南第四区/鉄器片』
MY29-42	S4区	一括	2	鍛鉄	板状	6.5	4.2	0.6	34.0	325.0g分別不可能	『十月十六日/南第四区/鉄器破損物』
MY29-43	S5区		1	鑄鉄	袋状鉄斧						
MY30-1	S6区	点上げ	1	鑄鉄	板状	—	—	—	36.5	複数片。	『十月十八日/南第六区/鉄器/(地下四尺)』
MY30-2	S7区	第一層	1	鑄鉄	板状	4.8	3.9	0.4	31.0	刃部未確認。	『十月十九日/南第七区/第一層(0~1.5尺)/鉄片』
MY30-3	S7区	第一層	2	鑄鉄	板状	4.4	3.0	0.5	16.0	鉤状のくびれあり。	『十月十九日/南第七区/第一層(0~1.5尺)/鉄片』
MY30-4	S7区	第一層	3	鍛鉄	棒状	2.8	0.7	0.6	4.0	断面長方形。	『十月十九日/南第七区/第一層(0~1.5尺)/鉄片』
MY30-5	S7区	第二層	1	鑄鉄	不明	—	—	—	48.5	骨や石も混じる。	『十月十九日/南第七区/第二層/鐵器』密封
MY30-6	S7区	第二層	2	鍛鉄	釘か	2.8	0.8	0.7	6.5	MY30-4と接合。	『十月十九日/南第七区/第二層/鐵器』密封
MY30-7	S7区	第三層	1	鑄鉄	不明	—	—	—	16.5	複数片。	『十月二十一日/南第七区第三層/鐵器』
MY30-8	S7区	第三層	2	鍛鉄	棒状	7.2	1.1	1.0	32.5	やや反る。	『十月二十一日/南第七区第三層/(深五尺二寸)/鐵棒』
MY30-9	S7区	第四層	1	鑄鉄	不明	—	—	—	56.0	複数片。	『十月二十二日/南第七区第四層/鉄斧(深六尺)』
MY30-10	S7区	第四層	2	鑄鉄	袋状鉄斧	10.3	7.6	5.7	424.0	土が多く付着。	『十月二十二日/南第七区第四層/鉄器』
MY30-11	S7区	第四層	3	鑄鉄	不明	—	—	—	49.5	複数片。	『十月二十二日/南第七区第四層/鉄器』
MY30-12	S7区	第四層	4	鍛鉄	棒状	7.9	2.1	1.7	29.0	釘。	『十月二十二日/南第七区第四層/鉄器』
MY30-13	W9小区	不明	1	鑄鉄	不明	—	—	—	78.0	複数片。	『十月二十一日/西第九小区/鉄片』
MY30-14	W9小区	点上げ	1	鍛鉄カ	板状	3.9	3.8	0.9	17.0		『十月二十二日/西第九小区/深二尺六寸/西ヨリ二尺四寸/北ヨリ八寸/鉄片/21.1』
MY30-15	W9小区	点上げ	2	鑄鉄	不明	—	—	—	23.0	複数片。	『十月二十一日/西第九小区/深一尺九寸/北ヨリ三尺/東ヨリ四尺/鉄片』
MY30-16	W14区	点上げ	1	鍛鉄	棒状	3.7	0.6	0.6	12.0	釘カ。	『西十四区 深四尺/西ヨリ二尺/南ヨリ一尺/鉄片』
MY30-17	W14区 小区	点上げ	2	鑄鉄	板状	—	—	—	45.5	複数片。	『十月二十三日/西第十四小区/鉄片/北ヨリ三尺六寸/西ヨリ四尺三寸/深七寸』
MY30-18	W15・14 小区	第二層	1	鑄鉄	板状	—	—	—	63.5	複数片。	『十月二十三日 西第十五区及第十四小区西半/鉄片/第二層』
MY30-19	W15区	点上げ	1	鍛鉄	板状	5.4	7.4	0.5	50.5	側縁が僅かに立つ。	『十月二十二日/西第十五区/深一尺四寸/東ヨリ二尺一寸/南ヨリ二尺一寸/鉄片』
MY30-20	W15区	点上げ	2	鑄鉄	袋状鉄斧	—	—	—	163.5	複数片。	『十月二十三日/西十五小区/三尺七寸/東ヨリ一尺七寸/南ヨリ三寸/鉄器』
MY30-21	不明	不明	1	鍛鉄	棒状	2.2	0.6	0.5	1.5		『十月十六日/鉄片 16.7/深四尺/西方五尺/南方三尺』
MY30-22	E2区	不明	2	鍛鉄	板状	3.4	4.4	0.4	—		裏に「18」東二区一尺口/北の口口」という鉛筆書き・『關東廳博物館』のプリント
MY30-23	不明	不明	3	鍛鉄	板状	5.8	3.7	1.2	57.5	平面形は台形。	裏に「南ヨリ二尺/東ヨリ一尺二/深二」の鉛筆書き
MY30-24	不明	不明	4	鍛鉄	棒状	4.6	1.1	0.8	5.5	錐カ。	裏に「西ヨリ九寸/北二尺一/深二尺』
MY30-25	不明	不明	5	鑄鉄	不明	—	—	—	24.5	複数片。	『深2.8尺/鉄片/南ヨリ5.5尺/西壁/十月十一日』
MY30-26	不明	不明	6	鑄鉄	板状	5.6	6.4	2.3	91.0	複数片。	紙箱入り
MY30-27	不明	不明	7	鑄鉄カ	板状	6.9	9.8	0.8	100.5	複数片。	紙箱入り
MY30-28	不明	不明	8	鑄鉄	袋状鉄斧	7.9	6.8	1.5	212.5	複数片。	紙箱入り
MY30-29	不明	不明	9	鑄鉄	板状	—	—	—	45.0	複数片。	上と同じ紙箱
MY30-30	不明	不明	10	鑄鉄	板状	8.6	5.6	0.5	73.5	複数片。	朱で「44」紙箱入り
MY30-31	不明	不明	11	鑄鉄	板状	—	—	—	116.0	複数片。	朱で「27」・10と同じ紙箱
MY30-32	不明	不明	12	鑄鉄	板状	—	—	—	228.5	複数片。	E5区出土カ。

表1-5 牧羊城出土鉄器一覧表

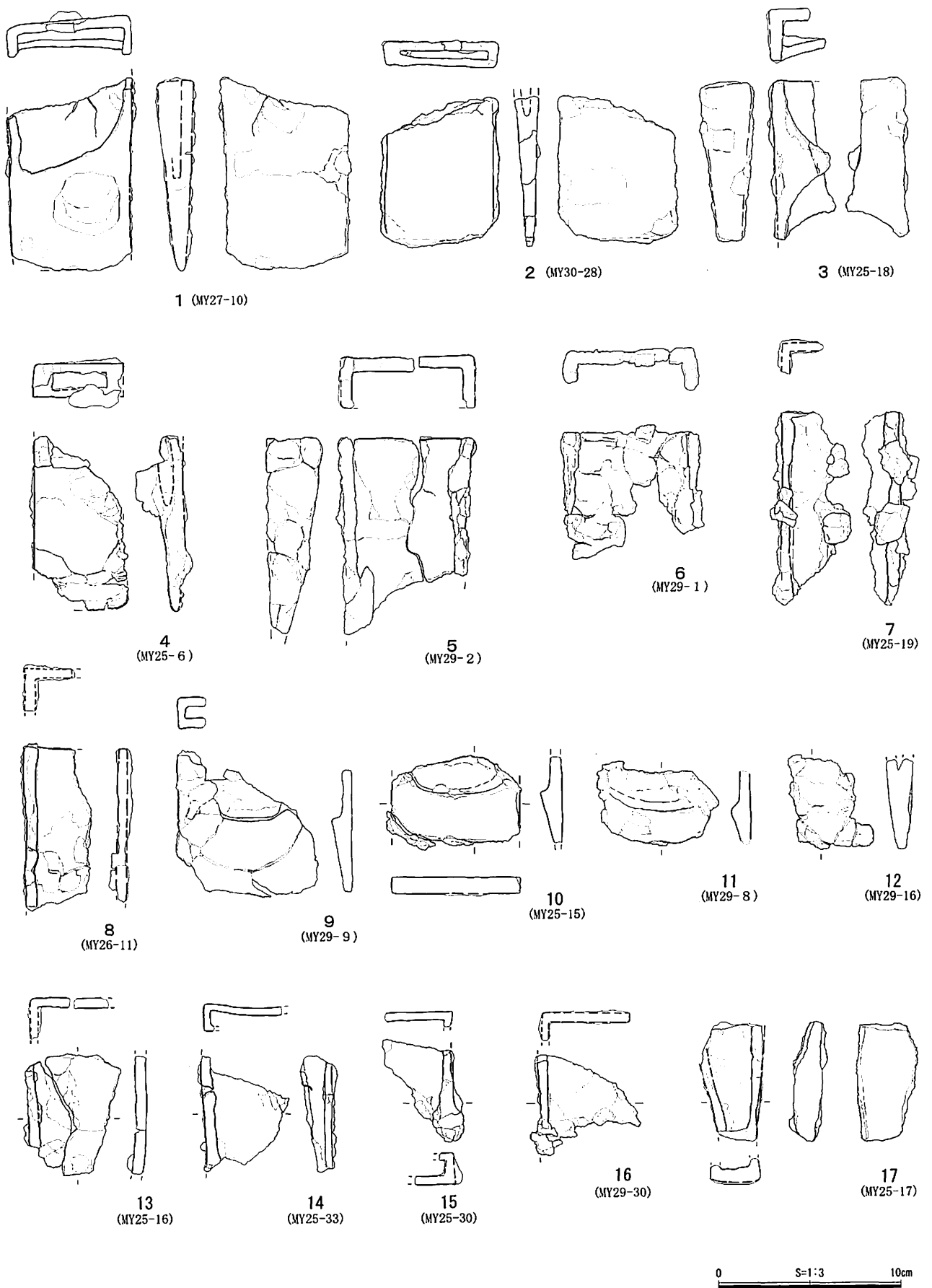
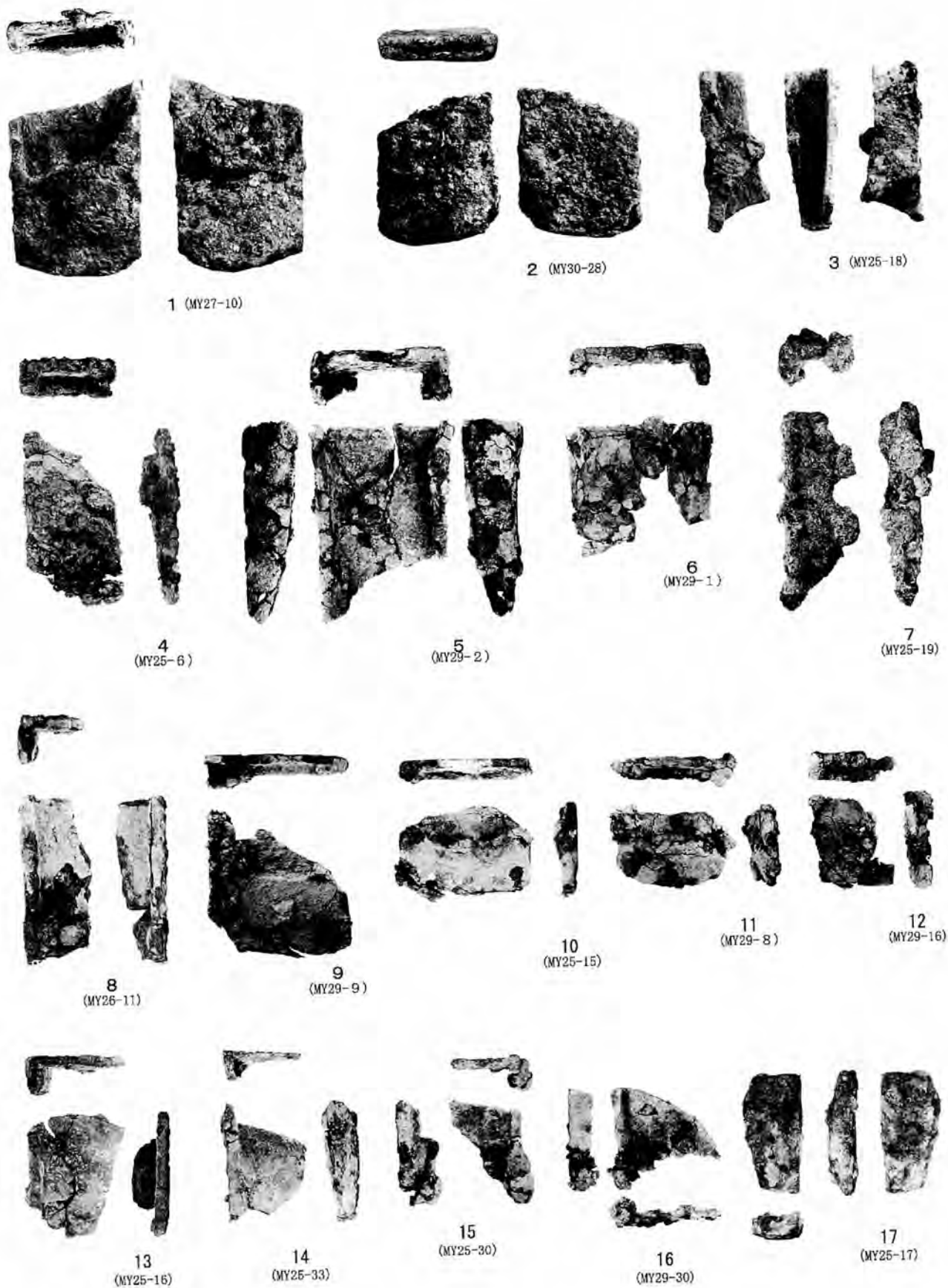


図1 牧羊城出土の鉄器 (1)



図版1 牧羊城出土の鉄器 (1)

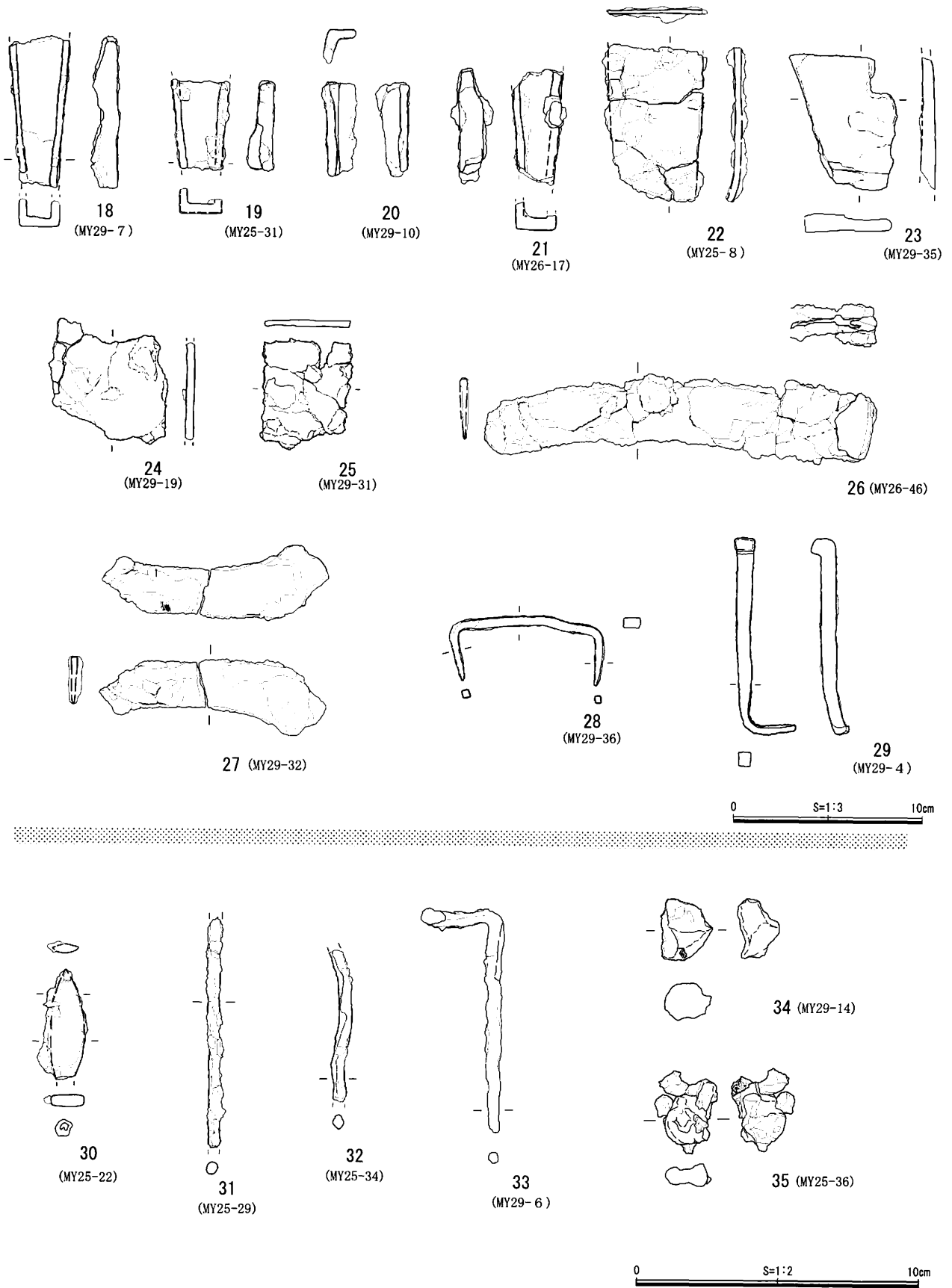
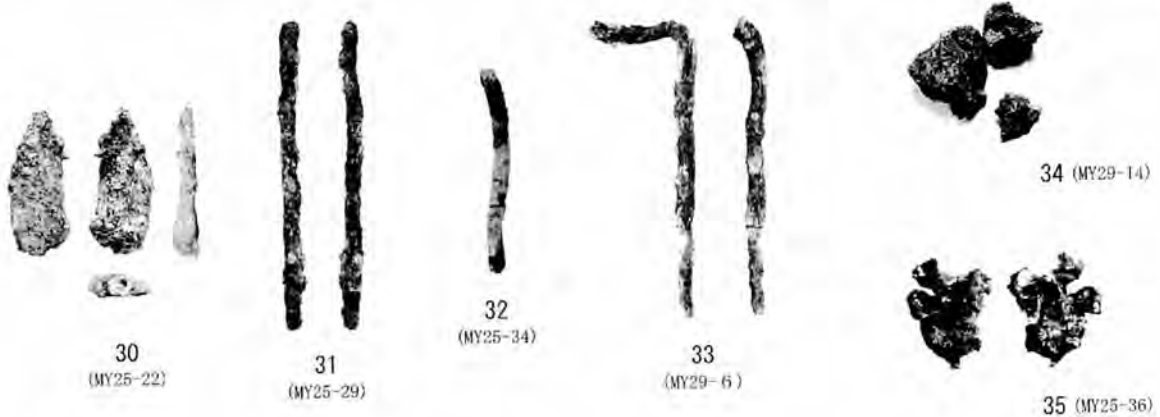
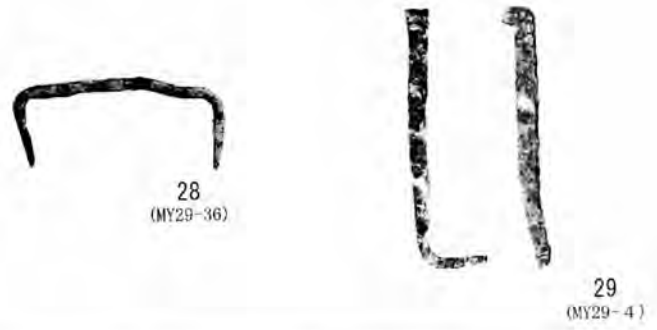
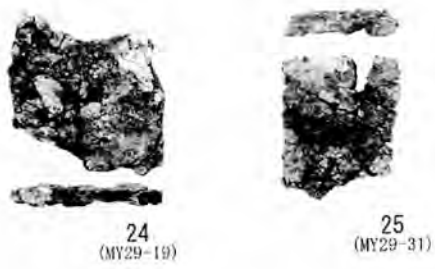
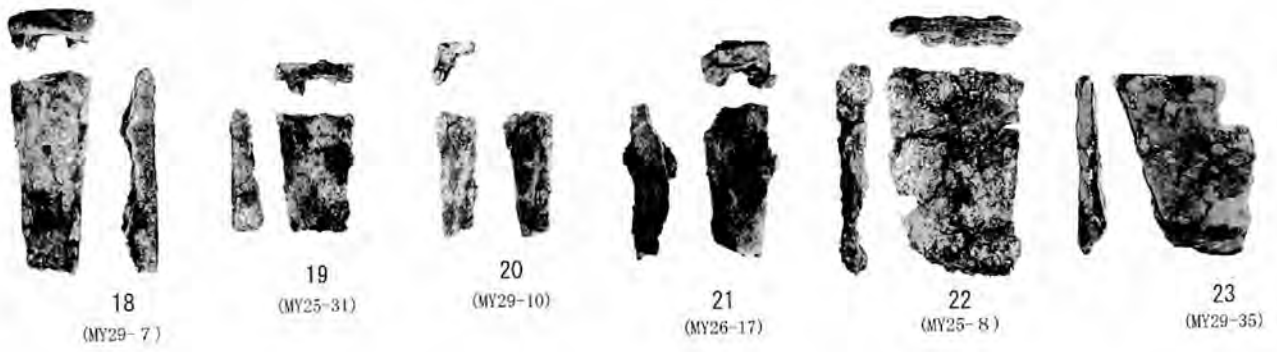


図2 牧羊城出土の鉄器 (2)



図版2 牧羊城出土の鉄器 (2)

6－2. 牧羊城跡出土鉄関連遺物の金属学的調査

九州テクノリサーチ・TAC センター

大澤 正己

概要

戦国秦漢代に比定される牧羊城跡出土の鉄関連遺物（鑄造鉄斧片 3 点、鉄鎌 2 点、鉄滓 2 点）を調査して、次の事が明らかになった。

（1）鑄造鉄斧は、いずれも梯形状単合範の可能性をもち、鑄込みままで軟化焼なまし脱炭処理は施されていない。材質は共晶組成の白鑄鉄（4.3% C で 1 150℃ と最も溶融点の低い成分系）である。断面内部は鑄巣や亀裂が多く発生し、鉄斧現状が破損品であるのは内部欠陥に起因する可能性をもつ。化学組成は C が高め傾向にあるが他成分は低めで高純度鑄鉄であった。湯の流動性を目論んだ P の添加はなく、0.07% P、0.112% Cu などから製鉄原料は磁鉄鉱石（塊状）が想定できる。在地産か否かの検討は今後の課題となる。

（2）薄手の鎌 2 点は、鑄鉄の硬くて脆い欠点に焼なまし脱炭を加えて、鋼の性質に変換した可鍛鑄鉄製品であった。小型鎌はセメントイト（ Fe_3C ：頗る硬質）を黒鉛化した黒心可鍛鑄鉄製品（焼鈍ムラ：失敗品）、大型鎌は鉄酸化物（鉄鉱石やスケール：酸素供給源）と共に密閉容器に収めて加熱脱炭された白心可鍛鑄鉄製品（完全脱炭品）である。両者は鉄中非金属介在物が小型の硫化物であり、製造履歴が高温還元製鉄法にもとづく製品である。薄手鉄器であっても鍛造鉄器とは一線を画するのは注目すべきであろう。

（3）鉄滓の 1 点は羽口もしくは鍛冶炉炉壁の溶融物で、軽質ガラスの非晶質珪酸塩を鉱物相とする。残る 1 点の鉱物相はウスタイト（ Wüstite ： FeO ）+ ファイヤライト（ Fayalite ： $2\text{FeO} \cdot \text{SiO}_2$ ）、化学組成は鉄分（Total Fe）54% 台と多く、他の随伴微量元素らは低めである。鉄器製作に際して排出された高温沸し鍛接・鍛錬鍛冶滓に分類される。使用鉄素材は軟鉄（フェライト： Ferrite ）加工の可能性が窺われて、こちらの製鉄原料も 0.56% P_2O_5 、0.04% Cu から磁鉄鉱石（塊状）系が想定された。

1. いきさつ

牧羊城は遼東半島西端の大連市旅順口区鉄山鎮の丘陵上にある。南北約 130m、東西約 82m の南北に長い長方形の城である。大貫静夫氏を代表とする科学研究費補助金による研究組では、平成 18 年度までの予定で、戦前の東亜考古学会調査資料である牧羊城址出土資料を再検討するための作業が進められている。鉄器については笹田朋孝氏により整理され、現状報告がなされている。これらの鉄器は全体の組成としては、鑄造品が多く、その殆んどが袋部（空首・釜部）をもつ資料である。これらは加工具（刀子・斧・錐）ないしは農具（鋤・鍬・鋤）であり、武具の類は少ないとのこと。この内の鉄斧 3 点（1、2、3）、鉄鎌（26、27）2 点、鉄滓（34、35）を選出し、当時（土器年代では戦国から漢代まで）の製鉄技術の実態を解明する目的から金属学的調査の運びとなった。^(注 1)

2. 調査方法

2－1. 供試材

Table1 に示した 7 点である。

2-2. 調査項目

(1) 肉眼観察

分析調査を実施した遺物の外観上の特徴を記載した。

(2) マクロ組織

本来は肉眼またはルーペで観察した組織であるが、本稿では顕微鏡埋込み試料の断面全体像を、投影機の5倍・10倍・20倍で撮影したものを指す。当調査は、顕微鏡検査によるよりも広い範囲にわたって、組織の分布状態、形状、大きさなどの観察ができる利点がある。

(3) 顕微鏡組織

金属組織や滓中に晶出する鉱物相の調査を目的として、光学顕微鏡を用い観察を実施した。観察面は供試材を切り出した後、エメリー研磨紙の#150、#240、#320、#600、#1000、及びダイヤモンド粒子の 3μ と 1μ で順を追って研磨している。なお金属組織の調査では腐食 (Etching) 液に5% ナイタル (硝酸アルコール液) を用いた。

(4) ビッカース断面硬度

金属鉄の組織や鉄滓中の鉱物相同定を目的として、ビッカース断面硬度計 (Vickers Hardness Tester) を用いて硬さの測定を行った。試験は鏡面研磨した試料に 136° の頂角をもったダイヤモンドを押し込み、その時に生じた窪みの面積をもって、その荷重を除いた商を硬度値としている。試料は顕微鏡用を併用した。荷重は特に記載のない場合、200gfで測定している。ただし一部100gfで測定したものもあり、その場合には本文中に荷重を記載した。

(5) EPMA (Electron Probe Micro Analyzer) 調査

化学分析を行えない微量試料や鉱物組織の微小域の組織同定を目的とする。

分析の原理は、真空中で試料面 (顕微鏡試料併用) に電子線を照射し、発生する特性X線を分光後に画像化し、定性的な結果を得る。更に標準試料とX線強度との対比から元素定量値をコンピューター処理してデータ解析を行う方法である。

(6) 化学組成分析

供試材の分析は次の方法で実施した。

全鉄分 (Total Fe)、金属鉄 (Metallic Fe)、酸化第一鉄 (FeO) : 容量法。

炭素 (C)、硫黄 (S) : 燃烧容量法、燃烧赤外吸収法

二酸化硅素 (SiO_2)、酸化アルミニウム (Al_2O_3)、酸化カルシウム (CaO)、酸化マグネシウム (MgO)、酸化カリウム (K_2O)、酸化ナトリウム (Na_2O)、酸化マンガン (MnO)、二酸化チタン (TiO_2)、酸化クロム (Cr_2O_3)、五酸化磷 (P_2O_5)、バナジウム (V)、銅 (Cu) : ICP (Inductively Coupled Plasma Emission Spectrometer) 法 : 誘導結合プラズマ発光分光分析。

3. 調査結果

MY27-10 鉄斧 (刃部)

(1) 肉眼観察 : 鑄造鉄斧で基部側を欠損した刃部片である。現存長さ10.5cm、基部幅6.9cmに対して刃部6.5cmと若干狭まる。横断面は上面がやや内傾し、梯形となる可能性をもつ。側縁部に鑄型の合せ目が見られず、刃部に向って片刃状に窄まるところから単合範であろうか。刃先は端部や隅部が丸みを帯びる。袋部は深く、破損部から5.4cm、厚みは3mmを測る。表面は薄い銹化物に覆われ、一面のみに厚く酸化土砂や小石を付着する。基部側破損側には、ひび割れや大きく縦方向に亀裂が走る。供試材は基部寄りから採取した。

(2) マクロ組織：Photo.1 の①に示す。側壁側に大きく鑄鉄欠陥の亀裂と鑄巣が観察される。前者の亀裂は肉眼観察でも指摘したものに繋がる。鑄造に際して鑄物の冷却時の収縮が制限されたか、または冷却速度が異なると鑄物内部に残留応力が生じたことに起因する。該品の基部側の欠陥からも亀裂欠陥の可能性が高い。また後者の鑄巣は肉厚不同による溶湯の収縮原因のひけ巣といえよう。表面層には焼なまし脱炭の痕跡は認められない。鑄込みままの組織である。

(3) 顕微鏡組織：Photo.1 の②～⑦に示す。金属組織はナイトル（5%硝酸アルコール溶液）で腐食(etching)した後に15倍の低倍から400倍の高倍率で撮影した。白色部はセメントイト(Cementite： Fe_3C)、黒い蜂巢状はオーステナイト（常温ではパーライトになる）とセメントイトの共晶のレデブライト(ledebulite)である。該品は共晶組成の白鑄鉄と鑑別できる。共晶(eutectic)とはギリシャ語の Eutekios：溶けやすいの意味をもつ。鉄-炭素合金の共晶点は、1135℃の溶融温度と炭素量が4.30%のところで、鑄鉄の最も溶融点の低下する領域である。

(4) ビッカース断面硬度：Photo.1 の⑥⑦に硬度測定 of 圧痕を示す。

⑥は白色板状結晶で硬度値は、625Hvである。硬くて脆い炭化鉄のセメントイト(Fe_3C)に同定される。⑦の蜂巢状個所は、こちらも695Hvと硬質のレデブライトである。2点の硬度値は、共晶組成の白鑄鉄を裏付ける。

(5) EPMA 調査：Photo.1 の最下段に鉄中の非金属介在物の反射電子像(COMP)と硫黄(S)の特性X線像を示す。非金属介在物(non-metallic inclusion)とは鉄鋼中に介在する固形体の非金属不純物、つまり鉄やマンガン、珪素、および燐などの酸化物、硫化物、珪酸塩などの総称である。該品の場合6～8 μm の淡黄褐色不純物で、特性X線像は硫黄(S)に強く白色輝点が集中し硫化物を表す。5'の番号をつけた介在物の定量分析値は、22.3% S - 24.5% Mn - 50.3% Fe 組成が得られた。マンガン(Mn)は硫黄(S)と反応して硫化マンガン(MnS)を生成しやすく、鉄中の少量のマンガン(Mn)は介在物として存在する。ただし、今回の介在物は鉄分を含むので、硫化鉄(FeS)と硫化マンガン(MnS)の混合組成の可能性が考えられる。

MY30 - 28 鉄斧(刃部)

(1) 肉眼観察：鑄造鉄斧の刃部片である。現存長さ8.0cmを測る。側縁部は直線状で、この破片の範囲では刃部と基部側の幅はともに6.3cmと変わらない。横断面形は上面の幅が5.8cmでやや狭く梯形を呈する。肉眼観察では側縁部に鑄型の合せ目が見られず、刃部に向って片刃状に窄まっており単合刃であることが考えられる。刃部の端部は面をなし、隅部は丸味を帯びる。袋部は破損部から0.9cm程の深さがあり、3～5mm程の厚みをもつ。表面は薄い銹化物に覆われており、一面に薄く酸化土砂が付着する。供試材は長軸端部約1/6を切断した。

(2) マクロ組織：Photo.2 の①に示した。断面は多くの内部欠陥を抱える。まず袋部直下に紡錘状の鑄巣が目を引き、水平方向には沢山の亀裂が走る。この亀裂個所には黒く楔状に侵食銹が発生している。鑄巣は溶湯の収縮で肉厚不同からくる原因が考えられる。一方亀裂は冷却速度の異なりにもとづく内部応力起因が指摘される。金属組織は、鑄込みままで、表層からの焼なまし脱炭の痕跡は皆無であった。

(3) 顕微鏡組織：Photo. 2 の②～⑧に示す。いずれもナイトル腐食後の組織である。金属組織は②にみられる袋部近傍で、こちらも共晶組成(4.30% C)の白鑄鉄で、黒色はパーライト、白色はセメントイトの晶出である。

(4) ビッカース断面硬度：Photo. 2 の⑥～⑧に硬度測定 of 圧痕を示す。⑥は蜂巢状組織で701Hv

のレデブライト、⑦は黒色層状組織で 289Hv と軟質のパーライト、⑧は白色板状結晶で 797Hv と硬くて脆いセメンタイトであった。共晶組成の白鑄鉄を裏付ける硬度値だった。

(5) 電子顕微鏡調査結果：Photo. 3 に 6 μ m 前後で淡黄褐色を呈する鉄中非金属を調査した。検出元素を点分析スペクトルで観察すると、硫黄(S)と鉄(Fe)を主要元素として、更に微量のチタン(Ti)、マンガン(Mn)を固溶する。硫化鉄(FeS)組成の非金属介在物である。一方、この介在物の元素マッピング分析結果の白色輝点の集中度からみても硫化鉄(FeS)組成を裏付ける。微量チタン(Ti)の検出は製鉄原料磁鉄鉱石(塊状)由来の可能性を示すものである。当供試材は鉄斧縦割れの大型であるために、EPMA 装置に収まらないため、分析走査電子顕微鏡 Philips XL30CP 装置によるデータ採りを行った。福岡市埋蔵文化財センター 比佐陽一郎氏・片多雅樹氏らの協力を得た。

MY25 - 18 鉄斧(基部)

(1) 肉眼観察：鑄造鉄斧の基部片である。袋部の端部は遺存しているが、その他はすべて破面となる。側縁部は直線状に伸び、袋部の端部は直角をなす。横断面形は刃部に近い側の上面が僅かに内傾しており、梯形を呈するものと見られる。肉眼観察では側縁部に鑄型の合わせ目がなく、刃部に向って片刃状に窄まると見られることから、単合范の可能性が考えられる。袋部の深さは不明であるが破片の大きさから 8.5cm 以上あり、厚さは 4 ~ 7mm 程である。表面は薄い銹化物に覆われており、一面に薄く酸化土砂の付着が見られる。前述 2 鉄斧刃部と同種鉄斧の基部となる可能性が高い。供試材は刃部側を採取した。

(2) マクロ組織：Photo.4 の①に示す。断面には大きな鑄巣が発生し、前述してきた 2 点の刃部側鉄斧同様に内部欠陥を抱える。該品も鑄込みままの組織で焼なまし脱炭の痕跡はなかった。

(3) 顕微鏡組織：Photo.4 の②~⑦に示す。黒色はパーライト、白色はセメンタイトで、共晶組成(4.30% C)の白鑄鉄組織である。

(4) ビッカース断面硬度：Photo.4 の⑥⑦に硬度圧痕を示す。⑥は蜂巢状組織で硬度値は 678Hv でレデブライト、⑦は黒色層状組織で 338Hv はパーライトが同定される。いずれも組織に見合った値である。

(5) EPMA 調査：Photo.4 の⑧に鉄中非金属介在物の反射電子像(COMP)を示す。4' の番号のついた茶褐色不純物の定量分析値は、22.4% S - 22.2% Mn - 36.8% Fe - 11.8% Ti 組成が得られた。硫化物が主要鉱物であり、硫化マンガン(MnS)と硫化鉄(FeS)の混合組成で、これに砂鉄特有のチタン(Ti)が 11.8% 固溶する。他に砂鉄特有元素のバナジウム(V)やジルコニウム(Zr)が共存すれば砂鉄原料と断定できるがチタンのみであれば、些か躊躇する。製鉄原料はやはり磁鉄鉱(塊状)あたりだろうか。チタン磁鉄鉱石も賦存する。磁石系だろう。

次に該品は介在物の硫化物の周辺に微小粒状異物が存在する。この部分は特性 X 線像で観察すると白色輝点が強く集中して、燐(P)の存在を告げる。3' の番号の定量分析は 91.5% Fe - 7.4% P が含まれる。燐(P)はフェライト中に 1.7% まで固溶するが、その他大部分は Fe - Fe₃C - Fe₃P の三元系共晶であるステダイト(steadite)として存在する。^(注2)ステダイトの組成は Fe : 91.5%、P : 6.89% が理論値であり、ステダイトが同定される。P は局部偏析であろう。

(6) 化学組成分析：Table2 に示す。C 量は 4.50% と高く、鑄鉄としては最も溶融し易い共晶点 1150°C 近傍の成分である。他の不純物はすべて低値であった。Si は 0.17%、Mn 0.078% など鑄鉄にとって有効元素である。Si 量の増加は C 量と連動し、主要元素であるが、冷却速度や肉厚の関係が絡むのでここでは触れない。Mn も MnS として S の害を除く作用から添加される元素である。P は

機械的性質を重要視する場合は 0.2%以下が望まれる。該品は 0.173%と低値だった。しかし P は鑄造時の湯の流動性をよくするので高める場合もありうる。マクロ組織の鑄巣の発生を想起すると、P 添加の配慮はなかろう。ただし EPMA 調査のステダイトの検出は、高 P 成分の影響でなくて単なる偏析だったのだろうか。現代鑄物の P 含有量は 0.2%以下が望まれている。次に有害元素の S も 0.009%と低値であった。S の増加は黒鉛化を阻害し、湯引け・鑄造応力が大きく、ひび割れを誘発するとして嫌われる元素である。以上の如く成分的には有効元素も有害元素も少なく、C 量のみは最低溶融温度が確保できる構成だった。これは鑄造品としての外形優先で品質度外視に繋がる。ただし、これは現代技術の目で 2000 年以上前の技術を成分的に言及したのであって、稚拙な技術と決め付けているのではない。牧羊城に遺存した鉄器が在地製作か、搬入品かを検討する上での問題点を提示したまでである。中国都域の中心部の分析データの比較が重要課題となる。

次に産地同定に絡む随伴微量元素の傾向がある。Cu は 0.112%と特別多くはないが手掛りとなる数値である。Ti0.005%、V0.005%、Co0.003%などは少ない。As の 0.020%は若干感知できる値である。もし、牧羊城近傍での生産であれば、スカルン鋳床に注目すべきであろう。産地同定は、鉄器成分値の蓄積と、製作技術からの検討が必要である。

MY26 - 46 鉄鎌

(1) 肉眼観察：鉄製曲刃鎌である。現存長さ 20.8cm、幅 4.0cm、厚さ 4mm 前後であろうか。刃部は緩く内湾し、両刃となる。先端部は丸みを帯びているが、銹化物で覆われており本来の形状を留めているかどうかは不明である。基部は観察できないが、厚くなっているようであり、折り返しがある可能性もあろう。現状は銹化による層状のひび割れが顕著で、鍛造品に歩があるとも考えられるが、鑄造品の可能性も看過できない。前述 MY29 - 32 鎌に比較して刃部の湾曲が少ない大型の資料である。供試材は長軸半ばから採取されている。

(2) マクロ組織：Photo.5 の左側に示す。全体に白地のフェライトのみで構成されて、網目状の黒い細い線のフェライト粒界が認められる。全面に黒い点の非金属介在物は一切見えない。白心可鍛鑄鉄製品であろう。鑄造後、軟化处理の焼きなまし脱炭が施されている。

(3) 顕微鏡組織：Photo.5 の 1 a ~ 2 c にナイトル腐食した組織を示す。いずれもマクロ組織で述べたように白地のフェライトに黒い細い線のフェライト粒界で構成された組織である。ここでは一般塊鍊鉄にみられる大型夾雑物のファイヤライト ($2\text{FeO}\cdot\text{SiO}_2$) やウスタイト (FeO) は存在しない。鉄中の非金属介在物は、 $5\ \mu\text{m}$ 以下の小型硫化物が僅かに点在するのみなので、該品も白鑄鉄の焼なまし脱炭を経た可鍛鑄鉄製品に分類できる。セメントイトから変化した黒鉛が存在しないのは何故であろうか。可鍛鑄鉄製品には大別して、MY29 - 32 小型鎌の組織でみられる塊状黒鉛をもつ黒心可鍛鑄鉄があり、更に該品のような黒鉛をあまり残さない白心可鍛鑄鉄がある。後者は、白鑄鉄製品を酸化鉄（鉄鉱石、スケールなど）と共に密閉容器に入れて $900\sim 1000^\circ\text{C}$ で $40\sim 100$ 時間加熱し、除冷されている。鎌の肉薄は完全脱炭されて、内部に残りやすいパーライトと焼もどし黒鉛なども消去したものと考えられる。可鍛鑄鉄製品は、器種やサイズにより焼なまし脱炭条件を種々変えられたことを示唆する鉄鎌 2 種の組織変化であった。蛇足ながら該品は鑄造品であって鍛打加工に伴う鍛接線など一切認められなかった。

(4) ビッカース断面硬度：Photo.6 の 2 a、2 b、2 c にフェライト単相に対して硬度測定を行なった圧痕を示す。値は $126\sim 145\text{Hv}$ までバラツキをもつ。後述する MY29 - 32 鎌のフェライトが 156Hv であって、これらは大差ない数値とみてよかろう。脱炭フェライトの硬度値から可鍛鑄鉄

製品の裏付けはとれた。

(5) EPMA 調査：Photo.5 の最下段左側に非金属介在物の電子顕微鏡組織と右側に点分析スペクトルを示す。介在物からの検出元素は鉄 (Fe)、硫黄 (S)、マンガン (Mn) などから、その組成は硫化マンガン (MnS)、シリケート (SiO₂) など 3 μm 前後の超小型介在物が同定された。また、EPMA 調査による定量分析値は 27% S - 50% Mn - 22% Fe 組成が得られている。この鎌も鉄中非金属介在物からその製造履歴は、高温還元法による鑄造品からの固体脱炭品と証明できた。

MY29 - 32 鉄鎌 (小型)

(1) 肉眼観察：小形の鉄製曲刃鎌である。現存長さ 12.2cm、幅 3.2cm、厚み最大 4mm を測る。先端部及び基部は欠損し、その形状は不明瞭であるが、刃部は大きく内湾し、両刃になる可能性が高かろう。現状は一部に厚く土砂が付着しており、錆化による層状のひび割れが見られて鍛造品を想定していた。供試品は長軸側の半ば付近から採取した。

(2) マクロ組織：Photo.6 の左側に示す。白い鉄基地に黒く塊状黒鉛が斑点状に全面に分布する。鑄造された白鑄鉄製品が 950℃ 前後の温度に加熱されてセメンタイト (Fe₃C) が黒鉛化された黒心可鍛鑄鉄製品のいわゆる焼なまし脱炭品であった。

(3) 顕微鏡組織及びビッカース断面硬度：Photo.6 の 1a ~ 3c までに示す。白鑄鉄の硬くて脆い欠点を熱処理からセメンタイトの黒鉛化と脱炭により鋼の性格を付与した製品である。しかし、該品は可鍛鑄鉄の失敗品であった。1a から 3a の組織をみると、多くの塊状黒鉛と共に白色板状結晶のセメンタイトが斜めに 1 本黒鉛化しきれずに残存する。3a の硬度値で 1101Hv と硬いのは、正にセメンタイトを証明する。更に 1b ~ 3b に示した亀裂部分は、空間で酸素の供給が促進されて完全脱炭からフェライト組織が鮮明となる。ここでの硬度値 (3 b) は 156Hv と大幅に軟化する。ただし、新しい鉄 (埋蔵品でない鉄) のフェライト硬度値は、75 ~ 80Hv 程度を指すのであって 156Hv は異常値となるが、この脱炭組織の相対値としてはフェライト組織を十二分に証明する値である。1c ~ 3c は中途脱炭で晶出した層状パーライト組織を示す。

このような金属組織の乱れは当時の熱処理技術の偽らざる実態を呈するのであろう。当時は温度管理の測定器機はなく永年の培われた体験と感に頼らざるを得なかった世界である。焼なまし脱炭炉の温度分布も気になる点である。不具合品の発生は当然起こるべきして生じたものであろう。それが今回の調査品だった。

(4) EPMA 調査：Photo.6 の最下段に非金属介在物の電子顕微鏡写真と右側に点分析スペクトルを示す。5 μm に満たない淡黄褐色介在物からの検出元素は、硫黄 (S)、マンガン (Mn)、鉄 (Fe)、チタン (Ti)、などである。組成は硫化マンガン (MnS) と硫化鉄 (FeS) との混合組成が推定される。これに少々 Ti や Mn を固溶する。この種の介在物を別途 EPMA で定量分析を行い定量値を出すと、28% S - 50% Mn - 11% Fe - 6% Ti 組成が得られた。磁鉄鉱石 (塊状) 由来の鎌であろうか。

MY25 - 36 鉄滓 (ガラス質滓)

(1) 肉眼観察：不整形な平面形をしたガラス質滓である。2.5 g と小さなものであるが、1.7cm 程の塊状の滓に 0.7 ~ 1.0cm 程の 3 つの滓が溶着しており、厚さは 0.8 ~ 1.6cm と不均一である。一部に欠損はあるが、下面を含めほとんどの面が丸みを帯びた本来の形状を残す。軽質で表面は光沢をもつ黒褐色または紫紅色を呈しており、ガラス質が主体となる。下面から側面の一部には、灰白色をした骨状物質がガラス質滓に巻き込まれるような形で残っていた。羽口先端部に生じるガラス質の

溶融物に類似する滓である。後述する鍛錬鍛冶滓の存在は羽口を用いた鍛冶作業の様相を彷彿させる。

(2) 顕微鏡組織：Photo.7 の①～⑦に示す。鉱物組成は暗黒色ガラス質スラグで、非晶質珪酸塩が主体である。羽口胎土の粘土鉱物セリサイトの溶融物の可能性は十分にありえる。内部に粘土中に混入した砂鉄粒子や、その半還元状態のものが認められた。勿論鍛冶炉の炉壁の溶融物としての可能性も秘めている。

MY29 - 14 鉄滓

(1) 肉眼観察：12.8 g と小さな鉄滓破片である。本来の形状を留める面は殆んどなく、土砂が付着する面に 2箇所ほど木炭痕が残る部分がある。表面には大小の気孔も認められるが、滓質は比較的密である。凶化したものの他に小破片 2点があるが同様な色調・特徴を示しており同一固体と思われる。木炭噛み込みから鍛冶滓の可能性が考えられた。小片 2点も化学分析試料に使用したため残材はない。

(2) 顕微鏡組織：Photo.8 の①～⑧に示す。①は鍛冶作業に用いられた木炭である。樹種同定は後日の課題としておく。鉄滓の鉱物組成は③④にみられる白色樹状晶のウスタイト (FeO) と淡灰色盤状結晶のファイヤライト ($2\text{FeO} \cdot \text{SiO}_2$) である。鉄器製作時の高温沸し鍛接・鍛錬鍛冶に際しての排出滓の可能性が高い。鍛冶に供した鉄素材は軟鉄で⑤⑥に示した白色地のフェライトで、結晶粒界に紐状のセメンタイト (Fe_3C) を析出する。また②は錆化鉄であるが、これに微量のパーライトを析出した鉄部分が遺存する。いずれにしる加工の容易な軟鉄の使用が想定できた。

(3) ビッカース断面硬度：Photo.8 の⑦は白色粒状結晶の硬度測定 of 圧痕で 443Hv が得られた。ウスタイトの文献硬度値が 450 ~ 500Hv なので^(注3)、下限を若干下回るがウスタイトに同定できる。⑧はフェライト部分の硬度測定 of 圧痕である。値は 85.0Hv であった。この数値はフェライトの真のものに近い。前述した鎌 2点のフェライト 150Hv 台は異常値であって埋蔵鉄器では時折り見受けられる現象である。

(4) 化学組成成分：Table2 に示す。鉄分の多い滓である。全鉄分 (Total Fe) は 53.50% に対して、金属鉄 (Metallic Fe) が 0.27%、酸化第 1 鉄 (FeO) 49.58%、酸化第 2 鉄 (Fe_2O_3) 21.01% の割合である。ガラス質成分 ($\text{SiO}_2 + \text{Al}_2\text{O}_3 + \text{CaO} + \text{MgO} + \text{K}_2\text{O} + \text{Na}_2\text{O}$) は 21.20% で、このうちに塩基性成分 ($\text{CaO} + \text{MgO}$) 3.43% を含む。砂鉄特有成分となる二酸化チタン (TiO_2) 0.23%、バナジウム (V) < 0.01%、ジルコニウム (Zr_2O) < 0.01% など多い数値ではなく、酸化マンガン (MnO) 0.40%、銅 (Cu) 0.04% などは程程に含む。また、鉄の有害元素となる硫黄 (S) 0.024%、五酸化リン (P_2O_5) 0.56% は高くはない。鍛冶素材は不純物の少ない磁鉄鉱由来のものが使用された事と考えられる。

4. まとめ

(1) 鑄造鉄斧片 3点

調査に供した 3点の梯形状鑄造鉄斧片は、単合范に鑄込まれ、その材質は共晶組成 (4.30% C. 溶融温度 1150℃) の白鑄鉄だった。鉄斧外観は、一応整ってはいるが、内部組織は鑄造巣や亀裂を抱えていた。一方、軟化焼なまし脱炭の形跡は全く認められない。翻って調査事例は少ないまでも梯形状鑄造鉄斧の朝鮮半島出土品や国内出土品を調査しても同様な結果の非脱炭が確認されている。前者では羨沙里遺跡でみられた廃鉄器転用の再生鍛冶原料鉄として小さく砕かれた破片^(注4) や長安里遺跡出土の破損品がある。^(注5) 更に後者の国内では鳥取県所在長瀬高浜遺跡の S1192 竪穴住居内土坑

出土例^(注6)、福岡市クエゾノ遺跡 5号出土品^(注7)、岡山県津山市所在の河边上原 3号墳出土品^(注8) 高知県西分増井遺跡出土品^(注9)などが挙げられる。この国内搬入品は 4世紀後半から 5世紀代が比定される遺物群である。

一方中国産と判る二条凸帯鑄造鉄斧は、破片転用鉄器（小形偏平片刃石器に模した片刃加工具の類）をはじめ、完形品は、調査事例の殆んどが焼なまし脱炭が施され、(1) 白心可鍛鑄鉄、(2) 黒心可鍛鑄鉄、(3) パーライト可鍛鑄鉄製品などの何れかに分類できた。^(注10)

鑄造鉄器の焼なまし脱炭の有無は何故生じたのだろうか。用途もしくは国、地域における技術格差などで片付く問題だろうか。ここはやはり鉄生産体制全体から俯瞰しておく必要がある。古代中国では(戦国時代以降)白鑄鉄の焼なまし脱炭技術(可鍛鑄鉄→鑄鉄脱炭鋼)^(注11)の展開のもとに鉄生産は飛躍してゆくが、歩留りには内部欠陥などから陰りが生じ、新しい製鋼技術の炒鋼法(溶銑に鉄酸化物：鉍石粉やスケールと空気を直接吹き込み脱炭させる製鋼法)の開発へと変換されて固体脱炭は置き去られるのだろう。

(2) 鉄鎌 2点

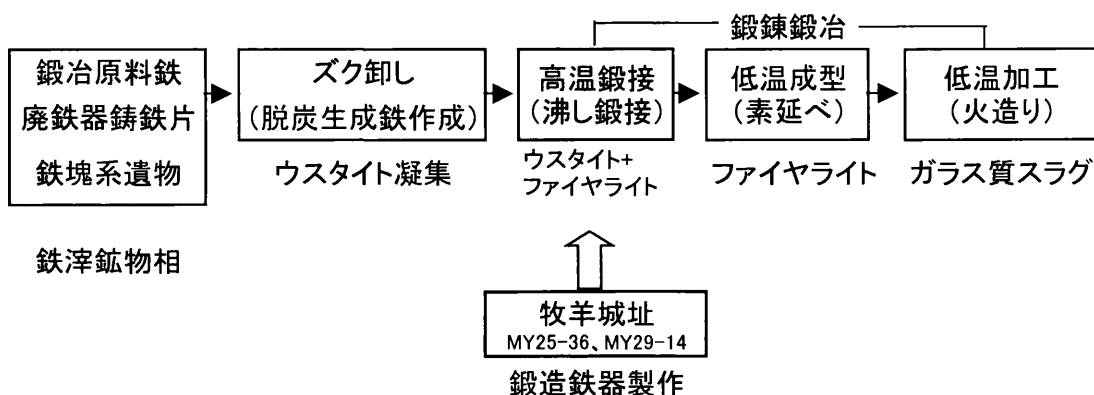
2点の薄手鎌は予想を覆す鑄造・焼なまし脱炭を施した可鍛鑄鉄製品だった。小形鎌(MY29-32)は、硬質元凶となる炭化鉄セメンタイト(Fe_3C)を 950℃前後の加熱で黒鉛化した黒心可鍛鑄鉄、大型鎌(MY26-46)は、鑄造鎌を鉄酸化物(鉄鉍石粉やスケール)を共に密閉容器に入れて 900～1000℃加熱・除冷した白心可鍛鑄鉄製品と判明した。前者は材質的には不完全脱炭の失敗品、後者は完形品の可能性が高い。産地が問われるところである。古代中国の高度な熱処理技術が中国僻地まで及んでいたか否か、物流システムを検討すべく重要課題であろう。現時点では筆者の知識では言及しきれぬ高遠な問題となる。後日に期待したい。

なお、国内での可鍛鑄鉄製品の種類として、前述してきた二条凸帯鑄造鉄斧以外は鉄削(やりかな)や穂摘器(石包丁)型鉄器破片の可能性が窺われるものが発言される程度で^(注12)、今回調査の鎌が可鍛鑄鉄製品として特定できた事は大きな収穫であった。特に供試材が小破片であれば判断のつけ難いところが生じがちである。サンプル採取時の位置関係の正確な把握が新しい発見に繋がった。

(3) 鉄滓 2点

鍛冶作業の工程の流れを把握するうえで、鉄滓鉍物相の調査は重要である。MY25-36 ガラス質滓は小形粒状から羽口、もしくは炉壁溶融物が予想され、鉍物相の非晶質珪酸塩の確認から結論が導き出せた。続いてMY29-14 鉄滓は鉄分(Total Fe)が 54%台と高く、鉍物相は、酸化雰囲気中で晶出した大量のウスタイト(FeO)の晶出から高温沸し鍛接・鍛錬鍛冶滓に認定できた。鉄素材の繰返

模式図 鍛造鉄器製作工程の流れ



し折り曲げ鍛接時の排出滓である。羽口使用の鉄器製作鍛冶が実証できる遺物として評価できた。共伴遺物などの詳細な比較検討から、更なる内容の掘り下げが可能となる資料でもある。参考までに推定される鍛冶作業の工程の流れを模式図に提示しておく。

注

- (1) 大貫静夫・中村亜希子・古澤義久・鄭仁盛・石川岳彦 2006「牧羊城をめぐる諸問題」『日本中国考古学会 2006 年度大会 (第 17 回大会・総会) 発表資料集』日本中国考古学会、山口県立萩美術館・浦上記念館
- (2) 草川隆次 1970「鑄鉄」『鑄鋼・鑄鉄』(鉄鉱工学講座 9) 朝倉書店
- (3) 日刊工業新聞社『焼結鉄組織写真および識別法』1968。
ウスタイトは 450～500Hv、マグネタイトは 500～600Hv、ファイヤライトは 600～700Hv の範囲が提示されている。また、ウルボスピネルの硬度値範囲の明記がないが、マグネタイトにチタン (Ti) を固溶するので、600Hv 以上であればウルボスピネルと同定している。それにアルミナ (Al) が加わり、ウルボスピネルとヘーシナイトを端成分とする固溶体となると更に硬度値は上昇する。このため 700Hv を超える値では、ウルボスピネルとヘーシナイトの固溶体の可能性が考えられる。
- (4) 大澤正己 1997「弥生時代の鉄器の動向」～金属学的見地からのアプローチ(『東日本における鉄器文化の受容と展開』第 4 回鉄器文化研究会) 埼玉県朝霞市コミュニティセンターホール
- (5) 水原大学校博物館調査「華城 長安里遺跡」出土遺物で現在報告書作成中資料
- (6) 大澤正己 1997「長瀬高浜遺跡出土梯形鑄造鉄斧の金属学的調査」『長瀬高浜遺跡Ⅶ』(鳥取県教育文化財団報告書 49) (財) 鳥取県教育文化財団・建設省倉吉工事事務所
- (7) 大澤正己 1995「クエゾノ遺跡出土製鉄関連遺物の金属学的調査」『クエゾノ遺跡』(福岡市埋蔵文化財調査報告書 第 420 集) 福岡市教育委員会
- (8) 大澤正己 1994「河辺上原古墳群から出土した鉄滓と鉄器の金属学的調査」『河辺上原遺跡』(津山市埋蔵文化財発掘調査報告 第 54 集) 津山市教育委員会
- (9) 大澤正己 2004「西分増井遺跡出土鉄関連遺物の金属学的調査」『西分増井遺跡Ⅱ』(新川川広域河川改修工事に伴う西分増井遺跡発掘調査報告書) (財) 高知県文化財団埋蔵文化財センター
- (10) ①大澤正己・塚本敏夫 1997「向山遺跡出土鉄製品の金属学的調査」～二条凸帯鑄造鉄斧・鍛造袋状鉄斧～『埼玉県朝霞市教育委員会記者発表資料』朝霞市教育委員会 (4.26 新聞記事)
②大澤正己 2001「上野Ⅱ遺跡出土鉄関連遺物の金属学的調査」『上野Ⅱ遺跡—弥生後期集落及び鍛冶関連遺跡の調査—』(中国横断自動車道建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書 10) 日本道路公団中国支社松江工事事務所・島根県教育委員会
③大澤正己 2006「赤井手遺跡出土鍛冶原料鉄の” 鑄鉄脱炭鋼、について」『たたら研究』第 45 号 たたら研究会
- (11) 大澤正己 2004「金属組織学からみた日本列島と朝鮮半島の鉄」『国立歴史民俗博物館研究報告』第 10 集 (国立歴史民俗博物館 国際シンポジウム: 古代東アジアにおける倭と加耶の交流) 89 - 122 頁
- (12) 大澤正己 2004「西山ノ上遺跡出土鉄関連遺物の金属学的調査」『西山ノ上遺跡 (1・2 次調査)』(八女市文化財調査報告書第 70 集) 八女市教育委員会

謝辞

金属学的調査は、鉄器の一部が損われるので、3 点の鑄造鉄斧片は事前にレプリカを作成して、サンプルを採取し

た。レプリカ作成は北九州市立いのちの旅博物館 松井和幸氏のお手を煩わせた。鉄鎌 2 点のサンプル採取は元興寺文化財研究所 山田哲也氏にお世話になった。また、遺物観察表の作成を島根県埋蔵文化財センター 角田徳幸氏にお願いしたが、今回は紙面の都合で割愛された。観察所見は本稿肉眼観察で活用させて頂いた。3 人の方に厚くお礼申し上げます。

Table.1 供試材の履歴と調査項目

符号	遺跡名	出土位置	遺物No.	遺物名称	推定年代	計測値		磁着度	メタル度	調査項目							備考
						大きさ(mm)	重量(g)			マクロ組織	顕微鏡組織	ヒックス断面硬度	X線回折	EPMA	化学分析	耐火度	
MY27-10	牧羊城	城址表土	不明10	鉄斧(刃部側)	戦国秦漢	105×69×21	283.5	7	特L(☆)	○	○	○		○			
MY30-28		不明	不明8	鉄斧(刃部側)	戦国秦漢	80×63×13	212.5	8	特L(☆)	○	○	○		○			
MY25-18		北5区	点上げ3	鉄斧(基部側)	戦国秦漢	85×32×29	109.7	7	特L(☆)	○	○	○		○	○		
MY26-46		東7区第四層	点上げ1	鉄鏃(ほぼ完形)	戦国秦漢	208×40×7	94.4	6	L(O)	○	○	○		○			
MY29-32		南2区	点上げ15	鉄鏃(小型)	戦国秦漢	122×32×4	50.0	7	特L(☆)	○	○	○		○			
MY25-36		東4区	点上げ4	鉄滓(ガラス質)	戦国秦漢	30×24×16	2.5	2	なし		○	○					
MY29-14		南1区第二層		9 鍛冶滓か	戦国秦漢	22×16×15	12.8	3	なし		○	○			○		

Table.2 供試材の組成

符号	遺跡名	出土位置	遺物名称	推定年代	Σ*																	注						
					全鉄分 (Total Fe)	金属鉄 (Metallic Fe)	酸化第1鉄 (FeO)	酸化第2鉄 (Fe ₂ O ₃)	* 二酸化珪素 (SiO ₂)	* 酸化アルミニウム (Al ₂ O ₃)	* 酸化カルシウム (CaO)	* 酸化マグネシウム (MgO)	* 酸化カリウム (K ₂ O)	* 酸化ナトリウム (Na ₂ O)	酸化マンガン (MnO)	二酸化チタン (TiO ₂)	酸化クロム (Cr ₂ O ₃)	硫黄 (S)	五酸化リン (P ₂ O ₅)	炭素 (C)	バナジウム (V)		銅 (Cu)	二酸化ジルコニウム (Zr ₂ O)	耐火度 (°C)	造滓成分 Total Fe	TiO ₂ Total Fe	
MY29-14	南1区第二層	鍛冶滓か	戦国秦漢		53.50	0.27	49.58	21.01	13.94	2.50	2.59	0.84	0.93	0.40	0.40	0.23	<0.01	0.024	0.96	1.28	<0.01	0.04	<0.01		21.20	0.396	0.0043	
符号	遺跡名	出土位置	遺物名称	推定年代	C	Si	Mn	P	S	Cu	Cr	Ti	V	Co	As													
					%	%	%	%	%	%	%	%	%	%	%													
MY25-18	牧羊城	北5区	鉄斧(基部側)	戦国秦漢	4.50	0.17	0.078	0.173	0.009	0.112	0.011	0.005	0.005	0.003	0.020													

Table.3 出土遺物の調査結果のまとめ

符号	遺跡名	出土位置	遺物名称	推定年代	顕微鏡組織	化学組成(%)							所見			
						Total Fe	Fe ₂ O ₃	塩基性成分	TiO ₂	V	MnO	ガラス質成分		Cu		
MY27-10	牧羊城	城址表土	鉄斧(刃部側)	戦国秦漢	介在物(FeS, MnS) P、Ce、Le	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	共晶組成白錆鉄、錆込みままの非脱炭鉄斧
MY30-28		不明	鉄斧(刃部側)	戦国秦漢	介在物(FeS, MnS) P、Ce、Le	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	共晶組成白錆鉄、錆込みままの非脱炭鉄斧
MY25-18		北5区	鉄斧(基部側)	戦国秦漢	介在物(FeS, MnS, Fe ₃ P) P、Ce、Le	C	Si	Mn	P	S	Cu	Ti	V			共晶組成白錆鉄、錆込みままの非脱炭鉄斧
MY26-46		東7区第四層	鉄鏃(ほぼ完形)	戦国秦漢	介在物(FeS, MnS, Si系) Fe、脱炭孔	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	白心可鍛鉄製品(鍛造後完全脱炭、完成品)
MY29-32		南2区	鉄鏃(小型)	戦国秦漢	介在物(FeS, MnS) 塊状黒鉛、Fe、P、Ce脱炭孔	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	黒心可鍛鉄製品(鍛造後焼なまし脱炭、失敗品)
MY25-36		東4区	鉄滓(ガラス質)	戦国秦漢	暗黒色ガラス、非晶質珪酸塩、砂鉄粒混入	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	羽刃、もしくは炬燵溶融物
MY29-14		南1区第二層	鍛冶滓	戦国秦漢	W+F、落下鉄:Fe、木炭滓込み	53.50	21.01	3.43	0.23	<0.01	0.40	21.20	0.04	高温沸し鍛錬鍛冶滓		

P: Pearlite(フェライトとセメントイトが交互に重なり合って構成された層状組織、黒色)、Ce: Cementite(Fe₃C)、Le: Ledeburite(鉄-炭素合金におけるオーステナイトとセメントイトとの共晶)、Fe: Ferrite(純鉄もしくはα鉄)、

W: Wüstite(FeO)、F: Fayalite(2FeO・SiO₂)

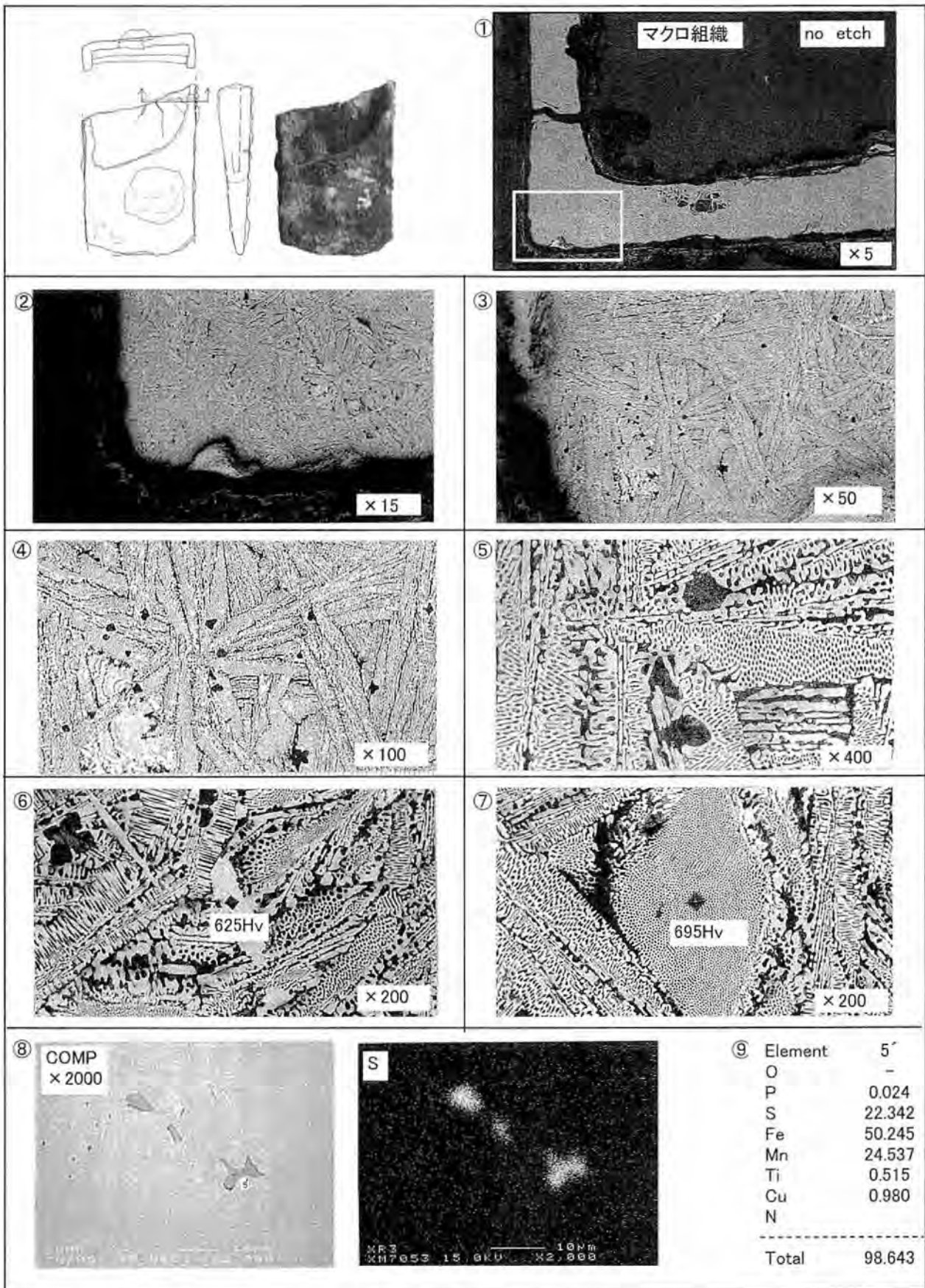
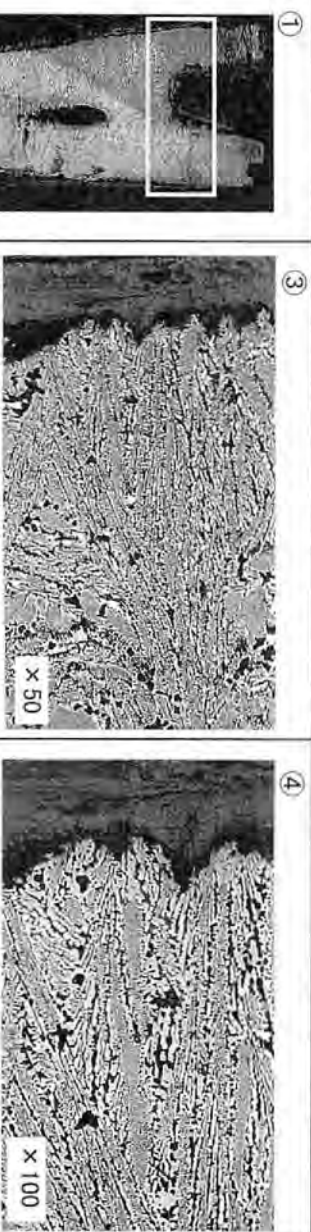
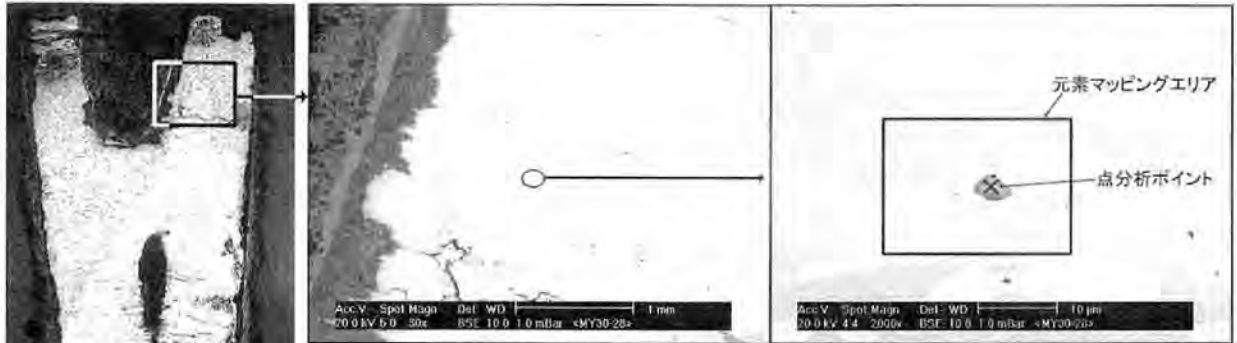


Photo. 1 鉄斧 (MY27-10) の顕微鏡・EPMA調査結果 (鑄込みまま) ②~⑦ナイトルetch

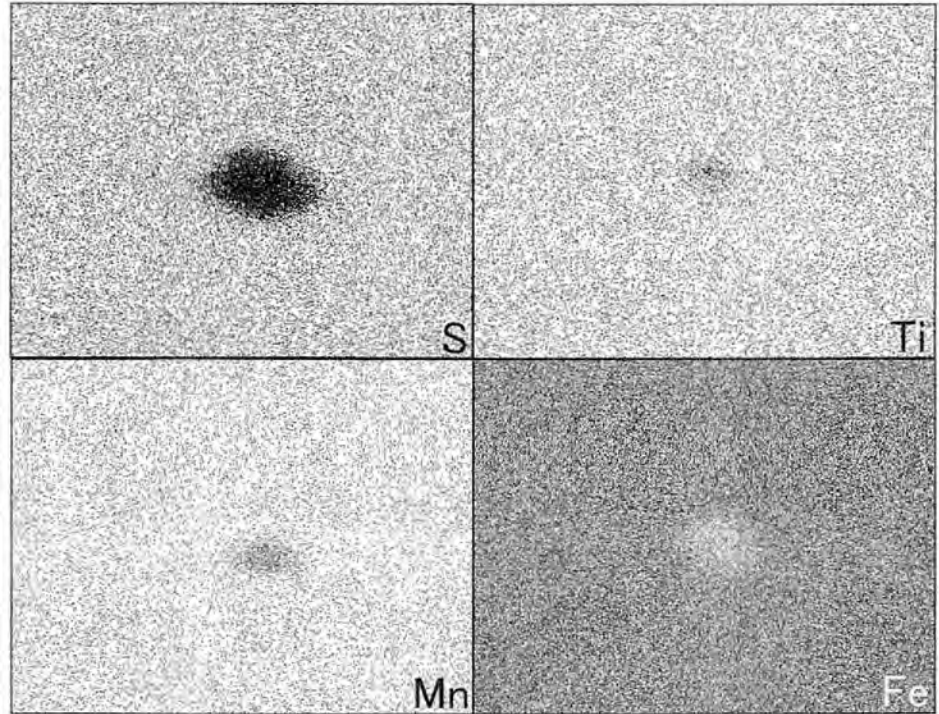


マクロ組織 X 2.3

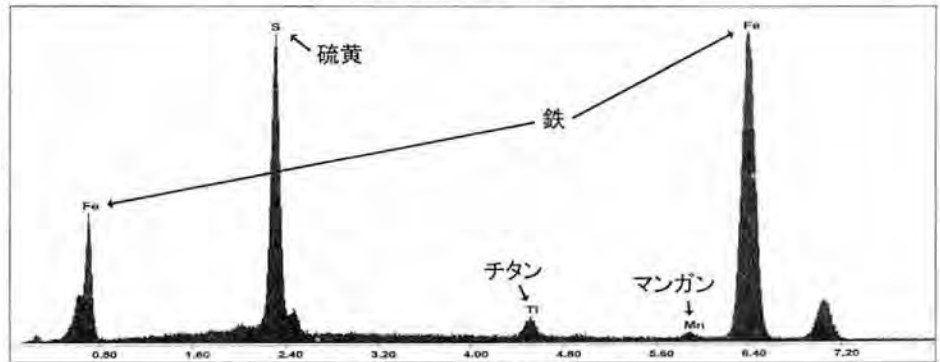
Photo. 2 鉄斧 (MY30-28) の顕微鏡調査結果 (鑄込まま: 非脱炭)



試料にみられる非金属介在物の電子顕微鏡写真



非金属介在物の元素マッピング分析結果



非金属介在物の点分析スペクトル

Photo. 3 牧羊城出土鉄斧 (MY30-28) の電子顕微鏡調査結果

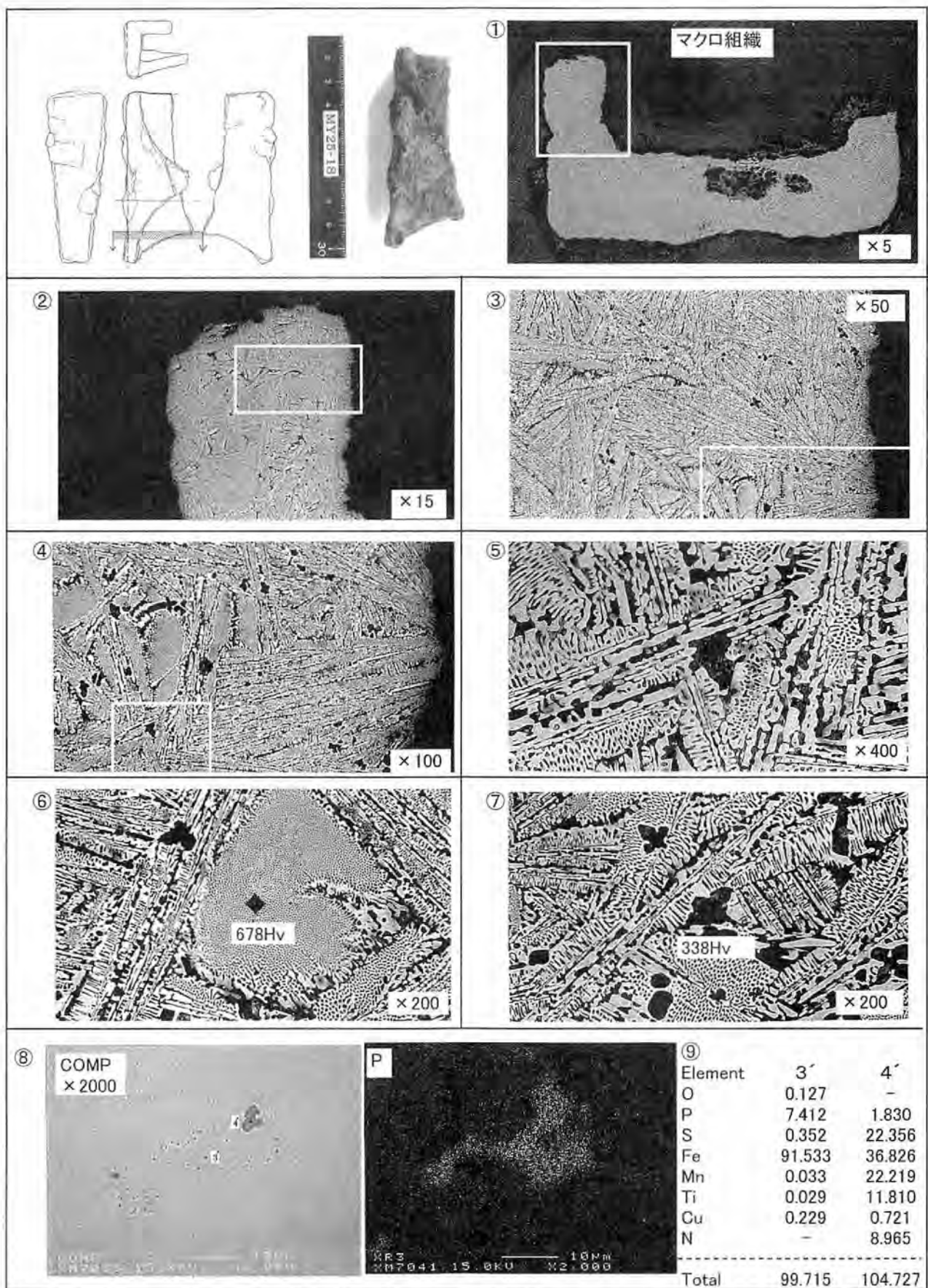


Photo. 4 鉄斧(MY25-18)の顕微鏡・EPMA調査結果(鑄込みまま:非脱炭)

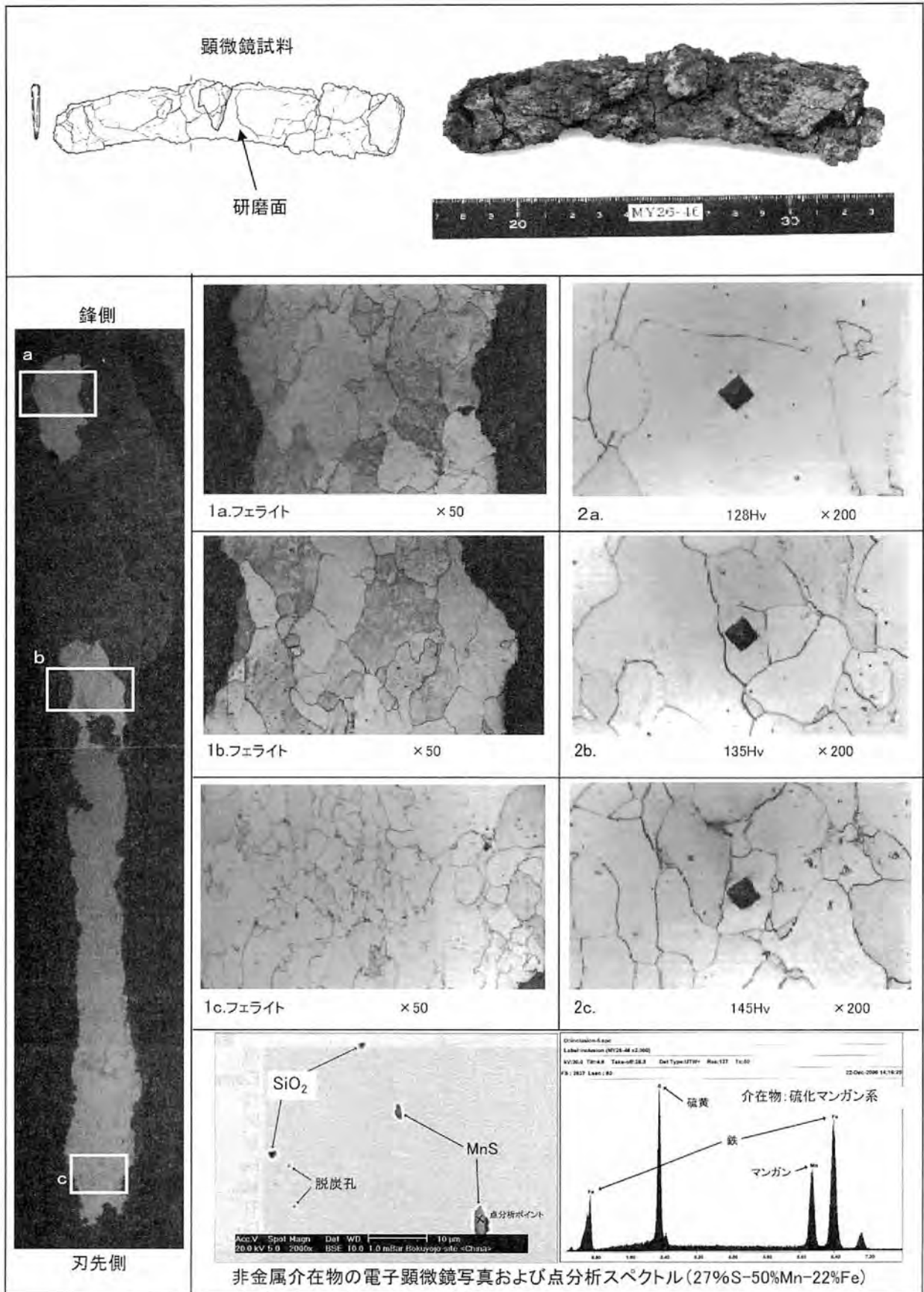
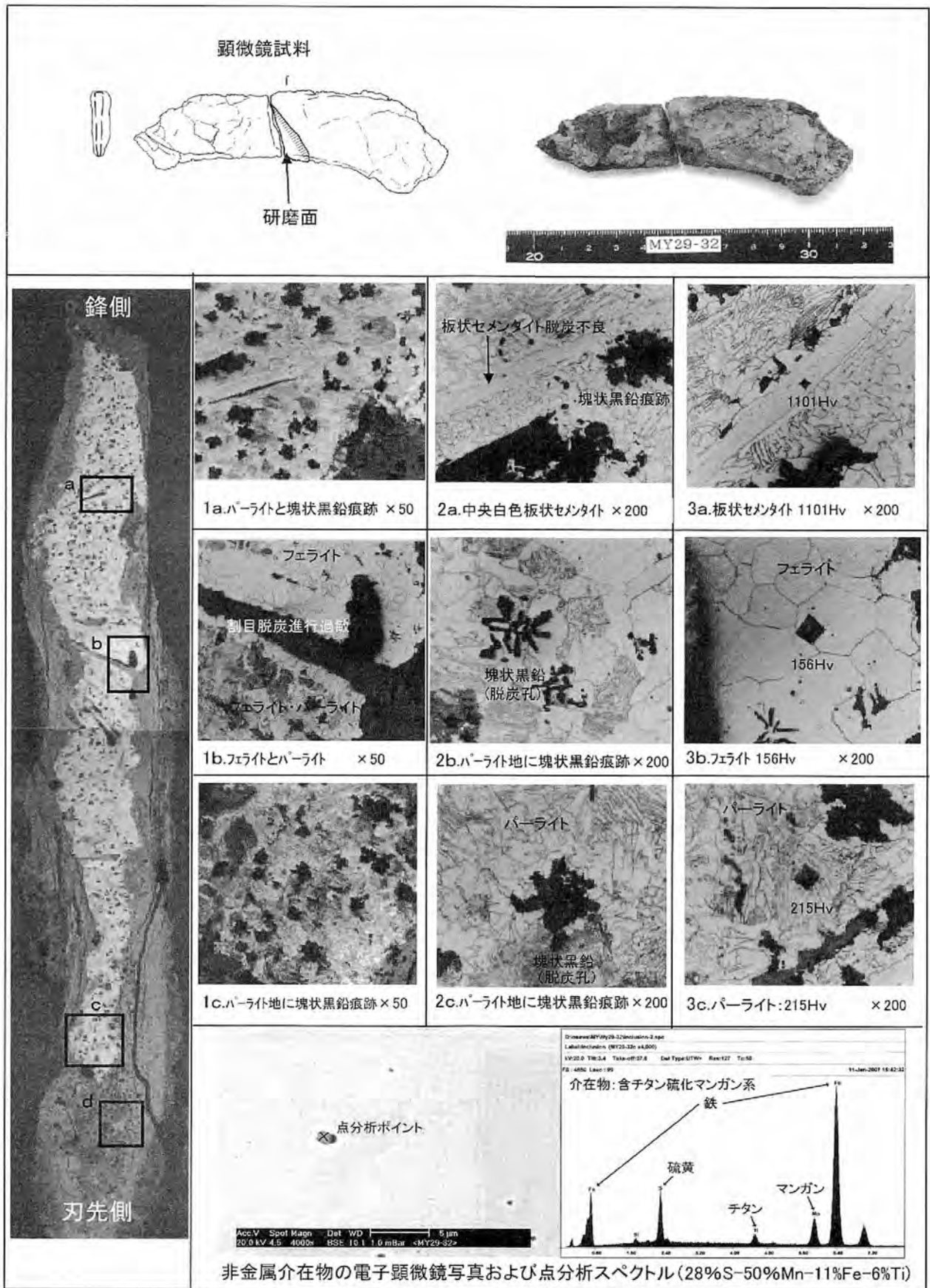


Photo. 5 牧羊城出土鎌(MY26-46)の顕微鏡・電子顕微鏡調査結果(白心可鍛鑄鉄製品)



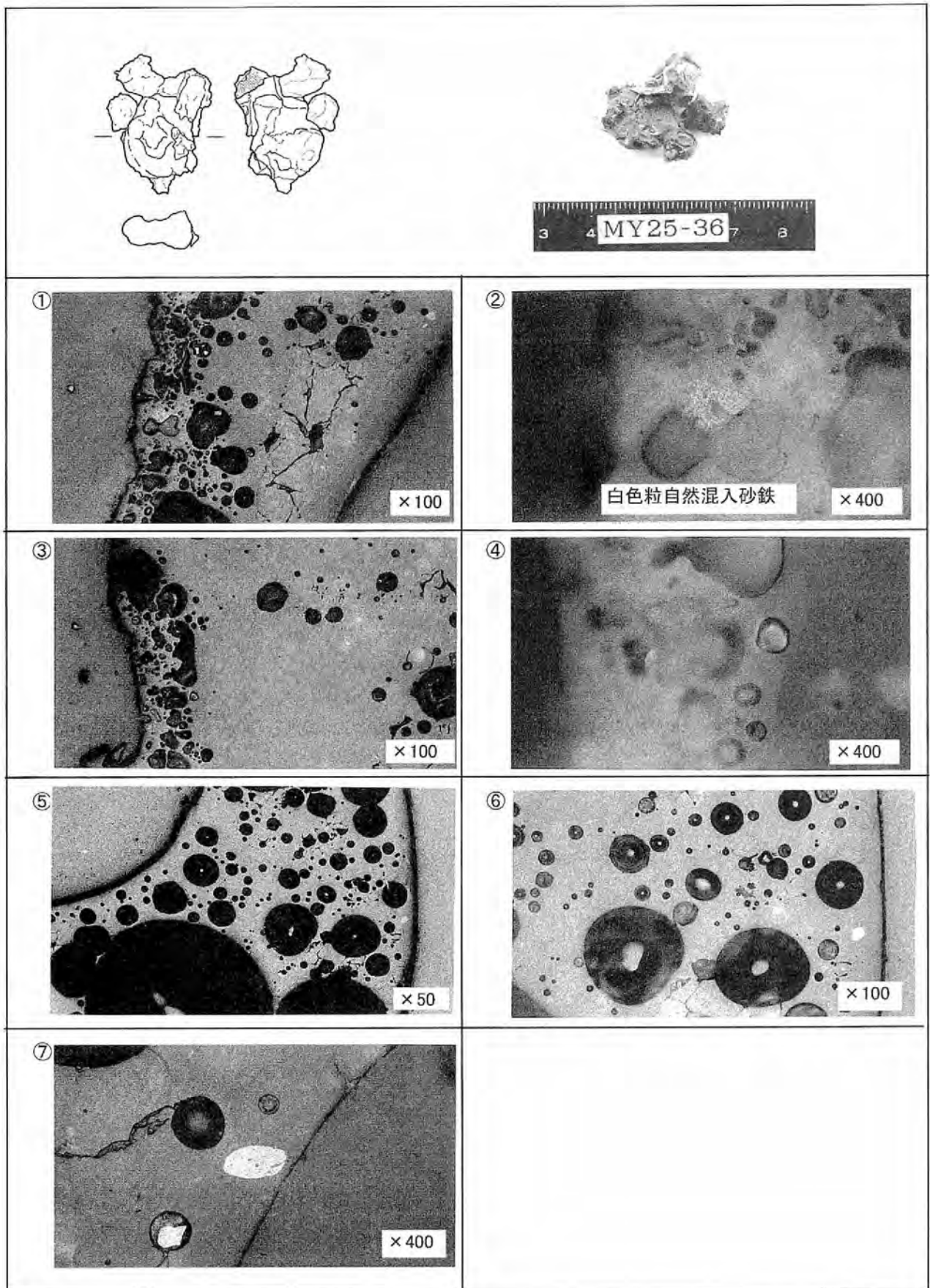


Photo. 7 ガラス質滓(MY25-36)の顕微鏡組織

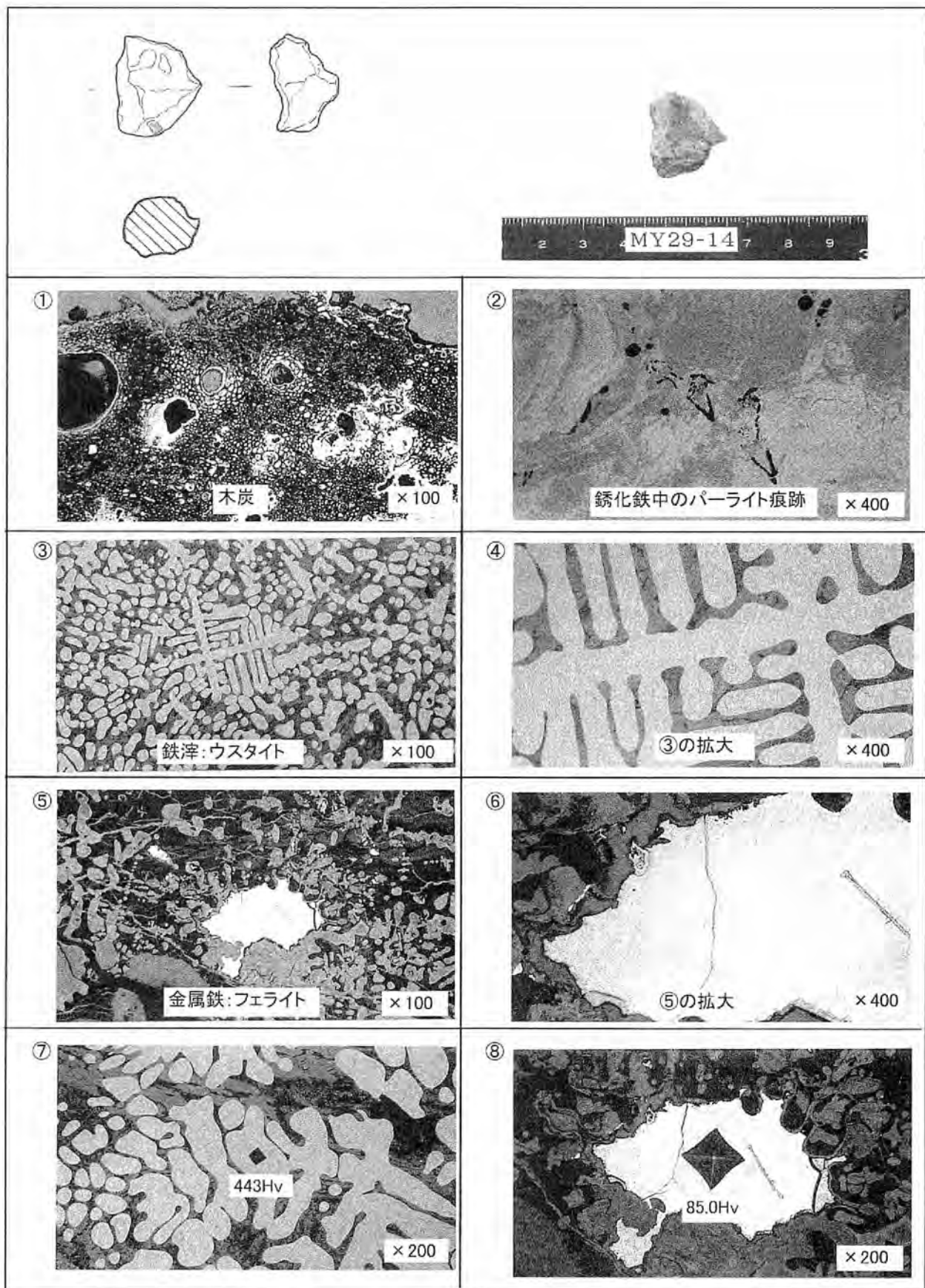


Photo. 8 鉄滓(MY29-14)の顕微鏡組織

7 - 1. 牧羊城出土銭幣の様相

古澤 義久

牧羊城では、燕から清朝にいたる様々な貨幣が出土している。以下では、現在、所在を確認することができた銭貨を中心に報告し、若干の考察を行う。

1. 牧羊城出土貨幣の様相 (図1)

1) 古文銭

1は明化銭(原報告では明刀円銭)である。直径2.5cm、重さは1.92gである。面・背とも無廓である。背は平素である。

2は一化銭(原報告では一刀銭)である。直径は2.0cm、重さは1.32gである。面には内廓と外廓がある。背は平素である。

3は半両銭である。直径は2.3cm、重さは2.17gである。面背とも無廓である。

4は半両銭である。直径は2.3cm、重さは2.15gである。面背とも無廓である。

なお、現時点では以上4点の所在が確認されているが、牧羊城では全部で、明刀銭が14枚、明化銭が3枚、一化銭が2枚、半両銭が7枚、五銖銭が3枚、大泉五十が1枚出土していると原報告(原田・駒井1931)には記述されている。特筆すべき出土状況としては南1区において半両銭と重なった状態で明化銭が出土している。その明化銭と半両銭が、ここで図示したものであるかどうかはわからない。

2) 清朝銭

4は嘉慶通宝である。東7区深さ4尺8寸及び東3区深さ8寸で出土したと原報告では記述されているが、4がどちらで出土したのものは判断できない。直径2.1cm、重さは2.83gである。背の満州文字は磨り減っており、判読できない。初鑄年は1795年である。

5は道光通宝である。北3区深さ1尺で出土した。直径1.8cm、重さは0.91gで、周縁が削られている。背の満州文字は左が「boo」、右が「yuwan」で「宝源」を意味することから、鑄造地是北京順天府の工部宝源局である。工部宝源局での初鑄年は1820年である。

6は光緒元宝である。東6区上層で出土した。10文銭で、直径2.9cm、重さは7.63gである。「江蘇省造」銘が記されている点及び満州文字が左は「boo」、右が「su」となっており「宝蘇」を意味することから、製造地は江蘇省蘇州の江蘇宝蘇局である。初鑄年は、1901年である。

2. 若干の考察

1) 古文銭

(1) 明化銭

1のような明化銭の出土例は極めて少ない。遼寧省綏中県大官帽村(傅俊山1992)で窖藏から2枚、遼寧省凌源安杖子古城の中T3③層(李恭篤・高美璇1996)で1枚、遼寧省凌源県(閻奇1994)で39枚、吉林省集安麻線溝西大塚の東約50mの高句麗石墓の下で発見された円形の壙(古兵1964)で1枚出土している(表1)。綏中大官帽村では3つの窖藏が発見され、その中には全て円銭が入っていた。そのうち一つの窖藏では総計250kg中、95%以上が五銖銭であったが、2枚の

明化銭が発見されている。1枚は直径2.5cm、重さ3.2gで面は無廓で背は平素である。もう1枚は直径2.6cm、重さ3.7gで、面は無廓で背は平素である。この明化銭は「明」字の「日」字部分の中に点が入り特異である。安杖子古城の「中T3③層」では明化銭のほかは一化銭が出土している。安杖子古城では総計250点の戦国時代の貨幣が出土している中で明化銭はわずか1枚のみである。出土した明化銭は直径2.5cmで、面は無廓である。遼寧省凌源県では工事の際に40枚の貨幣がまとめて発見されたが、39枚が明化銭で、1枚が八銖半両であった。報告者の閻奇は八銖半両の製造が開始された紀元前186年から遠くない時期が窖蔵の下限であるとみている（閻奇1994）。凌源県のもは直径2.7cm、重さ4.2gのもの、直径2.45cm、重さ1.8gのもの、直径2.3cm、重さは2.2gのものが報告されている。全て面は無廓で、背は平素である。集安麻線溝では窖蔵から出土しており、1点の明化銭、一化銭、半両銭、五銖銭、大泉五十、貨泉などが出土しており、王莽新を上限とする窖蔵であると考えられる。出土した明化銭は直径2.5cm、重さ3.2gで面も背も無廓、背は平素である。

これらの明化銭は面が無廓で、背は平素であり、牧羊城のものも同様である。直径は2.3～2.7cmのものがみられるが、牧羊城のものは2.5cmで、綏中大官帽村、安杖子古城、凌源県、集安麻線溝でも2.5cmのものが認められ、一般的なものである。重量は凌源県で1.8～4.2gのものがみられるが、牧羊城のものは1.92gで軽めのものである。

石永士と王素芳によるとこの他に燕下都でも出土しているという（石永士・王素芳1990）。しかしながら、明刀銭出土遺跡を集成した손량子によれば、韓半島西北部から河南省までで55箇所の明刀銭出土遺跡が知られ（손량子1990）、現在では明刀銭出土遺跡はこれより3倍以上に増えているにもかかわらず、確実に出土位置のわかる明化銭出土遺跡は、管見の限り、上記の牧羊城、集安麻線溝、綏中大官帽村、安杖子古城、凌源県、燕下都のわずか6箇所のみで非常に少なく、出土量もそれほど多くはない。また、窖蔵からの出土であっても、綏中大官帽村、凌源県、集安麻線溝のように、半両銭やそれ以降の貨幣が伴って出土する窖蔵から出土し、戦国貨幣を下限とする窖蔵からの出土例は確認できない。特に凌源県では窖蔵のほとんどが明化銭で、他の戦国時代の明刀銭や一化銭が出土する窖蔵とは全く異なる組成を示している（表1）。牧羊城で明化銭が半両銭と重なって出土したという事例はこの点で窖蔵での明化銭のあり方に近い。戦国時代の遺構からの出土例は城址のみにこれまでのところ限られている。従って、次に述べる一化銭がおおむね明刀銭に伴って多量に出土しているという在り方と明化銭は異なる在り方を示しているといえよう。明化銭は明刀銭や一化銭とは少なくとも戦国時代の段階では異なる用いられ方をしたのではないかということが想定される。出土量や出土遺構を勘案すると明化銭が戦国時代の段階で実際に流通した貨幣であるのかという疑問が浮上するが、今後の出土事例を待ち、改めて考察したい。そのような珍しい明化銭が牧羊城において3枚出土したという点が注目される。これが戦国・秦漢代の牧羊城の性格と関連してどのような意味を持つのかは現時点では明確ではない。

多くの研究者が指摘するように明化銭は明刀銭と字体など多くの共通点を持ち（王毓銓1957, 朱活1981）、安杖子古城では一化銭と同一トレンチ内の同一層位で出土したことから燕と関連する貨幣であるものと思われるが、出土状況として牧羊城で半両銭と重なった状態で出土したという点や綏中大官帽村、凌源県、集安麻線溝といった窖蔵での出土事例を勘案すると漢代でも使用された可能性がある。ほぼ同様の理由で、原田淑人、藤田亮作、王毓銓、関野雄、石永士、王素芳らも東北地区では漢初まで使用されたと想定している（原田・駒井1931, 藤田1938, 王毓銓1957, 関野1962, 石永士・王素芳1990など）。

ただ、筆者が若干問題がある点と考える点は次の点である。明刀銭や一化銭は無廓のものが若干ある

ものの、有廓のものが主である一方、これまで出土した明化銭は全て無廓である。そして、直径も2.5cm内外のものが多い。これらの諸点は実は半両銭と共通する要素でもある。また、先述したように戦国を下限にする窖蔵から出土する事例は確認されず、半両銭以降の貨幣が伴う窖蔵から出土する点などから半両銭との関連もあるようにも見える。果たして明化銭は漢代においては「混用」されただけであると結論づけることができるのか判断の難しいところである。

(2) 一化銭

劉俊勇によれば、明刀銭と一化銭が大連市旅順口区・甘井子区・沙河口区・金州区・普蘭店市・瓦房店市・莊河市と全域で多量に出土しているようであるが（劉俊勇 1997）、遺蹟ごとの明刀銭と一化銭の内容が記述されておらず、詳細は不明である。

この内、戦国時代貨幣が最新の窖蔵で、内容のよくわかる瓦房店市交流島郷鳳鳴島では、明刀銭120枚、布幣14枚とともに2280枚の一化銭が出土している（王嗣洲 1988,1990）。また、莊河市の桂雲花村（王嗣洲・孫徳源・趙華 1994）では1400枚の明刀銭、110枚の布幣とともに2200枚の一化銭が発見され、同じく莊河市の四家屯（王嗣洲・孫徳源・趙華 1994）では1306枚の布幣とともに2145枚の一化銭が出土している。石堡村、拉勝屯（王嗣洲・孫徳源・趙華 1994）でも、布幣と一化銭の組み合わせで出土している。このほか大連市では高麗寨でも23枚の一化銭が10枚の明刀銭、6枚の布幣、1枚の半両銭とともに出土した事例が確認されている（浜田 1929）。このことから、牧羊城の所在する大連市では一化銭が普遍的に見られると考えてよいであろう。

一化銭は、大連市に限らず、中国東北部、内蒙古東部、河北、山東、韓半島西北部で広く発見されているが、分布の中心はこれまでの集成では遼西・遼東である（表1）。そして、発見される遺蹟の性格は城址、住居址や窖蔵などである。

一化銭の年代は多くの研究者が鑄造の質が悪い点や円銭である点から戦国後期と考えてきた（王毓銓 1957, 関野 1962, 朱活 1981,1984, 石永士・王素芳 1990 など）。鳳鳴島の窖蔵の報告者である王嗣洲は一化銭に関して、遅い段階の明刀銭V式と「襄陽」布と伴うことが多いという点、分布が燕遼東郡に多いという点、銅質が一定でなく、鑄造が粗悪な点から円銭をもちいる秦が東したときの影響で出現したもので、燕王喜が遼東に移った後（紀元前226～222年）に鑄造された戦国時期の最も遅い段階の貨幣であると考えている（王嗣洲 1990）。劉俊勇はさらに歩を進め、一化銭と「襄陽」布とともに鉛含有率が高く、小さく軽い点から燕国後期のもので、民間の私鑄品であると述べている。このことから燕の勢力が弱化したことを示すとも述べている（劉俊勇 1997）。

また、一化銭の使用の下限については半両銭との共伴から漢代とする見解（王毓銓 1957, 関野 1962, 石永士・王素芳 1990 など）が多い。

窖蔵において一化銭と共伴する銭種と出土量の傾向としては、多量の明刀銭と多量の一化銭および布銭という組み合わせが多い（表1）。従って、一化銭は燕国に関連する貨幣であろう。但し、河北・内蒙古などでは一化銭が出土せず、刀幣と布幣のみが出土する窖蔵も多く、この点では燕後期の貨幣であるという従来の想定は首肯できる。慈江道서해리（유정준 1958）や内蒙古赤峰新窩鋪（項春松 1984）では半両銭がともに出土しているものの、千枚百枚単位の一化銭や明刀銭、布幣の中に数枚の半両銭が入るというものである。しかも新窩鋪で出土した半両銭は秦の大半両である。従って、서해리や新窩鋪例は本来、明刀銭と一化銭、布幣の組み合わせがあつて、その組成の銭貨を遅くとも漢初に埋蔵したと考えるのが最も自然であろう。但し、住居址からの出土である三道壕例は若干特異な出土状況を示している。これについては住居址からの出土事例を待つて考察したい。

一化錢の形態は牧羊城出土例(図1-2)がそうであるように、面に内廓と外廓をもつのが一般的な例である。しかし、報告例では管見の限り瓦房店鳳鳴島窖藏や莊河桂雲花村、四家屯で面が無廓の一化錢(王嗣洲1990分類Ⅱ式,Ⅲ式)が出土している。鳳鳴島や桂雲花村、四家屯では半兩錢が出土せず、下限の貨幣は燕と関連する貨幣である。このことから燕後期に製造使用されたと想定される一化錢には面が有廓のものと無廓のものがあるものの、これまでの時期区分では時期差であるとは考えにくいであろう。分布としてはこれまでの報告では瓦房店市、莊河市といった大連市でのみ確認されており、大連市以外の地域では無廓のものを報告していない可能性もあるので、断言はできないものの、面が無廓の一化錢は地域的なものである可能性がある。重さでも河北・内蒙古の例ではおおむね1.5~1.7gのものが多いが、大連市では王嗣洲が指摘するように1.3g程度の軽いものと2.4g以上の重いものの2種がある。このような2種は遼東で比較的多く確認されるようである。牧羊城例は1.32gなので、軽いほうに属する。重量でも地域的な差がみられる可能性がある。

なお、山東省でも済南市の五里牌坊(朱活1984)で齊国貨幣とともに1枚の一化錢が出土しているが、この一化錢が河北省廻りでもたらされたのか、遼東半島から海路を経てもたらされたものなのか、牧羊城の環渤海的な位置づけも含め興味深い問題である。

2) 清朝錢

原報告ではこのように牧羊城から清朝錢が出土することに対して、「遺蹟の局部的攪乱から生じた現象に外ならないのである。」と判断されている(原田・駒井1931)。この指摘はおおむね正しいものと思われる。なお、清朝錢が出土する最も深い事例は嘉慶通宝の4尺8寸(約1.45m)である。

文献

<中文>

崔艶茹・馮永謙・崔徳文 1996『營口市文物誌』

傅俊山 1992「遼寧綏中県大官帽村発現窖藏古錢幣」『考古』1992-8 704頁

古兵 1964「吉林集安歴年出土の古代錢幣」『考古』1964-2 83-85頁

項春松 1984「内蒙古赤峰地区発現的戦国錢幣」『考古』1984-2 138-144頁

李恭篤・高美璇 1996「遼寧凌源安杖子古城址発掘報告」『考古学報』1996-2 199-236頁

李文信 1957「遼陽三道壕西漢村落遺址」『考古学報』1957-1 119-126頁

劉承斌・李凱 1993「錦県白台子郷発現戦国錢幣窖藏」『遼海文物学刊』1993-2 155,131頁

苗濟田・趙志厚 1981「河北省灤平県発現一批窖藏戦国貨幣」『文物』1981-9 93頁

寧克 1989「河北青龍出土燕国円錢」『考古』1989-3 198頁

瀋陽市文物管理辦公室 1993『瀋陽市文物誌』

石永士・王素芳 1990「燕国貨幣概述」『文物春秋』1990-2 46-63頁

孫恩賢 1983「義県大荒地出土一批戦国貨幣」『遼寧文物』4 51頁

王毓銓 1957『我国古代貨幣的起源和發展』

王嗣洲 1988「遼寧瓦房店市鳳鳴島出土戦国貨幣」『北方文物』1988-4 30,31,29頁

王嗣洲 1990「大連市三処戦国貨幣窖藏」『考古』1990-2 102-105頁

王嗣洲・孫徳源・趙華 1994「遼寧莊河市近年出土の戦国貨幣」『文物』1994-6 76-81頁

王兆軍 1964「内蒙古昭盟赤峰市発現戦国墓」『考古』1964-1 58頁

呉宗信 1986「三道営子窖藏古錢清理簡報」『中国錢幣』1986-2 71-72頁

辛占山・曹桂林 1992 「遼寧鉄嶺邱家台発現窖藏錢幣」『考古』1992-4 314-314,303頁

徐光冀 1979 「赤峰蜘蛛山遺址の発掘」『考古学報』1979-2 215-243頁

許明綱 1997 「大連地区燕文化遺跡」『文物春秋』1997-2 10-13頁

閻楽耕・王雲瑞 1989 「河北省青龍県出土窖藏戦国貨幣」『文物』1989-4 91-92頁

閻奇 1994 「遼寧凌源県発現燕国 錢」『中国錢幣』1994-2 56頁

朱活 1981 「古錢」『文物』1981-9 88頁

朱活 1984 「匱幣管窺」『古錢新探』142-171頁

鄒宝库 1980 「遼陽出土の戦国貨幣」『文物』1980-4 94-95頁

<韓文>

劉俊勇(崔茂藏 訳) 1997 『中国大連考古研究』

李順鎮・장주협 1973 『古朝鮮問題研究』

손량구 1990 「遼東地方과 西北朝鮮에서 드러난 明刀錢에 대하여」『考古民俗論文集』12 28-47쪽

유정준 1958 「慈江道内原始遺蹟 및 옛날 돈이 發見된 遺蹟」『文化遺産』1958-5 50-57쪽

<日文>

駒井和愛 1944 「熊岳城温泉附近土中文化」『考古学雑誌』34-5 296-297頁

澤田四郎 1951 『熊岳城温泉附近遺跡の研究』

関野雄 1962 「先秦貨幣雜考」『東京大学東洋文化研究所創立二十周年記念論集Ⅲ』53-105頁

田村晃一 1994 「楽浪郡設置前夜の考古学 - 清川江以北の明刀錢出土遺跡の再検討 -」『東アジア世界史の展開』3
-33頁

浜田耕作 1929 『貔子窩』

原田淑人・駒井和愛 1931 『牧羊城』

藤田亮策 1938 「朝鮮發見の明刀錢と其遺蹟」『史学論叢』京城帝国大学文学会論纂第7輯 1-88頁

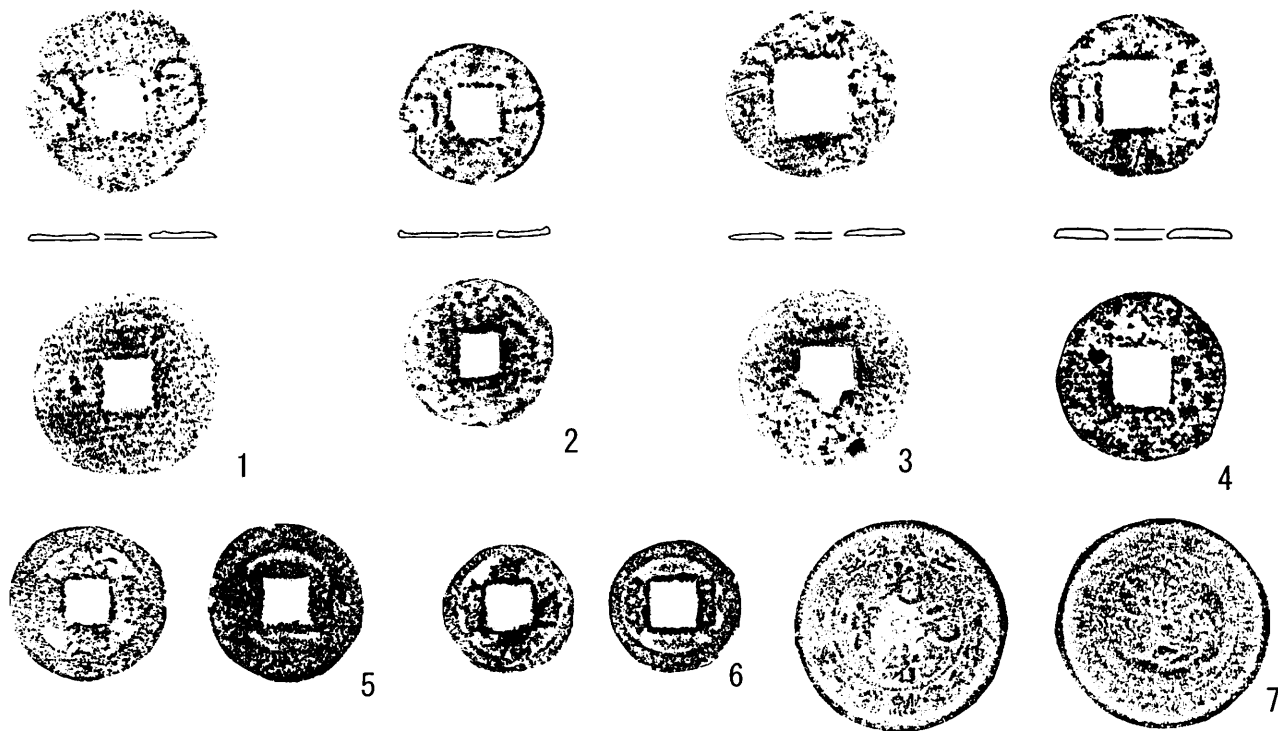


図1 牧羊城出土貨幣(原寸)

一化錢・明化錢出土地	遺蹟性格	一化錢	明刀錢	布錢	明化錢	半兩錢	其他錢幣・備考	文献
平安南道徳川청송	窖藏	91	4280	299				李順鎮・장주협 1973
慈江道 자성군 서해리	窖藏	650	2000			3		유정준 1958
吉林集安麻線溝	窖藏	1			1	○	五銖錢・王莽錢	古兵 1964
遼寧大連牧羊城	城址	2	14		3	7	五銖錢 3, 大泉五十 1, 清朝錢	原田・駒井 1931
遼寧瓦房店鳳鳴島	窖藏	2280	120	14				王嗣洲 1988, 1990
遼寧普蘭店侯家村	窖藏	○	○	○				許明綱 1997
遼寧普蘭店老龍山	窖藏	○						許明綱 1997
遼寧普蘭店北嵐子	窖藏	○		○				許明綱 1997
遼寧普蘭店高麗寨	包含層	23	10	6		1		浜田 1929
遼寧莊河桂雲花村	窖藏	2200	110	1400				王嗣洲・孫德源・趙華 1994
遼寧莊河石堡村	窖藏	642		360				王嗣洲・孫德源・趙華 1994
遼寧莊河拉勝屯	窖藏	○		○				王嗣洲・孫德源・趙華 1994
遼寧莊河四家屯	窖藏	2145		1306				王嗣洲・孫德源・趙華 1994
遼寧遼陽下麦窩	窖藏	400 余		4000 余				鄒宝庫 1980
遼寧遼陽三道壕 F2 早期 炉址	炉址	○					○ 半兩錢は大半兩と小半兩	李文信 1957
遼寧遼陽三道壕 F2 晚期	住居址	○					○ 大半兩, 小半兩, 五銖, 大泉五十	李文信 1957
遼寧遼陽三道壕 F3	住居址	○					○ 小半兩, 五銖	李文信 1957
遼寧遼陽三道壕 F6	住居址	○					○ 小半兩, 五銖	李文信 1957
遼寧遼陽三道壕磚窯址	窯址	○	○				○ 小半兩, 五銖	李文信 1957
遼寧瀋陽故宮与瀋河公安分局	包含層	○					○ 五銖, 貨泉	瀋陽市文物管理辦公室 1993
遼寧鉄嶺邱家台窖藏の 1 罐目	窖藏		331					辛占山・曹桂林 1992
遼寧鉄嶺邱家台窖藏の 2 罐目	窖藏	12706		2415		130		辛占山・曹桂林 1992
遼寧熊岳城温泉	包含層	○	○	○				駒井 1944, 澤田 1951
遼寧營口二道河	窖藏	○		○				崔艶茹・馮永謙・崔徳文 1996
遼寧錦県白台子郷小王 家窩鋪屯	窖藏	31		8				劉承斌・李凱 1993
遼寧錦西小荒地古城	城址	1	1			3	五銖錢 2, 貨泉 1	朱永剛・王立新・王成生 1997
遼寧義県大荒地	窖藏	256	403	39				孫恩賢 1983
遼寧綏中大官帽村	窖藏				2		総量 250kg の 95% が五銖錢	傅俊山 1992
遼寧凌源安杖子古城	城址	150	20	79	1			李恭篤・高美璇 1996
遼寧凌源凌鋼	窖藏?				39	1		閻奇 1994
内蒙古林西三道営子	窖藏	3				7	最新は遼代	吳宗信 1986
内蒙古赤峰新窩鋪	窖藏	2325	6	257		1	半兩錢は秦大半兩	項春松 1984
内蒙古寧城県	不明	○	○					王兆軍 1964
内蒙古赤峰蜘蛛山	包含層	1	3			3		徐光冀 1979
河北青龍宋丈子村	窖藏	130 余	◎	20 余				閻樂耕・王雲瑞 1989
河北青龍宋丈子村	窖藏	189 以上						寧克 1989
河北灤平営坊	窖藏	280	500 余	54			趙刀 3	苗濟田・趙志厚 1981
山東濟南五里牌坊	窖藏?	1					齊刀 59, 齊環錢 599	朱活 1984

表 1 一化錢・明化錢出土状況

7 - 2. 牧羊城出土石器の様相

古澤 義久

1. 牧羊城出土石器の様相

牧羊城では数量はそれほど多くはないものの何点かの石器が出土している。ここでは現在、東京大学文学部で確認される石器を報告する。

1は頁岩製の石鏃である。最大長1.8cm、最大幅1.6cm、最大厚2mmを測る。刃部は斜位方向の研磨、基部は縦方向の強い研磨が見られ、研磨部の断面は中央が若干凹んでいる。基部の挟りが弧状をなしているが、基部を鏃身と垂直に研磨している。2は頁岩製の石鏃である。基部の挟りが弧状をなす。最大長2.25cm、残存幅1.6cm、最大厚2mmを測る。刃部は斜位方向の研磨がみられるが、基部を鏃身と垂直に研磨している。

3は閃緑岩製石斧である。断面が長方形に近く、柱状である。全体が研磨されている。4は閃緑岩製石斧である。敲打の後、刃部を中心に研磨している。5は閃緑岩製石斧である。敲打の後、刃部のみを研磨している。刃はつぶれ、剥離が多く見られるため、石斧としての使用後、叩き具に転用したものである。

2. 若干の考察

1のような短く、基部が弧状に湾入する石鏃は、韓半島と遼東地域の青銅器時代の石鏃を分類した中村大介の分類(中村2005)の内、 γ 型に分類されるものである。中村によれば、遼東半島において、 γ 型石鏃は双砦子3期の途中から徐々に現れ、同様の資料は崗上墓(朝中共同発掘隊1966, 中国社会科学院考古研究所1996)、楼上墓(朝中共同発掘隊1966, 中国社会科学院考古研究所1996)、尹家村下層1期の段階で多くみられるという。そして、牧羊城資料も γ 型の典型として提示されている(中村2005)。

2は中村の γ 型の典型とは少し異なる。中村の γ 型は鏃身を縦磨研して凹ませる特徴が定義されているが、本資料は形態は γ 型であるものの、鏃身に縦磨研が行われておらず、断面は扁平な六角形となっている。本資料に類似する資料としては、崗上墓で出土した鏃身に縦磨研を施していないように見える資料(M6:8)が挙げられる。墓葬からの出土であるため未製品を副葬したとは考え難く、崗上墓などの段階でも極少数ではあるが、形態は γ 型ではあるが鏃身に縦磨研を施さないものも存在したと考えておくのが自然であろう。ただし、崗上墓や楼上墓の段階では大部分は中村の主張どおり鏃身を縦磨研して凹ませるものがほとんどであり、それほど一般的ではない。

このように考えた場合、これらの石器は牧羊城1類土器のA類の段階、すなわち双砦子3期と崗上墓の中間段階に伴うのか、牧羊城1類土器B類の段階、すなわち尹家村下層1期に伴うのか、問題となるが、双砦子3期、崗上墓、楼上墓、尹家村下層1期(中国側の報告では尹家村1期)全ての段階で、同様の石鏃が認められるため、どちらの段階かは決定できない。但し、牧羊城1類土器に伴うことは確実である。

本稿をなすにあたっては中村大介氏、土屋みづほ氏のご教示を得た。

文献

中国社会科学院考古研究所 1996 『双砣子与崗上』

朝中共同発掘隊 1966 『中国東北地方の遺蹟発掘報告』

中村大介 2005 「無文土器時代前期における石鏃の変遷」『待兼山考古学論集 - 都出比呂志先生退任記念 -』

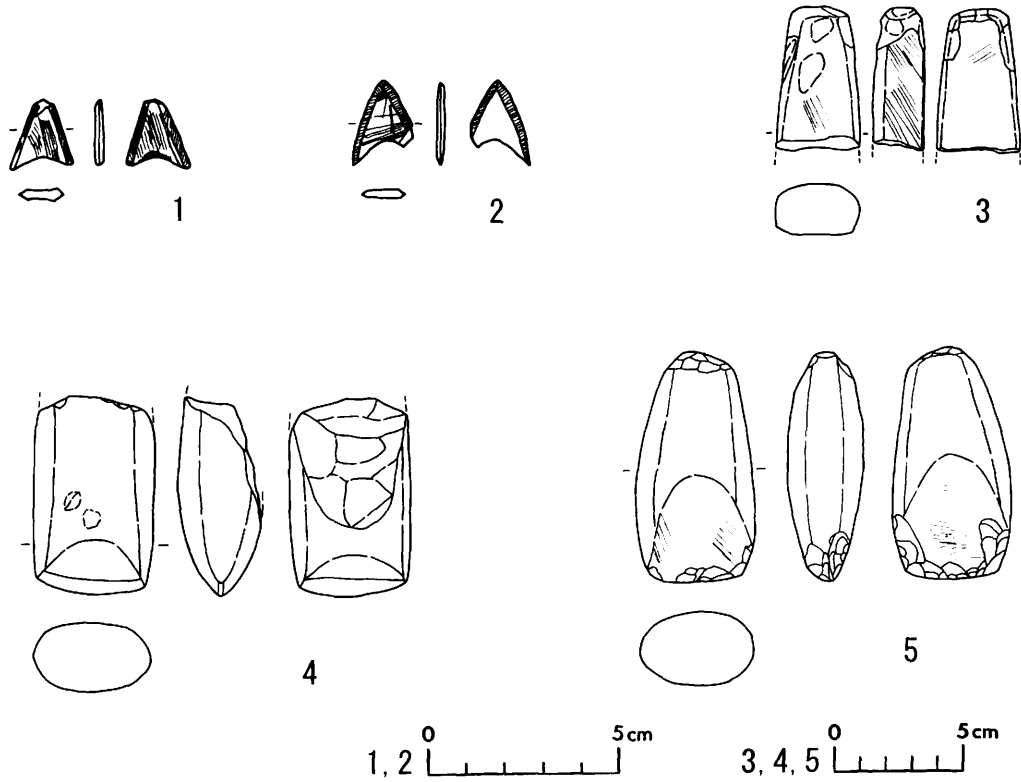


図1 牧羊城出土石器 (1, 2はS = 1 / 2、3 ~ 5はS = 1 / 3)

8 — 1. 牧羊城周辺発見の銅剣・銅斧

後藤 直

1. 伝尹家村官屯子出土銅剣

牧羊城報告書挿図二六—3・4に写真を掲載する銅剣破片2点については、官屯子川右岸に露出していた「第三號石墓に近き河中で収得され」尹家村官屯子の村落で購入した、と記すだけで（東亜考古学会1931：47）、詳しい記述はない。これらは東京大学文学部列品室に保管されており（伝官屯子銅剣と呼ぶ）、以下に実測図を示し観察結果を記す（図1）。

報告書挿図二六—3をA、4をBとする（Aは両面の図を示す、A1・A2）。現状を報告書写真とくらべると、A1の下部右側葉部とBの左側葉部が折れて失われ、折れ面に赤みを帯びた銅色が現れている。それ以外は報告書写真どおり、内部からの錆で表面が盛り上がるなどいちじるしく錆化してもとの面をとどめる部分はなく、A1の断面b付近右側葉部は錆を削り落としもとの面を露出させている。

Aは銅剣の鋒から身下部近くの破片で、鋒端を欠き残長23.2cm。縁（刃部）は錆のため断定はできないが、多少欠失し本来の状態をとどめるところはないようである。縁に刃方や突起はない。断面b付近の錆を削った部分には刃部研ぎ出しの鑄とみられる線があり、本来の幅は3.2cmほど、厚みは3mm以下であろう。脊はA1面では断面bの上方3cmまで、A2面では1.5cmまで確認できるが、それより鋒方向では確認できず、本来鋒長が著しく長いとみられる。脊は幅が1.3～1.4cm、厚さが約1.2cmで、典型的琵琶形銅剣のように脊が厚くなる個所はない。鋒から脊に通る鑄は錆のため見えない部分もある。脊の鑄は、A1面では断面b部分以下には見えず、A2面では断面b～cでかすかに認められ、断面c部分以下には研ぎ出していないようである。

Bは身下部から茎部分の破片で、残存長12.8cm。身の縁はA同様多少欠けているが、最大幅は断面eから推定して4cmを超えないだろう。縁に刃を研ぎ出しているかどうかはわからない。関部（図の矢印部分）も欠失があり本来の形状は判断できない。脊は幅が上部から関

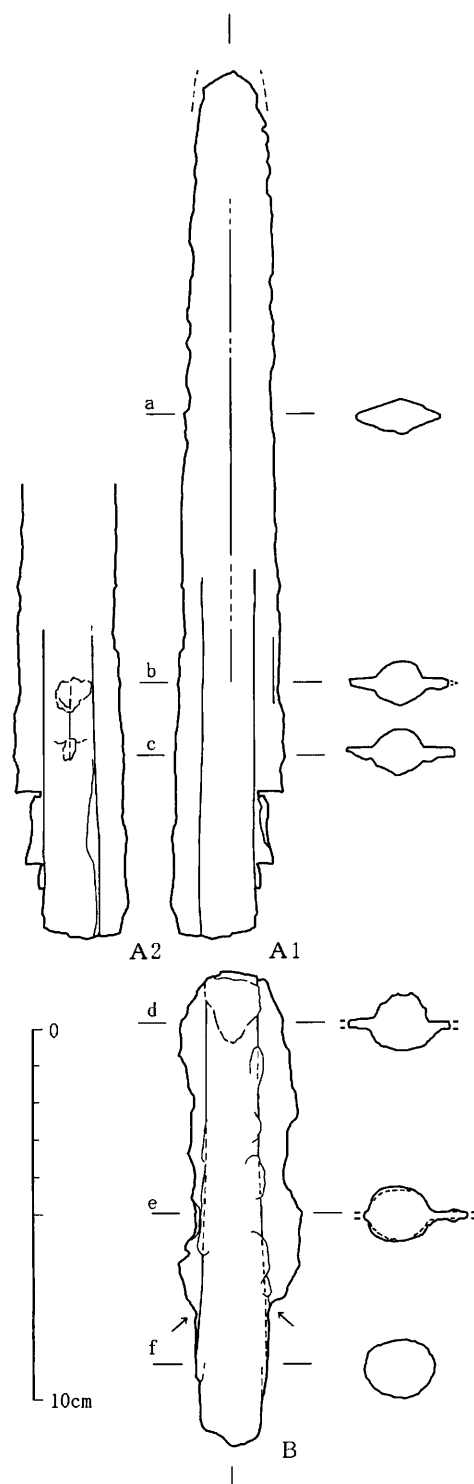


図1 伝官屯子出土銅剣

部へ広くなり（1.4cm～1.8cm）、厚さは断面 e で現状 1.5cm（銹を除くと約 1.3cm か）。脊から続く茎は下端が少し欠けているらしいが現存長約 3.7cm、幅と厚さは銹でふくれあがっている現状で 2 × 1.6cm。

破片 A・B は大きさと銹の状態から、接合はしないが同一個体と判断できる。復元すれば全長約 37cm、身長約 33cm、最大幅 4cm、鋒長約 17cm で、縁に割方や突起がなく、鎬を脊上部まで研ぎ出し（その下には研ぎ出さない？）、脊の厚みがほぼ一定の細長い銅剣である。この銅剣にもっとも近い類品は尹家村 12 号墓副葬銅剣である（朝・中合同考古学発掘隊 1966：140-141、中国社会科学院考古研究所 1996：131）。

1963・64 年に発掘調査した尹家村遺跡では土坑のほかに墓を 20 基調査した。墓は尹家村 1 期、同 2 期、漢代の 3 時期に分けられ、土壙石槨墓の 12 号墓は尹家村 2 期の唯一の墓で、銅剣 1、環状石斧 1、土器 6 を副葬していた。調査地は尹家村西南の南河（牧羊城報告の官屯子川）北岸で、遺跡地形図と牧羊城報告地図から、すでに崩落してしまった牧羊城報告Ⅱ号・Ⅲ号石墓のすぐ北付近と推定できる。Ⅲ号石墓の付近にあって伝官屯子銅剣を副葬していたであろう墓と、同型式の銅剣を副葬する 12 号墓は同じ墓地にあったのである。

2. 牧羊城附近発見の銅斧

この牧羊城附近発見の扇形銅斧は牧羊城報告書挿図二六—2 に、聖周墓出土銅斧の類例として写真掲げるもので、詳しい出土地・蒐集経緯不明（東亜考古学会 1931:52、挿図 26—3）。上端に幅 0.4cm の突帯 1 条をもち、全長 4.1cm、刃部幅 3.8cm、上端部幅 3.1cm・厚さ 1.6cm。釜口は 2 × 1cm の長方形、深さ 2.9cm。A 面の突帯中央下に意図的に設けた微小突起がある。その下の右から左下へ鋳型を少し彫り込みすぎたために生じたかすかな帯状隆起がある。側面には鋳造後ほとんど

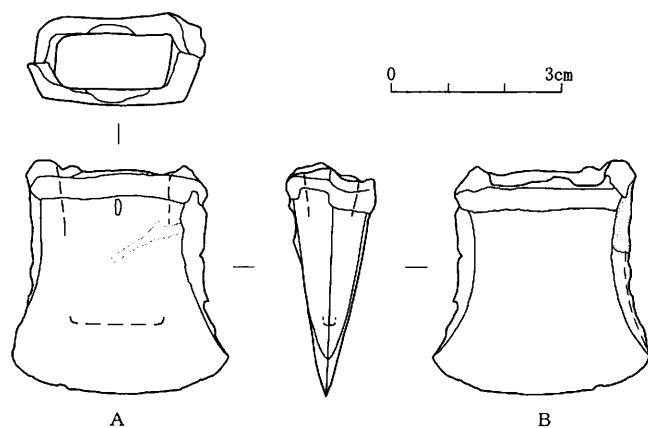


図 2 牧羊城附近発見の銅斧

手を加えず中央に鋳型の合わせ線が残る。両側面の状態・B 面右側面端のバリ・両面の突帯の位置から、製作時に両面の鋳型が上下に約 2mm、左右に 1mm 強ずれたことがわかる。両面の突帯中央上に幅 0.8～1cm、厚さ 2mm、高さ 1mm 未満～2mm 未満の、上から見ると半月形の隆起部が残る。鋳型の湯道中央に注湯と上がりのために一段深く彫った溝に入った青銅の下端部で、遼寧東部の扇形銅斧鋳型通有の湯口・湯道・中型固定法の石製鋳型で鋳造したことを示す。

〔文献〕

後藤 直 1996「靈岩出土鋳型の位置」、『東北アジアの考古学第二』,pp149-203,キブンセム社

東亜考古学会 1931『牧羊城』,東方考古学叢刊甲種第二冊,東亜考古学会

朝・中合同考古学発掘隊 1966『中国東北地方の遺跡発掘報告—1963—1965—』,社会科学出版社(東北アジア考古学研究会誌 1986『崗上・樓上—1963—1965 中国東北地方遺跡発掘報告—』,六興出版社、引用は訳書)

中国社会科学院考古研究所 1996『双砣子与崗上—遼東史前文化的發現和研究—』,科学出版社

8 - 2. 東京大学文学部所蔵高麗寨資料

古澤 義久

1928年、東亞考古学会と関東庁博物館は合同で貔子窩（現 普蘭店市）高麗寨の調査を行った（浜田 1929）。この時の調査資料の大部分は京都大学に所在するものの、本研究室にも若干数、所在する。本稿では本研究室所在高麗寨資料を報告すると共に、高麗寨をめぐる諸問題について論じる。

1. 本研究室所蔵高麗寨資料（図 1、2）

1 は平行沈線が施文された広口壺である。2 は平行沈線が施文された内傾する口縁の罐である。口唇部は内面に若干突出する。3 は横位のミガキが顕著な碗である。4 は長頸壺の頸部で平行沈線→鋸歯文→ミガキという順の製作工程がわかる。5 は点列文が施文される広口壺である。若干外反する口縁である。6 も頸部に点列文が施文される広口壺である。口縁部はナデ調整で胴部はミガキ調整である。7 は外反する口縁の広口壺である。8 は内傾し立ち上がる口縁の壺である。口唇部が外側に突出し、刻目が付される。口縁部はナデ調整で胴部はミガキ調整である。9 はやや外反気味の口縁の壺である。口唇部をつまみ出して外側に突出させている。口縁部はナデ調整で胴部はミガキ調整である。10 は内傾し口縁が立ち上がる広口壺である。口縁部はナデ調整で胴部はミガキ調整である。11 は広口壺の胴部で横線→斜位の区画線→充填斜線の順で施文される。12 は内傾し口縁が立ち上がる壺である。13 は罐である。屈曲部に点列文が施文される。14 は罐口縁部である。大きめの点列文が施文される。15～17 は二重口縁の罐である。15 と 16 は二重口縁下端部に刻目が付される。17 は二重口縁の罐である。縦位のミガキが顕著である。18 は甌の口縁部である。二重口縁下端部に刻目が付される。19 も甌の口縁部で二重口縁である。20 は甌腰部である。若干腰部が肥厚して、点列文が施文される。23 は把手である。橋状で断面は楕円形である。21 は豆杯部である。横位のミガキが顕著である。24 は罐の胴下半部・底部である。

2. 若干の考察

図 1 - 1～3 は単砒子包含層（浜田 1929）に近い遺物群で、双砒子 1 期のものである。単砒子包含層は金用珣・黄基徳や大貫静夫らにより双砒子 1 期に編年されている（社会科学院歴史研究所・考古学研究所 1969, 小川 1982, 古澤 2007）。特に 2 のような口唇部が内側に若干突出し、口縁が内傾する弦文罐は近年では、大嘴子 H7 や大嘴子 1 期層（大連市文物考古研究所 2000）にもみられ、双砒子 1 期のものであることを裏付ける。

図 1 - 4 は双砒子 2 期の長頸壺である。双砒子 2 期には単砒子 1 号墓などで長頸壺がみられ、これに類するものである。但し鋸歯文が施文されるものは珍しく、双砒子 2 期の土器が主体の本研究室所蔵の大台山資料にもみられる。

図 1 - 5～24 は高麗寨の主体を占める土器群である。このような高麗寨で主体を占める土器の年代的な位置づけに関してはこれまで様々な見解があった。

まず、許玉林らは高麗寨の先史土器の主体を高麗寨下層と命名し、於家村上層類型（双砒子 3 期）と上馬石青銅短劍墓類型の間に年代づけられるとする上馬石上層類型に位置づけた（許玉林ほか 1982）。小川（大貫）静夫は三角形の中を斜線で充填する文様が崗上墓で確認できるとし、高麗寨

の少なくとも一時点を崗上墓の段階においている（小川 1982）。宮本一夫は高麗寨を日本学術振興会が調査した上馬石 A 地点下層（以下では上馬石（学振調査）と略称）に対応させ、遼寧省博物館・旅順博物館・長海県文化館により調査された上馬石上層（許明綱ほか 1981，以下では上馬石（中国調査）と略称）を上馬石（学振調査）A 地点上層に対応させている（宮本 1985）。陳光は高麗寨の土器を 3 段階に区分している。まず、I 組は双砵子 2 期に特徴的な器蓋のつまみや内面に稜線をもつ高杯などが挙げられているが、ここに刻目附二重口縁で腰部に刻目隆帯がめぐる甌も含まれている。II 組は舟形器が挙げられ、III 組は二重口縁の罐や碗などが挙げられている。そして、I 組は双砵子 2 期併行の上馬石瓮棺墓を代表とする類型に、II 組を羊頭窪に、III 組を双房類型に属するものであると想定している（陳光 1989）。徐光輝は口縁に横走魚骨文を施文する広口壺や長頸壺、甌を尹家村下層 1 期におき、牧羊城下層（牧羊城 1 類土器）と同じ時期に編年している（徐光輝 1997）。中村大介は罐の二重口縁が時期が下るにつれ下端部が外側に突出するという傾向と二重口縁部に刺突文がある段階から無文の段階を経て下端部に刻みを入れるというような変遷観を示している（中村 2006）。このように見た場合、研究者ごとに高麗寨の年代的位置付けは少しずつ差異があるように思われる。

まず、高麗寨の中に上馬石上層類型以前のもものが混在するという見解は、先に双砵子 1 期や双砵子 2 期の資料があることを示したようにほぼ問題はない。但し、陳光のように甌が双砵子 2 期であるかどうかは慎重を期すべき部分である。

図 1-5～10 のような広口壺は高麗寨で主体を占める器種の一つである。これらの器種の外面では口縁部・頸部に回転によるナデ調整を残し、胴部以下にミガキ調整を行うという共通性がある。図 1-5, 6 のような頸部に点列を持つ広口壺は双砵子 3 期に該当する大嘴子 F3（大連市文物考古研究所 2000; 図 14-7）でみられるものの、大嘴子 F3 のものと高麗寨の例は器形が異なる。しかし、系譜を求めるとするならば、大嘴子 F3 のものなどが候補として想定されるだろう。

図 1-9 のような口唇部を外側につまみ出した広口壺は高麗寨や単砵子で出土している。器形や調整の点などから 7, 10 などのような広口壺や口唇突出部に刻目をもつ 8 のような壺と同じまとまりをなすものであると考えられる。上馬石（中国調査）上層 I 区探坑 6 の 2 層（I T6 ②）では口唇外側端部が突出しそこに刻目が入る土器が出土しており（許玉林ほか 1981; 図 32-9）、図 1-8 と図 1-9 の中間的な様相を示していると考えられる。同様に上馬石（中国調査）上層 I T6 ②では橋状把手のつく壺、二重口縁で刻目が入る甌口縁、豆、環状把手などが確認され、上馬石（学振調査）B II 地点や A 地点下層の内容に近い。ところが上馬石（学振調査）で図 1-8 に類似した土器は A 地点上層で出土している（宮本 1991; 図 5-75）。上述のように高麗寨と上馬石（中国調査）では他の広口壺と一つの組成をなしているように考えられ、上馬石（学振調査）A 地点上層のものは混在の疑いがあるが、判断が難しい。

図 1-11 のような三角集線文と浮文が施文された壺の胴部の類例は、先述のように大貫が指摘した崗上墓のほかには望海塙（島田・森 1942）で出土している。望海塙では双砵子 1 期，双砵子 2 期，双砵子 3 期，上馬石上層類型の土器が出土している。

図 2-17 のような二重口縁で無文の罐は双房 6 号石蓋石棺墓（許明綱・許玉林 1980，許玉林・許明綱 1983a, b）からも出土している。高麗寨では無文の二重口縁だけでなく、二重口縁下端部に刻みを入れた罐も出土している。これと対応するように甌の口縁に関しても、施文されない二重口縁と二重口縁下端部に刻みを入れる口縁が出土している。なお、罐と甌では同じ二重口縁であっても調整で差異が見られ、ある程度の識別は可能である。すなわち、罐は外面にミガキ調整を行う一方、甌ではナデ調整がなされる。また、甌のほうが大きな砂粒を含んだ粗い胎土であることが多い。

図 2 - 20 のような甗の腰部に明確な隆帯ではなく、若干粘土で肥厚させた部分に刺突文を施すものの類例は上馬石（学振調査）B II 区で出土している。

図 2 - 22 と図 2 - 23 の板状把手と環状把手が共に出土するという在り方は、旅順地区の牧羊城 1 類土器での在り方を想起させる。

さらに東大所蔵品には見られなかったが、高麗寨資料としては甗の二重口縁に点列が施文されるものがあり、類例は上馬石（中国調査）上層や上馬石（学振調査）C 地点にみられる。斜格子文が施文された口縁部の広口壺がみられる（浜田 1929；図 27 - 3 ~ 5, 11, 13, 14 など）。このような土器は上馬石（学振調査）A 地点下層にみられる。

このような類例をもとに、高麗寨の主体を占める土器をみる前に遼東半島東側の上馬石上層タイプの編年案について整理すると、まず、中村の見解のように二重口縁に刺突点列がなされる罐は上馬石（学振調査）C 地点でみられ、他の地点では見られないことから、時期的に先行すると考えられる。次に上馬石（学振調査）B II 地点は崗上墓に対応し、上馬石（学振調査）A 地点下層は尹家村下層 1 期に対応することから（大貫 2004, 大貫ほか 2006）、上馬石（学振調査）B II 地点→同遺跡 A 地点下層という先後関係が想定される。この時間軸に従って、高麗寨の主体を占める遺物を考える。

まず、高麗寨の刺突点列二重口縁の甗口縁は上馬石 C 地点でも同様の甗口縁がみられるためこれに対応する段階のものとみられる。また、遼寧式銅剣の編年から崗上墓（上馬石 B II 地点に対応）より先行するであろう双房の段階に近いものとして無文の二重口縁の罐などが想定できよう。そして、図 1 - 5, 6 のような点列施文の広口壺は双砵子 3 期の大嘴子 F3 に類例があることから、双砵子 3 期の直後に該当する時期のものがある可能性がある。高麗寨では上馬石 B II 地点ではみられない波状の沈線が施文される広口壺（浜田 1929；図 27 - 2 など）が出土しているが、このようなものも双砵子 3 期からの直接的な系譜にあるだろう。

上馬石（学振調査）B II 地点に対応する土器としては隆帯の退化した肥厚部に刺突文を施す甗があげられる。また、この甗に対応する口縁部としては無文の二重口縁（図 1 - 19）が考えられ、類例は上馬石 B II 地点にみられる。図 1 - 11 のような広口壺で三角集線文が施文されるものは類例が少ないのでよくわからないが、大貫の指摘のように崗上墓と関係があるとするならば、上馬石（学振調査）B II 地点に対応しよう。また、先に双房との類似を指摘した無文の二重口縁の罐は上馬石（学振調査）B II 地点にもみられ、この段階にも存在したものと考えられる。

さらに、上馬石（学振調査）A 地点下層に該当する資料が、多く存在する。口縁に斜格子文などが刻まれる広口壺は上馬石（学振調査）A 地点下層でみられる。また、同様のものは旅順地区の牧羊城 1 類土器新段階にもみられ、徐光輝が想定するように尹家村下層 1 期に相当するだろう。把手の形態は環状のものと板状のものがみられ、これは上馬石（学振調査）A 地点下層の組成と同一である。牧羊城 1 類土器でも新段階として想定される組成であるため、整合的である。甗は上馬石（学振調査）A 地点下層でも無文の二重口縁のものがみられることから、この段階のものである可能性もある。したがって、無文の二重口縁の甗に関しては上馬石（学振調査）B II 地点および A 地点下層の段階のどちらかか或いは両者に対応する年代が与えられよう。また、刻目のはいる二重口縁の甗に関しても、二重口縁の作り方などで無文の二重口縁のものとは特に差異はなく同時期としても問題ないのではなかろうか。この点では甗の位置付けは陳光の見解より、徐光輝の見解に近い検討結果となった。

高麗寨 B 溝からまとまって出土したとされる一連の土器群（浜田 1929；図 29 - 1, 2, 3, 5）は他の土器とは若干様相が異なるものの、口縁が外反しそこに刻目が付される壺（浜田 1929；図 29 - 1）は図 1 - 8 と関連がある器種であり、図 1 - 8 が上馬石（学振調査）A 地点下層に編年さ

れる以上、B溝の一連の土器はこれに近い年代を与えなければならない。また、二重口縁の無文罐（浜田 1929; 図 29 - 2）は二重口縁の断面形態が、本稿で上馬石（学振調査）C 地点～上馬石（学振調査）A 地点下層のいずれかの段階に入るとした図 2 - 17 に類似している点からも同様のことがいえる。

上馬石（学振調査）A 地点上層に該当する資料は、図 1 - 9 が該当する可能性がわずかにあるが、先述したように図 1 - 8 のような土器と不可分の関係である点から、そうではない可能性が強く、高麗寨には基本的にはこの段階の土器はみられないと考えておきたい。

このように高麗寨の土器を考えると、双砬子 3 期直後から尹家村下層 1 期までの時期に該当する。このようにみた場合、牧羊城 1 類土器と高麗寨の土器では様相が異なり、旅順地区と遼東半島東側の普蘭店市－莊河市－長海県では地域色が認められるといえるだろう。

図面は主として金恩瑩氏が作成し、一部は古澤が作成した。

文献

<中文>

陳光 1989 「羊頭窪類型研究」『考古学文化論集』2

大連市文物考古研究所 2000 『大嘴子』

徐光輝 1997 「旅大地区新石器時代晩期至青銅時代文化遺存分期」『考古学文化論集』4

許明綱・許玉林 1980 「新金双房石棚和石蓋石棺墓」『遼寧文物』1980 - 1

許明綱・許玉林・蘇小幸・劉俊勇・王瑾英 1981 「長海県広鹿島大長山島貝丘遺址」『考古学报』1981 - 1

許玉林・許明綱 1983a 「遼寧新金県双房石蓋石棺墓」『考古』1983 - 4

許玉林・許明綱 1983b 「新金双房石棚和石蓋石棺墓」『文物資料叢刊』7

許玉林・許明綱・高美璇 1982 「旅大地区新石器時代文化和青銅時代文化概述」『東北考古与歴史』1

中国社会科学院考古研究所 1996 『双砬子与崗上』

<韓文>

社会科学院歴史研究所・考古学研究所 1969 「紀元前千年紀前半期の古朝鮮文化」『考古民俗論文集』1

朝中共同発掘隊 1966 『中国東北地方の遺蹟発掘報告』

<日文>

小川静夫 1982 「極東先史土器の一考察－遼東半島を中心として－」『東京大学文学部考古学研究室研究紀要』1

大貫静夫 2004 「研究史からみた諸問題－遼東の遼寧式銅剣を中心に－」『季刊考古学』88

大貫静夫・中村亜希子・古澤義久・鄭仁盛・石川岳彦 2006 「牧羊城をめぐる諸問題」『日本中国考古学会 2006 年大会（第 17 回大会・総会）発表資料集』

島田貞彦・森修 1942 「望海嶺－関東州亮甲店附近の先史遺蹟－」『羊頭窪』

澄田正一 1986 「遼東半島の先史遺蹟（調査抄報）－大長山島上馬石貝塚－」『人間文化』2

澄田正一 1988 「遼東半島の先史遺蹟（調査抄報）－大長山島上馬石貝塚（二）－」『人間文化』3

澄田正一 1989 「遼東半島の先史遺蹟（調査抄報）－大長山島上馬石貝塚（三）－」『人間文化』4

浜田耕作 1929 『貔子窩』

中村大介 2006 「遼寧式銅剣の成立と展開」『日本中国考古学会 2006 年大会（第 17 回大会・総会）発表資料集』

古澤義久 2007 「遼東地域と韓半島西北部先史土器の編年と地域性」『東京大学考古学研究室研究紀要』21

宮本一夫 1985 「中国東北地方における先史土器の編年と地域性」『史林』68 - 2

宮本一夫 1991 「遼東半島周代併行土器の変遷－上馬石貝塚 A・B II 区を中心に－」『考古学雑誌』76 - 4

図番号	器種	文様	胎土	焼成	色調		調整	
					外面	内面	外面	内面
1	広口壺口縁	平行沈線	石英多量	甘	赤褐	赤褐	不明	不明
2	罐口縁	平行沈線	石英	やや甘	赤褐	灰褐	横位ミガキ	ナデ
3	碗口縁		石英	良好	赤褐	赤褐	横位ミガキ	ナデ
4	長頸壺	平行沈線・鋸齒文	石英	やや甘	黒褐	黒褐	横位ミガキ	ミガキ
5	広口壺口縁	点列文	石英多量	甘	暗灰褐	灰褐	不明	回転ナデ
6	広口壺口縁	点列文	石英・長石	良好	灰褐	黒褐	ナデ・ミガキ	ナデ
7	広口壺口縁		石英	良好	黒褐	灰褐	横位ミガキ	回転ナデ
8	広口壺口縁	口唇刻目	石英多量	やや甘	暗灰褐	黒褐	ナデ	ナデ
9	広口壺口縁		石英多量	良好	黒褐	黒褐	ナデ・ミガキ	回転ナデ
10	広口壺口縁		石英	良好	暗褐	暗褐	ナデ・ミガキ	回転ナデ
11	広口壺	三角集線・浮文	石英	良好	黒褐	黒褐	ナデ	ナデ
12	広口壺口縁		石英	やや甘	灰褐	灰褐	ミガキ	ナデ
13	罐口縁	点列文	石英	良好	黒褐	灰褐	横位ミガキ	回転ナデ
14	罐	点列文	石英	良好	橙褐	灰褐	横位ミガキ	回転ナデ
15	罐二重口縁	刻目	石英	良好	灰褐	黒褐	ミガキ	ミガキ
16	罐二重口縁	刻目	石英	良好	暗褐	黒褐	ミガキ	ナデ
17	罐二重口縁		石英	良好	灰褐	黒褐	縦位ミガキ	ミガキ
18	甌二重口縁	刻目	石英多量	良好	灰褐	黒褐	ミガキ	ナデ
19	甌二重口縁		石英多量	良好	黒褐	灰褐	ナデ	ナデ
20	甌	点列文	石英多量	良好	暗灰褐	灰褐	縦位ミガキ	ナデ
21	豆		石英	良好	灰褐	黒褐	横位ミガキ	横位ミガキ
22	板状把手	刻み、工具痕カ	石英	良好	赤褐	黒褐	縦位ミガキ	工具痕
23	環状把手		石英	良好	灰褐	灰褐	横位ミガキ	ナデ
24	罐		石英	良好	灰褐	灰褐	縦位ミガキ	ナデ

表1 高麗寨出土土器観察表

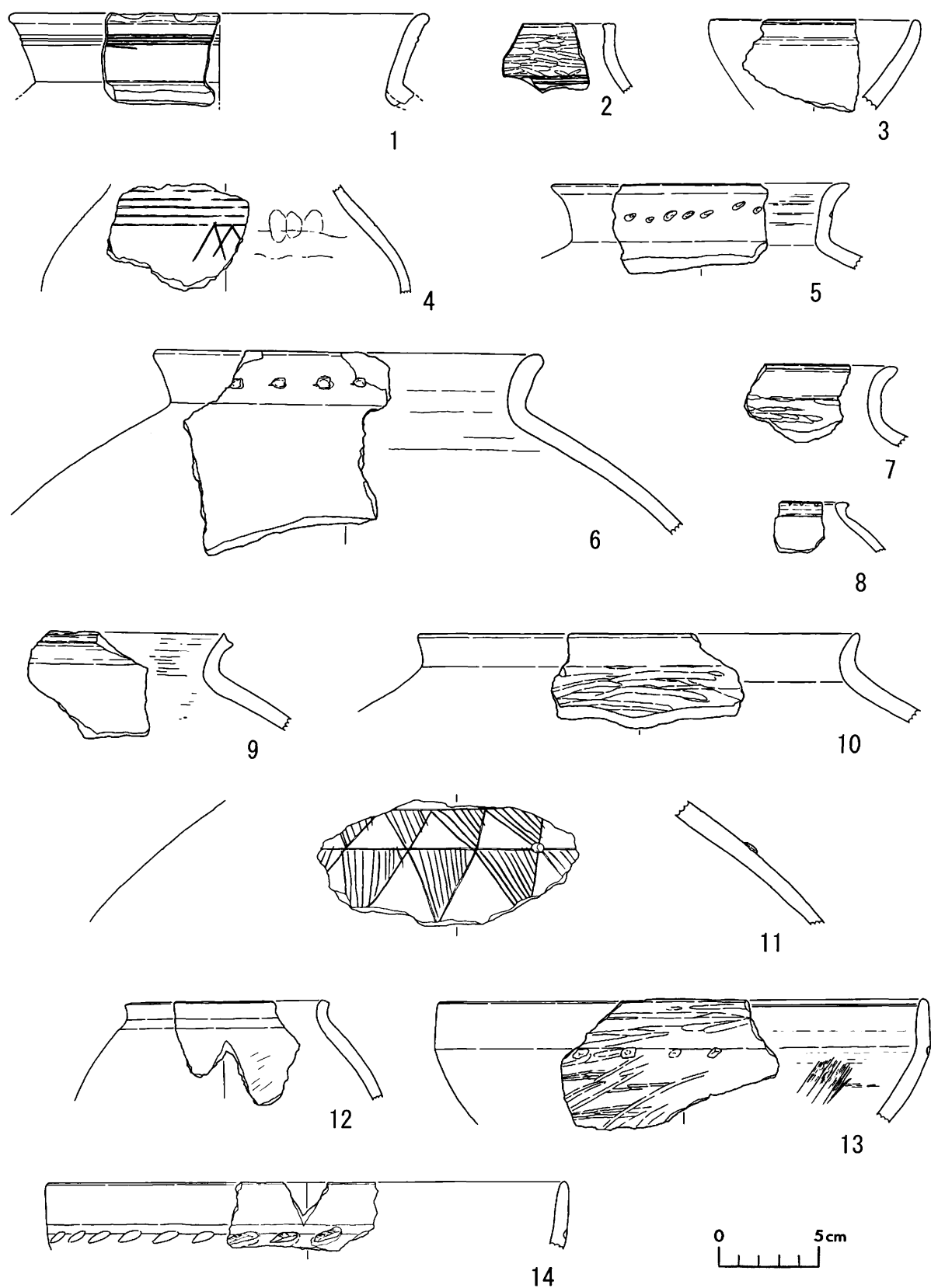


図1 東京大学文学部所在高麗寨出土資料 (1) (S = 1/3)

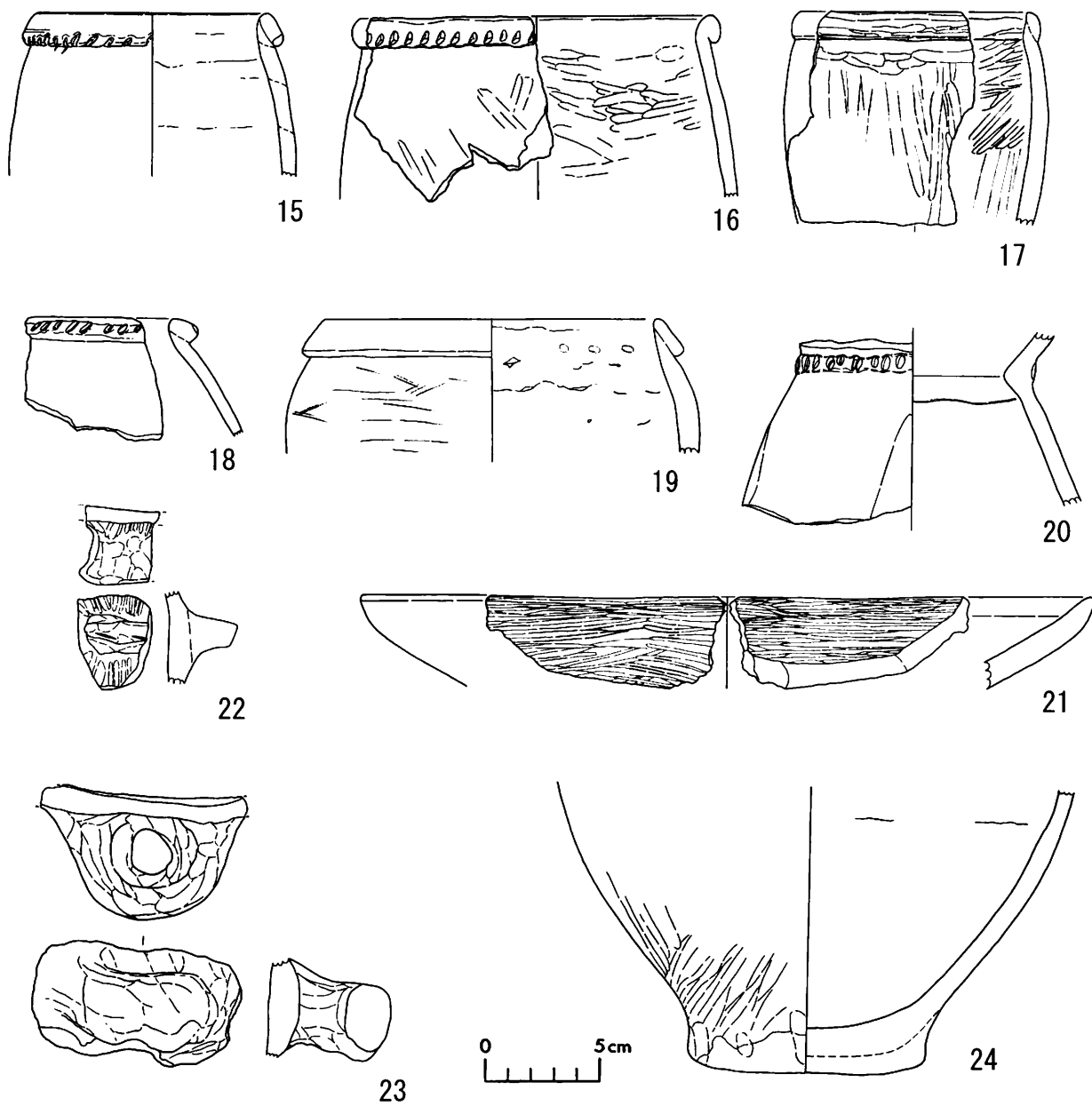


图2 东京大学文学部所在高麗寨出土資料 (2) (S = 1/3)

8-3. 東京大学文学部所蔵羊頭窪遺跡資料

古澤 義久

東京大学文学部には東亜考古学会と関東庁博物館による牧羊城調査の際に、あわせて踏査された羊頭窪の資料が存在する。以下では、現在、所在が確認される資料を報告するとともに羊頭窪資料をめぐる諸問題について論じる。

1. 資料 (図 1)

1 は二重口縁の罐口縁部である。二重口縁貼付→平行沈線→棒状貼付文の順に施文される。2 は二重口縁の罐口縁部である。二重口縁貼付→点列文の順で施文される。点列文及び棒状貼付文以前に沈線が一条めぐっているが割付線の可能性もある。3 は棒状貼付文の施文された破片である。4 は点列文の施文された広口壺である。頸部と胴部全体にミガキが施される。5 は尊の口縁部の可能性がある。6 は点列文が施文された罐である。口縁部の横位のナデが顕著である。7 は隆起文に点列が施文される罐口縁部である。8 は平行沈線と点列文が施文される胴部片である。平行沈線文施文後に点列文が施文される。9 は圈足附底部である。圈足部外面は回転ナデが顕著である。10 は高台附底部である。ナデ調整がなされる。

2. 若干の考察

羊頭窪の資料は双砒子 3 期 (於家村上層期) に編年されている (社会科学院考古学研究所・歴史研究所 1969, 許玉林ほか 1982)。しかし、双砒子 3 期内での年代的位置付けは研究者により異なる。羊頭窪の双砒子 3 期内での位置付けに関しては、双砒子 3 期層 (朝中共同発掘隊 1966, 中国社会科学院考古研究所 1996) が羊頭窪より早いとする考え方 (陳光 1989, 千葉 1996) と、羊頭窪が双砒子 3 期層より早いとする考え方 (小川 1982, 宮本 1985, 徐光輝 1997) の 2 つの見解がある。上記の東大所蔵羊頭窪資料は 1933 年に調査された羊頭窪の資料 (金関ほか 1942) とほぼ同様の組成である。解放後の調査例で見られる類例は以下のようなになる。

図 1-1 のように二重口縁で平行沈線が施文され、短い棒状貼付文が付される土器は大砒子 2 期層 (劉俊勇・張翠敏 2006) などで見られる。また、図 1-7 のような隆起線をもちそこに 3 個単位の刻みを入れる土器は大砒子 2 期層で出土している (劉俊勇・張翠敏 2006; 図 24-8)。図 1-8 のように平行沈線文に点列文が付される文様の類例は於家村上層 (許明綱・劉俊勇 1981; 図 15-3) でみられ、図 1-6 のような点列文は平行沈線が描かれていないもののこれに関連する遺物であろう。以上から組成としては双砒子 3 期のもので、羊頭窪の内容は大砒子 2 期層に最も近いものと思われる。但し、大砒子 2 期層では羊頭窪ではまったくみられない波状沈線文や雷文がみられる (劉俊勇・張翠敏 2006; 図 24-1, 20, 19)。この点では大砒子 2 期層では羊頭窪と双砒子 3 期層の両者の要素がみられるものと思われる。

但し、図 1-5 は焼成・調整などで他の土器とは若干差異がある。この土器に最も類似したものは双砒子 2 期におおむね該当する大砒子 1 期層から出土した尊の口縁部 (劉俊勇・張翠敏 2006; 図 11-1) であるが、図 1-5 の胴部に隆帯がめぐるかどうかは不明である。徐光輝は羊頭窪出土土器のうち双砒子 2 期層に近い要素を持つ土器を羊頭窪 A 組とし、双砒子 2 期後半に位置づけた (徐光輝 1997) が、図 1-5 などに見られるように双砒子 2 期との関連がありそうな資料が羊頭窪に存在する。

ただし、徐光輝の分離した羊頭窪 A 組資料の組成が単独で出土したことがないので組成として有効であるか確証がない。また、羊頭窪 A 組の土器組成が成立しても、双砫子 2 期の遺跡の土器組成とは異なるので双砫子 2 期の範疇で把握してもよいのかという問題が残っている。しかし、徐光輝の指摘のように他の双砫子 3 期の遺跡には見られない双砫子 2 期的な要素があることは重要で、羊頭窪が双砫子 3 期の前半である可能性を高めている。

於家村砫頭墓地（許明綱・劉俊勇 1983）では多くの研究者が指摘するように、双砫子 3 期を通して、最終的には美松里型壺の祖形となる壺が出土する段階まで連続的に変遷が追跡されている。ところが、砫頭墓地では幾何学文の施文された土器は報告されておらず、全て棒状貼付文、平行沈線文、点列文の土器である。このことは、幾何学文などが施文される双砫子 3 期層の土器が砫頭墓地での平行沈線・点列・棒状貼付文の連続的な変遷には関わらないことを示唆する。このように考えると、主に大連市旅順口区が該当する遼東半島の先端部と大連市甘井子区以北では若干地域的に様相が異なっていた可能性がある。このように見た場合、先に大砫子では羊頭窪と双砫子 3 期層の両者の様相がみられると述べたが、大砫子は地理的に羊頭窪と双砫子の中間地点にあるため、時間的な関係だけでなく地域的に中間的な様相が現出している可能性を考えなくてはならない。

そこで、地域差の要素を排すため、羊頭窪と近接した於家村上層 F1 と羊頭窪を比較してみると宮本の指摘どおり、於家村上層 F1 では彩絵陶が出土しない点や、羊頭窪では先に述べたように前段階と連続的な要素があるため羊頭窪→於家村上層 F1 の先後関係が認められるだろう。そして、於家村上層 F1 では幾何学文は出土せず、平行沈線・点列・棒状貼付文が主であるが、ここで内傾し、口縁が肥厚する罐（許明綱・劉俊勇 1983；図 14-5）が出土している。この罐に類似した罐は、幾何学文が多く出土する双砫子 3 期層（中国社会科学院考古研究所 1996；図 28-7）で確認でき、近い時期のものであることを示す。従って、以上の先後関係からは羊頭窪は総体的には双砫子 3 期層より古く双砫子 3 期前半と位置づけることが可能であろう。

文献

<中文>

陳光 1989 「羊頭窪類型研究」『考古学文化論集』2 113-151 頁

大連市文物考古研究所 2000 『大嘴子』

徐光輝 1997 「旅大地区新石器時代晩期至青銅時代文化遺存分期」『考古学文化論集』4 188-210 頁

劉俊勇・張翠敏 2006 「遼寧大連大砫子青銅時代遺址発掘報告」『考古学報』2006-2 205-229 頁

許明綱・劉俊勇 1981 「旅順於家村遺址発掘簡報」『考古学集刊』1 88-103 頁

許明綱・劉俊勇 1983 「大連於家村砫頭積石墓地」『文物』1983-9 39-50 頁

許玉林・許明綱・高美璇 1982 「旅大地区新石器時代文化和青銅時代文化概述」『東北考古与歴史』1 23-41 頁

中国社会科学院考古研究所 1996 『双砫子与崗上』

中国社会科学院考古研究所・歴史研究所 1969 「紀元前千年紀前半期の古朝鮮文化」『考古民俗論文集』1 31-139 頁

<朝文>

朝中共同発掘隊 1966 『中国東北地方の遺蹟発掘報告』

<日文>

小川静夫 1982 「極東先史土器の一考察 - 遼東半島を中心として -」『東京大学文学部考古学研究室研究紀要』1

123-149 頁

金関丈夫・三宅宗悦・水野清一 1942 『羊頭窪』

千葉基次 1996「遼東青銅器時代開始期 - 塞外青銅器文化綜考 1-」『東北アジアの考古学第二 [権域]』 121-148 頁
宮本一夫 1985「中国東北地方における先史土器の編年と地域性」『史林』68-2 1-51 頁

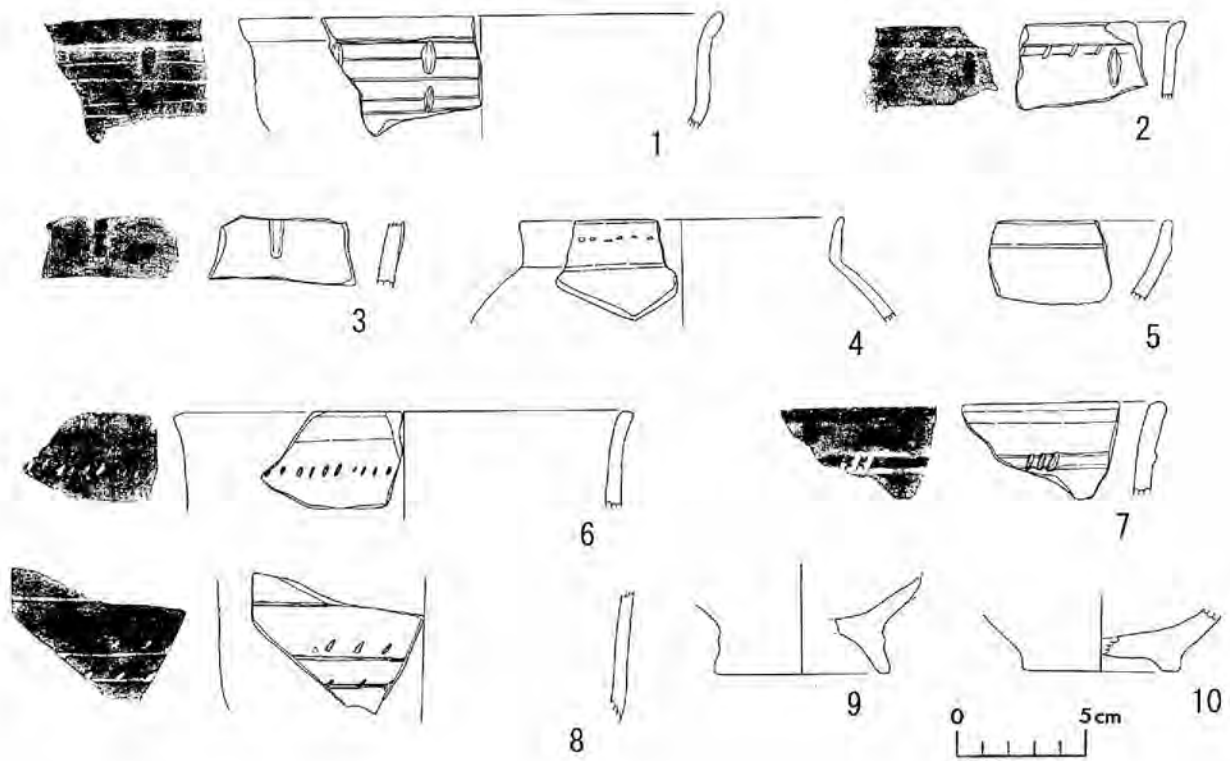


図1 東大文学部所蔵羊頭窪出土資料 (S = 1 / 3)

図番号	文様	胎土	焼成	色調		調整	
				外面	内面	外面	内面
1	平行沈線・棒状貼付文	白雲母	良好	暗褐	暗褐	ミガキ	ミガキ
2	点列文・棒状貼付文	白雲母	良好	暗褐	暗褐	横位ミガキ	ミガキ
3	棒状貼付文	白雲母	良好	灰褐	褐	ミガキ	ミガキ
4	点列文	石英	良好	黒褐	黒褐	横位ミガキ	ミガキ
5		金雲母	やや甘	赤褐	赤褐	ナデ	ナデ
6	点列文	白雲母	良好	赤褐	灰褐	横位ミガキ	横位ミガキ
7	隆起文・点列文	白雲母	良好	黒褐	黒褐	横位ミガキ	横位ミガキ
8	平行沈線・点列文	白雲母	良好	暗褐	褐	ミガキ	ナデ
9		石英	良好	暗褐	暗灰褐	横位ナデ	ミガキ
10		白雲母	良好	灰褐	暗褐	ナデ	ナデ

表1 東大文学部所蔵羊頭窪資料観察表

8 - 4. 東京大学文学部所蔵郭家村遺跡資料

古澤 義久

1. はじめに

牧羊城調査時にあわせて、郭家村遺跡が踏査され、遺物が収集された(原田・駒井 1931)。ここでは、これらの遺物を紹介する。なお、この時の踏査時の一部の資料は立教大学学校・社会教育講座収蔵庫に保管されており、それらの資料については既に紹介した(古澤 2005)。また、そこで郭家村遺跡の概要と郭家村遺跡についての各研究者の見解は述べたので、そちらを参照していただきたい。東大文学部が所蔵する遺物には土器・土製品・石器が見られ、これらの遺物をめぐる諸問題に関して、解放後、発掘調査された郭家村遺跡の様相(許玉林・蘇小幸 1980,1984)や周辺遺跡の様相と対比することで論じたい。

2. 出土遺物の様相

1) 土器 (図 1, 表 1)

1～3は筒形罐である。1は横走魚骨文と斜線が施文される。横走魚骨文は上段から下段に施文している。2は沈線により三角集線文や短斜線文を描く。文様帯下部はケズリにより段が作出され、その後、横位のミガキがなされる。3は短斜沈線文施文後、点列文が施される。施文後、文様施文部以外に横位のミガキがなされる。

4は隆帯であるが、偏堡類型の隆帯などとは区別され、膠東半島系の鼎や盂、鬻の胴部にめぐる隆帯であろう。5,6は鼎の足部である。6は縦位のミガキが顕著である。5,6とも実芯をつくり、その外側に粘土を巻き、鼎胴部に接着していたものと思われる。4～6は膠東半島系の器種である。

7は二重口縁の筒形罐である。二重口縁上にナデ調整の後、鋸歯文が施文されるが、この鋸歯文には年輪の痕跡が認められ、沈線ではなく、板状工具を押捺して施文されたものであると判断される。

8～14は折縁罐である。8は内面に工具痕が残り、この工具痕は折縁罐など小珠山上層期の土器にしばしばみられるため、折縁罐であると判断した。文様は細く斜線や斜格子文が施文される。9は回転を利用して凹線を施文し、その後浮文を付着させる。この浮文はつまみ出されている。10は口唇部が面取りされる折縁罐で、頸部は回転によるナデが強くなされ胴部はミガキ調整である。11は口径が小さめの折縁罐で頸部を貼り付けて製作している。12は横線と横走魚骨文が施文される折縁罐である。横線→上段の横走魚骨文→下段の横走魚骨文の順に施文される。頸部と施文部以外は横位のミガキ調整が施される。13は無文の折縁罐である。14は弦文罐の肩部である。浮文貼り付け後、多歯具で回転を利用して平行横線を施文しているので、浮文上部は横線に切られている。15は鉢の口縁部で、口唇部は粘土を貼り付けて製作している。

16は豆の脚部で、外面には縦線と魚骨文が施文され、内面には絞り痕が観察される。17は把手である。18は器蓋である。原報告(原田・駒井 1931)では、杯として報告されているが、頂部に環状の把手がついていた痕跡が観察されたため、器蓋と判断される。外面は2条の横線が巡り、上部は縦位のミガキで調整され、端部に粘土のたまりがある。内面は工具痕などが残り粗い調整である。

2) 土製品 (図 1)

19は断面饅頭形の土製紡錘車である。ミガキが顕著である。直径3.4cm、最大厚0.9cm、重さは12.2gである。20は鉤状土製品である。直径は2.4cm、最大厚1.25cm、重さは9.2gである。

3) 石器 (図1)

1,2は頁岩製の石鏃である。1は下部が欠損しているが、欠損部には研磨による再加工が認められる。2は上部と下部が欠損しているが上部には研磨による再加工が認められる。1,2とも両面から擦りきり、縦研磨で刃部を形成しており、宮本一夫と村野正景が指摘した文家屯で見られる石鏃の製作方法で製作されている。3は片岩製の基部を有する石槍である。4は石のみである。5,6は頁岩製の石庖丁である。5は片刃で、6は両刃である。6は長さが短く、幅も狭い。5,6のような小さなサイズの石庖丁は小珠山上層期に特徴的であり(古澤2006b)、郭家村上層に伴うものであると判断される。7~8,10は閃緑岩製の磨製石斧である。7は敲打の後、刃部を中心に研磨されている。8は全体が研磨されている。10は敲打成形の後、全体が研磨されている。9は火山岩製であるが、7~8,10とは区別される石材である。磨製石斧の可能性はある。11は火山岩製すり石である。表裏ともに研磨の痕跡がある。

3. 若干の考察

図1-1は小珠山中層期、図1-2,3は呉家村期の土器で郭家村下層に属する。図1-4~6は膠東半島系の土器で、小珠山中層期から呉家村期に伴うものである。

図1-7~18は小珠山上層期の土器である。図1-7の二重口縁部に見られるみられる押圧による施文は三堂村1期の偏堡類型の土器にみられる施文法で関連が想定される。折縁罐は筆者の折縁罐分類(古澤2005)による折縁罐Ⅰ類(平行横線が回転により施文される折縁罐、口縁内面に沈線が施されることが多い)と折縁罐Ⅱ類(横走魚骨文など幾何文が施文される折縁罐)の両者が見られる。注目されるのは図1-10の折縁罐で、口唇部が面取りされ焼成も良好である。類例は少ない。図1-14の弦文罐の類例は、廟島群島の大口1期晩期で見られ(呉汝祚1985;図14-3,図16-5)、遼東半島では郭家村(許玉林・蘇小幸1984;図版6-1、小田木・土屋2006;図7)、老鉄山積石墓(陳連旭1978)などで認められる。図1-16の縦走魚骨文が施文される豆は類例が遼東半島では報告されていないが、廟島群島の大口2期に同様の文様(呉汝祚1985;図16-6)が認められる。図1-18のような、2条の沈線がめぐる器蓋の類例は、解放後の調査の郭家村(許玉林・蘇小幸1984;図25-6)などがあるが、最も類似しているのは洪子東西大礁貝丘例(許明綱1961;図3-2、許明綱・於臨祥1962;図3-5)である。洪子東例でも縁に粘土のたまりが確認でき、製作方法においても関連が想定される。現在、東大では所在が確認できないが、あわせて採集された杯(原田・駒井1931;図4-20)は類例が老鉄山積石墓(陳連旭1978;図4-4)で出土している。

郭家村上層の位置付けに関しては小珠山上層期を細分した場合、どのような年代に位置づけるかという問題について、王青は郭家村上層には小珠山上層期の中の古い段階と新しい段階の両者が含まれていると考えている(王青1995,1998)。

山東龍山文化前期の所産である底部が直線的な単耳杯が出土していることから、解放後調査された老鉄山積石墓は小珠山上層期前期に属すると考えられる。その老鉄山積石塚と関連がある杯(原田・駒井1931;図4-20)が郭家村で出土していることから、郭家村上層は小珠山上層期でも早い段階の遺物が含まれていると想定される。

一方、山東龍山文化では折縁罐の口唇部が方形に変化していく点(樂豊実1997)を考慮すると、

図 1-10 のような折縁罐は小珠山上層期中でも遅い段階のものである可能性がある。さらに図 1-16 のような文様は廟等群島では大口 2 期に認められ、膠東龍山文化でも遅い段階のものであると考えられる。また、図 1-14 のような弦文罐は筆者が指摘するように双砣子 1 期層でも後続型式と思われる遺物（中国社会科学院考古研究所 1996；図 13-1）がみられ（古澤 2007）、連続性を考慮すると小珠山上層期でも遅い段階のものである可能性がある。このように郭家村上層では小珠山上層期の早い段階のものと同い段階の両者が見られ、王青の指摘はおおむね正しいと考えられる。但し、王青は於家村下層（許明綱・劉俊勇 1981）など双砣子 1 期の遺物と郭家村の遅い段階の遺物が同時期であるとしているが（王青 1998）、両者は排他的に出土しているため、時期的には区別されるものであろうと考えられる。

図 1-19 の紡錘車は断面が饅頭形で、そのような土製紡錘車は小珠山上層期に出現するため（古澤 2006a）、郭家村上層に伴うものと考えられる。図 1-20 の土製品の類例は郭家村下層（許玉林・蘇小幸 1984）、文家屯（遼東先史遺跡発掘報告書刊行会 2002）などで出土しているが、図 1-20 の側面は滑車ほどには凹まない。

石器の記述にあたっては土屋みづほ氏のご教示を得た。

文献

<中文>

- 陳連旭 1978 「旅順老鉄山積石墓」『考古』1978-2 80-85,118 頁
樂豊実 1997 「海岱龍山文化分期和類型」『海岱地区考古研究』213-282 頁
王青 1995 「試論山東龍山文化郭家村類型」『考古』1995-1 50-62 頁
王青 1998 「再論龍山文化郭家村類型」『北方文物』1998-3 8-21 頁
吳汝祚 1985 「山東省長島県砣磯島大口遺址」『考古』1985-12 1068-1084,1145 頁
許明綱 1961 「旅大市長海県新石器時代貝丘遺址調査」『考古』1961-12 689-690 頁
許明綱・劉俊勇 1981 「旅順於家村遺址発掘簡報」『考古学集刊』1 88-103 頁
許明綱・於臨祥 1962 「旅大市長海県新石器時代貝丘遺址調査」『考古』1962-7 345-352 頁
許玉林・蘇小幸 1980 「略談郭家村新石器時代遺址」『遼寧大学学报哲学社会科学版』1980-1 43-46 頁
許玉林・蘇小幸 1984 「大連市郭家村新石器時代遺址」『考古学報』1984-3 287-334 頁
中国社会科学院考古研究所 1996 『双砣子与崗上』

<日文>

- 小田木治太郎・土屋みづほ 2006 「天理参考館蔵大連市郭家村遺跡資料の研究」『日本中国考古学会 2006 年大会（第 17 回大会・総会）発表資料集』91-98 頁
原田淑人・駒井和愛 1931 『牧羊城』
古澤義久 2005 「立教大学所蔵中国大連市郭家村遺跡出土資料」『Mouseion (ムゼイオン)』51 26-31 頁
古澤義久 2006a 「東北アジア先史時代紡錘車研究」『日本中国考古学会 2006 年大会（第 17 回大会・総会）発表資料集』67-74 頁
古澤義久 2006b 「立教大学所蔵中国遼寧省金州附近出土資料 - 遼東半島先・原史時代磨製石庖丁の様相 -」『Mouseion (ムゼイオン)』52 23-30 頁
古澤義久 2007 「遼東地域と韓半島西北部先史土器の編年と地域性」『東京大学考古学研究室研究紀要』21

宮本一夫・村野正景 2002「九州大学考古学研究室蔵松永憲蔵資料 - 文家屯遺跡採集玉器・石器資料を中心として -」『中

国沿岸における龍山時代の地域間交流』 53-79 頁

遼東先史遺跡発掘報告書刊行会 2002『文家屯』

図番号	器種	時期	文様	胎土	焼成	色調		調整	
						外面	内面	外面	内面
1	筒形罐	小珠山中層期	斜線・横走魚骨	石英・甘 長石		赤褐	暗褐	ナデ	ナデ・ 工具痕
2	筒形罐	呉家村期	斜線・三角集線	白雲母	やや甘	暗褐	暗赤褐	横位ミガキ	ナデ
3	筒形罐	呉家村期	点列・斜線	白雲母	やや甘	灰褐	赤褐	横位ミガキ	ナデ
4	鼎か規鬲か 盂	小珠山中層期～ 呉家村期	刻目隆帯	金雲母	やや甘	赤褐	赤褐	横位ミガキ	ナデ
5	鼎足	小珠山中層期～ 呉家村期		石英・ 金雲母	やや甘	褐		ナデ	
6	鼎足	小珠山中層期～ 呉家村期		白雲母	良好	褐		縦位ミガキ	
7	罐二重口縁	小珠山上層期	鋸歯文	金雲母	良好	暗赤褐	褐	ナデ	ナデ
8	折縁罐	小珠山上層期	斜線	石英	やや甘	暗褐	黒褐	ナデ	工具痕
9	折縁罐口縁	小珠山上層期	凹線・浮文	白雲母	良好	赤褐	赤褐	ミガキ	ミガキ
10	折縁罐口縁	小珠山上層期		長石・ 白雲母	良好	赤褐	黒褐	ナデ・横位 ミガキ	ナデ
11	折縁罐口縁	小珠山上層期		白雲母	良好	黒褐	暗黄褐	ミガキ	ナデ
12	折縁罐口縁	小珠山上層期	横線・横走魚骨	金雲母	良好	暗褐	暗褐	横位ミガキ	ミガキ・ ナデ
13	折縁罐口縁	小珠山上層期		金雲母	良好	褐	褐	ミガキ	ミガキ
14	弦文罐	小珠山上層期	平行沈線・浮文	白雲母	良好	赤褐	赤褐	ミガキ	ナデ
15	鉢口縁	小珠山上層期	横線・斜格子	白雲母	良好	黒褐	黒褐	ミガキ	ナデ
16	豆	小珠山上層期	縦走魚骨	石英・ 白雲母	やや甘	黄褐	褐	ナデ	絞り痕
17	把手	小珠山上層期		金雲母	良好	黒褐	黒褐	ミガキ	ナデ
18	器蓋	小珠山上層期	2条沈線	少量金 雲母	良好	暗褐	黒褐	横位ミガキ	ナデ

表 1 東大文学部所蔵郭家村出土土器観察表

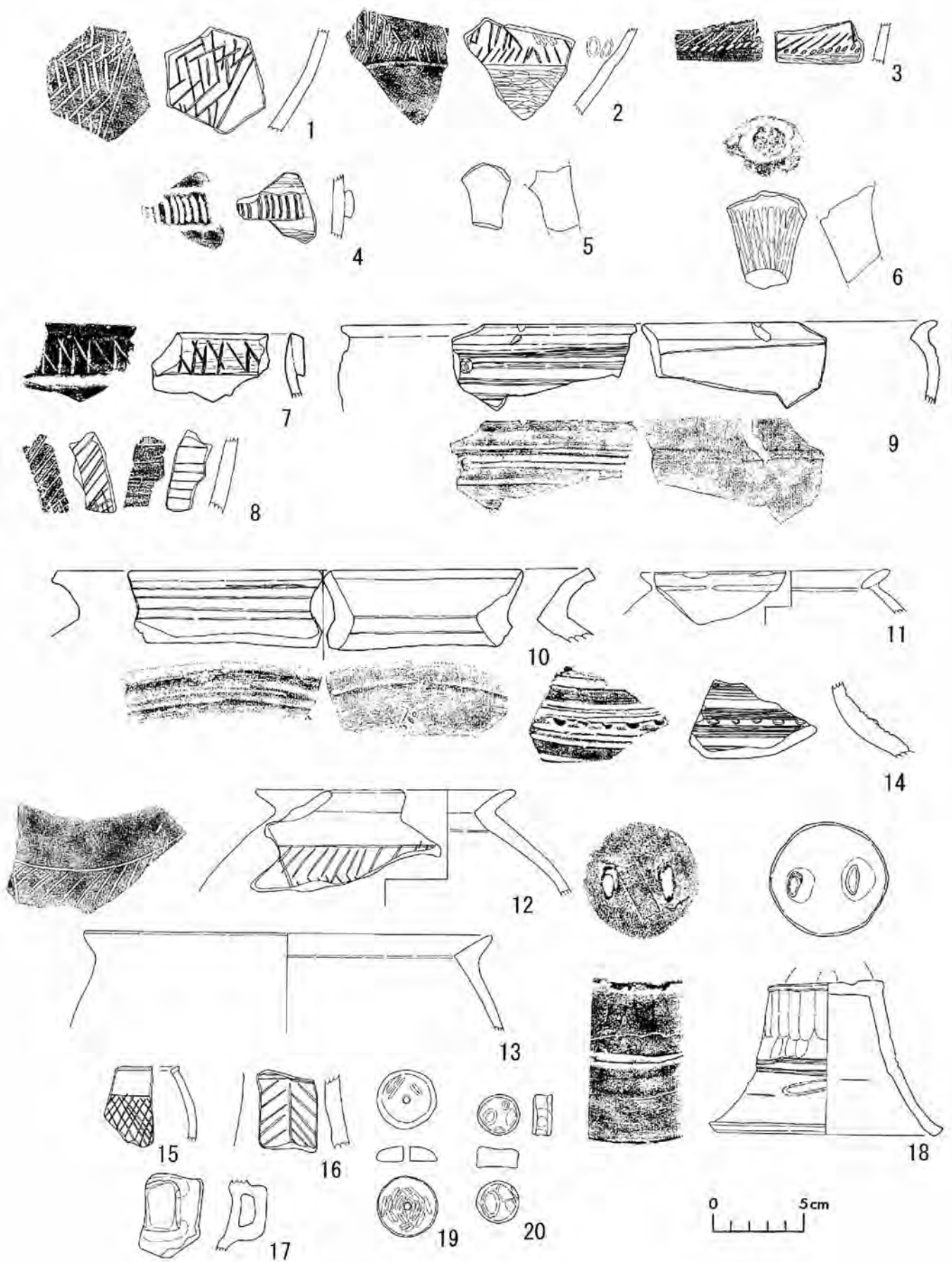


图1 東大文学部所蔵郭家村出土土器 (S = 1 / 3)

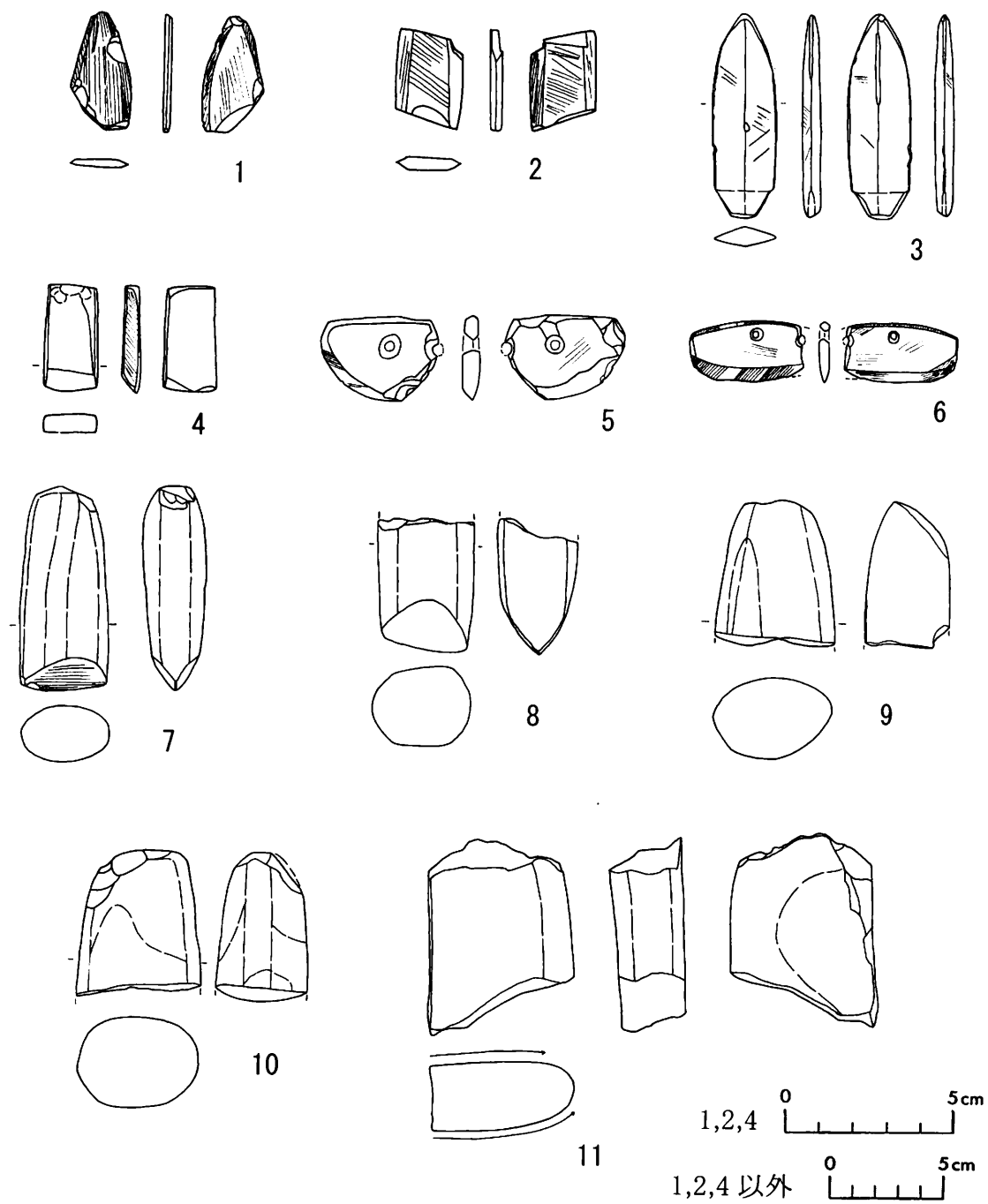


図2 郭家村出土石器 (1,2,4はS = 1 / 2, 残りはS = 1 / 3)

9 - 1. 戦国秦漢時代の遼東郡と牧羊城

大貫 静夫

1. はじめに

史記匈奴列伝によれば、遼東郡は戦国の燕に始まる。また、漢書地理志によれば、前漢時代の遼東郡は幽州に属し、18 県があった。すなわち、襄平、新昌、無慮、望平、房、候城、遼隊、遼陽、陰瀆、居就、高顯、安市、武次、平郭、西安平、文、番汗、沓氏である。

後漢書郡国志では、居就、武次の 2 県が無くなり、房、陰瀆の 2 県は遼東属国に属し、候城、遼陽、高顯の 3 県は玄菟郡に入り、遼東郡は前漢の 18 県から 11 県に減る。

これら各県城の比定地は現在表 1 のようになっている。表 1、図 1 を見ても分かるように、いまだ一致を見ていないものがある。大きな流れとしては、稲葉の頃はほとんどが文献の記載にしたがってのおおよその推定であったが、その後は城址の発見により、修正が施されていくことになる。その点で、より新しい王綿厚の推定地は新たに発見されたり、時期が比定されたりという、新たな所見に基づいており、より信頼性が増している。しかしながら、それでもまだ、すべての県城の所在地にそれにふさわしい漢代の城址が見つかるわけではないので、まだ変更の余地があろう。また、それらの漢代とされる城址のほとんども学術的発掘調査を経ておらず、規模や築城年代が確定しているわけではない。したがって、その中のどれぐらいが戦国燕に始まるのかも分からない。

『中国歴史地図集』ではすでに地図上に点が落ちている。今回の図 1 では、王綿厚の推定地を地図上に落として、両者の比較をおこなった。各県城はおおよそ 30 - 40km の間隔となっている。これは、時代、地域を超えてみられる拠点集落間の距離に近い。各県城の比定の際にすでに考慮されているであろうから、循環論になる可能性が高いが、比定の妥当性を考える際に考慮されるべき数値である。どのような比定地を考えても、遼河下流域に沿ってもっとも集中し、そのまま渤海湾岸沿いに沓氏県に至ることに変わりはない。山東半島につながるルートとして沓氏県が重要であったことが読み取れる。

また、遼東半島の黄海沿岸の南部は空白がとくに際立つ。このような傾向はその当時の人口分布とも関係しているのであろう。交通の経路もこのような分布によってある程度読み取れる。

1931 年に刊行された『牧羊城』報告書中で、原田、駒井は、八木荘三郎（1924）の意見に従い、牧羊城を沓氏県城に当てている。

三宅俊成は『牧羊城』刊行直後の 1932 年から 33 年にかけて普蘭店にある大嶺屯城址を調査した。そして、1933 年の報文において、この大嶺屯城こそが沓氏県城であるとの説を述べた。1988 年に刊行された『中国歴史地図集釈文匯編東北巻』も大嶺屯城説である。

劉俊勇（2003）はこれらの説を退け、1970 年代に見つかった普蘭店市花兒郷所在の張店城址を沓氏県城に当てている。その最大の論拠は、城址自体が牧羊城や大嶺屯城に比べ、約南北 340m、東西 240 m と、規模がはるかに大きいことにあり、また周辺に所在する漢墓の規模や副葬品から、張店古城周辺の漢墓にもっとも規模の大きな墓、あるいは優れた副葬品を伴う墓があることにある（表 2、3）。

県城のほかに、小規模な城が周辺に配置されていたことは、平郭県でも論じられている。『營口市文物志』は漢書地理志に「平郭、有鉄官、塩官」とあることから、平郭県城を東西約 800m、南北約

表1 遼東郡県城比定地

県名	稲葉 1913	「歴史地図集」1988	王綿厚 1994	その他
襄平	遼陽市老城	遼陽市老城	遼陽市老城	
新昌	遼陽州西北	海城県向陽寨	鞍山市旧堡郷古城	
無慮	広寧県	北鎮県天亮甲村古城	北鎮県天亮甲村漢城	黒山県蛇山子漢城(王 1993)
望平	鉄嶺県	新民県安平堡南大古城子	新民市前当鋪郷大古城子	
房	広寧県東南	盤山県西牛古城子附近	盤山県清水農場一帯	
候城 (中部都尉治)	瀋陽市	瀋陽市東南 20 里古城子	瀋陽市旧城区漢城	
遼隊(隧)	海城西	海城市高坨子或瀋河口	海城市西四方台村	
遼陽	瀋陽西南	遼中県茨榆坨郷偏堡子古城	遼中県茨榆坨郷偏堡子漢城	
陰瀆	広寧東南	台安県孫城子古城	台安県孫城子漢城	
居就	遼陽東南	遼陽県亮甲山	遼陽県亮甲山古城	
高顯	瀋陽東北	鉄嶺県城	瀋陽市南魏家楼子古城 (南北105東西101m ²⁾)	
安市	蓋平東北	海城県英城子古城	營口市英守溝漢城(一辺約200m ³⁾)(*英城子古城は高句麗の城)	
武次 (東部都尉治)	鳳凰城	鳳城県大堡古城	鳳城県劉家堡古城(一辺約500m ⁴⁾)	
平郭	蓋平県	熊岳県城東	熊岳県城東	蓋州鎮漢城(南北600東西800m)(崔ほか1996)
西安平	丹東市九連城	丹東市九連城鬮河尖古城	丹東市九連城鬮河尖古城(南北600東西500m)(前漢から遼金 ⁵⁾)	
文(汶)	熊岳城	營口市英守溝古城	瓦房店市太陽昇郷王家店村陳家屯漢城(劉2003:辺長800m)	大石橋市永安郷進歩村漢城址(南北200東西100m)(崔ほか1996)
番汗	鴨緑江下流	北朝鮮平安北道博川郡古博陵城	北朝鮮平安北道博川郡古博陵城	
沓氏	金州	金県大嶺屯城	普蘭店市張店古城	普蘭店市張店古城(劉2003)

注1) 2) 3) 4) 5)は『遼寧省志文物志』による。

注6) 曹 1980による。

600mの蓋州鎮漢城に、鉄官城址を一辺約200mの英守溝城址に、塩官城址を一辺約200mの姜家崗城址に比定している。

王綿厚や劉俊勇が文県に比定する瓦房店市陳家屯城址の規模は一辺約800m、方形であり、武次県に比定されている鳳城県劉家堡城址の一辺約500m、蓋州鎮漢城址の規模南北800、東西600mに近い。丹東市九連城鬮河尖古城の規模南北600東西500mも近いが、ここは遼金まで続くので、漢代時代の規模がどうなのかは分からない。

張店城址はこれまで大連市で見つかった漢代の城址の中では最大であることから、沓氏県城に比定されているのであるが、上記のこれらの城址の規模と比べるとやはり小さいことは否めない。王綿厚が安市県城に比定している英守溝城址は一辺約200mと小規模だが、上記のように、これを県城と

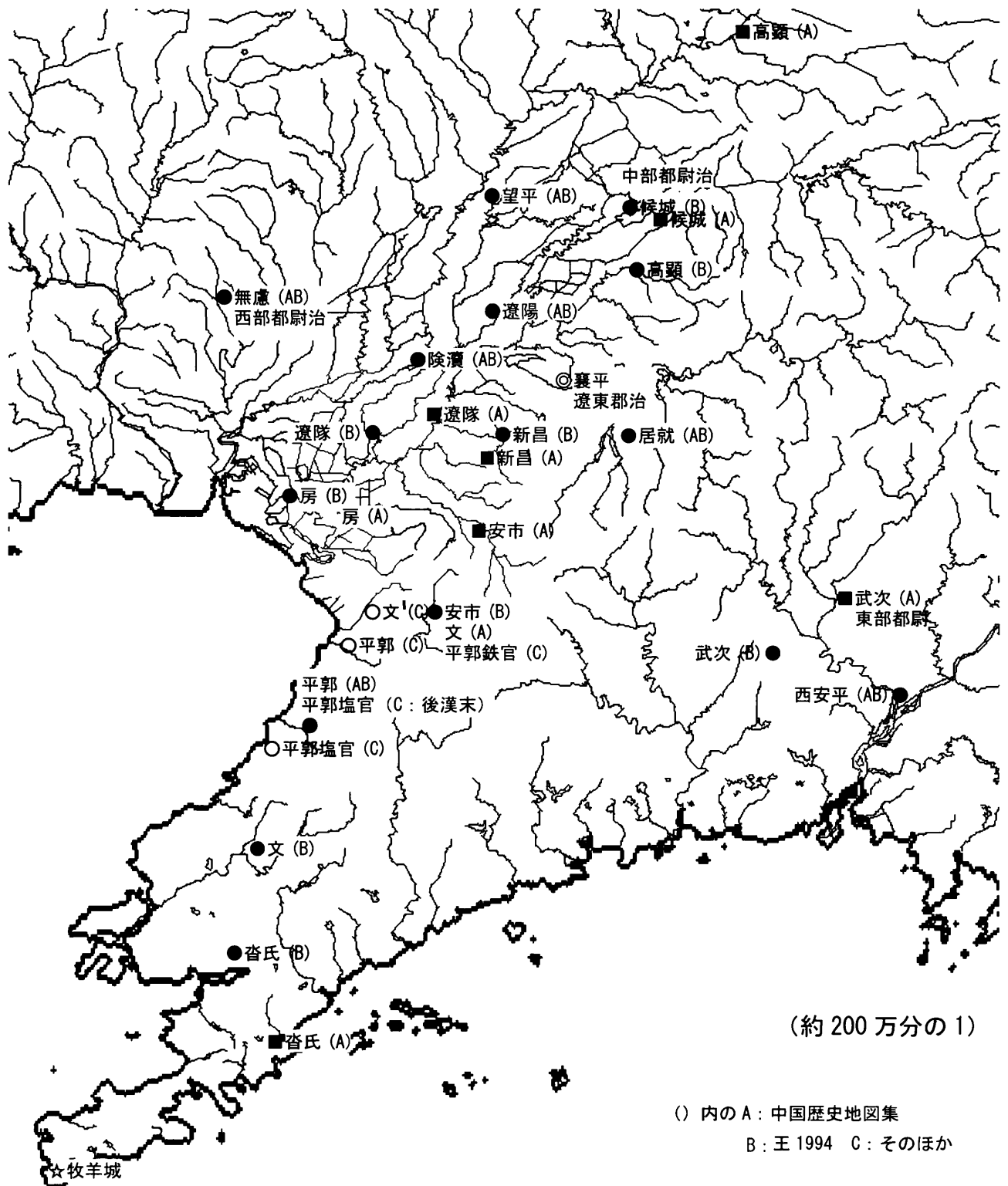


図1 漢代遼東郡の推定県城所在地

認めない意見もある。後に玄菟郡に属する高顯県城を王綿厚は南魏家楼子古城としているが、その規模は一辺約 100m ときわめて小さい。

この時期では中原系の城址として最東北に位置することで知られる吉林省梨樹県二龍湖城址は規模が一辺約 190m である（四平市博物館ほか 1988）。戦国後期から漢初の年代が考えられており、漢

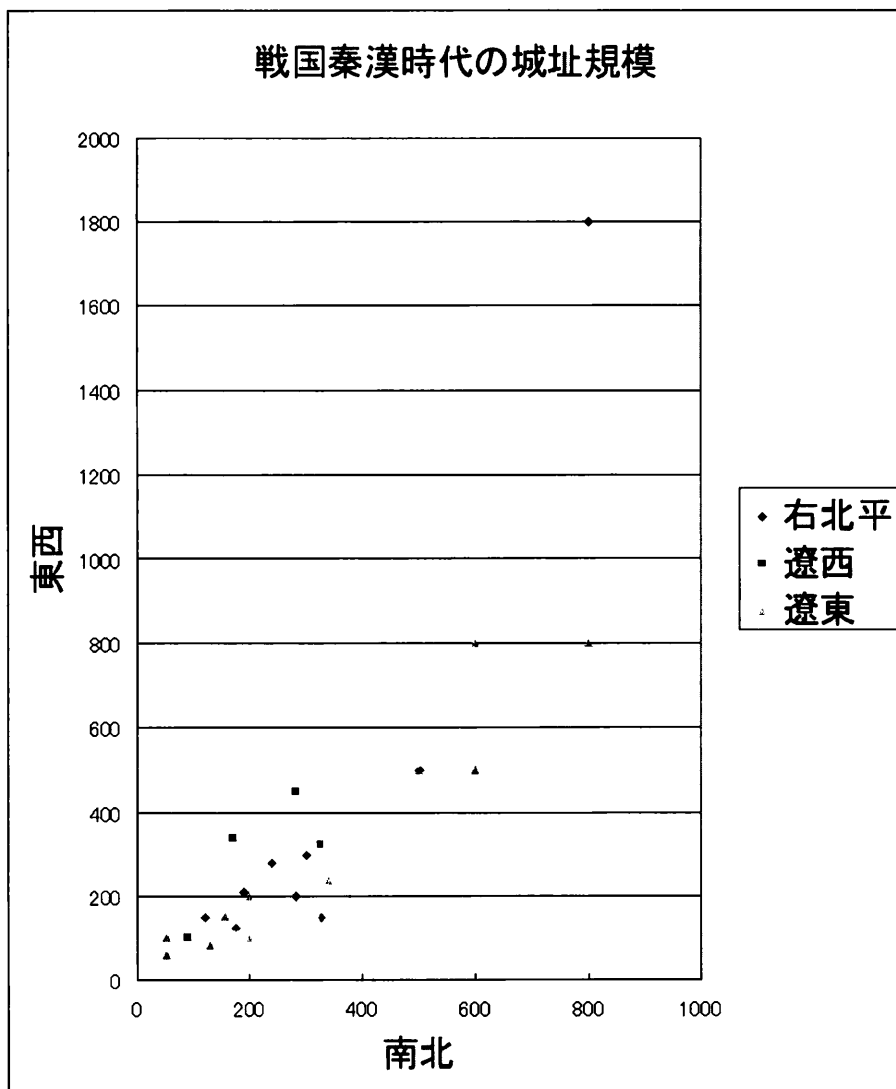


図2 戦国秦漢時代の城址規模の比較

代の県城とは関係がない一時的な城址である。遼西では、寧城県の黒城村古城子がある。秦漢時代の城址は右北平郡の平剛郡治址とされており、東西約1800、南北約800と規模が大きい。それに先行する燕の小規模な城址「花城」が見ついている。南北約280m、東西約200mである。さらには、遼西の北を走る南線、北線長城に沿った防衛用の衛城とされる小型の城址が広がっている（李ほか1991）。これら調査もほとんど無いため継続年代が明らかではなく、北線長城を秦代に築かれたとの見方と、戦国燕の時期に築かれたという見方がある。それぞれによって、それに沿う小型城塞の年代に違いが生じる。ただし、『中国文物地図—内蒙古分冊—』によれば、北線長城前までは

戦国時代の集落が濃密に分布しており、また、赤峰附近からは燕系の墓が見ついていることから、当時の長城の外であったというのはなかなか理解が難しいというのが筆者の考えである。したがって、そのうちの多くは戦国時代にさかのぼると考えておきたい。小さいものでは一辺が40、50mから大きいものは100m～160m程度である。おそらく燕は遼東へ進出したさいにも、行政の中心となる城以外にも各地に小型の城址を築いたに違いない。牧羊城址などは規模から言ってふさわしい。

なお、いまだ『中国文物地図—遼寧分冊—』が出ておらず、『中国文物地図—内蒙古分冊—』だけに頼らざるを得ないため、燕山以北の燕、秦、漢の時代の実態がよく分からない。『内蒙古分冊』には、漢代右北平郡と遼西郡の一部がかかっており、それからの理解と、『遼寧省志文物志』などの記載から見える戦国秦漢時代の古城址の規模を参考にしたい。

それらによれば、図2に見られるように、黄家亮子、朱家屯古城のような県城のさらに下のレベルの城を除けば、一部が県城に比定されている右北平郡、遼西郡の古城址（長城付近の小型の堡塞は除いている）の規模に比べても、劣ることはない。張店古城も県城として小さすぎると言うことはない。

表 2 大連市所在の古城址

名称	所在地	規模	時期	文献等
張店城	普蘭店市花兒山郷張店村	南北約 340m 東西約 240 m	戦国から漢	劉 2003
牧羊城	旅順口区鉄山鎮劉家屯	南北約 130m 東西約 82m	戦国から漢	東亜考古学会 1931 劉 2003
大嶺屯城		南北約 154m 東西約 156m	戦国から漢	三宅 1975 劉 2003
黄家亮子城	普蘭店市楊樹房鎮戰家村黄家亮子屯	南北約 50m 東西約 100m	戦国から前漢	劉 2003
紅土城	普蘭店市	?	戦国から漢	劉 2003
朱家屯城	長海県広鹿島	南北約 50 ? 東西約 60 m	戦国から漢	三宅 1975 劉 2003
陳家屯城	瓦房店市太陽昇郷王家店村陳家屯	南北約 800m 東西約 800m	漢	劉 2003

表 3 大連市内漢墓の分布 (*石板墓の一部は魏晉時代に下る。)

名称	所在	種類	附近城址・集落	出典
刁家村	旅順口区	貝墓・磚室墓・甕棺墓	南に牧羊城	浜田 1943 東亜考古学会 1933
尹家村(南山裡)	旅順口区	貝墓・磚室墓・甕棺墓	西に牧羊城	東亜考古学会 1933
対莊溝	旅順口区			劉 2003
李家溝	旅順口区北海	貝墓・磚室墓		于 1965
土城子	旅順口区三澗堡	貝墓・磚室墓		于 1956a
王家屯	旅順口区柏嵐子			劉 2003
労働公園	大連市労働公園	磚室墓		于 1956b
劉家屯	大連市大連湾郷	貝墓		晁 1986
營城子	甘井子区營城子鎮營城子村	貝墓・貝石墓・貝磚墓・石板墓	營城子村東漢代大集落址	許 1959
前牧城駅	甘井子区營城子鎮前牧城駅村西	磚室墓	營城子村東漢代大集落址	東亜考古学会 1933, 1934 旅順博物館 1986 劉 2003
西小磨	甘井子区			劉 2003
沙崗子	甘井子区營城子鎮沙崗子村北	磚室墓	營城子村東漢代大集落址	許・呉 1991
毛營子	甘井子区			劉 2003
王家屯	金州区		大嶺屯城址	三宅 1975
董家溝				三宅 1975
三十里堡馬圈子	金州区	石板墓		未発表。劉 2002 で言及。
花兒山張店	普蘭店市		張店城址	
駅城堡喬家屯	普蘭店市		張店城址	劉 2003
西北山	普蘭店市		張店城址	劉 2003
馬山	普蘭店市贊子河	貝墓	紅土城の近く?	新金県文物館 1981
長興島蚊子嘴	瓦房店市	石板墓		劉 2003
李官村	瓦房店市			劉 2003
老虎屯馬圈子	瓦房店市	石板墓		大連市 1993
陳家屯	瓦房店市	甕棺墓		劉 2003

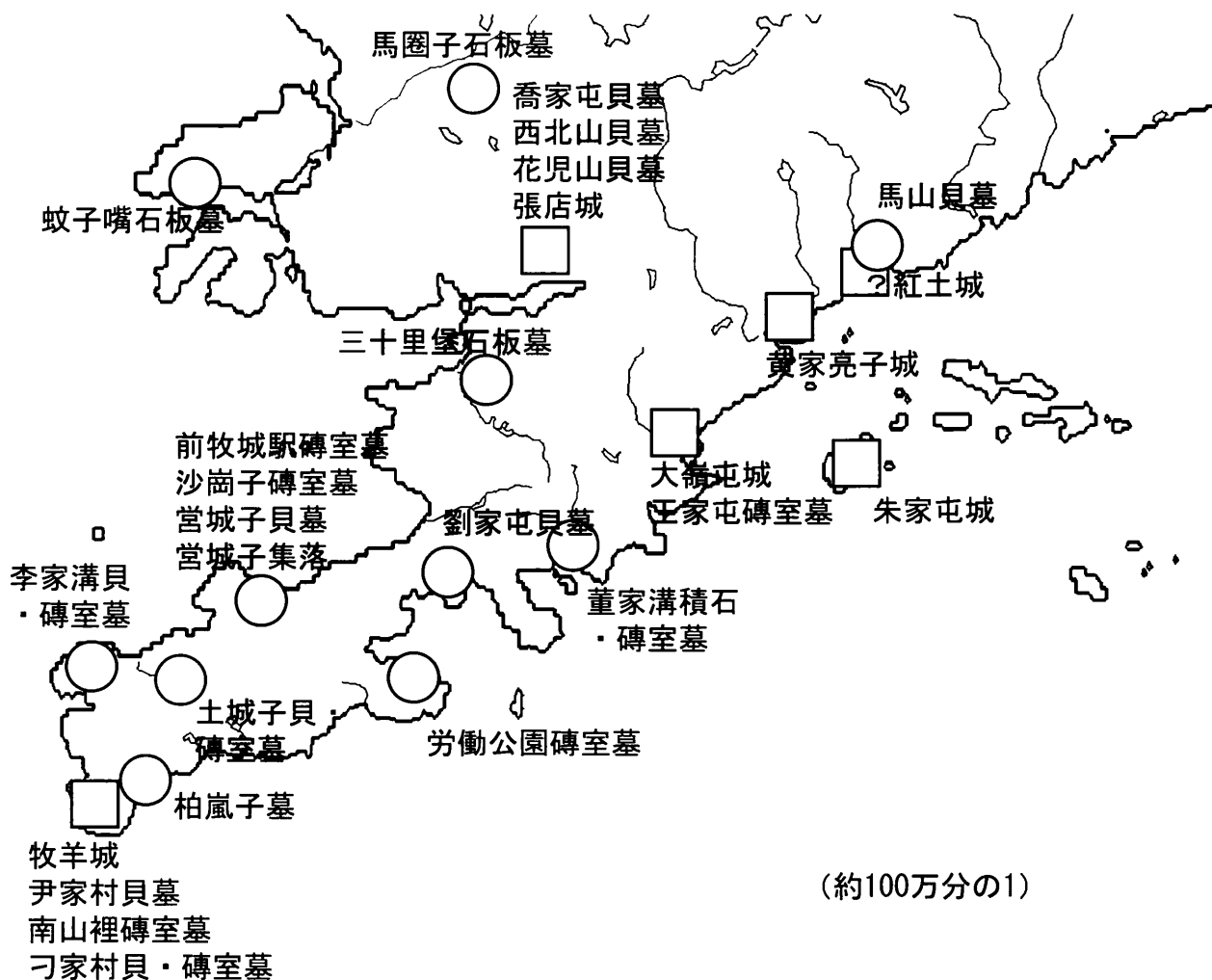


図2 大連市内の古城址と漢墓の分布

2. 大連市内の古城址、漢墓の分布

張店古城を漢代沓氏県城とした場合、沓氏県の実態はいかなるものであったかを、牧羊城を含む周辺のより小規模な城址や漢墓の分布から管見する（表2、3、図2）。貝墓が前漢、磚室墓が後漢の代表的な墓である。漢墓があるところに必ず古城址が見つかるわけではない。張店城とは面する海が反対の沿岸に沿って小型の衛城が並ぶ。古城址の周辺には漢墓があるはずだが、未報告のところもある。大連湾から南の地域にも多くの漢墓が分布する地点があるが、今知られる古城址は牧羊城のみである。營城子周辺と老鉄山周辺は遼寧式銅劍墓も多数発見されているところであり、營城子には現在古城が見つからないが、漢代以前にもそれぞれ中心集落があった場所であろう。そのような一つが牧羊城の所在する場所である。牧羊城で問題となるのは、土器や瓦から前漢までが主体とされながら、附近に後漢の磚室墓があることである。後漢時代の牧羊城はどうなっていたのかが今後の課題である。

3. 明刀銭と戦国時代

遼東半島から出土する戦国時代の貨幣の代表的なものとして、燕の明刀銭がある。確かに制作されたのは戦国時代であるが、いつまで流通したかについては、戦前から、漢代初期まで

との理解があった。

そのため、戦前に調査され、明刀銭が出土した牧羊城址はその明刀銭の出土をもって、その築城が戦国時代に遡るとは考えられず、逆に、漢代まで流通したことの証拠にもなってしまった。やはり、明刀銭が出土した大嶺屯城址、高麗寨遺跡もそのように考えられていた。いずれの遺跡でも、漢代の貨幣と混在して出土したことがその根拠となっていた（関野 1951）。

遼陽市三道壕遺跡（東北博物館 1957）は、戦国時代の層はなく、漢代の遺跡とされているが、明刀銭が出ている。表のようにすべての遺構で五銖銭が出ているから、前漢でも後半以後になり、一部の遺構は王莽銭の存在から紀元前後までは少なくとも下る。刀銭は明刀銭とみられるが、戦国燕の末期の鑄造とされる一刀円銭とともに、各遺構で漢代の貨幣と共伴している。

表 4 遼陽三道壕での古銭出土情況

遺構	刀銭	一刀円銭	大半両	小半両	五銖	王莽銭 大布黄千
1号住居（中期）及下の灰坑（前期）	○	—	—	○	○	—
2号住居前期	—	○	○	○	○	—
2号住居後期	—	○	○	○	○	○
3号住居	—	○	—	○	○	—
4号住居	残片	—	—	○	○	—
5号住居	○	—	○	○	○	貨泉（混在？）
6号住居	—	○	—	○	○	—
磚窯	○	○	—	○	○	—

三道壕は詳細な報告がないため、個別貨幣の出土状況が分からず、どこまで共伴関係が信頼できるのか分からないが、一部漢代まで流通したことを否定できない。しかし、だからといって遼東から出土する明刀銭がすべて漢代に下ることになるわけではないことは自明である。

その点で、牧羊城や高麗寨の出層位を子細に見ると、確かにより上部の層では、両者が混在しているが、それぞれの地点でより深いところでは、明刀銭だけが単独で出ていることは、かつて藤田亮作（1948）が指摘していたところである。戦国から漢代に連続して居住していた場合、本来はより下層にあるべき戦国の遺物がより新しい漢代の遺物とともに出ることは不自然ではない。したがって、これだけでは牧羊城が戦国まで遡らないという証拠にはならない。

明刀銭が漢代まで流通していたという理解とは異なる、遼東地方から出土する明刀銭についての別の理解があった。古く鳥居龍蔵（1910）は大石橋市盤龍山で発見された明刀銭について、その場所から、幾何学文のある赤褐色の素焼きの土器や鉄滓が出ることから、それらを共伴と見なし、戦国時代にいまだ石器を用いる在地の人々が入手したものと考えた。後の、楼上墓採集の明刀銭や鉄製品が遼寧式銅剣を用いた在地勢力の人々に伴うものとの考えに近いものがある。

他方、浜田耕作（1917）は、大連市営城子鞠家溝から採集された明刀銭に縄文土器が伴っていたとの報に接し、この土器が年代を決める上で重要であると考えた。そして、明刀銭に伴ったという土器も漢以前の戦国時代のものであると認めた。その上で、鳥居と同様に明刀銭ならびに土器までも戦国時代の遼東にいた非中原系在地勢力が入手した可能性も否定できないが、それよりも遼東半島には漢代以後の遺跡、遺物が豊富にあることから、すでにそれ以前の時代に中原系の人々の移住があった結果であるとした。

鳥居や浜田は、明刀銭は燕の貨幣ではなく、趙の貨幣と見なしていたので、燕の將軍秦開の東方進出とは結びつくことはなかった。しかし、遼東半島から出土する明刀銭をめぐって、戦国時代の遼東

半島に住んでいたのはどのような人々なのかについて、古くから、大きく二つの考えがあったことが分かる。

『牧羊城』では明刀銭は燕の貨幣であるとの理解に立っており、かつ朝鮮半島におよぶその分布が燕の勢力の波及を示しているとする。しかし、それにもかかわらず、中ぐらいの古さの遼寧式銅剣をともなう聖周墓を周末漢初の墓と結論しており、烏居龍蔵以来の流れに沿っていると言えよう。

つまり、明刀銭をめぐるのは、それを製作年代である戦国時代にすでに遼東半島に流入していたと認めた上で、それらを在地系の遼寧式銅剣を持つ人々であるとの考えがあった。現在の考古資料では、桓仁大甸子の墓で、新式の変形遼寧式銅剣と鉄刀とともに明刀銭が出た例がそれに当たる。あるいは本溪上堡の墓で新式の遼寧式銅剣に燕系の縄蓆文壺が伴った例なども参考となろう。これらに伴った銅剣は楼上墓の銅剣とはまったく異なる。

このように、燕系の文物の流入と同時に遼東が一斉に中原的文物一色になったのではなく、一時期共存した段階があることは確かである。大連周辺では、尹家村遺跡での新式の遼寧式銅剣と燕系の豆の伴出、徐家溝墓でのそれと東周式銅剣の伴出がやはりそのような状況を示している。だが、楽浪郡では細形銅剣が残っていることを想起するならば、燕が本格的に遼東に進出した前3世紀以後もそのような状況が続いたかいなかは個別具体的に検証する必要がある。遼東郡の外ではあるが、吉林西荒山屯墓では最末期の遼寧式銅剣に鉄器を伴い前3世紀に下るのであろう。遼寧省博物館展示資料によれば、これに似た刃部形態で端部有孔の、前3世紀後半に在位した燕最後の王喜の銘のある剣が遼西の錦州市で採集されている。有孔剣身の類例は吉林懷徳大青山短剣墓にある。錦州に前3世紀の短剣墓があるとは考えられないから別の事情であろう。尹家村 M12 や亮甲山の剣よりさらに遅れる、このような剣は遼東郡内の墓からは出ていないようだ。

牧羊城の今回の再検討では、尹家村のような段階を経て、燕の築城があり、戦国時代にすでに中原的な文物の世界に入ったことが明らかとなった。そのことを別の側面から見るために、以下で大連市内発見の明刀銭について管見することにする。

・大連市内出土の明刀銭

表5に見られるように、大連市地域においても多くの地点で明刀銭が出土している。図4はこれらのうち、おおよそその地点が判明するものを点に落としているだけですがすべてではないことに注意されたい。それでも遼東半島の西端まで高い密度で明刀銭が見つまっている。長期に継続する集落遺跡を除き、窖藏などの偶然の発見品では明刀銭単独あるいは戦国時代の貨幣との共伴したものがほとんどであり、これらの多くが、漢代に下ると考えるよりは、すでに戦国時代に明刀銭は遼東半島の西端まで広く流通していたと考えるのが自然であろう。この表の多くの典拠となっている劉俊勇もそのように考えている。そして、その一部の窖藏銭の容器は縄蓆文土器であり、尹家村2期文化などそれ以前の土器が関わったことはない。このような明刀銭の分布と漢代の漢墓あるいは古城址の分布を重ね合わせると漢代の地域社会は戦国燕の時代の地域社会の上に成り立っていると想定される。

かつて、楼上墓における明刀銭の伴出を肯定し、明刀銭が流通していた戦国時代後期まで遼寧式銅剣を伴う楼上積石墓のような墓制、あるいはそれを支えた社会が残っていたという理解は牧羊城を漢代の築城と見る理解と一体であり、それが我が国では主流であった。このような理解は、戦国燕の時代に遡る城址の存在を認め、遼東における燕の存在を積極的に認める中国側とくに当該地域の研究者の理解とは大きく乖離していたと言わざるをえないだろう。

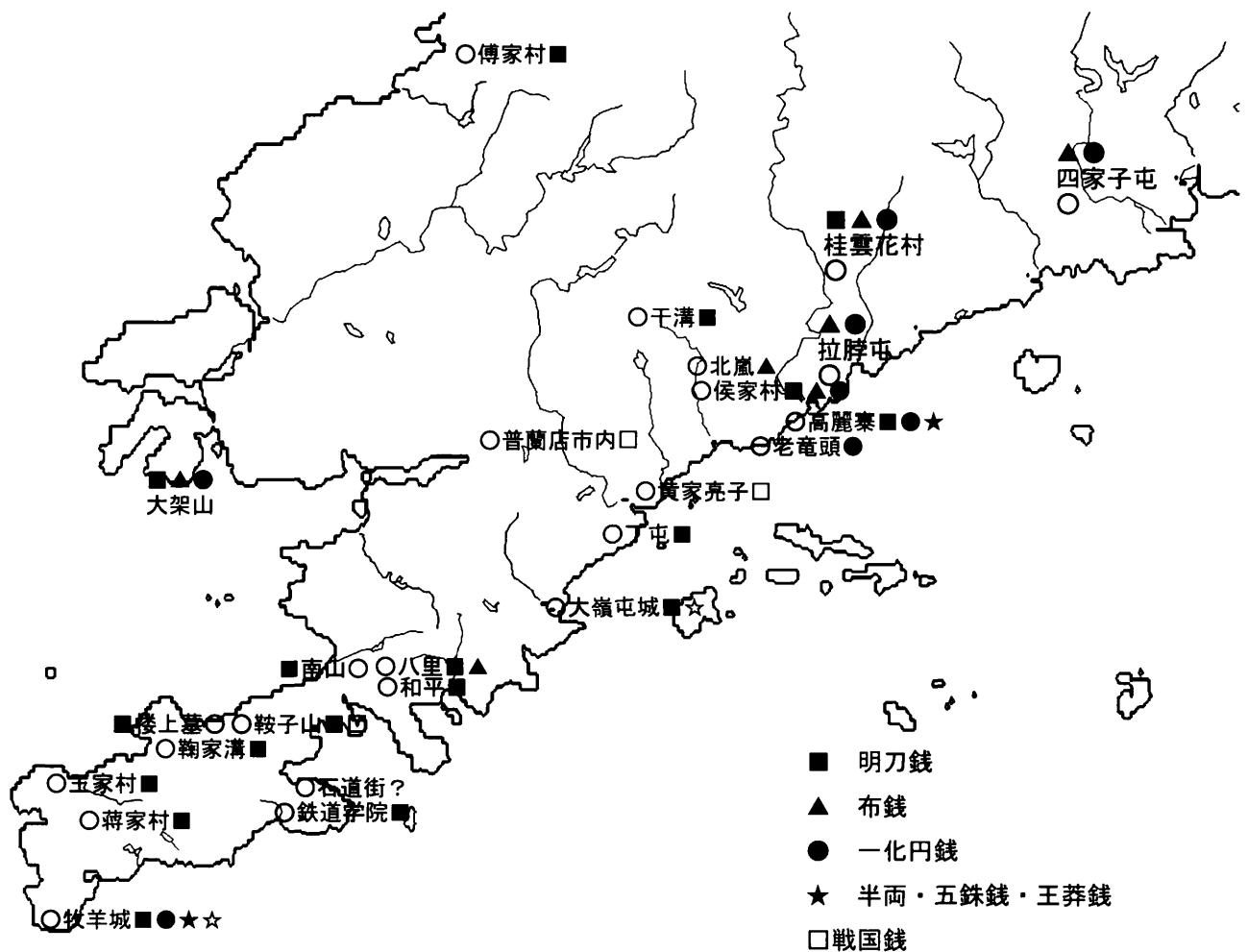


図4 大連市内の戦国貨幣出土地

表5 大連市および周辺遼東半島における戦国貨幣出土地

地点名	所在	種類と数量	備考	出典
牧羊城	旅順口区鉄山鎮	明刀錢 14 片、明化円錢 3 枚、一刀 (化) 円錢 2 枚、半兩錢 7 枚、五銖錢 3 枚、大泉五十 1 枚、清錢 3 枚		東亜考古学会 1931
尹家村 (南山里)	旅順口区			
蒋家村	旅順口区三澗鎮	明刀錢約 400 枚 (二回分計 460 枚)		王 1990 () は許 1997
王家村	旅順口区北海溝	明刀錢 100 枚		許 1997
鞍子山	甘井子区大辛寨子鎮	明刀錢と白刃刀錢計 30kg 余り	陶罐中	許 1997
鞠家溝	甘井子区	明刀錢約 300 枚と繩蓆文土器	土器中	浜田 1917
楼上墓	大連市甘井子区營城子鎮	明刀錢 3 片 (五銖錢 1 枚)		旅順博 1960、() は朝・中 1986
石道街	西崗区			
鉄道学院	沙河口区	明刀錢 5kg 余		許 1997
八里村	金州区友誼郷	明刀錢 4830 枚 (布錢襄平布主、他に韓、趙 210kg)	二回分計	許 1997、() は金州市博展示
和平村	金州区友誼郷	刀錢 10kg		金州市博展示
南山村	金州市博展示	刀錢 100 枚		金州市博展示
鹿圈子	金州区			

小柳樹村	金州区			
蚕廠屯	金州区			
大嶺屯城	金州区	明刀錢 2 枚と 20 数片、貨泉 2 枚	宋錢、清錢各 1 枚	三宅 1975
丁屯	金州区杏樹屯鎮	明刀錢 173 枚		許 1997
光明村	長海県			
普蘭店市内	普蘭店市			
棺材房	普蘭店市			
東道士屯	普蘭店市			
樂家屯	普蘭店市			
西孫屯	普蘭店市			
黄家亮子	普蘭店市			
高麗寨	普蘭店市碧流河郷	明刀錢 1 枚と 13 片、一化円錢 23 枚、半両錢 1 片		東亜考古学会 1929
楊樹底	普蘭店市			
盧屯	普蘭店市			
劉西屯	普蘭店市			
北嵐村	普蘭店市徐大屯郷	趙尖足布、韓、燕、趙方足布約 24kg (一化円錢と襄平布が主で他の布錢計 24 kg)		王 1990 () は許 1997
候家村	普蘭店市徐大屯郷	一化円錢 20kg 余、明刀錢と布錢 (襄平布主、他に韓、魏、趙) 計 12.5kg		許 1997
老龍頭	普蘭店市皮口鎮	一化円錢	陶罐中?	許 1997
樂家村	普蘭店市夾河鎮	明刀錢 6.5kg		許 1997
張店西海頭	普蘭店市			
于溝	普蘭店市蓮山溝	明刀錢 5kg 余		許 1997
敵屯	普蘭店市			
邢屯	瓦房店市			
傅家村	瓦房店市土城郷	明刀錢 5kg 余り		許 1997
許屯	瓦房店市			
東馬屯	瓦房店市			
二道嶺村	瓦房店市			
大架山	瓦房店市交流島郷鳳鳴島	明刀錢 120 枚、趙尖足布 2 枚、燕方足布 12 枚、一化円錢 2280 枚	板石の下	王 1988, 1990
長興島土城子	瓦房店市			
孫屯	瓦房店市			
炮台村	瓦房店市			
潘大村	瓦房店市			
許家村	瓦房店市			
馬廟村	莊河市			
宋屯	莊河市尖山郷	布錢 10kg 余		許 1997
桂雲花村	莊河市桂雲花郷	趙尖足布 14 枚、燕、魏、韓方足布 1386 枚明刀錢 110 枚、一化円錢 2200 枚	窖藏	王ほか 1994
石堡村	莊河市仙人洞鎮	趙尖足布、燕、魏、韓方足布計 360 枚、一化円錢 642 枚	窖藏陶罐中	王ほか 1994
拉脖屯	莊河市明陽鎮明陽山村	方足布、一化円錢計 16.5 kg	窖藏	王ほか 1994

四家子屯	莊河市大營鎮四家子村	趙尖足布 29 枚、燕方足布襄平 1121、陽安 22、平陰 22、益昌 4、安陽 19、封化 1 枚、韓方足布 7 枚、魏方足布 4 枚、趙方足布 2 枚、一化円錢 2145 枚	窖藏	王ほか 1994
------	------------	--	----	----------

(出典に注記のないものは劉 2003)

・尹家村下層 2 期と尹家村上層の間

すでに、牧羊城の築城は尹家村下層 2 期より遅れ、戦国時代後期、およそ前 3 世紀のこととしてきた。尹家村では上層にも墓があり、それらは前漢時代初期であると報告されている。尹家村の墓地には下層 2 期と上層の間にある程度の時間的な空白があることになる。というよりも、遼東では、遼陽、瀋陽で見つかっている典型的な燕系の墓は周辺地域ではまったく見つかっていない。このことが、遼東への燕の進出の実態を見えにくくしているのである。

・南山里の鉄器墓

南山里の漢代磚室墓の調査は、牧羊城の調査の翌年、1929 年におこなわれた。その際に、農民の偶然の発見による、これら磚室墓の副葬品とは異なる鉄器の一群が牧羊城の東で見かっていることを知った。1933 年に刊行された『南山裡』では、墓からの出土であろうと言うことで、鉄器墓と名付けられ紹介されている。そして、それらの鉄製品が、朝鮮半島平安北道渭源郡龍淵里で明刀銭を伴って見つかっている鉄器群と類似することを指摘し、その年代を周末としていた。つまり、戦国時代後期ということである。最近刊行された、白雲翔による『先秦兩漢鉄器的考古学研究』を紐解いても、この種の鉄器は、燕の東方進出に従い広がった戦国時代後期のものと考えられている。この鉄器墓こそが、尹家村下層 2 期と上層の間の空白を埋める資料であろう。そして、その墓が、その前後の時期の墓が分布する尹家村とは異なり、より牧羊城に近い地点で見かっていることは牧羊城の築城時期との関係で注目される。遼東半島西部で鉄器を伴うのが明らかなのは、燕系の豆を伴う尹家村 2 期文化ではなく、その後である。

4. 戦国時代の遼東半島

遼東郡は戦国燕の時代に始まるが、その内容は文献にも見えず、理解が難しい。漢代の県名の分布はそれに遡る戦国時代の実態をある程度反映したものと予想される。しかしながら、これらの城址自体の調査がほとんど無いのであるから、城壁がいつの時期のものかを特定するのは難しく、漢代の各県城に比定されている城址のどれだけが戦国燕に築城が遡るのか明らかではない。

遼東郡治に比定される遼陽市徐往子では、未報告ではあるが、遼寧省博物館や遼陽市博物館展示資料に拠れば、典型的な燕系の副葬陶製礼器を伴う墓が見つかっている。所謂復古形態の陶器を副葬する墓の出現は宮本 (2000) や石川 (2001) の編年で、解村 M2 の段階 (石川のⅢ期) から始まり、末期の辛荘頭 M30 (石川のⅤ期) では器形が大きく変化している。徐往子墓は鼎の把手が長いこと、高い脚の付く盤、蓋豆の蓋に付く棒状の装飾が長いなど、何れも復古形態の陶器墓の中でも古い解村 M2 より新しく、かつ辛荘頭 M30 のような退化的な変化をする前の中間の段階に位置づけられる。他方、遼陽市博物館で同時に展示されていた燕に特有の所謂燕式鬲の器形は丸底で、口縁が内湾し、胴部の縄文は上部が縦位、下部が横位であった。郎井村 10 号作坊から出土した燕式鬲の層位的な根拠に基づく組列もその根拠の一つとして組み立てられた石川の編年では、そのような特徴はⅤ期に位

置づけられる郎井村 3 期にはなく、それ以前の特徴である。郎井村 2 期のものより、石川が 1 期後半かその後とする懐柔 M50 の燕式鬲により近い。しかし、そのほかの器種に見られる特徴からは石川Ⅲ期の解村 M2 よりは新しいであろう。

石川編年Ⅳ期後半九女台 M16 段階以前、あるいはさらにⅣ期前半（郎井村 2 期に対比）東斗城村 M29 より古くなる可能性がある。石川（2006）は最近、三官甸の青銅器に依拠していた以前の自身の年代観を改訂し、より古くして、本書収録論文では郎井村 2 期を前 4 世紀後半とし、郎井村 3 期を前 3 世紀としている。つまり、Ⅳ期前半東斗城村 M29 および後半九女台 M16 は前 4 世紀後半になり、宮本（2000）と同様の年代観に落ち着いた。また、宮本（2000）および石川の改訂年代では、徐往子墓よりは古いと考えられる解村 M2 は前 4 世紀前半に対比されている。

筆者は徐往子墓を従来九女台 M16 段階ぐらいに併行する、つまり、石川や宮本に抛れば前 4 世紀後半新段階から前 300 年前後であり、それが遼東に燕の直接の痕跡を示す最古の段階であると見ていた。しかしながら、徐往子墓は前 4 世紀中葉ぐらいまで遡る可能性もあろう。

本書収録の石川論考では、尹家村下層 2 期の燕系の豆は郎井村 10 号作坊の 2 期併行であり、牧羊城から出土した燕系の土器は郎井村 10 号作坊 3 期となっている。徐往子墓は尹家村下層 2 期よりやや遡る可能性がある。石川は 4 章 2 で牧羊城城壁築造に先行して中原系土器がすでに牧羊城にあったことを重視している。よって、徐往子墓は牧羊城城址の築城より古くなる可能性が高くなる。ただし、徐往子墓は遼陽に燕が進出した証拠となる典型的な燕の墓であるから、燕の遼東への進出があっても、周縁地域に位置する牧羊城の築城はそれと同時にとはならず、多少の時間差があったということはある。厳密に何年の差と考古資料からは言えないので、どの程度の時期差なのかどうかは分からない。遼東への中原系勢力の進出過程の実態を考える上で重要であるが、徐往子墓は正式な報告もなく、これ以上は深入りしない。

燕系の典型的な土器を副葬する墓が遼陽にあることは重要であろう。また、これも簡略な報告しかなく詳細は不明だが、一部で候城に比定されている瀋陽市内から燕系の陶製礼器を副葬する墓（金 1959）が見つかっている。報告では、戦国後期に比定されており、宮本（2000）は前 4 世紀後半から前 3 世紀前半、あるいは前 3 世紀としている。遼西では、戦国後期を遡って、各地で発見される燕系の墓には在地系の土器が含まれたり、燕系の陶製礼器が変容したものを含む場合があり、在地勢力との融合的な側面も看取される。遼東ではいかなる過程があったのかは今後の課題である。

5. おわりに

本書の結論でもある、牧羊城を戦国時代の築城と考えるに当たって、その背景としての漢代、戦国時代の遼東郡の実態を見てきた。しかしながら、古城址ですら、ほとんど発掘調査が及んでおらず、継続期間も定かではない。そのため、不確かな分布図をいくつか作成したが、それだけでも漢代に読み取れる社会状況はかなりの点で戦国時代後期の燕まで遡れそうだと考えた。燕に関連する資料のほとんどが未報告かそれに近い状況であることが、今までの不当に低い評価にとどまっていた。その点を考える上で、大嶺屯城、牧羊城の調査は今でも貴重である。

遼西でも燕関係の資料がほとんど未報告という状況は同じであったため、史記の記載に従って考古資料を評価するという本末転倒が起きていたが、最近になって、遼西では春秋後期には燕の勢力が新出していたことが分かりつつある。ただ、土器や青銅器などには在地系の要素が残されており、たんに東夷を駆逐して、中原勢力が一気に広がったというものではなかったようだ。遼東でも今後このような議論が可能な資料が増えることを期待したい。

文献

- 石川岳彦 2001 「戦国期における燕の墓葬について」『東京大学考古学研究室紀要』16,1-58頁。
- 石川岳彦 2006 「春秋・戦国時代の燕の青銅器」『歴博国際シンポジウム「古代アジアの青銅器文化と社会」発表要旨集』83-88頁。
- 稲葉岩吉 1913 「漢代の満州」『満州歴史地理』102-203頁。
- 関野雄 1951 「漢初の文化における戦国的要素について」『和田博士還暦記念東洋史論叢』375-390頁。
- 東亜考古学会 1929 『貔子窩』
- 東亜考古学会 1931 『牧羊城』
- 東亜考古学会 1933 『南山裡』
- 東亜考古学会 1934 『營城子』
- 烏居龍蔵 1910 『南満州調査報告』東京帝国大学（1976『烏居龍蔵全集』10収録）。
- 浜田耕作 1917 「漢以前の陶器に就いて」『国華』28-8,
- 浜田耕作 1943 『東亜考古学研究』荻原星文館。
- 藤田亮作 1948 「朝鮮発見の明刀銭と其遺蹟」『朝鮮考古学研究』196-292頁（初出は1938『史学論叢』）。
- 三宅俊成 1975 『東北アジア考古学の研究』国書刊行会。
- 宮本一夫 2000 『中国古代北疆史の考古学的研究』中国書店。
- 八木契三郎 1924 『南満州旧蹟志（上篇）』南満州鉄道株式会社庶務部調査課。
- 于臨祥 1956a 「旅順市三潤区発現古墓」『文物参考資料』1956-2,69頁。
- 于臨祥 1956b 「旅大市労働公園東門前発現古墓」『文物参考資料』1956-6,76-77頁。
- 于臨祥 1958 「營城子貝墓」『考古学報』1958-4,71-89頁。
- 于臨祥 1965 「旅順李家溝西漢貝墓」『考古』1965-3,154-156頁。
- 王嗣洲 1988 「遼寧瓦房店鳳鳴島出土戦国貨幣」『北方文物』1988-4,29-31頁。
- 王嗣洲 1990 「大連市三処戦国貨幣窖藏」『考古』1990-2,102-105頁。
- 王嗣洲・孫徳源・趙華 1994 「遼寧莊河市近年出土の戦国貨幣」『文物』1994-6,76-81頁。王綿厚 1994 『秦漢東北史』遼寧人民出版社。
- 大連市馬圈子漢魏晉墓地考古隊 1993 「遼寧瓦房店市馬圈子漢魏晉墓地発掘」『考古』1993-1,22-28頁。
- 許明綱 1959 「旅大市營城子古墓清理」『考古』1959-6,278-230頁。
- 許明綱 1997 「大連地区燕文化遺蹟」『文物春秋』1997-2,10-14頁。
- 許明綱・吳青雲 1991 「遼寧大連沙崗子発現二座東漢墓」『考古』185-187,192頁。
- 金殿士 1959 「瀋陽市南市区発現戦国墓」『文物』
- 曉蕪 1986 「大連灣劉家屯又発現一座漢代貝墓」『大連文物』1986-2,
- 崔艶茹・馮永謙・崔徳文 1996 『營口市文物志』遼寧民族出版社。
- 市考古隊 1993 「瀋陽故宮北牆後発現古城牆址」『瀋陽文物』1993-1（中国考古集成 東北巻10所収）
- 周長山 2001 『漢代城市研究』人民出版社。
- 四平地区博物館・吉林大学歴史系考古專業 1988 「吉林省梨樹県二龍湖古城子調査簡報」『考古』507-512頁。
- 曹鏗 1980 「饒河尖古城和漢安平瓦当」『考古』1980-6,566-567頁。
- 鉄嶺市博物館 1996 「遼寧鉄嶺邱家台発現窖藏錢幣」『考古』1996-4,310-314,303頁。
- 白雲翔 2005 『先秦兩漢鉄器的考古学研究』科学出版社。
- 李慶發・張克挙 1991 「遼西地区燕秦長城調査報告」『遼海文物學刊』1991-2,40-50頁。

- 劉俊勇 2002 「遼寧大連營城子石板墓發掘簡報」『北方文物』2002-2,25-26 頁。
- 旅順博物館 1960 「旅順口区後牧城駅戦国墓清理」『考古』1960-8,12-17 頁。
- 旅順博物館 1986 「遼寧大連前牧城駅東漢墓」『考古』1986-5,397-403 頁。
- 遼寧省地方志編纂委员会弁公室主編 2001 『遼寧省志文物志』遼寧人民出版社。

9-2. 朝鮮半島の銅戈

—燕下都辛庄頭 30 号墓出土銅戈の位置づけ—

後藤 直

河北省易県燕下都の辛庄頭墓区で 1977 年冬から翌年春に発掘調査した 30 号墓 (XZHM30) に副葬されていた朝鮮半島式の細形銅戈を、2005 年 10 月 5 日に河北省文物研究所で実測調査した。この銅戈についてはすでに岡内三眞が計測調査を行い出土遺構や時期を論じ (岡内 2003)、最近近藤喬一も共伴資料や被葬者について検討している (近藤 2006)。本稿ではこの銅戈の朝鮮半島銅戈の中での位置づけを考える。

朝鮮半島出土銅戈はこれまでに出土例と博物館等の所蔵例 77 本が公表されている。そのうち詳しい記述や図・写真がない 5 本と北部九州製中広形 2 本を除く 70 本に、北部九州出土朝鮮半島製細形銅戈のうちの完形品 5 本と辛庄頭 30 号墓出土 1 本を加えた合計 76 本について検討する。各資料に朝鮮半島出土品は 'k'、九州出土品は 'n'、中国出土品は 'c' を頭につけて一連番号を付す¹⁾。表 1 にリストと個々の類別 (後述)・計測値 (計測部位は図 2-5 参照) を、表 2 に出土遺構と共伴品を記し、図 1～5 に主要資料図を掲げる。

朝鮮半島銅戈の部分名称は、中国殷周時代銅戈の古典に現れた名称「援」(身部)、「胡」(身の下部が広がる部分)、「内」(茎)を援用し、それ以外は、李濟が「援の基部に秘と同方向に出る突起」を上・下闌とするのに倣い関にあたる所を「闌」、樋下部の孔を「穿」とする (林 1972: 3-9)。「脊」、「樋」、「鋒」は青銅器研究の通例通りである。

地域は以下の五つに区分する。(1) 西北地域: 平安道・黄海道、(2) 東北地域: 咸鏡道 (現在江原道に移された旧咸鏡南道を含む)、(3) 中部地域: 京畿道・江原道、(4) 西南地域: 忠清道・全羅道、(5) 東南地域: 慶尚道。

1 分類

これまでの分類 (岡内 1973、千葉 1978、難波 1986) と同じく、外形 (縁の形状・援幅・胡の広がり・闌幅・内の大小) と援部の造り (樋の形状、これと関連する脊の鑄の有無、樋の文様の有無) を組み合わせ、法量を加味して分類する²⁾。

大多数の銅戈とくらべ明らかに形態が異なるもの (後述のⅢ類・Ⅳ類) 以外を次のように類別する。

〔平面形〕

Ⅰ類 援中央前後で両側縁 (刃部) がほぼ平行し (厳密には鋒側へ幅がわずかずつ狭くなる)、胡の広がりが強い (1 例のみ微弱)。援長が 21cm を超えるものと 21cm 未満のものに分ける。

胡の広がりが強く援長が 21.5cm～26.6cm のものは援中央幅で 2 分する。

Ⅰ①類 援中央幅が 4.1～5.1cm、闌幅が 7.8～10.4cm、内幅が 3.1～4.0cm (図 1、図 2)。

Ⅰ②類 援中央幅が 3.5～4.0cm、闌幅が 7.9～10.0cm、内幅が 3.0～3.7cm (図 3-1～9)。

援長は 23.5cm だが胡が微弱なものが 1 例ある。

Ⅰ③類 援中央幅が 4.7cm、闌幅は胡が微弱なため 7.1cm、内幅は 2.8cm と狭い (図 3-10)。

以上は援・闌が厚く、内も大きく (Ⅰ③類以外は幅が 3.0cm 以上、長さ 2.3～4.0cm) 厚く (0.5～0.8cm)、武器としての機能を有する。

胡の広がり強く援長が21cm未満のものは内の幅の大小で2分する。

I④類 内幅が2.5～2.8cm、援長が17.8～19.9cm、援中央幅が3.0～4.1cm、闌幅が6.1～7.4cm(図5-8～11)。

I⑤類 内幅が1.9～2.1cm、援長が16.3～20.6cm、援中央幅が3.0～3.6cm、闌幅が6.8～7.9cm(図5-12・13)。

この二つはI①類～I③類より小振りで薄い。内もI①・I②類より小さく薄く、I⑤類はI④類よりさらに小さい。武器機能を低下させあるいは喪失していて、I①～I③類より後出である。

II類 援の両側縁が鋒側から闌に向かって直線的に広がり、援平面形が鋒端を頂点とし闌側を底辺とする長三角形に近く、I類にくらべ細長である。I類のようによく小振りのものはない。胡の広がり強いもの(とはいえI③類以外のI類よりは弱い)と、微弱なものに分ける。前者は内幅の大小で2分する。

II①類 内幅が2.9～4.0cm、援長が21.8～26.0cm、援中央幅が3.5～4.5cm、闌幅が6.9～8.2cm(図4-1～8)。援長はI①～I③類と変わりなく、援中央幅はI②類とほぼ同じ、闌幅はI①・I②類より狭く、内の幅・厚さはI①・I②類と変わらない。厚手で内が大きく、実用的武器である。

II②類 内は幅2.4～2.5cm、厚さ0.3～0.7cm、援長が20.8～22.1cm、援中央幅が3.3～3.7cm、闌幅が6.7～7.0cm(図4-9)。援長はII①類の短いものに近く、援中央幅・闌幅はII①類よりやや狭く一層細身で、内がさらに狭い。I④・I⑤類ほど小振りではないが実用性は減じていて、II①類より後出である。

II③類 胡が微弱。援長が21.0～23.9cm、援中央幅が3.7～4.3cm、闌幅が6.3～6.7cm、内は幅が2.8～3.2cm、厚さが0.6～1.0cm(図5-1～7)。援・闌は厚みがあるが胡が微弱で内がやや小さく、II①類より後出的である。

〔脊の鑄の有無〕

1類 脊両側の樋先端が離れていて、脊に鋒から続く鑄を研ぎ出す。

2類 脊両側の樋先端が合わさり、脊に鑄を研ぎ出さない。

〔文様の有無〕

a類 樋に文様がない。

b類 樋に文様がある。

以上の各分類を組み合わせると、76本の銅戈にI①1a類のように分類記号を与えると、I①1a類(13本、図1-1～11)、I①2a類(12本、図2-1～8)、I①2b類(2本、図2-9・10)、I②1a類(11本、図3-1～7)、I②1b類(1本、図3-8)、I②2b類(2本、図3-9)、I③1a類(1本、図3-10)、I④1a類(1本、図5-8)、I④2a類(1本、図5-9)、I④2b類(2本、図5-10・11)、I⑤2b類(3本、図5-12・13)、II①1a類(7本、図4-1～5)、II①2a類(4本、図4-6～8)、II②1b類(3本、図4-9)、II③1a類(4本、図5-1～4)、II③2a類(4本、図5-5～7)の16類が認められる。

このほかに、援中央で括れ鋒部が広い小形戈3本をIII類(図4-10・11)、樋のない戈2本をIV類(図4-12)とする。III類には1a類と2a類があり、IV類の援平面形はII①類である。

I類が49本(64.5%)、II類が22本(28.9%)で、有文はI類に10本、II類に3本ある(表3)。なおここで援長に対する樋長の割合を見ておく。I類とII類をくらべると、

I類 (n=40) は 65.2 ~ 85.7% で平均 72.4%、中間値をとる 3分の2 (n=26) は 72 ± 4% の間、II類 (n=18) は 75.5 ~ 88.5% で平均 80.4%、中間値をとる 3分の2 (n=12) は 80 ± 3% の間で、両類間で違いがある。II類の方が援長に対する樋長の割合が高く (いいかえれば鋒長が短い) またばらつきは少なく (最大値と最小値の差は 13%)、樋長に規格性があるらしい。I類ではこの割合の幅は 23% でばらつきが大きく規格性は低い。樋長の割合は I類・II類それぞれの細分類別の間、地域の間、無文と有文の間には特段の差異はない。しかし I類とII類の間の樋長割合のばらつきの差異は、I類が広い地域に長期間存続し、II類が I類に遅れて出現し南部に分布すること (後述) と関連する。

2 地域性 (表 3)

西北地域では I類だけが出土している。細分すると I① 1a 類 6 本、I① 2a 類 2 本、I② 1a と I② 1b 各 1 本の 4 種類である。樋先端が離れ脊に鑄が付く I類が 8 本、樋先端が合わり脊に鑄のない 2 類はわずか 2 本で、有文は I② 1b 類 1 本にすぎない。

東北地域では I類 8 本と II類 1 本が出土している。内訳は I① 1a 類 2 本、I① 2a 類 1 本、I② 1a 類 5 本³⁾、II① 2a 類 1 本の 4 種類である。脊に鑄がつく I類が 7 本に対し鑄がない 2 類は 2 本で、文様をもつものはない。

中部地域も I類だけで (I① 2a 類 1 本、I② 1a 類 2 本) 有文はない。

以上北部の 3 地域は I①類・I②類が卓越し (22 本中 21 本)、脊に鑄を研ぎ出す I類が 21 本中 16 本を占める。有文は 2 本にすぎない。

西南部地域では、北部同様の I①類も 8 本あるが (1a 類 2 本・2a 類 6 本)、他地域にほとんどない II①類が 5 本 (1a 類 3 本・2a 類 2 本)・II③類が 6 本 (1a・2a 類各 3 本)、計 11 本も出ている。他に北部にない I② 2b 類・I③ 1 類と小振りの I④ 1a 類が各 1 本あり、全部で 9 種類が出ている。細身の II類が半数を占め、これがこの地域で出現したことを示している。脊に鑄がない 2 類は北部にくらべはるかに多い (I類 11 本中 7 本、II類 11 本中 5 本)。この点も西南地域の特徴である。有文は I② 2b 類 1 本だけで、北部と同じく少ない。

東南地域でも 9 種類が出土している。9 本ある I類のうち、他地域と共通するのは I① 2a 類 1 本にすぎず、他の 8 本は他地域にはない類で (I① 2b 類 2 本・I④ 2b 類 2 本・I⑤ 2b 類 3 本・I④ 2a 類 1 本)、小形の I④類・I⑤類 6 本と有文 7 本を含む。II類も 4 本のうち 3 本が西南地域にもない有文の II② 1b 類である。III類とIV類もこの地域で出土している⁴⁾。大多数が他地域にない類で、小形品のほぼすべてがこの地域に集中する。

このような地域間の類型と種類数の違い——大きくは北部 (西北・東北・中部地域) と西南地域と東南地域の違い——は銅戈の出現、展開に地域的な違いのあったことを物語る。各地域に共通する無文の I①類とこれとは援中央幅がやや狭い点でのみ異なる無文の I②類が銅戈の主流である。この両類がほぼすべてを占める北部、その中でも西北部に銅戈が最初に出現しここから各地に広がったと考えられる。

それ以外の種類はほぼすべてが南部に分布し、南部に広がった I①類・I②類から派生したものである。II①類・II③類は西南部で生まれ、II② b1 類とIII類は東南部で生まれ、IV類は南部で生まれた。

また鑄のある I類は北部に多く南部では減少する (I類は西北地域では 80%、北部全体では 76%、西南地域で 45%、東南地域で 25%)。このことは西北地域で I類が鑄のない 2 類より先に出現し、銅戈の南伝とともに 2 類比率が高まったことを示すのであろう。

樋に文様を鑄出す b 類は 13 本あり⁵⁾、西北地域と西南地域の各 1 本以外は東南地域で出土し、この地域で盛行する。

北部九州出土朝鮮半島製品 5 本中 4 本は無文の II ①・II ③類で、まちがいなく西南地域製品である。もう 1 本も西南地域に多い I ① 2a 類である。中細形銅戈のもとになったのは I ① 2b 類相当であるが、未発見らしい⁶⁾。

3 時期

これら各類を地域をこえて一列に並べられないことは地域性のあり方からも明らかである。前節で地域性から読み取れる各類型間の系列と前後関係について多少付記したが、類型相互の比較のみで編年することは困難である。ここでは出土遺構が明らかか推定できる事例、共伴品が判明する事例によって（表 2）、青銅器文化変遷の中に位置づけて銅戈の変遷を考える。

出土状況が判明する朝鮮半島の青銅器はほとんどすべてが墓に副葬されているから、青銅器文化は副葬墓の種類、副葬青銅器の種類・型式・組合せにより 5～6 期に区分されている（岡内 1982、後藤 1985、武末 2002 など）。しかし全地域をひとまとめにして区分する（せざるをえない）ために地域間の時期区分・平行関係に齟齬が生じるのは避けがたい。

第 1 期 西北地域にごく少数の青銅器（環頭刀子、銅泡、板状銅鑿）が出現する。コマ形土器前半期、南部無文土器前期。

第 2 期 琵琶形銅劍の時期。コマ形土器後半期、南部無文土器中期。琵琶形銅劍とその変化形、琵琶形銅矛、扇形銅斧、有茎両翼銅鏃、多鈕粗文鏡が各地の支石墓、箱式石棺墓に副葬される。

第 3 期 細形銅劍 B I・B II 式（岡内 1982）があいついで出現し、西北地域では箱式石棺墓（黄海南道泉谷石棺墓（白 1966））ついで石槨墓に副葬される。この時期は西南地域の異形有文青銅器・多鈕粗文鏡と細形銅劍を副葬する石槨墓で代表されるが、これらには銅矛、銅戈はまだ現れない。西北地域でこれに併行すると考えられるのは丁峰里石槨墓だが、ここには扇形銅斧とともに無耳無節帯の最古式の銅矛を副葬する。西北地域では銅矛が他地域より早く第 3 期に出現するのか、この墓が第 4 期に降るのが問題である。

第 4 期 多鈕鏡は粗文鏡から細文鏡に替わり、銅矛・銅戈が出現する。西北地域の青銅器副葬墓は土壙墓（正確には土壙木棺墓）に替わる。事例は少なく黄海南道石山里と石塘里が挙げられる。石山里には鑄造鉄斧も副葬される⁷⁾。ついで木槨墓に替わり（平安南道上里・貞柏洞 97 号墓など）、鉄製武器・工具、車輿具、中国鏡を副葬する。多鈕細紋鏡はなくなるらしい。第 4 期は土壙墓の前半期と木槨墓の後半期に分けられ、後半期は中国鏡、車輿具から紀元前 2 世紀代である。

第 3 期の実態が判然としない東北地域でも銅劍・銅矛・銅戈、多鈕細文鏡を副葬する土壙墓が現れ、一部で鑄造鉄斧も副葬する（梨花洞）。

第 3 期に引き続き資料が豊富な西南部地域では石槨墓が継続し、銅劍、銅矛、銅戈とともに多鈕細文鏡、各種鈴具組合せを副葬する（前半期）。前半期のうちに鉄器が出現する。後半期には中国鏡が現れ（平章里）、鈴具は衰退し、石槨墓は消え、前半期に下位の墓として現れた土壙木棺墓、積石木棺墓が継続する。

東南地域でも銅劍・銅矛・銅戈、多鈕細文鏡といくつかの鈴具を副葬するが、不時発見一括資料がほとんどで墓の実態ははっきりしない。西南地域に出現した鈴具各種は遅れて東南地域に伝わり（岡内 1983）、組合せが崩れるから、これら一括資料例は第 4 期後半期に属し、一部は第 5 期始めに降るかもしれない。東南地域にも鉄器が出現する。

南部の第4期前半期と後半期が西北地域の前半期・後半期に正確に対応する保証はない。

第5期 西北地域と東北地域は楽浪郡の領域になり木槨墓が盛行する。鉄器が普及し、従来の青銅器は衰退する。紀元前1世紀代。西南部の青銅器と副葬墓の実態は明らかではない。この時期の資料が豊富な東南地域では、青銅器・鉄器大量一括発見例の遺構の実態はわからなかったが、近年茶戸里、八達洞などの調査から土壙木槨墓や積石木槨墓が明らかになった。鉄器が普及し従来の青銅器は儀器性を高め衰退に向かう。

第6期 青銅器文化の衰退・消滅期。その実情は西北地域と東南地域以外ではよくわからない。東南地域では木槨墓が盛んになる。紀元後1世紀代。

この時期区分の中に、出土遺構・共伴関係にもとづいて銅戈各類を位置づけてみる。

I①1a類 西北地域の石山里土壙墓(k13)が第4期前半で、石塘里(k9)は伴出銅剣から第4期前半であろう。貞柏洞採土場(2)(k1)は共伴品が岡内の車馬具A群(岡内1979)で第4期後半。東北地域の松海里(k16)・伝咸州郡(k20)は採集品だが、この地域と西北地域との密な関係から第4期であろう。西南地域の草浦里石槨墓c(k47)とこれより少し遅れるとみられる合松里石槨墓(k35)は共伴品から第4期前半。

I①1a類は第4期に出現し各地に広がった最初の銅戈で、西北・東北地域では第4期後半まで製作・使用された。

I①2a類 東北地域の梨花洞(k17)は第4期。西南地域の素素里(k30)・鳳安里(k32)・九鳳里2(k34)・草浦里a(k45)は第4期前半で、九鳳里→草浦里→素素里・鳳安里と新しくなろう。両地域の時期から、西北地域の伝石巖里(k6)・九月山麓(k12)も第4期と見てよい。東南地域では伝大邱(k55)の出土地所伝が正確で第4期前半に上がりうるなら他地域と同じ頃に銅戈が出現したことになる。

I①2b類 東南地域の2例(k57・62)だけで、有文である以外は形態・法量がI①2a類と変わらない。これの退化形態である細く小さいI④2b類・I⑤2b類(すべて東南地域出土)が、後述のように第4期後半以降のものであることから、I①2b類はそれに先行する。入室里(k57)は、岡内が出出した竿頭鈴を含む入室里一括(岡内1983:112)(第4期後半)には入らず、それより古く第4期後半の早い時期か、さらに前半に上がりうる。

I②1a類 西北地域の貞柏洞採土場(4)(k2)は草葉文鏡(岡村1984のⅡA式)を伴い第4期末か第5期はじめ。東北地域の朝陽里(k19)はBⅠ式銅剣3本を副葬し第4期前半。龍山里(k22)と下細洞里(k15)は第4期⁸⁾。この類は援中央幅がやや狭い以外はI①1a類と同じで、これよりやや遅れて現れ併存するが、より遅くまで存続したのであろう。

I②1b類 西北地域の土城洞486号墓(k7)のみである。銅剣6本と触角式銅剣や石鏃を副葬するのは木槨墓としては珍しい。鏡2面は素文鏡と前漢鏡でも古いものらしいが詳細は明らかでない。報告者の考えるように最も初期の木槨墓とすれば⁹⁾第4期後半だが、第5期かもしれない。

I②2b類 伝恩津(k39)は他の有文銅戈には見られない多鈕細文鏡同様の精緻な幾何文を鑄出し、後述のように初期の有文戈で第4期前半にあがると考える。k74(出土地不明)は有軸羽状文を鑄出し、小形化したI④2b類やI⑤2b類に先行し、第4期後半でも古い段階だろう。

I③1a類 西南地域の鶴松里(k48)のみ。I④2a類のk52(新川洞)の胡の広がりを取り去り一回り大きくした形状で、内が小さい。k52と同じく第4期後半か。

I④1a類 西南地域の平章里(k41)のみ。遺構は土壙墓らしく、BⅠ式銅剣、銅矛、蟠螭文鏡を伴う。上記各類に伴う銅矛が節帯1条・無耳・短鋒であるのに対し、この銅矛は長鋒で下部を欠くが有耳と

みられる後出的な矛である。第4期後半。これは小形化し始める最初の銅戈のひとつであろう。

I④2a類・I④2b類

東南地域の新川洞ではk52（I④2a類）・k53（I④2b類）が長鋒銅矛2本（有耳、1本は節帯に文様）・超小形銅鐸・竿頭鈴・馬鐸を伴う。第4期末～第5期始めであろう。k58（慶州付近、I④2b類）も同じ時期だろう。

I⑤2b類 東南地域の竹東里（k63）は竿頭鈴・長鋒有文銅矛、銅泡などを伴い第4期末か第5期始め。九政里C（k61）はII②1b類2本と共伴し、その他の共伴遺物から第5期である。

II①1a類 西南地域の宮坪里（k29）は第4期前半。草浦里b（k46）はk47（I①1a類）・k45（I①2a類）を伴い多鈕細文鏡・鈴具類とも共伴し、第4期前半である。

II①2a類 鑄型のk49（霊岩）は一括鑄型の種類・型式から第4期前半である（後藤1996）。k42（葛洞）は土壙木棺墓副葬鑄型で、同一墓地の他の土壙木棺墓副葬土器、鉄器から第4期後半である。東北地域の南昌里（k23）は第4期で、この戈は西南地域からの移入品であろう。

II②1b類 東南地域の九政里A・B（k59・k60）はI⑤2b類と共伴し、上記のように第5期である。八達洞90号墓（k54）は副葬土器から南部無文土器後期末で、第5期でも遅れる。

II③1a類 九鳳里1（k33）はI①2a類と共伴し、第4期前半。

II③2a類 南西地域の鳳岩里（k31）はガラス管玉を伴い、同地域でガラス管玉副葬の素素里・合松里と同じく第4期前半のなかで遅れる。

Ⅲ類 共伴品から第5期末～第6期で、銅戈の最末期形態である。

Ⅳ類 第4期後半にはすでに南部で生まれているとみられるが、k65（架浦洞）の共伴銅矛は第4期後半でも遅れる時期から第5期にかけてのものである。

以上から第4期前半に出現した銅戈はI①1a類・I①2a類・I②1a類・II①1a類・II①2a類・II③1a類・II③2a類である。太身のI類、細身のII類、樋先端が離れて脊に鑄を付す1類、樋先端が合わさり鑄がない2類すべてが出そろっている。

しかしこれらが銅戈出現と同時に一斉に現れたとは考えられない。最も広く分布するI類がまず現れたであろう。そのなかでもI①1a類が西北地域に出現し（石塘里・石山里）、ついで樋先端が合わさるI①2a類、やや幅の狭いI②1a類が現れて、この3種類が東北地域と中部地域そして西南地域に拡がる（一部は東南地域へも？）。西南地域ではこれらを改変して胡の広がり弱のII①類・II②類を創出するとともに、樋先端が合わさる2類を増大させる。これが第4期前半の銅戈の発生・伝播・改変の動きであろう。

とくに西南地域では6種類の銅戈が存在し、類型が異なる銅戈が九鳳里で2本、草浦里で3本共伴する。北部でも3類型が第4期末まで併存し、時期が降ると援長が多少短くなるらしいが（k1、k15、k17）、それ以外には大きな形態変化は見いだせない。第4期後半には南部で小形化したI④1a類とI④2a類がそれぞれI①1a類とI①2a類から生まれる。

有文銅戈（b類）は第4期前半から後半にかけて西南地域（k39 伝恩津）と東南地域（k57 入室里、k62 伝慶州郡）に出現し、さらに第5期にかけて有文小形銅戈（I④2b類・I⑤2b類）が東南地域で出現する。この地域ではさらに新たな有文戈（II②類）が現れ、第5期末の矮小化したⅢ類をもって銅戈製作は終わる（このころに北部九州から中広形銅戈が移入される）。第5期には北部と西南地域では銅戈はすでに衰退ないし消滅しているらしい¹⁰⁾。

ここで銅戈文様をみておく。有文銅戈13本の文様は以下の6種類である。

(1) 多鈕細文鏡と同じ単位文様（宇野1977の単位文様d3〈長方形を対角線で2分しそれぞれを

対角線と平行な線と短辺に平行な線で満たす」とb 4 < 4本の平行線で作る三つの区画帯に短い平行線を羽状に配する))を組み合わせた精緻な文様を鑄出している(k39 伝恩津 I②2b類 図3-9)¹¹⁾。

(2) 有軸羽状文。I①2b類(k57 入室里)、I②1b類(k7 土城洞286号墓)、I②2b類(k74 出土地不明)、I⑤2b類(k61 九政里C、k63 竹東里)の5本(図2-9、図3-8、図5-12・13)。九州の中細形以降の銅戈に普遍的な穿上方に鑄出した有軸羽状文軸に直交する平行線2本はない。

(3) 複合鋸歯文 I①2b類(k62 伝慶州郡 図2-10)とI⑤2b類(k64 伝昌原)の2本。

(4) 有軸平行線文 有軸羽状文の両側の羽状短線が一直線になり軸線と直交する。I④2b類(k58 慶州付近 図5-11)1本。

(5) 樋下部中央に縦線がありその左右に無軸羽状文、上部は樋幅一杯に斜格子文。I④2b類(k53 新川洞 図5-10)1本。

(6) 7本前後の平行線帯をジグザグに配する。II②1b類(k54 八達洞90号墓、k59・60 九政里A・B)3本(図4-9)。

文様(4)～(6)をもつ銅戈は時期が降る小形銅戈(早くとも4期末以後)であるから、文様の系統は(2)から(4)・(5)が、(3)から(6)が生じたと考える。(2)をもつ銅戈のなかでは小形のI⑤2b類が後出である。また文様(1)によって銅戈文様の出自は多鈕細紋鏡の文様と見る。宇野分類の単位文様b 4とd 3から(1)が、b 4から(2)が、a 1 <隣接する三角形内をそれぞれ異なる斜辺に平行する線で満たす複合鋸歯文>から(3)が、単位文様a 1を(2)の系統に加えて(5)が作られたのであろう。

多鈕細紋鏡の単位文様をそのまま用いる文様(1)・(2)・(3)をもつI①2b類・I②2b類の出現時期は遺構・共伴遺物からは確かめられないが、4期後半のはじめにはすでに存在していたであろう。また北部九州で製作し始める銅戈の形態は細身のII類ではなく胡の広がり強いI類で、小形でないことと、中細形銅戈のもとになるのは有軸綾杉文をもつI①2b類かI②2b類相当(ただし内は小さい)であることを勘案すると、第4期前半の後半にはI①2b類とI②2b類が出現していたとせねばならない。

銅戈関連の遺物に戈の鞘がある。貞柏里採土場(2)でk1の黒漆塗り木製鞘(第4期末)、東南地域の坪里洞で同形の青銅製鞘2点(第5期末)、大邱市池山洞で木製戈鞘の鞘金具(第5期末)が出土している。大きさはどれもほぼ同じで、I①1類を入れることができる。坪里洞のIII類銅戈には大きすぎ、池山洞では銅戈が出ていない(不時発見で失われたかもしれない)が、第5期末にこの鞘に合う銅戈が存在したかは疑わしい。この時期の東南地域にある鉄戈の鞘ではなかろうか。出土遺構・時期が確かな鉄戈は慶尚南道茶戸里1号木棺墓(李健茂ほか1989)(第5期中頃～後半)と慶州朝陽洞5号木棺墓(国立慶州博物館2000)(第5期末～第6期前半)の2本がある。鞘に合うのは全長24～25cmの朝陽洞出土鉄戈で、茶戸里鉄戈は全長16cmで少し小さすぎる。

4 辛庄頭30号墓出土銅戈

以上の朝鮮半島銅戈の類型、地域、時期の検討によれば、辛庄頭銅戈はどのように位置づけられるだろうか。

援と内・闌に木製鞘と秘の跡とみられる木質痕跡があり、穿に紐の跡がよく残るなどの観察結果は岡内(2003:21-23)にくわしいので省く。図1-1に示した図は左側A面は実測図、右側B面は反転したA面輪郭に写真から起こした樋、鑄を画き込んだ図である。

この戈はI①1a類であるから、この類が最も多くかつ出土地に一番近い西北地域で製作されたと

みてよい。

援長は I ① 1a 類の k9 (石塘里)・k20 (伝咸州郡)、II ① 1a 類の k38 (松堂里)¹²⁾ と同じく上位 4 番目で、最長の部類に属する。

援幅は最も広い。これに続くのは I ① 類の k9 (石塘里)・k6 (石巖里 2)・k20 (伝咸州郡) の 5.0cm・4.8cm・4.7cm である。闌幅も最大で、k7 (土城洞 486 号墓、I ② 1b 類) の 10cm (記載値)、k57 (入室里、I ① 2b 類) の 9.8cm、k20 (伝咸州郡、I ① 1a 類) の 9.7cm をしのぐ。闌幅と関連して胡の広がりも他の銅戈にくらべ大きい。内幅 4.0cm も k20 (伝咸州郡、I ① 1a 類) ほかに 2 本と同じく最大である。穿のすぐ上での脊の厚さは 1.4cm、闌の厚さは 1.8cm で、多くの I ① 類・I ② 類と同じである¹³⁾。

法量の上では飛び抜けてはいないが最大で、西北地域では第 4 期前半の k9 (石塘里)・k13 (石山里)・東北地域第 4 期の k20 (伝咸州郡) がこれとほぼ同じである (いずれも I ① 1a 類)。

第 2 の特徴は樋長の援長に対する割合が 65% で、朝鮮銅戈のなかで最も低いことである¹⁴⁾。西北地域の I ① 類のこの割合は、辛庄頭戈に近い 70% 前後と 80% 前後とに分かれる。援長が辛庄頭戈に類する k9 (石塘里)・k13 (石山里) は約 70% である。

第 3 の特徴は樋下端が開かないことである。樋外側縁 (樋の刃側の縁をこう呼ぶ) は、胡の広がり強い I 類でも、広がり弱い II 類でも、いずれも胡の広がりに応じた援・胡の縁の曲線にほぼ平行するのが通例である。辛庄頭戈の樋外側縁は直線的で、穿の少し上から緩い曲線を描いてほんの少し広がるだけで、闌に接する部分での両方の外側縁間の幅 4.5cm は I ① 類・I ② 類のなかでは最小である。

直線的でほとんど開かない樋外側縁は I 類にもごく少数ある。比較対象になるのは I ① 2b 類 2 本 (k57・62) (図 2-9・10) で、これらの樋外側縁間の幅は 4.5cm である¹⁵⁾。しかしこの 2 本は I ① 類という外形は共通するが、東南部出土の脊に鑄がない有文戈であるから辛庄頭戈との関連はない。外側縁下部がほとんど開かない樋は II 類戈に多いが、西南地域で II 類戈が生まれたときに、広がり弱い胡に対応して生じたのであり、これもまた辛庄頭銅戈と系譜関係はない。

第 4 の特徴として、闌の内に接する側 (これを闌の「外縁」とする) が外に開く曲線をなしていることが挙げられる。闌を内の側から見た横断面は杏仁形を平たく押しつぶしたように両側が対称的な緩い弧を描く (これを闌の「縁」とする)。辛庄頭戈の闌の縁を上から見ると内の方に外彎し、闌両端を結ぶ線から、戈の中軸線上で外側に 0.5cm 前後出ている。闌の外縁も外彎しているが、ここには内の左右に鑄バリが長さ 2cm ほど残っているために外彎度が一層強い印象を与える。

上から見た闌の縁はまっすぐなのが通例で (鑄型 k42・k49 によく示されている)、外彎するのは k12 (九月山麓、I ① 2a 類)、k29 (宮坪里、II ① 1a 類)、n2 (吉武高木、II ① 2a 類) だけで、しかも外彎度は辛庄頭戈より低い。k22 (龍山里、I ② 1a 類) と k24 (国花里、I ② 1a 類) も実測図では真っ直ぐだが写真では少し外彎するよう見える。

第 5 の特徴は穿を研磨して円形に仕上げていることである。穿は鑄型に彫り残した平面長方形や台形の凸部によってつくられ、バリを落とすなどの仕上げ加工を施すので、鑄型より多少大きな長方形や台形、不整形円形になることはあるが、回転研磨しないかぎり円形にはならない。円形に加工していると報告されているのは k5 (石巖里 (1)、I ① 1a 類)・k29 (宮坪里、II ① 1a 類)・k43 (白巖里、II ③ 2a 類) である (図 1-11・図 4-1・図 5-7)。

このように辛庄頭戈には他の朝鮮銅戈と異なる特徴がある。特徴のうち第 4、第 5 は鑄型製作や仕上げ加工あるいは使用時の必要から生じたことで辛庄頭戈の系譜、時期等には係わらない。

この戈の大きさが最大の部類であることは、I①類にも多少は認められる小形化傾向からみて初期の銅戈であることを示し、また援長と樋長の割合が西北地域第4期前半土壙墓出土戈に近いことも、銅戈出現期にあることの根拠となろう。また最大の特徴である第3の特徴は、胡の広がりをもっとも大きいことと併せ朝鮮銅戈の系譜に関係するとみられる。これら辛庄頭銅戈の朝鮮半島出土銅戈との少なからざる相違点は、これが初期の銅戈であることを指し示しているのである。

すでにはやく岡内は、朝鮮銅戈の樋が戦国時代中期の燕の銅戈、そのうちの「援の背の両側に血槽(樋)があり、内に刃がなく胡に小突起のある『鏃』という名の戈」の血槽と関連のあることを想定していた(岡内1973:280,289)。このような戈を燕のⅡ式銅戈(燕下都武陽台村23号作坊遺址出土銅戈分類ではⅠ式(河北省文物研究所1996:167-189))とする宮本も同じ見解である(宮本2004:209)。宮本のⅡ式戈の年代は、燕戈銘文の王名、腰から喜まで、すなわち紀元前4世紀末～から燕滅亡(紀元前222年)までである(宮本1985)。Ⅱ式戈の樋は短く、援長に対する割合は小さくまた闌側に開かず、辛庄頭戈の樋に似ている。

朝鮮銅戈と燕Ⅱ式戈とは違いが大きく直接はつなげ難いが、両者の系譜関係が認められるとすれば、朝鮮銅戈I①1a類は樋が短くかつ開かないものから出発したのであり、辛庄頭銅戈は最初の朝鮮銅戈のひとつと認められ、このような樋の形状がその後、胡の広がりにより併行するように変化し、普遍化すると判断できる。

朝鮮銅戈の誕生について、中国遼寧省西部の喀左県梁家営子、建昌県弧山子、葫蘆島市傘金溝で発見された4本の異形戈・双胡戈¹⁶⁾(郭大順1995、王成生2003)を直接の祖型とする考えがある。小林青樹は梁家営子戈から「上下の胡が翼を開くような形状」の傘金溝戈へ変化し、これが朝鮮銅戈の祖型となるという(小林2006a:87-89)。

梁家営子と傘金溝の双胡戈・異形戈は援長16～17cm、援中央幅2.5cmで、燕のⅡ式戈より一回り小さく、後出のI⑤類の一部とⅢ類を除く朝鮮戈よりもかなり小さい。長さ1.7cm～2cmと短い内の幅と厚さは2.5～3cmと0.6cm、脊の厚さは1.3～1.6cmで朝鮮戈のその範囲内にある。援長に対する樋の割合は梁家営子戈が81%、弧山子戈が60%、傘金溝戈が52%と低くなる。このような戈から胡の広がりや闌長が減じ、ひとまわり大きくなり、樋が開かなくなればI①1a類戈になる可能性は高い。これを前提にすれば、ここからも辛庄頭戈は朝鮮銅戈のなかでもっとも幅の広い闌、もっとも広がる胡の形状そして樋の形状によって最初期の朝鮮銅戈と認められる。

この戈を副葬する辛庄頭30号墓の年代推定は論者間で一致している。報告者によれば「七鼎六簋」の陶製礼器をもつ燕国の貴族墓で、時期は陶製礼器と鉛戈・鉛劍(明器)の特徴から戦国晩期、副葬した金柄鉄劍や金銀器の文様は北方文化との密接な関係を示す(河北省文物研究所1996:730-731)。岡内は「紀元前3世紀後半に、北方草原の遊牧民や朝鮮半島の人々とも交渉のあった人物、おそらく武人として活躍した貴族」の墓とする(岡内2003:28)。宮本は「前3世紀でも後半に近いし後半に入る段階のもの」と推測する(宮本2000:214)。近藤は副葬鉛戈が燕下都武陽台村23号作坊遺址出土Ⅱ式銅戈を模したものであり、その製作年代をⅡ式銅戈に刻された王名にもとづいて紀元前311～226年とし、さらに史書にみえる燕と戦国諸国・東方民族との関係から昭王代(紀元前3世紀前葉)とみて、「被葬者は秦開ではないかというといひすぎであろうか」と結ぶ(近藤2006:56-61)。

辛庄頭30号墓の年代は、岡内・宮本によれば紀元前3世紀中頃～後半(の中でも古い方)であり、近藤説は紀元前3世紀前半代だが岡内・宮本の推定を排除するものではない。これらに基づけば朝鮮半島の銅戈の上限年代は紀元前3世紀前半の内にある。この時期に、宮本の燕Ⅱ式戈からあるいは双

胡戈から朝鮮式戈への変化があったと考えられる。

ごく最近小林らは、遼寧省建昌県東大杖子出土双胡戈3本のうち14号墓出土品を共伴遺物から「新しくとも紀元前5世紀前半」とし、双胡戈は「紀元前6世紀から5世紀頃まで数型式にわたって存続し」、「前5世紀後半頃の」弧山子戈（王2003によれば共伴遺物から戦国中期より遅くない）より型式的に遅れる傘金溝戈の下限年代はさらに降るとする（小林ほか2006）。どこまで降るのだろうか。

註

1) 朝鮮半島の銅戈には出土地について異なる所伝をもつもの、所蔵者が代わったためか出土地等に混乱が生じているもの、共伴品に問題の残るものなどがある。

[k1、k2] 1939年3月頃に貞柏里採土場で数基の大墳が発見され、若干は平壤府博物館が調査し、4基または2基の古墳発見品は押収物として総督府博物館へ帰属し、これと別とみられる一群はほとんど柴田蔵となった（榎本1980:394）。出土遺物は藤田・梅原(1947)No.18～37、同(1974a)No.34・57・59・62・73・86、同(1974b)No.132・312・313、総督府博物館(1937)、榎本(1980)No.13～40に総計68点が掲載されている。それぞれの説明文から出土品は12ほどに群分けできる（群間が共伴でないとはいえない）。k1を含む一括群を採土場(2)、k2を含む一括群を採土場(4)と仮称する。

[k5] 梅原(1933)では大同江面石巖里、榎本(1933)では大同江面付近、榎本(1980)では平壤付近。k6石巖里(2)と区別し石巖里(1)とする。

[k6] 金良善(1962)では石巖里出土、崇実大学校基督教博物館(1988)では平壤出土。石巖里(2)とする。

[k11] 榎本(1941)では黄海道信川郡文化面九月山下、榎本(1980)では文化面。九月山下を採る。

[k20] 藤田・梅原(1947)No.156、榎本(1980)No.228。前者には伝咸州郡川西面雲洞里出土No.155(k21、榎本(1980)No.229)と「伴出したと言ひ」とあるが、榎本(1980)No.228では咸鏡南道出土。榎本(1941)のp.232の表のNo.5はこの銅戈で（長さ・闌幅の記載値と所蔵者から）伝咸州郡地方出土とする。朴晋煌(1974)は図92-2にこの銅戈をあげて咸州郡大成里出土とする。k21とは所蔵者も異なり共伴ではないようなので伝咸州郡とする。

[k21] 藤田・梅原(1947)No.155、榎本(1980)No.229。前者には伝咸州郡川西面雲洞里出土、後者には咸州郡川西面出土。雲洞里を採る。この銅戈は現在国立中央博物館所蔵の「国博本14783」である。

[k26] 金元龍(1965)に記載されるが、出典としては「横山(将三郎?一筆者)による」とのみあり、銅戈出土の確証はない。

[k28] 黒田(1938)と榎本(1941)では伝天原郡広徳面太平里出土、藤田・梅原(1947)No.157では伝忠清南道地方出土、榎本(1980)No.230では忠清南道出土。所蔵者による最初の報告に従い伝太平里とする。

[k38] 金良善(1962)では本文で論山郡魯城面松堂里出土、写真ネームで論山出土、金廷鶴(1972)では公州出土、崇実大学校韓国基督教博物館(1988)では出土地記載なし。最初の報告により松堂里出土とする。

[k55] 国立中央博物館(1973)では伝大邱出土、岡内(1973)は国立博物館(1971)を引いて朝鮮南部出土とするが、これに出土地は記されていない。伝大邱出土を採る。

[k57] 藤田ほか(1925)で入室里出土として報告。この報告の入室里出土品の一括性に対しては岡内が疑問を投げかけ、銅剣6本・多鈕細紋鏡1面・小銅鐸2点、銅泡1点・柄付銅鈴1点・錨形銅鈴1点・竿頭鈴1点を他の遺物と区別される一括品とし（岡内1983）、k57は除外する。これは妥当と考えるのでk57は入室里出土だが共伴品は特定できないとする。

[k58] 梅原(1930)では伝慶州付近、榎本(1980)では入室里出土。最初の報告に従い伝慶州付近とする。

[k59～61] k61は九政里出土（金元龍1953）、k59・60は坪里出土（金載元1964）として報告されたが、それ

それぞれの共伴品中の銅剣・銅矛に接合するものがあって九政里一括出土品とされる（国立中央博物館 1992）。

〔k62〕黒田（1938）では伝慶州郡出土、榎本（1941）では慶州付近、藤田・梅原（1947）では伝慶尚北道、榎本（1980）では慶尚北道。所蔵者による最初の報告に従い伝慶州郡とする。現在湖巖美術館蔵。

〔k75〕伝大田槐亭洞出土として購入したが、この銅戈そのものと伴出矛の形態から、報告者の指摘通り大邱や慶州一帯出土品に間違いのないので、出土地不明とする。

〔k77〕尹武柄（1971）では江原道方面、湖巖美術館（1997）では伝飛山洞。江原道方面は信じがたく伝飛山洞を採るが、その確証もなく、飛山洞出土Ⅲ類銅戈（k50）との共伴も保留せざるをえない。

2) 鑄型から取り出した製品は仕上げ研磨し、また使用中に研ぎ直すこともあるため、長さや幅は製作当初より減っており、とくに鋒部は研ぎ直しによって著しく短くなることもありうる。こうしたことから分類にあたって法量を重視しない傾向があるが、仕上げ研ぎで大幅に減少することはなく、使用中の研ぎでも大きく変化するのは鋒部分で、他の部分の減少は数 mm 以下である。また鑄型の段階ですでに法量に大きな違いが存在することは製品から明らかである。なお銅戈の中軸線に対する鬮の角度は $94^{\circ} \sim 104^{\circ}$ で分類上の意味は見いだせない

3) k18（馳馬洞）は全長 27cm、刃部の幅 4cm、脊断面は多角形と記載され（図・写真なし）、文様はないと見て間違いなく、I②1a 類である。

4) 出土地不明品に k69（梨花女子大博物館所蔵 2 号、Ⅳ類）が 1 本あり、扶餘の骨董商から購入したことから、忠清道地方出土とも推定されるが確かではない。

5) k29（宮坪里）の樋中央に鑄出した縦突線 1 本と n2（吉武高木）の穿直上の横突線 1 条は文様とは見ない。

6) 中細形銅戈のもとになりうるものには I④2b 類、I⑤2b 類もあるが、後述のようにこれらは新しく、候補から外される。なお岩永の分類による細形銅戈Ⅱ式 a 類（難波 1986 の有田型・宇木汲田型）は朝鮮半島製と推定されてもいるが（岩永 1980）、いまだ朝鮮半島での出土例はなく、内が小さく薄手の造りで朝鮮半島製の確証がないので、本稿では扱わない。

7) 多鈕細文鏡・鑄造鉄斧などを副葬する松山里ソルメコルの墓は囲石墓（石槨墓の一種）で（黄 1959）、第 3 期の石槨墓が第 4 期にも継続しているようだが、土壙墓との関係は不明である。

8) 下細洞里は、副葬鈴片が報告通り鈴付筒形金具の鈴部片なら第 5 期に降るが、筒形銅器に付く鈴より少し小さく、南部の双頭鈴などの鈴に大きさ・形態が近いようだ。もしそうであれば第 4 期であろう。

9) 副葬品は、李淳鎮（1983）が単葬木槨墓を副葬品から 3 分類したうちもっとも古い第 1 分類相当だが、銅戈がある点でそれより古く、銅戈副葬の貞柏洞 185 号墓とともに第 1 分類に先行する最初期の木槨墓とする（尹クワンズ 1994）。

10) 第 4 期後半か第 5 期の早い時期に西北地域に出現する I②1b 類 1 例（k7 土城洞 486 号墓）は、東南地域からの移入品であろう。

11) 石製鑄型でこの文様を鑄出すのは難しい。土製鑄型で鑄造した可能性を示す製品である。

12) 本文と関係ないがこの銅戈の特徴を記す（図 4-2）。長軸直交方向に 4 折しているこの戈は、樋先端が離れているが脊に鑄を研ぎ出しておらず、脊に続く高まりが鋒端まで伸びている。展示中の観察ではあるが、鋒部は十分研磨していないらしく胡の側縁も鑄バリが残り仕上げ研磨未完了のように見える。鋒の研磨を完了すれば援長は 2mm 程度は短くなる。この戈は I 類戈を鑄型にどのように彫り込むかを示す好例でもある。

13) 確認できる鬮近くの脊の厚さは I①類・Ⅱ①類 4 本は 1.2 ~ 1.5cm、Ⅱ①類 1 本は 1.4cm、I②類 2 本は 1.2cm、I④類 1 本は 1.1cm であった。九州出土品 5 本は 1.0 ~ 1.3cm である。鬮の厚さは I④1a 類が 1.6 ~ 2.0cm、I④②b 類が 1.5 ~ 2.0cm、I②1a 類が 2.0cm、I②2b 類が 1.9cm、Ⅱ①1a 類が 1.7 ~ 2.2cm、Ⅱ①2a 類が 1.5 ~ 1.9cm、I③1a 類が 1.8cm である。

14) k7（土城洞 486 号墓）は、図から計算すると 63% だが、図の信頼度は低い（図 3-8）。

- 15) 樋の開きが微弱な I ③ 1a 類 (k48) (図 3-10)、小形の I ④ 2a 類 (k52) (図 5-9) も樋の開きがほとんどないが、前者は胡が微弱・後者は小形なので比較対照にはならない。また両方の外側縁間の幅が 4.5cm の k71 (慶北大 a、I ① 1a 類) と k39 (伝恩津、I ② 2b 類、図 3-9) の樋外側縁は直線的でなく刃に平行して曲線を描く。
- 16) 最近は「遼西式銅戈」と呼ぶ (小林ほか 2006)。

[文献]

<日文>

- 井 英明 2006 馬渡・束ヶ浦遺跡 1, 古賀市文化財調査報告書 40
- 岩永省三 1980 弥生時代青銅器型式分類編年再考. 九州考古学 55: 1-22
- 宇野隆夫 1977 多鈕鏡の研究. 史林 (60)1: 86-117
- 梅原末治 1930 朝鮮に於ける新発見の銅劍銅鉞並に關係の遺物. 人類学雑誌 (45)8: 301-318
- 1933 朝鮮出土銅劍銅鉞の新資料. 人類学雑誌 (48)4: 222-228
- 岡内三真 1973 朝鮮出土の銅戈. 古代文化 (XXV)9: 279-294
- 1979 朝鮮古代の馬車. 震檀学報 46・47: 135-162
- 1982 朝鮮における銅劍の始源と終焉. 「考古学論考小林行雄博士古稀記念論文集」: 787-844, 平凡社
- 1983 朝鮮の異形有文青銅器の製作技術. 考古学雑誌 69(2): 73-116
- 2003 燕と東胡と朝鮮. 青丘学術論叢 23: 5-27
- 岡村秀典 1984 前漢鏡の編年と様式. 史林 (67)5: 1-42
- 小田富士雄・韓炳三 (編) 1991 日韓交渉の考古学, 六興出版
- 榎本杜人 1933 結紐状銅器とクリス形銅劍. 考古学 (4)1: 12
- 1941 「朝鮮出土青銅器遺物の新資料」への追加. 考古学雑誌 (31)4: 230-233
- 1980 朝鮮古代金属器実測図. 「朝鮮の考古学」: 391-423, 同朋社
- 黒田幹一 1938 朝鮮出土のクリス形銅劍一. ドルメン (4)10: 37-39
- 小林青樹 2006a 弥生祭祀における戈とその源流. 栃木史学 20: 87-106
- 2006b 中国外郭圏の銅戈. 歴博国際シンポジウム 2006 古代アジアの青銅器文化と社会一起源・年代・系譜・流通・儀礼一 発表要旨集: 141-146
- ・ほか 2006 遼西式銅戈と関連資料の調査研究. 日本中国考古学会 2006 年度大会発表資料集: 49-54
- 近藤喬一 2006 燕下都出土の朝鮮式銅戈. 高麗美術館研究所編「有光教一先生白寿記念論叢」, 高麗美術館研究紀要 5: 49-66
- 後藤 直 1985 青銅器文化の系譜. 森貞次郎編「稲と青銅と鉄」: 83-108, 日本書籍
- 後藤 直 1996 霊岩出土鋳型の位置. 東北亜細亜考古学研究会編「東北アジアの考古学第二 董域」: 149-203, キブ
ンセム社
- 武末純一 2002 弥生文化と朝鮮半島の初期農耕文化. 佐原編「古代を考える 稲・金属・戦争」: 105-138. 吉川弘文館
- 千葉基次 1978 朝鮮の銅戈についての再検討. 青山史学 5: 75-89
- 朝鮮総督府博物館 1937 陳列品図鑑 15
- 難波洋三 1986 銅戈. 金閔恕・佐原真編「弥生文化の研究」6: 58-62, 雄山閣
- 西谷 正 1969 全羅北道益山郡出土の青銅器. 考古学雑誌 54(4): 98-105
- 林巳奈夫 1972 中国殷周時代の武器
- 藤田亮作・梅原末治・小泉顕夫 1925 南朝鮮に於ける漢代の遺跡. 大正十一年度古蹟調査報告第二冊

- ・梅原末治 1947 朝鮮古文化綜鑑第1巻, 養徳社
- ・—— 1974a 朝鮮古文化綜鑑第2巻, 復刻版 名著出版(原著1948養徳社)
- ・—— 1974b 朝鮮古文化綜鑑第3巻, 復刻版 名著出版(原著1949養徳社)
- 三木文夫 1941 朝鮮出土青銅遺物の新資料, 考古学雑誌 (31)2: 124-126
- 宮本一夫 1985 七国武器考一戈・戟・矛を中心として一, 古史春秋 2: 75-109
- 2000 中国古代北疆史の考古学的研究, 348p, 中国書店
- 2004 青銅器と弥生時代の実年代, 春成・今村編「弥生時代の実年代」: 198-218, 学生社
- 森貞治郎 1973 総括, 日本住宅公団「鹿部山遺跡」
- 横山邦継(編) 1996 吉武遺跡群Ⅷ, 福岡市埋蔵文化財調査報告書 461

<韓・朝文>

- 安承周 1978 公州鳳安出土銅劍・銅戈, 考古美術 136・137: 42-43
- 安容淳 1966 咸鏡南道であらたに知られた細形銅劍関係遺跡と遺物, 考古民俗 1966-4: 33-37
- イクワンス 1994 土城洞 486 号木槨墓発掘報告, 朝鮮考古研究 1994-4: 18-22
- 尹武柄 1971 金海出土の異型銅劍・銅鋒, 「柳洪烈博士華甲紀念論叢」: 515-526
- 尹容鎮 1966 大邱市晩村洞出土青銅遺物, 考古美術 (7)11 [1-100 号合輯下巻: 246-249]
- 1981 韓国青銅器文化研究—大邱坪里洞出土一括遺物検討—, 韓国考古学報 10・11: 1-22
- 韓雪正 1961 咸鏡南道地域で発見された細形銅劍遺跡と遺物, 文化遺産 1961-1: 72-80
- 韓炳三 1987 月城郡竹東里出土青銅器一括遺物, 「三仏金元龍教授停年退任紀念論叢 1 考古学篇」: 103-120, 一志社
- 金健洙・韓修英・陳万江・申元才 2005 完州葛洞遺跡, 湖南文化財研究院学術調査報告 46
- 金元龍 1953 韓国・慶州・九政里出土遺物について, 考古学雑誌 (39)2: 41-43
- 1965 韓国史前遺蹟遺物地名表, 国立ソウル大学校考古人類学叢刊 2
- 1968 益山郡梨堤部落出土青銅一括遺物, 史学研究 20: 53-59
- 金載元 1964 扶余・慶州・燕岐出土青銅製遺物, 震檀学報 25・26・27: 285-298
- 金廷鶴 1972 韓国の考古学, 河出書房
- 金良善 1962 再考を要する磨製石劍の形式分類と祖型考定の問題, 古文化 1: 7-25,
- 元山歴史博物館 1983 文川郡南昌里土壙墓, 考古学資料集 6: 181-182
- 湖巖美術館 1997 湖巖美術館所蔵金東鉉翁蒐集文化財
- 黄基徳 1959 1958 年春夏期御池屯地区灌溉工作区域遺跡整理簡略報告, 文化遺産 1959-1: 38-52
- 国立慶州博物館 2000 慶州朝陽洞遺跡 I, 国立慶州博物館学術調査報告 11
- 国立中央博物館 1973 韓国先史時代青銅器特別展図録
- 1992 韓国の青銅器文化, 汎友社
- 国立博物館 1968 青銅遺物図録, 国立博物館学術資料集 (一)
- 1971 湖巖蒐集韓国美術特別展
- 崔夢龍 1976 榮山江流域で新たに発見された先史遺物—榮山江流域の考古学的調査研究 (8) —, 湖南文化研究 8: 1-21
- 崇実大学校韓国基督教博物館 1988 韓国基督教博物館図録
- 全榮來 1987 錦江流域青銅器文化圏新資料, 馬韓・百濟文化 10: 69-125
- ソン・スタク 1997 あらたに知られた古代時期遺物, 朝鮮考古研究 1997-3: 41-45

- ソン・チョル 2004 わが国木槨墓の発生地について, 朝鮮考古研究 2004-1: 6-10
- 大邱市・慶北大学校博物館 1990 大邱の文化遺跡—先史・古代
- 趙現鐘・殷和秀 2005 和順白巖里遺跡調査報告, 考古学志 14: 5-58
- 朝鮮遺跡遺物図鑑編集委員会 1989 朝鮮遺跡遺物図鑑 2, 朝鮮遺跡遺物図鑑編集委員会
- 沈奉謹 1987 本校博物館の青銅器数例について, 考古歴史学志 3: 101-110
- 田崎農 1963 新昌郡下細洞里で出土した古朝鮮遺物について, 考古民俗, 963-1: 39-48
- 白鍊行 1966 瑞興郡泉谷里石棺墓, 考古民俗 1966-1: 27-28
- 朴晋煌 1974 咸鏡南道一帯の古代遺跡調査報告, 考古学資料集 4: 165-182
- 無署名 1958 わが国原始遺跡の分布状況, 文化遺産 1958-6: 65-70
- 1969 あらたに発見された銅戈, 考古学 2: 77
- 李キュテ 1990 近年黄海南道で出土した細形銅剣関係遺物, 朝鮮考古研究 1990-2: 45-48
- 李健茂 1989 牙山宮坪里出土一括遺物, 考古学志 1: 175 - 185
- 1990 扶餘合松里遺跡出土一括遺物, 考古学志 2: 23-67
- 1991 唐津素素里遺跡出土一括遺物, 考古学志 3: 112-134
- 1999 梨花女子大学校博物館所蔵異形銅戈について, 刊行委員会編「鶴山金廷鶴博士頌寿紀念論叢 韓国古代史と考古学」: 43-63
- ・徐声勲 1988 咸平草浦里遺蹟, 国立光州博物館学術叢書 14
- ・李榮勲・尹光鎮・申大坤 1989 義昌茶戸里遺跡発掘進展報告(Ⅰ), 考古学志 1: 5-174
- 李康承 1987 扶餘九鳳里出土青銅器一括遺物, 「三仏金元龍教授停年退任紀年論叢Ⅰ考古学篇」: 141-168, 一志社
- 李淳鎮 1983 わがくに西北地方の木槨墓に関する研究, 考古民俗論文集 8: 99-158
- 2003 楽浪区域一帯の古墳発掘報告, 白山資料院
- 李相吉・金美暎 2006 馬山架浦洞青銅器埋納遺跡, 慶南大学校博物館学術調査報告 11
- 林炳泰 1987 靈岩出土青銅器鎔范について, 「三仏金元龍教授停年退任紀念論叢Ⅰ考古学篇」: 121 - 140, 一志社
- 嶺南文化財研究院 2000 大邱八達洞遺跡Ⅰ
- ワン・ソンス 1983 開城付近で出土した琵琶形銅剣と細形銅剣関係遺物, 考古学資料集 6: 168-170

<中文>

- 王成生 2003 遼寧出土銅戈及相關問題的研究, 遼寧省文物考古研究所編「遼寧考古文集」: 217-241, 遼寧民族出版社
- 郭大順 1995 遼東地区青銅器文化の新認識, 秋山進午編「東北アジアの考古学研究」: 235-245, 同朋社
- 河北省文物研究所 1996 燕下都, 文物出版社

表1 銅戈資料と類別・法量

(単位 cm) (復元できる場合は推定復元値を記載。*は残存法量)

No	資 料 (ㄸ)				類 別	全長	握長	鋒長	握幅	柄幅	幅幅	内幅	内長	内厚	文 献	図
c1	河北	易県	燕下部	辛庄頭 M30	I① 1a	28.6	25.3	16.5	5.1	10.4	4.5	4.0	3.3	0.6	河北省文物研究所 1996	後
k1	平南	平壤市	楽浪区域	貞柏洞 採土場 (2)	I① 1a	26.6	23.2	15.6	4.1	9.3	4.9	3.6	3.4	0.7	藤田・梅原 1947、榎本 1980	報
k2				貞柏洞 採土場 (4)	I② 1a	26.5	23.0	17.2	4.0	8.5	5.6	3.3	3.5	0.7	藤田・梅原 1974、榎本 1980	後
k3				貞柏洞 185 号墓											李淳鎔 2003	—
k4				貞柏洞 532 号墓											ソン・チョル 2004	—
k5				*石塚里 (1)	I① 1a	*10.3	*7.1	*7.1	*4.3	8.0	5.9	3.1	3.0	0.5	梅原 1933	榎 227
k6				*石塚里 (2)	I① 2a	27.7	24.4	16.7	4.8	8.8	5.7	3.5	3.3		金良善 1962	崇実大 1988
k7				主城洞 486 号墓	I② 1b	25.0	22.2	14.0	4.0	10.0	5.9	3.2	2.8		ユクワンソ 1994	報
k8			大同江区域	紋繡洞	I① 1a	*16.9	*14.2	*14.2	4.1	9.3	6.6	3.5	2.7		ソン・スンタク 1997	報
k9	嶺南	信川郡		石塘里	I① 1a	28.2	25.3	17.8	5.0	9.4	5.7	3.7	3.0	0.5	李キョテ 1990	報
k10				信川邑											無署名 1958	—
k11			文化面	九月山下	I① 1a	27.0	23.7	20.3	4.2	8.1	6.4	3.6	3.3	0.7	三木 1941	榎 225
k12		殷栗郡	南部面	*九月山麓	I① 2a	26.9	23.9	18.8	4.4	8.2	4.9	3.7	3.0		藤田・梅原 1947	榎 226
k13		白川郡		石山里	I① 1a	29.4	25.7	18.2	4.4	9.3	7.1	3.8	3.7		黄基徳 1974	報、遺写
k14	咸北	鍾城郡 (現穩城郡)		灌閣里											朴晋煥 1974	—
k15	咸南	北青郡 (旧新昌郡)		下福洞里	I② 1a	26.5	22.7	18.5	3.9	8.1	5.0	3.1	3.8		田崎農 1963	報
k16		咸興市退潮区域		松海里	I① 1a	26.9	23.5	17.3	4.3	7.9	4.7	3.8	3.4	0.5	韓智正 1961	報
k17				梨花洞	I① 2a	27.1	23.7	17.0	4.3	8.3	5.7	3.7	3.4		安容淳 1966	報
k18		会城区域		馳馬洞	I② 1a	27.0			4.0						安容淳 1966	—
k19		咸州郡		朝陽里 妙洞	I② 1a	27.0	23.79	17.1	3.7	8.7	6.2	3.7	3.2		金チヨル 1998	報
k20		*咸州郡			I① 1a	28.9	25.3	19.6	4.7	9.7	6.4	4.0	3.6	0.8	藤田・梅原 1947	榎 228
k21		咸州郡	川西面	雲洞里	I② 1a	26.5	22.7	15.7	4.0	8.2	6.3	3.7	3.8		藤田・梅原 1947	榎 229
k22		金野郡 (旧仁興郡)		龍山里	I② 1a	*24.0	*21.1	17.9	3.5	8.1	5.6	3.4	3.0		安容淳 1966	報、遺写
k23	江原	文川郡		南昌里	II① 2a	25.0	22.0	18.8	3.5	7.3	3.1	3.3	3.0		元山歴史博物館 1983	報、遺写
k24	京畿	開城市	長豊郡	回花里	I② 1a	26.3	23.4	17.0	3.8	8.8	5.4	3.7	2.9		ワン・ソンス 1983	報、遺写
k25		ソウル市	永登浦区	汝矣島	I② 1a	25.3	22.4	15.0	3.7	8.9	6.1	3.2	2.9		金廷鶴 1972	中央博 1992 写
k26		華城郡		南陽面											金元龍 1965	—
k27		平沢郡	古徳面	*坐橋里	I① 2a	25.8	23.5	17.5	4.4	8.1	5.2	3.6	2.3		国立博物館 1968	報
k28	忠南	天原郡	広徳面	*太平里	II③ 1a	24.0	21.3	16.6	3.7	6.5	3.4	2.8	2.7	0.7	黒田 1938	榎 230
k29		牙山郡		宮坪里	II① 1a	26.5	23.9	18.4	3.9	7.3	5.4	3.6	2.6	0.9	李健茂 1989	報
k30		唐津郡		素素里	I① 2a	27.5	24.6	18.3	4.5	8.1	4.6	4.0	3.3	0.7	李健茂 1991	報
k31		燕岐郡	西面	鳳岩里	II③ 2a	27.1	24.3	20.3	3.7	6.7	4.2	3.2	2.8		金載元 1964	報
k32		公州郡	長岐面	鳳安里	I① 2a	26.2	23.0	17.3	4.2	8.5	6.2	3.8	3.2	0.7	安承周 1978	報
k33		扶餘郡	九龍面	九龍里 1 号	II③ 1a	27.6	24.8	20.0	4.1	6.4	4.2	3.3	2.8	0.6	李康承 1987	報
k34				九龍里 2 号	I① 2a	25.5	23.2	17.0	4.5	8.2	5.6	3.4	2.3			—
k35			竊岩面	合松里	I① 1a	27.9	24.7	17.3	4.3	8.3	5.9	3.3	3.2	0.7	李健茂 1990	報
k36			南面	松洞里	II③ 1a	*24.2	*20.7	16.7	3.9	6.5	4.5	3.3	3.5		無署名 1969	報
k37		扶餘地方		I① 2a	25.1	22.6	16.6	4.5	9.6	5.4	3.4	2.5			国立中央博物館 1973	報写
k38		論山郡	魯城面	松堂里	II① 1a	28.0	25.3	20.9	4.1	7.6	4.6	3.1	2.7		金良善 1962	中央博 1992 写
k39				*恩津	I② 2b	*15.0	*12.4	*12.4	4.0	7.9	4.5	3.6	2.6	0.7	国立中央博物館 1992	後
k40	全北	益山郡	八峰面	龍堤里 梨堤	II② 2a	*6.1	*3.2	*3.0	*5.5	7.2	4.7	4.0	2.8	0.7	金元龍 1968	西谷 1969
k41			王宮面	平壤里	I④ 1a	*15.0	*9.0	*9.0	3.0						全榮来 1987	報
k42		完州郡	伊西面	葛洞 (鎔型)	II① 2a	30.2	26.2	21.2	4.4	8.0	3.9	3.3	4.0	0.8	金健珠ほか 2005	報
k43	全南	和順郡	綾州面	白巖里	II③ 2a	27.3	23.8	19.4	4.0	6.5	3.7	3.5	3.5	0.8	趙現鐘ほか 2005	報
k44		咸平郡	鶴橋面	月山里	I① 2a	27.3	24.2	16.4	4.4	9.1	6.0	3.8	3.1	0.7	崔夢龍 1976	報
k45			羅山面	華浦里 a 号	I① 2a	27.6	23.8	18.0	4.5	7.8	5.0	3.6	3.8	0.7		—
k46			羅山面	華浦里 b 号	II① 1a	*20.5	*17.1	18.2	4.1	7.8	5.4	3.6	3.4	0.7	李健茂ほか 1988	報
k47			羅山面	華浦里 c 号	I① 1a	26.8	23.6	17.7	4.4	8.2	5.6	3.4	3.2	0.6		—
k48		長興郡	安良面	鶴松里	I③ 1a	26.5	23.5	18.0	4.8	7.1	4.4	2.8	3.0	0.7	崔夢龍 1976	報
k49		靈岩郡		*靈岩 (鎔型)	II② 2a	28.7	25.2	19.6	4.5	7.9	3.5	2.9	3.5	0.7	林炳泰 1987	小田・韓 1991
k50	慶北	大邱市	西区	飛山洞	III 2a	18.8	17.3	14.0	2.2	5.6	4.3	1.6	1.5	0.5	金廷鶴 1972	報
k51				坪里洞	III 1a	17.7	16.0	6.0	2.7	6.7	2.7	1.4	1.7	0.2	尹容鎮 1981	報
k52			東区	新川洞 1 号	I④ 2a	21.0	18.1	13.8	3.9	6.9	3.8	2.5	2.9	0.5		—
k53				新川洞 2 号	I④ 2b	22.0	20.4	14.7	4.1	7.4	5.3	2.9	1.6	0.7	大邱市・慶北大博 1990	報
k54			北区	八達洞 90 号墓	II② 1b	23.1	21.0	17.6	3.7	6.7	3.5	2.5	2.1	0.3	嶺南文化財研究院 2000	報
k55		*大邱			I① 2a	26.3	23.4	15.6	4.6	9.1	5.3	3.5	2.9	0.5	国立博物館 1971	岡内 1973
k56		永川郡	花山面	蓮溪洞	II③ 2a	26.5	23.3	17.6	3.9	7.4	3.8	3.1	3.2	1.0	梅原 1930	榎 231
k57		慶州郡	外東面	入室里	I① 2b	26.8	23.8	16.8	4.3	9.8	4.5	3.5	3	0.5	藤田ほか 1925	榎 84
k58		*慶州付近			I④ 2b	20.0	18.1	12.7	3.0	6.1	3.4	2.5	1.9	0.3	梅原 1930	後
k59		慶州市		九政里 A 号	II② 1b	24.6	22.4	17.4	3.5	7.0	3.4	2.5	2.2	0.7		—
k60				九政里 B 号	II② 1b	24.6	22.4	17.2	3.3	6.8	3.1	2.4	2.2	0.6	金元龍 1953、金載元 1964	小田・韓 1991
k61				九政里 C 号	I③ 2b	22.3	20.1	14.8	3.0	7.9	4.6	2.1	2.2	0.3		—
k62		*慶州郡			I① 2b	*22.0	21.5	14.6	4.5	8.7	4.5	3.1	欠		黒田 1938	榎 232
k63		月城郡	外東面	竹東里	I③ 2b	23.3	20.7	15.1	3.6	7.5	4.7	1.9	2.6	0.3	韓炳三 1987	報
k64	慶南	*昌原			I③ 2b	18.4	16.4	12.2	3.2	6.7	4.8	2.1	2.0		国立中央博物館 1992	報写
k65		馬山市		架浦洞	IV	*17.3	14.1	—	*4.0	7.4	—	3.7	3.2	0.6	李相吉ほか 2006	報
k66	出土地不明			釜山市博蔵	I① 1a	26.6	22.6	16.0	4.5	8.7	5.8	3.5	4.0	0.7	国立中央博物館 1992	後
k67				呂朝淵蔵	II① 1a	29.1	25.2	20.0	4.0	8.1	3.7	3.6	3.9		国立中央博物館 1992	報写
k68				梨花大蔵 1 号	I② 1a	25.8	22.7	16.9	3.5	8.0	5.2	3.6	3.1		国立中央博物館 1992	報写
k69				梨花大蔵 2 号	IV	29.9	26.6	—	4.6	10.0	—	4.0	3.3		李健茂 1999	報
k70				嶺南大蔵	II① 1a	*23.4	22.4	18.2	4.0	7.6	4.8	欠			—	後
k71				慶北大蔵 a 号	I① 1a	27.3	23.8	16.4	4.2	8.3	4.5	3.3	3.5	0.7		後
k72				慶北大蔵 b 号	I② 1a	*13.0	*9.3	9.3	4.1	7.9	4.7	3.1	3.7	0.7		後
k73				崇徳大蔵 (黒田伯蔵)	I② 1a	*23.3	*19.8	18.7	4.0	9.6	5.2	3.7	3.5		金廷鶴 1972、榎本 1980	榎 233
k74				国民大	I② 2b	*11.5	*9.1	*8.89	3.7	8.8	5.1	3.0	2.4		国立中央博物館 1992	榎 234
k75				東亜大 (大田市機亭洞)	III 2a	18.5	17.3	13.3	2.6	6.4	4.2	1.6	1.2	0.4	沈奉器 1987	報
k76	慶北	大邱市	東区	晚村洞	中広形	40.1	37.0	19.2	6.9	13.8	5.6	2.8	3.1	0.2	尹容鎮 1966	報
k77			西区	*飛山洞	中広形	36.7	33.6	17.								

表2 銅戈の出土状況と共伴品

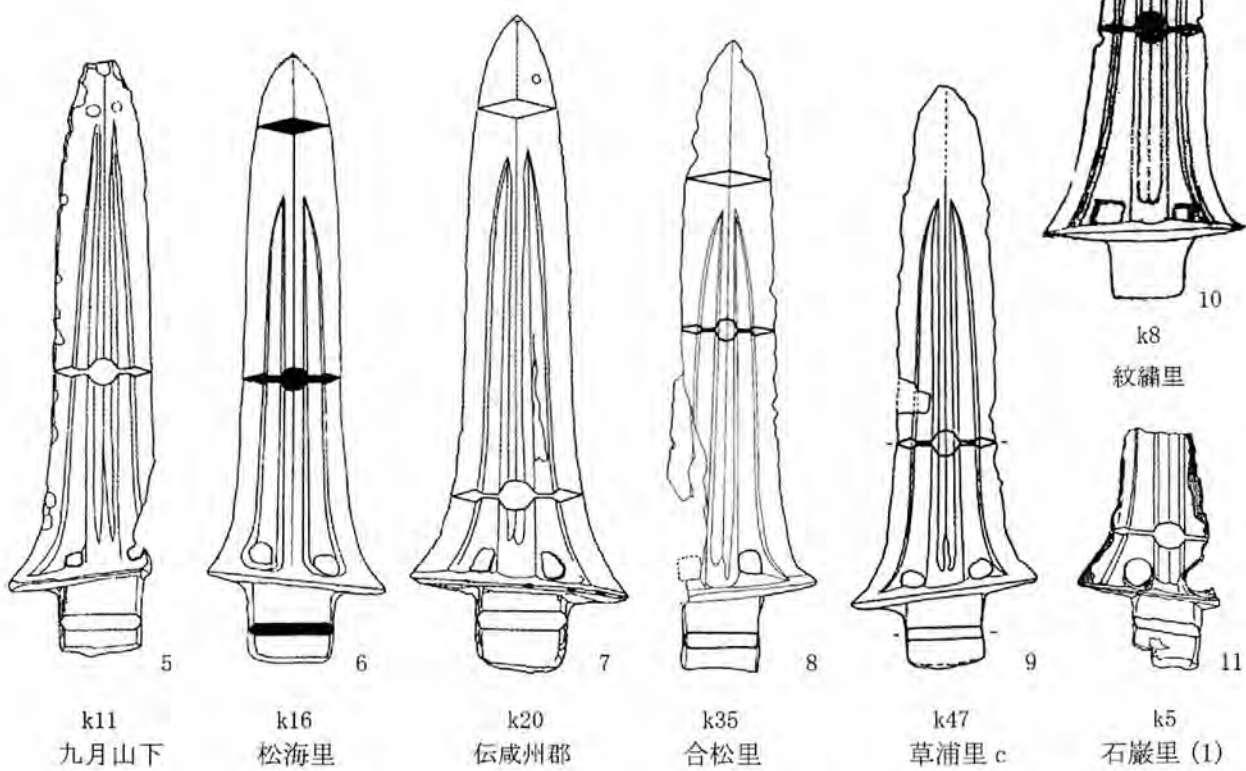
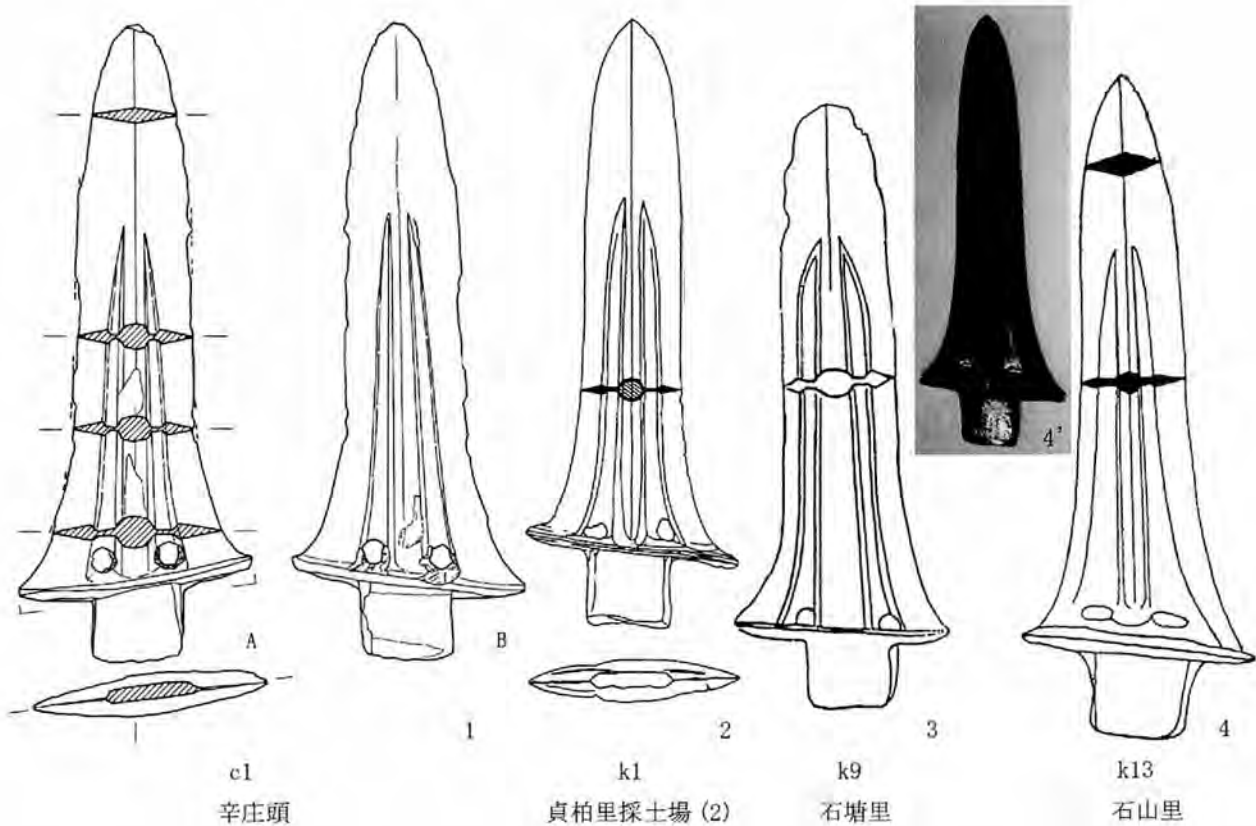
戈 No	出土地 (*伝)		副葬品 (共伴品)										
	遺跡・遺構	遺構など	銅戈	銅武器	銅工具	鏡	鐸	その他青銅器	鉄器	車馬具	その他	土器・石器	
k1	平南	貞柏里探土場 (2)	木槨墓?	I① 1a	黒漆塗り銅戈鞘、武器2(銅?鉄?)、銅鏃			6	胡瓜形鈴1、各種金具多数	矛	車衡端金具、乙字形銅器等	漆器など	
k2		貞柏里探土場 (4)	木槨墓?	I② 1a	金銅鏃		草葉文鏡		動物形把手2			水晶玉	三足鉢
k3		貞柏洞 185号墓	木槨墓	不明	銅Ⅱ式、無耳矛2、弩器、銅鏃13						車衡端金具、笠形円筒形金具等		
k4		貞柏洞 532号墓	木槨墓	不明	劍、銅金具、把頭飾						刀		長頸壺
k5		*石巖里 (1)	不明	I① 1a									
k6		*石巖里 (2)	不明	I① 2a									
k7		土城洞 486号墓	木槨墓	I② 1b	銅Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ式6、触角式劍1、把頭飾2、矛2、弩器、鏃17		素文鏡と鏡式不明		銅容器3、胡瓜形?鈴	長劍、刀、戟、斧3、銅鈴3		玉璽、碧玉24、水晶玉	石鏃
k8		紋繡洞	溝掘り中	I① 1a									
k9	黄南	石塘理	採集	I① 1a	劍Ⅰ式								
k10		信川邑	採集	不明	劍(共伴の保証なし)								
k11		九月山下	不明	I① 1a	壺中の小銅劍(現存せず)伴出という								
k12		九月山麓	不明	I① 2a	矛(平壤正義女子学校蔵)伴出という								
k13		石山里	土槨墓	I① 1a	劍Ⅱ式、銅把頭飾						鑄造斧		
k14	咸北	潼関里	不明	不明	劍Ⅱ式								
k15		下細洞里	土槨墓	I② 1a	劍Ⅰ式、矛A								
k16	咸南	松海里	不明	I① 1a									
k17		梨花洞	石敷土槨墓	I① 2a	劍Ⅰ式・Ⅱ式、石把頭飾、矛A		多鈕細文鏡			鑄造斧		土器片	
k18		馳馬洞	土取中	I① / ② 1a									
k19		朝陽里外*コル	土槨木棺墓	I② 1a	劍Ⅰ式3								
k20		*咸州郡	不明	I① 1a									
k21	*雲洞里	不明	I② 1a										
k22	龍山里	土槨墓	I② 1a	矛A									
k23	江原	南昌里	土槨墓	Ⅱ① 2a	劍Ⅰ式								
k24		国花里	地下1.2m	I② 1a									
k25	京畿	汝矣島	不明	I② 1a									
k26		南陽面	詳細不明	不明									
k27		*坐橋里	不明	I① 2a									
k28		*太平里	不明	Ⅱ③ 1a									
k29		宮坪里	不明	Ⅱ① 1a	劍Ⅱ式	有肩斧	多鈕細文鏡						
k30	忠南	素素里	不明	I① 2a	劍Ⅱ式、銅把頭飾		多鈕粗文鏡2			鑄造斧、鑄造鑿2	ガラス管玉2	長頸壺、無蓋鏃、砥石	
k31		鳳岩里	不明	Ⅱ③ 2a	劍Ⅰ式								
k32		鳳安里	土槨墓?	I① 2a	劍Ⅱ式						ガラス管玉		
k33		九鳳里	石槨墓	Ⅱ③ 1a I① 2a	劍Ⅰ式8・Ⅱ式3、矛A	方形斧、有肩円列斧、鑿、鏃	多鈕粗文鏡・細文鏡					ガラス管玉	長頸壺、壺、石斧、砥石
k35		合松里	石槨墓	I① 1a	劍Ⅰ式2		細文鏡	2	円蓋形銅器、異形銅器	鑄造斧2、鑄造鑿		ガラス管玉8	長頸壺
k36	楡洞里	地下板石下	Ⅱ③ 1a									土器片	
k37	扶餘地方	不明	I① 2a										
k38	松堂里	不明	Ⅱ① 1a										
k39	*恩津	不明	I② 2b										
k40	全北	龍堤里 梨堤	不明	Ⅱ③ 2a	劍鋒片								
k41		平章里	土槨墓?	I④ 1a	劍Ⅰ式2、矛Bか(柄欠)		蟬蟻文鏡						
k42		葛洞	1号土槨墓	Ⅱ① 2a	劍・戈両面鑄型							長頸壺	
k43		白巖里	積石木棺墓	Ⅱ② 2a	劍Ⅰ式、Ⅰ/Ⅱ式		細文鏡					石製管玉3	石鏃、長頸壺片
k44	全南 ~ 47	月山里	土槨墓?	I① 2a									
k45		草浦里	石槨墓	I① 2a Ⅱ① 1a I① 1a	Ⅰ式3、Ⅱ式、銅把頭飾、石把頭飾、中国式劍、矛A2	有肩斧、鑿2、鏃	細文鏡3		罕頭鈴2、組合双頭鈴、双頭鈴、柄付鈴			天河石製勾玉2	砥石2
k48		鶴松里	土槨墓?	I③ 1a									
k49		*靈岩郡	不明	Ⅱ① 2a	劍鑄型、矛鑄型	斧鑄型	鑄型						
k50		慶北	飛山洞	不明	Ⅲ 2a	劍Ⅱ式3・Ⅳ式2、触覚式把、把頭飾、銅金具2、鞘金具多数、矛B2~3					角形銅器3		蓋弓帽2
k51	坪里洞		不明	Ⅲ 1a	劍Ⅲ式3、把頭飾2、劍把2、鞘金具多数、戈銅鞘		魁龍文鏡、倣製鏡5	2	双鈕蓋状円盤、長鼓形金具、その他金具多数			樽3組、笠頭筒形金具、馬面	

遺物のあとの数字は数量、無数字は1点
 劍型式は岡内の分類、頭のBは略
 矛 A: 1条節帯無耳、B: 1条節帯有耳、C: 3条節帯無耳、D: 3条節帯有耳

k52・53	新川洞	不明	I④2a I④2b	I節帶有耳矛、矛B有文			1	竿頭鈴2		馬鐙		
k54	八邊洞	90号積石木棺墓	II②1b	矛C						劍、矛、板狀斧、鉄片		粘土帶土器、牛角把手壺など
k55	*大邱	不明	I①2a									
k56	連溪洞	積石木棺墓?	II③2a	劍II?式								
k57	入室里	木槨(棺)墓?	I①2b	(共伴品は特定できない)								
k58	慶州付近	不明	I④2b									
k59 ~61	九政里	不明	II②1b II②1b I⑤2b	劍I式・II式、矛B3・矛D有文・矛袋片2、矛/劍鋒片2、三角鏃			1	胡瓜形鈴2		環頭大刀片3、劍片、板狀斧3、有孔斧?、袋斧4、鏃片、鏃	瑠璃玉	石斧
k62	*慶州郡	不明	I①2b									
k63	竹東里	不明	I⑤2b	劍II式、銅把頭飾2、矛B有文				竿頭鈴2、筒形金具、泡25		馬鐙		
k64	慶南	*昌原	不明	I⑤2b								
k65	架浦洞	埋納	IV	劍片、矛A有文								
k75	不明	東亜大蔵(*大田市機亭洞)	III2a	鞘金具2、矛(岩永細形IIc)								
k76	慶北	晩村洞	埋納	中広形						劍II式2・IV式、把頭飾、鞘金具4		
k77		*飛山洞	不明	中広形								
n1	長崎	*老岐	不明	II③1a								
n2		吉武高木	3号木棺墓	II①2a	劍I式・無刺方、矛A			多鈕細文鏡				翡翠勾玉、碧玉管玉95 小壺
n3	福岡	吉武大石	1号木棺墓	I①2a	劍II式							壺・甕小片
n4		鹿部	不明	II①1a								
n5		馬渡・東ヶ浦	2号覆棺墓	II①1a	劍I式2、矛A							

表3 銅戈各類別の地域別出土量

類別	出土地域								合計
	河北	西北	東北	中部	西南	東南	不明	九州	
I①1a	1	6	2		2		2		13
I①2a		2	1	1	6	1		1	12
I①2b						2			2
I②1a		1	5	2			3		11
I②1b		1							1
I②2b					1		1		2
I③1a					1				1
I④1a					1				1
I④2a						1			1
I④2b						2			2
I⑤2b						3			3
II①1a					3		2	2	7
II①2a			1		2			1	4
II②1b						3			4
II③1a					3			1	4
II③2a					3	1			4
III						2	1		3
IV						1	1		2
合計	1	10	9	3	22	16	10	5	76



(縮尺 3/10)

图1 銅戈 I ①1a類

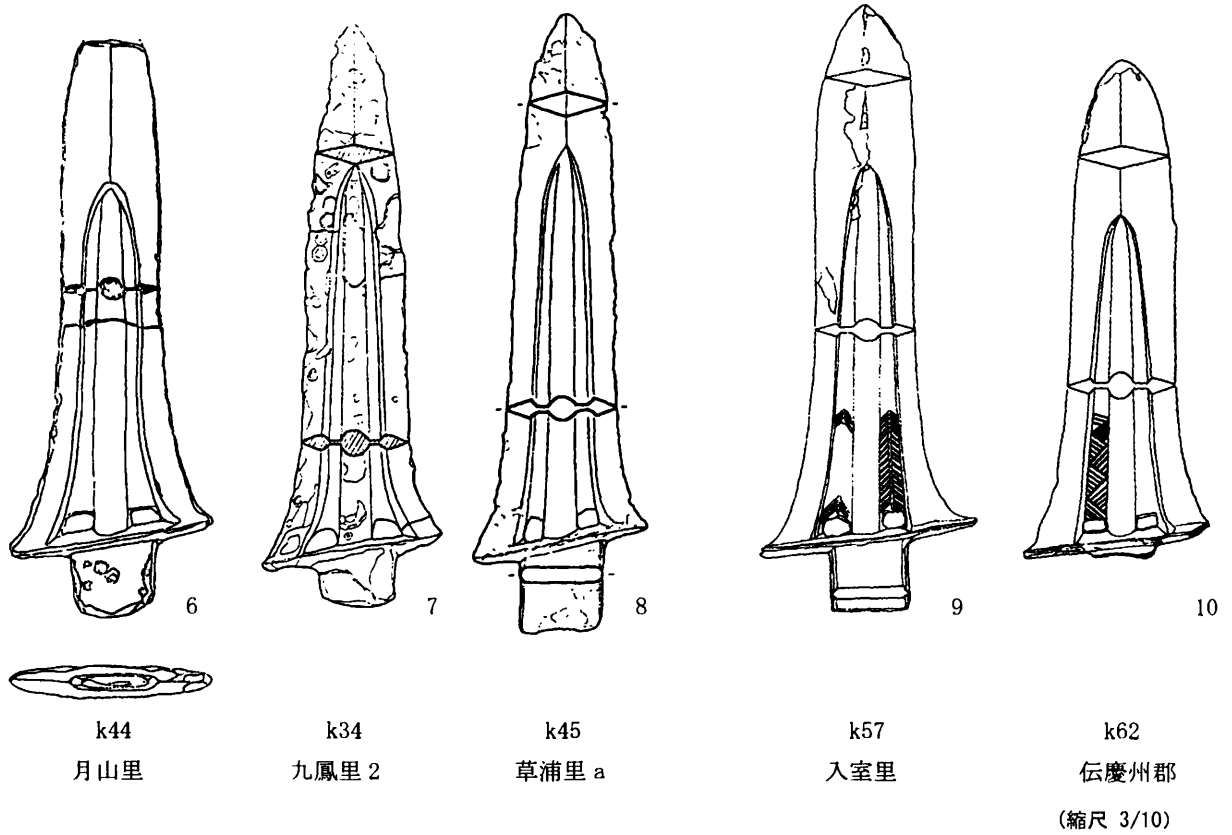
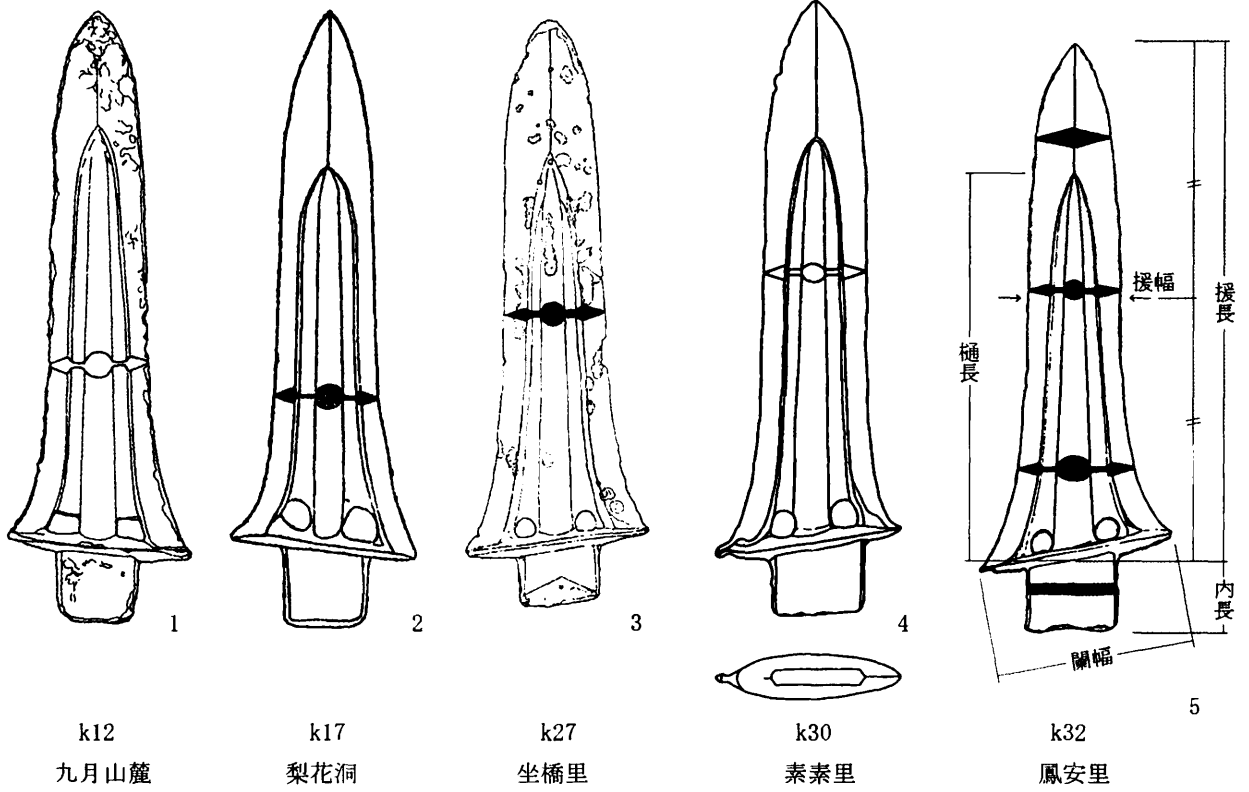
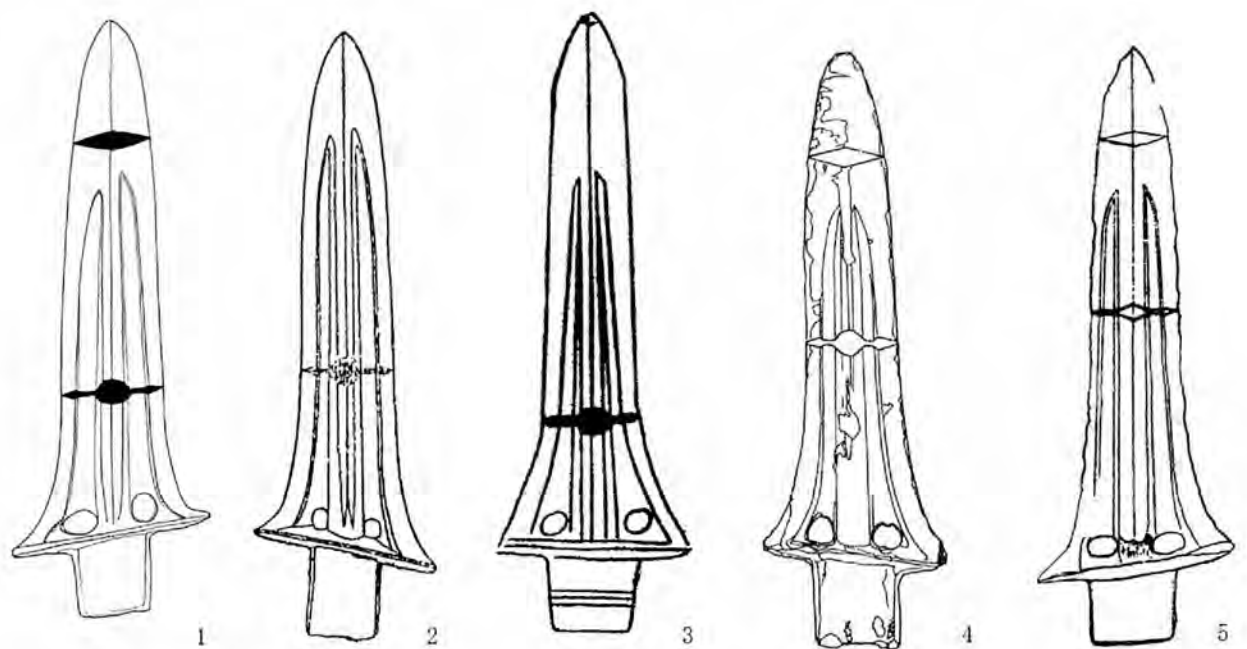


図2 銅戈 I①2a類 (1~8)、I①2b類 (9、10)



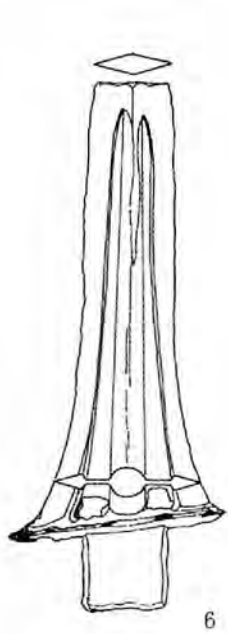
k2
貞柏里採土場 (4)

k15
下細洞里

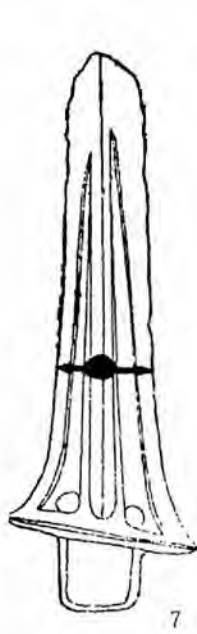
k19
朝陽里

k21
雲洞里

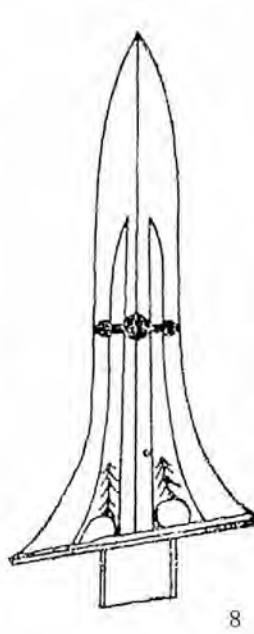
k24
国花里



k73
出土地不明



k22
龍山里



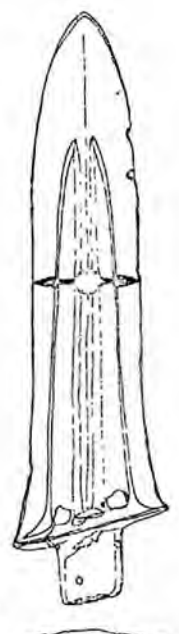
k7
土城洞 486 号墓



k39
伝恩津



9' 文様



k48
鶴松里

(縮尺 3/10)

図3 銅戈 I②1a類 (1~7)、I②1b類 (8)、
I②2b類 (9)、I③1a類 (10)

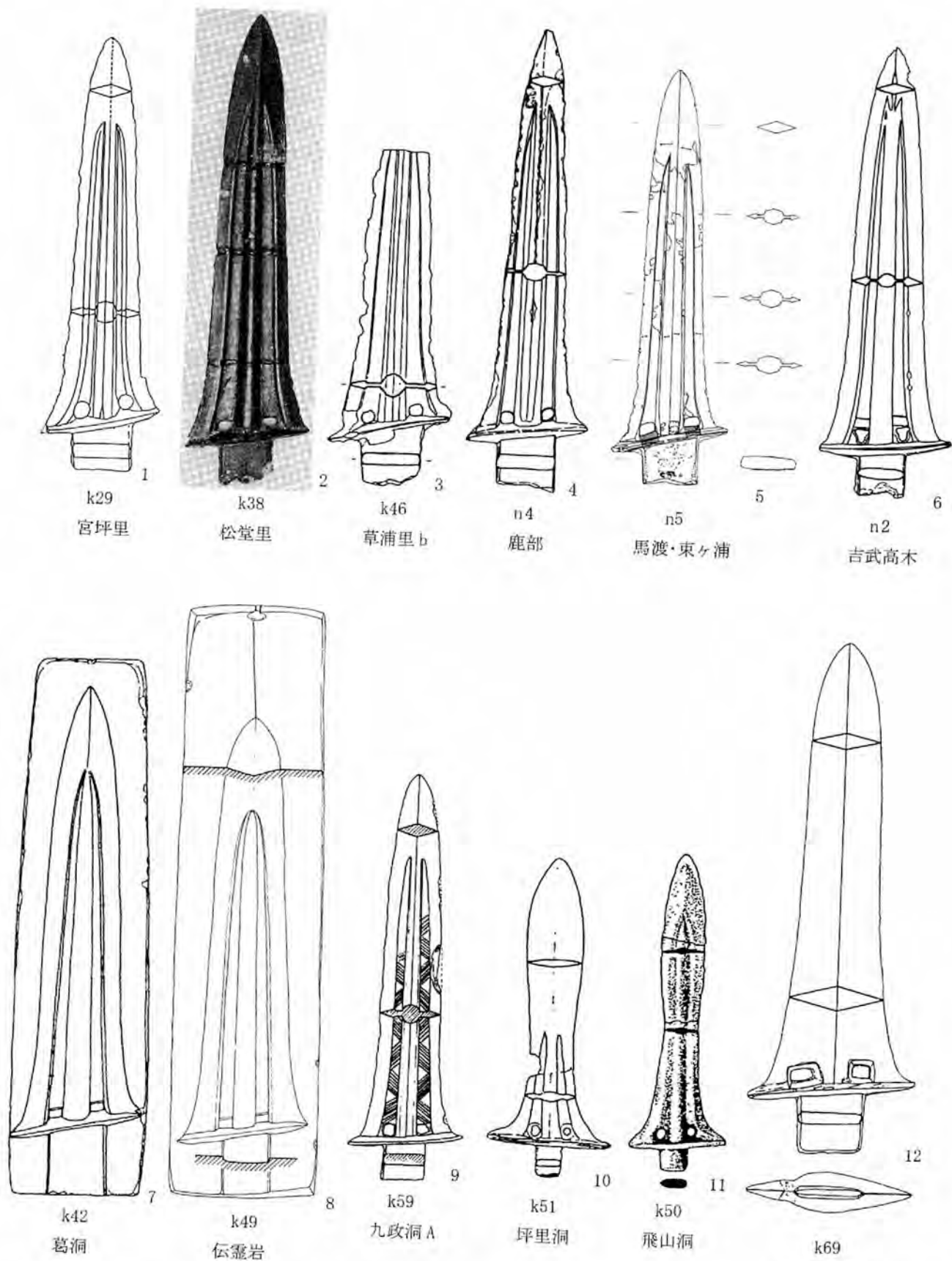
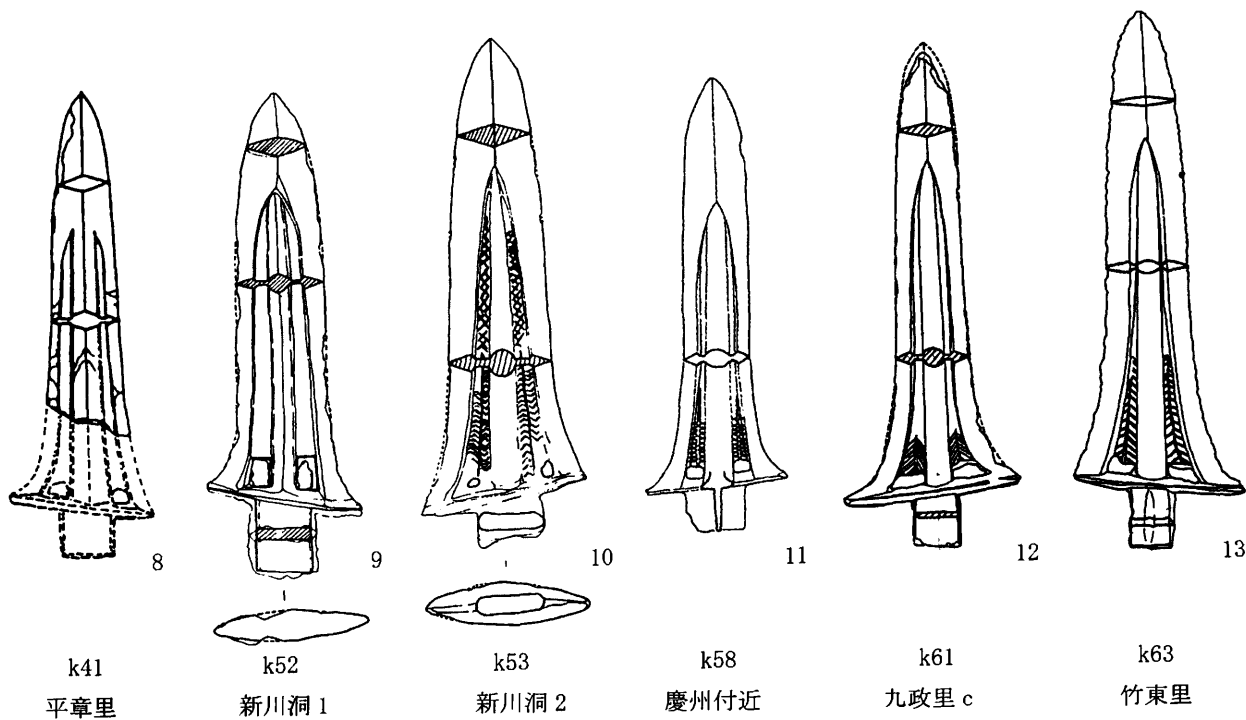
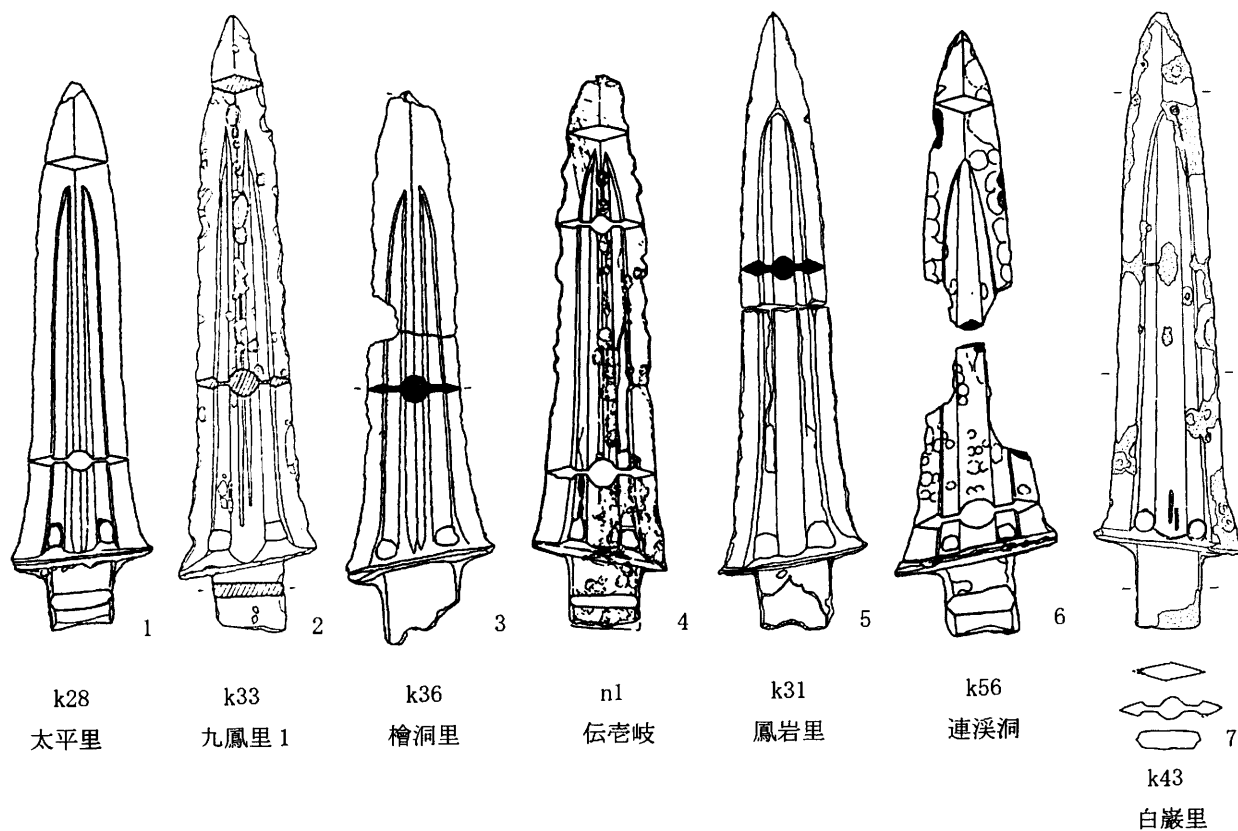


図4 銅戈 II①1a類 (1~5)、II①2a類 (6~8)、II②1b類 (9)、III類 (10・11)、IV類 (12)



(縮尺 3/10)

図5 銅戈 II③1a類 (1~4)、II③2a類 (5~7)、I④1a類 (8)、
I④2a類 (9)、I④2b類 (10・11)、I⑤2b類 (12・13)

10. 結語

大貫 静夫

平成 16 から 18 年度にかけて、筆者を代表とする科研費をえて、本学 OB および現役学生の協力を得て、牧羊城出土資料を中心にした本学所蔵の遼東関係の考古資料の整理、分析をおこなってきた。その契機となったのは、2003 年に始まった弥生開始年代論争であった。筆者はそれまで弥生時代研究とは無縁であったが、これ以後多少の関わりを持つようになった。筆者は学生時代に牧羊城を含む遼東の資料を整理し、その成果の一部を 82 年に発表している。当時は、遼東半島の戦国時代以前について、北朝鮮の研究者と日本の研究者の見解はまったく異なるものであった。紀元前 2 千年期については北朝鮮側の理解に従うべきことを述べ、朝鮮半島の同時代の見直しが必要なことを述べた。しかし、前一千年期の遼寧式銅剣の時代についてはほとんど触れるところがなかった。筆者には何れをとるべきか判断が下せなかったのもその一因であった。今回の論争を通じて分かったことは、前一千年期についても北朝鮮側（あるいは中朝共同調査団）の見通しがおおむね正しかったということであった。さらに、北朝鮮側は古朝鮮問題が絡むため、見えにくくなっていたが、燕の遼東への進出が戦国時代後期に遡り、在地系勢力の終焉がそれ以前であることを述べていた。それは、今回扱った牧羊城の築城時期に関わるもので、報告書以来我が国では漢代に下ると考えられてきたことと関わるが、戦国時代後期における燕の遼東での存在を過小評価してきた。以上のようなことが、朝鮮半島や日本列島の同時代の歴史を考える上で誤った理解をもたらしたのである。

第 2 章では、戦前の調査の詳細について、当時の調査メモをも利用しながら、その理解に努めた。そして、今回及びそれ以前の踏査資料を用いて、牧羊城を始め、関連する遼東、遼西の遺跡の紹介をおこなった。

第 3 章で、筆者は約四半世紀を経て、牧羊城 1 類土器を再評価するために、再び遼東半島の戦国時代以前について資料の全面的な見直しをおこなった。遼寧式銅剣研究に於いては、いわゆる吉林大学派を正しく評価できずにきたことが問題であった。遼東の紀元前一千年期について、それ以前はほとんど青銅短剣墓の編年研究であったが、宮本が上馬石貝塚の資料を用いて、それを周辺地域の土器編年網とリンクすることで土器編年研究を大きく進展させた。筆者は今回、その後に知られた資料を利用しながら、その宮本編年に多少の修正を加えたに過ぎない。先行する段階からの地域的な縦の関係を重視しながら、横の関係を整理した。その際に、逆に青銅短剣の変遷観との整合性も考慮した。そして、周辺地域の同時代の編年を再検討して、遼東との併行関係を再整理した。そして、それらに実年代を与えるために、銅鏃を利用した。その結果は従来の吉林大学派の見解に近いものとなった。ただし、筆者は遼西からの傾斜編年も、遼東からの逆傾斜編年もとらず、遼寧式銅剣の遼西、遼東における、考古学的な時間軸上での同時出現説が成立する可能性を残しておきたい。

第 4 章では、鄭、石川が 2・3 類土器について分析している。細部に於いて、異なる部分もあるが、2・3 類土器の中には戦国後期に遡る燕系の土器があるという点では一致している。

石川は従来から戦国燕系であるといわれてきたが、時期が限定されていなかった高坏（=豆）の年代を紀元前 4 世紀後半まで絞り込んだ。牧羊城の築城はそれ以後であり、前 300 年前後を上限とすることになった。

両者とも、特徴的な土器だけを抽出したものであり、2・3 類土器の全面的な再検討による組列化

をおこなっているわけではないので、戦国時代、前漢時代、後漢時代という時期区分での数量的な評価がまだできていない。主体が前漢時代にあることは確かなようだが、後漢時代についての理解が進んでいない。牧羊城の周辺には後漢時代の磚室墓が南山裡にある。これと牧羊城との関わりがよく分からないのである。さらに、周辺地域の遺跡毎にこのような細別作業を行うことで、遼東における燕の実態が見えてくることになる。

第5章で、中村は牧羊城出土の瓦の再検討をおこない、瓦の一部が戦国時代後期に遡ることを明らかにした。城址の築城開始期については土器の検討と合致しており、牧羊城の築城が燕に始まることは確実にした。そして、主体は前漢にあり、後漢になると確実なものなくなるという。南山裡の磚室墓との関係では理解の難しい結論となっている。

牧羊城の存続期間をめぐるのは、大連の劉俊勇も後漢には衰退すると、同様の見解を示している。南山裡磚室墓の被葬者はどこにいたのか。牧羊城との関係をさらに考えていかなければいけない。

第6章では、牧羊城址出土の鉄器について、科学的な分析をおこなった。戦国燕のものか漢代のものか判然としないのが難点であるが、日本列島に入る鉄器の源流を考えるうえで重要な基礎資料を提供できた。

第7章では、現在本研究室に残るわずかな資料である、古銭と石製品について紹介した。

第8章では、牧羊城周辺あるいは関連資料で本研究室が少量ながら所蔵するものを遺跡別に紹介した。それぞれ詳細な観察記録が付されており、今後の研究に寄与するところがある。

第9章では関連する問題を扱った。1節では、筆者が従来研究したことのない分野であるが、本研究課題の代表者として総括するために、あえてまとめたものである。牧羊城が戦国燕の時代に遡り、漢代まで継続する城であることは判明したが、それが当時存在した遼東郡という政治的な枠組みの中でいかなる位置にあるのかを現状で知りうる範囲で記した。

漢代遼東郡の城址の調査はいまだ進んでおらず、県城の比定も完全ではないが、大まかな県城の分布を知ることができる。それ以前の戦国時代の城址の分布はさらに謎が多い。そこで、明刀銭の分布から戦国時代の集落分布を間接的に探った。大連市内に限った分布を見ても、かなりの密度で発見されており、そのような社会を経て漢代の遼東郡に連なるのだと考えた。

2節では、後藤が、燕下都から出土したことで注目されている朝鮮半島系の細形銅戈について、実物の詳細な観察とそれに基づく実測図を提示し、それを朝鮮半島でこれまで知られている細形銅戈の中では最初期に位置づけた。年代は燕下都の墓葬の年代により、細形銅戈出現の上限年代は前3世紀前半の中にあるとの結論となっている。最近の、遼西の異形銅戈からの変化による出現を唱える研究者の年代観よりは新しいが、従来の伝統的な年代観よりはだいぶ古くなっている。

以上のように、牧羊城資料の再検討によって、様々なことが明らかになるとともに、今後検討すべき問題点も多数残っている。

最後に、牧羊城の位置づけに関わる現時点での暫定的な編年表を示す。今後なお多くの修正が必要であろう。

戦前の調査資料であり、かつその中の一部しか所蔵しないという制約はあったが、資料は死蔵すべきではなく、活用することこそが所蔵する機関の責任であると考え。本報告書で多少はその責が果たせたのではないかと考える。

本研究課題に、代表者とともに取り組んでいただいた諸先生、諸氏にあらためてお礼申し上げる。

	膠東	老鉄山周辺	営城子周辺	遼東半島中部	下遼河・遼東山地	遼西
前 300		牧羊城			燕	
前 350		尹家村 2 期文化			? 遼陽徐住子墓? 亮甲山	
前 450	杏家荘 M2	官屯子	上馬石 M2 上馬石 M3	上馬石 A 上	鄭家窪子 (M6512)	(東大杖子?) 三官甸? 南洞溝
		牧羊城 1 類新・尹家村下 1 浜町 (+) (主) (主)	楼上墓 M3? 崗上墓 双砬子短劍墓	上馬石 A 下 上馬石 B II	二道河子 双房系 誠信石棺墓 双房 M6 ?	凌河文化 十二台營子
前 770		尹家村 1 期類型	上馬石上層文化	上馬石上層類型		夏家店上層文化 南山根 小黑石溝 M8701
前 1000		牧羊城 1 類古 (主?) 砬頭	崗上墓下層	大嘴子類型	新樂上層文化 廟後山文化	魏營子文化 水泉 M7701
		羊頭窪類型 双砬子 3 期文化				

図 1 遼東半島の前一千年期を中心とする編年表

遼寧を中心とする東北アジア古代史の再構成

課題番号：16320106

平成16年度～平成18年度科学研究費補助金(基盤研究(B))研究成果報告書

2007年3月26日 発行

編集： 研究代表者 大貫静夫(東京大学大学院人文社会系研究科教授)

発行： 東京大学大学院人文社会系研究科考古学研究室

〒113-0033 東京都文京区本郷7-3-1

印刷： (有)平電子印刷所

〒970-8024 福島県いわき市平北白土字西ノ内13

Reexamination of the Ancient History in North East Asia-mainly Liaoning Province of China-

Contents

I. Outlines of the Research	ONUKE	p.1
II. MUYANGCHENG site and the Related Sites		
-1 Excavation of MUYANGCHENG before WWII	SASADA et al.	p.5
-2 Present Situation and Stratigraphy of MUYANGCHENG	ONUKE	p.17
-3 Sites around MUYANGCHENG and Related Sites	ONUKE	P.22
III. A Study on 1st group Ware from MUYANGCHENG		
-1 Classification of 1st group Ware	ONUKE&FURUSAWA	p.34
-2 Framework for the Study on 1st group Ware	ONUKE	p.55
-3 Periodization of Ware of SHUANGTAZI 3rd Culture	ONUKE	p.59
-4 Periodization of Ware of SHANGMASHI Upper Layer Culture	ONUKE	p.102
-5 Reexamination of 1st group Ware from MUYANGCHENG	ONUKE	P.136
IV. Studies on 2nd & 3rd groups Ware from MUYANGCHENG		
-1 Character and Periodization of so-called 2nd & 3rd group Ware	CHONG	p.145
-2 Ware of the Age of the Warring States in "2nd & 3rd group Ware	ISHIKAWA	p.174
V. A Study of Roof Tiles from MUYANGCHENG		
-1 Classification of Roof Tiles	NAKAMURA	p.181
-2 Placement of MUYANGCHENG in Ancient History with Roof Tile	NAKAMURA	p.225
VI. Studies on Iron Tools from MUYANGCHENG		
-1 Iron Tools from MUYANGCHENG	SASADA	p.231
-2 Metallic Research on materials related with Iron from MUYANGCHENG	OSAWA et al	p.241
VII. Other materials from MUYANGCHENG		
-1 Old coins from MUYANGCHENG	FURUSAWA	p.260
-2 Stone Tools from MUYANGCHENG	FURUSAWA	p.266
VIII. Studies on Related Materials		
-1 Bronze Dagger and Axe collected near MUYANGCHENG	GOTO	p.268
-2 Potsherds from GaoLiZhai site	FURUSAWA	p.270
-3 Potsherds from YangTouWa site	FURUSAWA	p.277
-4 Potsherds from GuoJiaTun site	FURUSAWA	p.281
IX. Related Topics		
-1 MUYANGCHENG and Liaodong County from the Age of Warring States to Han Dynasty	ONUKE	p.287
-2 Bronze Gu from Korean Peninsula	GOTO	p.301
X. Conclusion	ONUKE	p.323

March, 2007

The University of Tokyo

Graduate school of Humanities and Sociology